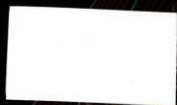


鳥取県八頭郡八頭町

# 奈免羅・西の前遺跡Ⅱ

— 県道河原インター線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —



2010

八頭町教育委員会  
株式会社 島田組



2区 第2面全景(南東から)



3区 第2面全景(南西から)

卷頭図版2



2区 第2面全景(上が北)



3区 第2面全景(上が北)



1区 第3面完掘全景(西から)



2区 第1面SK2024蓋坏出土状況(西から)



2区 第1面SK2024出土 蓋坏



3区 第2面木棺墓群完掘(北西から)



3区 第3面西側完掘(西から)



3区 SK3055遺物出土状況(北東から)

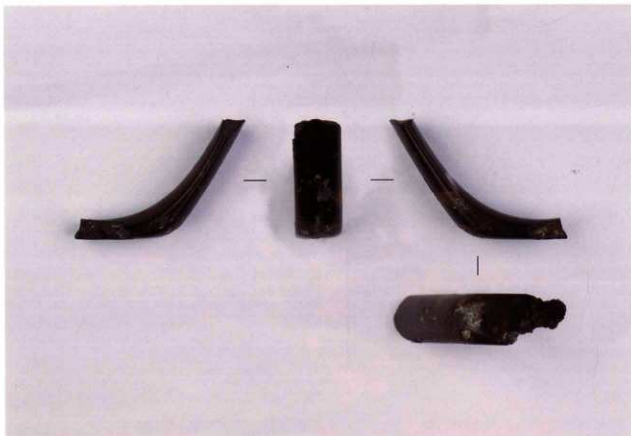


3区 SK3055出土 水差形土器

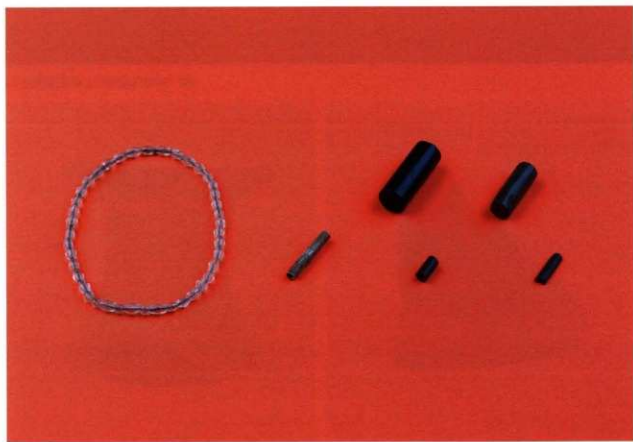


3区 SK3055出土 器台

卷頭図版6



3区 S13012内SK3027出土 銅釧



奈免羅・西の前遺跡出土 玉類集合



3区出土 弥生時代中期土器



3区出土 石器類





2区 大溝群完掘(左からSD2014・SD2013・SD2014)(南西から)



2区 SD2014出土 弥生時代後期～終末期土器

## 序 文

八頭町は鳥取県の東南部に位置し、東は若桜町、西と北は鳥取市、南は智頭町と接しています。兵庫県との県境に位置する扇ノ山をはじめとした山々に囲まれており、また、八東川や私都川流域の平野部には水田や果樹園が広がるなど、古くから農林業が盛んな地域です。

当地は、法起寺式の伽藍配置を持つ国指定史跡「土師百井廃寺跡」、八上郡の郡衙跡と推定される「万代寺遺跡」、須恵器の一大生産地である「私都古窯跡群」が存在するなど考古学的に注目される地域でもあり、歴史豊かな風土と自然に恵まれた環境にあります。

この度、発掘調査を実施した「奈免羅・西の前遺跡」は、八東川下流南岸に広がる水田地帯にあり、昭和50年代にその存在が確認されていたものですが、鳥取自動車道のバイパス道路（県道河原インター線）の改良工事に伴い、現状での保存が困難となったため関係各機関と協議・調整を図り記録保存をすることとなったものです。

中世以降の開墾や耕作による削平で、遺構面の保存状態は必ずしも良好ではありませんでしたが、弥生時代中期の竪穴住居址、掘立柱建物、多量の上器、石器などの遺物が確認され、数多くの貴重な知見を得ることができました。

本書は、この調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が郷土の歴史を理解する一助となり、また、文化財保護意識の高揚に役立つことを願うものであります。

文末ではございますが、本町の文化財保護行政におきましては、日頃より町民の皆様はもとより、多くの方々のご協力とご理解のもとに進めておりますことについて御礼申し上げますとともに、調査にあたりご指導・ご協力をいただきました鳥取県八頭総合事務所県上整備局、鳥取県教育委員会文化財課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめとした関係各位、地元関係者の皆様に対して深く感謝の意を表し序文とします。

平成22年3月

八頭町教育委員会  
教育長 西山淳夫

## 例 言

1. 本報告書は、平成 21 年度県道河原インター線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した奈免羅・西の前遺跡の発掘調査報告書である。昭和 60 年(1985 年)に第 1 次調査が実施され、今回は第 2 次調査となるため、書名は「奈免羅・西の前遺跡Ⅱ」とする。
2. 奈免羅・西の前遺跡は、鳥取県八頭郡八頭町船岡・下濃に所在する。
3. 発掘調査の面積は、1 区 425.162㎡、2 区 1445.381㎡、3 区 4861.375㎡、合計 6731.918㎡である。
4. 調査期間は下記の通りである。

試掘調査	平成 20 年(2008)11 月 19 日	～	平成 21 年(2009)2 月 26 日
本格調査	平成 21 年(2009)5 月 25 日	～	同年 10 月 30 日
整理調査	平成 21 年(2009)6 月 8 日	～	平成 22 年(2010)2 月 27 日
報告書作成	平成 21 年(2009)11 月 2 日	～	平成 22 年(2010)3 月 31 日
5. 本遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は、八頭町教育委員会発掘調査管理者の監督のもと、株式会社島田組が実施した。
6. 奈免羅・西の前遺跡Ⅱ出土の銅剣について、鳥根大学名誉教授の渡辺貞幸氏、熊本大学教授の木下尚子氏に貴重な助言をいただき、木下尚子教授には所見を作成していただいた。記して感謝いたします。
7. 出土遺物の中の弥生土器の搬入系土器について、また、弥生土器の年代観、弥生時代の集落・墓・遺物観察について、財団法人鳥取県教育文化財団調査室長の松井潔氏にご指導とご助言をいただいた。記して感謝いたします。
8. 本文の執筆は、八頭町教育委員会の野田大和、株式会社島田組の井汲隆夫、島田裕弘、淺井達也、結城香が協力しておこなった。文責者は文末に氏名を括弧内に記した。文責者の記していない箇所は、序章・第 1 章第 1 節・第 1 章第 3 節は井汲隆夫が執筆し、第 1 章第 2 節は島田裕弘が執筆した。
9. 本報告書掲載の遺物接合・復元・実測・トレースは、以下の者がおこなった。

島田裕弘、荒川和哉、角上寿行、結城(以上、株式会社島田組)

鎌谷都々子、倉掛みどり、古泉妙子、笹岡由美、西村美恵子、野島尚子、萩原美香、藤田供子、松本幸子、山崎恵子
10. 本報告書に掲載した遺物写真は、有限会社小谷写真館に依頼し、株式会社島田組調査員の指示のもと同館のスタジオにて撮影した。
11. 自然科学分析については、バリノ・サーヴェイ株式会社 に依頼した。分析内容は、柱根の樹種同定と年代測定、出土銅剣の蛍光 X 線分析、出土石器の岩石鑑定である。
12. 発掘調査により作成された図面・写真等の記録類、及び出土遺物等は、八頭町教育委員会に保管されている。
13. 奈免羅・西の前遺跡の発掘調査及び報告書作成にあたって、多くの方々からご指導、ご協力をいただいた。感謝いたします。

## 凡 例

1. 遺跡の略称は「09NN」とする。遺物註記及び記録写真のフィルム註記等にはこの記号を用いた。
2. 遺構記号及び遺構性格の区分は、以下の通りである。  
 S I : 竪穴住居跡    S B : 掘立柱建物跡  
 S D : 溝・竪穴住居跡回溝・竪穴住居跡内小溝  
 S X : 木棺槨    S K : 土坑  
 P : ピット    D D : 土器だまり  
 他は、耕作跡、石垣跡、耕作溝、耕作畦群(耕で略す)、  
 柵物痕、倒木痕、石流跡、洪水跡、落ち込み、暗渠排水。
3. 発掘調査時においては、検出遺構は区ごとに通し番号管理し(1区:1001、1002、1003…、2区:2001、2002、2003…、3区:3001、3002、3003…)、その後、遺構性格が確定した段階で遺構性格ごとに番号をふり直した。報告書掲載の遺構番号は千の位に各区の数字を入れ、1区は1000番台、2区は2000番台、3区は3000番台で示す。
4. 本調査における測量記号は、世界測地系第V系に準拠し、方位は公共座標北を示し、高さはLで記し海拔標高である。
5. 綱目(岡・遺物岡)の縮尺は、岡版の右下もしくは左下にスケールバーを示し、バーの上にSで縮尺率を示した。「S=1:50」ならば50分の1の意味である。
6. 土層観察表は、層ごとに色調・土性・混入物・粘性・縮り等について特記事項を記した。色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』を用いて、JIS notationと日本語の対応土色名を記した。土性については、粒土の細かいものから順に、粘土、粘土質シルト、シルト、砂質シルト、細粒砂、中粒砂、粗粒砂、礫に区分した。単に砂と表現したものは、粗粒砂・中粒砂・粗粒砂を含んでいる。粘土質シルトは、正確には“粘土を比較的多く含むシルト”、砂質シルトは“砂粒を比較的多く含むシルト”を意味する。混入物等に記された%の数値は『新版 標準土色帖』の「図1 面積割合」を参照した。
7. 基本層序の呼び方は、1区は1-1層、1-2層、1-3層…、2区は2-1層、2-2層、2-3層…、3区は3-1層、3-2層、3-3層とそれぞれ頭に区番号とハイフンを付した。ただし、各区の文章中には区番号とハイフンを略すこともある。

8. 本文中の遺構規模について、平面形の長軸と短軸、及び陸認面からの深さを(長軸 m × 短軸 m・陸認面からの深さ m)で表記する。
9. 遺構実測図の縮尺は、土器類(弥生土器・土師器・須恵器)が4分の1、石器・石製品は大きさに応じて3分の1、3分の2、4分の1とし、玉類と銅類は原寸で掲載した。須恵器は断面を黒塗りし、弥生土器・土師器・玉類・銅類は白抜きとした。
10. 石器断面の矢印が示すものは、以下のとおりである。  
 砥 面 : ←————→  
 研磨範囲 : ←・-・-・-・→  
 敲打範囲 : ←————→
11. 報告書掲載遺物の番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物写真図版と、収蔵遺物本体の注記番号に「通す」。
12. 本報告書の遺構・遺物の時期比定は以下の文献を参照した。  
 ・弥生土器の編年…清水貞一 1992『因幡・伯耆』『弥生土器の様式と編年』山岡・山陰編』正岡隆夫・松木岩雄 編 木耳社  
 ・千代川水系の弥生土器の編年…谷口恭子他 1991『第4章第2節 遺物について』『岩古遺跡Ⅲ』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団、谷口恭子 2000『因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について』『庄内式土器研究XXⅡ』庄内式土器研究会  
 ・弥生時代後期から古墳時代前期の墓の編年…河合肇行 2009『第5章第1節 弥生時代後期から古墳時代前期初頭の墓について』『鳥取県鳥取市青谷町 青谷上寺地遺跡10 第9次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター  
 本文中で用いる「弥生時代終末期」は清水1992のⅥ期にあたる。「古墳時代前期」は谷口2000の因幡Ⅵ-3期と因幡Ⅶ-1期を合わせた時期である。「弥生時代中期中葉」は清水1992のⅢ期、「弥生時代中期後葉」は清水1992のⅣ期に相当する。

# 目次

## 序文

## 巻頭図版

## 例言・凡例・目次

挿図目次・表目次・遺物図目次・遺物観察表目次・写真目次・巻頭図版目次・写真図版目次・付図目次

序章	1
第1節 地理的・歴史的環境	1
第2節 調査の経緯	4
第3節 調査経過	5
第4節 調査方法	8
第5節 調査体制	11
第1章 奈免羅・西の前遺跡Ⅱの遺構と遺物	13
概要	13
第1節 1区基本層序・遺構と遺物	13
第1項 1区基本層序	13
第2項 1区第1面～第4面の概要	14
第3項 1区遺構と遺物	17
第2節 2区遺構と遺物	24
第1項 2区基本層序	24
第2項 2区の概要	39
第3項 2区遺構と遺物	40
第3節 3区遺構と遺物	111
第1項 3区基本層序	111
第2項 3区の概要	111
第3項 3区第1面遺構と遺物	112
第4項 3区第2面遺構と遺物	124
第5項 3区第3面遺構と遺物	207
第6項 3区第4面遺構と遺物	224
第7項 3区遺構外出土石器	225
第2章 奈免羅・西の前遺跡出土遺物の自然科学分析	243
はじめに	243
第1節 P3662柱根の年代と樹種	243
第2節 銅鋼の蛍光X線分析	246
第3章 総括	249
第1節 2区大溝について	249
第2節 奈免羅・西の前遺跡出土弥生土器群の様相	253
第3節 奈免羅・西の前遺跡出土石器の様相	260
第4節 奈免羅・西の前遺跡出土の銅鋼	268
写真図版	
報告書抄録	

## 目 次

図 1 周辺遺跡分布図	2	図 39-2 3区基本順序 Tr.1 セクション図	115
図 2 調査区及びグリッド配置図	6	図 40 SK3001・SK3002 遺構図	116
図 3 1区基本順序セクション図	15・16	図 41 3区基本順序 Tr.5 セクション図・基本順序模式図	117・118
図 4 1区第1面・第2面平面図	17	図 42 3区第1面・第2面平面図	119・120
図 5 1区第2面石垣平面図・立面図	17	図 43 3区第3面・第4面平面図	121・122
図 6 1区第3面平面図	18	図 44 3区第1面耕作溝群平面図	123
図 7 SD1001 遺構図	19	図 45 SB3001 遺構図	125
図 8 SD1002 遺構図	20	図 46 SB3002 遺構図	126
図 9 SD1005・SK1009 遺構図	21	図 47 SB3003 遺構図・微細図	128
図 10 1区第4面平面図	22	図 48 SB3004 遺構図	130
図 11 2区断面模式図	25	図 49-1 SB3005 遺構図	131
図 12 2区 Tr.1 セクション図	27・28	図 49-2 SB3005 遺構図	132
図 13 2区 Tr.4 セクション図	29・30	図 50 SB3006 遺構図	133
図 14 2区 Tr.5・Tr.2・Tr.3 セクション図	31・32	図 51 SB3007 遺構図	135
図 15 2区第1面平面図	41・42	図 52 SI3001 遺構図	138
図 16 2区耕作溝群遺構図	44	図 53-1 SI3002 遺構図	140
図 17 SK2027 遺構図	46	図 53-2 SI3002 遺構図	141
図 18 SK2024・SK2005 遺構図	48	図 54-1 SI3003 遺構図	142
図 19 SK2008・SK2026 遺構図	49	図 54-2 SI3003 遺構図	143
図 20 SK2010 遺構図	52	図 55 SI3004・SI3005 遺構図 1	145・146
図 21 2区第2面平面図	57・58	図 56-1 SI3004・SI3005 遺構図 2	147・148
図 22 SD2015 遺構図	59	図 56-2 SI3004・SI3005 遺構図 2	149
図 23 SB2001 遺構図	62	図 57-1 SI3006 遺構図	153・154
図 24 SI2001 遺構図 1	65	図 57-2 SI3006 遺構図	155
図 25 SI2001 遺構図 2	67	図 58 SI3006 微細図	156
図 26 SK2031・SK2041 遺構図	70	図 59-1 SI3008 遺構図	158
図 27 SK2040 遺構図	73	図 59-2 SI3008 遺構図	159
図 28 土器だまり 2001・2002 微細図	75	図 60 SI3008 微細図	160
図 29-1 SD2012・SD2013・SD2014 セクション図	80	図 61 SI3007 遺構図 1	165・166
図 29-2 SD2012・SD2013・SD2014 セクション図	81	図 62 SI3007 遺構図 2	167・168
図 30 SD2012 遺構図	82	図 63 SI3009 遺構図	169
図 31 SD2012 微細図	83	図 64 SI3009 微細図	170
図 32 SD2013 遺構図	87	図 65-1 SI3010 遺構図	172
図 33 SD2014 遺構図	91	図 65-2 SI3010 遺構図	173
図 34 SD2014 微細図 1	93	図 66-1 SI3011 遺構図	174
図 35 SD2014 微細図 2	94	図 66-2 SI3011 遺構図	175
図 36 SD2014 微細図 3	95	図 67-1 SI3012 遺構図	176
図 37 SD2014 微細図 4	96	図 67-2 SI3012 遺構図	177
図 38 2区第3面平面図	107・108	図 68 SX3001・SX3002・SX3003 遺構図	180
図 39-1 3区基本順序 Tr.1 セクション図	113・114	図 69 SX3004 遺構図	183

図 70	SK3003 遺構図・微細図	184	図 88	SB3013 柱穴の新旧振り替わり	210
図 71	SK3007・SK3008 微細図	186	図 89	SB3013 遺構図 1	211・212
図 72	SK3009・SK3010 遺構図	188	図 90	SB3013 遺構図 2	213・214
図 73	SK3013 遺構図	189	図 91	SB3014 遺構図	217・218
図 74	SK3013 微細図	191	図 92-1	SI3015 遺物図	220
図 75	SK3020 遺構図	192	図 92-2	SB3015 遺構図	221・222
図 76	SK3020 微細図	194	図 93	P3662 遺構図	223
図 77	SK3039 遺構図	195	図 94	3区 Tr.6・Tr.8 セクション図	224
図 78	SK3042・SK3044 遺構図	196	図 95	3区 暗褐色砂層範囲	225
図 79	SK3045 遺構図	197	図 96	3区 明黄褐色砂層・黄灰色砂層範囲	225
図 80	SK3046 遺構図	198	図 97	木材	245
図 81	SK3047 遺構図	199	図 98	有鉤銚劍の元素マッピング図	247
図 82	SK3048 遺構図	200	図 99	ポイント分析スペクトル図	247
図 83	SK3049 遺構図	201	図 100	大溝比較図	250
図 84	SK3053 遺構図	202	図 101	時代別主要土器一覧図	257・258
図 85	SK3055 遺構図	203	図 102	岩石・石器・銅炭及び調査地周辺地質図	261
図 86	SK3056 遺構図	205	図 103	有鉤銚劍出土位置図	271
図 87	SB3008 遺構図	208	図 104	貝輪系銚劍の変容	273

## 表 目 次

表 1	発掘調査工程表	5	表 17	3区 遺構一覧表 8	237
表 2	1区 遺構一覧表	23	表 18	3区 遺構一覧表 9	238
表 3	2区 2-7層(第7層)出土土器分析表	33	表 19	3区 遺構一覧表 10	239
表 4	SK2010 遺物構成表	53	表 20	3区 遺構一覧表 11	240
表 5	SD2015 検出面・底部レベル推移表	61	表 21	3区 遺構一覧表 12	241
表 6	2区 SB2001 ピット残存率分析表	63	表 22	3区 遺構一覧表 13	242
表 7	2区 遺構一覧表 1	109	表 23	放射線炭素年代測定および暦年校正結果	244
表 8	2区 遺構一覧表 2	110	表 24	半定量分析結果	248
表 9	3区 竪穴住居跡一覧表	136	表 25	掲載遺物内訳表	253
表 10	3区 遺構一覧表 1	230	表 26	出土石器類一覧表 1	263
表 11	3区 遺構一覧表 2	231	表 27	出土石器類一覧表 2	264
表 12	3区 遺構一覧表 3	232	表 28	出土石器類一覧表 3	265
表 13	3区 遺構一覧表 4	233	表 29	全国有鉤銚劍一覧表	270
表 14	3区 遺構一覧表 5	234	表 30	九州弥生文化の貝輪分類	272
表 15	3区 遺構一覧表 6	235	表 31	「材質転換」する貝輪の系譜	274
表 16	3区 遺構一覧表 7	236			

## 遺物図目次

遺物図 1	SD1001 出土遺物	18	遺物図 20	SI3003 出土遺物	143
遺物図 2	1 区 抽出遺構外出土遺物	23	遺物図 21	SI3005 出土遺物	150
遺物図 3	2 区 第 6 層・第 7 層出土遺物	34	遺物図 22	SI3006 出土遺物	157
遺物図 4	2 区 第 5 層・第 8 層出土遺物	36	遺物図 23	SI3008 出土遺物	161
遺物図 5	SK2027 出土遺物	47	遺物図 24	SI3007 出土遺物	164
遺物図 6	SK2024 出土遺物	48	遺物図 25	SI3009 出土遺物	170
遺物図 7	SK2005・SK2006・SK2026 出土遺物	50	遺物図 26	SI3011 出土遺物	175
遺物図 8	SK2010 出土遺物	54	遺物図 27	SI3012 出土遺物	176
遺物図 9	SD2015 出土遺物	60	遺物図 28	SX3003 出土遺物	181
遺物図 10	SI2001 内土器だまり 2003 出土遺物	68	遺物図 29	SK3003 出土遺物	185
遺物図 11	SK2031 出土遺物	69	遺物図 30	SK3007 出土遺物	185
遺物図 12	SK2040 出土遺物	73	遺物図 31	SK3013 出土遺物	190
遺物図 13	土器だまり 2001 出土遺物	76	遺物図 32	SK3020 出土遺物	193
遺物図 14	土器だまり 2002 出土遺物	77	遺物図 33	SK3047 出土遺物	199
遺物図 15	SD2012 出土遺物	84	遺物図 34	SK3055 出土遺物	204
遺物図 16	SD2013 出土遺物	88	遺物図 35	SK3056 出土遺物	206
遺物図 17-1	SD2014 出土遺物	98	遺物図 36	SI3013 出土遺物	209
遺物図 17-2	SD2014 出土遺物	100	遺物図 37	SI3014 出土遺物	216
遺物図 17-3	SD2014 出土遺物	102	遺物図 38	SI3015 出土遺物	219
遺物図 17-4	SD2014 出土遺物	104	遺物図 39	3 区 暗褐色砂層出土遺物	226
遺物図 18	SB3003 内 P3079 出土遺物	129	遺物図 40	3 区 暗褐色砂層出土遺物	228
遺物図 19	SI3001 出土遺物	137	遺物図 41	3 区 掘乱・旧耕作土出土遺物	229

## 遺物観察表目次

遺物観察表 1	18	遺物観察表 16	89
遺物観察表 2	23	遺物観察表 17-1	99
遺物観察表 3	35	遺物観察表 17-2	101
遺物観察表 4	36	遺物観察表 17-3	103
遺物観察表 5	47	遺物観察表 17-4	104
遺物観察表 6	48	遺物観察表 18	129
遺物観察表 7	50	遺物観察表 19	137
遺物観察表 8	54	遺物観察表 20	143
遺物観察表 9	60	遺物観察表 21	150
遺物観察表 10	68	遺物観察表 22	157
遺物観察表 11	69	遺物観察表 23	162
遺物観察表 12	73	遺物観察表 24	164
遺物観察表 13	76	遺物観察表 25	170
遺物観察表 14	77	遺物観察表 26	175
遺物観察表 15	85	遺物観察表 27	176



遺物観察表 28	182	遺物観察表 36	209
遺物観察表 29	185	遺物観察表 37	216
遺物観察表 30	185	遺物観察表 38	219
遺物観察表 31	190	遺物観察表 39	227
遺物観察表 32	193	遺物観察表 40	227
遺物観察表 33	199	遺物観察表 41-1	228
遺物観察表 34	204	遺物観察表 41-2	229
遺物観察表 35	206		

## 写真目次

写真1 八洞町文化財保護審議会委員視察	7	写真10 発掘調査参加者集合	11
写真2 現地説明会	7	写真11 2区 人溝冠水	79
写真3 発掘速報展	8	写真12 SD2014 セクションa	97
写真4 3区 表土剥ぎ	8	写真13 SD2014 出土 礫	97
写真5 1区 平面精査	9	写真14 2区 Tr.10 掘削	106
写真6 2区 大溝掘削	9	写真15 2区 調査終了	106
写真7 1区 平面測量	10	写真16 SI3005 出土 土製品	151
写真8 洗浄遺物の乾燥	10	写真17 SI3006内SK3012出土石簾(181)接合資料	152
写真9 遺物実測	11		

## 巻頭図版目次

巻頭図版1 2区 第2面全景 3区 第2面全景	巻頭図版5 3区 SK3055 遺物出土状況 3区 SK3055 出土 水差形土器 3区 SK3055 出土 器台
巻頭図版2 2区 第2面全景 3区 第2面全景	巻頭図版6 3区 SI3012内SK3027 出土 銅削 奈免羅・西の前遺跡出土 玉類集合
巻頭図版3 1区 第3面完掘全景 2区 第1面 SK2024 蓋坪出土状況 2区 第1面 SK2024 出土 蓋坪	写真図版7 3区出土 弥生時代中期土器 3区出土 石器類
巻頭図版4 3区 第2面木棺墓群完掘 3区 第3面西側完掘	巻頭図版8 2区 大溝群完掘 2区 SD2014 出土 弥生時代後期～終末期土器

## 写真図版目次

写真図版1 1区 第1面・第2面・第3面	写真図版8 2区 第1面
写真図版2 1区 第3面	写真図版9 2区 第2面
写真図版3 1区 第4面	写真図版10 2区 第2面
写真図版4 2区 基本層序	写真図版11 2区 第2面
写真図版5 2区 基本層序	写真図版12 2区 第2面
写真図版6 2区 第1面	写真図版13 2区 第2面
写真図版7 2区 第1面	写真図版14 2区 第2面

写真図版 15 2区 第2面  
写真図版 16 2区 第2面  
写真図版 17 2区 第2面  
写真図版 18 2区 第2面  
写真図版 19 2区 第2面  
写真図版 20 2区 第2面  
写真図版 21 2区 第2面  
写真図版 22 2区 第2面  
写真図版 23 2区 第2面  
写真図版 24 2区 第2面  
写真図版 25 2区 第3面  
写真図版 26 3区 基本層序・第1面  
写真図版 27 3区 第1面 石器類  
写真図版 28 3区 第1面・第2面  
写真図版 29 3区 第2面  
写真図版 30 3区 第2面  
写真図版 31 3区 第2面  
写真図版 32 3区 第2面  
写真図版 33 3区 第2面  
写真図版 34 3区 第2面  
写真図版 35 3区 第2面  
写真図版 36 3区 第2面・第3面  
写真図版 37 3区 第2面  
写真図版 38 3区 第2面  
写真図版 39 3区 第2面  
写真図版 40 3区 第2面  
写真図版 41 3区 第3面  
写真図版 42 3区 第3面  
写真図版 43 3区 第3面  
写真図版 44 3区 第3面  
写真図版 45 3区 第4面

写真図版 46 1区・2区 出土遺物  
写真図版 47 2区 出土遺物  
写真図版 48 2区 出土遺物  
写真図版 49 2区 出土遺物  
写真図版 50 2区 出土遺物  
写真図版 51 2区 出土遺物  
写真図版 52 2区 出土遺物  
写真図版 53 2区 出土遺物  
写真図版 54 2区 出土遺物  
写真図版 55 2区 出土遺物  
写真図版 56 2区 出土遺物  
写真図版 57 2区 出土遺物  
写真図版 58 2区 出土遺物  
写真図版 59 2区 出土遺物  
写真図版 60 2区 出土遺物  
写真図版 61 2区 出土遺物  
写真図版 62 2区 出土遺物  
写真図版 63 2区 出土遺物  
写真図版 64 2区 出土遺物  
写真図版 65 3区 出土遺物  
写真図版 66 3区 出土遺物  
写真図版 67 3区 出土遺物  
写真図版 68 3区 出土遺物  
写真図版 69 3区 出土遺物  
写真図版 70 3区 出土遺物  
写真図版 71 3区 出土遺物  
写真図版 72 3区 出土遺物  
写真図版 73 3区 出土遺物  
写真図版 74 3区 出土遺物  
写真図版 75 3区 出土遺物  
写真図版 76 3区 出土遺物

## 付 図 目 次

- 付図1 奈免羅・西の前遺跡Ⅱ 3区 第1面・第2面遺構配置図  
付図2 奈免羅・西の前遺跡Ⅱ 3区 第3面・第4面遺構配置図

## 序 章

### 第1節 地理的・歴史的環境

**地 理** 鳥取県八頭郡八頭町は、県の東部に位置し、平成17年(2005)3月に郡家町、船岡町、八東町が合併して誕生した。八頭町は西条柿、花御所柿、二十世紀梨、りんご、ぶどう等の栽培が盛んな「フルーツ上国」として全国に名を知られ、風雪厳しい山陰地方の中であって、比較的気候が穏やかで良水にも恵まれ、古から多くの人々が住まう生活拠点であった。町内の東から西へと清流を伝える八東川は、鳥取県最大河川の千代川の支流のうち最も大きなもので、鳥取・兵庫県境の戸倉峠西側に源を発し、加地川と春米川を合わせ、若桜町を貫いて八頭町へ至る。八頭町内ではさらに細見川、大江川、私都川等が合流し、隣接する鳥取市で千代川へ流れ込む。

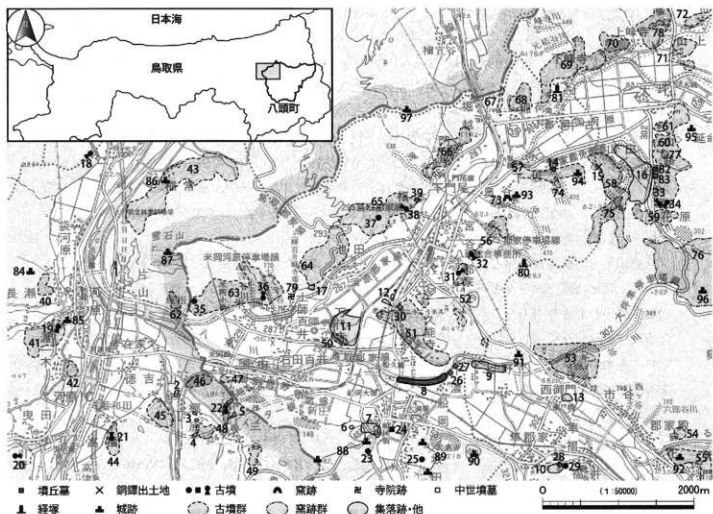
奈免羅・西の前遺跡の所在する八東川南岸の船岡、下濃の地は、穏やかな傾斜の河岸段丘を形成しており、現在は風光明媚な田園地帯が広がっている。多数の小河川を束ねる八東川は大雨のたびに氾濫に見舞われてきた川であるが、当遺跡の弥生時代中期の集落跡はこの八東川のすぐ南岸にあり、当時の河道ラインが現在と異なっていた可能性があるにしても、あまりにも川に近い。今次調査で、弥生時代中期の集落跡と墓域、竪穴住居跡内出土の銅鏝、弥生時代終末期から古墳時代初頭の大型の溝群等が検出されたことは、逆に、八頭町の本格的弥生集落の形成は八東川と密接に関わっていたとみるべきかもしれない。

**縄文時代** 町内には縄文時代の遺跡は概して少ないが、その中で八東川の北岸にある西御門遺跡(13)は、磨治縄文(福田KⅡ式平行、津雲A・平城式並行)のほか縄文時代後期の深鉢を中心に、石匙・石錘・打製石斧が出土しており、貴重な例となっている。また、この西御門遺跡から川沿いの下流域、八東川と私都川に挟まれた丘陵上には後期の磨治縄文が出土した万代寺遺跡(11)があり、さらに鳥取市河原町の前田遺跡(2)からは福田KⅡ式と思われる後期の土器が出土している。

**弥生時代** 町内では弥生時代前期に比定できる遺構・遺物は、現在のところ確認されておらず、中期以降になって出土例が増加する。弥生時代中期の遺跡として、私都川左岸では、スタンプ文の施された弥生土器の出土した山田遺跡(16)、前述の万代寺遺跡からは竪穴住居跡2棟と木棺墓群が確認されている。さらに、万代寺遺跡と八東川を隔てた緩傾斜地には竪穴住居跡1棟が検出された丸山遺跡(7)があり、奈免羅・西の前遺跡もこれらの遺跡との同時性が想定できる。中期以降の遺跡としては、西ノ岡遺跡(10)、牧野遺跡、万代寺遺跡、奈免羅・西の前遺跡及び同遺跡の東側に土器散布がみられる上野遺跡(9)があり、当該地域の弥生期の集落の範囲はさらに拡大すると思われる。これより上流域では、若桜鉄道川比駅周辺で後期と思われる土器が採取されている。

千代川流域の弥生時代中期以降の遺跡は顕著で、河口付近には豊富な木製品が出土した港湾都市・青谷上寺地遺跡がある。千代川から八東川流域にかけて出土する弥生時代中期～終末期の土器には類似性が強く、いわゆる山陰系土器の中心地の一つとなっている。奈免羅・西の前遺跡の位置する船岡の地名は江戸時代の船着き場に由来するとされ、これらの地域が船によってつながっていたことも想定できる。

また、八頭町内では銅鏝の出土が2例知られており、一つは下坂銅鏝出土地(15)で弥生時代中期の四区画装文銅鏝が出土し鳥取県立博物館が所蔵している。もう一つは、破岩から出土したと伝えられるもので、江戸時代に安部恭庵によって書かれた『因幡志』に掲載されている図面から推定す



- |                  |                   |            |              |
|------------------|-------------------|------------|--------------|
| 1 片山遺跡           | 28 西ノ岡古墳          | 55 大門古墳群   | 82 山路1号墓     |
| 2 前田遺跡           | 29 福井1号墳          | 56 宮谷古墳群   | 83 山路2号墓     |
| 3 郷原遺跡           | 30 久能寺25号墳(御建山古墳) | 57 下坂古墳群   | 84 長瀬城跡      |
| 4 郷原地才下平遺跡       | 31 郡家3号墳(寺山古墳)    | 58 山田古墳群   | 85 谷一木丸山城跡   |
| 5 三谷園ヶ谷遺跡        | 32 宮谷1号墳          | 59 花原古墳群   | 86 稻荷城跡      |
| 6 新部庄口下分遺跡       | 33 山路1号墳          | 60 山路古墳群   | 87 巖勝寺山城跡    |
| 7 丸山遺跡           | 34 山路3号墳          | 61 大坪古墳群   | 88 丸山城跡      |
| 8 奈免羅・西の前遺跡      | 35 米岡2号墳          | 62 片山古墳群   | 89 坂田大谷平所在城跡 |
| 9 上野遺跡           | 36 米岡48号墳         | 63 米岡古墳群   | 90 郡家大平所在城跡  |
| 10 西ノ岡遺跡         | 37 福本42号墳(大塚古墳)   | 64 池田古墳群   | 91 3号城跡      |
| 11 万代寺遺跡         | 38 福本67号墳         | 65 福本古墳群   | 92 徳山城跡      |
| 12 久能寺孤塚遺跡       | 39 福本70号墳         | 66 門尾古墳群   | 93 比丘尼城跡     |
| 13 西御門遺跡         | 40 長瀬古墳群          | 67 堀越古墳群   | 94 下坂城跡      |
| 14 下坂1号墓         | 41 谷一木古墳群         | 68 稲荷古墳群   | 95 鷺ヶ城跡      |
| 15 下坂岡陣出土地       | 42 渡一木古墳群         | 69 下峰寺古墳群  | 96 花原所在城跡    |
| 16 山田遺跡          | 43 稲常古墳群          | 70 山崎寺古墳群  | 97 中山城跡      |
| 17 天守遺跡          | 44 高福古墳群          | 71 山上古墳群   |              |
| 18 布袋1号墳         | 45 山手古墳群          | 72 奥山ノ上古墳群 |              |
| 19 谷一木1号墳(天坪山古墳) | 46 加々瀬古墳群         | 73 奥谷竈跡    |              |
| 20 八上1号墳(嶺古墳)    | 47 宮岡古墳群          | 74 下坂古墳群   |              |
| 21 高福1号墳         | 48 郷原古墳群          | 75 山田古墳群   |              |
| 22 郷原7号墳         | 49 三谷古墳群          | 76 花原古墳群   |              |
| 23 神明古墳          | 50 万代寺古墳群         | 77 山路古墳群   |              |
| 24 下坂神古墳         | 51 久能寺古墳群         | 78 山上古墳群   |              |
| 25 大谷平古墳         | 52 郡家古墳群          | 79 土師百井庵寺跡 |              |
| 26 奈免羅古墳         | 53 西御門古墳群         | 80 京ヶ塚経塚   |              |
| 27 梨ノ木古墳         | 54 殿古墳群           | 81 下峰寺経塚   |              |

図1 周辺遺跡分布図

ると、弥生時代中期後葉頃の高さ70cm程度の突線紐式袈裟博文銅鐸の可能性が高いが、現存していないため詳細は不明である。このほか、弥生時代後期の墳丘墓が、市場、下坂で確認されている。

古墳時代 古墳時代前期に比定される遺跡は町内ではほとんど確認されていないが、重柱で採土時に4世紀代の方格規矩瓦紋鏡が山土していることと山田遺跡で比較的古式の上師器の散布がみられる程度である。中期以降では、山ノ上32号墳が5世紀中葉から後葉の築造で比較的古く、周溝内から供獻土器と考えられる初期須恵器の埴輪が砕けた状態で出土している。三角文と波状沈線陰刻した精緻なものである。また、奈免羅・西の前遺跡に程近い万代寺遺跡に向かっている丘陵上には、埴輪の埴面が確認された久能寺25号墳(御建山古墳)が知られ、径約25m、高さ約3.3mの規模であったとされるが、現在は消滅しているので内部構造も含めて詳細は不明である。5世紀末から6世紀初頭にかけての築造で、家形・人物・動物などの形象埴輪と、底部調整を施していない円筒埴輪が確認されており、当該地周辺の首長墳と位置づけられる。このほか、大江川右岸の丘陵上にある下荒神古墳(24)は29m×27mの方墳で、鏡、鉄刀等が出土しており、築造時期は不明であるが墳丘の状況などからやや古い印象を受ける。

古墳時代後期には、私都川、八東川流域に多数の群集墳が造営され、古墳の総数は500基以上に及ぶ。その分布は、八東川上流域の若桜町との町境に近い日山集落から下流の山裾部に数基が認められるほかは、概ね私都川流域、特に右岸の霊石山山麓と私都谷入口部分の丘陵上に集中してみられる。ほとんどが後期群集墳を構成する小規模円墳で、横穴式石室を内部構造としている。

八東川南岸で確認されている古墳の数はそれほど多くはなく、小規模な円墳が散見できる程度で詳細が判明しないものが多いが、横穴式石室を内部構造とする古墳であったと推定されている皆原1号墳から果樹園の柵設置中に須恵器の高杯・杯・壺・提瓶等が出土している。また、大谷平古墳(25)は、直径12.5mの円墳で、河原石を野面積みして構築された片袖式の横穴式石室内部から、直刀、刀子、鉄鏃、須恵器の高杯・杯・壺・提瓶等が出土し、出土品の明らかな数少ない古墳の一つである。このほか、奈免羅・西の前遺跡の包蔵地内で奈免羅古墳(26)と梨ノ木古墳(27)が確認されており、横穴式石室の側壁がわずかに残存していた奈免羅古墳からは7世紀初頭の須恵器高杯等、梨ノ木古墳からは勾玉や須恵器が出土している。いずれの古墳も消滅して詳細はわからない。

なお、霊石山山麓の古墳群からは、因幡地方を中心に分布する線刻壁面を作る横穴式石室が集中して見つかっており、人物・綾杉・木葉文が確認されている米岡2号墳(35)や烏・弓・綾杉文が確認されている福本4号墳が有名で当該地域の特徴の一つに挙げられる。このほか、福本70号墳(18)は片袖式の横穴式石室を持つ終末期の八角墳であるが、石室内床面及びその付近から金銅製馬具、金銅製双龍環頭柄頭付鉄刀、青銅製匙、須恵器の杯・高杯・壺等、鍔付鉄剣、玉類、鉄鏃等の副葬品が出土している。これらの壮麗な出土品は当該地付近でも希少であり、中央勢力や大陸との関係を知る上でも極めて重要である。

また、前方後円墳についてみると、郡家3号墳(寺山古墳)(31)が全長37.5m、宮谷1号墳(32)が全長32mとやや大型であるが、そのほかは小規模なものが多く米岡48号墳(36)が全長28m、福本67号墳(38)が全長21m、山路1号墳(33)が全長27m、山路3号墳(34)が全長20mで、500基以上の古墳総数に比して非常に少ないことがわかる。ちなみに、八東川と千代川との合流点である鳥取市河原町には大型の前方後円墳があり、全長60mの中井1号墳、全長50mの八上1号墳(獄古墳)(20)が確認されている。

白鳳時代～古代 国史跡に指定されている土師百井鹿寺跡(79)は、私都川北岸の緩傾斜地に築かれた白鳳時代後期の古代寺院で、発掘調査の結果、法起寺式の伽藍配置であることが確かめられている。塔跡は、心礎を含めた17個の礎石がすべて残存しており、一部、土地を公有化して保存が図られている。これまでの発掘調査で、軒丸瓦や平瓦、瓦製吻尾等の遺物のほか、「円幡」の「幡」の字をへら書きした文字瓦が見つっている。土師百井鹿寺跡の北東約3kmの奥谷窯跡(73)からは同様の瓦が出土しており、当鹿寺の瓦を焼いた窯跡と推定されている。また、土師百井鹿寺跡と私都川を隔てた対岸に広がる丘陵地には、八上郡の郡衙跡と想定されている大型掘立柱建物跡が検出された万代寺遺跡がある。同遺跡から出土した須恵器坏蓋・壺・円面硯等と同一形態のものが花原古窯跡群(59)の出土品の中にみられ、消費地と供給地のつながりが判明した貴重な例となった。

このほか、私都谷周辺には下坂古窯跡群(74)・山田古窯跡群(75)・花原古窯跡群(76)・山路古窯跡群(77)・山ノ上古窯跡群(78)など多くの須恵器窯跡が見つかっており、総称して私都古窯跡群と呼ばれている。これら私都古窯跡群の北側に位置する鳥取市国府町は、古代円幡の政治・文化の拠点であった因幡国府が置かれた地であり、当該窯跡群が因幡国ないし八上郡の官窯として築窯され操業されていたとも考えられる。

中世 私都川、八東川の流域に広がる平野部を望む山上には、中世の山城や砦が多く確認されており、谷の分岐点や交通路の結節点には拠点となる城が築かれている。八東川上流の若桜町は、但馬や播磨地方との交通の要衝地であり、標高446mの鶴尾山の山頂に同指定史跡若桜鬼ヶ城跡がある。石垣や塼堀、郭などが残り、城下には城下町の町並みが良く残されている。また、私都谷の市場には私都城が築かれ、塼堀や曲輪、郭などが良好な状態で残存している。毛利氏の居城で、天正年間、羽柴秀吉の中国地方進攻により落城するまで動乱の中心にあったことが記録に残っている。

これら中世山城のほか、中世墳墓として山路1号墓(82)と山路2号墓(83)が知られ、県道拡幅工事に伴って発掘調査を実施した山路1号墓からは、陶製威骨器や多数の五輪塔が出土しており、県下における中世墳墓の発掘調査の先駆けとなっている。また、塚塚も数例が知られており、下峰寺、宮谷、新興寺、下野地内で確認されている。このうち新興寺経塚からは銅経筒・鏡・白磁合子などが出土しており、出土遺物が一括して県指定保護文化財となっている。(野田)

## 第2節 調査の経緯

奈免羅・西の前遺跡は、鳥取県八頭郡八頭町船岡・下濃地内に所在する。当該地は、昭和51年(1976)に鳥取県教育委員会(以下、県教委)の分布調査によって土器の散布が確認され、「奈免羅遺跡」として遺跡台帳、遺跡地図に登録・記載されていた。

その後、昭和60年(1985)6月に当該地で河川改修事業に伴う土砂採取がおこなわれた際、横穴式石室の存在が明らかとなり、当時の船岡町教育委員会は、新たに見つかった「奈免羅古墳」と周辺の開発区域について同年10月から緊急発掘調査を実施した。この発掘調査では、5基の溝状遺構と3基の上坑が検出され、弥生時代終末期から古墳時代の土器が多数出土、奈免羅古墳からは横穴式石室の残骸と完存の須恵器高坏等が出土し、当該遺跡を「奈免羅・西の前遺跡」として再登録した。

平成20年(2008)に鳥取県が県道河原インター線道路改良工事を実施することになり、奈免羅・西の前遺跡包蔵地を含む広範な区域が工事予定地に組み込まれた。このため、緊急に工事対象区域内の遺跡の有無を確認する必要性が生じ、同年11月18日から平成21年(2009)2月26日まで試掘調査

が実施された。その結果、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡や大型の溝などが検出された。工事主体である鳥取県八頭総合事務所は、平成21年(2009)3月3日、文化財保護法(昭和25年法律第214号)第94条第1項の規定に従い周知の埋蔵文化財包蔵地内での土木工事を実施したい旨、県教委教育長宛に通知した。これに対し、県教委より盛土による道路設置工事に際しては事前の発掘調査が必要との指示を受け、関係諸機関の協議の結果、鳥取県八頭総合事務所からの依頼を受けて八頭町が調査を実施することとなった。調査面積が6000㎡を超える大規模な調査となるため、町直営による発掘調査は困難であるとの判断から、八頭町教育委員会の監理のもと、民間の調査機関である「株式会社島田組」に当該業務を委託して実施することになり、6月16日、県教委教育長宛に文化財保護法第99条第1項の規定に従って発掘調査着手の届出を提出した。

遺跡名称については、昭和60年次の調査で検出された遺構との類似性や出土土器の時期も概ね同じであることから、「奈免羅・西の前遺跡」の名称をそのまま使用し、前回の調査と区別して今回の調査を「2次調査」とした。調査区を1区・2区・3区とし、計6731.918㎡の面積の調査に約6ヶ月を要した。9月26日に現地説明会を開催、11月13日に現場作業を終了し鳥取県八頭総合事務所へと引き渡した。

表1 発掘調査工程表

年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
調査	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	調査	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
調査		1	2	3	4	5	6	7	8	9
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	調査	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10

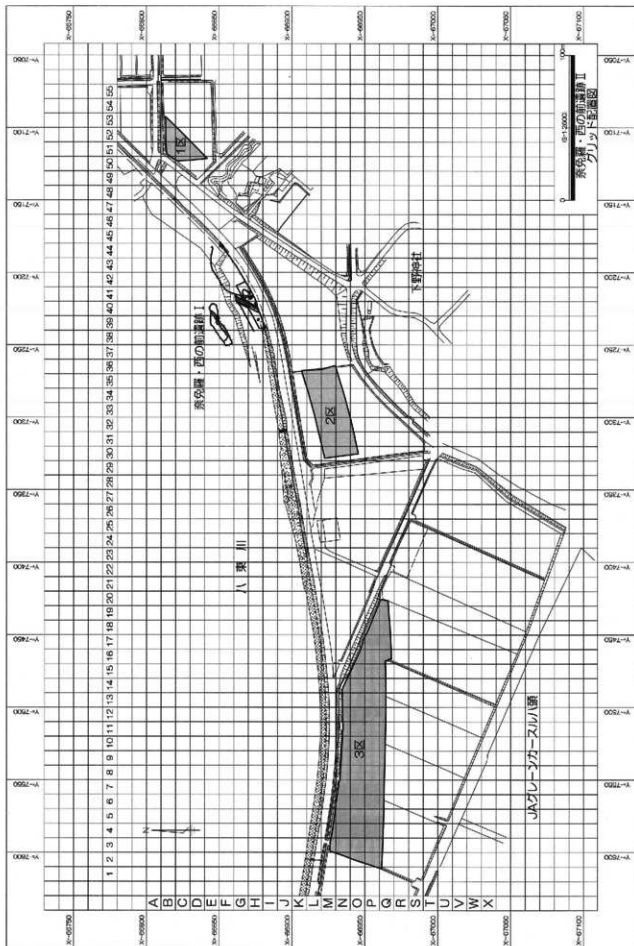


図2 調査区及びグリッド配置図



### 第3節 調査経過

平成21年5月25日に準備工事に入り、5月27日に1区から重機による表土剥ぎを実施し、5月29日から発掘作業員による人力掘削を開始した。6月12日、発掘作業員の追加募集説明会を実施。6月19日に現場事務所に於て八頭町教育委員会発掘調査監理者と株式会社島田組調査担当者一同による第1回行程会議を開き、以後毎週木曜日に現場事務所に於て定例会議としておこなうこととした。1区調査は5月27日から7月1日、2区調査は6月1日から10月19日、3区調査は6月8日から10月30日まで実施し、11月2日から13日にかけて現場事務所等の撤収作業をおこなった。調査区全景及び主要遺構の写真記録は、必要に応じてラジコンヘリによる3回の空撮と高所作業車による11回の俯瞰撮影をおこなった。その他、随時、県教委文化財課による調査指導を受けると共に、9月3日には八頭町文化財保護審議会委員の視察(写真1)、9月26日には現地説明会を実施して多くの見学者を得た(写真2)。

遺物接合や実測、報告書作成などの整理作業については、11月初めから船岡地内に整理作業事務所を設け本格的に開始した。途中、今回の調査で出土した全国で30遺跡、80例目となる銅鋼片(有鉤銅鋼)についてプレス発表をおこない、12月15日～21日にかけて郡家公民館にて発掘速報展を開催した(写真3)。以降、発掘調査報告書『奈免羅・西の前遺跡Ⅱ』を刊行し、平成22年(2010)3月31日までですべての委託業務を完了した。

なお、各調査区の流れは以下の通りである。

(1)1区調査経過 5月27・28日、重機による表土剥ぎ。5月28日～6月9日、第1面・第2面調査。6月9日、第3面検出。6月20日～23日、第3面遺構調査(プラン検出、プラン写真撮影、遺構半截、セクション写真撮影、セクション測量、土層観察、遺構完掘、遺構完掘写真撮影)。第3面全景写真撮影(高所作業車)。6月23日～7月1日、第4面調査。7月1日、完了確認(発掘調査監理者)。

(2)2区調査経過 6月1日～19日、トレンチ調査。6月4日～12日、重機による表土剥ぎ・プラン精査。6月12日～7月2日、遺物包含層(第5層・第6層)掘削・第1面プラン検出。7月3日、第1面プラン検出状況写真撮影(高所作業車)。7月4日～16日、第1面遺構調査(プラン検出、プラン写真撮影、遺構半截、セクション写真撮影、セクション測量、土層観察、遺構完掘、遺構完掘写真撮影)、7月16日、第1面完掘全景写真撮影・第1面平面図測量。7月23日～8月7日、遺物包含層(第7層)掘削・第2面プラン検出。8月7日、第2面プラン検出状況写真撮影(高所作業車)。8月7日～9月3日、第2面遺構調査(プラン検出、プラン写真撮影、遺構半截、セクション写真撮影)



写真1 八頭町文化財保護審議会委員視察



写真2 現地説明会

影、セクション測量、土層観察、遺構完掘、遺構完掘写真撮影)。9月1日～4日、第2面平面図測量。9月3日、第2面空撮(ラジコンヘリ、高所作業車)。9月24・25日、現地説明会準備。9月26日、現地説明会開催。9月4日～10月5日、第2面補足調査。10月6日、大溝完掘写真撮影(高所作業車)。10月7日～15日、第3面確認トレンチ調査。10月16日、第3面全景写真撮影及び完了確認(発掘調査監理者)。10月17・19日、大溝埋め戻し。

(3)3区調査経過 6月8日～7月7日、トレンチ調査。6月15日～7月16日、重機による表土剥ぎ・第1面プラン検出。7月16日、西側第1面プラン写真撮影、7月17日～8月6日、遺物包含層(暗褐色砂層)掘削・第2面検出。8月7日、第2面プラン検出状況写真撮影(高所作業車)。8月17日～24日、耕作溝群調査(ベルト半截、セクション写真撮影、セクション測量、土層観察、遺構完掘)・第2面遺構調査。8月28日、耕作溝群完掘写真撮影(高所作業車)。8月31日～9月4日、東側第2面包含層掘削・遺構調査。9月3日、第2面東側全景空撮(ラジコンヘリ、高所作業車)。9月2日～4日、第2面平面図測量、補足調査。9月4日～17日、西側・中央第2面遺構調査(プラン検出、プラン写真撮影、遺構半截、セクション写真撮影、セクション測量、土層観察、遺構完掘、遺構完掘写真撮影)。9月7日～25日、竪穴住居跡調査。9月18日、第2面西側空撮(ラジコンヘリ、高所作業車)。9月24・25日、現地説明会準備。9月26日、現地説明会開催。10月6日、第3面プラン検出写真撮影(高所作業車)。10月7日～20日、第3面遺構調査。10月20日、第3面西側全景写真撮影(高所作業車)。10月20日～30日、第4面確認トレンチ調査。10月30日、完了確認(発掘調査監理者)。

(4)整理作業経過 6月8日～10月30日、遺物洗浄作業。7月8日～11月3日、遺物註記作業。10月2日～翌年3月31日、遺物実測作業・遺物観察表作成・報告書作成作業。

#### 第4節 調査方法

遺跡調査略号 今回の奈良免羅・西の前遺跡2次調査の略号は「09NN」とし、遺物採取ラベル・遺物註記の際の略号等にこの記号を用いた。

グリッド設定 調査予定地全域に国家基準座標(世界測地系)による10mグリッドを設定した。北西隅をA1グリッド、東西方向に細長い調査区となるため、Y軸方向を東に1、2、3…、X軸方向を南にA、B、C…と記号をふった。

試掘トレンチ設定・調査 発掘調査監理者の指示に従い、2区・3区に幅2mの試掘トレンチを計



写真3 発掘速報展



写真4 3区表土剥ぎ

10箇所設定し、遺跡の遺存状態を確認した。その結果、弥生時代から古墳時代の遺物包含層が調査対象区全域にわたって残っていることが確認された。

重機による表土剥ぎ(写真4) 重機(バックホー)を用いて、現代の水田耕作土と圃場整備の際の盛土層と整地層、さらに近世以降の耕作土を除去した。重機のオペレーターは発掘調査に従事した経験があり高度な技術を有する者を選び、必ず調査員、発掘調査監理者の立会いのもとでおこなった。

遺物包含層掘削 表土剥ぎ終了後は人力による遺物包含層掘削をおこない、包含層内の遺物をグリッドごとに採取しつつ遺構確認面まで掘り下げ、プラン検出をおこなった。

プラン検出・遺構マーキング・平面図略測・プラン検出状況写真撮影(写真5) 包含層掘削後、遺構確認面を丁寧に精査し遺構検出作業をおこなった。検出された遺構については石灰によるマーキングをおこない、その平面形状を測量して平面図を作成した。また、遺構のプラン検出状況を写真撮影によって記録した。

遺構ナンバリング 検出された遺構について1から順に通し番号をふった。ただし、1区では1001、1002、1003…、2区では2001、2002、2003…、3区では3001、3002、3003…と4桁目に区番号を入れて、番号の混乱を防ぐよう配慮した。

遺構記号 遺構性格ごとの記号分けは、調査終了後、調査成果に従って新規にふりなおした。遺構性格とその記号は、SI: 竪穴住居跡、SB: 掘立柱建物跡、SD: 溝・竪穴住居跡壁溝・竪穴住居跡内小溝、SX: 木棺墓、SK: 土坑、P: ピット、DD: 土器だまりである。記号化しないものとして、耕作跡、石垣跡、耕作溝、耕作溝群、植物痕、倒木痕、土石流跡、洪水跡、落ち込み、暗渠排水等の呼称を用いた。

遺構調査: 半載、セクション面分層・記録、セクション写真撮影、セクション図作成、完掘、完掘写真撮影、完掘平面図測量、エレベーション測量(写真6) マーキングされた遺構ごとに遺構調査を実施した。調査の手順は、半載、セクション面(土層断面)観察・分層・記録、セクション写真撮影、セクション図作成、完掘、完掘写真撮影、完掘平面図測量とし、掘削調査の途中で出土遺物や特徴的な検出状況のある場合は、その都度精査して記録をおこなった。ピットの半載は原則として長軸に沿っておこなった。溝もしくは溝状遺構についてはベルトを残して掘削した。直径1m以上の土坑については十字半載によって調査した。竪穴住居跡はL型でベルト半載をおこなった。

記録写真撮影 写真撮影は、6×7カメラ MamiyaRZ67 II を用いてカラーリバーサルフィルムと白黒ネガフィルムによって記録し、控えとして35mmのカメラ NikonFM2 を用いてカラーリバーサルフィルムと白黒ネガフィルム、NikonD60 デジタルカメラを用いた。撮影にあたり、35mmカメラ



写真5 1区平面精査



写真6 2区大溝掘削

とデジタルカメラで写し込みに、遺跡名・区番号・対象遺構・撮影方向・日付・調査者名を記入して撮影し、その後、適性露出・半オーバー露出・半アンダー露出の3枚を撮影した。その後、6×7カメラでも適性露出・半オーバー露出・半アンダー露出の3枚ずつ撮影した。作業風景写真撮影は、オリンパスμ TOUGH-8000 デジタルカメラを用いた。

平面図・断面図の図化(写真7) 遺跡及び遺構の平面図は写真測量及び測量士による実測によって記録した。断面図の作成はすべてデジタル測量によって測量士がデータを観測し、編集ソフトを用いて図面編集をおこなった。測量士は、データ観測にあたって必ず調査員の指示に従い、平面図については各遺構の上端・下端・中端・単点を、セクション図・エレベーション図等の遺構断面図については対象となるラインを記録した。また、調査区全体にわたって標高データを取得し、25cm コンタ図を作成した。出土遺物の微細図の作成は、デジタル測量によっておこない、その図を調査員が校正した。図面整理 測量士が、実測・図化・編集した遺構平面図・遺構セクション図・エレベーション図、トレンチセクション図、遺物微細図等を調査員の指示に従って編集・修正し、納品用の縮尺でレイアウト、出力し、納品物を作成した。出力データは指定されたファイル形式にそろえ、メディアに保存して納品物とした。これらの図面のうち報告書に掲載するものについては、所定の縮尺・線号になるように再編集・再配置をおこない出荷した。

写真整理 調査員及び補助調査員が撮影し、アルバムに保存された記録写真は、遺跡名・調査区・撮影対象・撮影方位・撮影日がわかるように1枚ごとに註記をおこなった。このうち、報告書に掲載するものについてはフィルムスキャナーで読み込んでデジタルデータ化したものを出稿図版とした。

遺物整理: 洗浄・乾燥・註記・復元・抽出・実測・トレース・観察表作成・写真撮影・写真整理(写真8・9)

出土遺物については洗浄・乾燥・註記・接合作業をおこなった。洗浄は、原則として土器ブラシとスポンジを併用して水洗にておこない、脆い土器の剥離に注意しておこなった。石器の洗浄には擦痕がつかないように注意した。土器の乾燥は水気を残さないように留意し、自然乾燥と室内でのエアコンによる乾燥を併用した。遺物註記について、今次調査では土器細片が非常に多く、遺構記号と日付のすべてを註記することは困難であると判断し、調査員と発掘調査監理者が協議のうえ、遺跡名・調査区・取り上げ番号のみを註記することとした。取り上げ番号とその内訳を示した遺物台帳は必ず遺物の傍に置き、取り上げ番号と出土地点・採取日の対応関係がわかるように留意した。遺物接合・復元作業は、現場採取時に遺存状態良好と記録していた遺物を優先的におこない、このうちさらに重要と思われるものを選別して抽出個体とした。抽出個体については、実測、遺物観察表作成、トレース、



写真7 1区平面測量



写真8 洗浄遺物の乾燥

遺物写真撮影等、報告書掲載のための作業をおこない、さらに、あらためて報告書掲載の遺構記号を追加で注記した。

**土壌サンプル水洗選別** 木棺墓の棺内相当部分の埋土、及び竪穴住居跡の中央土坑の埋土は、すべて土嚢袋に入れて採取し、孔径3mmメッシュの水切りかごを通して水洗選別をおこない、微細な遺物の採取を試みた。

**記録整理** すべての検出遺構について、その検出位置、検出状況、遺構規模、遺構埋土、遺構性格、附帯施設、工具痕の有無、所属面、他遺構との切り合い関係、出土遺物等について、調査員と補助調査員が協議し、遺構一覧表（遺構台帳）を作成した。

**測量・写真撮影・遺物ドット採取** 出土位置が重要と思われる遺物については、光波測距儀を用いて空間座標を記録した。これを遺物のドット採取と呼び、dの文字をつけて記録し、1区ではd1001、d1002・・・、2区ではd2001、d2002・・・、3区ではd3001、d3002・・・とした。

**基本層序の記録** 基本層序の観察は1区Tr.1～Tr.4、2区Tr.1～Tr.15、3区Tr.1～Tr.6でおこなった。調査直前のトレンチ確認では基盤層は一部しか確認できず、遺構調査を終了後、あらためてトレンチとサブトレンチを併用して基盤層相当層まで掘り下げた。奈免羅・西の前遺跡は東から西へ流れる八東川の南岸にあり、八東川の氾濫源の範囲内に位置する。1区の下層では岩盤層と黄色粘土層を基盤層として確認した。2区では弥生時代終末期～古墳時代前期前葉の遺物包含層である暗褐色・黒褐色砂質シルト層と、その下位の旧河床堆積層と思われる礫層を確認した。3区では調査区のほぼ全域に広がる黒色土層（無遺物層）と、その上位の暗褐色砂層・黄色砂層（弥生時代の遺物包含層）、黒色土層の下位の明黄褐色砂層を確認した。

## 第5節 調査体制

奈免羅・西の前遺跡発掘調査の体制は以下の通りである。

奈免羅・西の前遺跡発掘調査体制

調査主体 八頭町教育委員会

調査指導 鳥取県教育委員会文化財課・鳥取県埋蔵文化財センター

発掘調査監理者 八頭町教育委員会生涯学習課社会教育係 野田 大和

同上 下田 智大

八頭町教育委員会生涯学習課文化財専門員 上田 哲夫



写真9 遺物実測



写真10 発掘調査参加者集合

現場管理人	株式会社島田組文化財事業部統括			大塚 賢治	
測量技師	株式会社島田組文化財事業部主任			平井 利尚	
	同 上			松村 直樹	
	同 上			半浦 聖智	
	同 上			川村 治	
測量補助	株式会社島田組文化財事業部			光松 章	
	同 上			平井 聖子	
主任調査員	株式会社島田組文化財事業部主任			井波 隆夫	
調査員	株式会社島田組文化財事業部主任			島田 裕弘	
	同 上			伊波 直樹	
	同 上			荒川 和哉	
	同 上			井上 裕香	
	同 上			角上 寿行	
補助調査員	株式会社島田組文化財事業部			浅井 達也	
	同 上			結城 香	
	同 上			毛利 裕起	
	同 上			和田 竜一	
	同 上			安田 睦朗	
職 長	株式会社島田組文化財事業部			中川 健二	
	同 上			大塚 一彦	
発掘作業員					
安住 拓郎	岡田 恭子	伊賀 博史	石上 節夫	猪上 春美	猪上美知子
今井 卓朗	荻原紀美子	奥井 孝	奥田 満男	加藤千代美	川登 勇
川村美智子	鎌谷都々子	岸田 治興	岸本 克徳	木下 秀美	窪田 京子
倉掛みどり	古泉 妙子	小林 孝司	小林 宣子	小山 晴美	笹岡 由美
佐々野敏衣	佐々野弘幸	沢田 純一	清水 洋子	下田茂登子	竹内 英子
竹田千代一	竹田 直道	竹田 勝	田中 愛	田中 公幸	田中 昭二
谷口 隆信	田 潤 修	徳田 光彦	鳥谷 萬代	中島 尚	中原 瑞恵
中根 真	中村 滝美	中村 秀志	南條 洋二	西尾 美保	西村 和美
西村 直美	西村美恵子	八田 星代	浜橋 伸一	藤田 供子	古田 和美
古田 敏明	古田 親憲	古田留美子	堀場 俊朗	前田 君枝	松島 健三
松長 敏彰	松本 容幸	松本 幸子	三田 浩司	郷田 直美	村本 博
森田 暉子	山崎 恵子	山崎 健治	山根 和巳	山根美智子	山根 善子
山本 幸司	山本 徳男	山本 洋一	山本 優哉	古田千賀子	吉本 美佳
吉柳 真人	横山 浩一	若林まゆみ	若光 浩幸		
整理作業員					
鎌谷都々子	倉掛みどり	古泉 妙子	笹岡 由美	西村美恵子	野島 尚子
荻原 美香	藤田 供子	松本 幸子	山崎 恵子		

## 第1章 奈免羅・西の前遺跡Ⅱの遺構と遺物

**概要** 奈免羅・西の前遺跡は八東川南岸沿いに広がる複合遺跡である。今回の2次調査の調査地は東西に長く、1区～3区までは約500mである。調査面積は、1区が425.162㎡、2区は1445.381㎡、3区は4861.375㎡で、合計6731.918㎡となり、八頭町で過去最大の発掘調査となった。

今回の調査で、弥生時代から古墳時代にかけて当該地周辺で栄えた大規模な集落遺跡の実態がみえてきた。2区からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大溝3条、弥生時代終末期の竪穴住居跡1棟・掘立柱建物跡1棟、布掘り建物跡の思われる溝状土坑2基等を検出した。3区からは、弥生時代中期の竪穴住居跡15棟、弥生時代中期から中世までの掘立柱建物跡8棟、弥生時代後期以降と思われる木棺墓4基等、多彩な遺構を検出した。2区の大溝群から出土した弥生時代後期以降の多数の甕・壺・器台・高坏・蓋等の土器群は、地元の土器以外に、北近畿系土器・吉備系土器等の搬入系土器を含み、鳥取県内の他地域ではみられない特異な様相を示す。また、3区出土の弥生時代中期の土器と同時期と思われる石包丁・石槍等の多様な石器群の出土は、弥生時代中期の生活を知る重要な発見となった。さらに、3区の竪穴住居跡から出土した銅剣は、山陰地方で初、全国で80点目の有鉤銅剣であることがわかり、弥生時代の八東川南岸が山陰全域の中でも特別な地位を占めていたことがわかってきた。

以下で、各区ごとに、基本層序及び遺構と遺物の検出状況を報告する。

### 第1節 1区基本層序・遺構と遺物

1区は発掘調査対象区のうち最も北東側に位置する。調査区南側に広がる丘陵上には八頭町下遺跡の集落と耕作地が広がっており、その丘から北の八東川にむけて尾根状に台地が延びており、1区はその尾根の先端近くの傾斜地上にある。

#### 第1項 1区基本層序(図3)

1区基本層序はTr.1・Tr.2で確認した。基盤層に相当するのが粘板岩質千枚岩の岩盤であり、岩盤周囲には灰黄色もしくは灰黄褐色を呈する砂層・砂質シルト層・シルト層・粘土層が堆積しており、この黄色味を帯びた層に、暗褐色系の埋土の流路跡が切り込んでいるのが確認できる。この黄色味を帯びた砂層を基盤層として、上位に暗褐色砂質シルト層、その上に黒褐色砂質シルト層が堆積し、その上は耕作土と攪乱となる。調査区北西側にのみ、黒褐色砂質シルト層上面に、にぶい黄色粘土粒混じりの黒褐色砂質シルト層が堆積する。

1区の基本層序は断片的で、2区・3区の基本層序を参考にして、これらの土層をまとめ直すところのように整理できる。

1-1層 黒褐色シルト…現表土層、水田耕作土

1-2層 混合土…圃場整備の際の盛土・整地層 本層の下部に【1区第1面】あり

1-3層 灰黄褐色シルト…中世・近世・近代の耕作土 上面が【1区第2面】

1-4層 にぶい黄色粘土粒混じり黒褐色砂質シルト層…弥生～古墳時代の遺物包含層

(2区ではこの時期に2-7層・2-8層が堆積か)

(3区ではこの時期に3-4層・3-5層・3-6層が堆積か)

・・・1-5層上には元は黒色土層があったと推測。

1-5層 黒褐色砂質シルト層…黒色土層の下位層 上面が【1区第3面】

1-6層 暗褐色砂質シルト層…漸移層 上面が【1区第4面】

1-7層 灰黄褐色～にぶい黄褐色土層(砂・砂質シルト・シルト・粘土質シルト)…基盤層相当層、旧河道埋没土

1-8層 岩盤…粘板岩質千枚岩、八東川南岸の基盤層

## 第2項 1区第1面～第4面の概要(巻頭図版3、写真図版1)

1区では、第1面から第4面の4段階にわたって調査した。以下で各面の概要を述べる。

**【第1面】** 試掘調査のトレンチ内で、現地表面となる水田耕作土から30cm下で、中世以前の溝跡が検出された。この溝の直上に黒褐色シルト層が堆積しており、この層が遺物包含層の可能性があるため、この層の上面までを表土剥ぎで除去することになった。実際に表土剥ぎを始めたところ、この黒褐色シルト層の直上に暗灰黄色砂の堆積が確認され、これが帯状に伸びていたため道路状遺構として調査した。これが第1面である。調査の結果、近代以降の水田整備の際のものとなり、記録保存して掘削除去した。

**【第2面】** 第1面の道路状遺構の下に堆積していた黒褐色シルト層は、南東側で石垣へとつながり、その石垣裏込から近世の磁器片・陶器片が出土した。黒褐色シルト層は、近世以降に作られた石垣と一体となった耕作土であり、石垣・耕作土として記録して掘り下げた。耕作土1・耕作土2・黒褐色シルト層の土性と類似しており、同じ第2面として調査した。耕作土中から黒曜石片が2点検出された。2区・3区では出土していないが、1区付近にのみ縄文時代頃の遺構・遺物包含層があったのかもしれない。

**【第3面】** 第3面は近世以降の耕作土を除去した面である。遺構確認面は、岩盤・灰黄褐色砂・黄褐色砂質シルト・暗褐色砂質シルト・黒褐色砂質シルトと多様であり、本来縦方向に堆積していた層が輪切りになった状態を示す。この第3面に4条の溝が確認され、1区北東端部にやや大型の溝SD1001が検出され、調査区北東から南西にほぼ直線的に延びるSD1002が検出された。このSD1002が、試掘調査で検出された細長い溝である。また、浅い溝SD1003・SD1004が短い範囲で検出された。SK1001・SK1002・SK1003は埋土中に礫を多数含み、埋土もかなり新しく、耕作地の開削時の抜根や整地に伴うものと考えた。P1001・P1002も、第2面の耕作地に伴う遺構の可能性が高い。土石流跡1・同2は、岩盤から地面への変わり目に浅く挟りぎみに残った不整形の落ち込みである。埋没状況が人為的とは思えないため、発掘調査監理者と協議の結果、土石流跡とした。

**【第4面】** 第3面確認面の北西側に、にぶい黄色粘土粒を含む黒褐色砂質シルト層の広がりを確認した。第3面のSD1002は北東から南西へ直線的に延びるが、この溝を境にして北西側で地形が傾斜して下がり、そこに本層が堆積している。この層の堆積状況を調べるためTr.4を設定・調査したところ、直下にSD1005とSK1009が遺存することがわかり、急速、この層を包含層掘削して第4面検出と遺構調査を実施した。第4面では、SD1005の他、SK1004～SK1009が検出された。このSK群は土坑として区分したが、黒褐色砂質シルトを主体とし、いずれも遺物は未検出で、人為的遺構とみなす積極的な根拠はない。



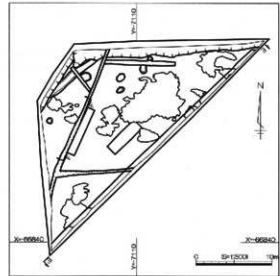
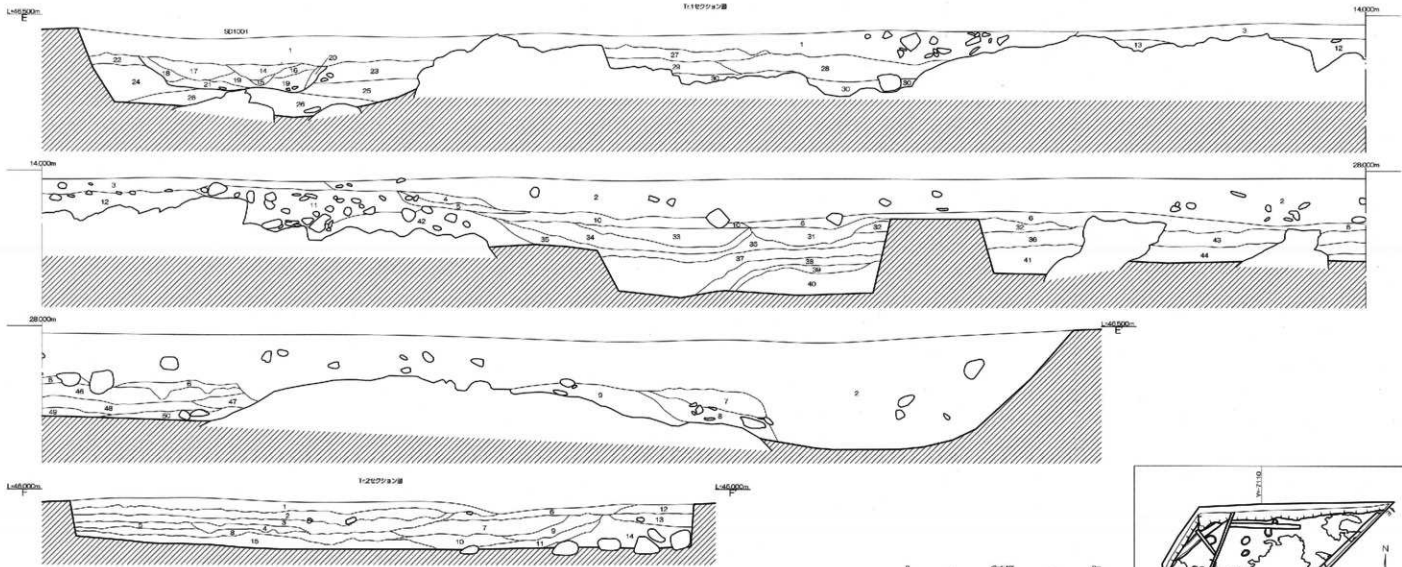


表1-1 土層履歴表

層番号	JIS name 土名	土色	記入物等
1	19YR2/2	赤褐色	開通直後の砂の堆土・盛土層
2	19YR2/2	赤褐色	砂・砂・砂
3	19YR2/2	赤褐色	開通直後の砂の堆土・盛土層
4	19YR2/1	赤褐色	開通直後の砂の堆土
5	19YR2/1	赤褐色	開通直後の砂の堆土
6	19YR2/1	赤褐色	開通直後の砂の堆土
7	2.5Y2/1	黄褐色	小礫層、砂質あり、砂質あり
8	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
9	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
10	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
11	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
12	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
13	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
14	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
15	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
16	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
17	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
18	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
19	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
20	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
21	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
22	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
23	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
24	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
25	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
26	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
27	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
28	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
29	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
30	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり

層番号	JIS name 土名	土色	記入物等
31	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
32	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
33	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
34	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
35	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
36	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
37	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
38	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
39	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
40	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
41	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
42	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
43	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
44	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり
45	2.5Y2/1	黄褐色	砂質あり、砂質あり

層番号	JIS name 土名	土色	記入物等
46	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
47	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
48	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
49	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり
50	19YR2/2	赤褐色	砂質あり、砂質あり

図3-1 1区 基本層序セクション図

第3項 1区 遺構と遺物 (図4・5・6・10、表2)

1区で検出された遺構は計22基で、内訳は以下の通りである。

第1面: 道路状遺構1基 第2面: 石垣・耕作土1基、耕作土2基

第3面: 溝及び溝状遺構4基・土坑3基・ピット2基・土石流跡2箇所

第4面: 溝1基・土坑6基

以下で、SD1001・SD1002・SD1005について記載する。(その他の遺構は、表2を参照のこと。)

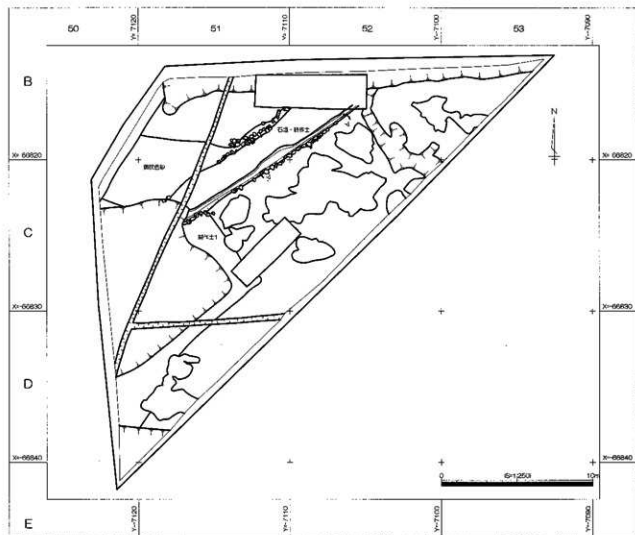


図4 1区 第1面・第2面平面図

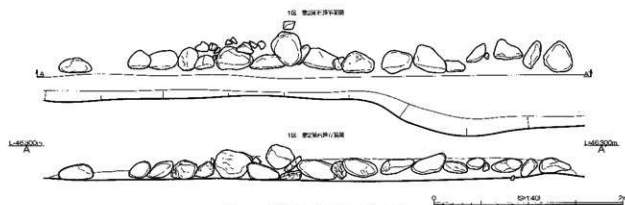


図5 1区 第2面石垣平面図・立面図

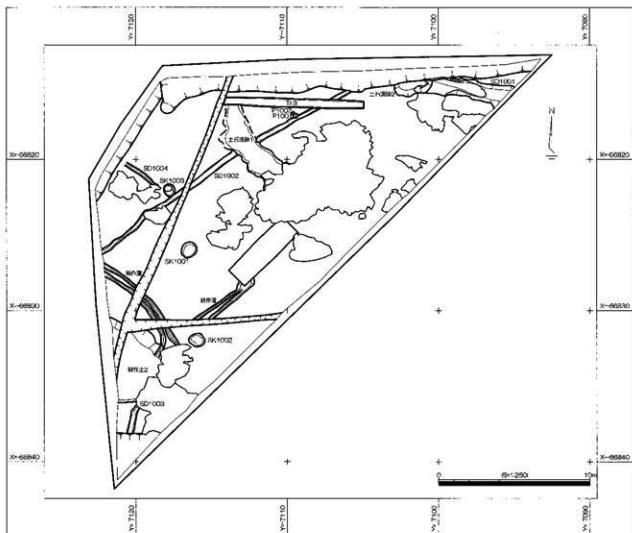


図6 1区 第3面平面図

■ SD1001(図7、遺物図1、遺物観察表1、写真図版2・46)

**位置** 第1面B52・B53グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.744mである。

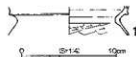
**検出状況** 調査区北側の攪乱を除去した際の南壁面で検出された。確認面は近世以降の耕作土を除去した段階である。東北東側、北西側は共に調査区外へ延びる。

**平面形状・規模** 平面形は帯状で、残存長5.973m・幅1.598mを測る。断面形は逆台形に近い形状で、確認面からの底面までの深さは0.252mである。底面レベルは東から西へ下がる。

**埋土** 南北セクションB-B'地点では7層に区分される。全体に黒褐色シルト・砂質シルトを主体層が多く、下層に円礫を多く含む層がある。溝内で左右の埋没過程に先後関係があり、溝の内面で流路がふり変わりながら埋没したものと思われる。基盤層の岩盤をかすめ、東北東へと貫通している。

**出土遺物** 土器細片12点が出土した。このうち1点が1で、古墳時代前期の土師器甕の口縁部である。

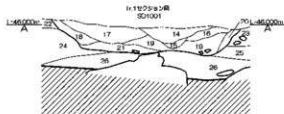
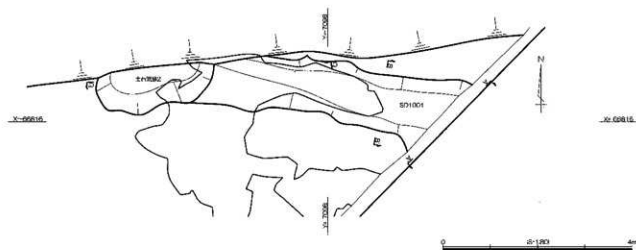
**遺構の性格と帰属時期** 溝である。帰属時期は出土遺物から古墳時代前期と推測する。



遺物図1 SD1001出土遺物

遺物観察表1

遺物番号	調査区	遺構番号(刃渡番号)	遺物種別	調査番号	種別	重量(gm/g)	特徴	粘土/材質	肌色	備考
1	1	SD1001(1001)	1	46	土師器	調査3.0~	外周:11層部~肩部ナデ 内周:口縁部~腹部ナデ、裏部ケズリ	埴土	黄褐色	11層~12層



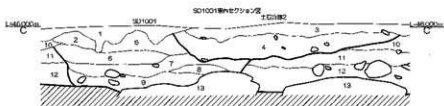
SD1001 A-A 上層断面表

図号	JIS notation 土名	土質	説明文
14	20YR2/1 黒褐色	シルト	SD1001層上、粘土質シルト少量、 黒褐色シルト少量、粘粒やや多い、 粘り軟質
15	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	SD1001層上、粘土質褐色砂 質シルト少量、粘り軟質、粘りあり
16	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	SD1001層上、黒褐色シルト30%、 粘土質、粘り軟質
17	10YR3/1 褐色	シルト	SD1001層上、14層よりやや硬質、 粘土質シルト少量、粘性あり
18	2.5Y2/2 黄褐色	砂質シルト	SD1001層上、黒褐色シルト少量、 粘性あり、粘り軟質
19	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	SD1001層上、黒褐色シルト少量、 粘性あり、粘り軟質
20	10YR5/2 暗灰黄色	中粒砂	SD1001層上、黒褐色シルト少量、 粘り軟質
21	10YR5/2 暗灰黄色	中粒砂	SD1001層上、黒褐色粘土質シルト 少量、10cm以下の小礫少量、 粘性やや弱い、粘りやや軟質

※ A-A'の1層及び23-24-25-26層の土層観察は「図表未掲載」に併記。

SD1001 B-B 上層断面表

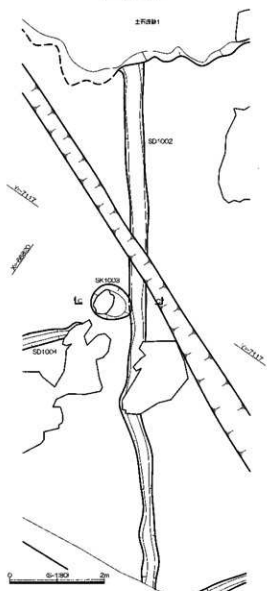
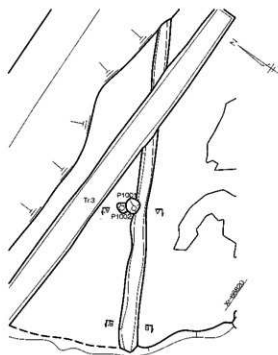
図号	図号	JIS notation 土名	土質	説明文
SD1001	1	2.5YR3/1 暗褐色	シルト	厚さ5cmの粘土質
SD1001	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	厚さ5cmの粘土質、 粘性あり、粘りあり
SD1001	3	2.5YR2/3 黒褐色	粘粒砂 砂質シルト	厚さ5cmの粘粒少量、 粘性あり、粘りあり
SD1001	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	厚さ5cmの粘土質、 粘性あり、粘りあり
SD1001	5	10YR2/1 褐色	砂質シルト	厚さ5cmの粘土質、 粘性あり、粘りあり
SD1001	6	10YR3/1 褐色	シルト	厚さ5cmの粘土質、 粘性あり、粘りあり
SD1001	7	10YR2/1 褐色	シルト	厚さ5cmの粘土質、 粘性あり、粘りあり



SD1001 C-C 上層断面表

図号	図号	JIS notation 土名	土質	説明文
図表	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
図表	2	10YR2/1 黒褐色	シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
図表	3	2.5YR3/3 暗褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
土石遺構	4	2.5YR3/3 暗褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	5	2.5YR3/3 暗褐色	シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	6	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	7	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	8	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	9	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	10	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	11	10YR4/3 灰黄褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	12	10YR5/6 中粒砂	中粒砂	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質
SD1001	13	2.5YR3/1 褐色	砂質シルト	図表、暗褐色シルト少量、 粘り軟質

図7 SD1001遺構図



■ SD1002(図8、写真図版2)

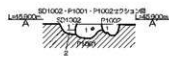
位置 第1面B51・52、C50・51グリッドに位置する。  
道構確認面の標高は45.857mである。

検出状況 試掘調査で確認された溝で、近世耕作土直下を検出面とする。溝の延長は両端とも調査区外へ延びる。2区SD2015につながる可能性がある。

平面形状・規模 平面形は細長い帯状で、残存長19.702m・幅0.397mを測る。断面形は箱掘りに近い逆台形で、確認面からの底面までの深さは最深で0.166mである。北西の八東川とほぼ平行して掘られている。溝の底面レベルは北東から南西に下がる。

埋土 上層は、黒褐色粘土質シルトを主体とする。下層は暗褐色砂質シルトを主体とする。

出土遺物 土器細片26点が出土した。うち1点が、



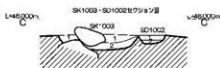
SD1002 A-A 土層縦断表

遺物番号	層番号	JIS notation 土名	性状	記入内容
SD1002	1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト20%、暗褐色砂質シルト10%、小礫少量、粘性あり、締りあり
SD1002	2	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト15%、暗褐色粘土質シルト微量、粘性あり、締りやや硬質
P1001	1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト25%、暗褐色粘土質シルト10%、小礫少量、粘性あり、締り弱
P1002	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘土質シルト20%、黒色シルト少量、粘性やや弱い、締りあり



SD1002 B-B 土層縦断表

遺物番号	層番号	JIS notation 土名	性状	記入内容
SD1002	1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト20%、黒褐色粘土質シルト10%、小礫少量、粘性あり、締りあり
SD1002	2	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト15%、暗褐色粘土質シルト5%、粘性あり、締りやや硬質



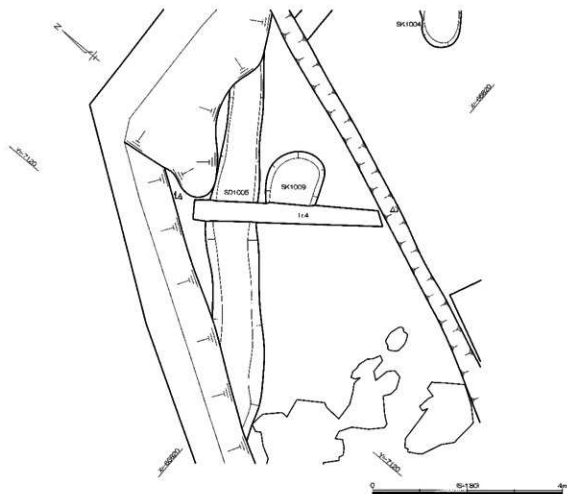
SD1002 C-C 土層縦断表

遺物番号	層番号	JIS notation 土名	性状	記入内容
SD1002	1	10YR2/1 褐色	シルト	土器片少量、黒褐色粘土質シルト25%、粘性あり、締りあり
SD1002	2	10YR2/1 褐色	シルト	黒褐色粘土質シルト10%、砂粒・小礫少量、粘性あり、締り弱
SK1003	1	7.5YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径37mmの小礫1、小礫少量、黒褐色粘土質シルト20%、粘性あり、締りあり
SK1003	2	7.5YR3/2 暗褐色	砂質シルト	小礫少量、黒褐色シルト10%、粘性あり、締りあり

図8 SD1002遺構図

古墳時代前期の甕の口縁部破片である。

遺構の性格と帰属時期 溝である。帰属時期は出土遺物から古墳時代前期以降と推測する。



SD1005-SK1009(中心)土層横断表

遺構番号	層番号	土層名	土質	記入内容
SD1005	1	10YR4/1 褐色	砂質シルト	硬質黄土、付随砂水の混入、小礫混入、粘土あり、腐りあり
	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	粘土付砂層、伊紀砂・粘砂約20%、上に5cm厚土層かつ粘土混入、20%中や強い、腐りあり
SD1009	3	10YR2/1 黒褐色	砂質シルト	SD1005層上、赤土層付く少量、褐色・灰色砂粘層、粘土あり、腐りあり
SD1005	4	2.5Y4/2 緑灰色	シルト	SD1005層土、赤土層付く少量、褐色・灰色砂粘層、粘土あり、腐りあり

遺構番号	層番号	土層名	土質	記入内容
SK1009	5	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	SK1005層上、褐色・灰色砂粘少量、粘土混入、腐りあり
	6	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	褐色シルト・ブロック・粘土層、粘土混入、腐りあり
	7	2.5YR2/2 黒褐色	砂質シルト	砂粘層付、厚さ10cm程度の少量、粘土混入、腐りあり
	8	10YR4/4 褐色	粘砂粘	粘砂粘、厚さ10cm程度の少量、粘土混入、腐りあり
	9	2.5R5/4 黄褐色	中位砂	粘砂粘、褐色・灰色砂粘少量、粘土混入、腐りあり

図9 SD1005-SK1009遺構図

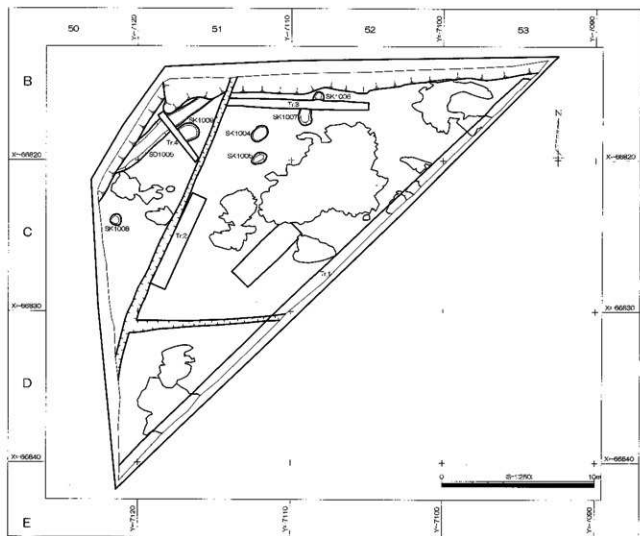


図10 1区 第4面平面図

■ SD1005(図9、写真図版3)

**位置** 第4面 B50・51、C50・51 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 45.599m である。

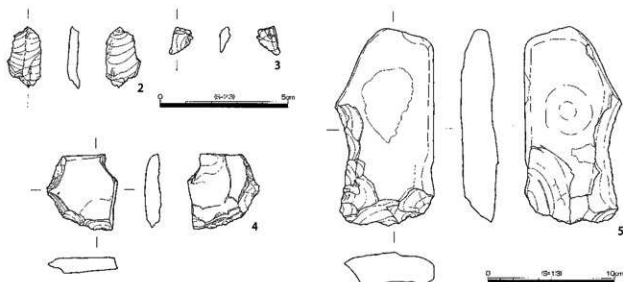
**検出状況** 1区北西側に Tr.4 を設定し土層堆積状況を確認したところ、溝の断面と思われる落ち込みを確認した。第3面の確認面となっていたにぶい黄褐色粘土粒混じりの黒褐色砂質シルト層は、河川氾濫等による洪水性の堆積層であり、同時に弥生～古墳時代遺物包含層であった。SD1005はこの層の直下で検出され、また SD1005 の東側には楕円形の落ち込み SK1009 が並存する。

**平面形状・規模** 平面形は帯状で、残存長 8.100m・幅 1.040m を測る。断面形は逆台形に近い形状で、確認面からの遺構底面までの深さは 0.275m である。調整痕等は確認できない。溝の底面レベルは南から北へ下がる。

**埋土** 埋土は上層が黒褐色砂質シルトを主体とし、下層は暗灰黄色シルトを主体とする。全体に褐色砂粒・灰色砂粒を含む。

**出土遺物** 弥生時代の土器片 32 点が出土した。いずれも細片であるが、うち 1 点は弥生時代終末期の甕の口縁部である。

**遺構の性格と帰属時期** 溝である。出土遺物と検出面から弥生時代終末期以降と推測する。



遺物図2 1区 抽出遺構外出土遺物

遺物観察表 2

遺物番号	遺物種別	遺構番号 (調査番号)	遺物種別 番号	図記 番号	種別 図記	重量 (mg/g)	特徴	胎土/材質	焼成 色相	備考
2	1	十石塚跡1 (1000)	2	46	石製 断片	長さ 2.4 幅 1.3 厚さ 0.4 重さ 1.1		高塚石	黒	
3	1	C51 断片十	2	46	石製 断片	長さ 1.1 幅 0.8 厚さ 0.4 重さ 0.2		高塚石	黒	
4	1	C51 Tr.2	2	46	打製 不明 未製品	長さ 5.6 幅 8.0 厚さ 1.25 重さ 2.58	打製 断片を素材とし、両面する異種部分に磨打により 穴を穿る	灰白 (新築二紀)	灰	外周のみ半円形石器 1の磨打り段階での磨 擦品か
5	1	B51 第4層 黒褐色土	2	46	石製 石片	長さ 15.65 幅 7.7 厚さ 2.5 重さ 494.0	打製 扁平な器を素材とする 一断面、対面を磨打により成形	灰白 (新築三紀)	灰白	

表 2 1区 遺構一覧表

遺構番号	遺構種別 し番号	遺構名称	期	Grid	平面形	用途	長軸 (m)	短軸 (m)	遺構面からの 高さ (m)	出土	備考
遺	1002	遺構区画	1	B51・52 C51	遺構状	遺構	17.600	2.680	0.077	赤褐色砂粘土・中粒砂土	不詳鉄製、近代
F1001	1014	ビット	2	B52	円形	円形	0.336	0.301	0.159	黒色シルト土体、灰口内鉄製	P1002に穿られる。SD1002を穿る。 磨削なし
F1002	1015	ビット	2	B52	円形	円形	0.260	0.226	0.100	黒色シルト土体、灰口内鉄製	P1001を穿る
石製・磨削土	1003	石製・磨削土	2	B51・52 C51・52	石製・磨削土 磨削土・石片	磨削土	13.050	2.180	0.370	赤褐色砂シルト土体	磨削の1層と磨削土、磨削土系付片 付、遺物
磨削土 1	1016	磨削土	2	B50・51	磨削土	磨削土	7.500	0.300	0.243	黒褐色砂シルト土体	磨削なし
磨削土 2	1017	磨削土	2	B50・51	磨削土	磨削土	5.600	0.320	0.088	黒褐色砂シルト土体	磨削なし
SK1001	1007	土片	3	C51	円形	磨削土	1.130	0.909	0.069	赤褐色砂シルト土体、径 5~15cmの塊	磨削土・土片
SK1002	1008	土片	3	D51	磨削土	磨削土	1.078	0.680	0.296	黒褐色砂シルト土体、径 5~30cmの塊	磨削土・土片
SK1003	1012	土片	3	C51	円形	磨削土	0.975	0.732	0.196	黒褐色砂シルト土体	磨削なし
SB1001	1001	溝	3	B52・53	遺構状	溝	6.073	1.508	0.254	上層・赤褐色シルト土体、下層・黒色シルト土体 粘土質	土の断面 2に穿れる。磨削土系付片 に穿れる。遺物時代1層と遺物時代以下に 遺物
SB1002	1005	溝	3	B51・52 C50・51	遺構状	溝	19.702	0.397	0.160	黒褐色砂シルト土体	遺物時代1層と遺物時代土片 2点
SD1003	1009	溝	3	B50・51	遺構状	溝	0.194	0.100	0.050	黒褐色砂シルト土体	磨削なし
SD1004	1010	溝	3	C50・51	遺構状	溝	2.227	0.313	0.065	黒褐色砂シルト土体、径 0.5~3cmの塊	磨削なし
土器断片 1	1006	土器断片	3	B51 C51・52	磨削土	磨削土	5.940	1.660	0.434	黒褐色砂シルト土体、磨・磨削あり	赤褐色が確認
土器断片 2	1011	土器断片	3	B52	磨削土	磨削土	2.560	0.860	0.210	赤褐色砂シルト土体、磨削あり	SD1001を穿る
穴	1013	溝	3	B51 C51	遺構状	溝	---	---	---	---	---
SD1005	1024	溝	4	B50・51 C50・51	遺構状	溝	6.100	1.040	0.275	黒褐色砂シルト土体、径 5~30cmの塊	遺物時代1層と遺物時代土片 3点
SK1004	1018	土片	4	B51	磨削土	磨削土	1.240	0.820	0.172	赤褐色砂シルト土体、黒色シルト 10%、灰口 内鉄製	遺物時代1層、磨削土
SK1005	1019	土片	4	B51・ C51	磨削土	磨削土	1.080	0.720	0.168	黒褐色砂シルト土体	遺物時代1層、磨削土
SK1006	1020	土片	4	B52	磨削土	磨削土	0.680	0.520	0.769	赤褐色砂シルト土体、径 0.5~5cmの塊 赤褐色砂シルト土体、径 0.5~2cmの塊 赤褐色、赤褐色砂シルト土体、黒色シルト 付	磨削なし
SK1007	1021	土片	4	B52	磨削土	磨削土	1.100	0.820	0.285	赤褐色砂シルト土体、径 0.5~3cmの塊	磨削なし
SK1008	1022	土片	4	C50	磨削土	磨削土	0.780	0.760	0.061	赤褐色砂シルト土体、黒色シルト付	磨削なし
SK1009	1023	土片	4	B51	磨削土	磨削土	1.180	1.140	0.201	黒褐色砂シルト土体、径 0.5~3cmの塊	磨削なし



## 第2節 2区遺構と遺物

2区は発掘調査対象区のほぼ中央、1区と3区の間位置する。調査地の形状は東西に長い長方形である。調査はトレンチ確認調査を含め3面にわたっておこなった。

### 第1項 2区基本層序

2区調査に先立ち、八頭町教育委員会発掘調査監理者の指示の下でトレンチ調査をおこなった。試掘調査ではどうしてもスポット確認になってしまう。本調査区周辺では、遺物包含層の厚さに差があることが予想される中、地層の対応関係が不明瞭とのことであった。このため、地層の繋がりや遺物包含層の確認及び調査方針の検討が必要になった。

**トレンチ設定** 地層の連続性を確認することを主目的とし、調査区外周と中央にロングトレンチを設定した。最初に南部を東西に縦断する60mの長さのTr.1を設定した。本来は調査区南壁沿いに設定する予定であったが、新設されたU字溝の掘方を避けるために、調査区内に3m寄せて設定することにした。これを起点として、Tr.1中央にこれと直交する南北方向のTr.2を、西壁沿いにTr.3を、北壁沿いにTr.4を設定した。表土剥ぎ終了後、東壁沿いにTr.5を設定し、遺物包含層の連続性と遺構・遺物の遺存状態を確認した。

**層序設定** 地層の断面観察は、土色・土質・締り具合・混人物、及び堆積構造に注意しながら分層した。細分された単位のうち、時代・堆積環境・調査面等の違いなど共通性を示す範囲でグループとした。調査時は現代から順に“第〇層”として第1層～第10層までの層序名を付した。遺物取り上げや写真撮影等、記録に関わる層呼称にはこれを使用した。報告書作成にあたり、調査区名を頭に付し2-1層から2-10層とした。

**遺物包含層と調査面** 調査区内の広範囲に薄く水平に堆積する褐色砂質シルト(2-6層)には、微細な弥生土器・土師器片が一定量含まれていた。このため、最初に調査すべき遺物包含層と認定した。この2-6層掘削及びその除去面における遺構検出・調査までを第1面調査とした。2-6層の下には、同じく遺物が含まれる2-7層がある。北から南にかけて下がる堆積層で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物包含層であることを確認した。2-7層掘削及びその除去面における遺構検出・調査までを第2面調査とした。さらに下位の2-8層は基本的に無遺物層であったが、検出漏れ遺構の確認のために別途トレンチ調査を実施した。Tr.10～Tr.15までのトレンチの設定、最終基盤層である2-9層・2-10層までの掘削及び遺構検出・調査までを第3面調査とした。

**セクション図** Tr.1～Tr.5のセクション図を図12～14に掲載する。地層名と基本層序の対応は土層観察表を参照。

**基本層序**(図11～14、表3、遺物図3・4、遺物観察表3・4、巻頭図版6、写真図版4・5・46～48)

**攪乱** 本体工事(県道河原インター線道路改良工事)に伴う盛土層。調査地内に既に施工されているU字溝・埋設管等の水利施設施工のための整地・攪乱・盛土層等。ブロック土を多量に含む攪乱層で締りが弱いのが特徴。

**2-1層(第1層)** 黒色極細粒砂を主体とする土壌層、耕作土と考えられる。本体工事前の現地表面に形成されていた現代の水田耕作土である。今回の調査では現代耕作上の除去後に調査地の引き渡しを受けているが、調査区中央部(Tr.2セクション)において一部残存を確認した。本来の表土と考え

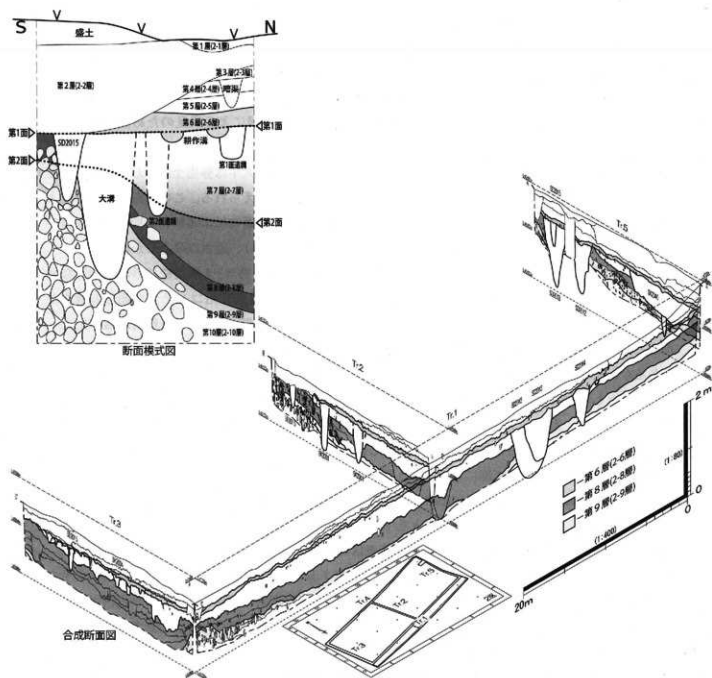


図11 2区断面模式図

られるうえ、2-2層との層序関係が判明したため層序に組み込んだ。

**2-2層（第2層）** ブロック土と礫を含む、硬く締った灰色砂質シルトを主体とする攪乱層。圃場整備時の攪乱及び整地層である。調査地全域に普遍的に存在する当層は、少なからず下位層を攪乱している。攪乱深度は基盤層(2-10層)が高くなる北に向かって深くなり、部分的に無遺物層である2-9層にまで達する。

**2-3層（第3層）** 黄灰色細粒砂を主体とする土壌層である。2-2層の攪乱のため残存状況は悪く、2区東端にしか残存しない。特徴として砂粒の均等な分布と、層下面がほぼ水平に揃い下位層とは明瞭に分層されることが挙げられる。この解釈として、砂粒の均等分布は層中がよく攪拌されたことを、明瞭な層界はその攪拌の底を示すものと考えられる。これが水平方向に続くことから、当層の形成要因は一定の攪拌行為の結果と推定される。したがって、当土壌層は耕作土の可能性が高いと考えられ

る。時期を判断しうる遺物は確認できなかったが、2-2層及び後述の2-5層の時期所見から考えて、近現代の耕作土と推定される。

2-4層(第4層) オリーブ黒色砂質シルトを主体とする土壌層である。2-3層と同様に砂粒の均等な分布と、ほぼ水平に揃う層下面から耕作土と考えられる。上位層による攪乱のため残存状態は悪く、調査区南西部に一部残存するのみである。遺物量は希薄であり、全て表面摩耗の進んだ細片遺物である。これは耕作土内特有の出土状況といえる。これらの土器の大半は弥生土器もしくは土師器と推定され、元は遺物包含層である下位の2-7層に帰属していたと考えられる。この状況は、耕作による巻き上げ遺物が長期にわたる耕作を受けたことを示すに過ぎず、遺物による耕作時期判断は困難である。したがって、当層の耕作時期は下位の2-5層の時期所見を受け、近世以降としかいえない。

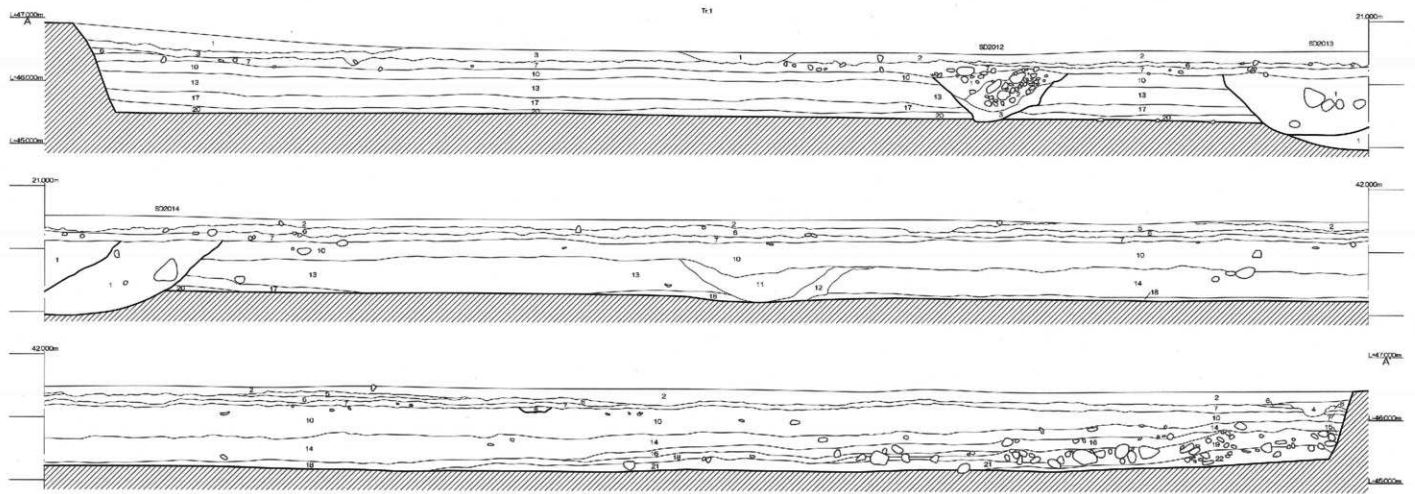
2-5層(第5層) 褐灰色砂質シルトを主体とする土壌層である。第3・4層同様に砂粒の均等な分布と、ほぼ水平に揃う層下面から耕作土と考えられる。層中からは整理用コンテナ2箱分の遺物が出土した。弥生土器・土師器に混じりわずかながら須恵器類(古墳時代後期)・旋輪陶磁器が出土したことから、2-5層耕作時期は近世以降と判断される。土器類は上位耕作土と同じく表面摩耗が顕著であるが、破片サイズはやや大きくなる傾向にある。これに対して下位層との比較では、同時期の遺物を主体としながら破片サイズが細くなっている。これは、2-5層耕作行為が下位層を大きく攪乱したことを示す。21・22は碧玉製の管玉である。穿孔部に特徴がみられる。孔は円錐状、片側からの穿孔であり、貫通時に生じた割れ円錐を研磨し面を整える。

調査時は2区中央部から東部にかけて2-5層の掘削調査を実施した。本来は2-6層との遺物の差別のための掘削であったが、東端部において南北方向の耕作溝を1条確認した。

2-6層(第6層) 黒色極細粒砂～シルトを主体とする土壌層である。層相は下位層の土質を少なからず反映しており、古い時期の高まりである調査区北東部では粒度が高く礫が含まれるようになる。薄いながらも2区全域で広く確認される層であり、各トレンチの断面観察からは当層が概ね水平方向に形成されているのが確認できる。ほぼ水平に揃う層下面が広域に確認されることから耕作土の可能性が高いと考えられる。同じ耕作土である直上の2-5層との分層根拠は、暗色の強さと遺物含量の多さである。層中からは整理用コンテナ6箱分の遺物が出土した。包含される遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器を主体とし、わずかに古墳時代後期に属する須恵器も認められる。また、破片の大きさも2-5層に比較して大きなものが多い。帰属時期を決定できる遺物がなく調査所見からは2-6層耕作時期は古墳時代後期以降近世以前としかいえない。2-6層は、2区で確認しうる最も古い段階の耕作土である。7は碧玉製の管玉である。孔内に段がみられ、両面からの穿孔であることがわかる。単独出土である。

調査時は一定の遺物量が見込まれることから遺物包含層として掘削調査し、この2-6層除去を第1面として調査を行った。第1面で検出した複数条の小溝は2-6層を埋土とし等間隔に並行することから耕作関連遺構と考えられ、2-6層が耕作土であることの裏付けとなった。

2-7層(2-7層) 灰黄褐色中粒砂～極細粒砂を主体とする堆積層である。締りが弱く粘性に富む。2区北東部を除く全域に堆積しており、北東部から中央部にかけて南西方向に下がり、それに伴って層厚は厚くなる。中央部～南西部が最も深く、南西端にかけては再び上がる。堆積状況を各トレンチの断面から復元すると2区南東から北西方向に延びる溝状の大きな落ち込みが想定され、2-7層はそれを充填する堆積層と理解される。層上部には植生攪乱とみられる不明瞭・不定形な暗色土のブロック



Tr.1 土層観察表

層番号	JIS番号 土名	土名	記入内容	層上特徴
1	次オリーブ色 シルト	細粒砂 シルト	灰化・腐植質 シルト	腐植質 シルト
2	5Y5/1 灰色	砂質 シルト	灰化・腐植質 シルト	腐植質 シルト
3	2.5Y5/1 黄灰色	細粒砂	腐植質 シルト	腐植質 シルト
4	2.5Y5/1 灰色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
5	オリーブ灰色 シルト	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
6	10Y5/1 灰色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
7	10Y5/2 灰色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
8	10Y5/1 黒褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
9	10Y5/2 黒褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
10	10Y5/2 黒褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
11	10Y5/2 黒褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
12	2.5Y5/2 黄褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
13	2.5Y5/1 黄褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
14	2.5Y5/1 黄褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト

S2012-S2013-S2021(Tr.1) 土層観察表

層番号	JIS番号 土名	土名	記入内容	層上特徴
15	2.5Y5/1 黄褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
16	10Y5/2 灰色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
17	2.5Y5/2 黄褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
18	2.5Y5/2 黄褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
19	2.5Y5/2 黄褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
20	2.5Y5/4 黒褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
21	2.5Y5/4 黒褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト
22	2.5Y5/4 黒褐色	砂質 シルト	腐植質 シルト	腐植質 シルト

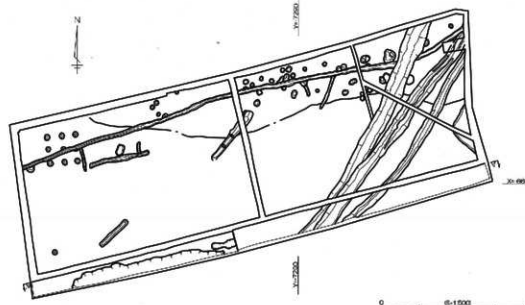
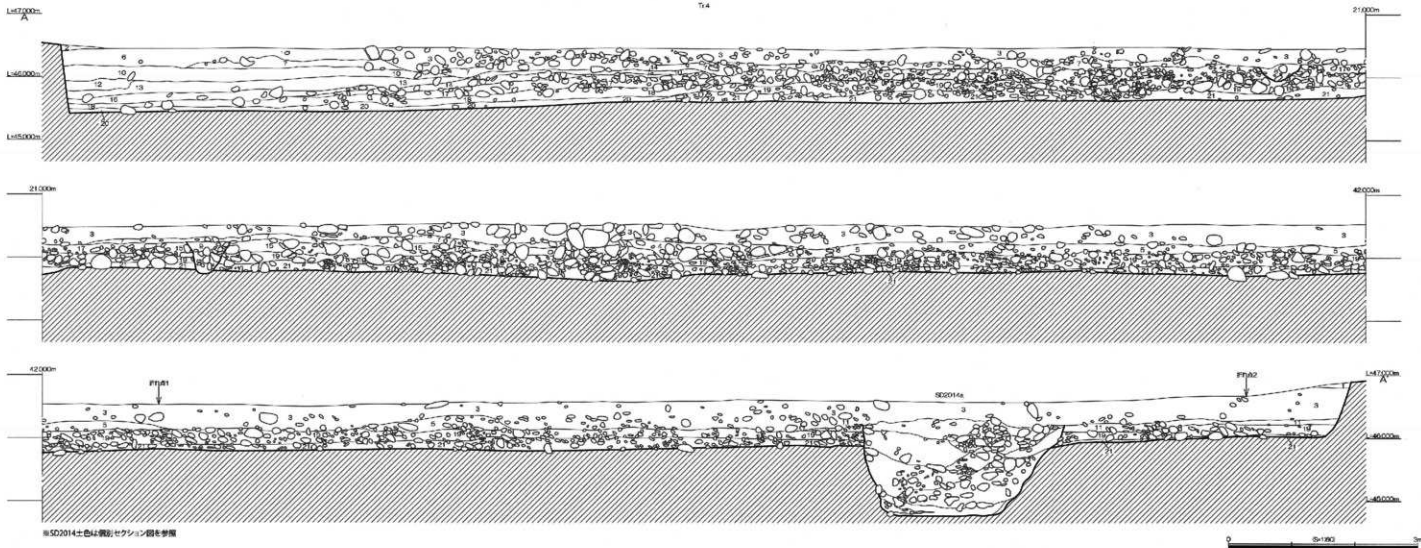


図2 2区 Tr.1セクション図



Tr.4土層観察表

層番号	土名	土質	主な特徴	地土分類
1	2.5V1/1	細粒砂	現代-近上	低汎
	黄褐色		層底2m以下の砂少量、細粒砂質	
2	5V1/2	細粒砂～シルト	現代-近上及び埋戻	低汎
	灰オリーブ色		層底2m以下の砂・ブロック土少量	
3	5V1/1	砂質シルト	現代-1/4埋戻り	低汎
	灰色		層底2m以下の砂・ブロック土少量	
4	5V1/1	砂質シルト	現代-1/4埋戻り、層底20m以下の砂多量	低汎
	灰色		ブロック土少量、砂質砂質	
5	5V1/1	中粒砂～細粒砂	現代-1/4埋戻り、L1/L2埋戻り層埋戻り	低汎
	灰色		層底20m以下の砂少量	
6	5V1/1	砂質シルト	現代-埋戻り層埋戻り	低汎
	灰色		層底20m以下の砂少量、細粒砂質	
7	5V1/1	砂質シルト	埋戻り層埋戻り	低汎
	灰色		層底20m以下の砂少量	
8	19V12/2	埋戻り層埋戻り	埋戻り層埋戻り、埋戻り砂～中粒砂中量	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の砂少量	
9	19V12/2	埋戻り層埋戻り	埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の砂少量	
10	2.5V2/1	中粒砂～粗粒砂	現代-埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の埋戻り層	

層番号	土名	土質	主な特徴	地土分類
11	2.5V2/1	粗粒砂	古土埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		～シルト、層底20m以下の埋戻り層	
12	19V12/1	埋戻り層埋戻り	古土埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の埋戻り層	
13	2.5V1/1	粗粒砂	現代-埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		～シルト、層底20m以下の埋戻り層	
14	2.5V1/1	粗粒砂	現代-埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の埋戻り層	
15	2.5V1/1	粗粒砂	現代-埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の埋戻り層	
16	19V12/1	埋戻り層埋戻り	古土埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		～シルト、層底20m以下の埋戻り層	
17	2.5V2/1	粗粒砂	古土埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		～シルト、層底20m以下の埋戻り層	
18	2.5V1/2	粗粒砂	現代-埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の埋戻り層	
19	2.5V1/2	粗粒砂	現代-埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の埋戻り層	
20	2.5V1/4	粗粒砂	現代-埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の埋戻り層	
21	2.5V1/4	粗粒砂	現代-埋戻り層埋戻り	埋戻り層
	黄褐色		層底20m以下の埋戻り層	

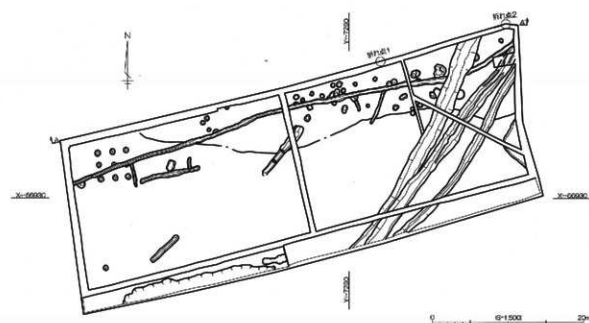
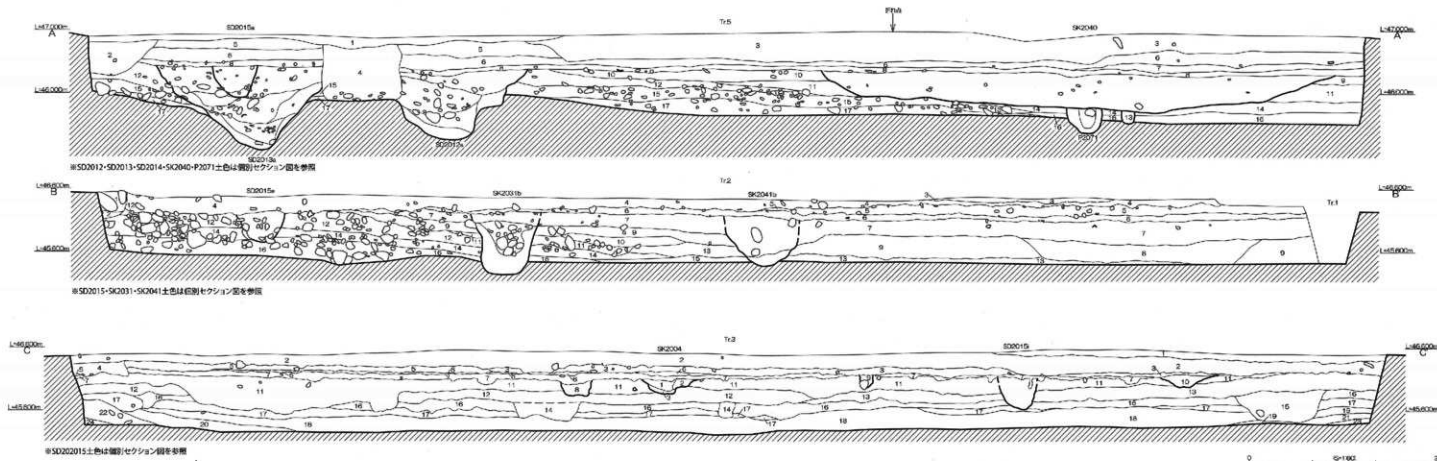


図13 2区 Tr.4セクション図



Tr.5 土層調査表				Tr.2 土層調査表				Tr.3 土層調査表				SK20041a以上層位調査表			
層番号	深さ(m)	土質	取込内容	層番号	深さ(m)	土質	取込内容	層番号	深さ(m)	土質	取込内容	層番号	深さ(m)	土質	取込内容
1	2.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	1	灰白色	砂質シルト	現代~近代上層部	1	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	1	2.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部
2	0.070/1	灰白色	現代~近代上層部	2	灰白色	砂質シルト	現代~近代上層部	2	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	2	2.070/2	黄砂質シルト	現代~近代上層部
3	0.070/1	灰白色	現代~近代上層部	3	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	3	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	3	2.070/3	黄砂質シルト	現代~近代上層部
4	2.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	4	灰白色	砂質シルト	現代~近代上層部	4	2.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	4	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部
5	0.070/1	灰白色	現代~近代上層部	5	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	5	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	5	2.070/4	黄砂質シルト	現代~近代上層部
6	2.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	6	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	6	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	6	2.070/5	黄砂質シルト	現代~近代上層部
7	0.070/1	灰白色	現代~近代上層部	7	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	7	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	7	2.070/6	黄砂質シルト	現代~近代上層部
8	0.070/1	灰白色	現代~近代上層部	8	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	8	2.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	8	2.070/7	黄砂質シルト	現代~近代上層部
9	0.070/1	灰白色	現代~近代上層部	9	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	9	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	9	2.070/8	黄砂質シルト	現代~近代上層部
10	0.070/2	黄砂質シルト	現代~近代上層部	10	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	10	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	10	2.070/9	黄砂質シルト	現代~近代上層部
11	0.070/2	黄砂質シルト	現代~近代上層部	11	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	11	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	11	2.070/10	黄砂質シルト	現代~近代上層部
12	0.070/2	黄砂質シルト	現代~近代上層部	12	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	12	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	12	2.070/11	黄砂質シルト	現代~近代上層部
13	0.070/2	黄砂質シルト	現代~近代上層部	13	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	13	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	13	2.070/12	黄砂質シルト	現代~近代上層部
14	0.070/2	黄砂質シルト	現代~近代上層部	14	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	14	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	14	2.070/13	黄砂質シルト	現代~近代上層部
15	2.070/2	黄砂質シルト	現代~近代上層部	15	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	15	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	15	2.070/14	黄砂質シルト	現代~近代上層部
16	2.070/2	黄砂質シルト	現代~近代上層部	16	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	16	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	16	2.070/15	黄砂質シルト	現代~近代上層部
17	2.070/4	黄砂質シルト	現代~近代上層部	17	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	17	0.070/1	黄砂質シルト	現代~近代上層部	17	2.070/16	黄砂質シルト	現代~近代上層部

図14 2区 Tr.5-Tr.2-Tr.3セクション図

が散見される。また、これとは別に層下部に向かって部分的に暗色の濃淡がみられ土層詳細観察は困難である。土質的には層下部に向かって粒度がやや高くなる傾向がある。一定の厚さの中に明瞭な分層単位を見出せないことから、連続性の強い自然堆積層と思われる。

層中の遺物量は非常に多い。整理用コンテナ約13箱分の遺物が出土した。特筆すべきはその出土状況で、接合関係を持つ破片が狭い範囲に集中したり、完形に対して50%を超えるような大きな破片単独で出土したりする。そのような遺物の出現頻度は高くはないが、このことは埋土と基盤層が類似するために検出できない遺構が存在する可能性を示している。

16は十器転用の土製紡錘車である。甕もしくは壺の破片を円形に整え、中央に表裏から穿孔する。17は緑色岩製の石製製造品、剣を模ったものとみられる。表面を研磨により平滑に仕上げる。上部の2か所の孔は穿孔途中、未製品である。10は注口土器、壺形土器の肩部に長く細い注口が付く。外面と頸部内面を精緻なミガキで仕上げる。11・12は同位置から出土した蓋と甕である。口径が一致することからセットの可能性がある。15は高環、坏部外面上半部に2段のスタンプ文で飾られる。上段はS字状文、下段は三角形をモチーフとする文様である。正三角形と列点を組み合わせた特異な文様である。特に三角スタンプは他に類例がなく、当遺跡(集落)オリジナルの文様の可能性が高い。

調査時は、2・7層を遺物包含層として包含層掘削し、その除去面を第2面として調査を行った。

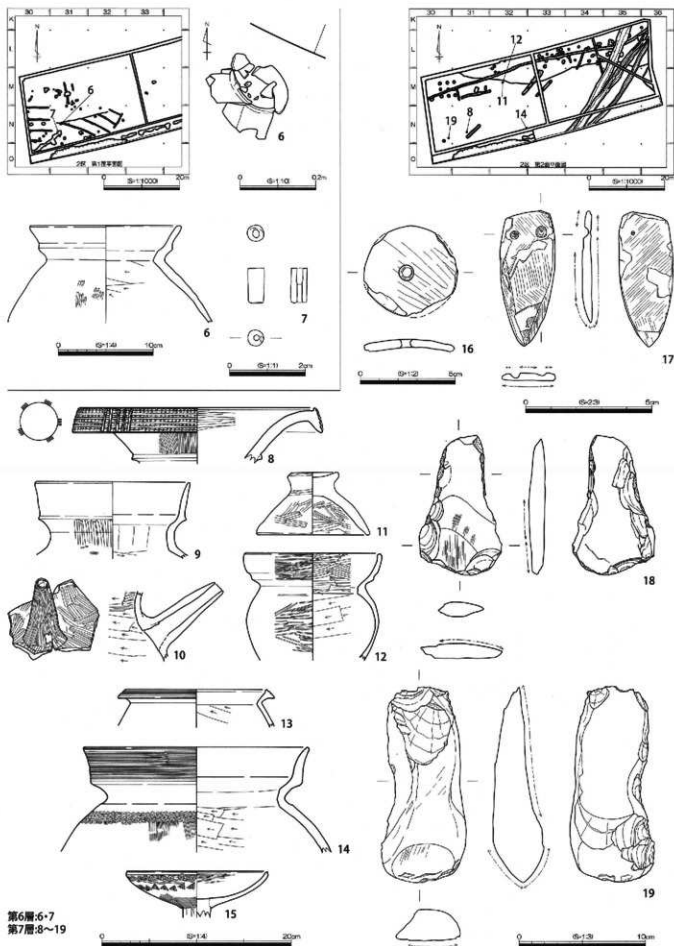
2・7層の遺物の山上傾向をみるために、甕口縁部と底部について分類・統計処理を行った。甕口縁部はその立ち上がり部の形態変化・施文の消長を、底部は平底から丸底への一連の形態変化を、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期的要素と捉えた。統計結果からは、弥生時代後期後葉から終末期が主体を占める中で、弥生時代後期前葉から中葉の要素を持つ破片が一定量含まれる点が注目される。少数ながら古墳時代前期に属するとみられる個体も存在するが、これらは先に述べた検出漏れ遺構に属する可能性が高いと考える。統計結果からは2・7層の堆積時期は弥生時代後期前葉から終末期後半までとするのが妥当と思われる。ただし、調査によって確認できる遺構時期は基本的に弥生時代後期後葉以降であり、一部後期中葉にまで遡る可能性のあるものもある。これにより、先の分類による時期区分からは2・7層堆積時期と遺構との時期的重複が少なからず発生してしまう。この理由についての明確な方向性は示せない。検出漏れ遺構が相当数存在することを示すものかもしれないし、遺構に含まれる遺物が2・7層山來の混入遺物である可能性もある。あるいは、この時期設定や分類基準にそもそもの問題があるのかもしれない。いずれにせよ、遺物包含層と見えざる遺構に対する考え方に対する大きな課題であることに変わりはない。

表3 2区2・7層(第7層)出土土器分析表  
甕口縁部

口縁形態(類)	時期区分(要素)	破片数	比率
A・B	弥生時代後期 前葉～中葉	58	11.7%
C・D・E	弥生時代後期 後葉～終末期	406	81.7%
F	古墳時代前期～	33	6.6%
合計		497	100.0%

底部

底部形態	時期区分(要素)	底割数	比率
平底	弥生時代後期前葉 ～終末期	31	21.5%
尖底指向	弥生時代終末期 ～古墳時代前期	94	65.3%
丸底指向	古墳時代前期～	19	13.2%
合計		144	100.0%



第6層:6~7  
第7層:8~19

遺物図3 2区 第6層・第7層出土遺物



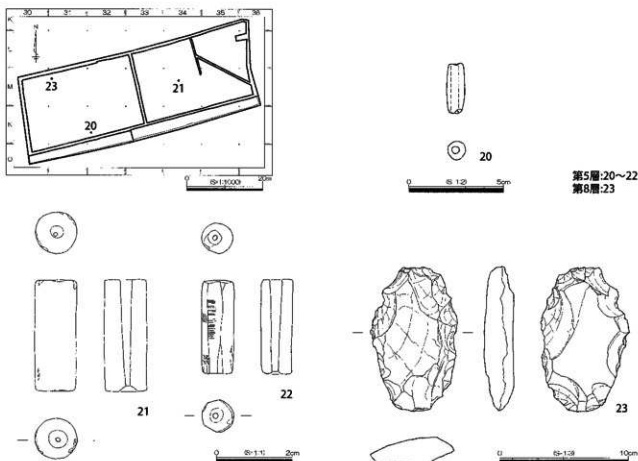
2-8層(第8層) 黒色中粒砂～シルトを主体とする上壤層である。位相によってさまざまな土質がみられるが、2-7層直下の暗色帯を土壌層の複数単位ととらえ2-8層として取り扱った。2-7層の下位に普遍的に存在するため、同様の標高変化が見られる。すなわち、北東部から中央部にかけて南西方向に落ち込み、中央部及び南西部にかけて最も深くなる。その後、南西端にかけては再び上がる。当層はその暗色の強さから旧地表面であった可能性が高く、上面の標高変化は、そのまま当時の旧地形を示していると考えられる。特に、2-8層最下層部にみられるひときわ暗色の強い土壌層は、下位の2-10層・2-9層に対応する表層部と捉えられる。土質的には側方へ連続的にして変化する特徴があり、礫の包含状況と充填物の粒度によって2種に大別した。これは標高差による土質の違いといえることができる。高地部での土壌は、暗色が強く礫質過多の傾向にあり層厚は薄い。礫の包含量は落ち込みに合わせて減少し、最終的にほとんどなくなってしまふ。礫のない低地部では、極細粒砂～シルトが主体とする土質に変化し、暗色はやや薄くなり、層厚及び粘性が増す。この違いは、高地部が離水していたのに対し、低地部は堆積が進行する環境下にあったことを示すものと考えられる。遺物については、2-8層からは石器(23)が一点出土したのみで土器類は皆無である。よって、その形成時期は弥生時代後期以前としかいえない。

遺物観察表3

遺物番号	所在区	遺物層(遺物番号)	遺物層番号	図記番号	種別	法量(cm/g)	特徴	粘土/材質	表成色調	備考	
6	2	N31 第6層	3	46	赤生土層 灰	口径:15.2 高さ:10.2～	外面:口縁部～胴部ナデ、体部ナデ・ミガキ 内面:口縁部ナデ、胴部～底部分ズリ	黄褐色 ～2mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色	胴部～体部にかけて 深みが大きい	
7	2	N31 第6層	3	46	石製品 管玉	長さ:6.9 幅:0.45 厚さ:0.4 重さ:0.2	河原砂 穿孔孔は石針、孔の断面は円形、孔内に陥凹あり、孔径2～1.5mm	灰白(赤褐色)	緑褐色	内面に1層	
8	2	N31 第7層	3	46	赤生土層 釜	口径:24.7 高さ:5.8～	外面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ミガキ 内面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色		
9	2	M34 第7層	3	46	土器類 甕	口径:18.0 高さ:8.0～	外面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ミガキ 内面:口縁部～胴部ナデ、胴部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～0.5mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色	内面に赤褐色	
10	2	T35 第7層	3	46	赤生土層 甕 (注1:土器)	注1:径:11	外面:胴部～体部・注口ミガキ 内面:胴部ナデ、体部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色		
11	2	M32 第7層	3	47	赤生土層 甕	つまみ径:4.8 高さ:8.6 口径:11.6	外面:つまみ部ミガキ、天井部ハケ後ミガキ、口縁部ナデ 内面:天井部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色		
12	2	K32 第7層	3	47	赤生土層 甕	口径:14.1 高さ:11.3～ 筒径:13.0	外面:口縁部ナデ後ミガキ、胴部ナデ、体部ナデ 内面:口縁部ナデ～胴部ナデ後ミガキ、胴部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～0.5mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色	外周僅量付着 C1類	
13	2	L36 第7層	3	47	赤生土層 甕	口径:(14.8) 高さ:3.9～	外面:口縁部ナデ後ミガキ 内面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色		
14	2	K32 第7層	3	47	赤生土層 甕	口径:(22.5) 高さ:11.1～	外面:口縁部ナデ後ミガキ、胴部ナデ、体部ナデ 内面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ミガキ、胴部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色	外周僅量付着 C1類	
15	2	N31 第7層	3	47	赤生土層 高杯	口径:14.8 高さ:4.9～	外面:口縁部ナデ後ミガキ、口縁部ナデ後ミガキ、口縁部ナデ後ミガキ、口縁部ナデ後ミガキ 内面:口縁部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色	スタンパ文字層	
16	2	M31 第7層	3	47	土製品 鉄鉢	径:4.0 厚さ:0.5	厚さ:5.4 幅:2.15 厚さ:0.4 重さ:0.2	外面:口縁部ナデ後ミガキ 内面:口縁部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色	土器類用品
17	2	M33 第7層	3	47	石製品 未製品	長さ:5.4 幅:2.15 厚さ:0.4 重さ:0.2	外面:口縁部ナデ後ミガキ 内面:口縁部ナデ後ミガキ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色		
18	2	M34 第7層	3	48	石類 石片	長さ:11.1 幅:8.55 厚さ:1.3 重さ:110.4	打製、両面磨き、両面に細かい割痕あり 断面、片割は直状、断面は木彫形	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色		
19	2	M30 第7層	3	48	石器 不明	長さ:15.5 幅:4.7 厚さ:4.0 重さ:47.8	一端に細い紐状痕、線痕あり 両端、一端に細い紐状痕あり	黄褐色 ～1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 内面に赤褐色	石片未製品あるいは 用か	

調査時には2-8層は無遺物層と理解していたが、黒色上埋上の遺構を検出するために2区北東部においては2-8層除去面を第2面として調査を行った。

2-9層(第9層) オリーブ褐色中粒砂～極細粒砂を主体とする堆積層及び上壤層である。2-8層の直下に堆積しており、2-8層最下層とは地質的に一連の土壌単位と解釈される。調査では遺構検出面設定の都合上から2-8層とは区別して取り扱った。基本的に2-8層と同じく、高地部では礫質過多、低地部では細粒砂～極細粒砂が主体となる。この低地部の層中には普遍的に細礫が含まれている。これは八東川の氾濫に起因する堆積があったことを示しており、氾濫堆積物の供給と表層の土壌化を繰り返しながら層のかさ上げが進んだと考えられる。当層からは現時点では遺物は全く出土しておらず、その形成時期は不明である。



第5層:20～22  
第8層:23

遺物図4 2区 第5層・第8層出土遺物

遺物観察表 4

遺物番号	調査区	遺物番号 (調査番号)	遺物別 名称	数量	材質	経緯 (cm/g)	特徴	出土/材質	製造 位置	備考
20	2	N32 第5層	土製 土器	4	48	長さ 2.85 幅 0.95	外面:ナデ	層 ～1mmの砂粒 少ない	付着 外田・粘土層	
21	2	M34 第8層	石製 石斧	4	18	長さ 2.95 幅 1.1 厚さ 0.6	刃裏面は鋭針。空孔先端部に生じた割れ内面に研 磨調整。孔は透肉部系。割れ内面割削。孔径3 ～1mm	花山山脈系	花山	片割IIa類・割れ内面 研削
22	2	L35 第5層	石製 貫子	4	48	長さ 2.45 幅 0.85 厚さ 0.8 重さ 2.6	刃裏面 空孔裏面は鋭針。孔内表面は平滑。孔は透肉部系。 割れ内面研削。孔径3～1.5mm	花山山脈系	花山	片割IIa類・割れ内面 研削
23	2	M31 第8層	石製 石斧	4	48	長さ 11.4 幅 6.9 厚さ 2.4 重さ 211	刃裏 割れ内面を素材とし、刃縁部分を鋭行し整形	砂質貫子(新第2 区)	花	

調査時は2-9層以下を完全な無遺物層と判断し、最終基盤層として扱った。

2-10層(第10層) にぶい黄色粗粒砂を主体とする締りの強い堆積層である。包含される礫が特徴的で、径20cmを超える大礫の多さが特筆される。層の標高変化は2-8層・2-9層と同様で、高地部である2区北縁及び北東部では特に礫が大きく、多くなる(Tr.4・5・2セクション)。この礫質部の堆積構造は礫の間に砂が充填されるいわゆる礫基質となる。また、礫の覆瓦構造(扁平な礫の重なり方)からこれらが東から西にかけての流れの中で堆積したものと推定される。この流向は2区の北約50mに位置する現八東川のそれと一致する。これらの状況から2-10層の礫群は、八東川の旧河床であったと推定される。これに対して低地部では、礫が希薄となり、細粒砂～極細粒砂を主体とする砂質土が堆積する。

2-10層からの出土遺物は皆無である。2-9層と同じく完全な無遺物層であり、調査時は最終基盤層として扱った。

#### 基本層序まとめ・基本層序から復元される堆積及び土壌形成過程と調査における課題

2区において地質的・調査手法的見地から分類した基本層序について若干の考察を行うとともに、現代に至るまでの土地の形成過程を考えたい。

2区で確認されたうち最も古い堆積層は2-10層である。堆積層所見からは旧八東川の河床とされており、当時に形成された礫質部の高まりが後世まで大きな影響を及ぼしていることが判明した。ただし、周辺の地形形成の鍵となる2-10層の形成要因に関しては不明点と課題が多く残る。礫質部が旧八東川の流芯なのか縁辺の河原になるのかどうか、加えて、礫質部と砂質部標高差が大きくなる理由に関しては不明なままである。調査で確認できる範囲では礫質部が砂質部の下に潜り込むように見えることから低地部の底が一時の流芯であったと推定することもでき、砂質部は当時の流路内堆積物と捉えることもできるが、2-10層の底と礫の分布状況及びその下位層の含めた断面確認をしていないため確証はない。

2-9層から2-8層期にかけては、2-10層が形成した窪みを充填する局面と捉える事ができる。層中にはラミナなど自然堆積を示す構造は確認できず、土壌化がみられることからこの段階では流芯は移動していたと考えられる。

2-10層直上の2-9層は堆積性土壌層と判断されることから、地表化しつつもある程度堆積が進む環境下にあったと考えられる。堆積要因は八東川の氾濫に求めるのが自然であるから移動した流芯は未だ近くにあったと推定される。次の段階である2-8層期になると層の暗色化が顕著になることから、表層部は安定した地盤となり、堆積がほとんどない中で土壌化が進んだ結果と考えられる。ただし、この傾向は標高の高い礫質部で見られる状況であり、低地部ではやや状況が異なる。低地部の2-8層の厚さは引き続き堆積が進んだことを示している。最下層の一群は高地部と同様、顕著な暗色化がみられるが、その上位層では極細粒砂を主体とする土質となり暗色も弱くなる。したがって、この段階で環境が変化し低地部は湿地状態となっていた可能性が考えられる。

2-7層期は、地形的には前段階と同様、2-10層が形成した窪みを充填する局面と理解されるが、層中に土器が確認されるようになる点においてそれまでとは明確に区別される。遺物所見からその形成時期は弥生時代後期から終末期にかけてと判断される。地質的には下位の2-8層よりかなり暗色が弱く、堆積速度が速かったものと考えられる。堆積が進行する段階においては安定した地表面ではなかつ

たとえられる。ただし、2-7層上部は後世の土地改変によって大きく削剝・攪乱を受けるため、当時2-7層がどの高さまで堆積していたのかは不明である。しかし、少なくとも2-7層上部帯層属と思われる遺構が相当数検出されることから、2-7層堆積の最終段階において、表層部はある程度安定した地盤を形成していたことは間違いないだろうし、2-10層が形成した窪みもほとんど埋積していたものと推定される。

以降2-6層から2-1層にかけては、層の形成要因がそれまでの自然主導から人為主導に切り替わることが最大の変化点である。その主たる要因は耕作と考えられ、各断面とも土地改変のために下位層を大きく攪乱した状況が確認できる。2-10層の八東川旧河床に起因する高まりもどこかの段階(調査での確認は圃場整備時)で削平を受け、耕作に適した平坦地に均されてしまったと考えられる。これは、元は存在したであろう遺物・遺構が既に失われ、現地表からの旧地形復元は困難なことを意味し、また、集落構築には本来好条件といえる微高地部分が既に失われてしまっている可能性を暗示するものである。

2-6層は今回の調査で確認されたうち最も古い時期の耕作土である。耕作に直接関係する遺構として2-6層に帰属する耕作溝が検出されている。その時期は包含遺物から古墳時代後期以降と判断されるが特定には至らない。遺物内訳は弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものが圧倒的に多く、元は2-7層あるいは遺構内に帰属していた遺物が耕作や土地改変行為によって巻き上げられた状況が窺える。これは、本来の遺構構築面が失われてしまっていることを意味しており、理論上は今回の調査で検出された遺構は全て2-6層除去面に帰属する可能性が高いことを示している。そして、層位上において連続する2-7層と2-6層を分かつ層界には、少なくとも弥生時代終末期から古墳時代後期までの時間が包括されることを意味する。

2-5層から2-3層までは2-6層に続く耕作土である。2-5層からは近世以降とみられる遺物が出土しており、2-6層と直接的な連続性を持たせることは難しいと考える。2区では中世に帰属する遺物が皆無なことから、2-6層と2-5層の時期的な断絶はその間のどこかの時点で大幅な土地改変が行われたことを示唆している。これに対して、弥生時代後期から古墳時代の遺物は一定量包含しているが、これは2-5層が耕作によって下位の2-6層を攪乱していることを示しており、上位の2-3層にかけて土器の微細化・表面摩耗が顕著になる傾向にある。

2-2層はブロック土を多量に含む攪乱土で、昭和の圃場整備に際して形成された層である。重機によって相当な規模の土地改変が行われたようで、下位層に対する攪乱が著しい。第1面ではキャタピラ痕と思しき走行痕やバケットの爪痕が確認されている。この段階で旧微地形は完全に失われることになる。

2-1層は圃場整備後に形成された現代耕作土である。今回の調査は基本的に旧耕作土を削剝した状態で開始となっているため、Tr.2の一部でわずかに確認したにとどまる。

以上、調査で確認した最古層である2-10層から現代にいたる2-1層までを層位所見に基づいて概観した。最後に層位所見から判明した事象と課題点を列記してまとめとする。

まず、当然のことながら土地の形成には旧八東川が大きく関わっていることが明らかとなった。調査区内が八東川本体となる時期があったこと(2-10層)が判明し、川の流れが逸れてから(第8・9層)は、高地部は地表化して土壌化が進む。これに対して低地部は時間とともに埋積が進行し、その最終段階(2-7層)で当該地にヒトが入ってくるということが確認された。一方、2区の約250m西に位置する3

区では、ヒトの活動は弥生時代中期から確認されている。この時期の違いの意味するところは不明であるが、そもそも2区では弥生時代後期以前の遺物が皆無である。まさにこの時期が流路期であった可能性もあることから、2-10層の堆積時期と2-9層・2-8層の形成時期の究明が課題として残る。

2-6層以降は堆積ではなく削平の局面である。耕作及び土地改変によって、旧地形はおろか場合によっては遺構・遺物等過去の情報が大幅に失われてしまっている可能性があることが判明した。

## 第2項 2区の概要

2区は今回の発掘調査対象範囲のほぼ中央、1区と3区の間位置する。調査地の形状は東西に長い長方形である。調査面積は1445.381㎡である。調査はトレンチ確認調査を含め3面にわたっておこなった。

面ごとの検出遺構の内訳は以下の通りである。

第1面 耕作溝群(溝11)・土坑27・ピット15

第2面 掘立柱建物跡1・竪穴住居跡1・大溝3・溝6・  
土坑13(住居内土坑・溝状土坑含む)・  
ピット56(建物構成・住居内ピット含む)・  
土器だまり3

第3面(トレンチ調査) ピット14・土坑3

【第1面】 耕作溝群・土坑・ピットで構成される面である。古墳時代後期以降の耕作土である2-6層を除去した段階で検出された。最も新しいのは耕作溝、それに切られる単独遺構は弥生時代終末期から古墳時代後期に属する。遺構数が少なくその残りも悪かったことから、耕作地以前の遺構面の様相を示すほどの成果は得られなかった。

記載遺構は、耕作溝群・SK2027・SK2024・SK2005・SK2008・SK2026・SK2010である。

【第2面】 建物・大溝・溝・土坑・ピットで構成される面である。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層である2-7層を除去した段階での検出面である。建物類は掘立柱建物跡と竪穴住居跡が一棟ずつしかなく集落の中心とは言えない状況である。ただし、ピット、土坑類は当時の高地部とみられる調査区北東側に集中していることから、その延長である調査区の北側と八束川の間には遺構の広がりが見込まれ、集落が展開する可能性がある。調査区東部で検出された3条の大溝は調査区外に延び八束川に接続するとみられる。弥生時代終末期を中心とする遺物が大量に出土しており、2区を代表する遺構である。溝は切り合いから時期差が想定され、時期幅は遺物所見から弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

記載遺構は、SD2015・SB2001・SI2001・SK2031・SK2041・SK2040・土器だまり2001・土器だまり2002・SD2012・SD2013・SD2014である。

【第3面】 第2面調査後の補足確認目的のための調査面である。調査区全域をトレンチによる遺構確認をおこなった。確認面は2-8層除去面である。結果、調査区中央から東部にかけて土坑・ピットが少数検出された。これらは第2面の検出漏れ遺構と位置付けられる。

記載遺構以外については2区各面の平面図と2区遺構一覧表(表7・8)を参照のこと。

### 第3項 2区 遺構と遺物

#### 第1面(図15、写真図版6)

第1面は2-6層を除去した後の遺構面である。調査区北部は2-8層を、中央部から南部では2-7層を検出基盤層とする。一部、第2面の調査に至る2-7層掘削時に追加検出された遺構もある。これは、所見や時期観に基づく検討の結果、第1面に帰属させたものである。直接の帰属層である2-6層は調査区全域にわたって確認されるが、上位層による攪乱がひどく、層の残りが良いとは言えない。2-6層は弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物包含層、その性格は耕作土とされる。第1面の標高値は、北東部46.272m・南東部46.263m・中央北46.143m・中央南46.106m・北西部46.125m・南西部46.122mとなり、北東から南西にかけてわずかに下がる耕作面が想定される。

第1面遺構は調査区西部に集中する。遺構は層位的帰属から大きく2つに分類でき、新旧関係が明確である。

新しい一群は2-6層を主体埋土とする耕作関連遺構である。これに該当する遺構として、調査区西部において集中的に検出された耕作溝がある。重機掘削による表土剥ぎの際に一部掘り過ぎたため、図面上は間が途切れているが、その延長方向から本来は繋がっていたものと考えられる。主軸方向から大きく3つに分類できるが、耕作時期を示すものかどうかの判断はできない。Tr.3断面観察において、純粹に2-6層下面に帰属する(検出面での分層線が入らない)ことを確認した。帰属時期は遺物からは特定できず、厩所見と同じ古墳時代後期以降近世以前となる。

古い一群は耕作溝以外の遺構である。先の耕作溝に切られることから、帰属時期は耕作以前となる。遺構の分布や広がりには規則性はみられず、基本的に単独遺構としての評価しかできない。遺構埋土は検出基盤である2-7層よりやや褐色が強いものが多い中で、SK2010に代表されるような、その遺物の存在によって初めて認知されるものもある。特筆すべき遺構としては、その遺物出土状況から古墳時代後期から終末期の墓坑と想定されるSK2027とSK2024がある。調査地周辺には同じく古墳時代後期から終末期にかけての横穴式石室を有する古墳とされる「奈免羅古墳」・「梨ノ木古墳」(どちらも現在は消滅)がある。2区では基本的にこの時期の遺物は皆無といえるほどに少なく、時期対応を証明できる遺構も他に見当たらないが、当該期の周辺域が墓域であった可能性を示唆する成果である。そのほか、時期のわかる遺構では古墳時代前期の廃棄土坑と目されるSK2010がある。同形式別個体の壺が複数個体分出しており、その特異性が注目される。また、SK2026など出土遺物から弥生時代後期後葉まで遡る可能性がある遺構が複数検出されたが、小破片であれば2-7層の巻き上げ遺物の可能性が高くなるため時期の判定には使用しにくく、2-6層との時期幅を示すことしかできない。ビット類には並びのみられるものはなく、建物は確認されなかった。

第1面の遺構は残存状況の悪いものも多く、積極的に評価できないものが多い。耕作溝以外の第1面遺構45基のうち、深さが10cm以下のものは25基、20cm以下のものを合わせると37基に及ぶ。当時の遺構構築面が2-6層耕作期までに大きく削平された結果と考えられ、既に失われてしまった遺構も数多くあるものと思われる。

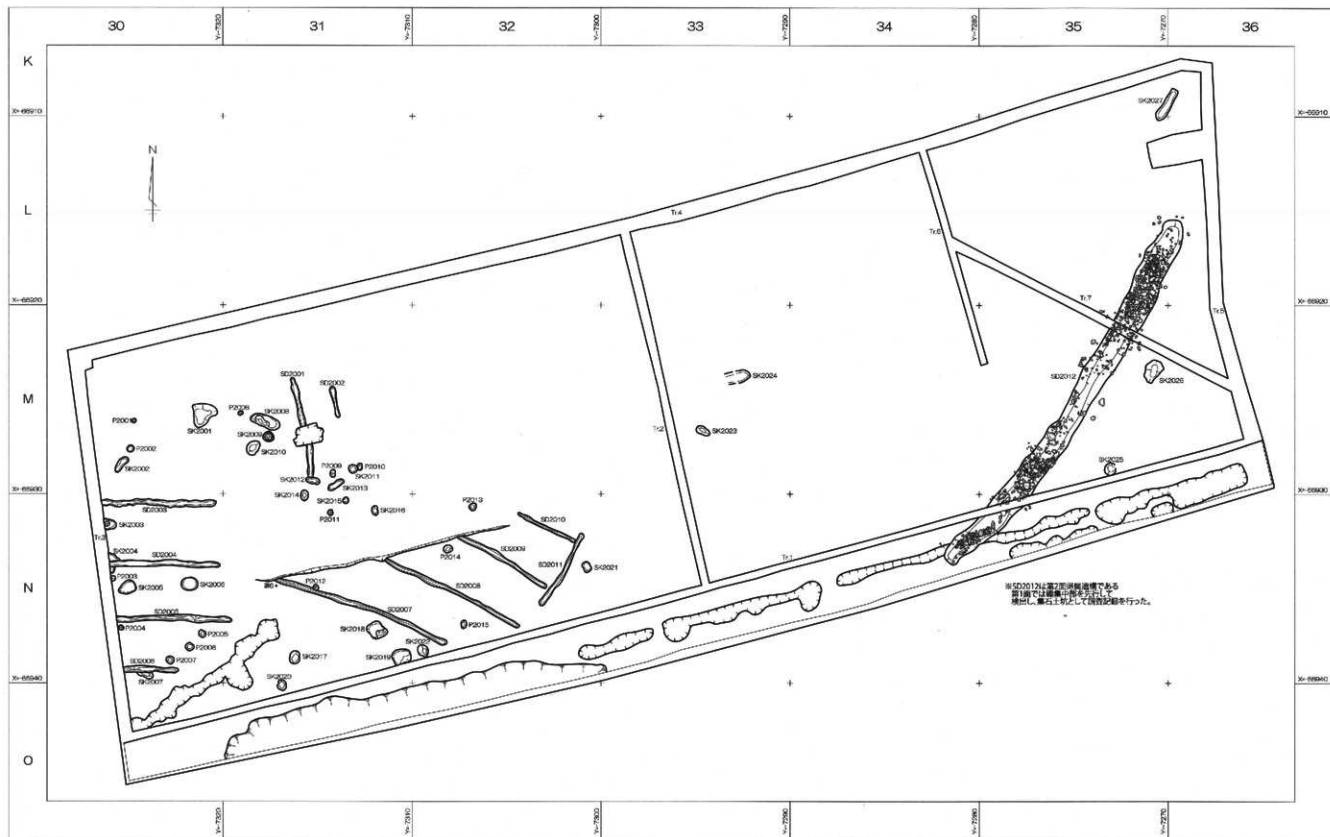


图15 2区 第1面平面图

## ■耕作溝群 SD2001～SD2011 (図 16、写真図版 6)

位置 2区第1面西半部、M30～N32グリッドに位置する。遺構確認面の標高は46.059m～46.187mである。

検出状況 第1面調査時、2-6層を除去した段階で複数条の溝が検出された。溝の延長はTr.3上でも確認されており、断面観察からは2-6層が帰属層となること、その他の第1面遺構を切ることを確認した。この埋土所見と一定間隔をあけて並行する状況から耕作関連遺構と想定されたため、その他の第1面遺構とは区別して調査をおこなった。N31グリッドでは、重機による表土剥ぎ段階で深く掘り過ぎてしまい、この範囲の溝は確認不能となってしまった。

平面形状・規模 合計11本の溝が検出された。断面形は11本とも共通しており、浅いU字形を呈する。西側は調査区外へ続く。各溝の規模(検出長×最大幅・確認面からの深さ)と平面形及び主軸方向は以下の通り。

SD2001(5.386m×0.335m-0.049m) 西側にやや湾曲しながら延びる。N-11°-W。

SD2002(1.684m×0.306m-0.130m) 直線状。N-12°-W。

SD2003(6.061m×0.330m-0.111m) 直線状。N-90°-W。

SD2004(5.870m×0.329m-0.081m) 直線状。N-89°-W。

SD2005(6.098m×0.376m-0.108m) 直線状。N-89°-W。

SD2006(2.899m×0.350m-0.056m) 直線状。N-90°-W。

SD2007(9.576m×0.340m-0.080m) 南側にやや湾曲しながら延びる。N-70°-W。

SD2008(7.893m×0.297m-0.102m) 南側にやや湾曲しながら延びる。N-64°-W。

SD2009(5.371m×0.370m-0.097m) 南側にやや湾曲しながら延びる。N-60°-W。

SD2010(3.383m×0.192m-0.066m) 直線状。N-67°-W。

SD2011(4.408m×0.278m-0.084m) 西側にやや湾曲しながら延びる。N-30°-E。

SD2003とSD2008、SD2004とSD2007は溝幅がほぼ同じである。緩やかに湾曲しながら延びる溝をそのまま延長復元すると、そのまま繋がることから元は一連の溝であったと考えられる。溝の分断原因は表土剥ぎ時の掘り過ぎのためである。溝はその主軸方向から、南北方向のSD2001・SD2002、緩やかに湾曲しながら延びるSD2003～SD2010、これに直行するSD2011の大きく3つに分類できる。埋土 埋土は基本的に2-6層と同じである。黒褐色土を主体とする中に、細かなブロック土が含まれる。このブロック土は検出基盤層である2-7層と考えられ、基盤層が巻き上げられた状況と捉える事ができる。溝によっては埋土の色調に若干の差異がみられる。2-7層の包含量の違いによるものと思われる。

遺物検出状況 百点以上の破片が出土しているがその大半は器表の摩耗の進んだ微細破片である。基本的に2-7層から巻き上げられた遺物と考えられる。時期のわかる遺物では、SD2007・SD2011から弥生時代後期の裏口縁部が出土している。しかし、細片かつ器表の摩耗度の高さから耕作時期を示すものではないと考える。

遺構の性格と帰属時期 SD2003～SD2010の間隔は3.5m～4m程度、平面図では等間隔で並行する状況がよくわかる。埋土からは、2-7層起源のブロック土が注目される。耕作土である2-6層と併せて考えると、耕作に伴う跡などの遺構性格が想定される。これらの溝は耕作行為が2-7層に及んだ痕跡である。2-6層を埋土とする耕作関連遺構が検出されたことにより、2-6層が耕作土である



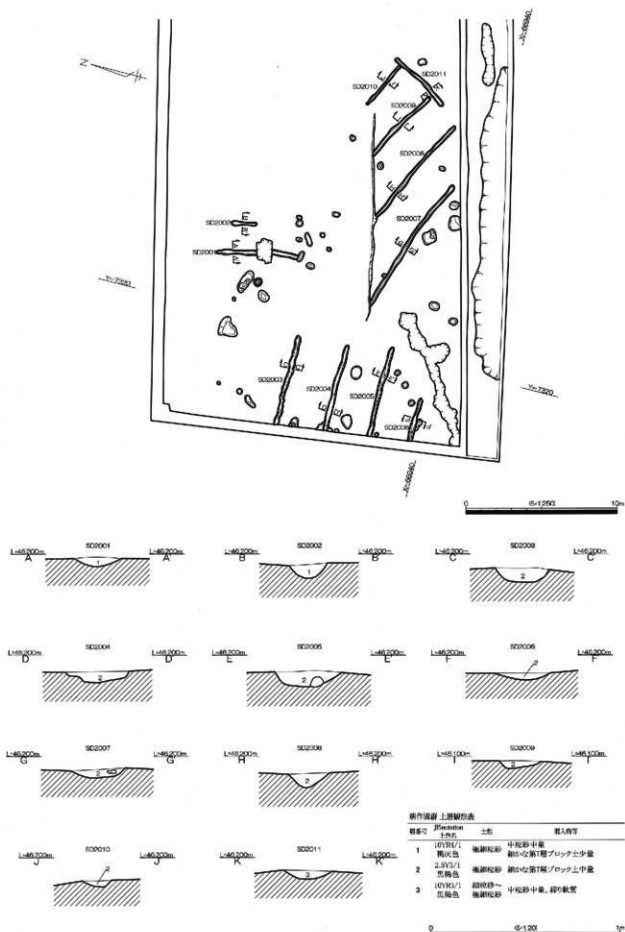


図16 2区 耕作溝群遺構図

ことの補強にもなった。

遺構時期について、時期のわかる出土遺物は2-7層からの巻き上げ遺物と考えられ、遺構の年代を示すものではないと判断した。したがって、遺構の帰属時期は2-6層の時期をあてはめることしかできず、古墳時代後期以降近世以前までの時期幅を持つ。溝は主軸の違いによって時期差がある可能性があるが、直接の切り合いがなく遺物からの検討も不可能なことからそれ以上の評価はできない。(浅井)

#### ■ SK2027(図17、遺物図5、遺物観察表5、写真図版7・49)

位置 2区第1面K35・36グリッドに位置する。帰属遺物確認面の標高は46.300m付近、遺構プランの確認面の標高は46.145mである。

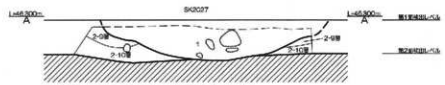
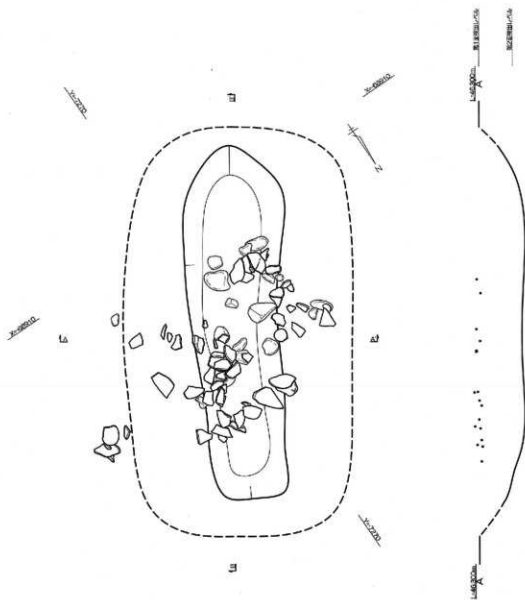
検出状況 第1面調査時に調査区北東端部において、10cm程度の大きさの須恵器片が集中出土した。2-6層掘削中において確認される須恵器の量はわずかなことから、須恵器集中部は遺構となることが想定された。複数回の平面精査による検出を試みたが、この段階で遺構は確認されなかった。周囲の第1面の検出基盤層は暗色の強い2-8層である。遺構埋土が2-8層と類似するために検出困難となっていることを考え、須恵器出土範囲を段状に残し第2面調査に移行した。第2面(第7・8層除去面=2-9層上面)で再度検出をおこなったところ、須恵器出土範囲の中心部に楕円形の遺構プランが確認され、断面にも遺構プランから続く立ち上がりをかろうじて確認できたため、上層出土の須恵器を包含する遺構と判断した。

平面形状・規模 須恵器片の出土範囲は東西1.5m・南北0.9m。破片密度は中心部が最も高く、周縁部にかけて低くなる。遺構本体の平面形は楕円形で、長軸1.873m・短軸0.540mを測る。この数値は第2面検出時のものである。断面の立ち上がりからは、第1面換算で長軸2.1m・短軸1.2m程度の遺構規模が想定される。主軸方向はN-30°-E。断面形は浅いU字形で、確認面から遺構底までの深さ(断面確認値)は0.195mである。

埋土 埋土は単層、黒褐色細粒砂を主体とし、10cm程度の礫が含まれる。周囲の基盤層である2-8層と類似する。

遺物検出状況 上層部の遺物集中域で20点以上の須恵器片が出土、遺構埋土内からは須恵器微細片がわずかに出土した。出土須恵器の9割以上が接合され、須恵器横瓶(24)が1個体復元された。外面両頂部のカキ目と体部中央のタタキ目が明瞭な個体である。歪みが著しく、外面には焼成時の自然軸による他個体の熔着が複数箇所で見られる。この中に須恵器蓋環の口縁部熔着痕がある。直径約9cm、小型の蓋環である。この蓋環と横瓶は共に古墳時代終末期、7c初め頃の所産と考えられる。

遺構の性格と帰属時期 遺構性格を考える上において、まず、須恵器横瓶の土坑帰属の厳密性について検討する。須恵器の出土レベルは2-6層と2-7層の層界部に集中しており、平面分布は土坑を中心とした広がりを見せる。土坑の復元範囲外の破片も数点確認できることから、破片レベルでは2-6層に帰属するものもあると思われる。ただし、2-6層は耕作土とされており、層の形成は下位に対する攪乱行為によって成されるはずである。そして、2-6層中においては他に須恵器の集中出土がないことから原位置から大きな移動はないことが想定される。よって、遺構に帰属していた横瓶が2-6層形成時の耕作行為によって破壊・分散した可能性を指摘できる。したがって、この横瓶は土坑に伴う遺物であると考えられ、SK2027の層位上の帰属は2-6層除去面となる。次に遺構性格についてであるが、1. 元は完形の横瓶が埋置されていた可能性が高いこと。2. その他の混ざりこみの遺物が皆

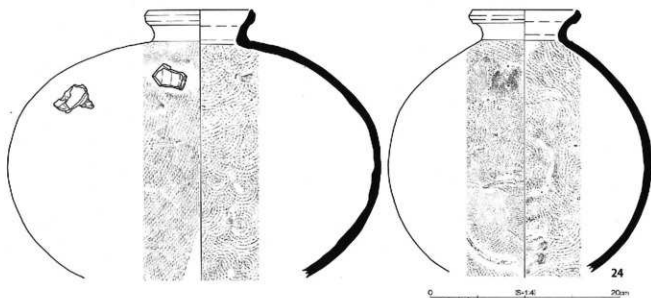


◎2-C層は遺存名(区画)を示す。詳細は基本図例項に記載

SK2027 土層表

層番号	厚さ	土質	遺人等
1	2.5V/1	黄褐色 細粒砂	黄砂少量、50cm以下の残少量 灰土層片少量

図17 SK2027遺構図



遺物図5 SK2027出土遺物

遺物観察表 5

遺物番号	調査区	遺構番号 (調査単位)	遺物番号	採取 番号	種別 説明	法量 [cm/g]	特徴	胎土/材質	胎色 色調	備考
24	2	SK2027 Q113	5	40	須恵器 横瓶	口径: 11.09 器高: 28.3 体径(口径): 30.4 体径(口径): 27.8	外面: 口縁部~肩部ナシ、体部タタキ後カキメ 内面: 同心円状に呉漆あり	黄褐色 ~1mmの砂粒 黄褐色	良好 外面: 炭 内面: 呉漆	呉漆が多い 自然釉が全体に付着

無であること。3. 検出プランが元の遺構形状を反映している可能性が高く、長軸2m×短軸1m程度の楕円形と想定されることなどから考えると、後の耕作によって上部に破壊・攪乱を受けた墓坑の残骸の可能性が考えられる。遺構の底に対して横瓶の出土位置が高いことは、埋葬と同時に、埋葬の最終段階以降に供献されたことを示す。

遺構の帰属時期は須恵器横瓶とその陪着個体から古墳時代終末期と判断される。

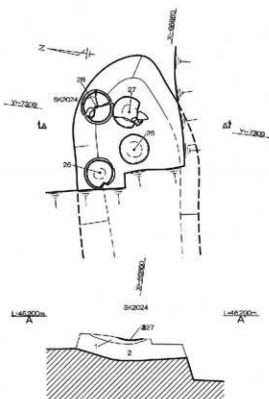
#### ■ SK2024(図 18、遺物図 6、遺物観察表 6、巻頭図版 3、写真図版 7・49)

位置 2区第1面 M33 グリッドに位置する。帰属遺物確認面の標高は 46.100m 付近、遺構プランの確認面は 46.030m である。

検出状況 調査区中央部において、第 2 面調査時、2-7 層掘削中に完形の蓋杯が複数個体出土し、その遺物出土状況から検出漏れ遺構の存在が想定された。この時点で既に遺物が浮いてしまっていたが、周囲の面を揃えて遺構検出を試みた。その結果、遺構残存部断面上で掘り込みが確認され、平面上においても対応する遺構プランが検出された。遺構として確認できたのは東端部の一部のみである、西側は 2-7 層掘削時に破壊されており規模は不明である。

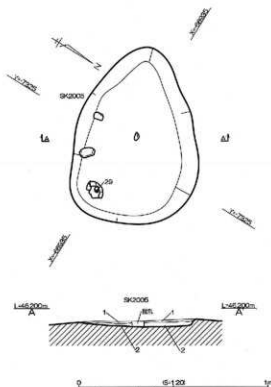
平面形状・規模 確認された形状からは円形もしくは楕円形と推定される、遺構規模は東西 0.637m・南北 0.613m、共に残存長である。断面形は皿型で、土器確認面から遺構底までは 0.14m である。

埋土 埋土は上下 2 層に分かれるが、共に黒褐色極細粒砂を主体とする土壌層である。下層はやや砂粒が多くなる程度で色調・土質とも類似しており、堆積状況に違いはみられない。遺構確認時の基盤層である 2-7 層と類似することから、遺構掘削土がそのまま埋戻されたと考えられる。



SK2024 土層断面図

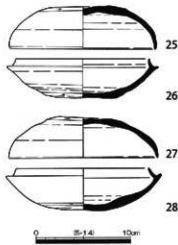
層番号	深さ	土色	土質	土層厚	取入物
1	2.5V/1	黒褐色	黒砂～中粒砂少量 少量鉄屑・少量セメント土		
2	2.5V/1	黄褐色	黒砂～中粒砂中量 5cm以下の鉄屑量		



SK2005 土層断面図

層番号	深さ	土色	土質	取入物
1	10V/2/1	黒褐色	細粒砂・中粒砂～細粒砂中量	
2	2.5V/1	黄褐色	黒砂～ 黒7層ブロック多量	

図18 SK2024-SK2005遺構図

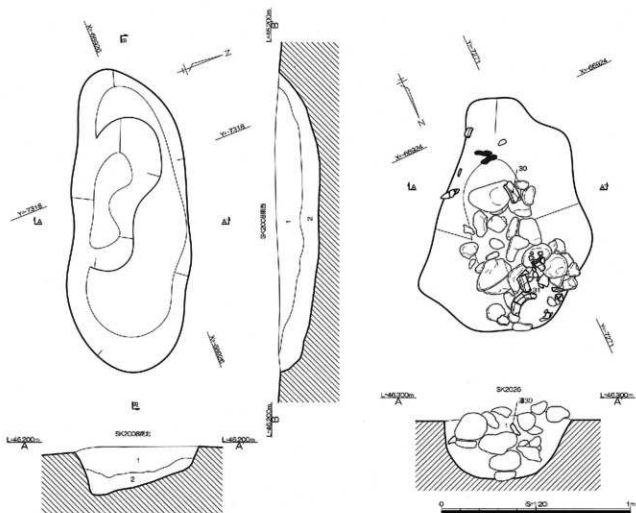


遺物図6 SK2024出土遺物

遺物検出状況 上層から完形の須恵器杯蓋と杯身が2セット、遺構の東端部からまとまって見つかった(25～28)。正位の杯身の脇に裏返った蓋が並ぶ状態で出土した。割れてはいるが元の形状を完全に保っている点から、原位置を保っているとみて間違いない。この蓋杯の色調は4個体とも橙色系である。一見土師器かと見間違ふほどで、軟質な器表は還元焼成されたとは思えない。しかし、ロクロを使用したその制作技法はまさに須恵器のそれであるため、須恵器として分類した。法量・形態は4個体とも共通しており古墳時代後期、Ⅱ期後半に比定される。杯身内の充填土を別途洗浄したが、特

遺物観察表6

遺物 番号	調査区	遺構番号 [調査番号]	遺物同 番号	深さ 単位	種 別	特 徴	法量 (cm/g)	特 徴	胎土/材質	焼成 色調	備 考
25	2	SK2024 (2009)	6	49	須恵器 杯蓋	口径:15.0 高さ:4.6	外面:天井部上半部輪ケズリ、天井部下半部～口縁部 内面:口縁ケズリ	口径:15.0 高さ:4.6	青土 ～4mmの砂粒、 骨土	黄褐色 内面:浅黄褐色	還元焼成されていない
26	2	SK2024 (2009)	6	49	須恵器 杯身	口径:14.0 高さ:4.1 最大径:16.0	外面:立ち上がり～体部輪ケズリ、底部輪ケズリ 内面:口縁ケズリ	口径:14.0 高さ:4.1 最大径:16.0	青土 ～1mmの砂粒、 骨土	やや良好 内面:黄褐色 内面:浅黄褐色	還元焼成されていない
27	2	SK2024 (2009)	6	49	須恵器 杯蓋	口径:15.6 高さ:4.3	外面:天井部上半部輪ケズリ、天井部下半部～口縁部 内面:口縁ケズリ	口径:15.6 高さ:4.3	青土 ～5mmの砂粒、 骨土	やや良好 内面:黄褐色 内面:浅黄褐色	還元焼成されていない
28	2	SK2024 (2009)	6	49	須恵器 杯身	口径:13.6 高さ:4.5 最大径:16.4	外面:立ち上がり～体部輪ケズリ、底部輪ケズリ 内面:口縁ケズリ	口径:13.6 高さ:4.5 最大径:16.4	青土 ～2mmの砂粒、 骨土	黄褐色 内面:浅黄褐色	還元焼成されていない



SK2008 土壌観察表

層番号	Flotation 土物色	土色	遺入物等
1	10%以下 黒褐色	凝結粒状砂	第7層ブロック土少量 中粒砂少量
2	2.5%以下 灰白色	凝結粒状砂	第7層ブロック土少量

SK2026 土壌観察表

層番号	Flotation 土物色	土色	遺入物等
1	2.5%以下 黒褐色	凝結粒状砂	径30cm以下の層多量 灰化物少量

図19 SK2008-SK2026遺構図

に何も見つからなかった。

**遺構の性格と帰属時期** 土坑である。遺構の確認範囲が限られるため、厳密な性格の言及は難しいが、蓋環から遺構性格の検討を試みる。最初に、帰属すべき検出面について検討する。遺構検出のきっかけは2-7層掘削中における完形蓋環のまとまった出土である。2-7層は古墳時代前期までの遺物包含層で、それより新しい出土遺物は皆無である。したがって、追加確認されたこのSK2024は第1面の検出漏れ遺構としても矛盾はない。次に、蓋環確認時には遺構西側はよって大きく破壊された後であったが、その際には共伴するとみられる遺物はなかったことから、遺構に帰属する遺物は東端で検出された蓋環4個体のみであった可能性が高い。また、検出された遺構形状からは、既に破壊された西方方向に長軸を持つ楕円形の土坑であった可能性が想定される。以上の点から、SK2024は蓋環4個体を副葬品とする土坑墓であった可能性を想定したい。そして、遺構の層位上の帰属は2-6層除去面となる。

■ SK2005(図 18、遺物図 7、遺物観察表 7、写真図版 7・49)

位置 2区第1面N30グリッドに位置する。遺構確認面の標高は46.114mである。

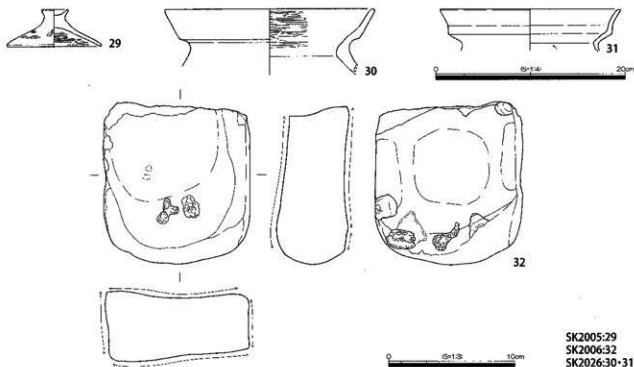
検出状況 第1面調査時、2-6層を除去した段階で検出された。

平面形状・規模 平面形は楕円形で長軸0.942m・短軸0.659mを測る。断面形は盤形で確認から遺構底面までの深さは0.018mである。

埋土 埋土は上下2層に分かれる。上層は砂粒を含む黒褐色細粒砂である。下層は黄灰色細粒砂～極細粒砂、検出基盤層である2-7層のブロック土が顕著である。土坑開削時の取り残し土(加工層)と思われる。

遺物検出状況 最も残りの良い遺物は土師器(あるいは弥生土器)蓋(29)である。その他の遺物は微細破片である。体部細片が5点出土した。

遺構の性格と帰属時期 土坑である。帰属時期は山上遺物から古墳時代前期と推定される。断面観察から、掘り込まれていることは証明できるが、それ以上の所見は示せない。



遺物図7 SK2005・SK2006・SK2026出土遺物

遺物観察表 7

遺物番号	調査区	遺構番号 (遺物番号)	遺物図 番号	図説 番号	種別 器種	法量 (cm/g)	特徴	胎土/材質	焼成 状態	備考
29	2	SK2005 (2017)	7	49	土師器 蓋	口まみ径(口部) 径長:3.9 口径:2.8	外面:つまみ指ナデ、大目部ミ方キ 内面:大目部ハケ	泥 ～3mmの砂粒、 少ない	普通 外面:紅褐色 内面:黄	
30	2	SK2006 (2072)	7	49	弥生土器 壺	口径:12.2 器高:7.0	外面:口縁部～胴部ナデ 内面:口縁部～胴部ナデ跡ミ方キ、胴部ケズリ	普通 外面:肌裏側 内面:黄	普通 ～3mmの砂粒、 黄褐色	D1層
31	2	SK2006 (2072)	7	49	弥生土器 壺	口径:18.0 器高:4.4	外面:口縁部～胴部ナデ 内面:口縁部ナデ、胴部ケズリ	普通 ～3mmの砂粒、 普通	普通 ～3mmの砂粒、 外面:黄 内面:紅褐色	外面層付層 D2層
32	2	SK2006 (2019)	7	49	石器 砥石	長さ:12.85 幅:11.65 厚さ:5.65 重さ:140g	断面は矩形 断面4層	砂岩(新第三紀)	黄褐色	

■ SK2026(図 19、遺物図 7、遺物観察表 7、写真図版 49)

位置 2区第1面 M35 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 46.220m である。

検出状況 第1面調査時、2-6層を除去した段階で径 20cm 程度の礫の集積部が検出された。遺構の存在が予想されたが、平面上では確認できなかった。礫の多さからサブトレンチによる断面確認は困難と判断し、2-7層掘削時に南半部を大きく段状に残して第2面調査時に平・断面再確認をおこなった。その結果、掘り込みの内側に礫が集中する状況が確認されたため、遺構として追加調査を実施した。

平面形状・規模 平面形は不定形・楕円形に近いびつな形状である。長軸 1.208m・短軸 0.873m を測る。断面形は不整 U 字形で確認面から遺構底面までの深さは 0.371m である。

埋土 埋土は単層、黒褐色の極細粒砂を主体とし、大小様々な大きさの礫が不規則に混じる。わずかに炭化物が含まれる。

遺物検出状況 弥生時代終末期に帰属するとみられる甕(30・31)がある。その他の細片遺物は、壺 2 点・甕 12 点・高坏 2 点・器台 6 点。甕の比率が高い。上器以外では、遺構底から長さ 10cm 程度の炭破片が出上した。

遺構の性格と帰属時期 土坑である。礫の多さと、遺構形状が不整形なことから判断して、礫を捨てることを目的とした土坑と推定される。帰属時期は出土遺物から弥生時代終末期以降と判断されるが、2-6層の時期によっては新しくなる可能性がある。

■ SK2006(遺物図 7、遺物観察表 7、写真図版 49)

位置 2区第1面 N30 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 46.093m である。

検出状況 第1面調査時、2-6層を除去した段階で検出された。

平面形状・規模 平面形は円形で長軸 0.892m・短軸 0.673m を測る。断面形は盤形で確認面から遺構底面までの深さは 0.038m である。

埋土 埋土は単層、オリーブ黒色極細粒砂を主体とし、下方にかけて、検出時の基盤層である 2-7層のブロック土が増す。掘削土でそのまま埋め戻された状況と思われる。

遺物検出状況 32 は砂岩製の砥石である。砥面は 4 面。土器は微細破片のみである。

遺構の性格と帰属時期 土坑である。帰属時期は遺構面所見からの判定となる。耕作溝以前、弥生時代後期後葉から近世までの時期幅しか示せない。

■ SK2008(図 19、写真図版 8)

位置 2区第1面 N30 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 46.171m である。

検出状況 第1面調査時、2-6層を除去した段階で検出された。

平面形状・規模 平面形状は楕円形、断面形状は U 字形もしくは不整逆台形である。長軸 1.579m・短軸 0.608m、確認面から遺構底面までの深さは 0.250m である。

埋土 埋土は上下 2 層に分かれる。上層は黒褐色極細粒砂の主体土に、砂粒とブロック土が含まれる。下層は色調がやや明るくなりブロック土が増す。両層に含まれるブロック土は色調から 2-7 層起源と考えられ、当遺構は埋め戻された可能性が高い。



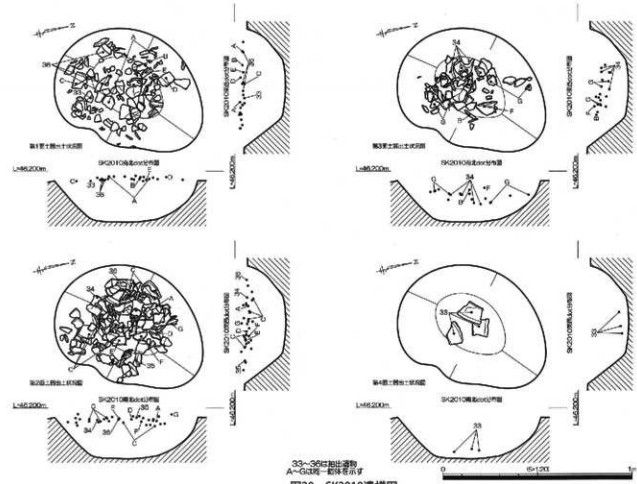
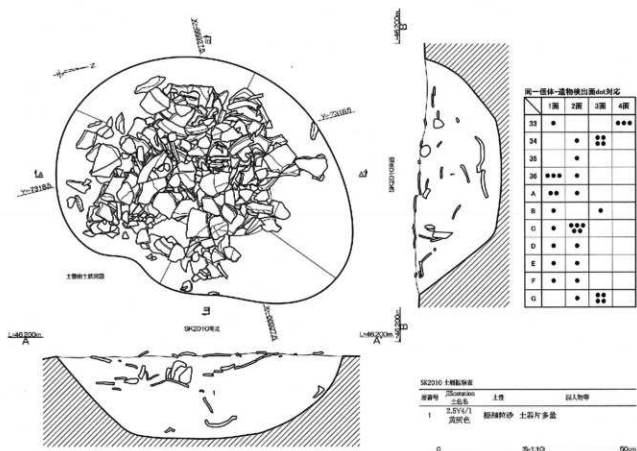


图20 SK2010遺構図

**遺物検出状況** 計数可能な土器点数は16点である。このうち、裏2点・器台1点が器種判定が可能な破片である。明瞭に時期のわかる遺物はないが、鼓形器台の脚裾端部とみられる破片から、かろうじて弥生時代後期後葉から終末期の様相が読み取れる。

**遺構の性格と帰属時期** 土坑である。2・7層起源のブロック上が上下層とも含まれ、それが下層にかけて増える状況から掘削土による埋め戻し行為が想定される。平面形状と遺構規模から土坑墓の可能性も想定して調査を進めたが、副葬品と考えられる遺物はなく、埋葬施設の痕跡は見つからなかった。遺構の短軸断面からは明確に掘り込まれていることを確認できるが、底面の不整形さからは特に形を意識していたとは思えない。墓としての根拠に乏しく、その可能性は極めて低い。

遺構時期について、出土土器は微細破片であるため時期判定には適さない。したがって、帰属時期は遺構面と厩所見からの判定となる。耕作溝以前、弥生時代後期後葉から近世までの時期幅しか示せない。(浅井)

■ SK2010(図20、表4、遺物図8、遺物観察表8、写真図版8・50)

**位置** 2区第1面M31グリッドに位置する。遺構確認面の標高は46.095mである。

**検出状況** 第1面調査時、2・6層を除去した段階で土器片が多数露出したことで検出された。

**平面形状・規模** 平面形は楕円形、断面形は皿形である。長軸0.821m・短軸0.608m、確認面からの遺構底面までの深さは0.230mである。

**埋土** 埋土は単層、黄灰色極細粒砂を主体とする。埋土内に細片土器が多く含まれる。土色・土質共に2・7層と類似しており、遺物がなければ遺構の認識は困難である。

**遺物出土状況** 遺構からは、多数の土器片が出上した。4回に分けて記録した出土状況図からは、十器片が土坑中央部を中心として上部まで広がるように埋まっていたことがわかる。確認された器種は、壺・甕・高環・器台である。個体としての残存率はそれほど高くなく、最大のもでも口縁部から体部上半までの接合にとどまる。

a. 遺物の出土傾向 出土土器について帰属時期と摩耗の有無による分類をおこなった。帰属時期は弥生時代後期から古墳時代前期までの幅がある。弥生時代後期後葉と古墳時代前期の土器遺物が多く、弥生時代終末期の遺物は少ない。また、須恵器は確認されていない。摩耗については、器表・調整がはつきり残存するものから、破断面が削れて丸くなってしまっているものまで、遺存状態の差が激しい。土器片検討の結果、摩耗の有無は遺物の帰属時期や出土面とは無関係であることが判明し、さらに、摩耗のある破片とない破片の接合が確認された。

b. 器種細分と抽出遺物 器種は壺の割合が高い。個体レベルで確認できた壺は、口縁部に波状文を施したものの6個体、肩部に突帯を有するもの5個体、それ以外1個体、合計12個体を確認した。甕は口縁部に平行沈線文を施したものの2個体、施されていないもの1個体、合計3個体を確認した。これらの甕の細片は破砕され摩耗が進行しているが

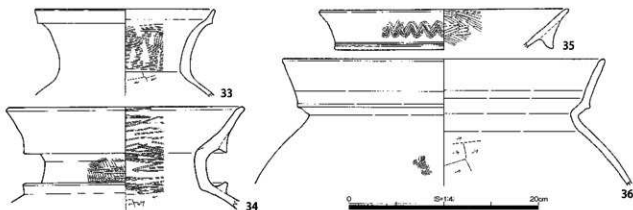
表4 SK2010遺物構成表

器種	特徴	時期要素	数	部位	摩耗
遺	波状文	弥生後期後葉	6個体	口縁部	有・無
	突帯有り	古墳前期前葉	5個体	口縁部～体部	有・無
	それ以外		1個体	口縁部 肩部	有・無
壺	沈線文有り	弥生後期後葉	2個体	口縁部	有
	沈線文なし	弥生終末期	1個体	口縁部～体部	有・無
器台	大破片	～弥生終末期	1個体	受部 筒部	無
器台・高環	器種特定不能		10個体+	体部 脚(台)部	有・無
不明	底面(平底)		2個体	底部	有・無
	細片		100点!	体部	有・無

接合可能であった。高坏・器台はいずれも数個体ずつ出土しているが接合できるものは少ない。出土遺物の中から遺物番号 33～36 を抽出した。35 は壺である。口縁部に波状文・平行沈線文が施されている。波状文は櫛状工具を用いて施文したとみられるが、その方法が特徴的である。通常の波状文は、施文方向に対して角度を固定した原体を平行移動させることで波を表現する。これに対して、本例では波形に対して常に直交するように原体の角度を調整しており、波形頂点では内側を起点とした原体の回転によって折り返しをおこなっている。35 と同じ特徴を持つ壺破片を検討した結果、類似性の高い破片が、口縁部の長さの違い、波状文と平行沈線文の施文順序の違い等で 5 個体に細分された。34 は壺である。口縁部は無文、屈曲部から外反して立ち上がる。肩部に貼付される突帯は古墳時代前期の要素と判断される。当遺構内で最も新しい遺物と思われる。34 と同じ特徴を持つ壺破片は、口縁の形態、突帯形状の微細な差から 4 個体に細分された。直接の接合関係にはないが、これと同系統とみられる壺破片は相当数出土している。36 は壺である。複数の遺物検出面に跨る接合関係を持つ個体である。1 回目の検出で頸部の一部、4 回目の検出で口縁部の 3 分の 2 が出土した。36 のように検出面を異にしなから同一個体と判断される遺物を 10 例確認した。遺構理上が単層であることとあわせて考えると、SK2010 の土器片はまとめて一度に埋められたと考えられる。

**遺構の性格と帰属時期** 破片遺物をまとめて埋める行為が想定されることから廃棄上坑と考えられる。遺構の帰属層と出土遺物についてはさらなる検討が必要である。

調査時には、遺物量の多さとその状況から一括性の高さを想定し、上器理納遺構などの性格を考えていた。しかし、土器詳細検討の結果は、個体・时期的な一括性を否定するものであった。出土遺物は、個体数の多さ、上器の帰属時期幅の広さを特徴とし、さらに、土器の新旧と摩耗の有無に関連性が乏しいことが判明した。そのような土器片を一括廃棄するための掘り込みが当遺構であるのなら、廃棄に至る以前の土器の状況を考える必要がある。



遺物図8 SK2010出土遺物

遺物観察表 8

遺物番号	検出区	遺構番号 (調査区画)	遺物番号	出土 層序	種別	法量 (cm <sup>3</sup> )	特徴	出土/材質	焼成 色器	備考
33	2	SK2010 (2001)	8	50	常土土器 壺	口径 118.6 高さ 9.3	外周: 口縁部～肩部ナデ 内周: 口縁部ナデ、肩部ハケ、胴部ケズリ後ナデ	口縁部 ～ 2mm の砂粒 外周: 波状文 内周: にぶい粒		
34	2	SK2010 (2001)	8	50	上層部 壺	口径 124.4 高さ 10.8	外周: 口縁部ナデ、肩部ハケ後ミギキ、胴部突帯 盛り付け後ナデ 内周: L 側肩部ナデ、L 側部～胴部ミギキ、口縁部 ケズリ	黄緑 ～ 1mm の砂粒、 口縁部 ナデ	良好 内周: 粒 内周: 粒	
35	2	SK2010 (2001)	8	50	赤土土器 壺	口径 125.6 高さ 4.2	外周: 口縁部ナデ後波状文、L 側部下層沈線文 2 条、胴部ミギキ 内周: 口縁部ミギキ	黄緑 ～ 4mm の砂粒、 口縁部 ナデ	良好 内周: にぶい黄粒 内周: 黄粒	
36	2	SK2010 (2001)	08	50	(赤土土器) 壺	口径 133.9 高さ 13.4	外周: 口縁部～胴部ナデ、肩部ハケ後ナデ 内周: L 側部～胴部ナデ、胴部ケズリ	黄緑 ～ 2mm の砂粒、 口縁部 ナデ	良好 内周: 灰白 内周: 黄粒	径 8～11mm の破片 少数あり

時期を違えた土器が同じように破砕、摩耗を受ける状況としては、耕作行為があげられよう。当調査で確認される最も古い耕作土は当遺構を切る 2-6 層である。当遺構埋土には 2-6 層のブロック土が含まれておらず、2-7 層に非常に近い。したがって、遺構構築面は後世に削平されたと考えられる。埋土所見からは 2-7 層に属する遺構と判断されるが、2-7 層は耕作土ではないため、直接つなげることができない。可能性として、2-6 層耕作前にさらに古い段階の耕作土を想定できればそこに帰属させることができるが、調査を通じて 2-6 層より古い耕作痕跡を確認していないため検測に過ぎず、土器摩耗原因の特定には至らない。

そして、もう一つ考えなければならないことは、出土遺物から復元される器種構成が特殊であるという点である。他遺構や層掘削では確認できない特徴を持った壺が 11 個体も想定される。この壺は摩耗のない破片も多く、元々は別の遺構に属していた可能性が高いが、今回の調査ではこれらの壺と関連を見いだせる遺構は検出されなかった。

遺構時期については、多数の土器片の中に須恵器が一点も含まれないことと、最も新しい遺物である壺(34)を判定根拠として、古墳時代前期と判断できる。ただし、上記の検討から遺構が形成されるのは、この壺が破砕・摩耗を受けた後と考えられる。当遺構を切る 2-6 層の形成時期は古墳時代後期から近世までの幅が考えられるため、2-6 層の時期次第では新しくなる可能性があることを補足事項として指摘しておく。(浅井・島田)

## 第 2 面(図 21、巻頭図版 1・2、写真図版 9)

第 2 面は 2-7 層を除去した後の遺構面である。ただし、これはあくまで理論上の定義であり、実調査では掘削状況に少し違いがある。Tr.1 ~ Tr.5 の断面観察による堆積状況の確認からは、2-8 層と同色の埋土を持つ遺構を確認しており、この検出には 2-8 層除去、すなわち、2-9 層を検出基盤層とする必要があった。このため調査北部では 2-8 層除去面を第 2 面とした(図 21 一点鎖線以北)。

南に下がりながら厚く堆積する 2-7 層には大きな課題がある。堆積時期は弥生時代後期前葉から終末期後半にかけてとされるが、層中には古墳時代前期の遺物も含まれる。基本層序項では、埋土が検出基盤層に類似するため検出しえない遺構についての可能性を示した。2-7 層掘削中においては土器だまり 2001 など、明らかな遺物の集積がみられるにも関わらず掘方が確認できない遺構や、土器だまり 2002 と大溝との関連の検討、また、各セクションにおける断面観察を通じて、第 2 面遺構の層位上の帰属は 2-7 層上もしくは 2-7 層中(2-7 層堆積中の一時点)になると判断される。これは、理論上の検出面が、第 1 面・第 2 面とも 2-6 層除去面であることを意味する。調査においては遺構検出の必要性から 2-7 層を包含層として掘削し、その除去面において遺構検出をおこなった結果、堆積の厚い南部では 30cm ~ 40cm あまり掘り下げることになった。第 1 面検出時に平面上で把握した第 2 面遺構は 2-9 層礫部を切る SD2015 と、埋土内の礫が帯状に延びることから検出された SD2012 の 2 遺構のみである。どちらの遺構も途中で途切れてしまい、完全な検出には至っていない。このような大遺構でさえ検出がままならない状況から 2-7 層の掘り下げは調査手法上やむを得なかったと考えるが、そのために浅い遺構を破壊してしまったことは悔やまれる。

調査区南西部に残る高台は、第 2 面末調査範囲である。この範囲は溝状の深い攪乱があったため、既設 U 字溝掘方の法面養生の必要性から、第 1 面からの面下げは行わず表面遺物の回収のみとした。

第 2 面の標高値は、北東部 46.197m・南東部 46.058m・中央北 46.038m・中央南 45.723m・北西

部 46.066m、南西部 45.880m である。東から西にかけてわずかに、北から南にかけては、2-7 層掘削のために大きく下がる遺構面である。遺構密度は北側に高い。この要因は南側 (2-7 層内) の検出しえない遺構のためだけではなく、旧地形と密接に関わっていると考えられる。第 2 面遺構の 70% を占めるピットの分布は北部に集中する。この範囲は最終基盤層である 2-9 層と 2-10 層が礫質になっており、第 2 面検出時には面に礫が露出していた。Tr.2・Tr.5 のセクションからは南から北にかけて最終基盤層が高くなるのがわかる。当時の地表面においてもこの範囲は高地部となっていたと想定できれば、ピット類が集中するのは自然な状況といえる。ただし、礫質な地表面に集落を築くとは考えにくく、また、遺構の存在は埋土内の礫密度の低さから認識されることが多かった。したがって、当時の地表面はまだかなり高く、地表面に広がっていた土壌は少なくとも礫質ではなかったと考えられる。ピットの集中からは建物の存在が予想されるが、確認されたのは総柱の掘立柱建物跡 SB2001 と竪穴住居跡 SI2001 の 2 棟と、布掘建物の可能性のある溝状土坑 SK2031・SK2041 のみである。高地部をなす砂礫層は調査区の北東側に延びており、現八東川に沿って帯状の微高地を形成していると思われる。集落はその方向に展開する可能性がある。

調査区南西から北東にかけて検出された 3 条の大溝は、その規模と遺物量から 2 区を象徴する遺構といえる。固く締った砂礫層を 1.5m 以上も掘り抜く労力は想像を絶するものである。大溝は北東方向への流れであったとみられ、八東川に接続していたものとみられる。出土した弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大量の上器は穴形に近いものも多く、当該期の良好な一括資料である。さらに、地方との交流を示す丹後や吉備の影響を強く受けた土器の出土も特筆される。

第 2 面で、最も新しい遺構は SD2015 である。調査区を東西方向に横断するこの溝はその他の全ての遺構を切っている。先の大溝群とは明らかに異なる方向に延びることからも、局面的違いが窺える。時期決定に値する決定的な遺物が無いが、400 点を超える微細破片の中に須恵器が一点もみられないことから、やはり古墳時代前期に属すると考えられる。

#### ■ SD2015(図 22、表 5、遺物図 9、遺物観察表 9、写真図版 10・50)

**位置** 2区第2面M30～L36グリッドに位置する。遺構確認面の標高は45.914～46.159mである。  
**検出状況** 調査区中央のTr.2断面観察において存在が確認された。埋土が検出基盤層である2-8層と同じ黒色土になっていたため検出は困難であった。礫の抜けている範囲を頼りに東西に延びる溝状遺構であることは確認できたが、検出は既に砂礫層が露出していた範囲を含めた30m程度で、その延長が全く不明であった。遺構プラン確定には、調査区中央から東部の高地部では2-8層の、西部の窪地部分では2-7層の除去が必要と判断されたため、これを第2面調査時の課題とした。2-8層掘削中に、溝埋土は周囲の同色土に比べて乾燥が遅いことが判明した。これは粒度組成や有機物の含有量の違いによる保水力の差と考えられ、大溝類(SD2013・SD2014)との切り合い関係の判定根拠とした。図22中の一点鎖線の北側は2-8層の除去範囲を示しており、この外側では2-7層が堆積している。M30・M31グリッドでは2-7層除去後の精査において、2-7層に類似する埋土の溝が検出され、先に検出されていた部分と繋がった。これによりSD2015は調査区を東西に横断する溝としてプランが確定した。第2面主要遺構との切り合い関係あり。SD2015は建物・大溝等、その他の第2面遺構を全て切る。

**平面形状・規模** 平面形は帯状で、検出長63.409m・幅0.762m、主軸はN-72°Eをふる。断面

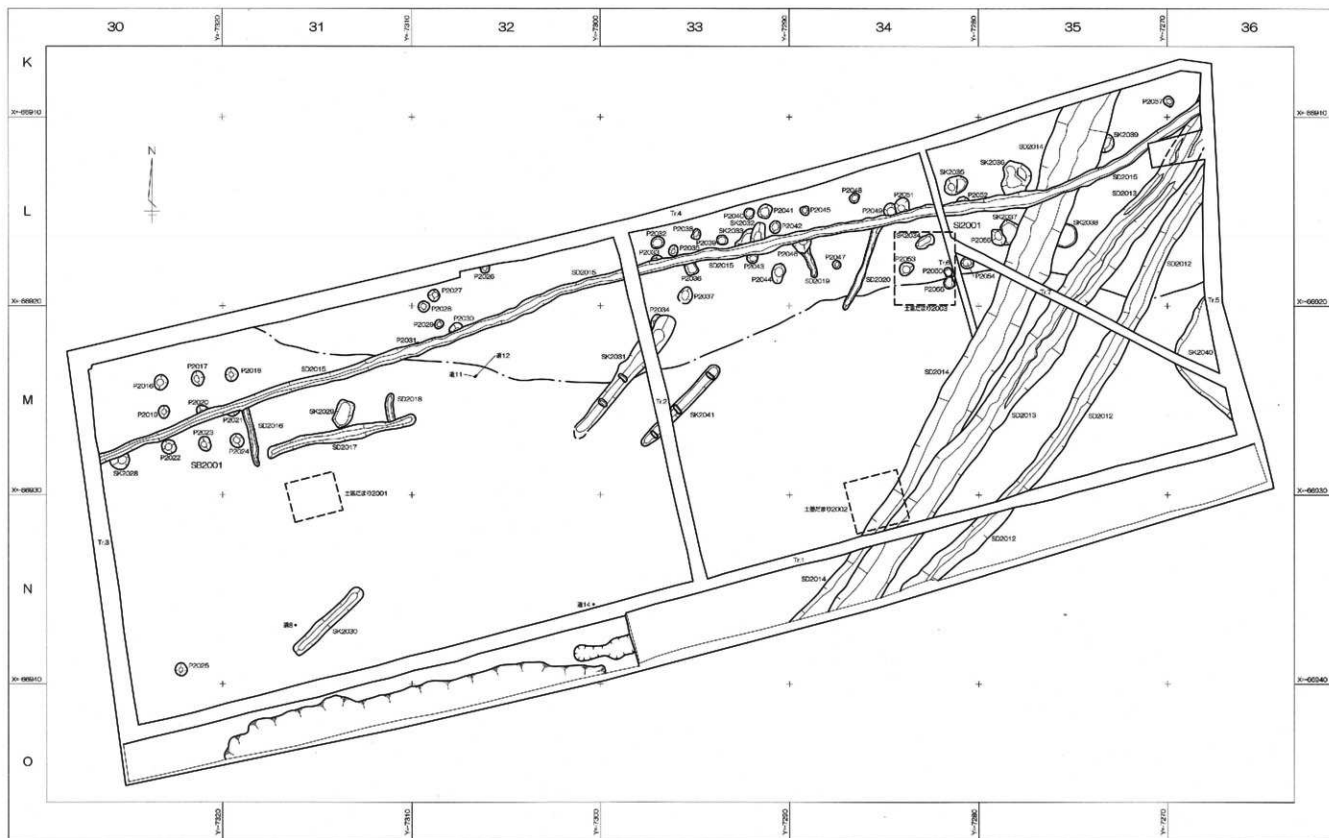


图21 2区 第2面平面图

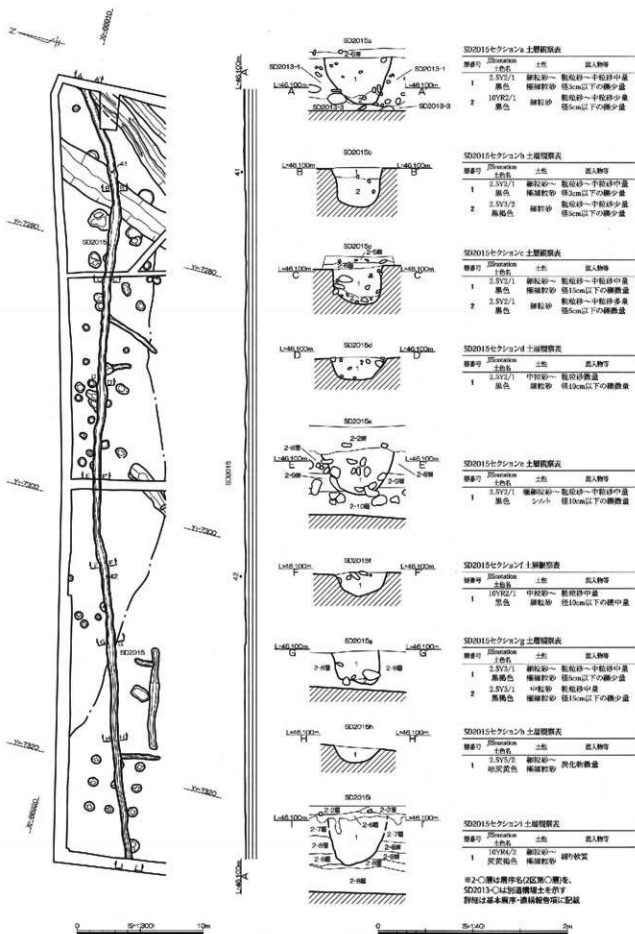


図22 SD2015遺構図

SD2015セクションa 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	2.5V2/1	緑粘土	瓶灰砂～中粒砂中量 黒色 極細粒砂 径5cm以下の礫少量	
2	10V2/1	緑粘土	瓶灰砂～中粒砂少量 黒色 径5cm以下の礫少量	

SD2015セクションb 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	2.5V2/1	緑粘土	瓶灰砂～中粒砂中量 極細粒砂 径5cm以下の礫少量	
2	2.5V2/2	黒褐色	緑粘土 径5cm以下の礫少量	

SD2015セクションc 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	2.5V2/1	緑粘土	瓶灰砂～中粒砂中量 極細粒砂 径15cm以下の礫少量	
2	2.5V2/2	黒色	瓶灰砂～中粒砂少量 極細粒砂 径5cm以下の礫少量	

SD2015セクションd 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	2.5V2/1	緑色	中粒砂～ 極細粒砂 径10cm以下の礫少量	

SD2015セクションe 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	2.5V2/1	緑粘土	瓶灰砂～中粒砂中量 シット 径10cm以下の礫少量	

SD2015セクションf 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	10V2/1	黒色	中粒砂～ 瓶灰砂中量 径10cm以下の礫中量	

SD2015セクションg 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	2.5V3/1	黒褐色	緑粘土	瓶灰砂～中粒砂中量 径5cm以下の礫少量
2	2.5V3/1	黒褐色	瓶灰砂中量 極細粒砂 径15cm以下の礫少量	

SD2015セクションh 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	2.5V3/2	緑灰黄色	瓶灰砂 極細粒砂	陶化粘土

SD2015セクションi 土層断面表

層番号	層名	土色	土質	出土物
1	10V2/2	黒褐色	瓶灰砂～ 極細粒砂	緑竹炭

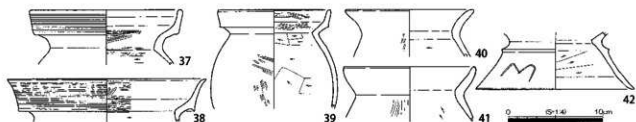
※2-C層は層序名(2区第○層)を、  
SD2013-C4は別遺構層土を示す  
詳細は基本層序-遺構層序項に記載

形はU字形で、確認面からの深さは最大0.392mを測る。東端のセクションaと西端セクションiの比高は30.1cm、0.5%の勾配である。ただし、溝底面の標高は一定しない。表5に標高値の推移を示した。概ね東から西にかけて下がっているが、東端〜セクションg間での標高値は振れ幅が大きく、やや低い値を示す。この範囲の基盤は大礫が多く含まれる砂礫層である。セクションc・dの断面計測値は周囲の標高値に比較して高い値を示すことから、調査における礫除去や精査の繰り返しによって面が下がり、結果として掘り過ぎになってしまった可能性が高い。

埋土 9ヶ所のセクションを設定し断面観察をおこなった。埋土の様相はその検出位置によって2-8層系と2-7層系の2つに分類できる。調査区北東部の遺構埋土は2-8層に近い黒色〜黒褐色土である(セクションa〜g)。調査区西西部の遺構埋土は2-7層に近い暗灰黄色土である(セクションh・i)。共に堆積構造は確認できない。埋土内には一定量の礫が含まれ、わずかながら炭化物も確認された。上色や礫の包含量はその場所の基盤層を反映していることから、溝埋土は埋め立て行為による人為的な形成層の可能性が高い。

遺物検出状況 破片遺物が多数出土した。計数可能な遺物点数は412点である。接合関係の乏しい表面摩耗の進んだ微細破片が大半を占める。破片は全て弥生土器もしくは土師器であり、須恵器は確認できない。その中で、SK2010出土の古墳時代前期壺と接合する摩耗した破片が確認されたことが特筆される。遺物抽出は破片遺物のうち残存率の高いものについておこなった。I1縁部に平行沈線文が施される甕(37・38)は弥生時代後期後葉の帰属とみられる。42は鼓形器台である。脚台部外面にヘラ状工具によって描かれる逆U字形の線刻を2つ組み合わせM字形を成す。線刻上器については「弥生時代後期末葉〜古墳時代前期初頭の鼓形器台を中心に施される」とされ、本例はその特徴と一致する。

遺構の性格と帰属時期 溝である。垂直に近い肩の立ち上がりから溝幅は広くても1m程度と推測



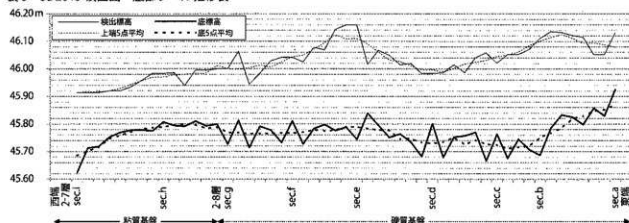
遺物図9 SD2015出土遺物

遺物観察表9

遺物番号	調査区(調査番号)	遺物番号(調査番号)	内径高径	埋土層	注記(cm/g)	特徴	胎土/材質	焼成色	備考
37	2	SD2015(2005)	9	50	口径:10.2 器高:5.8	弥生土師器 外部:口縁部平行沈線文。肩部〜胴部ナデ 内部:口縁部ナデ・ミガキ。肩部〜胴部ナデ	黄褐色 〜10mmの砂粒、 炭屑	良好 内面:にぶい黄褐色 外面:にぶい黄	C1類
38	2	SD2015(2005)	9	50	口径(20高) 器高:4.35	弥生土師器 外部:口縁部平行沈線文+ナデ消し。胴部ナデ 内部:口縁部ミガキ。胴部ナデ	黄褐色 〜2mmの砂粒、 炭屑	良好 内面:黄褐色 外面:黄褐色	外周縁付着 (C2類)
39	2	SD2015(2005)	9	50	I1径:11.25 器高:10.4 最大径:13.0	弥生土師器 外部:口縁部〜胴部ナデ。底部ミガキ 内部:口縁部ナデミガキ。胴部〜底部ナデ	黄褐色 〜2mmの砂粒、 炭屑	良好 内面:にぶい黄褐色 外面:にぶい黄褐色	外周縁付着
40	2	SD2015(2005)	9	50	口径:12.0 器高:5.0	弥生土師器 外部:口縁部〜胴部ナデ。胴部ナデ 内部:口縁部ナデ。胴部ナデ	黄褐色 〜3mmの砂粒、 炭屑	良好 内面:にぶい黄褐色 外面:にぶい黄褐色	
41	2	SD2015(2005)	9	50	I1径:14.0 器高:5.8	弥生土師器 外部:口縁部ナデ。胴部ハケ 内部:口縁部ナデ。胴部ナデ	黄褐色 〜2mmの砂粒、 炭屑	良好 内面:にぶい黄褐色 外面:黄褐色	
42	2	SD2015(2005)	9	50	口径:6.0 器高:11.6 脚径:11.6	弥生土師器 外部:脚部〜胴部ナデ 内部:受部ナデ。脚部〜胴部ナデ。脚部ト 脚子 焼成:外周縁部に線刻	黄褐色 〜2mmの砂粒、 炭屑	良好 内面:黄褐色 外周:黄褐色	



表5 SD2015 検出面・底部レベル推移表



される。そして、調査における範囲だけでも直線状に60m以上延びることを考えると、何か明確な機能を持つ遺構であることは間違いない。遺構規模と形状からは東から西に流れる水路の可能性が挙げられるが、断面観察からは水流があった痕跡は確認できなかった。しかし、溝埋土形成要因は人為的な埋め立て行為とされることから、SD2015が相当な長さの溝として存在したことは間違いない。

溝の遺構時期について、SD2015は古墳時代前期前葉から中葉の廃絶とされるSD2013を切り、古墳時代後期以降近世以前の耕作上とされる2-6層に切られることから、古墳時代前期(中葉)から近世の間の一時期の帰属となる。また、400点を超える山上遺物の中に須恵器が全く含まれないことを加味して、SD2015は古墳時代前期の帰属と判断される。ただし、この溝はその他の第2面主要遺構と比較すると、想定される流向や建物・大溝を問わず全ての遺構を切っている点が特殊といえ、それ以前とは土地利用形態の変化が想定される。同じ古墳時代前期の帰属としても、大溝の時期とは明確に区別して考える必要がある。

もう一つ、特異な器種構成で注目される第1面SK2010出土の壺と接合する破片が確認されたことにより、両遺構の繋がりが見えてくる。SD2015からも須恵器は全く確認できなかったが、SK2010と同じく、帰属時期が新しくなる可能性も考えねばならない。さらに測測を重ね、SK2010項で想定された2-6層形成以前の耕作が成り立つとするならば、SD2015をそれに伴う用水路と考えてもよいのではないだろうか。(淺井・島田)

註1 瀨村 功他 1997『天萬上井前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書53(財)鳥取県教育文化財団

SD2015 検出断面

SD2015 遺構検出表		G3-409			
西層	sec	検出標高	5点平均	底標高	5点平均
	sec1	45.914	45.914	45.624	45.685
		45.914	45.916	45.713	45.702
		45.914	45.916	45.718	45.715
		45.920	45.920	45.752	45.746
		45.920	45.929	45.769	45.759
		45.934	45.943	45.777	45.770
		45.958	45.956	45.778	45.781
		45.984	45.969	45.775	45.786
	sec2	45.984	45.970	45.807	45.789
		45.986	45.978	45.794	45.795
		45.938	45.980	45.791	45.799
		45.995	45.983	45.810	45.797
		45.995	45.986	45.793	45.784
		46.000	46.011	45.799	45.788
	2-7層・2号層境界				
	sec3	46.000	46.000	45.727	45.769
		46.063	45.998	45.813	45.769
		45.944	46.004	45.714	45.765
		45.984	46.012	45.791	45.766
		46.029	46.008	45.778	45.765
		46.042	46.024	45.733	45.768
	sec4	46.042	46.043	45.811	45.766
		46.025	46.051	45.727	45.770
		46.078	46.071	45.783	45.779
		46.069	46.095	45.798	45.775
		46.143	46.122	45.776	45.778
		46.159	46.109	45.789	45.789
	sec5	46.159	46.109	45.744	45.789
		46.016	46.090	45.839	45.784
		46.067	46.061	45.795	45.779
		46.049	46.033	45.751	45.777
		46.015	46.027	45.764	45.745
		46.019	46.010	45.734	45.746
		45.983	45.997	45.682	45.732
		45.983	45.997	45.801	45.730
	sec6	45.986	45.991	45.679	45.734
		46.015	46.002	45.753	45.752
		45.986	46.017	45.757	45.725
		46.041	46.024	45.770	45.742
		46.058	46.032	45.666	45.726
	sec7	46.021	46.045	45.763	45.724
		46.052	46.051	45.676	45.711
		46.052	46.061	45.745	45.716
		46.071	46.064	45.707	45.720
	sec8	46.111	46.100	45.687	45.751
		46.135	46.114	45.785	45.767
		46.132	46.123	45.833	45.786
		46.121	46.111	45.825	45.820
		46.115	46.094	45.798	45.828
		46.052	46.094	45.857	45.847
		46.052	46.088	45.829	45.852
	sec9	46.131	46.078	45.925	45.870
東層	sec10	0.217		0.301	
勾配 (%)		0.3%		0.5%	
勾配 (cm/m)		0.342		0.475	

■ SB2001(図23、表6、写真図版11)

位置 2区第2面M30グリッドに位置する。遺構確認面の標高は45.928m～46.075mである。

検出状況 第2面調査時、2-7層除去面(2-8層上面)を検出したところ9基のピットが格子状に並ぶ状況が確認された。検出した遺構埋土の類似性も認められたため関連性のある遺構群と認識し、その配置から建物と認識し調査を進めた。他遺構との切り合い関係あり。P2020・P2021はSD2015に切られる。

軸方向・平面形状・規模 桁行2間・梁間2間の総柱掘立柱建物跡である。主軸はN-84°-Eをふる。桁行長3.740m・梁間長3.520m、ほぼ正方形の建物が想定される。

SB2001はP2016～P2024の9基の柱穴で構成される。形状と遺構規模は共通性が高い。柱穴は全て円形で皿型の断面形状である。詳細数値(長軸×短軸・確認面からの深さ)は以下の通りである。

P2016(0.813m × 0.679m-0.165m), P2017(0.795m × 0.676m-0.115m)

P2018(0.718m × 0.667m-0.110m), P2019(0.674m × 0.572m-0.120m)

P2020(0.634m × 0.500m-0.220m), P2021(0.704m × 0.500m-0.185m)

P2022(0.752m × 0.720m-0.250m), P2023(0.776m × 0.606m-0.225m)

P2024(0.742m × 0.672m-0.215m)。

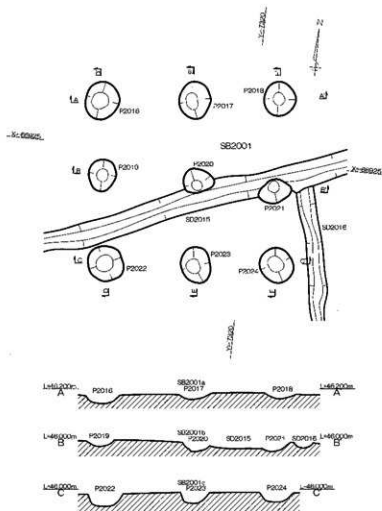
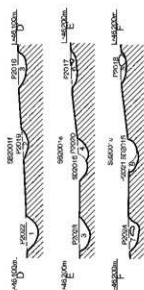


図23 SB2001遺構図



SB2001柱穴セクション土質部表示

層番号	土名	土質	記入物
1	2.0/4.2 暗灰黄色 細粒砂	約10cm以下のブロック土中層	
2	2.0/5.2 暗灰黄色 細粒砂	約10cm以下のブロック土中層、粗粒砂 ～中粒砂・約5cm以下の砂少量	
3	2.0/5.2 暗灰黄色 細粒砂	約10cm以下のブロック土中層、粗粒砂 ～中粒砂少量	
4	2.0/4.2 暗灰黄色 細粒砂	約10cm以下のブロック土中層	
5	2.0/5.2 暗灰黄色 細粒砂	約10cm以下のブロック土中層、粗粒砂 ～中粒砂少量	
6	2.0/5.2 暗灰黄色 細粒砂	約10cm以下の砂少量	
7	2.0/4.2 暗灰黄色 細粒砂	約10cm以下のブロック土中層、粗粒砂 ～中粒砂少量、約10cm以下の砂少量	

P2020 と P2021 の平面規模は他と比較してやや小さくなっているが、これは、SD2015 に切られ一部欠損するためである。

柱穴埋土・礎石の有無 暗灰黄色細粒砂～極細粒砂を主体土とする。埋土には共通点が多い。検出状況と併せて考えると、埋土特徴は以下の要素に集約される。

A. 色調は 2-7 層に基本的に酷似しており、わずかに暗い程度の差しかない。2-8 層を検出基盤層として初めて遺構として認識できる。

B. わずかながら微細遺物が含まれており、遺構としては確実に存在する。

C. 埋土内には黄灰色系のブロック土が散見される。埋土とよく似るがわずかに明るい。起源は 2-7 層と推定される。

D. 分層単位は認められず、ブロック土の分布に偏りは見られない。また、柱根や礎石等、直接柱を示すものは何も確認できない。底面の調整痕も認められない。

プラン及び断面からは柱の痕跡は確認できず、上記所見から導かれる埋土形成要因は埋め立て行為と判断される。また、遺構埋土の起源はほとんどが 2-7 層とみられることから、2-7 層帰属遺構と考えられ、本来の検出面は 2-6 層除去面と判断される。

遺物出土状況 ビットからの出土遺物は 24 点、基本的に表面摩耗の顕著な微細破片ばかりである。この中で器種判定が可能な破片は、壺 2 点・高坏 1 点である。時期のわかる個体には、弥生時代後期前葉とみられる壺口縁部がある。

遺構の性格と帰属時期 柱穴配置から総柱掘立柱建物跡と推定される。ただし、柱痕及びその痕跡が全く確認できなかったことから建物の妥当性を検討する必要がある。表 6 に SB2001 構成柱穴の計測値を示した。柱穴の深さは 0.110～0.250m、この深さで柱を立てることはまず不可能である。本来の帰属面は 2-6 層除去面(2-7 層上面)であるが、建物周辺での 2-7 層の掘削深度は最深で 20cm であるため状況は同じといえる。2-6 層は耕作土とされることから、耕作行為によって柱穴上部はかなり破壊されてしまったと考えられる。次に検出段階での SB2001 柱穴は、第 2 面ビット平均値と比較して、残存状況が悪いにも関わらず径が大きいことがわかる。先の埋土所見を合わせて考えると柱の抜き取り行為が想定される。建物解体に際して、周囲を掘り込んで柱を抜き取った後に埋め戻しがあったと考えれば、大きな掘方を持つ柱痕のない柱穴への理解が可能となるのではないだろうか。以上の検討から SB2001 は掘立柱建物跡であった可能性が高いと考える。

一方、建物の時期に関しては明確に示すことができない。本来の検出基盤層である 2-7 層の堆積時期は弥生時代後期から終末期にかけてと推定される。柱穴出土遺物で時期を示せるものは弥生時代後期前葉の壺破片のみであり、時期判定には適さない。P2020 と P2021 が古墳時代前期と考えられる SD2015 に切られていることから、SB2001 の帰属時期は 2-7 層堆積後から SD2015 開削までの間となる。これは、弥生時代終末期から古墳時代前期までの時期幅を示すことになるが、これ以上詳細な時期を示すことはできない。(浅井・島田)

表 6 SB2001 ビット残存率分析表

	長軸	深さ	深さ/長軸
P2016	0.813	0.165	20.3%
P2017	0.795	0.115	14.5%
P2018	0.718	0.110	15.3%
P2019	0.674	0.120	17.8%
P2020	0.634	0.220	34.7%
P2021	0.704	0.185	26.3%
P2022	0.752	0.250	33.2%
P2023	0.776	0.225	29.0%
P2024	0.742	0.215	29.0%
平均値	0.733	0.174	23.9%
第 2 面ビット平均	0.692	0.230	40.6%

■ SI2001(図 24・25、遺物図 10、遺物観察表 10、写真図版 12・13・50・51)

位置 2区第2面 L34 グリッドに位置する。SI2001を構成する遺構は、土器だまり 2003・P2051～P2054・SK2034である。帰属遺物(土器だまり 2003)確認面の標高は 46.135m、遺構確認面(第2面)の標高は 46.058mである。

検出状況 当遺構は最終的に竪穴住居跡(SI2001)と認定されたが、結論に至るまでの調査・検討期間は長期にわたる。調査工程は大きく2段階に分かれる。

a. 遺物検出～第1面調査-土器だまり 2003の調査-

第1面調査時、2-6層掘削段階において、個体関係を示す破片が一定範囲で面状に広がる状況が確認された。それまでの2-6層内出土遺物は細片土器ばかりであったため、周辺において遺構の存在が想定された。検討のための土層観察用のベルトを設定し、周囲の遺物確認をおこなったところ、個体遺物は3mの範囲内に分布することが確認された。平面積査を再三試みたが遺構は確認されなかった。この周辺は2-7層の堆積はなく、2-6層除去後の第1面検出基盤層は、2-6層と同様の黒色土である2-8層である。遺構埋上が基盤層と類似する可能性を考えた場合、この段階での遺構検出は困難と判断し、遺構の有無の確認は次面調査での課題とした。出土した遺物群は土器だまり 2003として遺構登録し、各種記録後第2面調査に移行した。

b. 2-8層掘削～第2面調査-住居構成遺構の調査-

土器だまり 2003に関連する遺構の有無の確認には2-8層の除去が必要と考えられたため、周辺の2-8層を掘削し面検出をおこなった。検出されたP2053とP2054は、ともに深さが0.6mに達するピットで、P2053からは柱痕が確認された。この二つのピットを軸にして周辺遺構の位置関係を検討した結果、SD2015に切られるP2051とP2052を合わせた4基のピットが正方形に並ぶことが判明した。位置的にも土器だまり 2003と重なることから、竪穴住居跡の存在を想定し、ピットを主柱穴と、土器だまりを住居内の遺物と考えた。SK2034は推定される住居の中央からやや南西にずれた位置で検出された。この範囲内には他に土坑が見当たらないことから住居の中央土坑と推定される。

平面形状・規模・付帯施設 調査において竪穴本体は確認できなかったため、住居の規模は不明である。ただし、記録写真からの推測は可能である。第1面プラン検出写真を検討すると、調査区北部の住居が推定される位置において、扇状に礫が敷かれている範囲を確認できる。この周辺の第2面遺構の埋土は、検出基盤層に比較して礫が少ないことが特徴の一つとされることから、先の礫抜け範囲は遺構である可能性が考えられる。全体を広く見ると、礫抜けと土器だまりを包括する範囲は暗色がやや強い。後に検出される主柱穴はその範囲内に収まっており、主柱穴の中心点と礫抜け範囲の北端間が約3.5mとなる。これを半径とする直径7mの範囲内に土器だまり 2003遺物が全て含まれることから、この範囲を竪穴部の推定範囲とした。ただし、この円は建物の平面形状を示すものではなく、あくまで住居範囲及び規模推定のための補足情報であることを強調しておく。

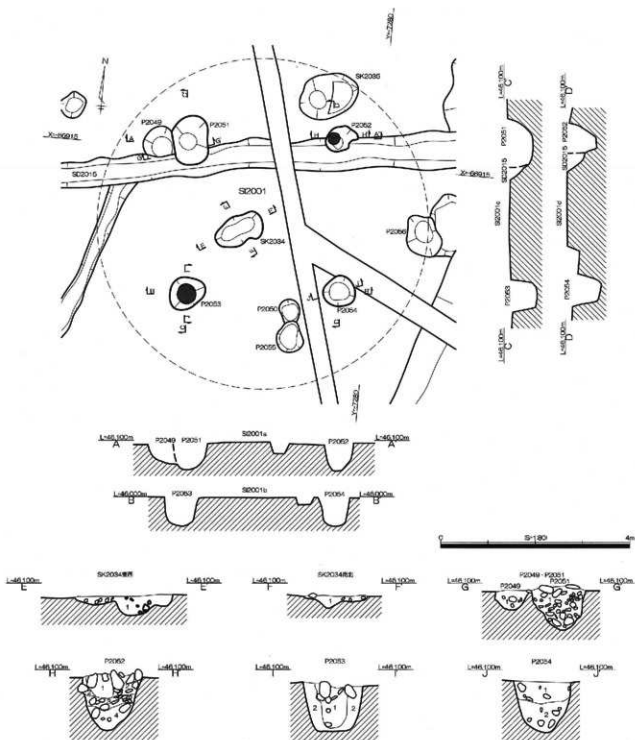
竪穴住居を構成する主柱穴と中央土坑の規模(長軸×短軸・確認面からの深さ)と形状は以下の通りである。

P2051(1.029m×0.767m-0.545m) 平面形は楕円形、断面形はU字形

P2052(0.693m×0.507m-0.669m) 平面形は円形、断面形はU字形

P2053(0.801m×0.655m-0.582m) 平面形は円形、断面形はU字形

P2054(0.673m×0.633m-0.599m) 平面形は円形、断面形はU字形



S2001 セクション 土構図原表

遺跡番号	層番号	層名	土名	記入内容
SK2004	1	中央土壇	黒砂	埋砂中への砂砂干量
P2049	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2001	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2002	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2003	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2004	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2005	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2006	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	

S2001 セクション 土構図原表

遺跡番号	層番号	層名	土名	記入内容
P2003	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2004	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2005	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	
P2006	1	主柱穴	黒砂	埋砂中への砂砂干量
	2	黒砂	埋砂中への砂砂干量	

図24 S2001遺構図1

SK2034(1.061m × 0.574m-0.200m) 平面形は楕円形、断面形は不整形である。

主柱穴間距離は3.12m-3.24m、配置は正方形に近い。4つの主柱穴の底面標高は45.379m～45.480mで、エレベーション図からは底が揃っている状況が読み取れる。また、底の平均標高は45.435mとなり、第2面ビット平均値の45.711mに対して明らかに深い数値を示す。

**埋土** 周辺の第2面遺構と同じく黒色砂質土を主体とする埋土である。P2052・P2053では、柱根と掘方とは礫含量の違いで分層することができる。これに対して、P2051などは埋土全体に礫が広がっていることから、柱が抜き取られた可能性がある。礎石は確認されなかったが、基本的に基礎層が固く締った砂礫層のため、底が揃っていればあえて礎石を設置する必要はないと考える。

**遺物出土状況** 遺物と遺構の関係について、土器だまり2003とSI2001の遺物・遺構位置関係及び標高情報を集約した図25を基に検討をおこなう。

a. 遺物の帰属層位について 土器類は個体単位でまとまって出土したが、状況的には第1面に対して完全に浮いている。定義上では、第1面は2-6層除去面とされることから、そのままでは2-6層に帰属すると判断される。しかし、土器だまり2003では、遺物と遺構を探すための掘り下げと精査を繰り返しているため、実際はそれ以上に面が下がっている。したがって、遺物の帰属検討のためには2-6層の底を示す必要がある。最寄りの2-6層標高値はSD2015セクションcで確認できる。2-6層は水平に広がる耕作土とされることから、この数値を2-6層耕作の底と仮定した。遺物はこの2-6層の底あたりに集中している。若干浮いている遺物はあるが、残存率の非常に高い個体遺物(43・44)を評価してこれらの遺物を2-6層以下、SI2001の帰属と考える。

b. 遺物性格について 次に出土遺物の性格について検討する。土器だまり2003遺物は取り上げ位置(dot)情報から次の二群に分類される。

A群 46.100m付近に面状に分布する一群、残存率の高い個体が多い。2-6層によって多少の擾乱を受けている可能性はあるが、個体単位で密集しており原位置を保つとみられる。主柱穴上に遺物が全く無いこととあわせて考えると、住居床面遺物の可能性が高い。

B群 SK2034と平面位置を同じくし46.100m以下に分布する一群で、密集する遺物には重なりがみられる。SK2034に帰属する遺物と考えられる。

c. 遺物について

A群 A群は竪穴住居時期を示す遺物群である。残存率の高い壺が2個体(43・44)ある。43は体部上半に叩き調整による平坦面が残る。尖底から丸底ぎみの底部は弥生時代終末期以降の要素とみることができそうである。44の口縁部はやや厚手、緩やかに外反しながら立ち上がる。外面は無文である。球胴傾向の体部と小さな底部から弥生時代終末期前半の要素が強い個体と考えられる。外面全体に煤が付着する。46はスタンプ文が配される器台である。受部と裾部に上下対称に同心円文を施す。他とA群遺物と比較して出土位置がやや低い。47は蓋である。器表の荒れが激しく調整不明であるが、残存状態は良い。49は砂岩製底石である。底面は4面確認でき、主要面とみられる裏裏2面の中央部の凹みが顕著である。A群の遺物時期は弥生時代終末期前半から後半の範囲に収まると考えられる。

B群 B群はSK2034に帰属する遺物である。45はスタンプ文が配される器台である。受部上半下端に同心円文を施す。時期は弥生時代終末期前半までと思われる。48は甕形土器である。広口部の破片が重なって出土した。甕形土器はその用途は不明ながら、住居跡からの出土例が多い器種

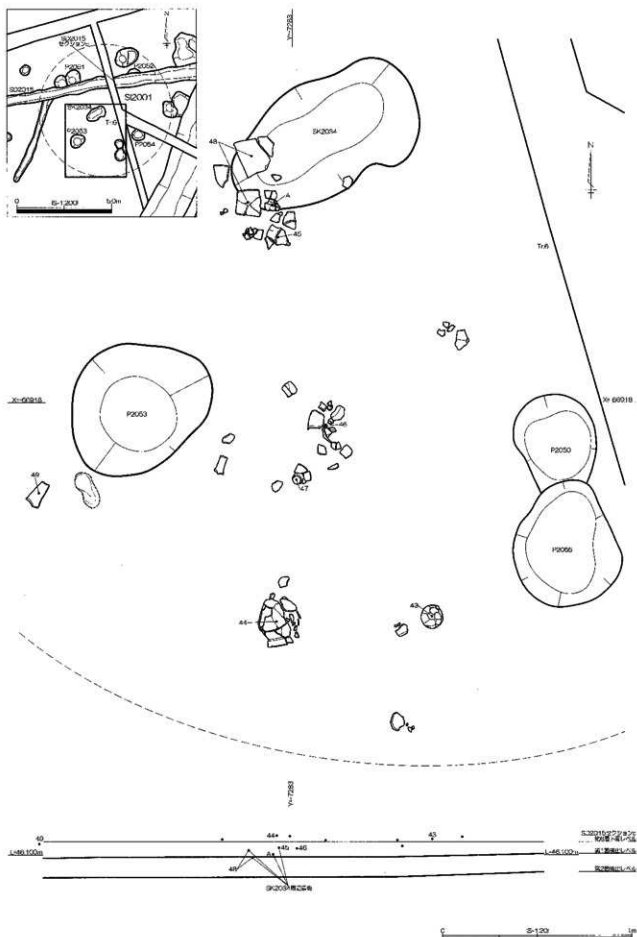
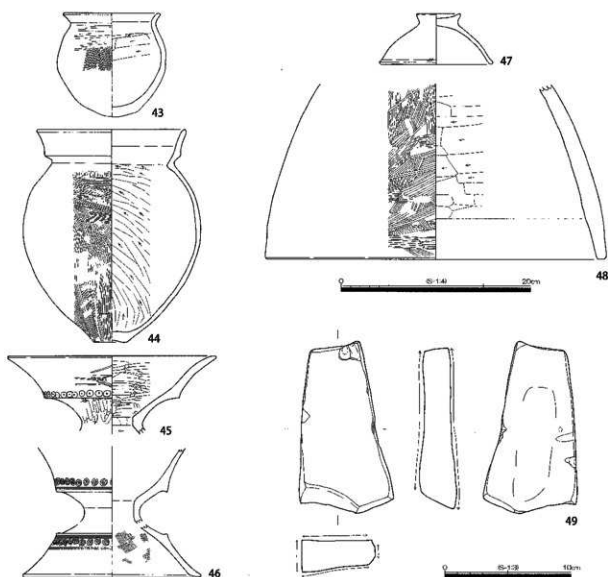


図25 SI2001遺構図2(土器だまり2003遺構図)



遺物図10 S12001内土器だまり2003出土遺物

遺物観察表 10

遺物番号	所在区	発掘番号 (調査区画)	遺物区 番号	図面 番号	類別 器種	法量 (cm/g)	特徴	粘土 / 材質	焼成 温度	備考
43	2	S12001内 土器だまり2003 (2119)	10	50	弥生土器 甕	口径:10.0 器高:10.95 最大径:11.4	外面:口縁部ナデ、体部ハケ、底部ナデ 内面:口縁部ナデ、体部ケズリ 特記:外面にタタキ痕残る	甕土 ~2mmの砂粒、 少ない	外周:灰黄陶 内面:橙	外面黒付着
44	2	S12001内 土器だまり2003 (2119)	10	50	弥生土器 甕	口径:15.4 器高:22.5 最大径:18.7 底径:3.4	外面:口縁部-器部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ナデ、器部-体部ケズリ	甕土 ~3mmの砂粒、 少ない	甕土 内面:橙	外山黒付着 10 磁
45	2	S12001内 土器だまり2003 (2119)	10	51	弥生土器 厨子 (煎形厨子)	口径:20.8 器高:8.3	外面:受部ナデ後ミガキ、同心円文、煎形ハケ ミガキ 内面:受部ミガキ、煎形ナデ、厨子上縁ケズリ	甕土 ~3mmの砂粒、 少ない	甕土 外周:灰黄陶 内面:橙	外山黒付着 スタンプ文上部
46	2	S12001内 土器だまり2003 (2119)	10	51	弥生土器 厨子 (煎形厨子)	器高:7.7 口径:18.8	外面:受部ナデ、厨子上部平縁文4条1番を 2部、同心円文、煎形(ミガキ) 内面:受部-煎形煎形不明、厨子上縁ケズリ	甕土 ~1mmの砂粒、 少ない	甕土 外周:灰黄陶 内面:橙	スタンプ文下部 外周:灰黄陶 内面:橙
47	2	S12001内 土器だまり2003 (2119)	10	51	弥生土器 甕	口径:6.4 器高:5.4 口径:12.0	外面:厚形のため測型不明 内面:厚形のため測型不明	甕土 ~2mmの砂粒、 少ない	甕土 外周:橙 内面:橙	
48	2	S12001内 土器だまり2003 (2119)	10	51	弥生土器 甕形土器	器高:18.5 口径:17.0	外面:体部~広口径ミガキ 内面:体部ケズリ、広口径ナデ	甕土 ~2mmの砂粒、 少ない	甕土 外周:橙 内面:橙	
49	2	S12001内 土器だまり2003 (2119)	10	51	石函 磁石	高さ:13.7 幅:7.5 厚さ:3.0 重量:426	平蓋の内蓋形、側蓋は矩形 底蓋4面・側蓋2面	磁石(新形平蓋)	内面:灰黄陶	



である。抽出外の特記遺物ではやや新しい要素が見られる裏口縁部(図25上器A)がある。口縁下部の張り出しの発達が特徴的である。端部が欠損するため確定的ではないが、少なくとも弥生時代終末期以降に帰属すると考えられる。

**破片遺物** その他の破片遺物点数は46点、器種判定可能なものは壺2点・甕5点・高坏2点・器台11点である。出土遺物からは器台の多さが特筆される。

**遺構性格と帰属時期** 床面帰属とみられる遺物群と、正方形に並ぶ4本の主柱穴が検出されたことから、竪穴住居跡と考えられる。竪穴部は確認できなかったが、2-6層下面検出時に床面遺物が出上ることから、後世の耕作による削平のため、最初から残っていなかったものと考えられる。床面遺物は使い込まれた砥石や、煤が付着する甕など生活に密着したものがみられる。また、器台の点数が多いのも特徴である。

竪穴住居の時期は、SD2015との切り合い関係から少なくとも古墳時代前期以前となり、床面出土遺物からは弥生時代終末期と判断される。

中央土坑としたSK2034は、新しい要素の遺物(図25土器A)が出土したことにより、その評価には慎重になる必要がある。共存する器台は床面遺物に近い時期と考えられるため、両者が同時期に存在していてもよいと考えることもできるが、器台が混入遺物である可能性もある。新しい遺物で遺構時期を決定する原則に従うなら、SK2034は住居廃絶後の別遺構となる可能性があることを指摘しておく。

#### ■ SK2031・SK2041

SK2031とSK2041は共に溝状土坑である。調査時は個別遺構として扱ったが、関連性の高い遺構であると考えられる。遺構所見は遺構概要の後にまとめて検討する。

#### ■ SK2031(図26、遺物図11、遺物観察表11、写真図版14・51)

**位置** 2区第2面M32・M33グリッドに位置する。遺構確認面の標高は45.982mである。

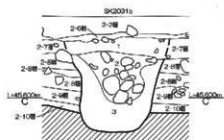
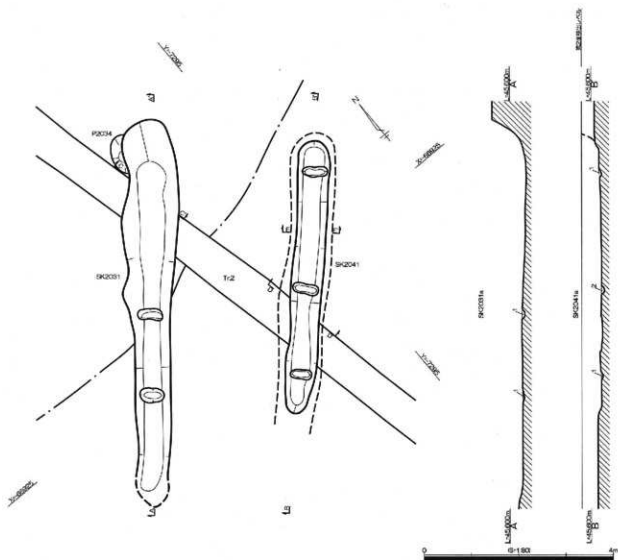
**検出状況** 調査初期に掘削された調査区中央のTr.2断面観察において2-8層を切る深い掘り込みが確認された。遺構下方に暗色が強くなる埋土は2-8層が強く影響したものと捉え、これを第2面



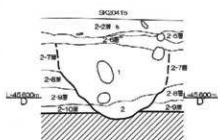
遺物図11 SK2031出土遺物

#### 遺物観察表 11

遺物番号	調査区	遺構番号 (調査番号)	遺構別 層付	発見 層	器種	法量 (cm/g)	特 徴	胎土/材質	表 色	備 考
50	2	SK2031 (211)	11	51	弥生土器 甕	つまみ塚(3.0) 器高:4.05 口径:39.0	外面:つまみ塚~大丹部ナデ裏ミガキ 内面:大丹部ナデ後ミガキ	中半部 ~1mmの砂粒、 硬質	口縁 外面:高い稜地 内面:低い稜地	
51	2	SK2031 (211)	11	51	弥生土器 甕	口径:16.0 器高:1.1~	外面:1層部平行浅溝文、縞部ナデ 内面:口縁部ミガキ半部下端ナデ、縞部クズリ	硬質 ~2mmの砂粒、 口縁 外面:低い稜地 内面:低い稜地 少量の 硬質	外面:低い稜地 内面:低い稜地	片割れ付着 C1類
52	2	SK2031 (211)	11	51	弥生土器 高坏	器高:2.6~	外面:口縁部ナデ、縞部ミガキ 内面:1層部~2層部ミガキ	硬質 ~0.5mmの砂粒、 少量の 硬質	外面:低い稜地 内面:低い稜地	
53	2	SK2031 (211)	11	51	弥生土器 高坏	口径:11.8 器高:2.6~	外面:1層部ナデ後斜部ナデ 内面:1層部後縁文1条、口縁部ミガキ半部下 ナデ	硬質 ~2mmの砂粒、 少量の 硬質	外面:低い稜地 内面:低い稜地	器台と縁部両面で新 縁 両面茶



※入水部は土質変化の区域、欄を添す。  
 1は土質が中砂に化す。



#### SK2031セクション土質観察表

観測番号	層番号	Coloration (土色)	土性	記入内容
SK2031a	1	10YR2/2 黒褐色	細粒砂	細粒砂～中粒砂少量
	2	10YR6/1 褐色	中粒砂	中粒砂
SK2031b	1	10YR2/2 黒褐色	細粒砂	細粒砂～中粒砂、厚10cm以下の薄少量
	2	7.5Y2/1 黒色	中粒砂	厚20cm以下の細多量、粗粒砂中量
SK2031c	3	7.5Y2/1 黒色	細粒砂	細粒砂～中粒砂、厚10cm以下の薄少量

#### SK2041セクション土質観察表

観測番号	層番号	Coloration (土色)	土性	記入内容
SK2041a	1	2.5Y2/1 黒褐色	細粒砂	細粒砂～中粒砂中量
	2	2.5Y3/1 黒褐色	細粒砂	細粒砂～中粒砂中量
SK2041b	1	2.5Y2/2 黒褐色	細粒砂	細粒砂～中粒砂中量 厚20cm以下の細多量
	2	5.0Y3/1 黒褐色	細粒砂	細粒砂～中粒砂中量
SK2041c	1	2.5Y3/1 黒褐色	細粒砂	細粒砂～中粒砂中量



図26 SK2031-SK2041遺構図

調査対象遺構と判断した。第2面(2-7層除去面)検出時、Tr.2を中心とした両翼数m分が溝状に検出されたに過ぎず、その終端は不明瞭であった。溝の可能性を考え、延長が想定される位置へのサブトレンチ確認をおこなったが、どの断面にも遺構の延長は確認されなかった。このため、平面検出範囲で取束する溝状土坑と判断した。遺構終端部について、北東側終端部は立ち上りの壁面で2-9層・2-10層との明瞭な境界が確認されたが、南西側終端部はサブトレンチによって既に破壊されていたため、下端のみの確認となった。遺構の底面において、長軸方向に直交する楕円形の小落ち込みが2か所検出された。P2034を切る。

**平面形状・規模** 溝状土坑の平面形状は直線状で、長軸7.437m・短軸1.213mを測る。主軸はN-39°-Eをふる。断面形状はU字形で、確認面から遺構底面までの深さは0.764mである。底面落ち込みの形状・規模は共通しており、平面形は楕円形、断面形は浅いU字形である。規模は北側落ち込みが長軸0.527m・短軸0.244m・深さ0.068m。南側落ち込みが長軸0.514m・短軸0.315m・深さ0.042mである。

**埋土** 埋土は最大3層に分かれる。下層埋土は黒色土で、上方にかけてやや明るく、褐灰色に変化する。遺構検出が困難であったことは埋土が検出時の基盤層と類似することを示し、これは掘削土がそのまま埋戻しに使用された結果と思われる。基盤層中の礫密度が高くなる遺構北東部の埋土には、礫が多く含まれる。底面落ち込みの埋土は、土坑本体の下層埋土を主体とし、2-10層ブロック土が少量含まれる。調査時は2-7層除去面より掘り込まれる遺構と認識したが、面所見から判断してこれは誤認の可能性が高いと考える。記録写真から、土坑内と想定される範囲の2-7層が周囲に比してわずかに明るい事が確認できる。したがって、層位上の帰属は2-6層除去面と判断される。

**遺物検出状況** 51は甕である。口縁部の平行沈線文が明瞭な個体で、帰属は弥生時代後期後葉と思われる。特記遺物として斜格子文を施された高環(53)が挙げられる。坏口縁部の微細破片であるが、外面のへら描き斜格子文と内面の精緻なミガキが特徴的である。古備系の要素が強く、搬入品の可能性が高い。その他の破片遺物では、壺1点・甕12点・高環1点である。点数の多い甕の時期は弥生時代後期後葉から終末期前半と推定される。他遺構や層中遺物と比較して、やや大きな破片が多いことから遺構時期判定に使用できると考える。

#### ■ SK2041(図26、写真図版14)

**位置** 2区第2面M33グリッドに位置する。ただし、遺構確認とプラン検出は第3面調査時である。確認面の標高は45.982mである。

**検出状況** 調査初期に掘削された調査区中央のTr.2断面観察において2-8層を切る掘り込みが確認され、これを第2面調査対象遺構と判断した。しかし、第2面(2-7層除去面)で検出された溝状のプランは極めて不明瞭で、終端部も判然としなかった。プランを縦断するサブトレンチによる断面検討の結果、遺構ではないと結論付けた。しかし、第3面調査、Tr.13の面検出において同位置に遺構が確認されたため、溝状土坑として追加調査を実施した。遺構の底面において、長軸方向に直交する楕円形の小落ち込みが3か所検出された。

**平面形状・規模** 溝状土坑の平面形状は直線状で、長軸5.785m・短軸0.679mを測る。主軸はN-42°-Eをふる。断面形状は浅いU字形で、確認面から遺構底面までの深さは0.174mである。底面落ち込みの形状・規模は共通しており、平面は楕円形、断面形は浅いU字形である。規模は北側落

ち込みが長軸 0.534m・短軸 0.216m・深さ 0.052m、中央落ち込みが長軸 0.550m・短軸 0.223・深さ 0.067m、南側落ち込みが長軸 0.455m・短軸 0.209m・深さ 0.059m である。

**埋土** 埋土は上下2層に分かれる。遺構検出が困難であったことは埋土が検出時の基盤層と類似することを示し、これは掘削土がそのまま埋戻しに使用された結果と思われる。基盤層中の礫密度が高くなる遺構北東部の埋土には、礫が含まれる状況が確認された。底面落ち込みの埋土は、基本的に土坑本体の下層埋土と変わらない、中央落ち込みにのみ2-10層ブロック土が確認された。

**遺物検出状況** 出土遺物の中には抽出遺物はない。土器破片点数は37点と微細破片である。器種内訳は、壺1点・甕25点・高坏2点・器台3点・低脚坏1点である。器種構成比では甕の多さが特筆される。平行沈線文が主体を占める中で、弥生時代後期中葉以前に属すると思われる破片も少数混じる。古い要素を示すものは器表の摩耗が著しい。特記遺物では、装飾のある破片がある。同心門文が施されるスタンプ文土器1点、貝殻腹縁による羽状文が施される破片1点である。どちらも薄く仕上げられた体部の微細破片である。SD2014で出土している羽状文小壺(122・123・124)に類似する個体と思われる。

#### SK2031・SK2041の遺構性格と帰属時期について

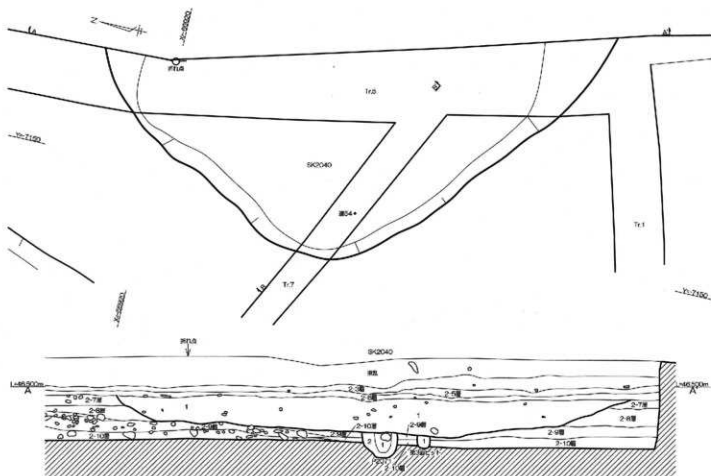
SK2031とSK2041は共に溝状土坑として個別に調査をおこなった。調査時は遺構認識の甘さにより検出面を逸えてしまったが、層位上の帰属は共に2-6層除去面となる。遺構規模(SK2041は推定値)や主軸方向、遺構底面で検出された楕円形の小落ち込みなどの共通点から、同じ性格を持つ遺構とみて間違いないと考える。出土遺物の時期幅は弥生時代後期中葉から終末期前半までであるが、残存は悪いが器表の荒れの少ない低脚坏から遺構の帰属時期は弥生時代終末期前半と考えられる。

遺構性格について、当初は平面形状から墓坑を想定したが、深さが70cm以上残っていたにもかかわらず副葬品に値する遺物類がなかったことや、北東部の埋土に礫が多量に含まれることなどから判断して、その可能性は極めて低いと思われる。そのほかには、溝状土坑の端が揃い、かつ並行する状況进行评估して、布掘建物の可能性を指摘できる。布掘建物とは桁行方向に並行する布掘りをおこない、その上に柱を据える掘立柱建物跡とされる。布掘りは荷重に対する基礎構造とされることから倉庫としての機能が有力視されており、掘方内に柱穴や枕木が確認される例がある。本調査では枕木痕跡や柱痕等は確認されなかった。遺構底面で検出された楕円形の落ち込みを柱穴とするのは無理があるが、二つの土坑の共通性を示すには有力な物証である。SK2031・SK2041底面の平均標高はそれぞれ45.318m・45.400mとかなり深い値を示す。底面平均比高8.2cmは、長さが7mを超える遺構である点を考慮に入れると、かなりの近似値といえ、底を揃える意図があったとみることができる。確実的な根拠は示せないが、両土坑の性格としては、布掘建物の可能性が最も高いと考える。建物であれば、梁間3.266m・桁行7.437mの規模となる。

#### ■ SK2040(図27、遺物図12、遺物観察表12、写真図版15・52)

**位置** 2区第2面M36グリッドに位置する。遺構確認面の標高は46.107mである。

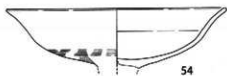
**検出状況** 大溝(SD2012・SD2013・SD2014)確認用のトレンチ(Tr.7)掘削時に残存率の高い高坏(54)が出土した。出土レベル的には2-7層内に収まっているが、層中遺物が希薄になりつつあるなかでの出土であった。このため、Tr.5断面の再確認をおこなったところ、東に向かって2-7層を切る緩やかな



※2-C層は植生名D区画C層を示す。詳細は基本植生別に記載

遺物番号	層番号	土層	土質	出土数	備考
SK2040	1	2.5Y3/1 黄褐色	粘砂砂～中粒砂中量 上方に赤けて 粘砂砂 粘るなる。径5cm以下の礫・成化物少量		
SK2040	2	2.5Y3/1 黄褐色	細砂砂～ 細砂砂		加工層
P2071	1	2.5Y2/1 黒色	粘砂砂～ 粘砂砂		第3面遺構
P2071	2	2.5Y3/1 黄褐色	中粒砂～ 細砂砂		第3面遺構
SK2044	1	10YR2/1 黒色	中粒砂～ 粘砂砂		第3面遺構
SK2044	2	2.5Y2/1 黒色	粘砂砂～ 粘砂砂		第3面遺構 プランクton

図27 SK2040遺構図



遺物図12 SK2040出土遺物

遺物観察表 12

遺物番号	調査区	遺物番号 (調査区分)	遺物番号	種別	法量 (cm/g)	特徴	胎土/材料	焼成色	備考
54	2	SK2040 (2112)	12	52	赤牛土器 高坪	口径: 22.0 器高: 6.4	外面: 口縁部ナデ、環底部ナケ 内面: 環部ナデ	黄褐色 ～4mmの砂粒、 内面: 黄褐色	焼きむずみが多い
55	2	SK2040 (2112)	12	52	赤牛土器 高坪	口径: 19.0 器高: 4.6	外面: 口縁部ナデ、環底部ナケ後ナデ 内面: 環部ナデ	黄褐色 ～2mmの砂粒、 内面: 灰白色	

掘り込みが確認され、これを落ち込み状の遺構とした。落ち込みは調査区東壁 (Tr.5) を越えてさらに東へ延びる。Tr.5 断面から、遺構毎層は 2-6 層除去面になることが確認された。遺構確認時の基盤層 (2-8 層) に比べて遺構埋土は色調がわずかに明るく砂粒が多く含まれる。

平面形状・規模 平面形は隅丸方形と推測される。長軸 6.747m・短軸 3.031m、共に確認範囲での最大値である。東側は調査区外にさらに広がることが予想される。断面形は浅い U 字形で、確認面から遺構底面までの深さは 0.319m、Tr.5 セクションから確認できる 2-6 層除去面からの残存値は 0.671m である。

埋土 Tr.5 と Tr.7 セクション上で断面確認をおこなった。埋土は上下 2 層に分かれる。上層は黒褐色細粒砂～極細粒砂を主体とする。微細な炭化物片がわずかに含まれる。径 5cm までの礫が散在し上方に向かってやや明るくなるが、連続する変化であるため分層はできない。周囲からの土壌流入による埋積過程における一連の堆積層と思われる。下層は黒褐色細粒砂～極細粒砂を主体土とし、これに 2-9 層のブロック土が含まれるのが特徴である。遺構開削時の加工層と思われる。

遺物検出状況 高坏 (54) は坏部のみであるが、その残存率は高い。受部中位にある稜は緩く、外反する立ち上がりを持つ。焼きむずみ目が激しい。弥生時代終末期後半の帰属と考えられる。その他の器種は、壺・甕・器台・低脚坏がある。全て接合関係の乏しい細片遺物である。遺物の時期は甕・器台の特徴から、弥生時代後期後葉から終末期の間と推定される。計数可能な破片は 56 点である。遺構規模から考えると遺物は希薄と言え、器種のバリエーションが豊かなことが特徴である。この中に、脚台のみの残存だが表面摩耗の少ない低脚坏がある。弥生時代終末期後半の帰属と考えられる。

遺構の性格と帰属時期 全容が不明なため、性格不明の落ち込みとする。底に加 T 層と思しきブロック土を確認したことから、落ち込みの形成は人為によるものと考えられる。上層埋土は均質な土質のこと、周囲の基盤層と類似する埋土であることから、その後は流入土によって徐々に埋積が進んだものと思われる。埋積時期は出土遺物から弥生時代後期後葉から終末期後半と推定される。

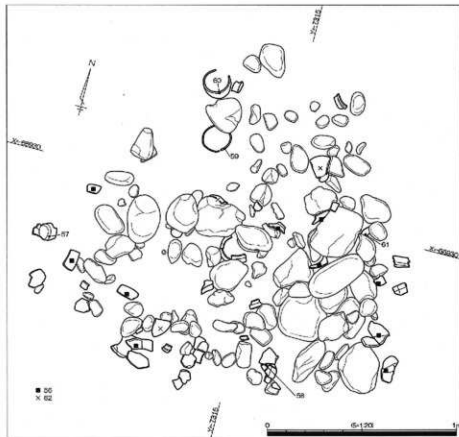
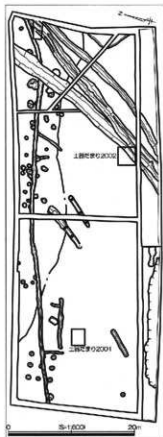
#### ■土器だまり 2001 (図 28、遺物図 13、遺物観察表 13、写真図版 15・52)

位置 2 区第 2 面 N31 グリッドに位置する。遺構 (遺物・礫) 確認面の標高は 46.086 ~ 45.866m である。

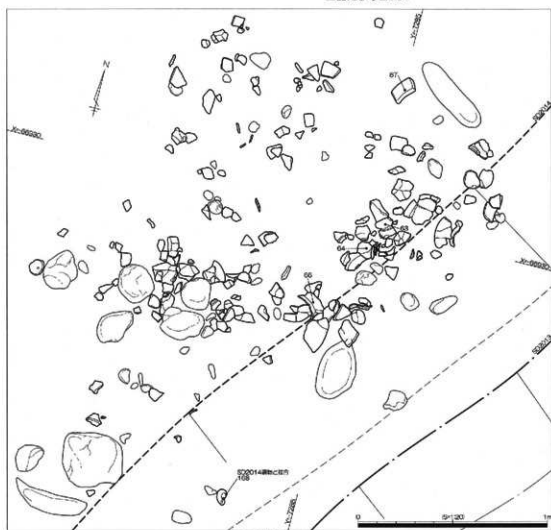
検出状況 第 2 面調査時、2-7 層掘削中に礫集中部が検出された。礫の密度が最も高いところでは他ではほとんど見られないような 30cm を超える巨礫が多く含まれる。礫の間に多数の遺物片が確認されたため遺構扱いとし、土器だまりとして個別調査をおこなった。この状況下で最初に考えられるのは検出漏れ遺構の存在である。面を揃えて精査を試みたが掘方は確認されなかった。次に、遺構埋土がこの時点での基盤層である 2-7 層と類似していた場合を想定し、礫と遺物を段状に残して第 2 面 (2-7 層除去面) 上での再精査、さらに、出土状況記録後の十字半載による断面観察をおこなったが、掘方は確認できなかった。

平面形状・規模 遺物と礫は円形に分布し、その出土範囲は東西 2.060m・南北 1.805m を測る。南東部に巨礫が集中する。

遺物検出状況 土器の残存状態は微細片から完形までさまざまである。礫の間に挟まる破片の多さから、礫と土器が一括廃棄された状況が窺える。壺 (56) は遺構全域に広がる破片が接合した個体である。体部は球形で口縁部はやや開きながら直線状に伸びる。57・58 は直口壺である。口縁屈曲部



土器だまり2001

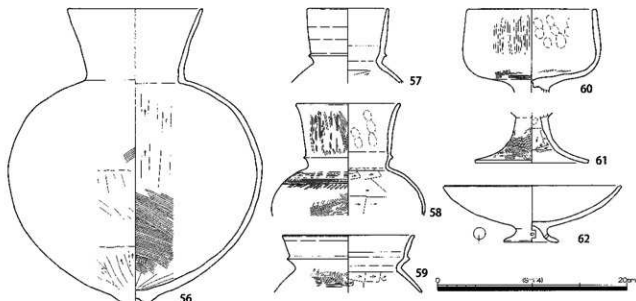


土器だまり2002

図28 土器だまり2001-2002微細図

からの立ち上がりが発達しており、弥生時代終末期後半に属すると思われる。甕(59)は複合口縁下端部の張り出しが顕著で口縁上端部に平坦面を持つ。古墳時代前期前葉に属する。1.2mの範囲に分布する3点の破片が接合し完形となった低脚杯(62)は、脚部に一箇所だけ開けられた孔が特徴的である。径2.5mm、焼成前に穿孔されている。抽出外遺物の破片数は255点と微細片である。直接の接合関係にないが、同一個体と思われる破片が多く、56と同様の傾向にあるといえる。器種内訳は、甕66点・高杯6点・器台2点・低脚杯1点である。甕の比率が非常に高く、古墳時代前期に属する個体の多さが特筆される。その数量比は弥生時代が10点に対し、古墳時代が51点と圧倒的である。その他の遺物では5mm程度の須恵器の微細破片が1点あるが、混入の可能性があるため積極的には扱えない。

**遺構の性格と帰属時期** 最後まで掘り込みが確認できなかったため、調査所見からは土器集中部としか評価できない。しかし、他では見られない巨礫の集石や、弥生時代後期から終末期にかけての堆積層とされる2-7層内に、59に代表されるような古墳時代前期の要素が強い甕が多く出土していることを考えると、やはり、窪みが存在した可能性を考えたい。礫と遺物が平面状に分布する点から、木遺構が廃棄場所としての性格を持つと仮定すると、遺構底面に遺物類が集中することは自然といえ



遺物図13 土器だまり2001出土遺物

遺物観察表 13

遺物番号	調査区	遺物番号 (調査番号)	図面番号	器種	材質	重量 (g)	特徴	胎土/材質	焼成色	備考
56	2	土器だまり2001 (2007)	13	52	(土脚器) 甕	口径:14.2 高さ:31.0 最大径:26.8 底径:3.2	外底: 口縁部~肩部ナデ 内底: 1線部~中部上帯ナデ、底部下半ハケ、底面ハケナデ	中や中 ~0.5mmの砂粒、 黄緑	赤褐色 内面: 黄緑	
57	2	土器だまり2001 (2007)	13	52	弥生土脚器 (土山甕)	口径:8.2 高さ:7.9	外底: 口縁部~肩部ナデ 内底: 口縁部~肩部ナデ、列帯ナデ	赤 ~3mmの砂粒、 少ない	赤褐色 内面: 浅黄緑	
58	2	土器だまり2001 (2007)	13	52	弥生土脚器 (西口甕)	口径:10.4 高さ:11.8 最大径:16.2	外底: 口縁部~肩部ナデ、列帯ナデ、列帯ナデ、列帯ナデ 内底: 口縁部~肩部ナデ、列帯ナデ	黄褐色 ~1mmの砂粒、 わずかに	赤褐色 内面: に近い黄緑	2破片を接合して作成
59	2	土器だまり2001 (2007)	13	52	土脚器	口径:13.4 高さ:5.1	外底: 口縁部ナデ、肩部ハケ後ナデ、肩部ハケ 内底: 口縁部~肩部ナデ、肩帯ナデ	赤褐色 ~4mmの砂粒、 黄緑	赤褐色 内面: 黄褐色	口縁部保存者 T1 壁~F2 葉
60	2	土器だまり2001 (2007)	13	52	弥生土脚器 高杯	口径:12.0 高さ:8.8 最大径:14.5	外底: 口縁部ナデ・ミガキ、列帯ハケ、列帯ハケ 内底: 口縁部ナデ、列帯ハケ・ナデ	黄褐色 ~7mmの砂粒、 黄緑	赤褐色 内面: に近い黄緑	
61	2	土器だまり2001 (2007)	13	52	弥生土脚器 高杯	口径:5.3 高さ:11.2	外底: 口縁部ハケ後ナデ、肩部ハケ、肩部ハケ 内底: 口縁部ナデ	赤褐色 ~2mmの砂粒、 黄緑	赤褐色 内面: 浅黄緑	
62	2	土器だまり2001 (2007)	13	52	弥生土脚器 低脚杯	口径:18.5 高さ:5.1 底径:5.6	外底: 厚肉のため観察不明 内底: 厚肉のため観察不明 特記: 脚部形成部厚肉、脚部径2.5mmあり	中や中 ~0.3mmの砂粒、 少ない	赤褐色 内面: 浅黄緑	

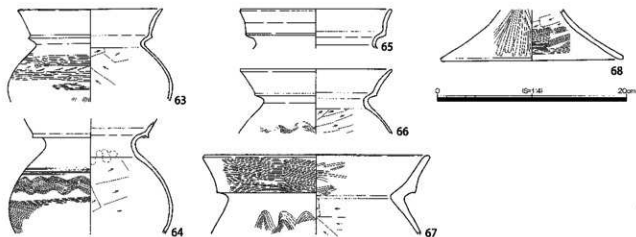


礫と遺物の中で最も低い標高値 45.866m に対して、最終確認面である第 2 面標高値は 45.765m となることから、最終確認時には面を下げ過ぎていた可能性が高い。断面上で確認できなかった以上はあくまで仮説に過ぎないが、調査区中央部から南部にかけての第 2 面遺構は埋土が基盤層に近く検出が困難なものが多いことを考慮し、土器だまり 2001 が古墳時代前期に帰属する廃棄目的の土坑であった可能性を指摘しておく。

### ■土器だまり 2002(遺物図 28、遺物図 14、遺物観察表 14、写真図版 15・53)

位置 2区第2面 N34 グリッドに位置する。遺構(遺物・礫)確認面の標高は 46.211 ~ 46.000m である。

検出状況 第 2 面調査時、2-7 層掘削中に土器破片の密度が高い個所が検出された。破片の大きさは概ね 10cm 程度である。周辺遺物に比べてやや大きく、原形が判別できる個体が確認されたため、検出漏れ遺構の存在を想定し、土器だまりとして個別調査をおこなった。最初に土器精査を、次に面を描いて精査を試みたが掘方は確認されなかった。遺構埋土がこの時点での基盤層である 2-7 層と類似していた場合を想定し、礫と遺物を段状に残して第 2 面(2-7 層掘削面)上で再精査をおこなったが、遺物範囲を囲むような掘方は確認できなかった。この位置では後の第 2 面精査において SD2013・SD2014 が検出された。



遺物図14 土器だまり2002出土遺物

遺物観察表 14

遺物番号	調査区	遺構番号 (調査区)	遺物図 番号	図版 番号	発見 時期	材質 (cm/g)	特徴	胎土/材質	焼成 色調	備考
63	2	土器だまり 2002 (2116)	14	53	弥生上層 中	口径 14.8 器高 9.8 ~	外底: 口縁部~胴部ナデ、胴部平行線文・14線文 器底: 器底中央部突出、体部口位ハケ 器大径 17.1 内径 11.6 器部~器部ナデ、体部ナデ	器底 外底: ~2mm の砂粒 器底	黄褐色 外底: 赤い~ 内底: 緑	外底埋付層
64	2	土器だまり 2002 (2116)	14	53	弥生上層 中	口径 13.2 ~ 器高 12.1 ~	外底: 口縁部ナデ、器部~器部ハケナデ、体部 上ハケ後平行線文・波状文 器大径 17.2 内径 11.2 内底: 口縁部~器部ナデ、体部ナデ	器底 外底: ~2mm の砂粒 器底	黄褐色 外底: 緑褐色 内底: 浅黄緑	
65	2	土器だまり 2002 (2116)	14	53	土師器 中	口径 15.0 器高 4.2 ~	外底: 口縁部~胴部ナデ 内底: 口縁部~器部ナデ、器部ナデ	器底 外底: ~2mm の砂粒 器底	やや不黄 外底: 黄緑 内底: 灰黄緑	外底埋付層 F1 層~F2 層
66	2	土器だまり 2002 (2116)	14	53	土師器 中	口径 16.0 器高 6.7 ~	外底: 口縁部~器部ナデ、器部ナデ、波状文 内底: 口縁部~器部ナデ、器部ナデ	器底 外底: ~2mm の砂粒 器底	黄褐色 外底: 灰黄緑 内底: 赤い~黄	F1 類
67	2	土器だまり 2002 (2116)	14	53	弥生上層 中	口径 23.0 器高 8.3 ~	外底: 口縁部平行波線文、器部~器部ナデ、器底 波状文 内底: 口縁部ナデ、器部ナデ、器部ナデ 外底: 器底上層ナデ、器部ナデ 内底: 器部上層ナデ、器部ナデ、器部ナデ	器底 外底: ~4mm の砂粒 器底	黄褐色 外底: 緑褐色 内底: 灰白	C1 類
68	2	土器だまり 2002 (2116)	14	53	弥生上層 中	器高 5.4 ~ 器底 19.2	器底: 器底上層ナデ、器部ナデ、器部ナデ 器底: 外底に赤色染部	器底 外底: ~4mm の砂粒 器底	やや不黄 外底: 赤い~黄 内底: 赤い~黄	

平面形状・規模 遺物と礫の分布状況から特に形状は見出せない。その出土範囲は東西 2.965m・南北 2.367m を測る。径 40cm を超える礫もみられるが、全体的に礫密度は高くはない。

遺物検出状況 基本的に土器は破片状態で出土している。遺構南東部にやや集中する傾向がみられ、中央部から北西部にかけて土器密度は低くなる。甕・壺類は全般的に口縁部の開きの大きさが特徴的となっており、古墳時代前期前葉の要素が強い。168(SD2014 遺物図 17-4 に掲載)は甕形土器の把手である。南端部で単独出土した。この個体は同位置第 2 面で検出された SD2014 内遺物と接合したため、そちらに帰属させた。

遺構の性格と帰属時期 掘り込みが確認できなかったため、遺構として評価するのは難しい。遺物と礫の集中が明瞭な土器だまり 2001 とは対照的といえる。遺構性格を考えるにあたっては、第 2 面検出遺構である SD2013・SD2014 との関連性を検討する必要がある。詳細は個別遺構項に記載しているが、共に調査区を貫く大きな溝で、その廃絶は SD2013 が古墳時代前期と、SD2014 が弥生時代終末期とされる。帰属層位は 2-6 層除去面、2-7 層を切る遺構とされる。土器だまり 2002 の位置は 2 条の溝が重なる場所の真上にあたり、土器密度の最も高い南東部はこの西戸と一致する。以上の条件と甕形土器の接合例から判断して、土器だまり 2002 と認識した範囲は大溝内となる可能性が高く、中でも、南東部の古墳時代前期の要素の強い甕が山出する範囲は新しい溝である SD2013 内にあたと推定される。したがって、土器だまり 2002 は単独の遺構ではなく、SD2013・SD2014 内の遺物集中部である可能性が最も高いと考える。この状況は 2-6 層除去面において検出が極めて困難な 2-7 層系埋土の遺構が存在しえることを示す。

#### ■大溝 (SD2012・SD2013・SD2014)(図 29-1・29-2、巻頭図版 8、写真図版 16)

調査区東部から東端部において検出された 3 本の溝である。その規模や方向、出土遺物の共通性から大溝として分類した。層位上の帰属は 2-6 層除去面となることから、調査区北半部では 2-8 層が、南半部では 2-7 層が本来の検出基盤となる。実際の調査では遺構埋土と基盤層の区別が困難であったため、プラン確認のためには面を下げざるを得ず、第 2 面調査対象遺構となった。

#### ■SD2012(図 30・31、遺物図 15、遺物観察表 15、写真図版 17・18)

位置 2区第2面N34～L36グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 46.285m(第1面:礫確認時)、46.113m～45.787m(第2面:溝確定時)である。

検出状況 遺構の存在は平成 21 年 11 月実施の試掘調査で確認されている。本調査では SD2012 は第 1 面においてその存在が確認されたが、遺構範囲及び溝としての性格が確定したのは第 2 面調査時においてである。調査工程は 2 段階に分かれる。

##### a. 礫検出～第 1 面調査

調査区南端を東西に横断する Tr.1 の断面観察において礫集中部が確認された。礫の間に表面摩耗の少ない土器片が確認されたことから、遺構の存在が想定されたが掘方と底は判然としなかった。第 1 面調査に向けての 2-6 層掘削中にこの礫集中部が帯状に北東方向に延びることを確認し、延長線上の Tr.5 にも遺構が存在することが確認された。平面精査によるプラン検出を複数回試みたが、平面上での繋がりには確認できなかった。これにより、溝状に広がる礫集中部を当初は大溝と認識できず、2-6 層帰属の耕作地整備に伴う礫捨て坑と想定し調査を実施した。その結果判明したことは次の 2 点

である。

1. 掘削過程において確認された残存率の高い土器類は全て弥生時代後期から終末期に属するとみられ、古墳時代以降の土器は皆無である。
2. 遺構両端部では黒色土系の遺構埋土が基盤層を切って外側に延びる。

これらのことから当遺構は時期の古い溝であるとの認識に至り、先の想定が誤りであると判断した。遺物出土状況及び遺構平面情報の記録後、土層観察用ベルトを設定し、第2面調査で溝であるか否かを再検討することとした。

#### b.2-7層・2-8層掘削～第2面調査

第1面で不明瞭であったTr.5からの遺構延長の検出には、遺構埋土と同色の2-8層の除去が必要と判断された。このため、調査区北半部では2-8層除去面において、遺構プランを確定させた。第1面調査時に遺構の大部分の掘削は終わっていたと認識していたが、検出を進めるにつれて、礫下位の下層埋土を掘り残していたことが判明した。Tr.1以南では、2-7層を掘削することにより周囲より砂粒が多く、色調的にはやや明るい範囲が帯状に検出された。第1面確認の遺構終端部から南西方向に延びることが確認された。結果として、第2面検出時には調査区を貫く一本の溝として再検出することができた。

**平面形状・規模** 平面形状は緩やかな弧を描く帯状で、検出長28.489m・幅1.475m、主軸はN-34.5°-Eをふる。断面形は深いV字形で確認面から底面までの深さは最大で0.859mを測る。溝の底面から肩にかけて急角度に立ち上がる。溝底面の標高は南から北にかけてわずかに下がる。南端のセクションdと北端のセクションaの比高は15.8cm、0.6%の勾配である。

**埋土** 4箇所を設定したセクションベルトによる断面観察をおこなった。調査区外周部に位置するセクションa・セクションdにおいて、溝が2-7層を切り込んで形成されていることが判明した。したがって、層位上の帰属は2-6層除去面である。溝埋土は基本的に検出基盤層(2-7層・2-8層)に類似する。黒色～褐色を呈する主体土の中に多量の礫と土器が含まれるのが特徴で、埋土上層ほど礫と土器が多くなる。埋土は最大5層に細分され、その堆積過程の違いから上層・下層・最下層に大別した。

**上層** 黒褐色細粒砂～極細粒砂を主体とする。堆積構造は確認できない。最終基盤層である2-9層・2-10層が礫質となる調査区中央から北部にかけては、大小さまざまな礫が多く含まれ、大きなものでは径50cmにも達する。加えて、多量の土器が含まれており、残存率の高い個体が多くみられるのが特徴である。残存率の高い土器はある程度のまとまりをもって出土する傾向にある。第1面調査時に溝状土坑として検出したのはこの上層埋土の礫集中部である。

**下層** 黒褐色細粒砂～シルトを主体とする。締りがなくやや軟質な土質で、炭化物がわずかに含まれる。堆積構造は特に確認できない。上層に比較して礫・土器ともに少なくなる傾向にあり、礫径は小さくなる。機能時堆積層の可能性がある。



写真11 2区 大溝冠水

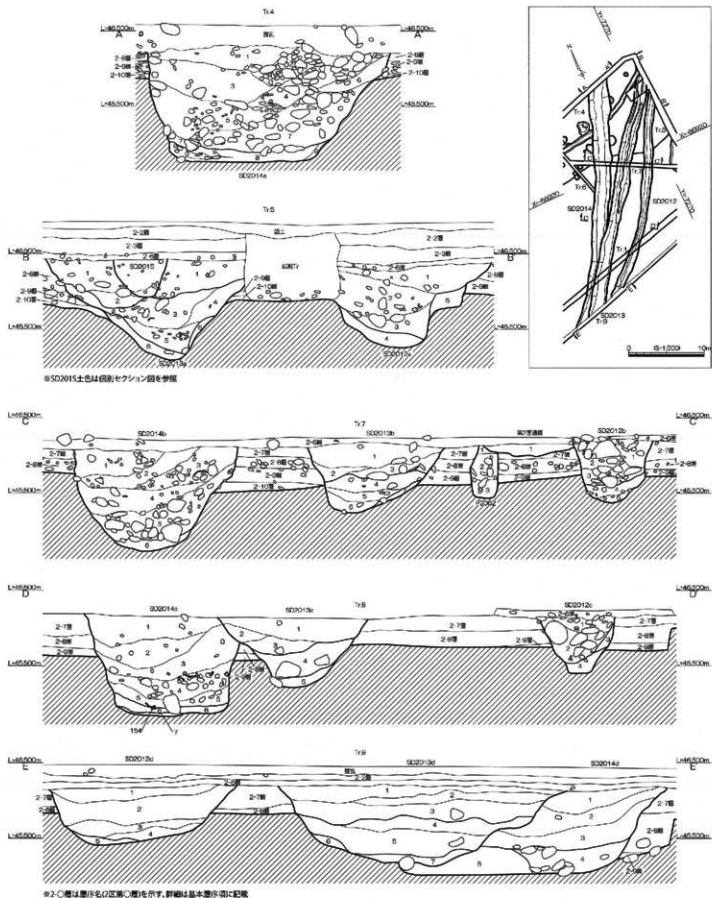


図29-1 SD2012・SD2013・SD2014セクション図



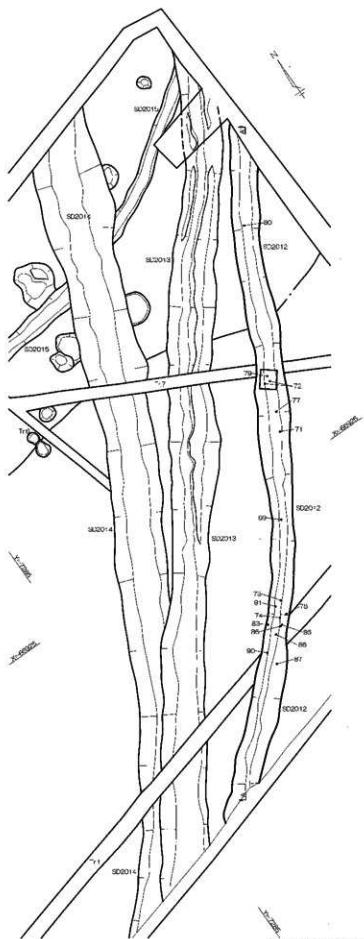
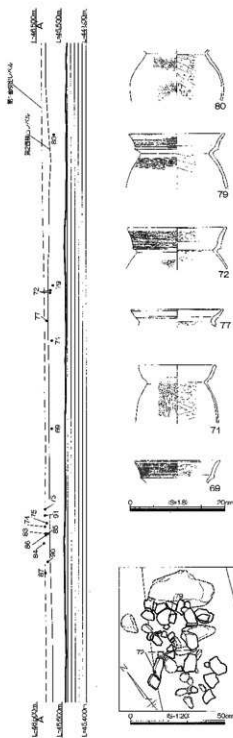


图30 SD2012遺構図



0 5 10 50cm

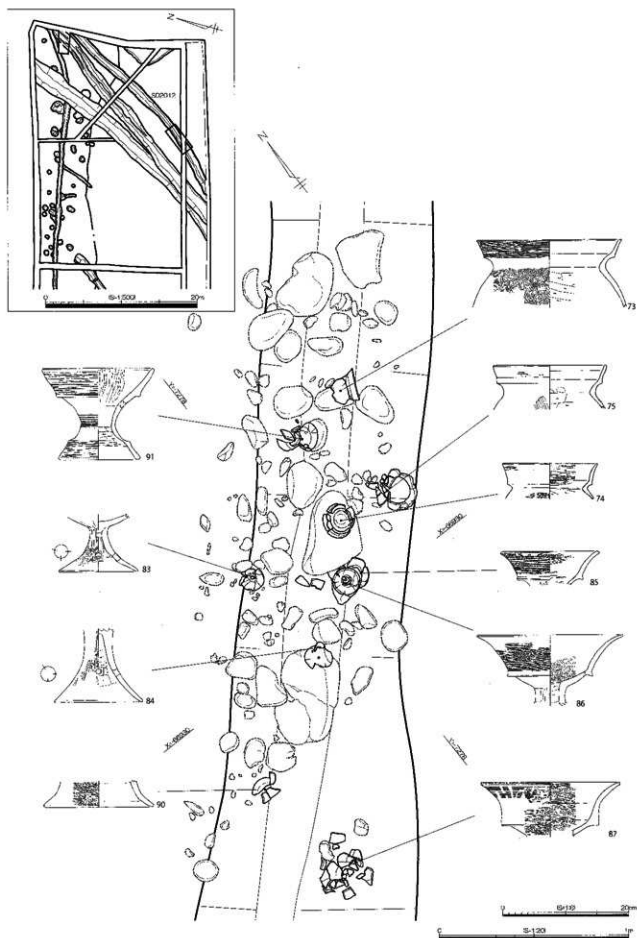
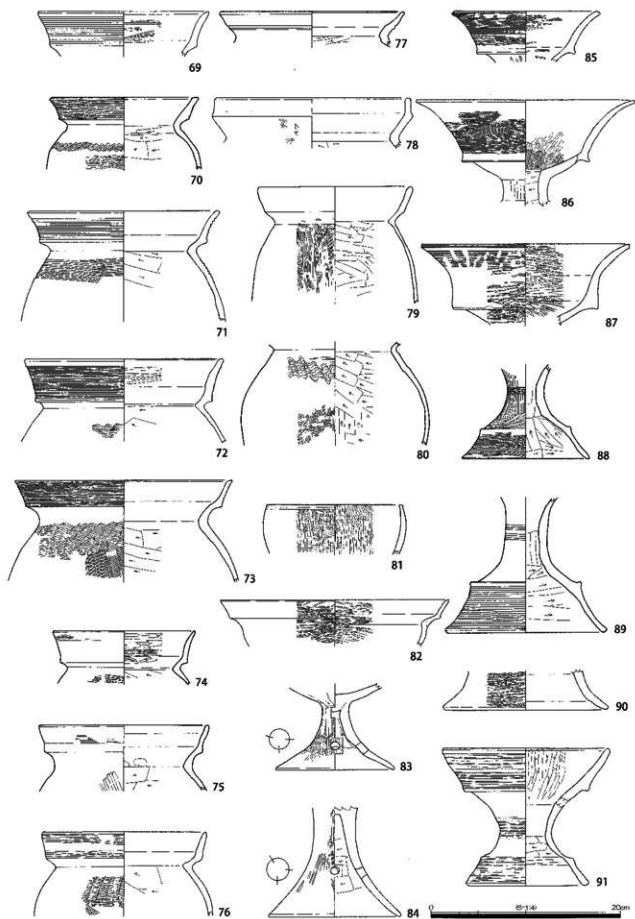


図31 SD2012微細図



遺物図15 SD2012出土遺物



遺物観察表 15

遺物 番号	調査区	遺物番号 (調査単位)	遺物 番号	採取 番号	種別 説明	高さ (cm/寸)	特徴	土質/材質	底 面 装 飾	備考
69	2	SD2012 (2001)	15	53	赤生土器 I径(17.0) 脚高 4.8 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ 内面: 口縁部ナデ後ミガキ	白磁 白磁 ~ 3mmの砂粒	外周: 白 内周: 白 外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
70	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(18.5) 脚高 7.7 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデナデ	白磁 白磁 ~ 1mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
71	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(19.0) 脚高 11.7 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデナデ	白磁 白磁 ~ 2mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
72	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(20.0) 脚高 8.9 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ後ミガキ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 1mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
73	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(22.0) 脚高 10.6 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ後ミガキ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 3mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
74	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(14.6) 脚高 5.7 ~		外周: 口縁部平行段線文 + ナデなし、頸部ナデ、 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 4mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
75	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(17.2) 脚高 7.0 ~		外周: 口縁部平行段線文 + ナデなし、頸部ナデ、 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 1mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
76	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(17.0) 脚高 8.8 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 3mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
77	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(19.2) 脚高 3.7 ~		外周: 口縁部平行段線文 + ナデなし、頸部ナデ、 口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 2mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
78	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(20.0) 脚高 5.4 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 3mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
79	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(16.0) 脚高 12.4 ~ 脚大径(17.4)		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 1mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
80	2	SD2012 (2004)	15	53	赤生土器 I径(11.0 ~ 脚大径(19.8)		外周: 口縁部ナデ、口縁部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 0.5mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
81	2	SD2012 (2004)	15	51	赤生土器 I径(13.8) 脚高 5.2 ~ 脚大径(15.0)		外周: 口縁部ナデ、口縁部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 0.5mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
82	2	SD2012 (2004)	15	54	赤生土器 I径(23.4) 脚高 4.9 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 1mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
83	2	SD2012 (2004)	15	54	赤生土器 I径(12.4) 脚高 9.1 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 3mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
84	2	SD2012 (2004)	15	54	赤生土器 I径(11.5 ~ 脚高(13.3)		外周: 口縁部ナデ、口縁部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 4mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
85	2	SD2012 (2001)	15	54	赤生土器 I径(14.8) 脚高 5.4 ~		外周: 口縁部ナデ、口縁部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 2mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
86	2	SD2012 (2004)	15	54	赤生土器 I径(22.0) 脚高 11.29 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 1mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
87	2	SD2012 (2004)	15	54	赤生土器 I径(21.6) 脚高 8.5 ~		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 2mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
88	2	SD2012 (2004)	15	54	赤生土器 I径(10.0 ~ 脚高 13.3)		外周: 口縁部ナデ、口縁部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 1mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
89	2	SD2012 (2004)	15	51	赤生土器 I径(14.3 ~ 脚高 16.5 ~		外周: 口縁部ナデ、口縁部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 2mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
90	2	SD2012 (2004)	15	55	赤生土器 I径(17.2) 脚高 14.5 脚大径 17.7 底径 12.2		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 2mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白
91	2	SD2012 (2004)	15	55	赤生土器 I径(17.2) 脚高 14.5 脚大径 17.7 底径 12.2		外周: 口縁部平行段線文、頸部ナデ、口縁部ナデ 内面: 口縁部ナデ、口縁部ナデ	白磁 白磁 ~ 0.5mmの砂粒	外周: 白 内周: 白	外周: 白 内周: 白

最下層 暗灰黄色粗粒砂～極細粒砂である。土質はその場所の2-9層・2-10層に類似する。2-9層・2-10層のブロック土が確認されることから、溝開削時の掘り残し土、すなわち加工層と推定される。遺物は確認されなかった。

遺物検出状況 溝内の遺物検出状況は特殊といえる。上器は上層部に集中しており、巨礫につぶされながらも形状を維持している個体が多数確認された。また、場所による遺物の粗密もはっきりしており、残存率の高い個体は集中する傾向にある。出土遺物量は整理用コンテナ4箱分である。弥生時代後期後葉の要素の強い甕と器台の多さが特筆される。甕(69～76)はやや開きながら立ち上がる口縁部とその外面の平行沈線文が特徴的である。口縁立ち上がりの平行沈線文がきっちり描かれる個体(69～73)、平行沈線文にナデ消しを加えられる個体(74～76)に大別される。肩部に貝殻腹縁による押し引き文や連続刺突文を施す個体がある。器台(85～91)は全て鼓形器台である。受部と脚台部に平行沈線文を施し、明瞭な筒部を有する。中でも89にみられる細く長い筒部はやや古い要素で、帰属時期は弥生時代後期中葉になる可能性がある。82は碗形の環部を特徴とする北近畿系の高環である。胎土は周りから出土する壤などと同じ灰黄褐色系であることから在地産と考えられる。ただし、模倣品にしてはオリジナルにかなり近い形状で、その技術を持つ工人の作の可能性もある。ヒトの移動を示唆する個体である。

遺構の性格と帰属時期 溝である。基盤層の砂礫層・粘土層に関わらず底を揃えて深く掘り込まれる状況から明確な目的があつて開削されたことは間違いない。当然のことながら水を流すために掘削されたと推定されるが、調査においてそれを確認することはできなかった。しかしながら、遺物と礫の出土状況から溝の用途についての検討は可能である。土器が最も多い上層部では巨礫の間に元形状を維持しながら破砕している個体が多数確認された。もし、溝が洪水や土石流によって埋没したものであるなら、上層埋土内の礫と土器は同時に堆積したことになり、巨大な礫とともに流されてきたのならば、激しい流れの中で土器はさらに破砕され、元形状を維持できないと考える。次に、遺構土壌が場所によって連続的に変化し、それが検出基盤層(想定される地表層)に近いということは、その出所がすぐ近くにあることを示す。したがって、礫と土器は同時期にヒトの手によって溝内に入れられたと考えられることから、それは溝産絶時の埋め立て行為であると理解できる。そして、その時期は弥生時代後期後葉から終末期前半の一時点と考えられる。下層・最下層からは時期判定可能な遺物がなかったため、溝の開削時期と存続期間は不明である。

#### ■ SD2013(図32、遺物図16、遺物観察表16、写真図版17・19)

位置 2区第2面N34～K36グリッドに位置する。遺構の確認面の標高は46.131m～45.795mである。

検出状況 遺構の存在は平成20年11月実施の試掘調査で確認されており、試掘トレンチ範囲で溝として検出及び掘削されている。本調査では第1面調査以前、試掘トレンチ再掘削時の壁面精査においてその存在を再確認した。わずかに明るい溝芯から2-8層を検出基盤層とする掘り込みと判断したが、第1面(この周辺での2-6層除去面=2-8層上面)において全く検出できなかったため、遺構プラン確定には2-8層除去が必要と判断した。第2面調査に先だって、溝の延長が予測される位置にTr.7・Tr.8を設定し断面確認をおこなったところ、溝は調査区北東端から南西方向に直線状に延びること、2-8層の上位に堆積する2-7層を切ることが確認され、層位上の帰属が2-6層除去面であ

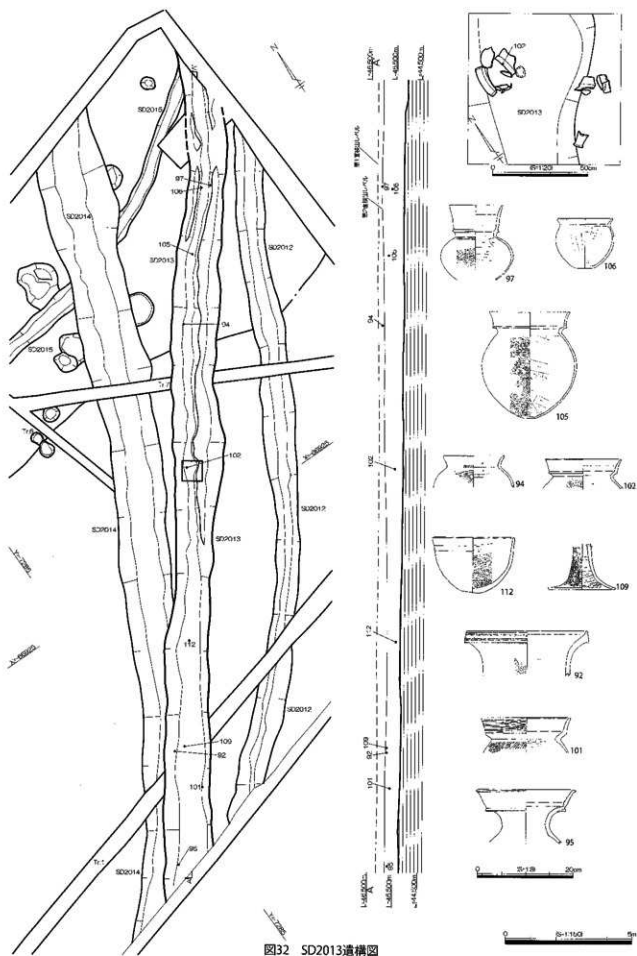
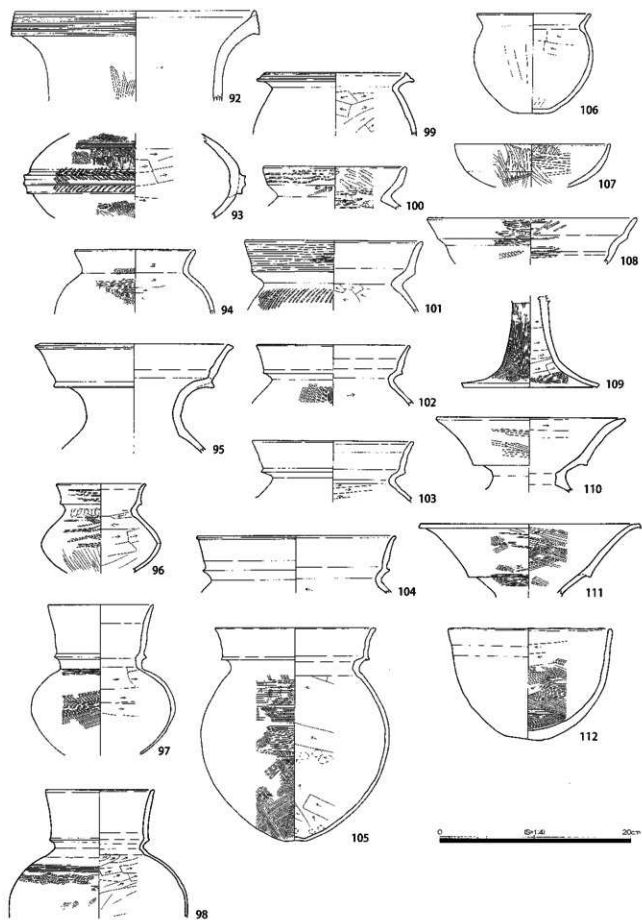


图32 SD2013遺構図



遺物図16 SD2013出土遺物

遺物観察表 16

遺物 番号	調査区	遺物番号 (式番号)	遺物の 番号	調査 期	種別 番号	重量 (kg/g)	特徴	形状/材質	出土 状況	備考
92	2	SD2013 (2109)	16	55	養生土器 壺	口径:125.0 底径:9.6	外面:口縁部ナデ後部内腹文6条、口縁部ナデ、 唇部ナデ一帯にナギキ 内面:口縁部一帯にナゲナデ	青透 1mmの砂粒、 多少	青透 外面:にぶい黄緑 内面:にぶい黄緑	
93	2	SD2013 (2109)	16	55	養生土器 壺 (付(板付品))	高さ:9.0 最大径:123.1	外面:体部上半ハツ直線状文2条、平行線文、斜 帯ナゲナギ縁線による連続刺突文4列、 体部下半ハツ直線ナギキ 内面:体部ナゲナデ	青透 1mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄緑 内面:にぶい黄緑	輸入品か
94	2	SD2013 (2109)	16	55	養生土器 壺 (二和(漆器))	口径:(12.2) 底径:6.7	外面:口縁部一帯にナゲナデ、体部上半ハツ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部下半ナゲナ デ	青透 ~2mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄緑 内面:にぶい黄緑	
95	2	SD2013 (2109)	16	55	土師器 壺 (二和(漆器))	口径:(19.8) 底径:11.5	外面:口縁部一帯にナゲナデ、口縁部(ハケ) 内面:口縁部ナゲナデ、内腹ナゲナデ	青透 ~1mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄緑 内面:灰白色	
96	2	SD2013 (2109)	16	55	養生土器 壺	口径:(9.4) 底径:5.4 最大径:(12.4)	外面:口縁部ナゲナデとナギキ、体部上半ナゲナ キ、体部下半ハツ直線ナギキ 内面:口縁部ナゲナデ後ナゲナデ、体部下半ナゲ ナデ	青透 ~1mmの砂粒、 少ない	青透 外面:にぶい黄緑 内面:にぶい黄緑	輸入品か
97	2	SD2013 (2109)	16	55	養生土器 壺 (四口壺)	口径:10.9 底径:15.9 最大径:15.5	外面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ハツ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナ デ	青透 1mmの砂粒、 多い	青透 外面:灰白 内面:黄緑	
98	2	SD2013 (2109)	16	55	養生土器 壺 (山口壺)	口径:(11.2) 底径:13.5 最大径:(8.0)	外面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ハツ直線ナ 平行線文・斜線文各1帯 内面:口縁部ナゲナデ、体部ナゲナデ後ナゲナ デ	青透 1mmの砂粒、 少量	青透 外面:にぶい黄 内面:黄緑	
99	2	SD2013 (2109)	16	56	養生土器 壺	口径:(14.0) 底径:6.6	外面:口縁部一帯にナゲナデ、口縁部一帯にナゲ ナデ 内面:口縁部ナゲナデ、体部ナゲナデ	青透 ~2mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄 内面:黄緑	内腹保存者 A類
100	2	SD2013 (2109)	16	56	養生土器 壺	口径:(14.4) 底径:4.4	外面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ハツ直線ナ 平行線文・斜線文各1帯 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナデ後 ナゲナデ	青透 ~2mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄 内面:にぶい黄	
101	2	SD2013 (2109)	16	56	養生土器 壺	口径:(18.2) 底径:7.5	外面:口縁部一帯にナゲナデ、口縁部一帯にナゲ ナデによる連続刺突文 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナデ	青透 ~4mmの砂粒、 青透	青透 外面:灰白色 内面:黄緑	C1類
102	2	SD2013 (2109)	16	50	養生土器 壺	口径:(15.6) 底径:6.3	外面:口縁部一帯にナゲナデ、口縁部ハツ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナ デ	青透 ~2mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄 内面:にぶい黄	外腹保存者 B2類
103	2	SD2013 (2109)	16	56	養生土器 壺	口径:16.5 底径:6.5	外面:口縁部一帯にナゲナデ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナ デ	中や粗 ~4mmの砂粒、 青透	中や粗 外面:にぶい黄 内面:にぶい黄	P2類
104	2	SD2013 (2109)	16	56	土師器 壺	口径:(20.4) 底径:6.1	外面:口縁部一帯にナゲナデ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナ デ	青透 ~2mmの砂粒、 青透	青透 外面:黄緑 内面:灰白色	P1-P2類
105	2	SD2013 (2109)	16	56	土師器 壺	口径:(22.5) 底径:(19.8) 最大径:2.8	外面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ハツ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナ デ	青透 ~3mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄 内面:黄緑	外腹保存者 地点を持たない2 式を現上層文 P1類
106	2	SD2013 (2109)	16	56	養生土器 壺	口径:(11.6) 底径:10.5 最大径:(12.2) 底径:3.4	外面:口縁部一帯にナゲナデ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部一帯にナゲ ナデ	青透 ~0.5mmの砂粒、 少ない	青透 外面:にぶい黄 内面:にぶい黄	
107	2	SD2013 (2109)	16	56	養生土器 高杯	口径:(16.2) 底径:6.0	外面:体部ナゲナデとナギキ 内面:口縁部ナゲナデ、体部ナゲナ デ	青透 ~2mmの砂粒、 青透	青透 外面:黄 内面:黄	
108	2	SD2013 (2109)	16	56	養生土器 高杯	口径:(21.4) 底径:4.9	外面:口縁部一帯にナゲナデとナギキ 内面:口縁部一帯にナゲナデとナギキ	青透 ~3mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄 内面:にぶい黄	近郊産か、丹波からの 輸入品か
109	2	SD2013 (2109)	16	57	養生土器 高杯	口径:(9.7) 底径:1.0	外面:口縁部一帯にナゲナデ、口縁部一帯にナゲ ナデ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナ デ	青透 ~1mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄 内面:にぶい黄	
110	2	SD2013 (2109)	16	57	養生土器 高杯 (板付品)	口径:(19.5) 底径:7.9	外面:口縁部一帯にナゲナデとナゲナデ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナ デ	青透 ~1mmの砂粒、 青透	青透 外面:にぶい黄 内面:にぶい黄	
111	2	SD2013 (2109)	16	57	養生土器 高杯 (板付品)	口径:(22.8) 底径:7.7	外面:口縁部一帯にナゲナデとナゲナデ、体部 ナゲナデ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部ナゲナ デ	青透 ~2mmの砂粒、 青透	青透 外面:黄 内面:黄	
112	2	SD2013 (2109)	16	57	養生土器 高杯	口径:(16.8) 底径:11.85	外面:口縁部一帯にナゲナデ 内面:口縁部一帯にナゲナデ、体部 下半ナゲナデ	青透 ~2mmの砂粒、 青透	青透 外面:黄 内面:黄	外腹保存者 内腹:黄緑

ることが確認された。しかし、この周辺において、第1面(2-6層除去面=2-7層上面)では溝は検出されていないうえ、セクション上でも遺構埋土と2-7層の差がわずかなことからこの段階での平面検出は所念し、2-7層掘削後の第2面検出時に遺構プランを確定させた。溝は北東側、南西側ともに調査区外に延びる。第2面主要遺構との切り合い関係あり。SD2014を切り、SD2015に切られる。SD2014との切り合い関係判定は困難であったが、埋土上層に含まれる礫の分布がSD2013に沿っていることをその根拠とした。

**平面形状・規模** 平面形状は帯状で、検出長33.623m・幅2.027m、主軸はN-34.5°-Eをふる。断面形状は深いV字形、底近くに段があり二段掘りとなる。この最深部は直線状に延びる溝の中でわずかにS字に振れる。確認面から底面までの深さは最大で1.040mを測る。溝の底面から肩にかけて急角度に立ち上がる。溝底面の標高は一定しない。南端のセクションdと北端のセクションaの比高は4.3cm、計算上は0.1%の勾配となり、北東に向かってほんのわずかに下がることになるが、実際にはセクションb・cの溝底が高くなるため、勾配と捉えるのは難しいかもしれない。

**埋土** 4箇所で設定したセクションベルトによる断面観察をおこなった。溝埋土は基本的に検出位置での基盤層(2-7層・2-8層)に類似する。黒色～褐色色を呈する主体土の中に多量の礫と土器が含まれるのが特徴で、その傾向は上方に顕著となる。埋土は最大7層に細分され、その堆積過程の違いから上層・中層・最下層に大別した。

**上層** 黒褐色細粒砂～極細粒砂を主体とする。堆積構造は特に確認できない。2-9層・2-10層が礫質となる調査区中央から北部にかけては、大小さまざまな礫が多く含まれる、最大径35cm程度である。この中に多量の土器が含まれているのが特徴である。残存率の高い個体も見られるが、SD2012・SD2014程ではない。SD2012上層と同じ層相を示すことから、埋め立て行為による人為的な形成層と推定される。

**中層** 黒色細粒砂～極細粒砂を主体とする。粗粒砂～中粒砂の混入量がやや多く、部分的にブロック状に集中する。上層に比較して礫と土器の量が減少する。堆積要因は不明であるが、上層との土質や混入物の共通性から埋め戻し上の可能性が最も高いと思われる。

**最下層** 黒色～暗灰黄色中粒砂～シルト。土質はその場所の2-9層・2-10層に類似し、このブロック土が多く含まれる。溝掘削時の掘り残し土、すなわち加工層と推定される。遺物は確認されなかった。セクションdではこのブロック土の立ち上がりをSD2014との切り合い判定の根拠とした。

**遺物検出状況** 七器の大半は上層部から出土している。遺物出土量はSD2012・SD2014と比較すると少ないが、完形に近い個体が出土する状況はやはり特殊といえる。土器は上層部に多いが、集中部といえるほど土器が密集している箇所はなかった。出土遺物量は整理用コンテナ3箱分である。その所属時期は弥生時代後期前葉から古墳時代前期中葉まで。古墳時代前期前葉の要素を持つ個体が多い。壺(92～99)には、多様な器種がみられる。93は台付装飾壺と考えられる体部破片である。体部最大径位置に突帯を貼り付け、突帯上とその基部に貝殻腹縁による連続刺突文を、体部上半には平行線文と波状文を施す。この近隣では青谷上寺地遺跡において相当数が出土しているが、それらと比較すると器形や施文法など、基本ルールが踏襲されていないことが判る。本例は同系列でありながらもかなり変容を遂げた後の様相を示しており、近隣の類例と直接の系譜を求めるのは難しい。形状的には、むしろ、伝播の過程で変容した地方の模倣品に近いと考えられ、それが搬入品として持ち込まれた可能性を考える。これに関連して96も脚台は付かないながら、体部の張り出しとやや膨れな

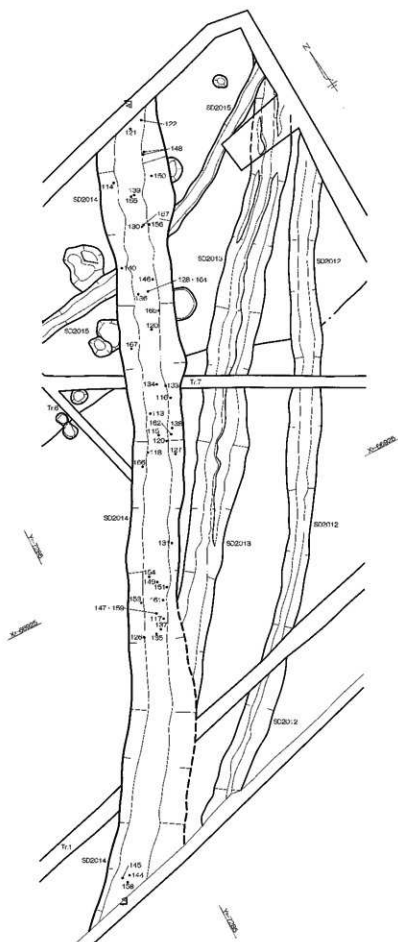
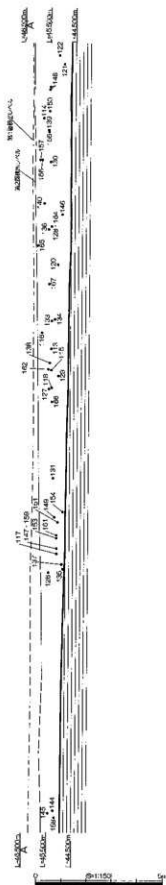


図33 SD2014遺構図



器形から台付裝飾壺の系統と考えられる。95は大きく開く厚手の口縁部と、端部の外傾する平坦面が特徴的な壺である。古墳時代前期中葉まで下る可能性がある。97・98は直口壺である。口縁屈曲部からの立ち上がりが発達する。弥生時代終末期後半に属する。特に97は完形に近い状態で出土した。壺(99～106)はその時期幅が広い。主体を占めるのは口縁立ち上がりの文様が無文化した一群(102～103)と、口縁端部における肥厚または平坦面を持つ一群(104・105)である。これらは弥生時代終末期後半から古墳時代前期前葉の要素である。古墳時代の要素を持つ個体の多さが特筆される。外来系土器としては高坏(108)が挙げられる。椀形の坏部が破片で出土した。胎土にはふい黄色を呈し在地系に比べてやや淡い。北近畿系、丹後の所産と考えられる。

遺構の性格と帰属時期 溝である。基盤層の砂礫層・粘土層に関わらず深く掘り込まれており、底を一定に揃える意識があったとみられる。ただし、その底面は一定せず多少の凹凸がある。計測値からは北東方向へのほんのわずかな傾斜が読み取れるが、中央部の盛り上がり方を考えると勾配を示すとはいえない。溝の廢絶については、上層埋土の様相からやはり埋め立て行為によるものと考えられ、その時期は古墳時代前期前葉から中葉の一時点と考えられる。開削時期はSD2014との切り合い関係から判断すると、弥生時代終末期後半以降となる。

■ SD2014(図33～37、遺物図17-1～17-4、遺物観察表17-1～17-4、巻頭図版8、写真図版20～24)

位置 2区第2面N34～L36グリッドに位置する。遺構確認面の標高は45.141～45.707mである。  
検出状況 調査区北壁沿いのTr.4の断面観察において遺構の存在が確認された。この時点では2-8層を掘り込む遺構かどうかは判断できなかったが、第1面(この周辺での2-6層除去面=2-8層上面)においてプラン検出ができなかったため、2-8層除去後に再検出をおこなうことにした。第2面調査に先だて、溝の延長が予測される位置にTr.7・Tr.8を設定して断面確認をおこなったところ、溝は調査区北東端から南西方向に直線状に延びること、2-8層の上位に堆積する2-7層を切ること、層位上の帰属は2-6層除去面であることが確認された。ただし、遺構埋土と2-7層の差がわずかなことからこの段階での平面検出は断念し、2-7層除去後の第2面検出時に遺構プランを確定させた。第2面主表遺構との切り合い関係あり。SD2014とSD2015に切られる。特に同類遺構とされるSD2013とは、その位置・軸方向が近いために、調査区南部から南端部にかけて大きく重なる。

平面形状・規模 平面形状は緩やかな弧を描く帯状で、検出長32.897m・幅2.895m、主軸はN-27.5°Eをふる。断面形は深い逆台形で確認面から底面までの深さは最大で1.448mを測る。溝の底面から肩にかけて急角度に立ち上がる。溝底が幅0.8～1.4m程度の平坦面になっているのが大きな特徴である。底面の標高は南から北にかけて下がる。南端のセクションdと北端のセクションaの比高は25.3cm、0.8%の勾配である。

埋土 4箇所を設定したセクションベルトによる断面観察をおこなった。溝埋土は基本的に検出位置での基盤層(2-7層・2-8層)に類似する。黒色～褐色を呈する主体土の中に多量の礫と土器が含まれるのが特徴で、その傾向は上方に顕著となる。また、SD2014独自の要素として、明確な機能層(下層)の堆積がある。埋土は最大9層に細分され、その堆積過程の違いから上層・中層・下層・最下層に大別した。

上層 黒褐色細粒砂～極細粒砂を主体とする。堆積構造は特に確認できない。基盤層が礫質となる調査区中央から北部にかけては、大小さまざまな礫が多く含まれ、最大径は80cmにも達する。



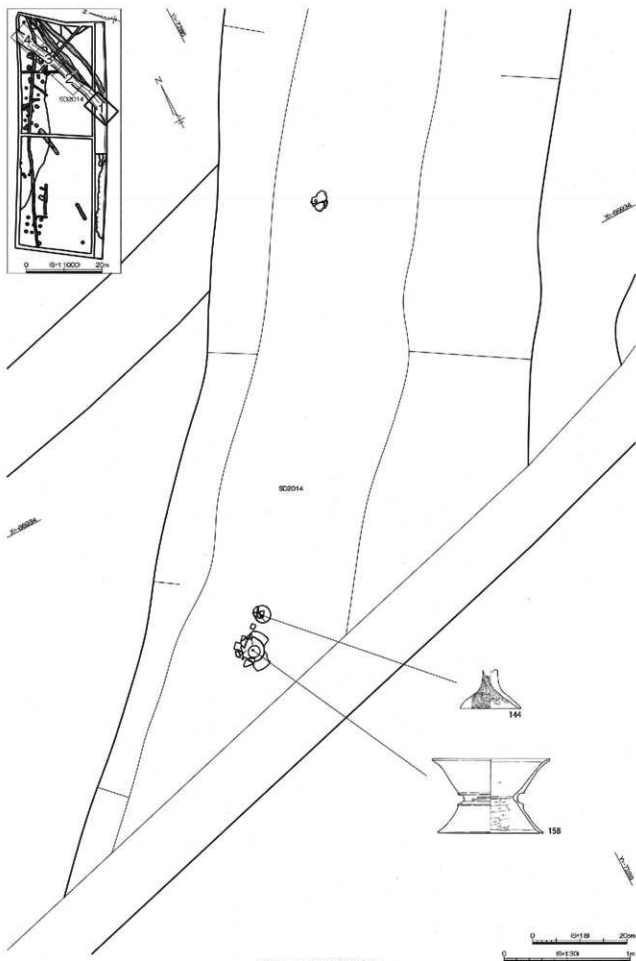


图34 SD2014微细图1

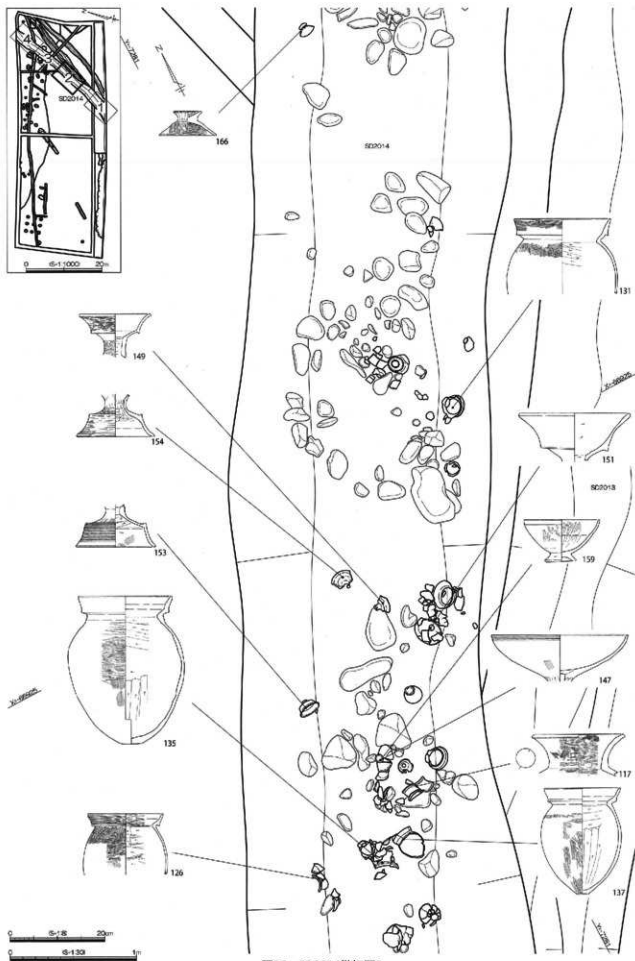


图35 SD2014微細圖2

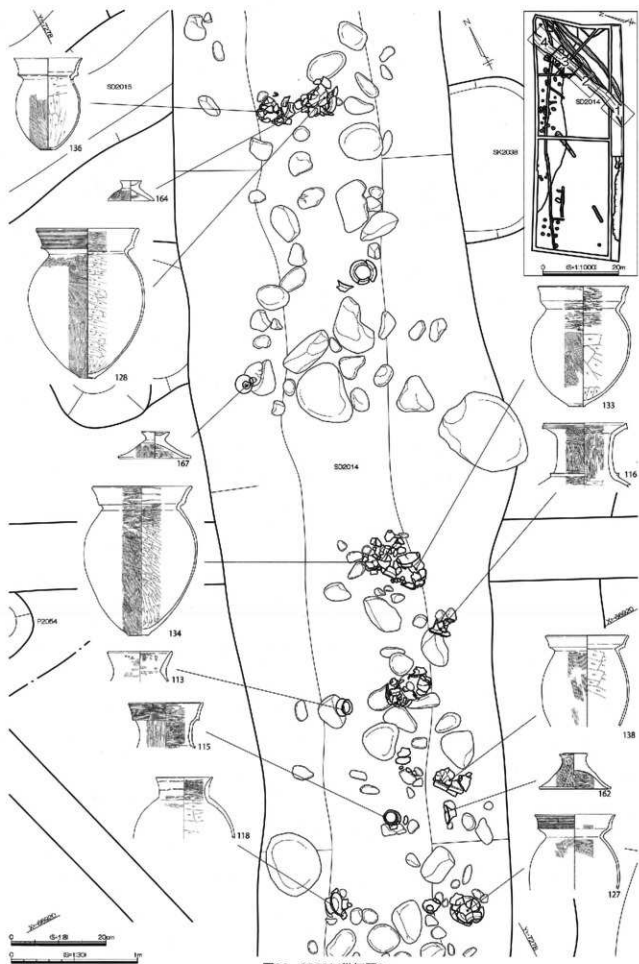


图36 SD2014微細図3

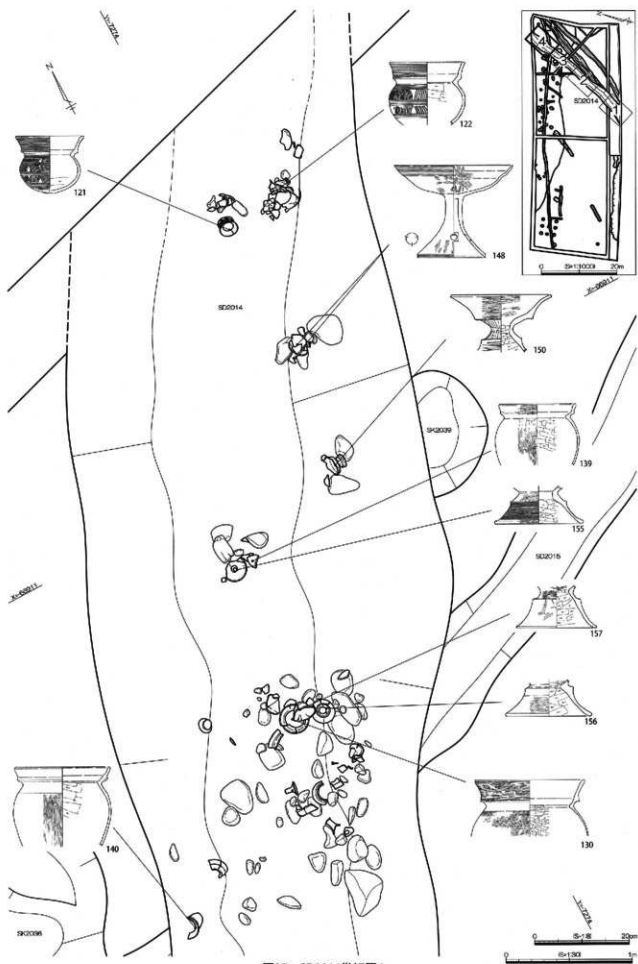


图37 SD2014微细图4

この中に多量の土器が含まれているのが特徴である。残存率の高い個体が多い状況はSD2012と同様である。埋め立て行為による人為的な形成層と考えられる。礫は東側に礫中する傾向があり、その粗密に注意して層の細分をおこなった結果、細分層が東側へ大きく立ち上がる状況が認められた。このことから、埋め立て行為は主に東側からおこなわれたものと推定される。

**中層** 黒褐色～黒色細粒砂～シルトを主体とする。礫や炭化物、ブロック土が含まれるが一定した傾向はみられず、堆積構造も確認できない。自然形成とは考えにくく、上層と同じく埋め立て土の可能性が最も高いと考える。調査区南側のセクションc・dでのみ存在する。

**下層** 黒色～黒褐色極粗粒砂～中粒砂と細粒砂～シルトである。層の締りはなく軟質で、粒度の違う砂粒によって互層を形成する。明確な堆積構造から純粋な自然堆積層といえ、溝機能時の堆積層と捉えられる。調査区南側では粒度がやや低くなるが、これは、堆積物の起源が2-9層・2-10層に由来するためと考えられる。基本的に礫の混入はなく、上層部に比較して遺物量は極めて少ないといえる。砂を主体とする堆積状況からは、ある程度の流れが常にあったものと推定される。

**最下層** 黒色粗粒砂～極粗粒砂を主体とする。2-9層・2-10層起源のブロック土が含まれる。この上位に機能層が堆積することから溝開削時の掘り残し土、すなわち加工層と考えられる。遺物は確認されなかった。

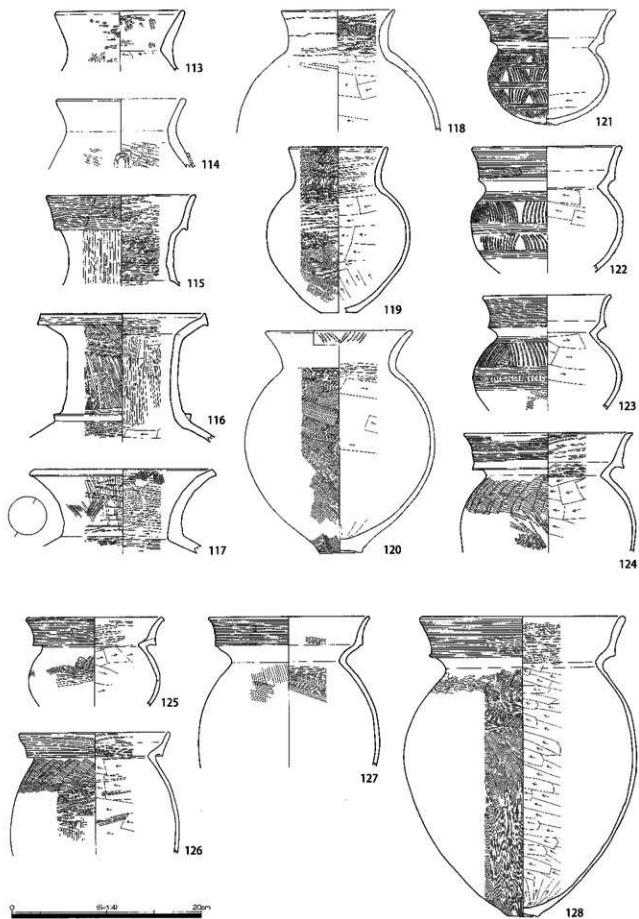
**遺物検出状況** 出土遺物量は整理用コンテナ16箱分と非常に多い。そして、溝内の遺物検出状況はやはり特殊といえる。土器は上層部及び中層部に集中しており、巨礫につぶされながらも形状を維持している個体が多数確認された。残存率の高い土器は全体に分布しているが、土器集中部も数箇所で見られる。土器の帰属時期は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉まで、数量的には弥生時代終末期前半の要素を持つ個体が多い。壺(113～124)には装飾を施す例が多くみられる。113には口縁上部に微細な竹管文を配す。記号的要素か。114肩部には逆U字形の浮文が付く。下部は欠損しており全容は不明である。117・120は口縁部に貝殻腹縁刺突による羽状文をスポット的に配す。121～123の小壺は過剰な施文が特徴的な個体である。口縁部を平行沈線文、体部を擬凹線文と貝殻腹縁刺突による羽状文で絢爛に飾る。123は体部最大径位置に半截竹管文を巡らす。甕(125～140)については、口縁立ち上がりの平行沈線文がきっちり描かれている一群(125～128)、平行沈線文にナデ消しを加えられる一群(129～131)、口縁立ち上がりが無文化化した一群(132～137)に大別される。肩部に貝殻腹縁による押し引き文や連続刺突文を施す個体がある。甕の帰属時期は弥生時代後期後葉か



写真12 SD2014セクションa (右岸立ち上がり)



写真13 SD2014出土 礫 (横は1m箱尺)

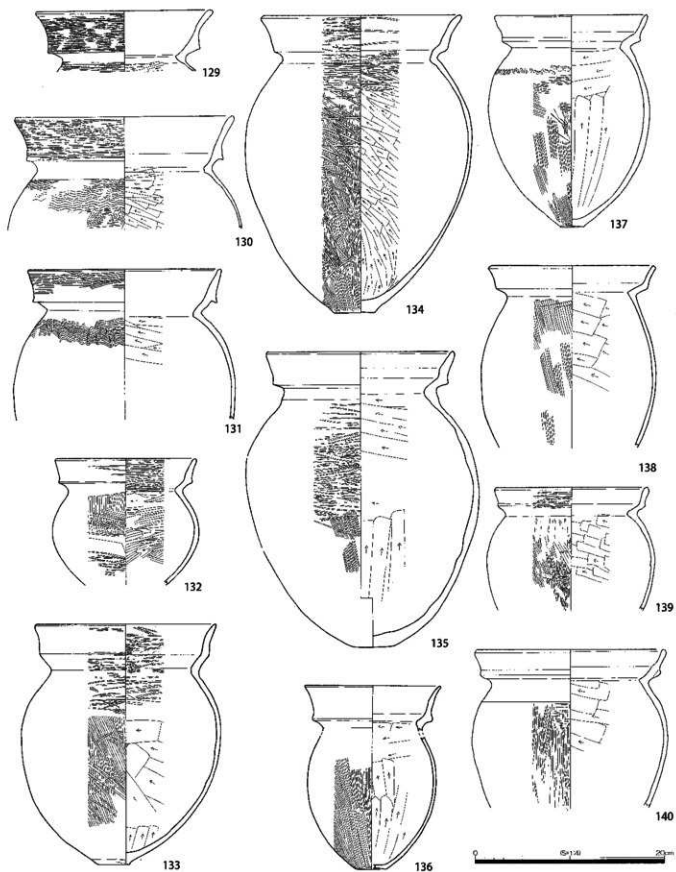


遺物図17-1 SD2014出土遺物

遺物観察表 17-1

遺物番号	調査区	遺構番号 (調査層号)	遺物層 番号	関係 層号	種別 器種	重量 (g)	特徴	胎土/材質	焼色 状態	備考
113	2	SD2014 (210)	17-1	57	弥生土層 壺	口径 13.2 最大径 6.4	外面 口縁部ナデ後ミガキ、上縁に竹葉文3帯、 蓋部ハケ後ナデ 内面 口縁部ナデナデ後ミガキ、1線部下半ハ ケ後ナデ、蓋部ナデ	普通 ～2mmの砂粒、 普通	普通 外面に高い稜線 内面に高い稜線	
114	2	SD2014 (210)	17-1	57	弥生土層 壺	口径 13.0 最大径 7.4	外面 口縁部ナデ、蓋部ハケ後ナデ後文 有線口縁部一帯部ナデ、蓋部ナデ	普通 ～2mmの砂粒、 普通	普通 外面に高い稜線 内面に高い稜線	
115	2	SD2014 (210)	17-1	57	弥生土層 壺	口径 15.4 最大径 9.5 最大径 15.8	外面 口縁部平行線文、蓋部ミガキ 内面 口縁部一帯部ミガキ、内面下縁ナデ	普通 ～0.5mmの砂粒、 普通	普通 外面に低い稜 内面に低い稜	
116	2	SD2014 (210)	17-1	57	土器層 壺	口径 17.3 最大径 13.8	外面 口縁部平行線文2帯、蓋部ミガキ、蓋 部下縁部付突条、蓋部ミガキ 内面 口縁部一帯部ミガキ、蓋部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	中や良好 外面に高い稜線 内面に低い稜	
117	2	SD2014 (210)	17-1	58	土器層 壺	口径 18.0 最大径 9.9	外面 口縁部ナデ、1線部一帯部ミガキ、蓋 部付突条線による折文、蓋部ハケ後之 ミガキ 内面 口縁部ナデ後ミガキ、蓋部ナデ後ミガ キ、蓋部付突条線による折文	普通 ～2mmの砂粒、 普通	中や良好 外面に高い稜 内面に低い稜	
118	2	SD2014 (210)	17-1	58	弥生土層 壺	口径 11.0 器高 12.9	外面 口縁部一帯部ハケ後ミガキ、内面上縁ナ デ、器部ナデ 内面 口縁部一帯部上半ハケ後ミガキ、器部ナ デ	普通 ～2mmの砂粒、 普通	普通 外面に低い稜 内面に低い稜	
119	2	SD2014 (210)	17-1	58	弥生土層 壺	口径 10.0 器高 17.5 最大径 11.49 底径 3.2	外面 口縁部一帯部上半ハケ後ミガキ、器部ナ デ、蓋部ナデ 内面 口縁部ミガキ、蓋部ナデ後ミガキ、体 部一帯部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	普通 外面に高い稜線 内面に低い稜	
120	2	SD2014 (210)	17-1	58	弥生土層 壺	口径 15.2 器高 23.5 最大径 10.0 底径 4.5	外面 口縁部ナデ、体部ハケ、蓋部ナデ 内面 口縁部ナデ後ナデ後稜線線による折 文文、蓋部ミガキ、体部ナデ後ナデ、体 部ハケ後ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	普通 外面に低い稜 内面に高い稜	外面付付 内外面稜線多い
121	2	SD2014 (210)	17-1	58	弥生土層 壺	口径 14.3 器高 12.1 底径 2.3	外面 口縁部ナデ後ナデ後稜線線による折文3列、体 部ナデハケ 内面 口縁部ナデ、蓋部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	普通 外面に低い稜 内面に低い稜	外面付付
122	2	SD2014 (210)	17-1	58	弥生土層 壺	口径 15.5 器高 13.3 最大径 16.0	外面 口縁部ナデ後ナデ後稜線線による折文3列、体 部ナデハケ 内面 口縁部ナデ、1線部一帯部ナデ	普通 ～0.5mmの砂粒、 普通	普通 外面に低い稜 内面に低い稜	外面付付
123	2	SD2014 (210)	17-1	59	弥生土層 壺	口径 13.2 器高 12.2 最大径 15.0	外面 口縁部平行線文、口縁部一帯部ミガキ、 口縁部線による折文1列、体部中位稜 線文3帯1帯を2列、口縁部ナデ1列、 体部下平ミガキ 内面 口縁部ナデ、体部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	普通 外面に高い稜 内面に高い稜	外面付付
124	2	SD2014 (210)	17-1	59	弥生土層 (線)	口径 17.0 器高 12.6 最大径 18.0	外面 口縁部平行線文・ナデ折し、体部ナデ、 内面は折線線による折文1列、体部中位稜 線文3帯1帯を2列、口縁部ナデ1列、 内面 口縁部ナデミガキ、蓋部一帯部ナ デ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	中や良好 外面に高い稜線 内面に低い稜	外面付付
125	2	SD2014 (210)	17-1	59	弥生土層 (線)	口径 14.0 器高 9.4 最大径 13.0	外面 口縁部平行線文、体部ナデ、内面は折線 線による折文文・折文文、体部ミガキ 内面 口縁部ナデ後ミガキ、蓋部一帯部ナ デ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	中や良好 外面に高い稜線 内面に高い稜	外面付付 (C1類)
126	2	SD2014 (210)	17-1	59	弥生土層 壺	口径 15.0 器高 12.9 最大径 17.0	外面 口縁部平行線文、蓋部ナデ、蓋部稜 線線による折文文・折文文(1列)、 体部ハケ後ミガキ 内面 口縁部ナデ後ミガキ、蓋部一帯部ナ デ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	中や良好 外面に高い稜 内面に低い稜	C1類
127	2	SD2014 (210)	17-1	59	弥生土層 壺	口径 16.0 器高 15.8 最大径 19.0	外面 口縁部平行線文、蓋部ナデ、体部ナ デ 内面 口縁部一帯部ナデ、体部ハケ	普通 ～0.5mmの砂粒、 普通	中や良好 外面に高い稜線 内面に低い稜	外面付付 C1類
128	2	SD2014 (210)	17-1	59	弥生土層 壺	口径 21.4 器高 31.7 最大径 24.5 底径 3.2	外面 口縁部平行線文、蓋部ナデ、内面は折 文文、体部ハケ 内面 口縁部ミガキ、蓋部一帯部ナ デ、底径は小さく円レンズ状	普通 ～2mmの砂粒、 普通	普通 外面に高い稜 内面に低い稜	外面付付 C1類

ら弥生時代終末期後半までである。器台(149～158)は全て鼓形器台である。149～157は細い筒部を持つ一群で、弥生時代後期後葉から弥生時代終末期前半の様相を示す。152の器台は受部に上半部下縁に3条1帯の平行線文を2帯廻らし、その間に同心円スタンプ文を配す。スタンプには重なりや押しムラがみられる。158は詰まった筒部を持つ径の大きな器台である。弥生時代終末期後半に属すると思われる。168は壺形土器である。把手は土器だまり2002から出土した。狭口部下に巡る突帯には指で押さえつけたような凹みを2か所確認できる。この凹みは把手位置と一致していることから明らかに意図的なものといえ、真上から見ると把手内側の孔を通すように意識していることがよくわかる。この中に何かが通されていた可能性を示すのではないだろうか。鳥取県を分布の中心とする壺形土器は、住居からの出土例が圧倒的に多く何らかの実用具であると考えられているが、その用途は未だ判明していない。外来系土器も遺物量の多さに比例して多く出土した。148は椀形の坏部を



遺物図17-2 SD2014出土遺物

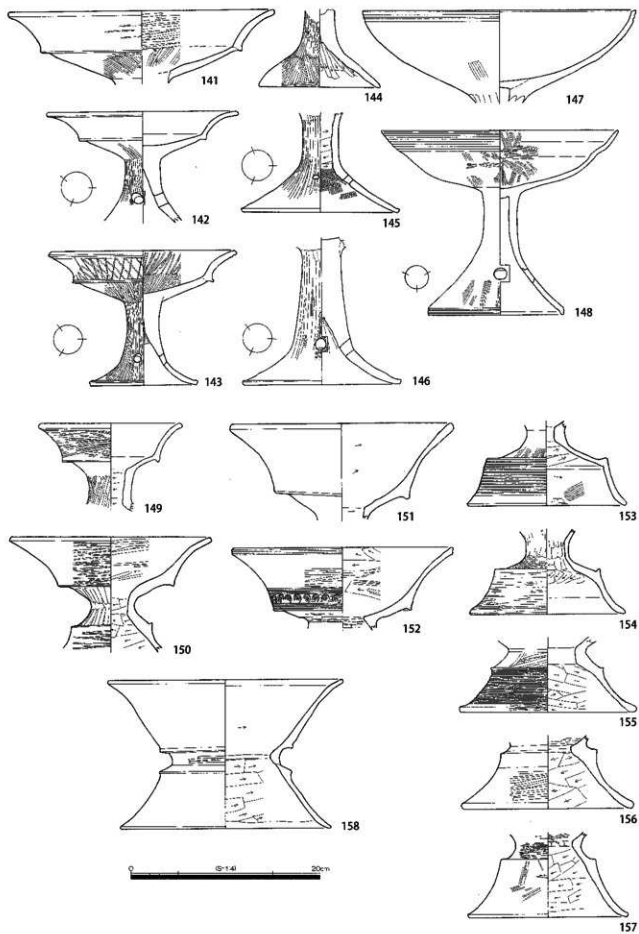


遺物観察表 17-2

器物番号	調査区	遺物番号 (調査番号)	遺物図 番号	図版 番号	特 別 留意	重量 (cm/g)	特 徴	土中/材質	焼成 温度	備考
129	2	SD2014 (2106)	17-2	59	弥生二期 遺	口径:18.0 高さ:6.5	外形:口縁部平行状線文・ナデ消し、胴部ナデ、 胴部中平線文 内面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ナデ、 胴部ナデ	普通 ～5mmの砂粒、 普通	普通 外面:滑 内面:瓦葺	C2類
130	2	SD2014 (2106)	17-2	59	弥生二期 遺	口径:22.8 高さ:11.9 最大径:24.8	外形:口縁部平行状線文・ナデ消し、胴部ナデ、 胴部ハケ後改状文 内面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	普通 外面:瓦葺 内面:瓦葺	C2類
131	2	SD2014 (2106)	17-2	60	弥生土器 遺	口径:20.3 高さ:12.3	外形:口縁部平行状線文・ナデ消し、胴部ナデ、 胴部ハケ後改状文・底状文 (残存)、胴部ナデ 内面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	普通 外面:瓦葺 内面:瓦葺	外面保存層 C2類
132	2	SD2014 (2106)	17-2	60	弥生土器 遺	口径:14.7 高さ:13.4 最大径:15.3	外形:口縁部平行状線文・ナデ消し、胴部ナデ、 胴部ハケ後ナデ 内面:ナデ後ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	中～良好 外面:滑 内面:瓦葺	外面保存層 D1類
133	2	SD2014 (2106)	17-2	60	弥生土器 遺	口径:18.6 高さ:25.4 最大径:21.0 底径:3.3	外形:口縁部一帯部ミガキ、胴部ハケ後一帯ミガ キ、底径部ナデ 内面:口縁部一帯部ミガキ、胴部ナデ後ナデ、 胴部一帯部ナデ	普通 ～3mmの砂粒、 普通	中～良好 外面:滑 内面:明瓦葺	外面保存層 D1類
134	2	SD2014 (2106)	17-2	60	弥生土器 遺	口径:20.6 高さ:21.5 最大径:23.3 底径:4.7	外形:口縁部一帯部ミガキ、胴部ハケ後一帯 ミガキ、底径部ナデ 内面:口縁部一帯部ミガキ、胴部ナデ後ナデ、 胴部ナデ	普通 ～2mmの砂粒、 普通	普通 外面:滑 内面:瓦葺	D1類
135	2	SD2014 (2106)	17-2	60	弥生土器 遺	口径:19.0 高さ:31.2 最大径:24.2 底径:4.5	外形:口縁部一帯部ナデ、胴部ナデ後半ミガキ、 後半ハケ 内面:口縁部ナデ、胴部一帯部ナデ、 胴部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	普通 外面:瓦葺 内面:瓦葺	D1類
136	2	SD2014 (2106)	17-2	60	弥生土器 遺	口径:14.2 高さ:19.3 最大径:13.6 底径:3.2	外形:口縁部平行状線文・ナデ消し、胴部ナデ、 胴部ハケ、胴部ナデ 内面:口縁部一帯部ナデ、胴部ナデ後ナデ、 胴部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	中～良好 外面:滑 内面:滑	外面保存層 D2類～D3類
137	2	SD2014 (2106)	17-2	60	弥生土器 遺	口径:15.8 高さ:22.35 最大径:16.9 底径:2.4	外形:口縁部ナデ、胴部ナデ・底径部残文、 胴部ハケ 内面:口縁部一帯部ナデ、胴部一帯部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	良好 外面:瓦葺 内面:瓦葺	D2類～D3類
138	2	SD2014 (2106)	17-2	61	弥生土器 遺	口径:17.0 高さ:14.2 最大径:18.3	外形:口縁部一帯部ナデ、胴部ハケ 内面:口縁部ナデ、胴部ナデ後ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	中～良好 外面:瓦葺 内面:滑	外面保存層 D2類
139	2	SD2014 (2106)	17-2	61	弥生土器 遺	口径:11.4 高さ:13.0 最大径:17.2	外形:口縁部一帯部ナデのちミガキ、胴部ハケ後 ナデ、胴部ハケ 内面:口縁部一帯部ナデ、胴部ナデ後ナデ、 下半部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 多	普通 外面:瓦葺 内面:瓦葺	外面保存層
140	2	SD2014 (2106)	17-2	61	弥生土器 遺	口径:19.6 高さ:18.2 最大径:20.6	外形:口縁部一帯部ナデ、胴部ハケ 内面:口縁部ナデ、胴部一帯部ナデ後ナデ、 下半部ナデ	普通 ～1mmの砂粒、 普通	普通 外面:瓦葺 内面:滑	外面保存層

持っ高環である。多少の欠損はあるがほぼ完形に復元された。北近畿系、丹後からの搬入品である。同じく北近畿系の高環の可能性のあるものとして144が挙げられる。端部に向かってすばまる脚裾を特徴とする。160はコップ形上器である。縦方向の把手が付いていた痕が残る。北近畿～北陸にかけて分布する器種、北近畿以東の土器の搬入もしくは模倣品と思われる。141～143は古備系の高環である。環部の屈曲部のシャープな稜と外反する立ち上りを特徴とする。143の口縁部には古備系高環に特徴的な斜格子文が施される。

遺構の性格と帰属時期 溝である。基盤層の砂礫層・粘土層に関わらず深く掘り込まれており、底を描いて深く掘り込む目的は水を流すためと考えられる。SD2014では実際に溝が機能していた段階での堆積層が確認されたことからそれを証明できた。その水量は一定量あったと想定されることから、SD2014が水路としての機能を持っていたと考える。溝の廃絶はSD2012と同様に埋め立てられたものと考えられる。埋土上層部からは巨礫に混じって残存率の高い土器が集中出土している。祭祀用途とされる羽状文小壺(121・122)が形を保ちながら近接して出土したことから、溝埋め立て時には廃絶のための祭祀行為があったと考えられ、その時期は弥生時代終末期の一時点と考えられる。溝の開削時期と存続時期に関して、明確な機能層である下層と、開削時の加工層である最下層に時期決定しうる遺物がなかったことから直接の判定はできない。上層・中層で出土標高が低く時期判定が可

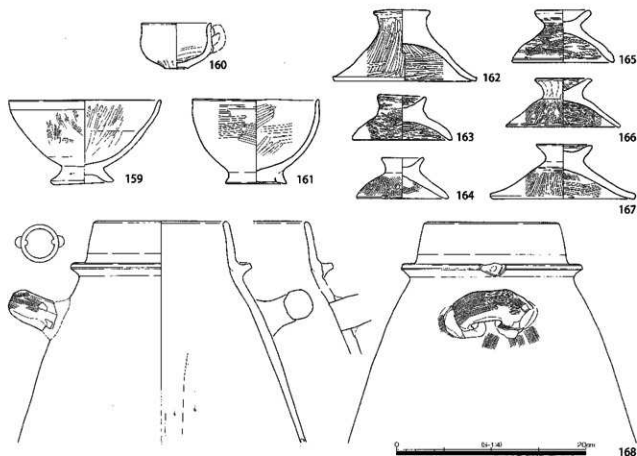


遺物図17-3 SD2014出土遺物

遺物観察表 17-3

遺物 番号	圃区	調査番号 (調査番号)	発掘 番号	種別 番号	法量 (cm/g)	特 徴	出土/材質	造 成 式 別	備 考
141	2	SD2014 (2106)	17.3	61	弥生土器 高坪	口径:27.8 高さ:7.7~	外面:口縁部ナデ後ミガキ、肩部部ケズリ後ハク後ミガキ 内面:口縁部一帯底面ミガキ 特記:肩部の肩面部は後出し強い痕をなす	普通 ~0.5mmの砂粒、 普通	普通 外面:磨 内面:刷削層 吉備系(備前か)
142	2	SD2014 (2106)	17.3	61	弥生土器 高坪	口径:(19.9) 高さ:11.7~	外面:口縁部ナデ、肩部一帯底面ミガキ 内面:口縁部ミガキ、腹部(ナデ) 特記:口縁部かしの方向、肩部の肩面部は後出し強い痕をなす	普通 ~0.5mmの砂粒、 普通	普通 外面:口縁部 内面:浅黄層 吉備系(備前か)
143	2	SD2014 (2106)	17.3	61	弥生土器 高坪	口径:(19.2) 高さ:14.2 脚径:11.2	外面:口縁部傾下文、その上に傾下文1条、下に傾下文1条、肩面部一帯底面ミガキ、腹部部ナデ 内面:口縁部一帯底面ミガキ、腹部部ナデ 特記:口縁部かしの方向、肩部の肩面部は後出し強い痕をなす	普通 ~1mmの砂粒、 普通	普通 外面:磨 内面:磨 吉備系(備前か)
144	2	SD2014 (2106)	17.3	61	弥生土器 高坪	高さ:8.1~ 脚径:12.7	外面:脚部ミガキ、脚部部ハク後ミガキ 内面:脚部部ナデケズリ、脚部部ナデ	普通 ~1mmの砂粒、 少ない	中今良好 外面:口縁部 内面:口縁部 吉備系(備前か)
145	2	SD2014 (2106)	17.3	61	弥生土器 高坪	高さ:10.4~ 脚径:116.3	外面:脚部部ナデ、脚部部ハク後ミガキ、脚部部ナデ 内面:脚部部ケズリ後ナデ、脚部部上平ハク、脚部部ナデ 特記:口縁部かしの方向	普通 ~1mmの砂粒、 普通	良好 外面:口縁部 内面:口縁部 吉備系(備前か)
146	2	SD2014 (2106)	17.3	61	弥生土器 高坪	高さ:15.5~ 脚径:116.4	外面:脚部部一帯底面ミガキ、脚部部ナデ 内面:脚部部ナデ 特記:口縁部かしの方向	普通 ~0.5mmの砂粒、 少ない	普通 外面:刷削層 内面:口縁部 吉備系(備前か)
147	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪	口径:(24.9) 高さ:8.8~	外面:口縁部傾下文2条、肩部部一帯底面ミガキ 内面:口縁部一帯底面(ミガキ)	普通 ~2mmの砂粒、 普通	普通 外面:浅黄層 内面:口縁部 吉備系(備前か)
148	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪	口径:(24.6) 高さ:19.5 脚径:12.6	外面:口縁部平行線文、肩部部一帯底面ミガキ、磨 内面:口縁部傾下文2条 特記:口縁部ミガキ、脚部部ナデ 特記:口縁部かしの方向	普通 ~4mmの砂粒、 普通	普通 外面:磨 内面:磨 吉備系(備前か)
149	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪 (脚部部)	口径:14.5 高さ:9.3~	外面:口縁部ナデ、肩部上平平行線文、交差ト ナデ、脚部部ナデ 内面:交差トナデ、脚部部ナデ	普通 ~0.5mmの砂粒、 少ない	中今良好 外面:内面 内面:浅黄層 吉備系(備前か)
150	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪 (脚部部)	口径:(20.9) 高さ:12.15~	外面:口縁部傾下文、肩部一帯底面ミガキ 内面:交差トナデ、口部一帯部ケズリ	普通 ~0.5mmの砂粒、 普通	普通 外面:磨 内面:磨 吉備系(備前か)
151	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪 (脚部部)	口径:(23.0) 高さ:10.2~	外面:交差ト一帯底面ミガキ 内面:口縁部傾下文、交差トナデ後ナデ、脚部部ナデ	普通 ~1mmの砂粒、 普通	普通 外面:磨 内面:磨 吉備系(備前か)
152	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪 (脚部部)	口径:(23.0) 高さ:8.7~	外面:口縁部傾下文1条、肩部上平平行線文、 肩部上平下平平行線文(磨) 内面:交差トナデ後ナデ、脚部部ナデ 特記:口縁部ミガキ、脚部部ナデ	普通 ~1mmの砂粒、 普通	普通 外面:口縁部 内面:磨 吉備系(備前か)
153	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪 (脚部部)	高さ:9.0~ 脚径:18.6	外面:口部下平ハク、脚部部平行線文19条、脚部部 脚部部ナデ 内面:脚部部ナデケズリ、脚部部ハク、脚部部ナデ	普通 ~2mmの砂粒、 普通	普通 外面:口縁部 内面:磨 吉備系(備前か)
154	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪 (脚部部)	高さ:9.0 脚径:16.2	外面:脚部部ハク、脚部部傾下文ミガキ、脚部部平行線文、 脚部部上平ハク、口縁部傾下文、脚部部ナデ 内面:交差トナデ、交差トナデ後ナデ、脚部部ナデ 特記:口縁部ミガキ、脚部部ナデ	普通 ~2mmの砂粒、 普通	普通 外面:刷削層 内面:口縁部 吉備系(備前か)
155	2	SD2014 (2106)	17.3	62	弥生土器 高坪 (脚部部)	高さ:7.9~ 脚径:18.4	外面:交差ト下平一帯底面ミガキ、脚部部平行線文、 脚部部ナデ後ミガキ 内面:交差トミガキ、脚部部ナデ、脚部部ケズリ、脚部部ナデ	普通 ~1mmの砂粒、 普通	中今良好 外面:口縁部 内面:口縁部 吉備系(備前か)
156	2	SD2014 (2106)	17.3	63	弥生土器 高坪 (脚部部)	高さ:7.8~ 脚径:17.6	外面:口部一帯脚部上平ナデ、脚部部ナデ後ミガキ、 脚部部ナデ 内面:交差トナデミガキ、脚部部ナデ、脚部部ケズリ、 脚部部ナデ	普通 ~1mmの砂粒、 普通	普通 外面:口縁部 内面:磨 吉備系(備前か)
157	2	SD2014 (2106)	17.3	63	弥生土器 高坪 (脚部部)	高さ:9.0~ 脚径:16.8	外面:口部一帯脚部上平ミガキ、脚部部ナデ 内面:交差トナデミガキ、脚部部ナデ、脚部部ナデ 特記:口縁部ナデ	普通 ~2mmの砂粒、 普通	普通 外面:磨 内面:磨 吉備系(備前か)
158	2	SD2014 (2106)	17.3	63	弥生土器 高坪 (脚部部)	口径:(24.9) 高さ:15.7 脚径:22.1	外面:交差トナデ、脚部部傾下文ミガキ、脚部部ナデ 内面:口縁部傾下文、交差トナデ後ナデ(一部ミガキ)、 口部ナデ、脚部部ケズリ、脚部部ナデ	普通 ~1mmの砂粒、 普通	普通 外面:浅黄層 内面:浅黄層 吉備系(備前か)

能な個体としては、甕(135・137)、器台(154・158)があり、その時期幅は弥生時代後期後葉から弥生時代終末期後半と考えられる。これは、出土遺物総体の時期幅と概ね一致する。溝底から慶絶時期と同時期の上器が出土する点は、溝底絶時(埋め立て時)にほとんど堆積層がなかったことを示す現象といえ、下層埋土の遺物の少なさと合わせて考えると、渡瀬等によって溝の機能が維持・管理されていた可能性を示すものと考えられる。



遺物図17-4 SD2014出土遺物

遺物観察表 17-4

遺物 番号	調査区	図面番号 (調査番号)	発掘 層位	器 種	材質	特徴	土色/材質	施 色 装 飾	出 所	
159	2	SD2014 (2106)	17-4	63	赤土上部 灰緑片	口径 15.8 器高 8.9 胴径 6.1	外底: 口縁部ナデ、底部ハケナデ、底部下端へ 器台部分ズリ後ナデ 内底: 口縁部ナデ、底部ミガキ、器台部分ナデ	器底 ～1mmの砂粒、 骨油	器底 外底: 黄褐色 内底: 黄褐色	
160	2	SD2014 (2106)	17-4	63	赤土上部 コップ形土器	口径 7.3 器高 4.8 底径 2.4	外底: 口縁部ナデ、底部部分ズリ後ナデ、底部ナデ 内底: 口縁部～底部ナデ、底部部分ナデ 特記: 成層断面を呈する、外底に把手紐付け痕跡 を有する	器底 ～1mmの砂粒、 骨油	器底 内底: 黄褐色 内底: 黄褐色	北成遺集・北成系
161	2	SD2014 (2106)	17-4	63	赤土上部 鉢	口径 (13.2) 器高 8.9 胴径 6.2	外底: 口縁部～底部ナデ後ミガキ、台部ナデ 内底: 口縁部～底部ナデ後ミガキ 特記: 台部は成層断面に粘土層を有し形成 される	器底 ～1mmの砂粒、 骨油	器底: に近い特 内底: 黄褐色	
162	2	SD2014 (2106)	17-4	63	赤土上部 蓋	口径 14.8 器高 7.5 胴径 5.9	外底: 口縁部ナデ、片部～器底部、底部ナデ後 ミガキ 内底: 片部ミガキ	器底 ～0.5mmの砂粒、 少ない 内底: 黄褐色	やや良好 内底: に近い黄褐色 内底: 黄褐色	
163	2	SD2014 (2106)	17-4	64	赤土上部 器	つまみ径 4.8 器高 4.8 口径 10.3	外底: つまみ部～片部ナデ後ミガキ 内底: 片部ナデ後ミガキ	器底 ～1mmの砂粒、 骨油	やや良好 内底: 黄褐色 内底: 黄褐色	
164	2	SD2014 (2106)	17-4	64	赤土上部 蓋	つまみ径 4.0 器高 4.3 口径 9.5	外底: つまみ部ナデ、片部ハケ、口縁部ナデ 内底: 片部ハケ後ナデ	器底 ～1mmの砂粒、 骨油	器底: に近い特 内底: に近い黄褐色	
165	2	SD2014 (2106)	17-4	64	赤土上部 器	つまみ径 5.1 器高 5.45 口径 10.5	外底: つまみ部ナデ、片部～口縁部ハケ後ミガキ ナデ、口縁部同様に化粧文 2 条 内底: 片部ハケ後ミガキ	器底 ～1mmの砂粒、 骨油	器底: に近い黄褐色 内底: に近い黄褐色	外成層付着
166	2	SD2014 (2106)	17-4	64	赤土上部 器	つまみ径 5.5 器高 5.1 口径 12.1	外底: つまみ部ナデ後ミガキ、指オマケ後ナデ ナデ、片部ハケ、口縁部ナデ 内底: 片部ハケ後ミガキ	器底 ～0.5mmの砂粒、 骨油	器底 内底: に近い特	
167	2	SD2014 (2106)	17-4	64	赤土上部 蓋	つまみ径 6.0 器高 5.8 口径 15.0	外底: つまみ部ナデ後 器ミガキ、片部ハケ～口縁 部ナデ後ミガキ 内底: 片部ハケ後ミガキ、片部ナデ後ミガキ	器底 ～1mmの砂粒、 骨油	器底: に近い黄褐色 内底: に近い黄褐色	
168	2	SD2014 (2106)	17-4	64	赤土上部 後部土器	口径 (13.5) 器高 23.4	外底: 口縁部 (ナデ)、底部ナデ、底部 (ハケ)、器 台ハケ内底: 口縁部ナデ、底部部分ズリハ ケ 特記: 成層断面 (器底) で存在した器口 2 箇所あり、 器口の下部は成層断面に把手あり	器底 ～1mmの砂粒、 骨油	器底: 黄褐色 内底: に近い黄褐色	部分断面に把手着

### 第3面(図38、写真図版25)

第3面は2-8層を除去した後の遺構面である。2-8層は基本的に遺物を含まない上層層で、最終基盤層から連続する一連の堆積層とされる。Tr.7断面(図29)で確認されたP2062は2-7層を切るにもかかわらず、第2面上での検出が困難であった。検出漏れ遺構の確認と、旧土壌層に遺物が含まれるかどうか、その下面遺構の有無の確認のために、調査区全域をカバーする下層確認用トレンチを設定し(Tr.10～Tr.15)、最終基盤層までの掘り下げによる遺物確認後、面精査を行い遺構検出を行った。各トレンチの成果は以下の通りである。

Tr.10 調査区西部に位置する。第2面からの掘削深度は0.55m～0.9m、東から西にかけて深くなる。湧水が激しく西端ではぬかるみとなってしまったため、面よりも掘り過ぎている。トレンチ掘削中に出土した4点の土器片は、全て時期不明の体部破片である。上層部からの出土で2-8層層属とは断定できない。面精査において遺構は検出されなかった。

Tr.11 調査区西部に位置する。第2面からの掘削深度は0.6m～0.8m、東から西にかけて深くなる。西半部では湧水が激しい。トレンチ掘削中に土器片2点が出土した。そのうち1点は、器台の裾部である。弥生時代後期から終末期に属すると思われる。面精査において遺構は検出されなかった。

Tr.12 調査区中央部に位置する。第2面からの掘削深度は0.35m～0.4m、東から西にかけて深くなる。西端ではわずかに湧水がある。トレンチ掘削中の出土遺物は、高坏もしくは器台と思しき破片が1点、その他不明破片6点である。検出遺構は十坑1基のみ。SK2042は不定形の土坑である。

Tr.13 調査区中央部に位置する。第2面からの掘削深度は0.35m～0.5m、東から西にかけて深くなる。トレンチ掘削中に遺物は出土していない。検出遺構は十坑1基のみ。SK2041は溝状土坑である。当初のトレンチ範囲を超えて広がるため、遺構延長に合わせてトレンチを拡張した。当土坑は第2面調査時に存在の有無を検討しており、一度は遺構ではないと判断したが、掘り下げることによって再検出された。第2面に帰属させたため詳細は第2面項で解説している。

Tr.14 調査区中央部に位置する。第2面からの掘削深度は0.4m。北端部の基盤層は礫質、南にかけて深くなる。トレンチ掘削時に遺物は出土していない。検出遺構は3基、北端にあるSK2041に関してはTr.13で述べた通りである。南端部のP2058・P2059は共にピットである。P2058は浅く基盤層との境界が不明瞭である。土壌の染み、あるいは植生痕の可能性が高い。これに対してP2059は底が明瞭な掘り込みで、時期不明ながら体部破片が1点出土している。遺構であると思われる。

Tr.15 調査区東部に位置する。Tr.5及びTr.7で確認されたピットを包括し、2-8層が残存する範囲としてSD2012以東全域を調査対象とした。第2面からの掘削深度は0.1～0.2m、北東から南西にかけて深くなる。トレンチ掘削中の遺物は破片遺物のみで、内訳は、古墳時代前期の裏口縁部1点・器台裾部1点・穿孔のある小壺底部1点・器種不明破片3点である。検出遺構は15基、遺物が出土したのはP2065のみである。ピット配置に並びは確認できなかった。

図38には補足情報として、2-8層除去面の等高線を記載している。第3面検出レベルとTr.1～Tr.5断面を元として、未掘削部分を推定復元したものである。等高線からは、2区北東部と南西部が高まりとなっており、その間が深く落ち込んでいることが読み取れる。落ち込みはTr.10あたりが最深部となり、その西側はさらに低くなると予想される。

第3面まとめ 第3面の調査成果は以下の通りである。

出土遺物の帰属について トレンチ掘削中にわずかながらも土器が出土している。基本的に細片遺物であるため大半は時期不明であるが、時期幅を示すとすると弥生時代後期から古墳時代前期となる。弥生時代中期以前の土器はみられない。遺物密度は2区中央部から東部にかけて高くなるようで、遺物量は遺構数に比例しているといえるが、2-8層掘削中の遺物量は2-7層に比較すると極めて少ない。以上のことから判断すると、これらの細片遺物は2-7層掘り残しもしくは検出漏れ遺構内に帰属する可能性が高く、2-8層に帰属する可能性は極めて低いと考える。

検出遺構の分布と帰属について 第3面の遺構密度は東が最も高い。検出標高値は45.323m～45.882m、平均値は45.692mである。底部標高値は45.162m～45.733m、平均は45.474mである。復元された等高線からは45.70mラインを遺構粗密の境界とみることができ、それよりも高い場所に遺構が集中する。この範囲は第2面でもピット類が集中しており、やはり高地部に遺構が集中する傾向がある。遺構底標高の最低値は45.162mである。これは、それ以下まで掘り下げてしまうと仮に遺構があったとしても検出できない可能性が高いことを示している。第3面遺構は基本的に第2面の検出漏れと考えられ、2-8層に帰属する遺構はないと思われる。

調査地内の旧地形について トレンチ掘削深度は東から西にかけて深くなる。これは2-8層が厚くなることを意味する。復元された2-8層除去面の等高線からは調査区北部から北東部一帯と南西端が高地部となっていることが判明した。トレンチ断面からは、高地部の2-10層がかなりの硬質になっていることが判明しており、特に北部では第2面遺構集中部と一致している。2-10層の堆積が後世まで影響を残す高まりの起源になっていたものと思われる。このことから考えると、同様の高まりである、調査区南西側にも遺構が広がる可能性があるといえる。一方、高まりの間にある落ち込みの性格は不明である。Tr.10等での湧水の激しさから、旧河川を示すとも考えられるが、その下層部を確認していないため形成要因はわからない。



写真14 2区Tr.10掘削



写真15 2区調査終了

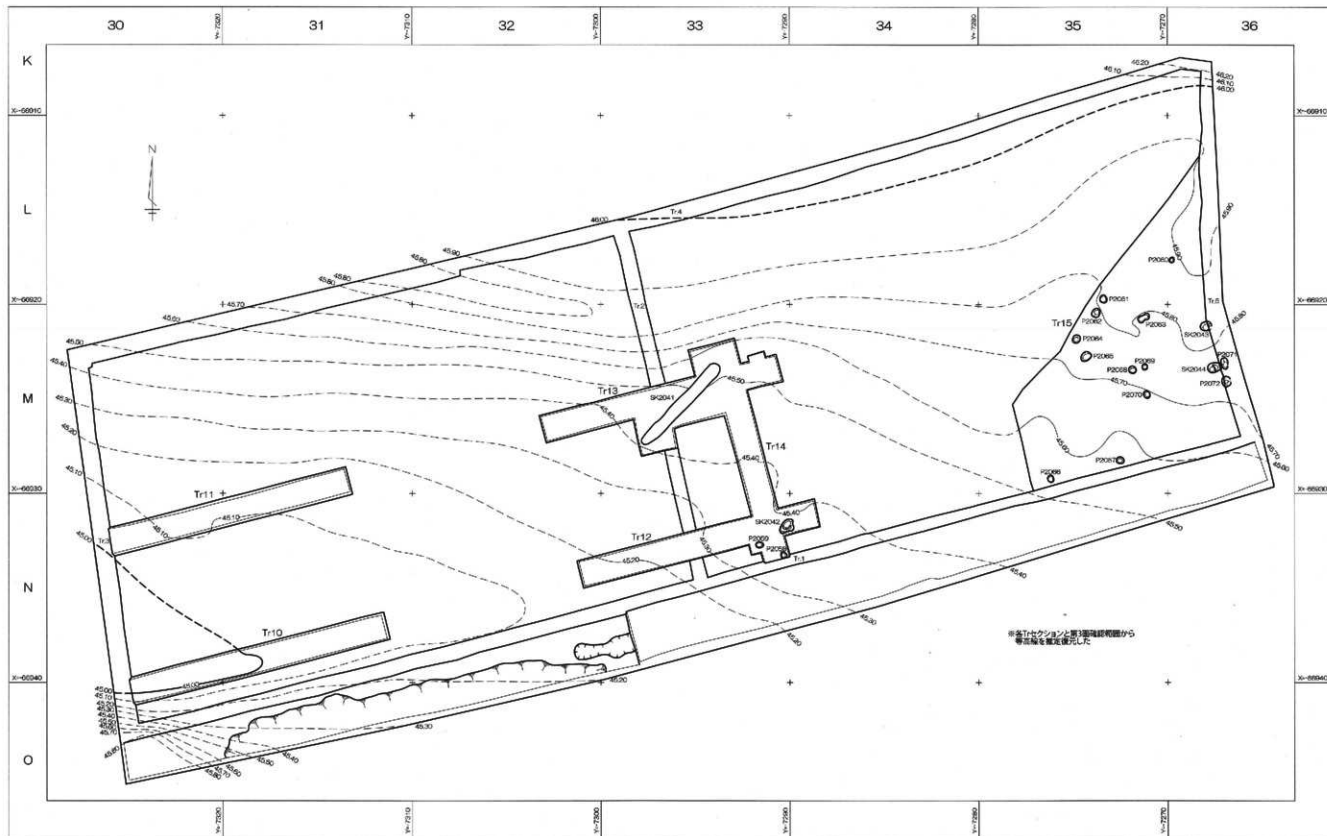


图38 2区 第3面平面图

表7 2区遺構一覧表1

遺構番号	発掘期 土層番号	遺構種類	西	北西座標	Grid	長径 (m)	短径 (m)	埋没面からの 深さ (cm)	下地層	用途	備考 (土壌土)	備考	
P2001	2006	ピット	1	M30	0.213	0.205	0.211	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2002	2006	ピット	1	M30	0.368	0.349	0.101	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2003	2016	ピット	1	M30	0.284	0.240	0.163	内野	埋片	灰白色粘土層			
F004	2016	ピット	1	M30	0.264	0.243	0.093	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2005	2022	ピット	1	M30	0.384	0.376	0.101	内野	埋片	オリーブ灰色粘土層			
P2006	2022	ピット	1	M30	0.449	0.423	0.022	内野	埋片	オリーブ灰色粘土層			
P2007	2024	ピット	1	M30	0.417	0.411	0.174	内野	埋片	黒褐色粘土層			
P2008	2024	ピット	1	M31	0.265	0.203	0.039	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2009	2048	ピット	1	M31	0.365	0.270	0.178	内野	埋片	灰白色粘土層			
P2010	2054	ピット	1	M31	0.362	0.265	0.083	内野	埋片	黒褐色粘土層			
P2011	2050	ピット	1	M31	0.294	0.260	0.049	内野	埋片	黒褐色粘土層			
P2012	2032	ピット	1	M31	0.280	0.261	0.212	内野	埋片	黒褐色粘土層			
P2013	2036	ピット	1	M32	0.403	0.360	0.137	内野	埋片	黒褐色粘土層			
P2014	2035	ピット	1	M32	0.484	0.462	0.172	内野	埋片	黒褐色粘土層			
P2015	2039	ピット	1	M32	0.459	0.288	0.081	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2016	2073	竪穴	2	SR2001	M30	0.813	0.679	0.165	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2017	2074	竪穴	2	SR2001	M30	0.795	0.675	0.117	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2018	2073	竪穴	2	SR2001	M31	0.718	0.667	0.110	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2019	2076	竪穴	2	SR2001	M30	0.674	0.572	0.120	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2020	2077	竪穴	2	SR2001	M30	0.634	0.500	0.220	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2021	2078	竪穴	2	SR2001	M31	0.704	0.500	0.185	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2022	2079	竪穴	2	SR2001	M30	0.752	0.720	0.250	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2023	2080	竪穴	2	SR2001	M30	0.776	0.666	0.225	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2024	2081	竪穴	2	SR2001	M31	0.742	0.672	0.215	内野	埋片	灰白色粘土層		
P2025	2084	ピット	2	N00	0.682	0.632	0.176	内野	埋片	黒い土層			
P2026	2059	ピット	2	L32	0.638	0.548	0.196	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2027	2058	ピット	2	L32	0.635	0.607	0.190	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2028	2057	ピット	2	M32	0.605	0.713	0.229	内野	埋片	灰白色粘土層-黒磁鉄砂			
P2029	2060	ピット	2	M32	0.580	0.330	0.184	内野	埋片	土層			
P2030	2129	ピット	2	M32	0.822	0.799	0.591	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂		SD2015に付される	
P2031	2128	ピット	2	M32	0.676	0.666	0.630	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2032	2069	ピット	2	L33	0.719	0.617	0.131	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2033	2088	ピット	2	L33	0.629	0.478	0.321	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂		SD2015に付される	
P2034	2120	ピット	2	M33	0.826	0.428	0.402	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂		SD2031に付される	
P2035	2060	ピット	2	L33	0.589	0.478	0.222	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2036	2060	ピット	2	L33	0.626	0.610	0.140	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2037	2121	ピット	2	M33	0.724	0.605	0.417	横内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂		SK2013の生業台跡とトランプ溝跡、トランプによって内野は成層	
P2038	2091	ピット	2	L33	0.546	0.436	0.099	内野	埋片	灰白色粘土層-黒磁鉄砂			
P2039	2062	ピット	2	L33	0.558	0.489	0.134	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2040	2064	ピット	2	L33	0.574	0.540	0.278	内野	埋片	土層			
P2041	2095	ピット	2	L33	0.627	0.732	0.358	横内野	埋片	土層			
P2042	2066	ピット	2	L33	0.666	0.514	0.213	内野	埋片	不整地層			
P2043	20610	ピット	2	L33	0.588	0.641	0.410	内野	埋片	土層			
P2044	2069	ピット	2	L33	0.677	0.673	0.431	横内野	埋片	V字層			
P2045	2062	ピット	2	L34	0.478	0.462	0.042	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2046	2122	ピット	2	L34	1.020	0.967	0.479	横内野	埋片	土層			
P2047	2160	ピット	2	L34	0.451	0.413	0.229	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂		SD2015に付される、SD2019を参照	
P2048	2063	ピット	2	L34	0.585	0.536	0.068	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2049	2097	ピット	2	L34	0.641	0.640	0.184	内野	埋片	不整地層			
P2050	2126	ピット	2	L34	0.514	0.422	0.208	内野	埋片	黒褐色粘土層		SD2015に付される	
P2051	2130	土柱穴	2	SR2001	L34	1.029	0.767	0.545	横内野	埋片	土層		埋片はほぼSD2001土柱穴
P2052	2103	土柱穴	2	SR2001	L34	0.693	0.507	0.639	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂		埋片はほぼSD2001土柱穴
P2053	2123	土柱穴	2	SR2001	L34	0.801	0.655	0.582	内野	埋片	土層		埋片はほぼSD2001土柱穴
P2054	2126	土柱穴	2	SR2001	L34	0.673	0.633	0.599	内野	埋片	土層		埋片はほぼSD2001土柱穴
P2055	2125	ピット	2	L34	0.669	0.371	0.176	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2056	2115	ピット	2	L35	0.995	0.684	0.437	横内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂		SK2037と埋片合っているが埋片は不明	
P2057	2118	ピット	2	K36	0.596	0.513	0.305	内野	埋片	灰白色粘土層		SK2027に下部を切られる	
P2058	2137	ピット	3	K33	0.360	0.313	0.050	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2059	2138	ピット	3	K33	0.115	0.305	0.132	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2060	2136	ピット	3	L36	0.307	0.344	0.149	内野	埋片	不整地層			
P2061	2139	ピット	3	M33	0.415	0.373	0.455	内野	埋片	土層			
P2062	2140	ピット	3	M33	0.500	0.416	0.462	内野	埋片	土層			
P2063	2141	ピット	3	M33	0.664	0.543	0.284	横内野	埋片	土層			
P2064	2142	ピット	3	M33	0.483	0.396	0.228	内野	埋片	不整地層			
P2065	2143	ピット	3	M33	0.589	0.452	0.478	内野	埋片	土層			
P2066	2144	ピット	3	M33	0.381	0.265	0.118	内野	埋片	不整地層			
P2067	2155	ピット	3	M33	0.410	0.353	0.089	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2068	2146	ピット	3	M33	0.411	0.378	0.381	内野	埋片	土層			
P2069	2147	ピット	3	M33	0.309	0.252	0.217	内野	埋片	土層			
P2070	2148	ピット	3	M33	0.410	0.326	0.147	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
P2071	2152	ピット	3	M36	0.607	0.291	0.692	内野	埋片	土層			
P2072	2151	ピット	3	M36	0.524	0.148	0.275	内野	埋片	黒褐色粘土層-黒磁鉄砂			
SR2001	2132	竪穴(柱礎跡)	2	SR2001	M30	3.740	3.520	0.432	内野	埋片	黒い土層		
SR2001	2044	多角溝	1	M31	0.538	0.335	0.049	横内野	埋片	黒い土層			
SD2002	2047	多角溝	1	M31	1.684	0.306	0.130	横内野	埋片	黒い土層			



表8 2区遺構一覧表2

遺構番号	関係地 遺構 土壌	調査年度	所在	面積 ㎡	Grid	面積 ㎡	埋没 深さ m	構造	形状	層上(本体)	備考	
SD0003	2011	耕作層	1	N30	(0.051)	0.330	0.111	円筒状	西向き	黒色粘り土		
SD0004	2014	耕作層	1	N30	(5.870)	0.329	0.081	直線状	西向き	黒色粘り土		
SD0005	2020	耕作層	1	N30	(6.098)	0.376	0.108	直線状	西向き	黒色粘り土		
SD2006	2025	耕作層	1	N30	(2.899)	0.350	0.056	円筒状	不特定	黒色粘り土		
SD2007	2031	耕作層	1	N31 ~ N32	(9.376)	0.340	0.080	直線状	西向き	黒色粘り土		
SD2008	2034	耕作層	1	N31 ~ N32	(7.893)	0.297	0.102	直線状	西向き	黒色粘り土		
SD2009	2037	耕作層	1	N32	(5.271)	0.370	0.067	円筒状	西向き	黒色粘り土		
SD2010	2032	耕作層	1	N32	2.383	0.182	0.086	直線状	西向き	黒色粘り土		
SD2011	2041	耕作層	1	N32	4.408	0.278	0.094	直線状	西向き	黒色粘り土		
SD2012	2094	大溝	2	N34 ~ L36	28.489	1.475	0.833	直線状	西向き	上層: 黒色粘り土 下層: 黒色粘り土		
SD2013	2109	大溝	2	R.34 ~ R.36	33.623	2.027	1.060	直線状	西向き	上層: 黒色粘り土 下層: 黒色粘り土		
SD2014	2106	大溝	2	R34 ~ R35	32.897	2.895	1.453	直線状	西向き	上層: 黒色粘り土 下層: 黒色粘り土		
SD2015	2085	溝	2	M30 ~ L36	63.409	0.762	0.418	円筒状	西向き	黒色粘り土		
SD2016	2043	溝	2	M31	3.107	0.742	0.072	円筒状	西向き	黒色粘り土		
SD2017	2086	溝	2	M31	8.033	0.768	0.158	直線状	西向き	黒色粘り土		
SD2018	2086	溝	2	M31	1.487	0.413	0.141	直線状	西向き	黒色粘り土		
SD2019	2099	溝	2	L34	1.575	0.594	0.193	直線状	不特定	黒色粘り土		
SD2020	2101	溝	2	L34	4.687	0.609	0.153	直線状	不特定	黒色粘り土		
SD2021	2133	溝	2	L34	-	-	-	-	-	-		
SK2001	2010	土坑	1	M30	1.274	1.252	0.084	不特定	不明	黒色粘り土		
SK2002	2020	土坑	1	M30	0.961	0.339	0.039	不明	不明	黒色粘り土		
SK2003	2012	土坑	1	N30	(0.734)	0.063	0.060	不明	不明	黒色粘り土		
SK2004	2013	土坑	1	N30	1.095	0.569	0.361	不明	不明	黒色粘り土		
SK2005	2017	土坑	1	R30	0.942	0.659	0.018	不明	不明	黒色粘り土		
SK2006	2019	土坑	1	R30	0.882	0.673	0.038	不明	不明	黒色粘り土		
SK2007	2066	土坑	1	R30	0.868	0.461	0.149	不明	不明	黒色粘り土		
SK2008	2003	土坑	1	M31	1.579	0.608	0.250	不明	不明	黒色粘り土		
SK2009	2002	土坑	1	M31	0.570	0.531	0.091	不明	不明	黒色粘り土		
SK2010	2007	土坑	1	M31	0.821	0.608	0.230	不明	不明	黒色粘り土		
SK2011	2003	土坑	1	M31	0.486	0.419	0.094	不明	不明	黒色粘り土		
SK2012	2045	土坑	1	M31	0.736	0.340	0.046	不明	不明	黒色粘り土		
SK2013	2044	土坑	1	M31	0.835	0.378	0.076	不明	不明	黒色粘り土		
SK2014	2040	土坑	1	M31	0.558	0.393	0.083	不明	不明	黒色粘り土		
SK2015	2051	土坑	1	N31	0.328	0.289	0.080	不明	不明	黒色粘り土		
SK2016	2052	土坑	1	N31	0.497	0.310	0.033	不明	不明	黒色粘り土		
SK2017	2027	土坑	1	R31	0.094	0.544	0.061	不明	不明	黒色粘り土		
SK2018	2028	土坑	1	R31	1.121	0.820	0.120	不明	不明	黒色粘り土		
SK2019	2055	土坑	1	R32	0.552	0.608	0.010	不明	不明	黒色粘り土		
SK2020	2050	土坑	1	R32	0.712	0.537	0.054	不明	不明	黒色粘り土		
SK2021	2060	土坑	1	M30	0.765	0.415	0.119	不明	不明	黒色粘り土		
SK2022	2069	土坑	1	M33	(0.637)	0.613	0.060	不明	不明	黒色粘り土		
SK2023	2071	土坑	1	M33	0.580	0.162	0.280	不明	不明	黒色粘り土		
SK2024	2072	土坑	1	M33	1.208	0.873	0.371	不明	不明	黒色粘り土		
SK2025	2113	土坑	1	R35 ~ 36	1.873	0.540	0.282	不明	不明	黒色粘り土		
SK2026	2082	土坑	2	M30	(0.680)	0.106	0.166	不明	不明	黒色粘り土		
SK2029	2058	土坑	2	M31	1.494	0.930	0.061	不明	不明	黒色粘り土		
SK2030	2114	溝	2	N31	4.815	0.729	0.348	直線状	西向き	黒色粘り土		
SK2031	2011	溝	2	M32 ~ M33	7.487	1.213	0.761	直線状	西向き	黒色粘り土		
SK2032	20614	溝	2	L33	(0.000)	0.702	0.292	不明	不明	黒色粘り土		
SK2033	2133	溝	2	L34	1.159	0.612	0.572	不明	不明	黒色粘り土		
SK2034	2124	溝	2	S2001	L31	1.061	0.574	0.200	不明	不明	黒色粘り土	
SK2035	2162	溝	2	L34	1.302	0.938	0.394	不明	不明	黒色粘り土		
SK2036	2104	溝	2	L34	1.721	1.656	0.372	不明	不明	黒色粘り土		
SK2037	2167	溝	2	L38	1.303	0.916	0.252	不明	不明	黒色粘り土		
SK2038	2168	溝	2	L33	1.270	0.879	0.152	不明	不明	黒色粘り土		
SK2039	2105	溝	2	L35	0.973	(0.521)	0.240	不明	不明	黒色粘り土		
SK2040	2112	溝	2	M36	(0.747)	(0.021)	0.319	不明	不明	黒色粘り土		
SK2041	2134	溝	2	M33	5.785	0.677	0.174	不明	不明	黒色粘り土		
SK2042	2135	溝	2	N33	0.911	0.653	0.210	不明	不明	黒色粘り土		
SK2043	2149	溝	2	M36	0.499	0.490	0.353	不明	不明	黒色粘り土		
SK2044	2180	溝	2	M36	0.752	0.529	0.173	不明	不明	黒色粘り土		
DF2001	2067	溝	2	N31	2.060	1.805	0.164	-	-	-		
DF2002	2116	溝	2	N34	2.965	2.367	0.143	-	-	-		
DF2003	2119	溝	2	S2001	L34	3.260	2.480	0.150	-	-		

### 第3節 3区 遺構と遺物

#### 第1項 3区 基本層序 (図39-1・39-2・41、写真図版26)

3区調査に先立ち、八頭町教育委員会発掘調査監理者の指示のもとでトレンチ調査をおこなった。3区を東西に縦断する170mの長さのTr.1を設定して調査し、続いてTr.1と直行する南北方向にTr.2・Tr.3・Tr.4・Tr.5を設定し、遺構・遺物の遺存状態を確認した。その結果、調査区の広範囲に暗褐色砂層(3-3層)・黄灰色砂層(3-4層)が堆積しており、これが弥生時代の遺物包含層であることがわかった。また人力掘削によるサブトレンチ調査で下位層を確認したところ、3区全体に黒色土層(3-8層)が広がっており、この層が地点によってシルト・粘土質シルト・砂質シルトに変わりつつも、切れずに続いていることがわかった。Tr.1黒色土層の下位の標高を比較すると東端と西端の比高差は約1.5mで、西に緩やかに下がっている。この黒色土層は無遺物層であり、弥生時代の竪穴住居跡等はこの層を切って構築されていることが確認できたため、黒色土上面でプラン確認するのが最適と判断した。第3面は黒色土(3-8層)上面である。

Tr.1を128層に区分し、Tr.5を54層に区分した。セクション図を図39-1・39-2に掲載する。これを特徴・時期ごとに整理すると以下のようになる。

基本層序区分	名称	特徴・時期
3-1層	圃場整備関連層	圃場整備の際の盛土・整地層、暗渠排水、昭和期。
3-2層	旧耕作土	圃場整備以前の水田耕作土の残骸、近世・近代。
3-3層	暗褐色砂層	弥生時代遺物包含層、洪水性二次堆積層、耕作攪乱を受ける。
3-4層	黄灰色砂層	上面が第2面、耕作攪乱を受ける。
3-5層	明黄褐色砂層	3-4層より明るい黄色砂、3区西側の一部にのみ残る。
3-6層	褐灰色砂質シルト層	南側低地部に広がる3-4層と3-6層の混合土。
3-7層	黒褐色砂質シルト層	北側の黒色土上面に広がる二次堆積層。
3-8層	黒色土層	無遺物層、上面が第3面、地点によりシルト・粘土質シルト・砂質シルトに主体土が変わる。3区北側ではシルト層であるが、南側では湿地性堆積層の砂質シルトとなる。南側の黒色砂質シルトは、有機物由来の黒色土と河川氾濫の砂が混合した層である。
3-9層	漸移層	黒褐色砂質シルト・暗褐色砂質シルト・黄褐色砂質シルトの混合土、弥生時代中期以前の無遺物層、上面が第4面である。
3-10層	黄褐色砂層	基盤層相当層、弥生時代中期以前の無遺物層、上面が第4面である。

#### 第2項 3区の概要

3区は今回発掘調査対象範囲のうち最も南西側の八東川下流方向に位置する。調査区は東西に細長く、調査面積は4861.375㎡である。調査はトレンチ確認調査を含め、4面にわたる。

面ごとの検出遺構の内訳は以下の通りである。

第1面	耕作溝群4・土坑2・ピット56	……平安時代～中世
第2面	掘立柱建物跡7・竪穴住居跡12・木棺墓4・土坑54(住居内土坑含む)・ピット384(住居内ピット含む)	……弥生～平安時代

- 第3面 掘立柱建物跡1・竪穴住居跡3・土坑31(住居内土坑含む)・ピット349  
(住居内ピット含む) ……弥生時代
- 第4面(トレンチ調査) 上坑1・ピット19・落ち込み3・倒木痕3 ……弥生時代以前

第1面は耕作溝群・ピット列で構成される面である。耕3001～耕3003の耕作溝群が多数検出される。時代は古代以降である。近世以降の耕作土3-2層を除去した段階で検出された。

第2面は SB3001～SB3007の掘立柱建物跡とSI3001～SI3012の竪穴住居跡がプラン上で検出される面である。耕3001～耕3003を除去し、暗褐色砂層(3-3層)を除去した段階で検出された。確認面は黒褐色砂質シルト層(3-7層)上面から黄灰色砂層(3-4層)上面である。遺構の所属時期は弥生時代中期が主体で、中でも竪穴住居跡12棟、掘立柱建物跡3棟、土器が集中する土坑等で弥生時代中期後葉の土器が出土している。中期以外の土器はほとんどみられない。木棺墓4基は出土遺物が水晶製小玉のみで年代は確定的ではないが、弥生時代後期以降と推測している。また、掘立柱建物跡のうちSB3004・SB3005は古代と推測している。第2面上面では石包丁他の石器が比較的多数出土している。

第3面はSI3013～SI3014の竪穴住居跡の検出される面である。確認面は3-8層の黒色上上面である。直上に堆積していた黒褐色砂質シルト層を除去した面である。

第4面は、黒色上層を除去した下位面である。時代は弥生時代中期以前である。基盤層相当層とした黄褐色砂層・砂礫層(3-10層)には遺物は全く含まれない。

第2面・第3面で検出された15棟の竪穴住居跡はいずれも弥生時代中期後葉前後に比定される。八頭町内最大の弥生時代中期の集落跡である。この集落は調査区の南西方向にある旧船岡町の丸山遺跡と時代的に重なりあい、土器も類似の型式のものが多く、八東川南岸から広範囲に広がる集落の一面を占めていたようである。八東川対岸の万代寺遺跡にも弥生時代中期の竪穴住居跡があり、当該地と同時性が高いといえる。また、奈免羅・西の前遺跡は八東川に直近の川岸という立地にあるため、川との密接な関係がうかがえる。出土した土器群は、港湾都市・青谷上寺地遺跡や鳥取市の岩古遺跡との類似性が強い。いずれも千代川水系に所在する弥生遺跡である。

3区第2面SI3012竪穴住居跡内から山陰初となる銅銅片が出土したこと、また、第2面弥生後期以降の木棺墓SX3003から水晶製小玉42点が検出されたことなどから、山陰地方全体の中でも重要な位置を占めていた可能性がでてきた。

### 第3項 3区第1面遺構と遺物(図42、写真図版26、表10)

洪水砂堆積層の暗褐色砂層を除去し、黄灰色砂層・黒褐色砂質シルト層の上面で検出された遺構群である。耕作溝群が中心であり、当該地が開墾されてから以降の相対的に新しい遺構群を包括する。杭列等については3区遺構一覧表(表10)と付図1・2を参照のこと。

#### ■耕3001・耕3002・耕3003・耕3004(図44、写真図版28)

耕作溝群の集中箇所を大きく3つに分けて調査し、東から耕3003・耕3002・耕3001・耕3004とした。耕作溝の底に鍍痕を残す箇所がある。耕3001は暗褐色砂・暗灰黄色砂を主体とし、出土遺物は弥生土器片を少量伴う。耕3002は黒褐色砂質シルトを主体とし、下層からは古代の須恵器薬片

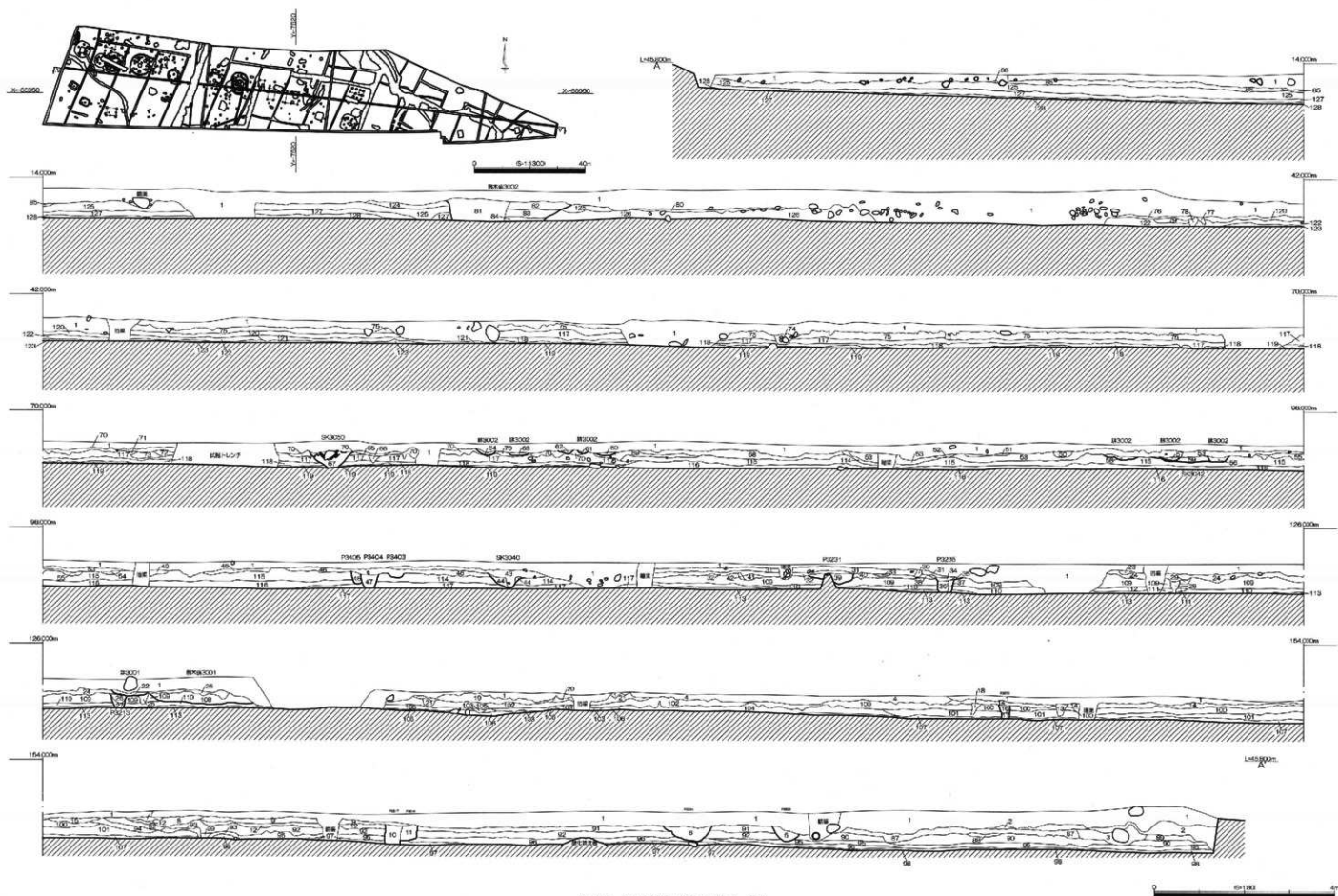


図39-1 3区 基本層序 Tr.1セクション図



が数点出土した。耕 3003 は黒褐色砂質シルトを主体とし、埋土から中世の備前焼播鉢片が出土した。各耕作地の時期は、出土遺物の年代以降である。

■ SK3001・SK3002(図40)

**位置・検出状況** SK3001は第1面O12グリッドに位置し、標高は44.744mである。SK3002はN13グリッドに位置し、標高は44.730mである。確認面は昭和の圃場整備の整地層を除去した黒色土層(3-8層)上面である。周辺には近代以降の溝跡等攪乱が多い。

**平面形状・規模** SK3001の平面形は円形で、長軸1.794m・短軸1.730mを測る。断面形は浅い円筒形か盤形に近い形状で、確認面からの遺構底面までの深さは0.171mである。SK3002の平面形は不整な円形で、長軸1.465m・短軸1.207mを測り、南東側に一段浅くなって張り出す箇所がある。断面形は浅い盤形に近い形状で、確認面からの遺構底面までの深さは0.231mである。いずれも底面調整は粗雑である。

**遺物・埋土・遺構性格・時期** 両遺構とも埋土は黒褐色シルトを主体とし、直径3~30cm大の多数の円礫を含む。礫は当該地の基盤層のものと大差なく、礫を埋めた穴のような印象を受ける。両遺構とも遺物は出土していない。遺構性格は土坑とするが、SK3002の不整な形状や、粗雑な掘方から、貯蔵穴とか墓坑のような用途は考えにくい。耕作地を新たに開墾する際、樹木の根を抜き去った跡に礫や不要物を埋める例はよくあるため、これらもそれに類するものであろう。遺構掘方の縁が鮮明なため、古いものではなく、古代~中世頃と考える。

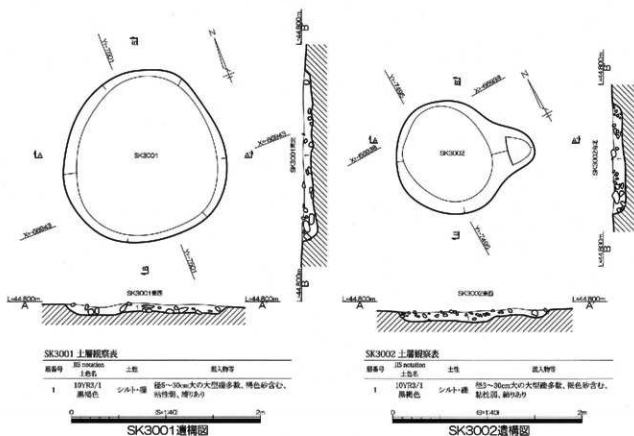
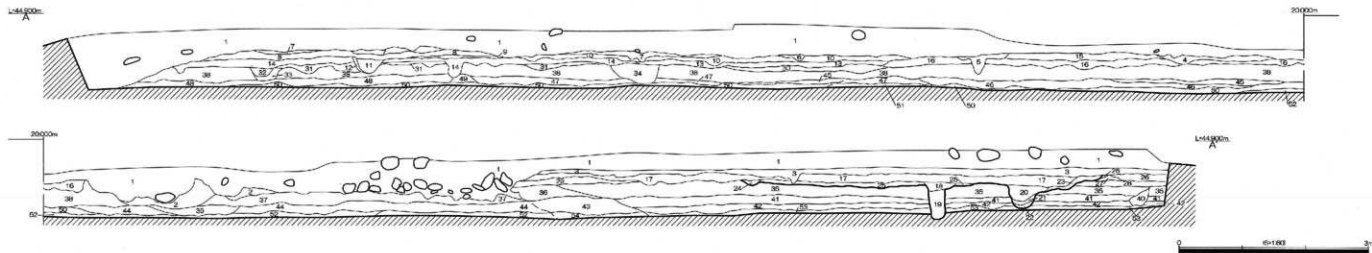


図40 SK3001・SK3002遺構図



Tr.5 土質調査表

層番号	深さ(m)	土質	性状	制込深度	基本層番号
1	0.00~0.10	シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強、硬20cm以下の硬多層。粘り強あり、粘り中程度		3-1層
2	0.10~0.21	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-2層
3	0.21~0.31	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-3層
4	0.31~0.41	シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-4層
5	0.41~0.51	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-5層
6	0.51~0.61	砂	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-6層
7	0.61~0.71	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-7層
8	0.71~0.81	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-8層
9	0.81~0.91	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-9層
10	0.91~1.01	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-10層
11	1.01~1.11	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-11層
12	1.11~1.21	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-12層
13	1.21~1.31	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-13層
14	1.31~1.41	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-14層
15	1.41~1.51	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-15層
16	1.51~1.61	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-16層
17	1.61~1.71	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-17層
18	1.71~1.81	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-18層
19	1.81~1.91	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-19層
20	1.91~2.01	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-20層
21	2.01~2.11	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-21層
22	2.11~2.21	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-22層
23	2.21~2.31	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-23層
24	2.31~2.41	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-24層
25	2.41~2.51	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-25層
26	2.51~2.61	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-26層
27	2.61~2.71	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-27層
28	2.71~2.81	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-28層
29	2.81~2.91	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-29層
30	2.91~3.01	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-30層
31	3.01~3.11	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-31層
32	3.11~3.21	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-32層
33	3.21~3.31	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-33層
34	3.31~3.41	砂質シルト	黄灰土色の細粒集約の成層。粘り強あり、粘り中程度		3-34層

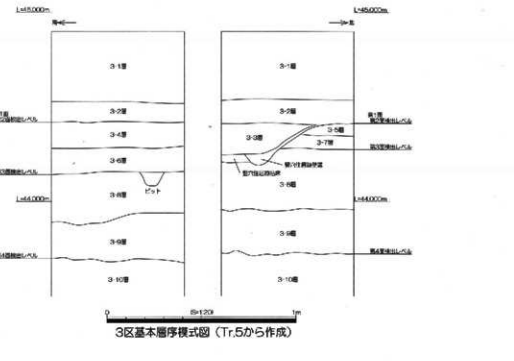
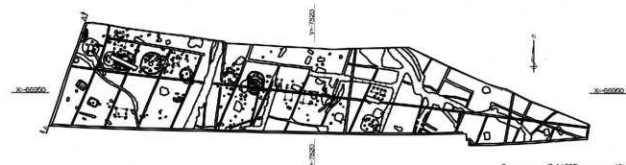
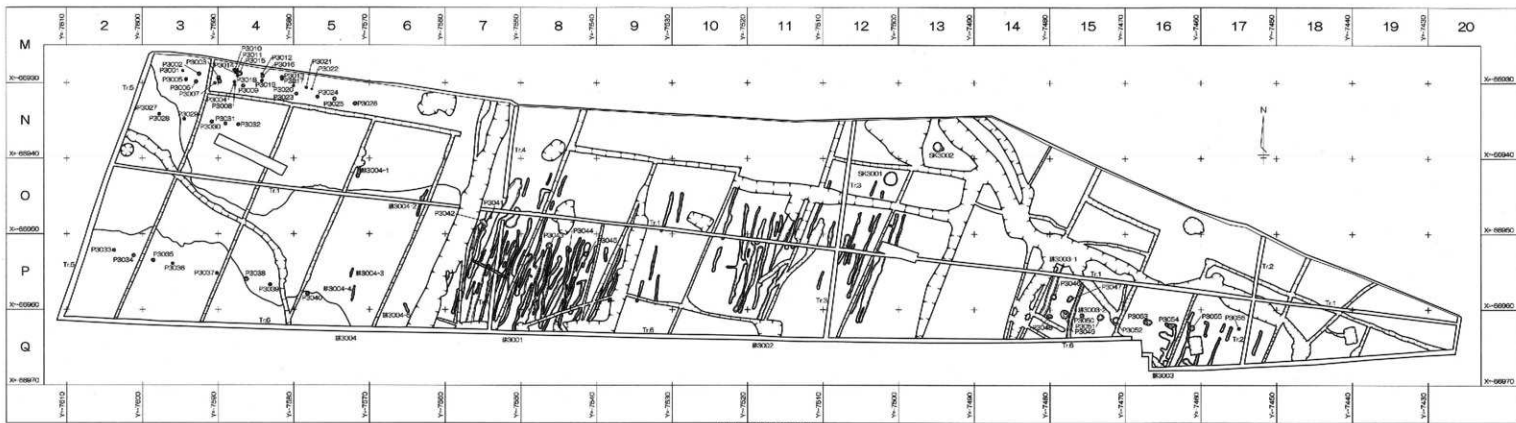
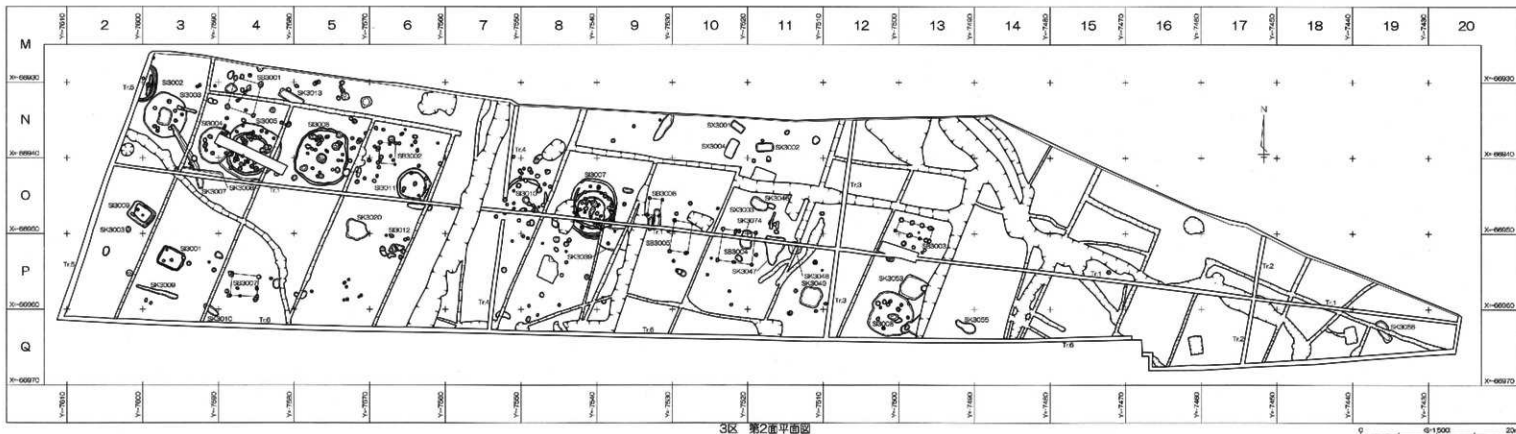


図41 3区基本層Tr.5セクション図・基本層模式図



3区 第1面平面图



3区 第2面平面图

图42 3区 第1面-第2面平面图



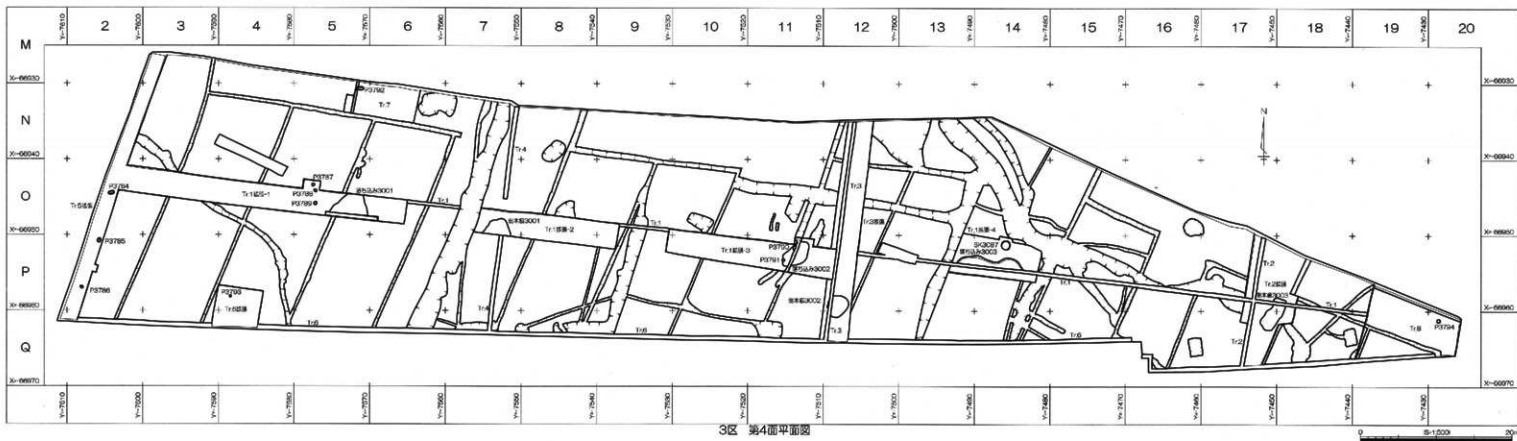
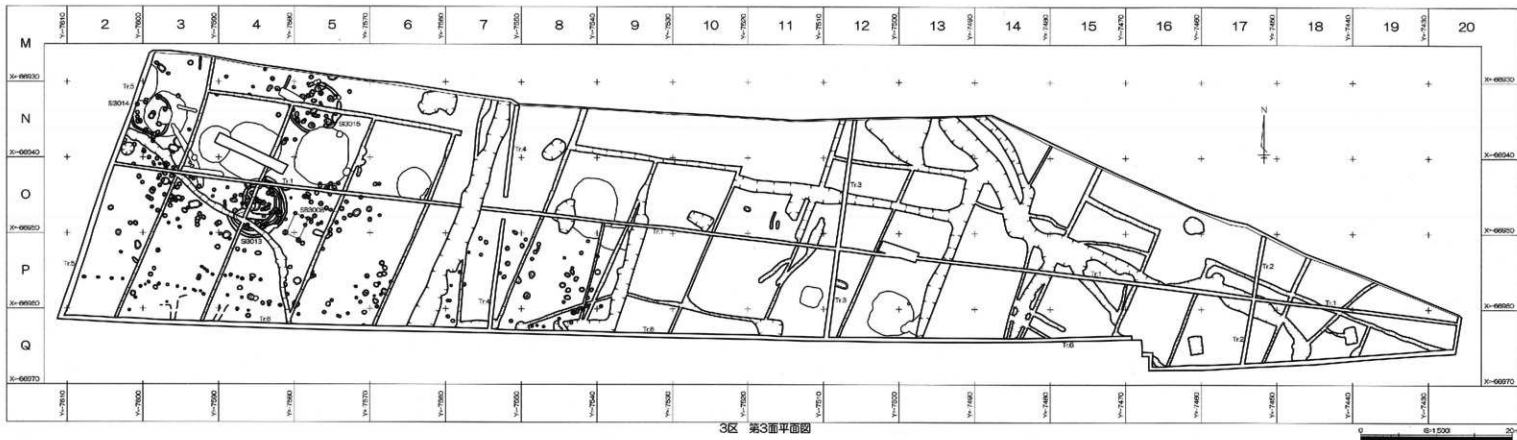
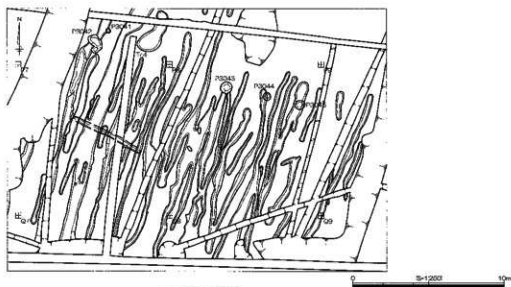
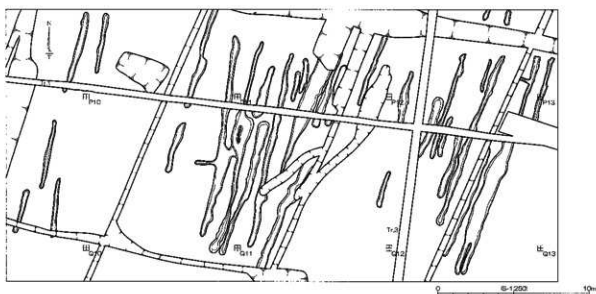


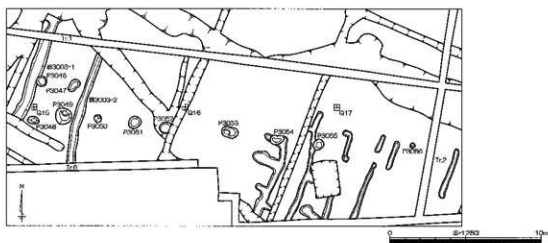
图43 3区 第3面·第4面平面图



耕3001平面图



耕3002平面图



耕3003平面图

图44 3区 第1面耕作溝群平面图

#### 第4項 3区第2面遺構と遺物(図42、巻頭図版1・2、写真図版28・29)

3区第2面は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・木棺墓が検出された面を基準にした。調査区北側は黒色土(3-8層)と黒褐色砂質シルト(3-7層)であり、調査区南側では黄褐色砂層(3-4層)・明黄褐色砂層(3-5層)が検出された面である。

検出された遺構は、掘立柱建物跡7・竪穴住居跡13・木棺墓4・土坑54(竪穴住居内上坑12を含む)・ピット384(掘立柱建物跡の柱穴33を含む)である。主な遺物は、弥生時代中期の土器と石器で、土器は甕・壺・高坏・器台・水杓形土器・蓋等、石器は石包丁・石槍・石鎌・砥石・石斧・石錐等で、弥生時代中期後葉の竪穴住居跡から銅銅片1、弥生時代後期と思われる木棺墓の一つから水晶製小玉42点が出土した。

#### ■SB3001(図45、写真図版36)

位置 第2面北西側のM4・N4グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.376mである。

検出状況 開場整備時の整地層を除去したところで、黒褐色砂質シルト層を検出した。この黒褐色砂質シルト層は黒色土層の直上を覆う層である。この黒褐色砂質シルト層面を遺構確認面として、4基のほぼ同じ埋上のピットが長方形に並んでいるのが確認された。

軸方向・平面形状・規模 桁行1間・梁間1間の掘立柱建物跡である。主軸はN-15°-Eをふる。軸方向がSB3004・SB3005等とほぼ同じである。建物の平面形は長方形である。桁行長4.240m・梁間長3.560mを測る。

SB3001はP3057-P3058-P3059-P3060の4基の柱穴で構成される。各柱穴の規模(長軸×短軸・確認面からの深さ)は、P3057は(0.903m×0.507m-0.207m)、P3058は(0.811m×0.628m-0.236m)、P3059は(0.703m×0.637m-0.113m)、P3060は(0.571m×0.478m-0.154m)である。平面形状は、P3057・P3058・P3060は楕円形、P3059は円形で、断面形はU字形を示す。周辺で検出された弥生時代の竪穴住居跡の柱穴と比べて深さが浅い。底面の調整痕は残っていない。

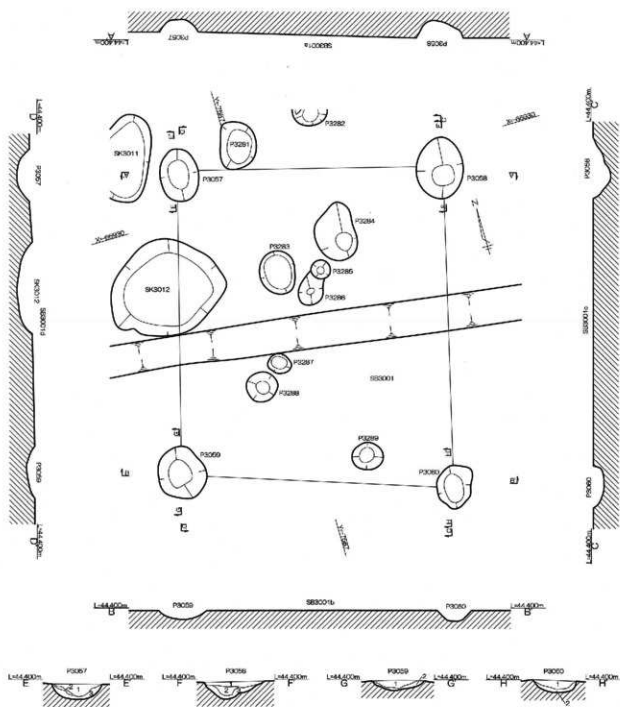
柱穴埋土・礎石の有無 柱痕は残っていない。4基とも、埋土上層はにぶい黄褐色の砂質シルトを主体とし、下層に黒色シルトが堆積する。上層のにぶい黄褐色砂質シルトは、本調査区内で黒褐色土層より上層に堆積する弥生時代の遺物包含層=暗褐色砂層とほぼ同質のものであり、その層上から掘り込まれたものと思われる。4基とも礎石はない。

遺物出土状況 P3057から土器片2点、P3059から土器片1点、P3060から土器片22点(弥生土器底底部1点)及び石製品(岩岩製砥石)1点が出土している。P3057からは遺物は出土していない。遺構の性格と所属時期 掘立柱建物跡である。出土遺物の弥生時代の甕から、弥生時代中期以降の可能性が高い。(井汲・浅井)

#### ■SB3002(図46、写真図版36)

位置 第2面北西側のM4・N4グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.376mである。

検出状況 開場整備の際の整地層を除去したところで、黒褐色砂質シルト層を検出した。この黒褐色砂質シルト層は黒色土層の直上面を覆う再堆積層である。この黒褐色砂質シルト層を遺構確認面として、4基のピットが長方形に並んでいるのが確認された。柱根埋土に淡黄色粘土が検出されたため、周辺の遺構群の中では突出して目立つ。

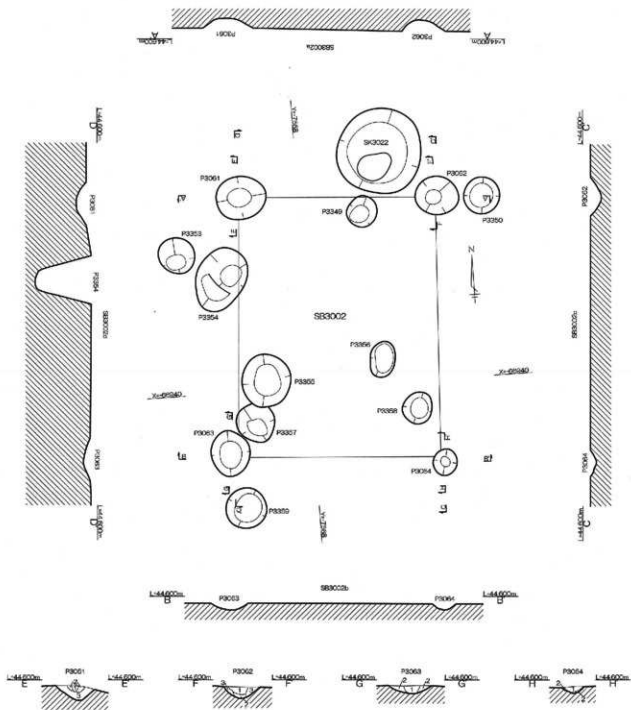


SR3001 土層観察表

観測番号	層番号	層 position 土色名	土性	私人貯蔵
P3001	1	10Y7.5/3 に少し黄褐色	砂質シルト	細粒砂多量、黒色土少量、 粘性弱い、縞りや中硬質
P3007	2	10Y7.5/3 に少し黄褐色	砂質シルト	黒色シルト20%、 粘性あり、縞りあり
P3007	3	10Y7.5/3 黒色	シルト	に少し黄褐色砂質シルト10%、 粘性あり、縞りあり
P3008	1	10Y7.5/3 に少し黄褐色	砂質シルト	細粒砂多量、黒色土少量、 粘性弱い、縞りや中硬質
P3008	2	10Y7.5/3 に少し黄褐色	砂質シルト	黒色シルト20%、 粘性あり、縞りあり
P3008	3	10Y7.5/3 黒色	シルト	に少し黄褐色砂質シルト10%、 粘性あり、縞りあり

観測番号	層番号	層 position 土色名	土性	私人貯蔵
P3009	1	10Y7.5/3 に少し黄褐色	砂質シルト	細粒砂多量、黒色土少量、 粘性弱い、縞りや中硬質
P3009	2	10Y7.5/3 黒色	シルト	に少し黄褐色砂質シルト10%、 粘性あり、縞りあり
P3000	1	10Y7.5/3 に少し黄褐色	砂質シルト	細粒砂多量、黒色土少量、 粘性弱い、縞りや中硬質
P3000	2	10Y7.5/3 黒褐色	シルト	に少し黄褐色砂質シルト10%、 粘性弱い、縞りあり

図45 SB3001遺構図



SB3002 土層観察表

調査番号	層番号	JIS notation 土名	土状	記入内容
P3001	1	2.5V/3 灰黄色	粘土	軽重、暗灰黄色粘土質シルト20%、 粘性強い、細砂や中粒質
P3001	2	2.5V/2 灰黄色	粘土質シルト	軽重、暗灰黄色粘土質シルト10%、 粘性やや強い、細砂や中粒質
P3001	3	10V/K/3 暗褐色	中粒砂・ 細粒砂	に5%高褐色砂質シルト10%、 粘性強い、細砂や中粒質
P3002	1	2.5V/3 灰黄色	粘土	軽重、暗灰黄色粘土質シルト20%、 粘性強い、細砂や中粒質
P3002	2	2.5V/2 灰褐色	シルト	軽重、暗灰黄色粘土質シルト10%、 粘性やや強い、細砂や中粒質
P3002	3	10V/K/3 暗褐色	砂	中粒砂・細粒砂混合、に5%高褐色砂質 シルト10%、粘性強い、細砂あり

調査番号	層番号	JIS notation 土名	土状	記入内容
P3003	1	2.5V/3 オリーブ褐色	砂質シルト	軽重あり、暗褐色、灰色シルト少量、黄灰色 細砂約1%未満、粘性強い、細砂や中粒質
P3003	2	10V/K/1 黒褐色	シルト	オリーブ褐色砂質シルト20%、 粘性あり、細砂あり
P3004	1	2.5V/3 灰黄色	粘土	軽重、暗灰黄色粘土質シルト20%、黒色土 少量、粘性強い、細砂や中粒質
P3004	2	10V/K/2 灰褐色	砂質シルト	に5%高褐色砂質シルト10%、 粘性強い、細砂あり

図46 SB3002遺構図

**軸方向・平面形状・規模** 桁行1間・梁間1間の掘立柱建物跡である。主軸はN-4°-Eをふる。軸方向がSB3004・SB3005等より真北に近く、約10度ずれる。建物の平面形は長方形である。桁行長2.760m・梁間長2.060mを測る。

SB3002はP3061-P3062-P3063-P3064の4基の柱穴で構成される。各柱穴の規模(長軸×短軸・確認面からの深さ)は、P3061は(0.521m×0.454m-0.143m)、P3062は(0.461m×0.408m-0.164m)、P3063は(0.491m×0.412m-0.079m)、P3064は(0.285m×0.252m-0.076m)である。形状は、4基とも平面形は円形で、断面形はU字形を示す。周辺で検出された弥生時代の竪穴住居跡の柱穴と比べて深さが浅い。

**柱穴埋土・礎石の有無** P3061・P3062・P3064はプラン面上で直径の小さい柱痕が確認され、柱痕埋土は淡黄色粘土であった。掘方の埋土は、黒褐色砂質シルト層とほぼ同じ、黒褐色砂質シルトを主体とする。礎石は確認できない。

**遺物出土状況** P3061から3点、P3062から1点、計4点の土器細片が出土している。おそらく弥生土器片と思われる。

**遺構の性格と帰属時期** 掘立柱建物跡である。SB3004・SB3005等の掘立柱建物跡と軸方向が異なるため、弥生時代中期の所属ではなく、それ以降のものと思われる。(片波・浅井)

#### ■ SB3003(図47、遺物図18、遺物観察表18、写真図版36・65)

**位置** 第2面中央部のO12・13、P12・13グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.880mである。

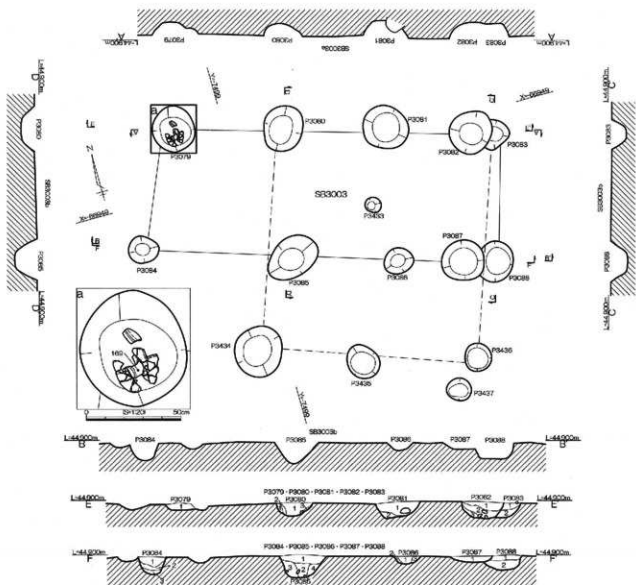
**検出状況** 圃場整備の際の整地層を除去した段階で黒褐色シルト層面が検出された。周囲に掘乱以外の遺構がほとんどなかったため、この面上で長方形に並んだ柱列が確認された。上面層は削平を受けており、柱穴は浅く残っているのみである。

**軸方向・平面形状・規模** 桁行3間・梁間1間の掘立柱建物跡である。主軸はE-16°-Sをふる。建物の平面形は長方形である。桁行長4.600m・梁間長1.700mを測る。

SB3003はP3079-P3080-P3081-P3082-P3083-P3084-P3085-P3086-P3087-P3088の10基の柱穴で構成される。P3082はP3083を、P3087はP3088を切って構築されている。各柱穴の規模(長軸×短軸・確認面からの深さ)は、P3079は(0.618m×0.391m-0.156m)、P3080は(0.590m×0.536m-0.156m)、P3081は(0.598m×0.585m-0.233m)、P3082は(0.575m×0.548m-0.221m)、P3083は(0.394m×0.349m-0.200m)、P3084は(0.403m×0.361m-0.246m)、P3085は(0.719m×0.508m-0.312m)、P3086は(0.394m×0.342m-0.113m)、P3087は(0.558m×0.534m-0.099m)、P3088は(0.490m×0.532m-0.056m)である。形状は10基とも平面形は円形、断面形はU字形。底面の調整痕は残っていない。

掘立柱建物跡の柱穴としては、南側に位置するP3434・P3435・P3436と対応させた方が平面図的にはバランスよく感じる。ただし、土質が黒褐色粘土質シルト系の暗味の強い土で、規模は、P3434が(0.671m×0.628m-0.093m)、P3435が(0.464m×0.414m-0.150m)、P3436が(0.373m×0.352m-0.132m)と、深さも若干浅い。このため、P3085～P3088を柱穴とした。

**柱穴埋土・礎石の有無** P3080・P3085・P3086は柱痕が確認され、P3080の柱痕埋土は黒褐色シルトを主体とし、P3085の柱痕埋土は黒褐色砂質シルトを主体とし、P3086の柱痕埋土は黒褐色



SB3003 土層構造表

遺構番号	層番号	土名	土質	記入内容
P3079	1	10YR2/2 黒色	シルト	茶生土層内、鉄屑あり、礫少量。黄灰色細砂粒2~4%、粘性やや強い、締りあり
P3080	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	礫少量、黄灰色・黒色粘土質シルト少量、粘性あり、締りあり
P3080	2	2.5Y2/2 黒褐色	シルト	泥状、黄灰色細砂粒1%未満、粘性やや強い、締りあり
P3080	3	10YR3/1 黒褐色	シルト	黒色シルト少量、黄灰色細砂粒1%未満、粘性やや強い、締りあり
P3081	1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	鉄屑あり、礫あり、灰色シルト少量、黄灰色細砂粒1%未満、粘性強い、締りあり
P3081	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	泥状、黄灰色細砂粒1%未満、粘性やや強い、締りあり
P3082	1	10YR2/1 黒色	砂質シルト	礫少量、黄褐色粘土質シルト少量、粘性あり、締りあり
P3082	2	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	礫少量、黄灰色粘質シルト少量、黄灰色細砂粒1%未満、粘性強い、締りあり
P3082	3	2.5Y2/1 黒褐色	シルト	礫少量、黄灰色細砂粒1~2%程度、粘性あり、締りあり
P3083	1	10YR2/1 黒色	砂質シルト	礫少量、黄褐色シルト少量、黄灰色細砂粒1%未満、粘性やや強い、締りあり
P3083	2	10YR2/1 黒色	粘土質シルト シルト	黄褐色、黄褐色シルト少量、黄灰色細砂粒1%未満、粘性やや強い、締りあり
P3084	1	10YR2/1 黒色	シルト	礫少量、黄灰色細砂粒2~3%、粘性やや強い、締りあり
P3084	2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色、黄褐色シルト少量、黄灰色細砂粒1%未満、粘性あり、締りあり
P3084	3	10YR1/1 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色、黄褐色シルト少量、黄灰色細砂粒1%未満、粘性強い、締りあり

遺構番号	層番号	土名	土質	記入内容
P3088	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	黄灰色細砂粒1%未満、粘性強い、締りあり
P3088	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	礫少量、黄褐色粘土質シルト少量、粘性あり、締りあり
P3088	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	礫少量、黄褐色粘土質シルト少量、粘性あり、締りあり
P3088	4	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	礫少量、黄褐色細砂粒1%未満、粘性強い、締りあり
P3086	1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色細砂粒1~2%、黄褐色シルト少量、粘性強い、締りあり
P3086	2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	礫少量、黄褐色粘土質シルト少量、粘性あり、締りあり
P3086	3	10YR2/1 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルト少量、粘性強い、締りあり
P3087	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	鉄屑あり、礫あり、黄褐色粘土質シルト少量、黄褐色細砂粒1~2%、粘性あり
P3088	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	鉄屑あり、礫あり、黄褐色粘土質シルト少量、黄褐色細砂粒1~2%、粘性あり
P3088	2	2.5Y2/1 黒褐色	シルト	黄褐色粘土質シルト少量、粘性強い、締りやや軟質

図47 SB3003遺構図・微細図



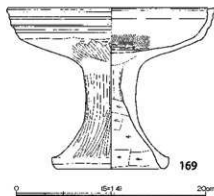
遺物観察表 18

遺物 番号	調査区	遺物番号 (調査番号)	遺物種 番号	所属 番号	種別 器種	重量 (mg)	特徴	新土/材質	焼成 色調	備考
169	3	SB3003内 P3079 (3031)	18	GS	弥生十線 高杯	(口径)21.6 身高さ117.0 脚径11.3	外縁:口縁部ナデ・凹線文3条、杯底部ケズリ ハケ境ミガキ、脚部ミガキ、脚部ナデ 内面:凹線部ナデ、杯底部ハケ境ミガキ、脚部 ズリ境ナデ	青磁 ~1mmの砂粒 白磁	白磁 外周:白 内縁:白~黄	

粘土質シルトを主体とする。他のピットの埋土は黒褐色砂質シルトを主体とする。礎石はない。

遺物出土状況 P3079から25点、P3080から5点、P3081から5点、P3082から2点、P3084から2点、P3085から1点、P3086から1点、P3087から1点、P3088から5点、計47点の土器片が出土した。このうちP3079から出土した土器が1個体となり、弥生土器の高杯(169)となった。盤形の広い容器の口縁外面に3条の凹線文をめぐらしている。弥生時代中期後葉に比定される。

遺構の性格と帰属時期 掘立柱建物跡である。出土遺物等から、弥生時代中期と推測する。(浅井)



遺物図18 SB3003内P3079出土遺物

#### ■ SB3004(図48、写真図版36)

位置 第2面中央部のO10・11、P10・11グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.863mである。

検出状況 圃場整備時の整地層を除去したところで、黒褐色砂質シルト層を検出すると共に、その黒褐色砂質シルト層を切る耕作溝群、耕3002が検出された。この耕3002を除去したところで、ピットが直線状に2列並んでいるのが確認され、掘立柱建物跡として調査した。SB3005と並んでいる。

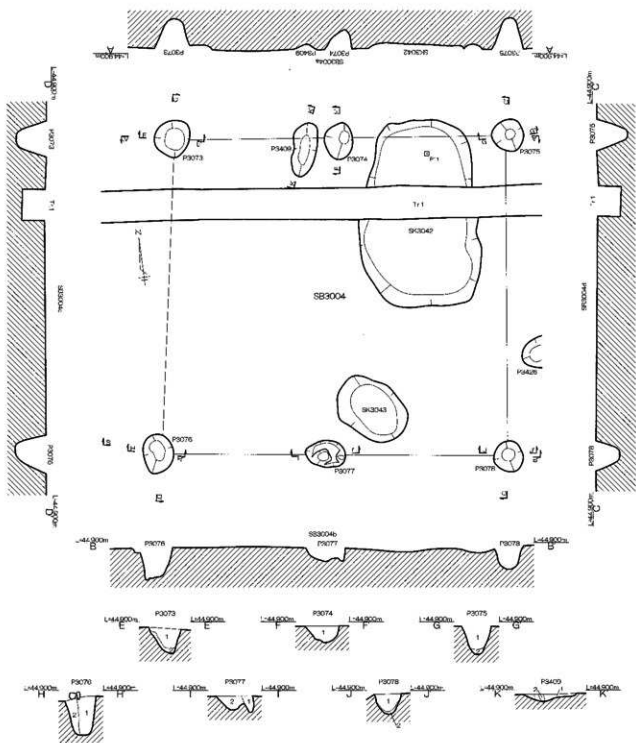
軸方向・平面形状・規模 桁行2間・梁間1間の掘立柱建物跡である。主軸はE-9°-Sをふる。軸方向がSB3005・SB3006等と同じである。建物の平面形は長方形である。桁行長4.560m・梁間長4.160mを測る。SB3004はP3073-P3074-P3075-P3076-P3077-P3078の6基の柱穴で構成される。各柱穴の規模は、P3073は(0.488m×0.476m-0.413m)、P3074は(0.489m×0.374m-0.258m)、P3075は(0.427m×0.414m-0.399m)、P3076は(0.507m×0.396m-0.376m)、P3077は(0.533m×0.361m-0.209m)、P3078は(0.408m×0.388m-0.299m)である。形状は、平面形はP3073・P3074・P3075・P3078は円形、P3076・P3077は楕円形を呈する。断面形はP3073・P3076・P3078はU字形、P3074・P3075はV字形、P3077はW字形を示す。P3077は2本の柱を並べたものかもしれない。壁面・底面の調整痕は残っていない。

柱穴埋土・礎石の有無 埋土上層の褐灰色砂質シルト及び、にぶい黄褐色砂質シルトは、本調査区内で黒褐色土層より上層に堆積する暗褐色砂層とほぼ同質であり、その層上から掘り込まれたものと思われる。P3076には柱痕が確認され、埋土は褐灰色砂質シルトを主体とする。6基とも礎石はない。

遺物出土状況 土器片27点が出土した。P3073から4点、P3074から6点、P3076から5点、P3077から8点、P3078から4点である。弥生土器の細片と思われる。

遺構の性格と帰属時期 掘立柱建物跡である。出土遺物は弥生土器であるが、SB3005と同じ軸方向で並ぶことから、古代と思われる。(井汲・浅井)





SB3004 土壁観状表

設備番号	設備名	用 意 状 況	土 質	注 意 事 項
P3073	1	10Y94/2 緑灰色	砂質シルト	白色シルト20%、 粘性あり、締りあり
P3073	2	10Y92/2 褐色	シルト	褐色色砂質シルト20%程度、 粘性あり、締りあり
P3074	1	10Y95/3 にがい黄褐色	砂質シルト	褐色シルト25%、 粘性あり、締りあり
P3075	1	10Y93/1 褐色	砂質シルト	褐色シルト10%含む、 粘性あり、締りあり
P3075	2	10Y94/2 灰黄褐色	シルト	にがい黄褐色砂質シルト25%、 粘性あり、締りあり
P3076	1	10Y94/1 褐色	砂質シルト	白色に砂質、上に盛り、褐色シルト 10%、粘性あり、締りあり
P3076	2	10Y92/1 褐色	シルト	上に盛り、にがい黄褐色砂質シルト 20%含む、粘性あり、締りあり

設備番号	設備名	用 意 状 況	土 質	注 意 事 項
P3077	1	10Y94/1 褐色	砂質シルト	白色に盛り20%、にがい黄褐色砂質 シルト10%、粘性あり、締りやや軟弱
P3077	2	10Y94/2 灰黄褐色	シルト	にがい黄褐色砂質シルト10%、 粘性あり、締りあり
P3078	1	10Y95/3 にがい黄褐色	砂質シルト	砂質砂多量、黒色土少量、 粘性あり、締りあり
P3078	2	10Y92/1 褐色	シルト	にがい黄褐色砂質シルト10%、 粘性あり、締りあり

図48 SB3004遺構図

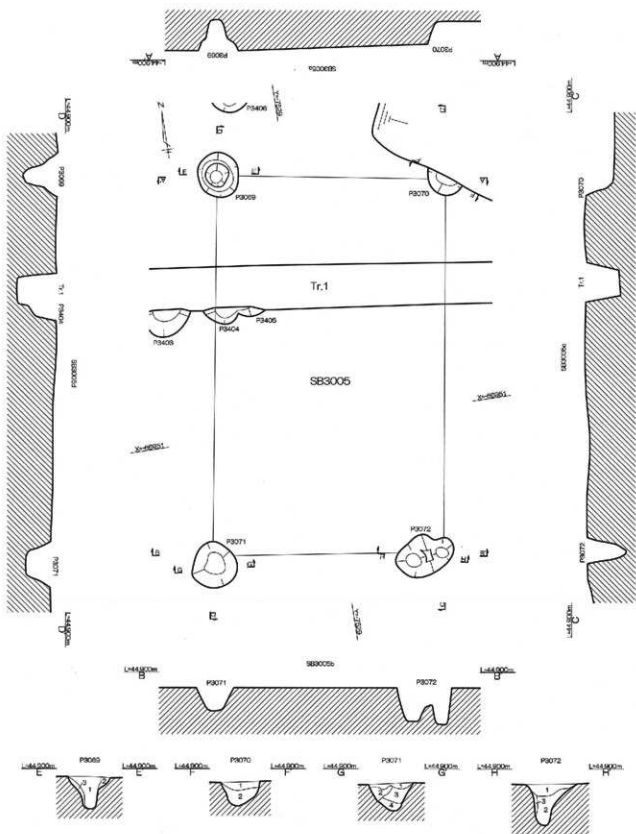


図49-1 SB3005遺構図

SB3005 土層観察表

遺構番号	階層	土層	説明
P3069	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト
P3070	1	10YR2/1 黒色	粘土質シルト
	2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト

遺構番号	階層	土層	説明
P3071	1	10YR2/3 暗褐色	砂
	2	10YR4/3 オリーブ褐色	砂質シルト
P3072	1	10YR2/1 黒褐色	シルト
	2	10YR2/1 黒色	粘土質シルト
P3073	1	10YR4/3 にじみ黄褐色	砂質シルト
	2	2.5Y3/2 黒褐色	シルト
P3074	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト

図49-2 SB3005遺構図

## ■ SB3005(図 49-1・49-2、写真図版 36)

**位置** 第2面中央部のO9・10、P9・10グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.817mである。

**検出状況** 圃場整備時の整地層を除去したところで、黒褐色砂質シルト層を検出すると共に、その黒褐色砂質シルト層を切る耕作溝群、耕3002が検出された。この耕3002を除去したところで、ピットが直線状に2列並んでいるのが確認され、掘立柱建物跡として調査した。SB3004と並んでおり、一連の建物である可能性もある。

**軸方向・平面形状・規模** 桁行1間・梁間1間の掘立柱建物跡である。主軸はN-10°Eをふる。軸方向がSB3004・SB3006と同じ方向を向く。建物の平面形は長方形である。桁行長3.940m・梁間長2.440mを測る。

SB3005はP3069・P3070・P3071・P3072の4基の柱穴で構成される。各柱穴の規模(長軸×短軸・確認面からの深さ)は、P3069は(0.478m×0.427m-0.368m)、P3070は(0.407m×0.187m-0.013m)、P3071は(0.494m×0.488m-0.257m)、P3072は(0.628m×0.430m-0.390m)である。形状は、平面形はP3069・P3071・P3072は円形。断面形はP3069は有段U字形。P3071は浅いU字形。P3072はU字形を示す。P3070は攪乱により半壊されており、形状・断面形共に不明である。底面の調整痕は残っていない。

**柱穴埋土・礎石の有無** P3069・P3072は柱痕が確認され、P3069の柱痕埋土は灰黄褐色砂質シルトを主体とし、P3072の柱痕埋土は黒褐色シルトを主体とする。掘方の埋土は黒色粘土質シルトを主体とする。礎石はない。

**遺物出土状況** P3073から須恵器坏底部片(陶器Ⅲ期後葉併行)1点及び土器片7点、P3072から土器片2点が出土している。

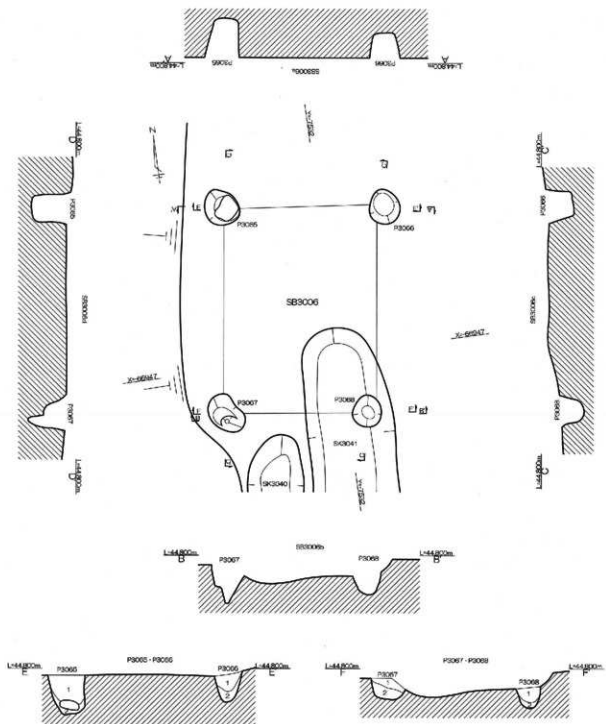
**遺構の性格と所属時期** 掘立柱建物跡である。出土遺物と軸方向から、古代と思われる。(浅井)

## ■ SB3006(図 50、写真図版 36)

**位置** 第2面中央部のO9グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.858mである。

**検出状況** 圃場整備時の整地層を除去したところで、黒褐色砂質シルト層を検出すると共に、その黒褐色砂質シルト層を切る耕作溝群、耕3002が検出された。この耕3002とその一部であるSK3040・SK3041の掘削後、4基の柱穴が検出された。

**軸方向・平面形状・規模** 桁行1間・梁間1間の掘立柱建物跡である。主軸はN-9°Eをふる。軸方向がSB3004・SB3005と同じ方向を向く。建物の平面形は長方形である。桁行長2.160m・梁間長1.600mを測る。



SB3006 土層縦断表

縦断番号	深さ	JIS notation 土名	土質	記入内容
P3005	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト30%、 粘性やや強い、締りあり
P3005	2	10YR3/1 黄褐色	シルト	礫石(最大径30mm)あり、灰色シルト少量、に ぶい黄褐色砂質シルト、粘性やや強い、締りあり
P3006	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト30%、 粘性やや強い、締りあり
P3006	2	10YR3/1 黄褐色	シルト	灰色シルト少量、にぶい黄褐色砂質シルト、 粘性あり、締りあり

縦断番号	深さ	JIS notation 土名	土質	記入内容
P3007	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	砂粘やや多く含む、 粘性やや強い、締りあり
P3007	2	10YR3/1 黄褐色	シルト	灰色シルト少量、にぶい黄褐色砂質シルト、 粘性あり、締りあり
P3008	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト30%、 粘性やや強い、締りあり
P3008	2	10YR3/1 黄褐色	シルト	灰色シルト少量、にぶい黄褐色砂質シルト、 粘性やや強い、締りあり

図50 SB3006遺構図

0 75-140 2m

SB3006 は P3065-P3076-P3067-P3068 の 4 基の柱穴で構成される。各柱穴の規模(長軸×短軸・確認面からの深さ)は、P3065 は(0.382m×0.361m-0.420m)、P3066 は(0.366m×0.328m-0.348m)、P3067 は(0.445m×0.322m-0.571m)、P3068 は(0.337m×0.305m-0.464m)である。形状は、4 基とも平面形は円形。断面形は U 字形を示す。底面の調整痕は残っていない。

柱穴埋土・礎石の有無 柱痕は残っていない。上層は P3065・P3066・P3068 は暗褐色砂質シルトを主体とし、P3065 はにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする。下層は 4 基とも黒褐色シルトを主体とする。P3067 に礎石(直径 20cm)を有する。

遺物出土状況 P3065 から土器片 7 点、P3068 から土器片 1 点が出土している。P3065 から出土した弥生土器片のうち 1 点は壺の口縁外面に斜格子沈線文が施される。

遺構の性格と所属時期 掘立柱建物跡である。SB3004 と軸方向から、古代の可能性が高い。(浅井)

#### ■ SB3007(図 51、写真図版 36)

位置 第 2 面南西部の P4 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.377m である。

検出状況 近世・近代の耕作土と暗褐色砂層を除去した段階で明黄褐色砂層を検出した。この明黄褐色砂層は弥生時代以降の遺構の確認面である。周囲に稲架穴と思われるピット列があったため最初は掘立柱建物跡とは認識しなかったが、これらの 4 基のピットのみがかなり深さがあり建物跡の可能性を提示することにした。

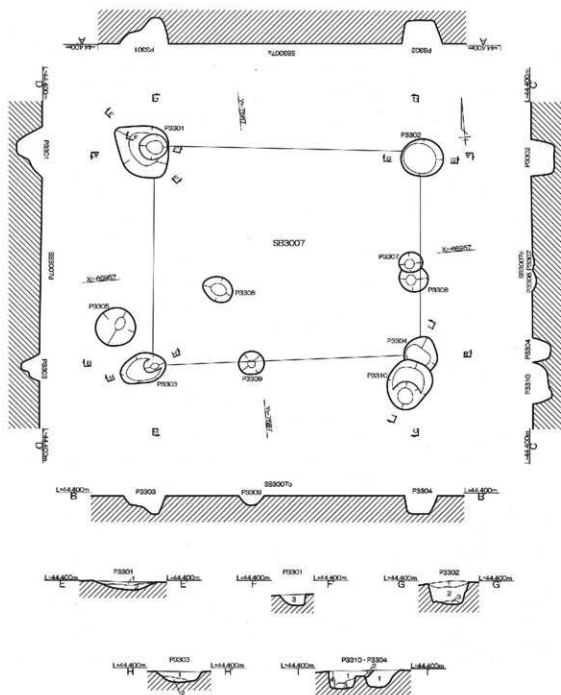
軸方向・平面形状・規模 桁行 1 間・梁間 1 間の掘立柱建物跡である。主軸は E-5°-S をふる。建物の平面形は長方形である。桁行長 3.640m・梁間長 2.620m を測る。

SB3007 は P3301-P3302-P3303-P3304 の 4 基の柱穴で構成される。各柱穴の規模(長軸×短軸・確認面からの深さ)は、P3301 は(0.858m×0.691m-0.318m)、P3302 は(0.558m×0.494m-0.350m)、P3303 は(0.618m×0.404m-0.223m)、P3304 は(0.463m×0.429m-0.253m)である。平面形状は、P3301 は不整楕円形。P3302・P3303 は楕円形。P3304 は円形。断面形は P3301・P3303 は有段 U 字形。P3302・P3304 は U 字形を示す。底面の調整痕は残っていない。

柱穴埋土・礎石の有無 柱痕は残っていない。上層は P3301・P3302・P3304 は暗褐色砂質シルトを主体とし、P3303 はにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする。下層は 4 基とも黒褐色シルトを主体とする。礎石はない。

遺物出土状況 P3301 から土器片 15 点、P3302 から土器片 2 点、P3303 から土器片 3 点、P3304 から土器片 10 点が出土している。すべて細片で、ほとんどが弥生土器の裏片である。

遺構の性格と所属時期 掘立柱建物跡である。出土遺物と埋土と軸方向から、弥生時代中期に所属すると推測される。(井汲・浅井)



SB3007 土層調査表

調査番号	層番号	調査位置 土色名	土質	記入内容
P3301	1	10YR2/3 暗褐色	砂質シルト	にがい、灰褐色砂質シルト20%。 粘性やや強い、締りあり
	2	10YR2/1 深褐色	シルト	黒色シルト少量、にがい、灰褐色砂9%。 粘性強い、締りあり
	3	10YR2/1 深褐色	シルト	黒色シルト少量、黒褐色砂10%。 粘性やや強い、締りあり
P3302	1	10YR4/1 灰褐色	砂質シルト	灰黄褐色シルト45%。 粘性やや強い、締りあり
	2	10YR4/1 灰褐色	砂質シルト	黒色シルトブロック5%、灰黄褐色シルト少量。 灰褐色土1%、粘りやや強い、締りあり
P3302	3	10YR2/1 黒色	粘土質	暗灰色砂質シルト5%。 粘性強い、締りやや硬質

調査番号	層番号	調査位置 土色名	土質	記入内容
P3303	1	10YR4/2 黄褐色	砂質シルト	暗灰色砂質シルト20%、黄褐色砂少量。 黒色シルト微量、粘性あり、締りあり
	2	10YR2/1 深褐色	砂質シルト	黒色シルト25%、暗灰色砂質シルト20%。 粘性やや強い、締りあり
P3304	1	10YR4/1 黄褐色	砂質シルト	土砂が混ざり、黒色シルト・灰色シルトごく微量。 粘性あり、締りあり
	2	10YR4/1 黄褐色	砂質シルト	灰色シルトブロック10%。 粘性あり、締りあり
P3310	1	10YR4/1 黄褐色	砂質シルト	黒色シルトブロック20%。 粘性あり、締りあり
	3	10YR1/1 黒灰色	砂質シルト	暗味強い、黒色シルト少量。 粘性あり、黒色シルト少量
P3310	4	10YR1/1 黒灰色	砂質シルト	暗味強い、黒色シルト少量。 粘性やや強い、締りあり

図51 SB3007遺構図

0 2m EP150

■ 3区第2面竪穴住居跡(表9)

第2面では弥生時代中期の竪穴住居跡12棟が検出された。平面形は円形のものと同丸長方形のものがあり、円形9棟、隅丸長方形2棟である。隅丸長方形の住居跡2棟は3区南西側の灰黄色砂層面上に構築されている。SI3011、SI3012はやや小型の円形住居であり、4基ある柱穴の1基が礎石柱穴で、この礎石柱穴の脇にもう1基礎石を有するピットを備えている。SI3003もそれに類似するが、4基ある柱穴すべてが礎石柱穴で、そのうち1基の礎石が2段になっており、その2段重ねの礎石の脇にもう1基2段重ねの礎石がある。SI3005、SI3007の2棟は拡張住居である。SI3012内のSK3027から全国で80点目となる銅鏡片1点が出土している。

表9 3区 竪穴住居跡一覧表(第2面・第3面含む)

遺構記号	検出位置	形状	規模(m)	埋土	中央土坑・壁溝・貼床	柱穴・ピット・土坑	主要出土遺物	備考	時期
SI3001	第2面所属 Level 44.364 Grid P3	平面形 隅丸長方形 断面形 浅い盤形	長軸 3.442 短軸 2.895 深さ 0.024	暗褐色砂(洪水砂)	中央土坑17 壁溝 貼床あり	ピット4基	弥生土陶片 石皿		弥生 中期
SI3002	第2面所属 Level 44.286 Grid M2-3、N 2-3	平面形 円形 断面形 浅い盤形	長軸 5.096 短軸 1.767 深さ 0.220	暗褐色砂	中央土坑一 壁溝あり 貼床あり	柱穴1基 ピット2基	弥生土陶片	SI3003を切る	弥生 中期 後葉
SI3003	第2面所属 Level 44.365 Grid N3	平面形 円形 断面形 浅い盤形	長軸 6.007 短軸 5.689 深さ 0.216	暗褐色砂 炭化物微塵	中央土坑1 壁溝あり	柱穴5基 ピット5基 土坑1基	弥生土陶片 石鏝	SI3002に切られる SI3014を切る 礎石柱穴5基のうち 2基が礎石2段	弥生 中期 後葉
SI3004	第2面所属 Level 44.367 Grid N3・4、O3	平面形 円形 断面形 浅い盤形	長軸 4.758 短軸 4.261 深さ 0.206	暗褐色砂	中央土坑 壁溝あり	柱穴5基 ピット6基	構成粘土塊	SI3005を切る	弥生 中期 後葉
SI3005	第2面所属 Level 44.474 Grid N4・O4	平面形 隅円形 断面形 浅い盤形	長軸 7.491 短軸 7.147 深さ 0.371	暗褐色砂	中央土坑 壁溝あり	柱穴11基 ピット25基	弥生土陶片 叩き石	SI3004に切られる 拡張あり 試掘Trに切られる	弥生 中期 後葉
SI3006	第2面所属 Level 44.507 Grid N5、O4・5	平面形 隅円形 断面形 浅い盤形	長軸 7.902 短軸 7.437 深さ 0.132	暗褐色砂 耕作痕	中央土坑 壁溝あり 貼床少量	柱穴12基 ピット16基 土坑1基	弥生土陶片 中央土坑から 右瀬と割片	SI3015を切る	弥生 中期 後葉
SI3007	第2面所属 Level 44.831 Grid O8・9、P8・9	平面形 隅円形 断面形 浅い盤形	長軸 7.917 短軸 6.106 深さ 0.074	暗褐色砂 耕作痕	中央土坑 壁溝あり 貼床少量	柱穴16基 ピット18基 土坑2基	弥生土陶片 中央土坑から	拡張あり 下面に輪の広い溝	弥生 中期 後葉
SI3008	第2面所属 Level 44.320 Grid P12・13、 Q12・13	平面形 不整円形 断面形 浅い盤形	長軸 8.205 短軸 6.133 深さ 0.192	暗褐色砂 炭化物微塵	中央土坑 壁溝なし 貼床少量	柱穴5基 ピット7基 土坑2基	土器多数(甕・ 甕・金環等)、 石釘		弥生 中期 後葉
SI3009	第2面所属 Level 44.259 Grid O2・O3	平面形 隅丸長方形 断面形 浅い盤形	長軸 3.321 短軸 2.639 深さ 0.192	暗褐色砂	中央土坑 壁溝あり 貼床あり	柱穴1基 ピット4基	石皿、磨石 弥生土器片		弥生 中期
SI3010	第2面所属 Level 44.816 Grid O7・O8	平面形 円形 断面形 (浅い盤形)	長軸 6.349 短軸 5.846 深さ 0.118	暗褐色砂	中央土坑 壁溝あり	柱穴4基 ピット15基 土坑1基	弥生土器片		弥生 中期
SI3011	第2面所属 Level 44.621 Grid O6	平面形 円形 断面形 浅い盤形	長軸 4.539 短軸 4.179 深さ 0.130	暗褐色砂	中央土坑1 壁溝あり	柱穴5基 ピット1基 土坑1基	弥生土陶片	南西礎石柱穴脇に礎 石ピット	弥生 中期
SI3012	第2面所属 Level 44.547 Grid P 8	平面形 (円形) 断面形 (浅い盤形)	長軸 4.260 短軸 3.850 深さ -	暗褐色砂	中央土坑1 壁溝不明	柱穴6基 ピット1基 土坑4基	SK3026 鏡 SK3027 銅鏡片	北東礎石柱穴脇に礎 石ピット	弥生 中期 後葉
SI3013	第3面所属 Level 44.464 Grid O4・P4	平面形 円形 断面形 浅い盤形	長軸 8.419 短軸 8.283 深さ 0.166	黒褐色砂質 シルト(炭 化鉄・マン ガン多量)	中央土坑 壁溝あり	柱穴15基 ピット21基 土坑5基	中央土坑に 弥生土器片	SI3005に切られる 拡張あり	弥生 中期 後葉
SI3014	第3面所属 Level 44.279 Grid N2・N3	平面形 円形(隅丸 方形) 断面形 (浅い盤形)	長軸 5.259 短軸 4.830 深さ 0.072	黒褐色 砂質シルト	中央土坑 壁溝あり	柱穴7基 ピット5基 土坑2基	被熱を受けた 砥石		弥生 中期 後葉
SI3015	第3面所属 Level 44.444 Grid N4・N5	平面形 円形 断面形 浅い盤形	長軸 7.073 短軸 6.917 深さ 0.054	暗褐色砂・ 黒褐色 砂質シルト	中央土坑 壁溝あり	柱穴14基 ピット11基 土坑3基	P3465から弥 生土器小型器 出土	SI3006に切られる 拡張型?	弥生 中期 後葉

■ SI3001(図 52、遺物図 19、遺物観察表 19、写真図版 29・65)

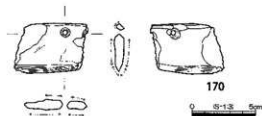
位置 第2面P3グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.364mである。

検出状況 表土剥ぎの際、圃場整備の整地層を除去したところ、明黄褐色砂層を検出した。この明黄褐色砂層は、3区南西側の褐灰色・黒褐色砂質シルト層の上面に3～15cm程度の厚さで堆積しており、洪水性堆積層の可能性が高い。この明黄褐色砂層内から緑色千枚岩製石包丁・石鏝等の石器が出土したため、水田跡の可能性を考慮し、プラン精査を慎重におこなった。その結果、水田跡ではなく竪穴住居跡のプランが検出された。既に床面が露出するまで削平されているが、壁溝が隅丸長方形に囲むのが明瞭に観察できる。

平面形状・規模・付帯施設・主軸方向 平面形は隅丸長方形で、長軸3.442・短軸2.665mを測る。断面形は浅い盤形で、壁溝が明瞭に残っている。確認面から床面掘りまでの深さは0.024mである。平面形と規模はSI3009と類似する。住居内からピット4基と壁溝が検出された。各ピットの規模は、P3061が(0.521m×0.454m-0.143m)、P3062が(0.461m×0.408m-0.164m)、P3063が(0.491m×0.412m-0.079m)、P3064が(0.285m×0.252m-0.076m)である。形状は、4基とも平面形は凹形で、断面形はU字形を示す。柱穴を想定できるピットは確認できない。3区北東側のSI3002～SI3006等の竪穴住居跡と比べて小規模であることから、柱穴をもたないタイプのものかもしれない。ピット4基の埋土は、灰黄褐色砂質シルトもしくはにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする。礎石は確認できない。壁溝SD3005は深さ0.105mのしっかりした掘方を有し、途中で切れ目や分岐はない。壁溝埋土は灰黄褐色砂質シルトを主体とする。主軸方向はE-26°-Sをふる。

遺物出土状況 床面上に石皿1点が検出された。この石皿の位置は埋没時の状態に近いと思われる。壁溝SD3005から土器片5点、点及びピット内から、弥生土器裏細片が6点出土した。実測図は床面直上から出土した170を掲載する。粘板岩製の石包丁で、丁寧な門孔が2箇所に空けられている。

遺構性格と所属時期 竪穴住居跡である。当初は形状から古墳時代の可能性を考慮したが、出土遺物が弥生土器片のみであり、3区北西側のSI3002も明黄褐色砂層を切って構築されており、SI3001とは面的には同時期である。SI3001と形態・規模の似るSI3009も弥生中期の土器片を伴い、本遺構も石包丁を伴うことから、弥生時代中期とする。

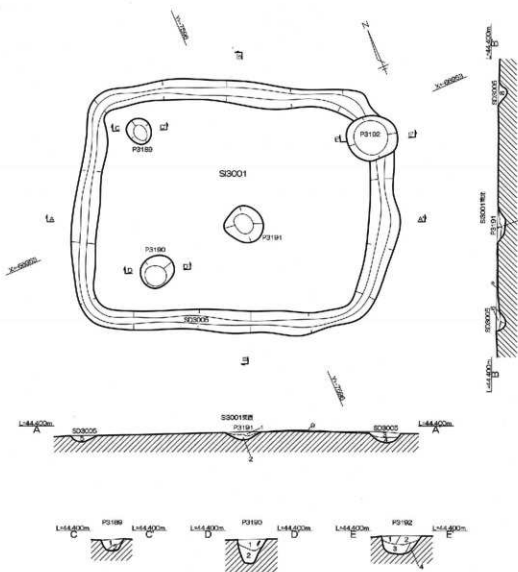


遺物図19 SI3001出土遺物

遺物観察表 19

遺物番号	調査区 (調査層付)	遺構番号	遺物図 番号	図版 番号	種別 器種	法量 (cm/g)	形 態	粘土/材質	装 色 色 調	備 考
170	3	SI3001 (3001)	19	65	石器 石包丁	長さ3.70 幅3.9 厚さ0.75 重さ24.6g	扁型、研磨痕あり 柄部穿孔2箇所16.4mm×径4.5mm、末部穿孔、粘板岩		灰	磨光欠損





SI3001 東西・南北セクション 土層観察表

遺構番号	経緯番号	30mm間 土層	土層	記入内容
P3191	1	19V14/3 にぶい黄褐色	緑砂砂	にぶい黄褐色緑砂砂少量、粘性あり、締りあり
	2	19V13/1 黒褐色	赤土質シルト	にぶい黄褐色緑砂砂少量、粘性あり、締りあり
S3005	3	19V14/3	緑砂砂	灰黄色緑砂砂多量、黒色土少量、粘性あり、締りあり
	4	19V14/2	砂質シルト	にぶい黄褐色緑砂砂少量、黒褐色シルト10%、粘性あり、締りあり
S3005	5	19V13/2	砂質シルト	灰黄色シルト40%、黄白色緑砂砂少量、粘性あり、締りあり
	6	19V14/3	緑砂砂	緑砂砂多量、黒色シルト少量、粘性あり、締りあり
S3005	7	19V14/2	砂質シルト	にぶい黄褐色緑砂砂少量、黒褐色シルト20%、粘性あり、締りあり
	8	19V14/4	砂質シルト	黒色シルト40%、灰黄色緑砂砂少量、粘性あり、締りあり
S3001	9	19V14/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	作瓦跡直前土土、緑砂砂多量、黒色土少量、粘性あり、締りあり

SI3001内ピット 土層観察表

遺構番号	経緯番号	30mm間 土層	土層	記入内容
P3189	1	19V14/2	砂質シルト	黄褐色緑砂砂5%、黒色シルト5%、粘性あり、締りあり
	2	19V14/2	砂質シルト	黄褐色シルト20%、粘性あり、締りあり
P3190	1	19V14/3	緑砂砂	赤土土層片少量、黒色シルト少量、粘性やや弱し、締りあり
	2	19V14/2	砂質シルト	にぶい黄褐色緑砂砂少量、粘性やや弱し、締りあり
P3192	1	19V14/3	砂質シルト	黄褐色緑砂砂少量、にぶい黄褐色砂砂少量、粘性あり、締りあり
	2	19V14/3	砂質シルト	黄褐色緑砂砂5%、粘性あり、締りあり
P3192	3	19V13/2	砂質シルト	緑褐色緑砂砂20%、粘性あり、締りあり
	4	19V13/2	砂質シルト	緑褐色緑砂砂少量、粘性あり、締りあり

図2 SI3001遺構図

■ SI3002( 図 53-1・53-2、写真図版 30)

位置 第2面北西側 M2・3、N2・3 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.286m である。SI3003 を切る。西側は調査区外に延びる。

検出状況 第1面の暗褐色砂層を人力掘削で除去して黒褐色砂質シルト層を検出し、この黒褐色砂質シルト層を切る遺構として SI3002 のプランを検出した。洪水砂の影響でプラン上での遺構範囲が識別できなかったが、3区 Tr.5 西壁で住居跡の貼床と溝の掘方断面が確認でき、ようやく半円形のプランを確定した。Tr.5 北西隅では黒褐色砂質シルトの上面に明黄褐色砂層の堆積が確認され、弥生時代頃の当該地ではこの明黄褐色砂層が表土層の下にあり、この層を切って竪穴住居跡が構築されていたことがわかった。

平面形状・規模 平面形は円形と推測される。検出部分での長軸 5.096m・短軸 1.767m を測る。断面形は浅い盤形で、壁溝が明瞭に残っている。確認面から床面掘方までの深さは 0.220m である。貼床と壁溝が検出された。貼床面の直上はやや硬化しており、生活の跡がうかがえる。貼床面上から掘り込まれたピットは P3089 と P3091 の2基である。各ピットの規模(長軸×短軸-床面からの深さ)は、P3089 が(0.622m × 0.594m-0.836m)、P3091 が(0.351m × 0.345m-0.837m) である。形状は、2基とも平面形は円形で、断面形は有段 U 字形を示し、柱穴の深さは 60cm 前後と非常に深い。

柱穴埋土・礎石の有無 P3089 埋土は黒褐色～暗褐色砂質シルトを主体とし、砂粒を多く含む。砂粒・粘土・シルトの混合土のためか埋土が硬質に締る。Tr.5 西壁セクションで確認する限り、竪穴住居跡埋土は洪水性堆積層の暗褐色砂層と一体である。壁溝 SD3001 の埋土は暗褐色砂質シルト主体である。本住居跡は貼床を明瞭に残しており、黒色シルトと明黄褐色砂の混合土である。礎石は確認できない。

遺物出土状況 埋土中から土器片 110 点が出土しており、このうち壺口縁 5 点・甕口縁 4 点・高坏片 4 点が確認できる。他に石器が 3 点ある。貼床面内から上器片 13 点が出土しており、このうち壺口縁部片 1 点が斜格子文と円形浮文が施される。

遺構の性格と所属時期 竪穴住居跡である。時期は出土遺物から弥生時代中期後葉であろう。

■ SI3003( 図 54-1・54-2、遺物図 20、遺物観察表 20、写真図版 30・65)

位置 第2面北西側 N3 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.365m である。SI3002 に切られる。SK3006 に切られる。SK3007 に切られる。SI3014 を切る。

検出状況 第1面で洪水性堆積層の暗褐色砂質シルト層が検出され、これを人力掘削で除去して黒褐色砂質シルト層を検出した。土器片・被熱痕のある礫・炭化物が検出されたため、竪穴住居内埋土と考えてプラン精査をおこなったが、この黒褐色砂質シルト層上端ではプラン確定が困難であった。何度かプラン精査をおこない、周辺より礫を多く含む炭化物を微量含む箇所が円形を呈したため、これを竪穴住居跡プランとし、ベルト設定をおこなった。結果的に柱穴 4 基が確認され、住居跡であることが確定した。

軸方向・平面形状・規模・礎石柱穴 平面形は不整形円形である。検出長軸 6.007m・短軸 5.689m を測る。断面形は浅い盤形で、壁溝はない。確認面から床面掘方までの深さは 0.216m である。貼床面は検出できない。

柱穴は 4 基が菱形に並んでいる。柱穴の規模は P3096 は(0.457m × 0.412m-0.541m)、P3101

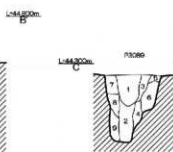
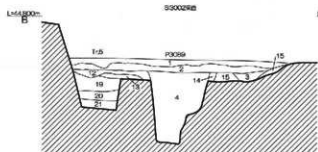
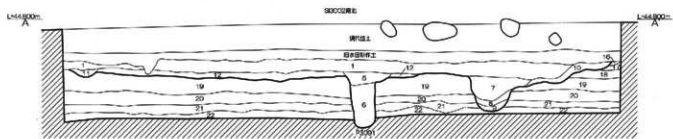
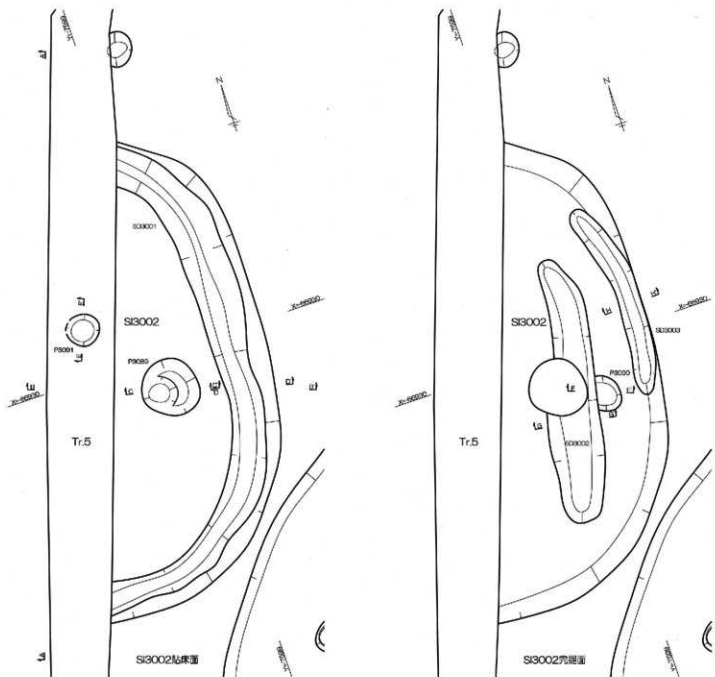
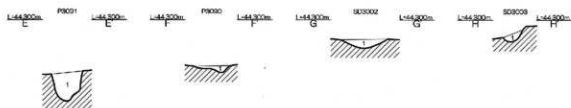


圖53-1 S3002遺構圖



SI3002 東西・南北セクション 土質観察表

調査番号	深さ(m)	地層名 土色名	土質	記入内容
SI3002	1	10YR3/2 黒褐色	砂質 シルト	赤土層片少量、暗褐色砂25%、 粘り強い、細りやや硬質
SI3002	2	10YR2/2 暗褐色	砂質 シルト	黒褐色砂シルト40%、黒褐色砂 少量、粘性強い、細りやや硬質
SI3003	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質 シルト	暗褐色砂少量、黒色シルト少量 粘性強い、粘りあり
SI3002	4	10YR2/2 黒褐色	粘土層 シルト	黒褐色砂質シルト20%、 粘り強い、粘りあり
P3091	5	10YR3/2 黒褐色	砂質 シルト	にぶい黄褐色中粒砂20%、 粘り強い、粘りあり
P3091	6	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	にぶい黄褐色中粒砂10%、 粘り強い、粘りあり
ピット	7	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	粘り強い、粘りあり
ピット	8	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	粘り強い、粘りあり
ピット	9	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	にぶい黄褐色中粒砂10%、 粘り強い、粘りあり
SI3002	10	10YR1/1 黒色	砂質 シルト	粘り強い、粘りあり
SI3002	11	7.5YR2/2 暗褐色	砂質 シルト	鮮紅色土層、粘り多量、 粘り強い、粘りあり
SI3002	12	10YR3/1 黒褐色	砂質 シルト	明黄褐色砂ブロック5%、 粘り強い、粘りあり
SI3002	13	10YR2/1 黒褐色	砂質 シルト	明黄褐色砂ブロック5%、 粘り強い、粘りあり
SI3002	14	2.5Y4/1 黒褐色	砂質 シルト	鮮紅色土層、黒褐色砂質シルト 20%、粘性強い、粘りあり
SI3002	15	10YR1/1 黒色	シルト	黄褐色砂質シルト20%、 粘性やや強い、粘りあり
P3197	16	10YR6/6 黄褐色	砂	黄褐色土層シルト15%、中粒 砂・中粒砂が多量、 粘性なし、細りやや硬質
P3197	17	10YR4/2 黄褐色	砂質 シルト	粘土層、黒色シルト少量、にぶい黄 褐色砂10%、粘性あり、粘りあり
3-4層	18	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	黄褐色砂質シルト5%、 粘性強い、粘りあり
3-7層	19	10YR2/2 暗褐色	砂質 シルト	にぶい黄褐色砂粘土、 粘りやや強い、粘りあり
3-8層	20	10YR2/2 黒褐色	砂・砂質 シルト	黒褐色シルト少量、暗褐色砂 少量、粘性強い、粘り硬質
3-8層	21	10YR2/2 黒褐色	砂・砂質 シルト	暗褐色砂・黄褐色砂粘土、 粘性強い、粘り硬質
3-8層	22	10YR2/6 黄褐色	粘り砂	粘土層、粘性なし、粘り硬質

SI3002 ビット・電溝・小溝 土質観察表

調査番号	深さ(m)	地層名 土色名	土質	記入内容
P3098	1	10YR3/2 黒褐色	砂質 シルト	粘土層、粘りあり 粘り強い、粘りあり
P3099	2	10YR2/1 黒褐色	砂質 シルト	粘土層、黒褐色シルト25%、 粘り強い、粘りあり
P3098	3	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	黄褐色砂粘土40%、黒色シルト ブロック5%、粘りあり、粘りあり
P3099	4	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	にぶい黄褐色砂質シルト15%、 黒色シルト20%、粘性あり、粘りあり
P3098	5	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	粘土層、粘りあり
P3098	6	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質 シルト	にぶい黄褐色シルト5%、 粘性あり、粘りあり
P3098	7	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質 シルト	にぶい黄褐色シルト20%、黒褐色 シルト40%、粘性あり、粘りあり
P3098	8	10YR2/1 黒褐色	砂質 シルト	黒褐色シルト20%、 粘性あり、粘りあり
P3098	9	10YR2/1 黒色	シルト	黄褐色砂5%、 粘性やや強い、細りやや硬質
SI3001	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	粘土層シルト20%、 粘性あり、粘りあり
P3091	1	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	粘性やや強い、粘りあり
SI3001	1	10YR3/3 暗褐色	砂質 シルト	暗褐色・明褐色砂粘土、 粘性あり、粘りあり
SI3001	2	10YR3/1 黒褐色	砂質 シルト	暗褐色砂少量、 粘性やや強い、粘りあり
SI3002	1	10YR2/1 黒褐色	砂質 シルト	暗褐色シルト5%、反白砂粘土1%、 粘性あり、粘りあり
SI3002	1	10YR3/3 暗褐色	砂質 シルト	黒色砂20%、 粘性強い、細りやや硬質

図5-2 SI3002遺構面

は (0.464m × 0.441m-0.507m)、P3092 は (0.561m × 0.543m-0.494m)、P3098 は (0.416m × 0.405m-0.527m) である。形状は、4 基とも平面形は円形で、断面形は U 字形もしくは円筒形を示す。この 4 基はいずれも礎石を伴う。このうち P3098 の礎石は 2 段重ねである。また、P3098 の南側には P3099 が並存し、これも礎石が 2 段重ねである。礎石柱穴の脇にもう一つ礎石ピットを設けるパターンは、SI3011、SI3012 でもみられるが、この SI3003 ではその礎石柱穴と脇の礎石ピットが 2 基とも 2 段重ねの礎石になっていることが特徴的である。用途等は不明としかいえない。SK3005 は住居跡のほぼ中央に位置しており、中央土坑と考えて調査したが、隅丸長方形を呈する大型のもので、規模は (2.278m × 1.693m-0.267m) である。切り合いでは周囲の暗褐色砂質シルト層を切っているようにも見え、この住居跡埋没後に新たに掘られた土坑である可能性も否定できない。

住居埋土・柱穴埋土 埋土は暗褐色砂質シルト・黒褐色砂質シルト層を主体とする。掘方の埋土は、

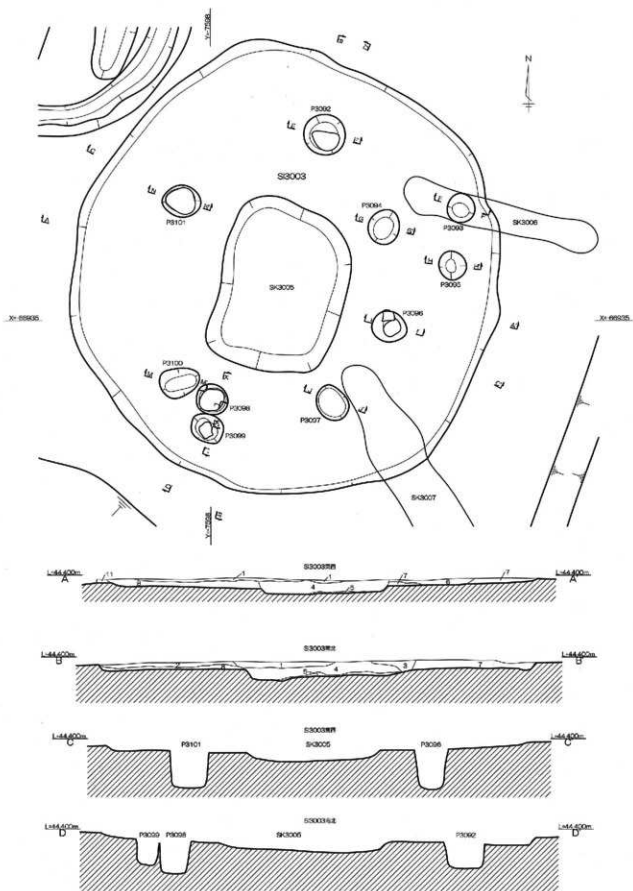
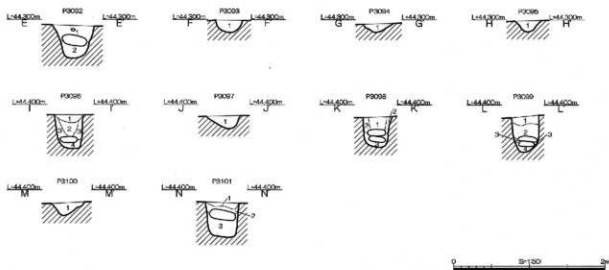


图54-1 SI3003遺構図

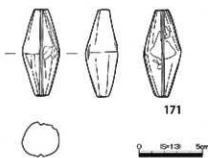


SI3003 東西-南北セクション 土層剖視表

遺構番号	層番号	Section 土層名	土性	埋入物等
SI3003	1	10YR4/2 に赤い黄褐色	粘砂質	緑粘土層遺構、赤土多量、黒色土少量、粘性弱く、硬さあり
SI3003	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	明黄色粘砂少量、黒色シルト遺構、粘性あり、硬さあり
SI3003	3	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	平土上流り、明黄色粘砂少量、黒色シルト遺構、粘性あり、硬さあり
SI3003	4	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	平土上流り、明黄色粘砂少量、黒色シルト遺構、粘性あり、硬さあり
SI3003	5	10YR5/2 に赤い黄褐色	砂質シルト	平土上流り、明黄色粘砂約1%、黒色シルト約9%、粘性あり、硬さあり
SI3003	6	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	灰黄色粘砂中粒約15%、黒色シルト約6%、粘性あり、硬さあり
SI3003	7	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂少量、黒色シルト少量、粘性あり、硬さやや硬質
SI3003	8	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	に赤い黄褐色粘砂約15%、黒褐色シルト約30%、粘性あり、硬さやや硬質
3-8層	9	10YR2/1 黒褐色	砂質シルト	遺構外、粘砂少量、粘性あり、硬さあり

SI3003内ピット土層剖視表

遺構番号	層番号	Section 土層名	土性	埋入物等
P3002	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	に赤い黄褐色約15%、粘性あり、硬さあり
P3002	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	硬さあり、礎石下層上、に赤い黄褐色粘砂シルト約10%、粘性あり、硬さあり
P3003	1	10YR2/1 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂シルト少量、粘性あり、硬さあり
P3004	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂シルト少量、粘性あり、硬さあり
P3005	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂少量、粘性あり、硬さあり
P3006	1	10YR2/2 黒褐色	砂	柱礎、に赤い黄褐色粘砂シルト約5%、粘性あり、硬さあり
P3006	2	10YR2/2 黒褐色	砂	柱礎、粘性あり、硬さあり
P3006	3	10YR2/1 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト約5%、明黄色粘砂少量、粘性あり、硬さあり
P3006	4	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	礎石あり、礎石下層上、粘性あり、硬さやや硬質
P3007	1	10YR2/1 黒褐色	砂質シルト	柱礎、硬さあり
P3008	1	10YR2/2 黒褐色	砂	柱礎、に赤い黄褐色粘砂シルト少量、粘性あり、硬さあり
P3008	2	10YR2/1 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト少量、粘性あり、硬さあり
P3008	3	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	硬質粘砂あり、粘性あり、硬さやや硬質
P3009	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	に赤い黄褐色約20%、粘性あり、硬さあり
P3009	2	10YR2/1 黒褐色	砂質シルト	に赤い黄褐色約6%、粘性あり、硬さあり
P3009	3	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	に赤い黄褐色粘砂少量、粘性あり、硬さあり
P3009	4	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	礎石2層遺構、粘性あり、硬さやや硬質
P3100	1	10YR2/2 に赤い黄褐色	砂質シルト	明黄色粘砂約1%、黒色シルト約5%、粘性あり、硬さあり
P3101	1	10YR2/2 黒褐色	粘砂質	に赤い黄褐色粘砂約9%、黒色シルト約10%、粘性あり、硬さあり
P3101	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黒褐色粘砂約10%、粘性あり、硬さあり
P3101	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	硬さあり、礎石下層上、に赤い黄褐色シルト約10%、粘性あり、硬さあり



遺物図20 SI3003出土遺物

図54-2 SI3003遺構図

遺物観察表 20

遺物番号	調査区	遺構番号 (調査層号)	遺物種別 番号	図録 番号	種別 図録	法量 (cm/g)	特徴	取土/材質	堆成 色層	備考
171	3	SI3003 (3005)	20	05	石類 石類	長さ6.9 幅2.9 厚さ2.5 重さ45.5	粘砂質 磨製、研削は均質 有溝石類、両端部を除く長軸方向に溝、溝深V字型	磨製石含有 粘土質土層	灰	一層欠損

黒褐色砂質シルト層とほぼ同じである。埋土中に炭化物を少量含み、焼土粒を微量含む。

**遺物出土状況** 埋土中・ピット内・土坑内から土器片 378 点が出土した。このうち壺口縁部片 9 点・壺口縁部片 19 点・注口片 1 点・把手片 3 点が確認される。また、このうち SK3006 からは 36 点の上器片が出土した。いずれも小破片である。実測図 1 点を掲載した。171 は石錘であり、輝石安山岩製で紡錘形に作られる。磨製で丁寧な作りで、縦方向の溝を有する。

**遺構の性格と帰属時期** 竪穴住居跡である。SI3002 に切られ、第 3 面 SI3014 を切ることから、弥生時代中期後葉に収まる。

#### ■ SI3004(図 55・56-1・56-2、写真図版 31)

**位置** 第 2 面北西側 N3・4、O3・4 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.367m である。SI3005 を切る。試掘トレンチに切られる。

**検出状況** 第 1 面で洪水性堆積層の暗褐色砂質シルト層が検出され、これを人力掘削で除去して黒褐色砂質シルト層を検出した。この層上で楕円形のプランが検出された。SI3005 との切り合いは試掘トレンチの壁面(図 55A-A')で確認した。

**軸方向・平面形状・規模** 平面形は楕円形である。残存長軸 4.758m・短軸 4.261m を測る。断面形は浅い盤形で、壁溝が明瞭に残っている。確認面から床面掘方までの深さは 0.206m である。

柱穴は P3107-P3102、P3109-P3104・P3105 が対になり、菱形に並ぶ 4 本柱穴の可能性が高い。ただし、P3110 も一定の深さがあり、6 本柱の可能性もある。各ピットの規模は P3107 は (0.470m × 0.393m-0.630m)、P3102 は (0.655m × 0.446m-0.817m)、P3109 は (0.379m × 0.354m-0.399m)、P3104 は (0.443m × 0.351m-0.811m)、P3105 は (0.499m × 0.434m-0.418m)、P3110 は (0.505m × 0.476m-0.452m) である。形状は、4 基とも平面形は円形で、断面形は U 字形もしくは円筒形を示す。P3104 が突出して深い。P3106 は中央土坑の可能性があるが、断定はできない。

**柱穴埋土・礎石の有無** 遺構内埋土は褐灰色砂質シルト層である。掘方の埋土は、黒褐色砂質シルト層とほぼ同じ、黒褐色砂質シルトを主体とする。いずれの柱穴にも礎石は確認できない。

**遺物出土状況** 埋土中から 185 点の上器片が出土した。土器はいずれも弥生土器と思われ、壺口縁部片 10 点・壺口縁部片 7 点・高坏片 1 点が確認できる。それらとは別に、住居内埋土の北壁寄りに焼成粘土塊が検出された。手で捏ねたままのゆがんだ形で焼成塊となったもので、一部筒状になる箇所があり、棒状のものに固められていたものかもしれない。このような焼成粘土塊が出土したのはこの住居跡だけである。

**遺構の性格と帰属時期** 竪穴住居跡である。出土遺物から弥生時代中期後葉頃と思われる。

#### ■ SI3005(図 55・56-1・56-2、遺物図 21、遺物観察表 21、巻頭図版 6、写真図版 31・65)

**位置** 第 2 面 M4・O4 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.747m である。SI3004 に切られる。試掘トレンチに切られる。

**検出状況** 洪水性堆積層の暗褐色砂質シルト層を除去し、黒褐色シルト層を検出した。SI3005 はこの層を切る遺構の一つである。SI3004 との切り合いは、試掘トレンチの壁面で確認した。

**平面形状・規模** 平面形は円形である。長軸 7.491m・短軸 7.147m を測る。断面形は浅い盤形で、壁溝が明瞭に残っている。確認面から床面掘方までの深さは 0.371m である。





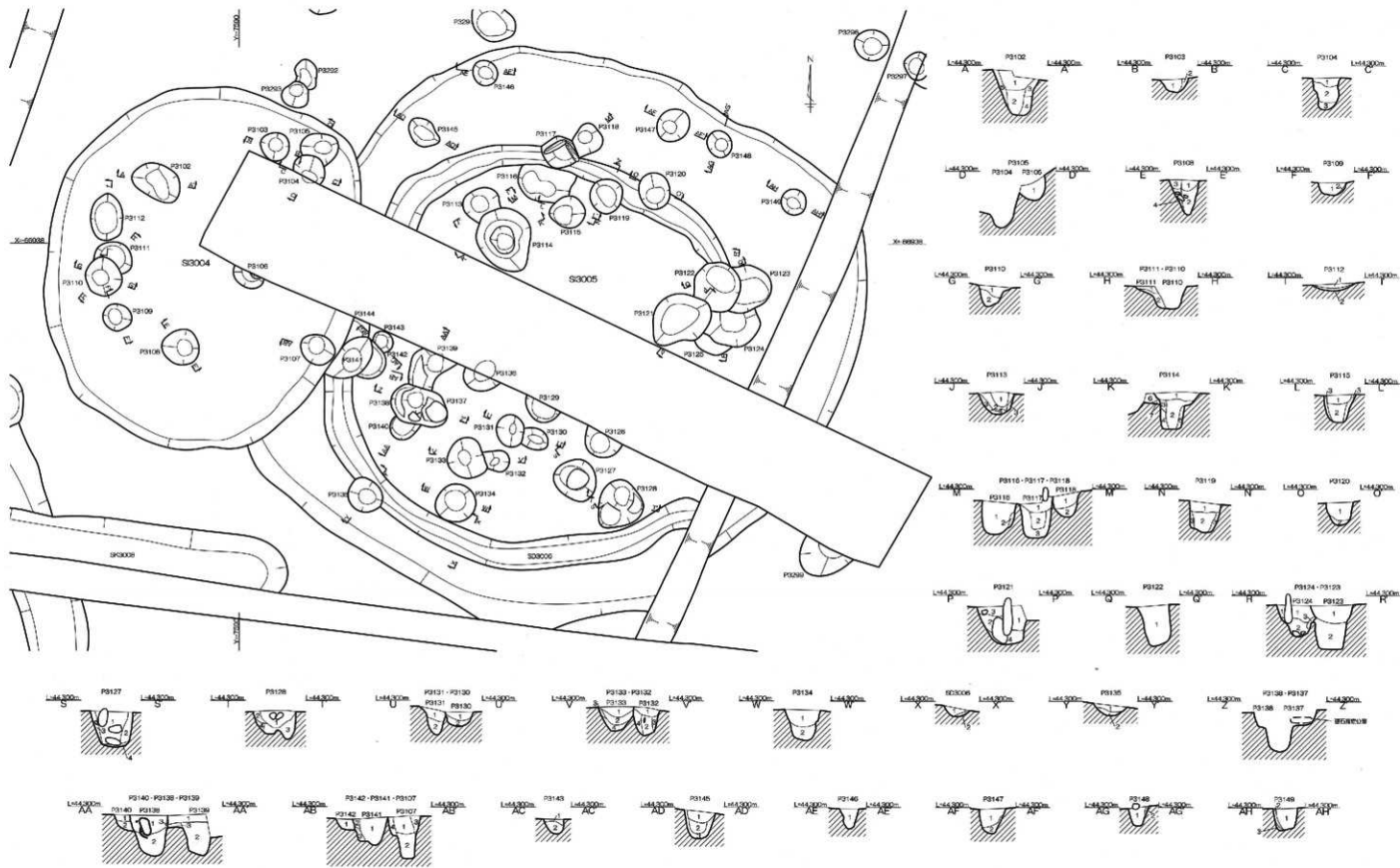
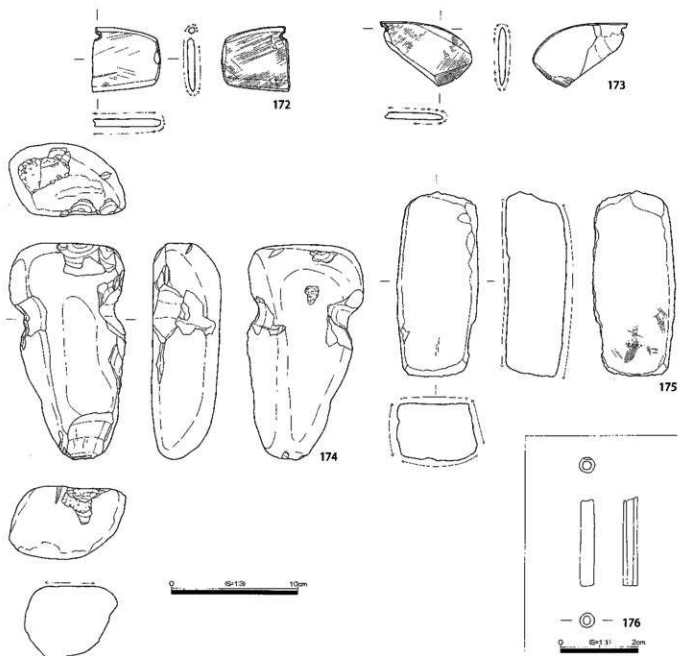


圖56-1 SI3004-SI3005遺構圖2





遺物図21 S13005出土遺物

遺物観察表 21

遺物番号	層位区	遺物番号 (調査番号)	遺物部 番号	採取 番号	器 名	重量 (g)	特 徴	胎土/材質	発 色 調	備 考
172	3	S13005 (3011)	21	65	石器 石器丁	長さ 5.35~ 幅 3.15 厚さ 0.6 重さ 37.4	長方形 磨製。前面縁あり 側面穿孔 1箇所残存径 4mm	緑色岩	灰	1/2 以上欠損
173	3	S13005 内 P3114 (3357)	21	65	石器 石器丁	長さ 7.3~ 幅 5.1~ 厚さ 0.6 重さ 25.5	磨製。前面縁あり 側面穿孔 1箇所残 4mm 残存	緑色岩	灰	1/2 以上欠損
174	3	S13005 (3011)	21	65	石器 中石	長さ 17.15 幅 9.15 厚さ 5.7 重さ 1260	板入り 両端に鋭打痕あり 鋭打後の磨面 1箇所あり	黄土 (新畿二紀)	灰	
175	3	S13005 (3011)	21	65	石器 鏡石	長さ 14.7 幅 6.4 厚さ 4.6 重さ 720g	角柱形。前面は方形 幅縁 4箇所	黄緑岩	浅褐色	付着物多く表面観察 は困難
176	3	S13005 (3011)	21	65	石製品 器蓋	長さ 2.3 幅 0.55 厚さ 0.35 重さ 0.2	円筒形 穿孔径は 1.5mm。内面穿孔か、孔径 2mm	泥状黄質硬灰岩 (緑色凝灰岩)	灰黄色	両面とも 磨か

住居の拡張もしくは立て直しのため、柱穴の掘り直しが激しく、対応関係が見極めきれない。おそらく一度に立てられていたのは4基ないし6基であろう。対応する可能性が高い組み合わせとして、P3128・P3126-P3114・P3113、P3138-P3121・P3123、P3128・P3129-P3115・P3117、P3127-P3116、P3141・P3142・P3139-P3121・P3124をエレベーションで示した。各ピットの規模は、P3128が(0.636m×0.599m-0.792m)、P3126が(0.523m×残存値0.311m-0.538m)、P3114が(0.867m×0.728m-0.720m)、P3117が(0.508m×0.421m-0.801m)、P3115が(0.426m×0.426m-0.640m)、P3117が(0.508m×0.421m-0.801m)、P3127が(0.571m×0.536m-0.702m)、P3141が(0.739m×0.406m-0.541m)、P3142が(0.476m×残存値0.398m-0.390m)、P3139が(残存値0.532m×残存値0.505m-0.783m)、P3121が(0.8626m×0.679m-0.760m)、P3124が(0.744m×残存値0.528m-0.731m)である。



写真 16 SI3005 出土土製品

ピット内に礎石を有していたのは、P3127・P3137である。それらとは別に、P3117・P3121・P3124・P3127・P3138では、平坦な円盤形の石がピット内に立てて埋められていた。柱の補強として用いられたものであろうか。東側に位置するSI3006と比べて住居床面の掘方が深い。

**竪穴住居跡埋土・柱穴埋土** セクションA-A'・C-C'で遺構埋土を観察した。埋土は暗褐色砂主体層である。14層も暗褐色砂主体であるが、炭化物を微量含み、上面がほぼ水平面となる。この14層が粘床の可能性もある。にぶい黄褐色砂質シルトを少量含む。各柱穴の埋土は黒褐色砂質シルトを主体とする。基盤層の黄褐色砂層まで深く掘り込んだ柱穴をいくつか確認できる。

**遺物出土状況** 埋土中・ピット内・壁溝中から907点の土器片が出土した。ほとんどが弥生土器片と推測され、甕口縁部片78点・壺口縁部24点・高坏片74点等が確認できる。土器片の中には、甕の口縁端部に擬凹線文を有するものが含まれる。石器・石製品5点の実測図を掲載する。172と173は石包丁でいずれも円孔部分で割れている。172は緑色岩製、173は粘板岩製である。174は叩き石として分類したが明確ではない。側面2箇所には挟りが入れられ、側面1面に擦面、両端に打痕が残る。挟り部分は紐を巻いた跡とみられ、何らかの柄に縛り付けて石槌風に用いたものかもしれない。175は直方体の砥石で流紋岩製である。176は流紋岩質凝灰岩製の管玉で、長さ2.3cmの細長い形状のものである。土器片の中に分銅形土製品の可能性のある小片(写真16)が含まれる。

**遺構の性格と帰属時期** 竪穴住居跡である。他の住居跡より掘方が深く埋土はよく残っていたが、大型の土器片はなく、擬凹線文を有する甕や石包丁の出土から、弥生時代中期後葉とする。

■ SI3006(図57-1・57-2・58、遺物図22、遺物観察表22、写真図版31・66)

**位置** 第2面北西側N5、O4・5グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.507mである。北側のSI3015を切る。土坑SK3013との同時期に存在した可能性がある。

**検出状況** 圃場整備の整地層と旧耕作土を除去した段階で、洪水性堆積層の暗褐色砂層が検出された。この暗褐色砂層は弥生時代の遺物包含層であり少量の土器片を含む。この層中に少しまとまった

土器が集中し、硬質に土が固まった箇所があり、この層を掘り下げたところで住居跡の床面が検出された。検出面は黒褐色砂質シルト層面であり、貼床の残骸と思われる明黄褐色砂と黒褐色シルトの混合土が少量検出された。

**形態・規模** 平面形は楕円形である。残存長軸 7.640m・短軸 6.900mを測る。断面形は浅い盤形で、壁溝が明瞭に残っている。

住居内ピット・土坑は計 29 基が確認された。このうち、六角形に並ぶ柱穴が確認でき、P3167-P3174、P3151・P3152-P3169、P3158・P3159-P3172 が対となる。各ピットの規模（長軸×短軸・床面からの深さ）は、P3167 は (0.731m×0.660m-0.692m)、P3174 は (0.699 m×0.594m-0.575m)、P3151 は (0.615m×0.508m-0.586m)、P3152 は (0.768×0.573-0.567m)、P3169 は (0.670m×0.571m-0.696m) である。P3158 は (0.678m×0.609m-0.741m)、P3159 は (1.074m×残存値 0.850m-0.787m)、P3172 は (1.044m×0.776m-0.752m) である。形状は、いずれも円形もしくは楕円形で、断面形は U 字形である。柱穴の深さは 70cm に達するものが多く、今回検出された他の竪穴住居跡に比較して堅牢感がある。SK3018 は中央土坑である。平面形は円形で断面形は底が丸く上端付近が広がりながら開く形で、規模は (1.326m×1.243m-0.493m) である。

**住居跡埋土・柱穴埋土** 遺構上面埋土は洪水砂の暗褐色砂・にぶい黄褐色砂層である。この層に含まれる土器片は、破損が著しい。後世の耕作と圃場整備の際の攪乱によるものと思われる。床面に少量であるが、貼床の残骸と思われる黒色シルトと明黄褐色砂との混合土が確認できる。この混合土は SI3002・SI3007 の貼床にも見られ、当該地の竪穴住居跡の貼床には意図的にこの混合土を用いられたものと思われる。ピット群の埋土には、埋土上層及び柱痕部に暗褐色砂・にぶい黄褐色砂が多量に含まれる。

**遺物出土状況** 住居床面直上及びピット・土坑・壁溝内から 940 点の土器片が出土した。内訳は甕の口縁部片 132 点・壺の口縁部片 68 点・高坏片 38 点・把手片 7 点等が確認できる。比較的まとまった破片についてはドット記号 (d) を付して座標を記録して採取した。遺物の含まれる住居床面直上の暗褐色砂は洪水砂層であり、床面直上の数点をのぞいて遺物がかなり攪乱されて元位置から動いているようである。実測図は 6 点を掲載する。177 は弥生時代中期の甕である。口縁端部に凹線文 2 条を施す。178 は口縁端部に擬凹線文 3 条を施す。179 は無頸壺の口縁部破片で複雑な装飾を有する。肩部にキザミが施される突帯を 6 条貼り付け、突帯上に 2 本一組の棒状浮文を縦方向に数組配する。青谷上寺地遺跡等で類似の土器が出土している。180 は壺の体部片で、上半部に櫛描で斜格子文・直線文・刺突文を施す。181 は頁岩製の石鏃で、中央土坑 SK3018 内からの出土である。SK3018 から



写真 17 SI3006 内 SK3012 出土 石鏃 (181) 接合資料

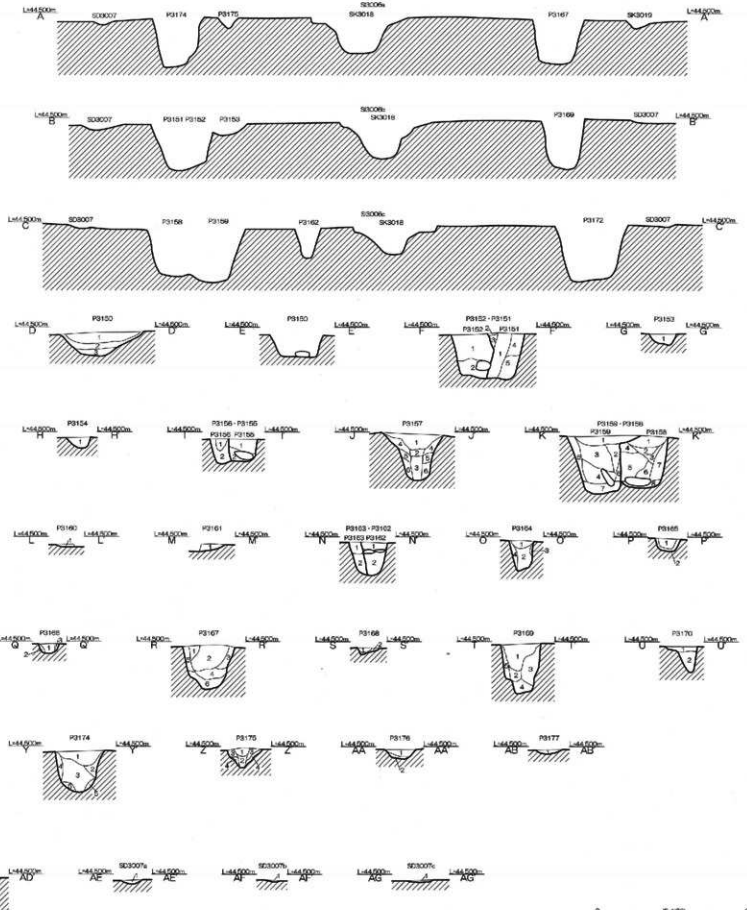
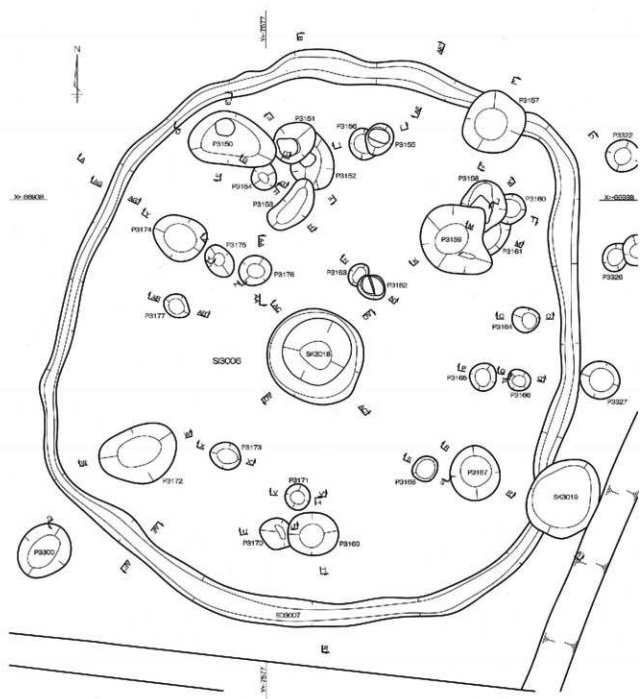


图57-1 SI3006透视图





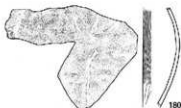
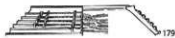
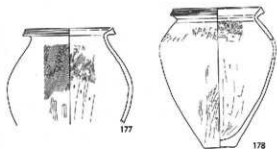
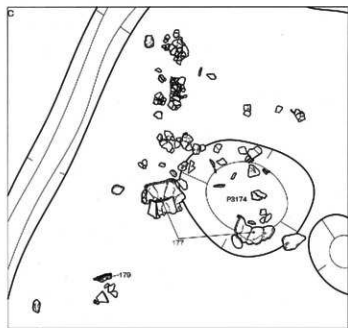
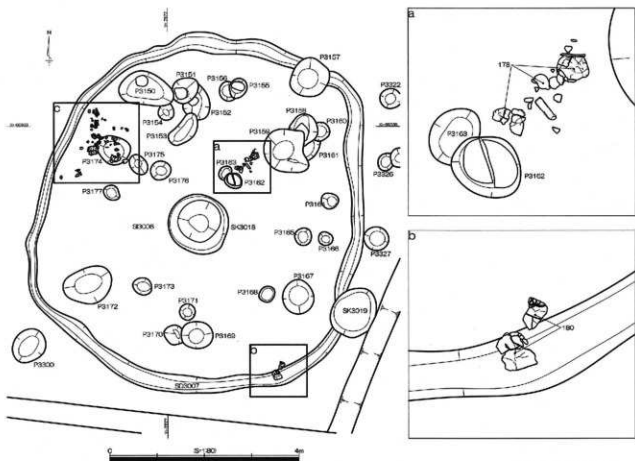
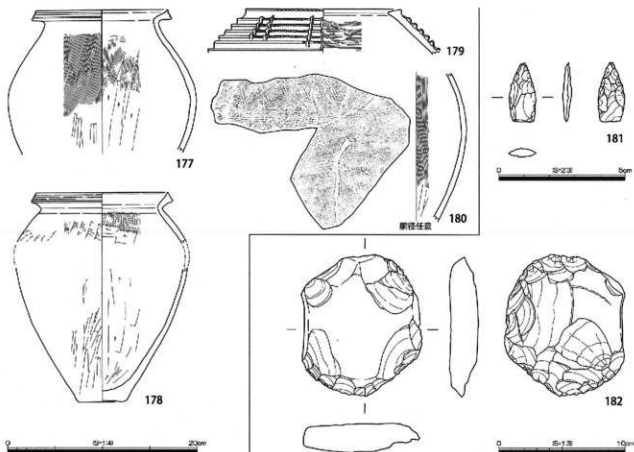


図58 SI3006微細図





遺物図22 SI3006出土遺物

遺物観察表 22

遺物番号	調査区 (調査番号)	遺物番号 (調査番号)	遺物区 番号	種別 器種	採掘 層位	特徴	胎土/材質	焼成 色相	備考
177	3	SK3006 (D012)	22	弥生土器 甕	□径:13.8 器高:15.2~ 最大径:19.8	外底:□縁部部復旧痕文3条、□縁部ナデ、体部下 部ハケ、体部下平ミガキ 内底:□縁部ナデ、体部下平ハケ、体部下平ケツ シ	普通 ~2mmの砂粒、 普通	普通 外底:にぶい肌 内底:灰黄肌	
178	3	SK3006 (D012)	22	弥生土器 甕	□径:13.8 器高:22.2 最大径:18.8 底径:4.8	外底:□縁部部復旧痕文3条、体部下デ、異部以 外縁部による斜行文、体部下ミガキ、体部下 平ミガキナデ 内底:□縁部ナデ、異部ケツシ後ハケ、体部一部 部ナデ?	普通 ~1mmの砂粒、 普通	普通 外底:浅黄肌 内底:にぶい肌	外底面付着
179	3	SK3006 (D012)	22	弥生土器 甕 (無取皿)	□径:16.0 器高:6.5~	外底:□縁部部ナデ横キザミ、斜部突脚6条、突 脚上平ミガキ・横状浮文 内底:□縁部ナデ、異部ナデ後ミガキ	普通 ~2mmの砂粒、 普通	普通 外底:浅黄肌 内底:浅黄肌	
180	3	SK3006 (D012)	22	弥生土器 甕	器高:15.9~	外底:体部下平部復旧痕子文・斜行文・横状文 内底:体部下平ハケ、体部下平ナデ	普通 ~0.5mmの砂粒、 普通	普通 外底:にぶい肌 内底:にぶい肌	
181	3	SK3006内 (D098)	22	石器 石鏃	長さ2.35 幅:1.05 厚さ0.25 重さ0.8	打製 基部の長い平部無取皿	頁岩(新第三紀)	暗灰	先端欠損
182	3	SK3006 (D012)	22	石器 不明 未製品	長さ:11.2 幅:9.5 厚さ:2.3 重さ:247.0	打製 扁平台型先葉材とする 一側縁をゆるぎ打により成形	頁岩(新第三紀)	灰・灰白	石片か

は水洗選別の結果、頁岩の剥片が数点検出され、その剥片と181の石鏃が接合することが確認され、この中央土坑の傍で石鏃を加工していたことが示された。182は打製石器の未成品である。頁岩製で同一石核から取ったと思われる石器未製品がSK3013から出土している。

遺構の性格と帰属時期 竪穴住居跡である。床面直上の土器群の年代から弥生時代中期後葉と推定できる。

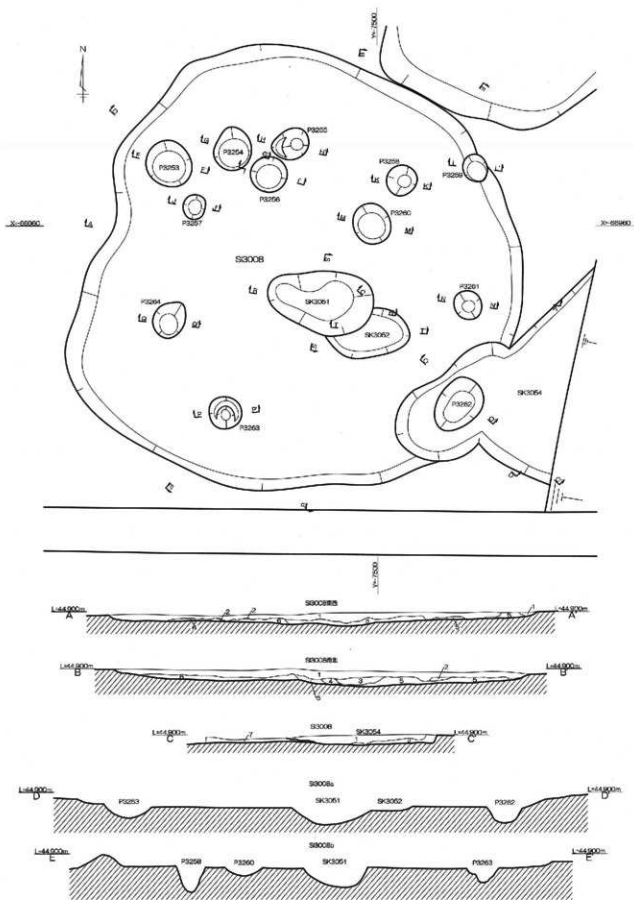
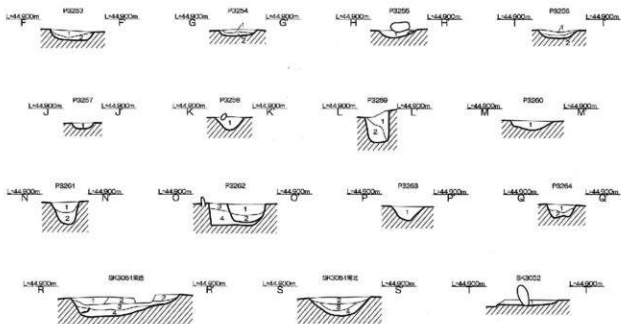


图59-1 SI3008遺構図



SI3008 A-A', B-B', C-C' 土層断面表

断面番号	断面号	原断面 土色	土質	取入物等
SK3008	1	10YR7/1 黒色	砂質 シルト	炭化物微量、黄灰色粘粒約4%、 黒色炭化物砂質シルト少量、縦割れ
SK3008	2	2.5Y7/1 黒褐色	砂質 シルト	炭化物微量、黄褐色粘粒少量、黒色粘土 シルト少量、凹凸部、縦割れ
SK3008	3	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	炭化物微量、黒色粘土少量、黄灰色 粘粒少量、凹凸部、縦割れ
SK3008	4	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色砂質シルト少量、 凹凸部、縦割れ
SK3008	5	10YR2/1 黒褐色	砂質 シルト	炭化物微量、黒色粘土質シルト少量、 褐色シルト少量、凹凸部、縦割れ
SK3008	6	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	炭化物少量、黒色粘土質 シルト少量、黄灰色粘粒少量、黄灰色 粘粒少量、粘粒あり、縦割れ
SK3008	7	10YR2/1 黒褐色	凝結砂 質	炭化物微量、炭灰色粘粒少量、 小縦割れ
SK3004	1	10YR2/2 黒褐色	凝結砂 質	炭化物約3%、小縦割れ、灰白色粘粒 砂少量、凹凸部、縦割れ
SK3004	2	2.5Y7/1 黒褐色	砂質 シルト	炭化物微量、灰白色粘土質シルト 少量、粘粒あり、縦割れ

SI3008 ビット・中央十伏・十坑 土層断面表

断面番号	断面号	原断面 土色	土質	取入物等
P3203	1	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	炭化物微量、黄褐色粘粒約15%、 粘粒あり、縦割れ
P3203	2	10YR2/1 黒色	砂質 シルト	黒褐色粘質シルト少量、 凹凸部、縦割れ
P3204	1	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色砂質シルト約3%、炭化物約5%、 粘粒あり、縦割れ
P3204	2	10YR2/1 黒色	砂質 シルト	埋め色シルト少量、 凹凸部、縦割れ
P3205	1	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	土層少量、黄灰色粘土約20%、 シルト約70%、粘粒あり
P3205	2	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	炭化物少量、黒色粘土質 シルト、粘粒あり、縦割れ
P3205	3	10YR2/1 黒色	砂質 シルト	埋め色シルト・砂質シルト少量、 凹凸部、縦割れ
P3205	4	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色砂質シルト約10%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3205	5	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色砂質シルト約20%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3206	1	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色砂質シルト約20%、 粘粒あり、縦割れ
P3206	2	10YR2/1 黒色	砂質 シルト	埋め色砂質シルト約20%、 粘粒あり、縦割れ
P3206	3	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	炭化物微量、埋め色粘粒少量、 粘粒あり、縦割れ
P3206	4	10YR2/1 黒色	砂質 シルト	埋め色砂質シルト約10%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3206	5	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色砂質シルト約20%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3206	6	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	炭化物約5%、埋め色シルト・砂質 シルト約70%、粘粒あり、縦割れ
P3206	7	10YR2/1 黒色	砂質 シルト	炭化物約5%、埋め色約5%、 粘粒あり、縦割れ
P3206	8	10YR2/3 黒褐色	砂質 シルト	炭化物少量、 粘粒あり、縦割れ
P3206	9	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	赤土上層少量、炭化物約5%、 粘粒あり、縦割れ
P3206	10	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	炭化物約5%、 粘粒あり、縦割れ
P3206	11	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	赤土上層少量、埋め色粘土質シルト 約30%、粘粒あり、縦割れ
P3206	12	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色粘土質シルト少量、 凹凸部、縦割れ
P3206	13	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	赤土上層少量、埋め色粘土質シルト 約30%、粘粒あり、縦割れ
P3206	14	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	赤土上層少量、埋め色粘土質シルト 約30%、粘粒あり、縦割れ
P3206	15	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色粘土質シルト約30%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3206	16	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色粘土質シルト約30%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3206	17	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色粘土質シルト約30%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3206	18	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色粘土質シルト約30%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3206	19	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色粘土質シルト約30%存在、 粘粒あり、縦割れ
P3206	20	10YR2/2 黒褐色	砂質 シルト	埋め色粘土質シルト約30%存在、 粘粒あり、縦割れ

図59-2 SI3008構構図

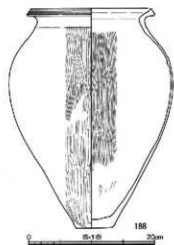
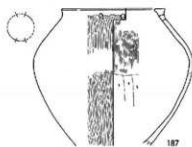
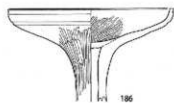
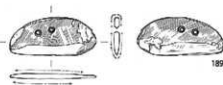
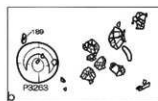
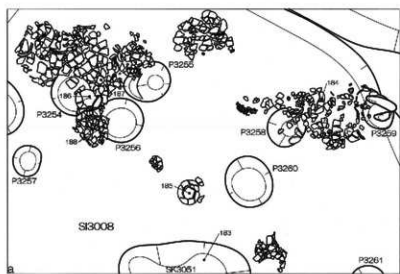
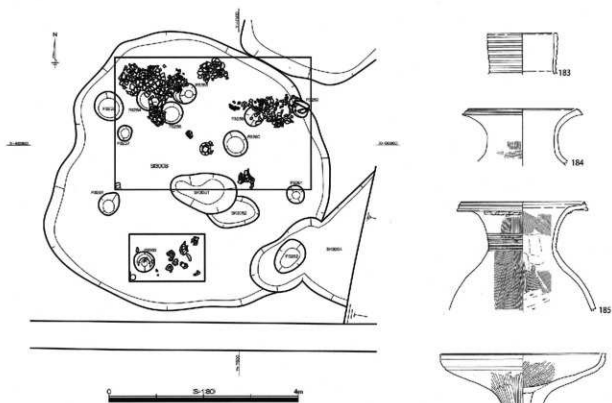


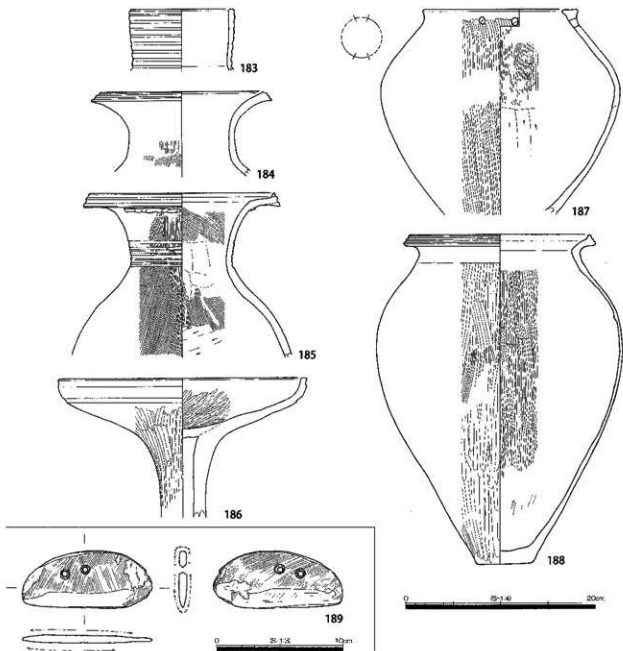
图60 SI3008微缩图

■ SI3008( 図 59-1 ~ 60、遺物図 23、遺物観察表 23、写真図版 33・67)

位置 第2而北西側 P12・13、Q12・13 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.320m である。

検出状況 上面に近代以降の耕作攪乱と、古代以降の耕 3002 による破壊を受けていた。耕作土を除去する途中から多数の弥生土器片が出土し始め、何らかの遺構が遺存すると予測できたため、周辺全体を平坦に削り下げて、プラン検出をおこなった。3 区南側では地盤がやや下がりがみになっており、竪穴住居跡的なプランがまわり、表面に多数の土器片が露出した状態となった。周囲の確認面が低湿地的な暗褐色砂質シルト・黒褐色砂質シルト主体の堆積層で、このような地盤に住居を作るのかどうか疑問もあったが、結果、柱穴、中央土坑も検出され、明らかな竪穴住居跡となった。

形態・規模 平面形は不整円形で、長軸 6.205m・短軸 6.155m を測る。断面形は浅い盤形で、深さは 0.192m である。壁溝は検出できない。



遺物図23 SI3008出土遺物

遺物観察表 23

遺物 番号	調査区	遺物番号 (奥付番号)	発掘 番号	種 類	数量 (cm/g)	特 徴	粘土/材質	焼成 色 調	備 考
183	3	S3308 (3014)	23	弥生土器 壺	口径:9.8 底径:5.6	外面:口縁部~頸部凹線文6条 内面:口縁部~頸部ナデ	白濁 ~2mmの砂粒	中平良質 外面:焼 色:黄	
184	3	S3308 (3014)	23	弥生土器 壺	口径:17.0 底径:9.0	外面:口縁部~頸部2条+口縁部~頸部 凹線文2条、頸部下半ハケナデ 内面:口縁部~頸部ナデ	白濁 ~1mmの砂粒 少ない	普通 外面:にぶい黄褐色 内面:黒濁	口縁部内外凹線付具
185	3	S3308 (3014)	23	弥生土器 壺	口径:19.4 底径:17.3	外面:口縁部凹線文2条、頸部ハケ、頸部上 部に棒状浮文、頸部下半に凹線文6条、体 部上半ハケ 内面:口縁部~頸部下半ナデ、頸部ハケ 、体部上半ナデ及び腕部ハケ	白濁 ~1mmの砂粒	普通 外面:にぶい黄褐色 内面:灰濁	
186	3	S3308 (3014)	23	弥生土器 高杯	口径:25.2 底径:14.75	外面:口縁部ナデ後凹線文2条、肩部~頸部 ミギキ 内面:口縁部ナデ、口縁部ミギキ 内面:口縁部ナデ、口縁部ミギキ 内面:口縁部ナデ、体部上半ハケ、体部中位ケズ リ、体部下半ナデ及び腕ナデ 特記: 紐穴2個(縦を2個)	黄濁 ~1mmの砂粒 普通	普通 外面:にぶい黄褐色 内面:黒濁	
187	3	S3308 (3014)	23	弥生土器 壺 (高脚壺)	口径:16.0 体高:21.7 底径:12.5	外面:口縁部凹線文2条、凹線文2条、体部ミ ギキ 内面:口縁部ナデ、体部上半ハケ、体部中位ケズ リ、体部下半ナデ及び腕ナデ 特記: 紐穴2個(縦を2個)	白濁 ~0.5mmの砂粒 普通	普通 外面:灰濁 内面:にぶい黄褐色	
188	3	S3308 (3014)	23	弥生土器 壺	口径:18.8 体高:24.8 底径:12.6 底径:5.9	外面:口縁部凹線文2条、凹線文2条、体部ミ ギキ、底部ナデ 内面:口縁部~頸部ナデ、体部上半ハケ、腕部ナデ	白濁 ~1mmの砂粒 普通	普通 外面:黄濁 内面:にぶい黄褐色	
189	3	S3308 (3014)	23	石包 丁	長さ:10.2 幅:4.35 厚さ:0.65 底径:4.7	扇形の半月形 磨製、研慮痕あり 底部穿孔2箇所、外径4mm	緑色岩	灰	磁器、部分的に欠損

住居内ピット・土坑は計14基が確認された。のうち、中央土坑と思われるのがSK3051である。SK3051は不整な楕円形で規模は(1.409m × 0.891m-0.368m)である。主柱穴と思われるピットは4基で、P3258とP3263が中央土坑を挟んで向き合う位置にくる。4基の柱穴の規模は、P3253は(0.615m × 0.605m-0.272m)、P3262は(0.769m × 0.556m-0.354m)、P3258は(0.408m × 0.406m-0.415m)、P3263は(0.437m × 0.426m-0.278m)である。形状は、4基とも平面形は円形で、断面形はU字形を示す。床面に粘土の残骸と思われる、黒色シルトと明黄褐色砂との混合土が少量確認できる。この混合土はSI3002の粘土と類似する。

柱穴埋土・礎石の有無 遺構内埋土は洪水砂と同じ暗褐色砂・にぶい黄褐色砂層である。掘方の埋土は、黒褐色砂質シルト層とほぼ同じ黒褐色砂質シルトを主体とする。各柱穴に礎石は確認できない。

遺物出土状況 弥生土器片が多数集中しており、実測した7個体以外に破片点数1179点が出土した。3区で最大の土器量である。後世の耕作攪乱等による破壊のため細片に砕けており、接合に時間を要した。甕もしくは壺の口縁部片55点・甕の底部片30点・高杯片4点・把手付き土器の把手1点が確認できる。甕もしくは壺の口縁端部に擬凹線文のあるものが含まれる。実測図を掲載したものは以下の通りである。183は頸部に平行に凹線文8条を入れた壺で、中央土坑SK3051からの出土である。184~189は住居跡の床面上の埋土からの出土である。184は口縁端部に凹線文2条、185は口縁端部を断面T字風につくった壺であり、頸部外面の上端返りの下に棒状浮文を横方向に貼り付け、頸部下半には凹線文6条をめぐらす。186は内面外面共に丁寧なミギキを施した高杯である。口縁部外面に凹線2条を入れる。187は無頸壺で口縁直下に2個一組の紐孔を1対設ける。188は口縁端部に擬凹線文2条をめぐらす甕である。体部外面にはミギキ調整がなされる。189は緑石岩製の直線対半月形の石包丁である。磨製であり、円形の紐孔が2個丁寧に空けられている。

遺構の性格と所属時期 竪穴住居跡である。出土遺物から年代は弥生時代中期後葉である。

■ SI3007(図 61・62、遺物図 24、遺物観察表 24、写真図版 32・68)

位置 第2面 O8・9、P8・9 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.831m である。南東側を SK3039 に切られる。南西側を攪乱に切られる。Tr.1 が東西に貫通する。

検出状況 旧耕作土を除去し、さらに古い時期の耕 3001 を除去した段階で検出された。住居内の貼床面まで暗褐色砂が入り込み住居範囲を絞り込むことが困難であった。周辺を黒色土上面まで削り下げてようやく壁溝 SD3010 を検出した。南側はこの住居が灰黄色砂層を切って構築されている。

形態・規模・付帯施設 平面形は楕円形で、長軸 7.917m・短軸 6.106m を測る。断面形は浅い盤形で、深さは 0.074m である。壁溝が浅く残る。住居内ピット 34 基・中央土坑 2 基が検出された。中央土坑 2 基が切り合い、小溝・ピットも多数切り合うことから、最低 1 回は建て直しがおこなわれたものと推測できる。

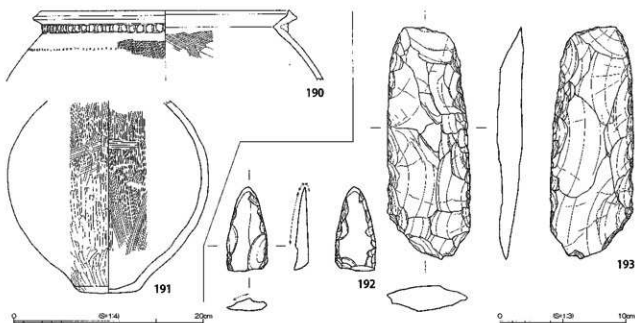
貼床の残骸がわずかに残る段階を SI3007 上面として床面精査をおこない、遺構内ピット等を検出した。図 61 にこの上面を掲載する。壁溝は外側を SD3010・SD3016・SD3017 が回り、内側を小溝 SD3011～SD3015 がめぐる。複数の時期の壁溝・小溝が混在している可能性がある。この段階で検出されたピットは 21 基である。このうち、柱穴は、P3219・P3234、P3244・P3227、P3222・P3235 が対になる可能性があり、やや変形な六角形を示す。各ピットの規模は 3 区遺構一覧表を参照のこと。柱穴の形状は円形もしくは不整円形・楕円形で、断面形は U 字形である。SI3006 と比べて柱穴の掘方が浅く小さい。中央土坑の SK3035 の平面形は楕円形で、断面形は有段 U 字形で北西側がやや浅くなる。規模は (1.001m × 0.805m-0.374m) である。SK3035 の周囲には焼土が散在、遺構内から 190 が出土した。いずれの柱穴にも礎石は確認できない。

SI3007 上面の遺構を完掘し、貼床を除去して再精査し、黒色シルト層面で検出した遺構を SI3007 下面として図 62 に示す。貼床下に 1.2m～1.3m の幅で環状に回る SD3018 を検出した。SI3007 の古い時期の壁溝と思われるが、幅が不自然に広いと、別の意図で掘られたものかもしれない。SK3035 に切られて SK3036 がある。1 段階古い中央土坑であり、規模は (1.203m × 0.574m-0.396m) である。平面形は南北に細長い楕円形である。この段階に対応する柱穴もまた、対応関係が掴みにくく、P3234・P3235・P3243・P3229・P3236 が柱穴候補といえるが、確定にはいたらなかった。いずれの柱穴にも礎石は確認できない。

住居跡埋土・柱穴埋土 遺構上面埋土は洪水砂の暗褐色砂と黒褐色砂質シルトである。貼床の残骸は明黄褐色砂と黒色シルトの混合土で、SI3002・SI3006 の貼床と類似のパターンを示す。ピット群の埋土は、暗褐色砂もしくは黒褐色砂を含む黒褐色砂質シルトが多い。

遺物出土状況 住居埋土及びピット・土坑・壁溝内から 464 点の土器片が出土した。内訳は壺の口縁部片 41 点・壺の口縁部片 23 点・高坏片 22 点・器台片 9 点・把手片 3 点等である。床面の遺物の多くは耕作攪乱によって元位置から動いている。実測図 4 点を掲載する。190 は SK3035 中央土坑からの山上であり、土坑埋上下層に壺の口縁部の破片がばらばらに砕けた状態で埋没していた。壺の頸部には指頭押圧痕貼付突帯がめぐり、肩部にはハケ調整の後、連続刺突文を施す。弥生時代中期後葉の壺である。191 は体部外面上半に縦方向のハケ目としばしば横方向のハケを加え、体部外面下半にはミガキが施された壺である。192 は望青石ホルンフェルス製の石槍で、加工は粗雑であり、未成品の可能性もある。193 は頁岩製の打製石斧である。

遺構の性格と帰属時期 竅穴住居跡である。出土遺物から弥生時代中期後葉と推定する。



遺物図24 SI3007出土遺物

遺物観察表 24

遺物番号	調査区	遺物番号 (調査区番号)	遺物ID 番号	品別 番号	種別 番号	法長 (cm/号)	特徴	胎土/材質	着色 状態	備考
190	3	SI3007 (SI3007)	24	68	男生土器 類	口径 26.0 高さ 7.5 ~	外面: 口縁部ナデ、胴部筋線は表取付突帯、肩口ハケ後部斜刺突文 内面: 口縁部ナデ、胴部ハケ・ナデ	白磁 ~ 1mmの砂粒、 骨殖	白磁 内面: 筋線 外面: 筋線	
191	3	SI3007 (3013)	24	68	男生土器 壺	高さ 20.3 ~ 成人径 (21.2) 底径 6.2	外面: 体部上半ハケ、体部下半ミガキ、底部ナデ 内面: 体部ハケ、底部ナデ	白磁 ~ 1mmの砂粒、 骨殖	白磁 外面: 浅筋線 内面: 筋線	底面の形状はカレンス状
192	3	SI3007 (3013)	24	68	石製 石槍	長さ 6.7 ~ 幅 3.25 厚さ 1.1 重さ 25.8 口径 18.0	削製 縁打成形後刃部を研ぎ	菅倉内ホルン フェルス(新第三紀)	灰白	
193	3	SI3007 (3013)	24	68	石製 石斧	幅 6.5 厚さ 2.15 重さ 268.0	打製、両側面に細い筋線あり 断面は人字形	菅倉(新第三紀)	灰	磨製石斧未製品か

■ SI3009( 図 63・64、遺物図 25、遺物観察表 25、写真図版 34・68)

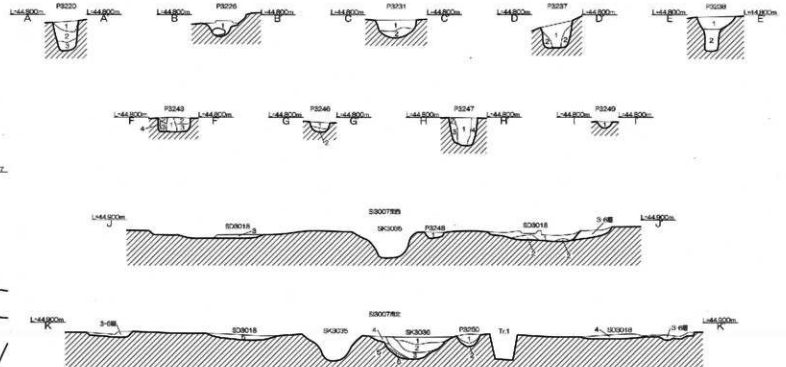
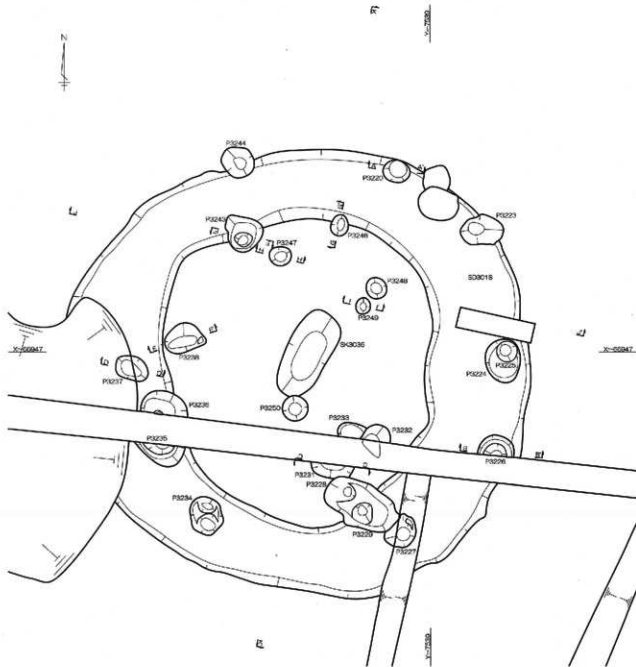
位置 第2面南西側 O2・O3 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.259m である。

検出状況 圃場整備の整地層の下に明黄褐色砂層があり、この層は、3区南西側の褐色・黒褐色砂質シルト層の上面に 3 ~ 15cm 程度の厚さで堆積しており、洪水性堆積層の可能性が高い。この層面で、すぐそばに土器を伴う SK3003 が検出され、同一面で隅丸長方形のプランが検出された。検出面は住居貼床面に達している。

軸方向・平面形状・規模・付帯施設 平面形は隅丸長方形で、長軸 3.321m・短軸 2.639m を測る。断面形は浅い盤形で、壁溝が明瞭に残る。確認面から床面掘り方までの深さは 0.192m である。軸方向は E-37°-S をふる。住居範囲内にピットは 5 基あり、P3184 が規模 (0.495m × 0.418m-0.507m) である程度深さがあるが、これに対応する柱は見つからない。P3187 は (0.260m × 0.220m-0.278m)、







3K S3007 土層縦断表

遺構番号	層番号	層名称	土質	取込人物
PS226	1	10YR5/2	灰黄褐色	S3007B1取込時存在
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS230	1	10YR5/2	黒褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	黒褐色	粘性あり、細砂あり
PS236	1	10YR5/2	灰黄褐色	直径15cm程度の、砂粒多量、炭化灰
	2	10YR5/2	灰黄褐色	炭質、粘りや強い、細りや中硬質
PS241	1	10YR5/2	灰黄褐色	平らな中硬質粘りや中硬質
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘り強、粘りあり
PS251	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS237	1	10YR5/1	褐色	粘り強、粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS237	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS238	1	10YR5/1	褐色	直径15cm程度の、砂粒多量、炭化灰
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS238	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり

遺構番号	層番号	層名称	土質	取込人物
PS243	1	10YR5/3	赤褐色	に白い黄褐色の砂粒、粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
PS243	1	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
PS243	1	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
PS246	1	2.5YR2/2	黒褐色	粘性あり、細砂あり
	2	2.5YR2/2	黒褐色	粘性あり、細砂あり
PS247	1	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS247	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS247	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS249	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり

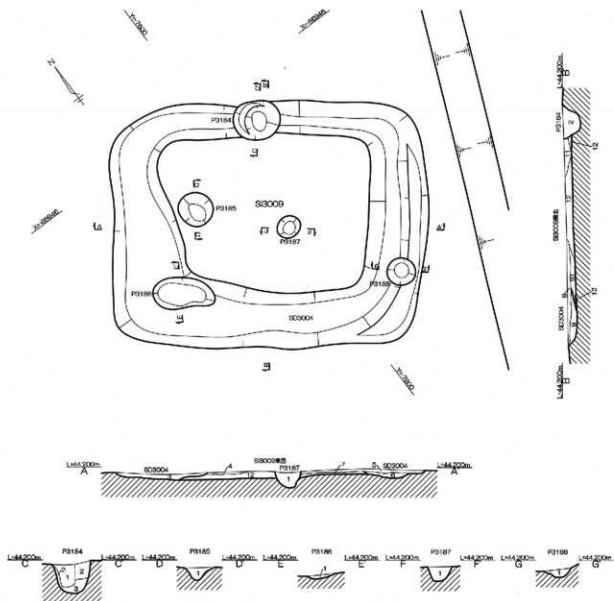
3K S3007 J J'・K K' 土層縦断表

遺構番号	層番号	層名称	土質	取込人物
SD3006	1	10YR5/3	赤褐色	黒色シルト10%、褐色砂少量、褐色
	2	10YR5/3	赤褐色	赤黄シルト10%、粘性あり、細砂あり
SD3006	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
SD3006	1	10YR5/1	褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/1	褐色	粘性あり、細砂あり
SD3006	1	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
SD3006	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
PS248	1	10YR5/1	褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/1	褐色	粘性あり、細砂あり
PS250	1	10YR5/1	褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/1	褐色	粘性あり、細砂あり

遺構番号	層番号	層名称	土質	取込人物
SD3018	1	10YR5/2	灰黄褐色	灰黄褐色砂質シルト10%、粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	灰黄褐色砂質シルト少量、粘性あり、細砂あり
SD3018	1	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/3	赤褐色	粘性あり、細砂あり
SD3018	1	10YR5/3	赤褐色	に白い黄褐色シルト少量、粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
SD3018	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり
	2	10YR5/2	灰黄褐色	粘性あり、細砂あり

図2 S3007遺構図





SI3009 東西・南北セクション 土層断面表

遺構番号	層番号	土層名	土質	出入方向
P3187	1	2.5Y4/2 緑灰青色	中粒砂・ 粘状質	に濃い黄褐色砂質シルト30%、 粘性強い、締りあり
	2	10YR5/4 に濃い黄褐色	中粒砂・ 粘状質	に濃い黄色粘状砂30%、黒色シルト 少量、粘性あり、締りあり
S3000A	3	2.5Y4/2 緑灰青色	中粒砂・ 粘状質	に濃い黄褐色砂質シルト15%、 粘性やや弱い、締りあり
	4	10YR4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	に濃い黄褐色砂質シルト30%、 粘性やや弱い、締りあり
S3009	5	2.5Y4/2 緑灰青色	中粒砂・ 粘状質	褐色粘状シルト10%、 粘性やや弱い、締りあり
	6	2.5Y4/2 緑灰青色	中粒砂・ 粘状質	土層不連続、褐色粘状シルト 20%、粘性強い、締りあり
S3000	7	10YR3/2 赤褐色	砂質シルト	黄褐色粘状シルト20%、 粘性やや弱い、締りあり
	8	10YR3/2 赤褐色	砂質シルト	に濃い黄褐色砂質シルト15%、 粘性やや弱い、締りあり
S3000A	9	2.5Y4/2 緑灰青色	中粒砂・ 粘状質	に濃い黄褐色砂質シルト30%、 粘性やや弱い、締りあり
	10	10YR4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	に濃い黄褐色砂質シルト15%、 粘性やや弱い、締りあり
S3009	11	2.5Y4/2 緑灰青色	中粒砂・ 粘状質	黄褐色粘10%、 粘性あり、締りあり
	12	10YR3/2 赤褐色	シルト	厚15cm以下の層不連続、褐色粘状質 シルト少量、粘性あり、締りやや硬質

SI3009内ピット 土層断面表

遺構番号	層番号	土層名	土質	出入方向
P3184	1	2.5Y5/4 に濃い黄褐色	砂質シルト -砂	黒色シルト少量、に濃い黄褐色粘状砂 3%、粘性あり、締りやや硬質
	2	10YR3/2 赤褐色	粘状質	に濃い黄褐色粘状砂30%、 粘性やや弱い、締りやや硬質
P3184	3	10YR3/2 赤褐色	砂質シルト	に濃い黄褐色粘状砂30%、 粘性あり、締りあり
	4	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	黒褐色シルト少量、 粘性あり、締りあり
P3185	1	2.5Y4/2 緑灰青色	砂質シルト -砂	黒色シルト少量、に濃い黄褐色粘30%、 粘性あり、締りあり
	2	2.5Y4/2 緑灰青色	砂質シルト -砂	黒色シルト少量、に濃い黄褐色粘30%、 粘性あり、締りあり
P3187	1	2.5Y4/2 緑灰青色	砂質シルト -砂	黒色シルト少量、に濃い黄褐色粘10%、 粘性あり、締りあり
P3188	1	2.5Y4/2 緑灰青色	粘状砂	黒色シルト少量、粘状質粘30%、 粘性あり、締りあり

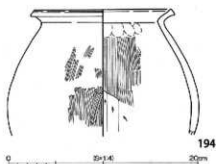
図63 SI3009遺構図

P3185は(0.372m×0.361m-0.337m)、P3186は(0.651m×0.329m-0.274m)である。ピットの形状は、円形もしくは不整楕円形で、P3186のみ浅い落ち込みである。SI3002～SI3006と比べて小規模で柱穴を有さないタイプの可能性もある。どのピットにも礎石は確認できない。壁溝SD3004の幅は東側では60cm前後であるが、西側で80cm幅に広がる。南東側には段があり、テラス状になる。

柱穴埋土・礎石の有無 住居内埋土は褐色砂質シルトを主体とする。ピット・壁溝も砂質シルトもしくはにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする。

遺物出土状況 埋土中・ピット内・壁溝内から土器片29点が出土した。床面上まで攪乱をうけているが、礎と土器片が数点同一平面上に散在する。弥生土器の裏口縁部片2点・裏底部片2点が確認された。実測個体は1点、194は裏の口縁部～体部である。口縁端部に凹線文1条が施され、体部内面上端には指押さの跡が残る。

遺構の性格と帰属時期 竪穴住居跡である。出土遺物から、弥生時代中期後葉とする。



遺物図25 SI3009出土遺物

遺物観察表 25

遺物番号	調査区	遺物番号 (調査番号)	遺物形状	陶器 器種	器 別 類 別	法量 (cm/g)	特 徴	胎土/材質	染 色 層	備 考
194	3	SI3009 (SI324)	25	68	弥生土器 甕	口径:14.2 器高:13.3～ 最大径:20.2	外面:口縁部凹線文1条、口縁部～肩部ナデ、 体部凡存 内面:口縁部ナデ、体部上縁部ナセ、体部ケズ り後上ハヤハ	赤褐色 約2mmの砂粒、 内面:沈殿物 内面:にぶい		

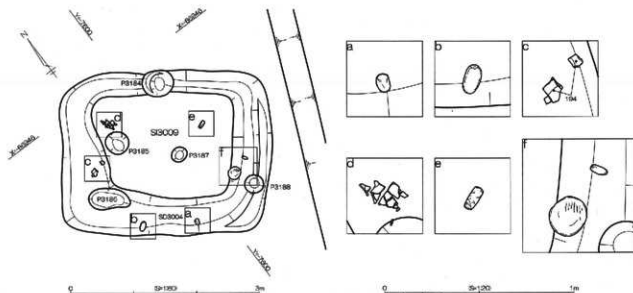


図64 SI3009微細図

#### ■ SI3010(図 65-1・65-2、写真図版 34)

位置 第2面 O7・O8 グリッドに位置する。標高は 44.816m である。Tr.1 に切られる。

検出状況 耕 3001 を除去し、暗褐色砂層～黒褐色砂質シルト層を順次掘り下げながら検出した。ほとんどの柱穴は黒褐色砂質シルト層の上面で確認できたが、壁溝が検出できず、住居跡の範囲がわからなかった。SD3009 は黒色シルト上面まで掘り下げて検出した。壁溝の底面のみが残っている。

軸方向・平面形状・規模 平面形は不整形である。残存長軸 6.349m・短軸 5.846m を測る。断面形は浅い盤形で、壁溝が明瞭に残っている。確認面から床面掘方までの深さは 0.118m である。

主柱穴は 4 基ないし 6 基の組み合わせを想定した。対になるのは P3200-P3210、P3201-P3213、P3204-P3231 である。規模は遺構一覧表に記載するが、平面規模・深さとも一定しない。壁溝 SD3009 が検出できなければ、竪穴住居跡とは認定できなかったと思われる。

柱穴埋土・礎石の有無 遺構内埋土は暗褐色砂質シルト層である。掘方の埋土は、黒褐色砂質シルト層とほぼ同じ、黒褐色砂質シルトを主体とする。いずれの柱穴にも礎石は確認できない。

遺物出土状況 埋土中・ピット内から土器片 55 点が出土した。弥生土器の裏口縁部片 5 点が確認できる。

遺構の性格と帰属時期 竪穴住居跡である。時期は出土遺物から弥生時代中期以降であろう。

#### ■ SI3011(図 66-1・66-2、遺物図 26、遺物観察表 26、写真図版 34・68)

位置 第2面 O6 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.621m である。東側を耕作溝に切られ、南側を Tr.1 に切られる。

検出状況 第1面で検出した洪水砂の暗褐色砂層を人力掘削で除去して黒褐色砂質シルト層を検出した。この段階では SI3011 は曖昧な落ち込みとしか確認できず、竪穴住居跡とは確認できなかった。さらに黒褐色砂質シルト層を 1cm 程度掘り下げ、黒色シルト層上面で再検出をすると、環状にめぐる壁溝が確認でき、柱穴 4 基が四角く配置されていることがわかった。貼床面は消失している。確認面直上は酸化鉄が多く沈着し、硬質に締る。確認面の黒褐色砂質シルト層より砂粒が多い。

軸方向・平面形状・規模・柱穴礎石 平面形は円形である。残存長軸 4.539m・短軸 4.179m を測る。断面形は浅い盤形で、壁溝が明瞭に残っている。確認面から床面掘方までの深さは 0.130m である。SK3023 は中央土坑と思われ、規模は (0.600m × 0.425m-0.226m) を測る。

主柱穴は 4 基が菱形に並んでいる。各ピットの規模(長軸 × 短軸・床面からの深さ)は P3178 は (0.438m × 0.422m-0.370m)、P3181 は (0.316m × 0.296m-0.260m)、P3179 は (0.520m × 0.430m-0.360m)、P3182 は (0.463m × 0.434m-0.308m) である。P3182 は礎石を有する。形状は、4 基とも平面形は円形で、断面形は U 字形もしくは円筒形を示す。P3182 の南側に P3183 が付帯する。P3183 の規模は (0.334m × 0.291m-0.313m) で礎石を有する。礎石を有する柱の脇にもう一つ礎石を備えた柱を設けるパターンは、SI3012 でもみられる。

遺物出土状況 埋土中・ピット内から土器片 71 点が出土した。弥生土器の裏の口縁部片 5 点と同じく底部片 2 点が確認できる。

遺構の性格と帰属時期 竪穴住居跡である。出土遺物から弥生時代中期以降であろう。

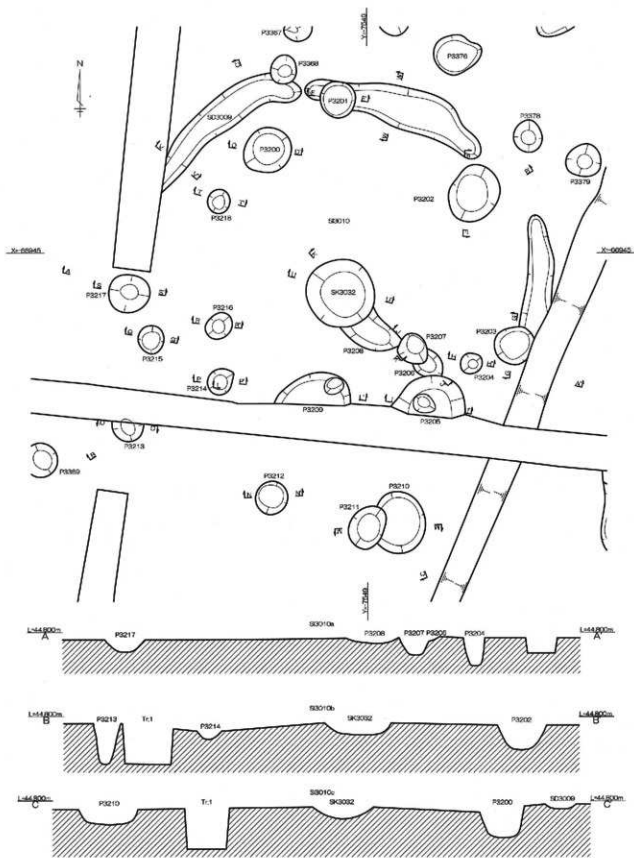
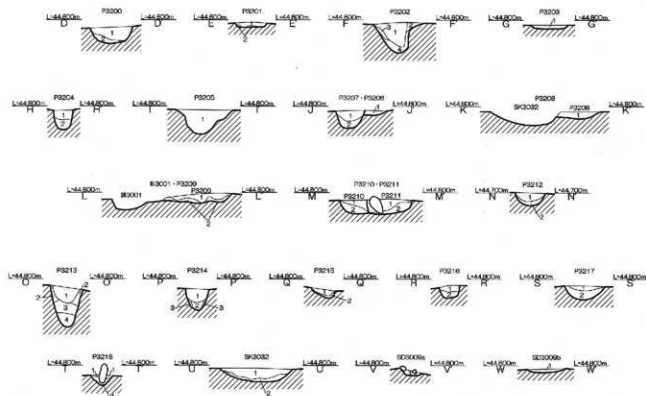


図65-1 SI3010遺構図



SI3010内ピット土質・堤溝土層観察表

連続番号	観測点	JIS notation 土名	土質	記入内容
P2200	1	10YR4/3 にぶい-汚褐色	砂	黒褐色砂質シルト20%、にぶい-黄褐色 緑粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2200	2	10YR2/1 黒色	シルト	にぶい-黄褐色緑粘砂2%、 粘性あり、締りあり
P2201	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	にぶい-黄褐色緑粘砂20%、黒色シルト5%、 粘性あり、締りあり
P2201	2	10YR2/1 黒色	シルト	黒褐色粘砂少量、 粘性あり、締りあり
P2202	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂20%、粘性あり、締りあり
P2202	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2202	3	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂5%、粘性あり、締りあり
P2202	4	10YR2/1 黒色	シルト	黒褐色粘砂10%、灰白色緑粘砂少量、 粘性あり、締りあり
P2203	1	10YR4/3 にぶい-汚褐色	砂	黒褐色砂質シルト20%、にぶい-黄褐色 緑粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2204	1	10YR2/2 黒褐色	砂	黒色シルト2%、灰白色緑粘砂少量、 粘性あり、締りあり
P2204	2	10YR2/1 黒色	シルト	黒褐色粘砂10%、灰白色緑粘砂少量、 粘性あり、締りあり
P2205	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂15%、にぶい-黄褐色緑粘砂 5%、小礫少量、粘性あり、締りあり
P2206	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2207	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂	暗褐色粘砂5%、黒色シルト5%、 粘性あり、締りあり
P2207	2	10YR2/1 黒色	シルト	黒褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2208	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂20%、粘性あり、締りあり
P2209	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂10%、灰白色粘粘砂量、 粘性あり、締りあり
P2210	1	10YR2/2 黒褐色	砂	暗褐色粘砂20%、粘性あり、締りあり
P2210	2	10YR2/1 黒色	シルト	黒褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2211	1	10YR2/2 黒褐色	砂	黒褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2211	2	10YR2/1 黒色	シルト	暗褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり

連続番号	観測点	JIS notation 土名	土質	記入内容
P2212	1	10YR2/3 暗褐色	砂	黒褐色砂質シルト30%、粘性なし、締りあり
P2212	2	10YR2/1 黒色	シルト	黒褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2213	1	10YR2/3 暗褐色	砂	黒褐色砂質シルト20%、黒色シルト 2%、粘性なし、締りあり
P2213	2	10YR2/1 黒色	砂質シルト	黒褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2213	3	10YR2/3 暗褐色	砂	黒色シルト25%、粘性なし、締りあり
P2213	4	10YR2/3 暗褐色	砂	黒色シルト30%、粘性なし、締りあり
P2214	1	10YR2/3 暗褐色	砂	黒色シルト2%、粘性なし、締りあり
P2214	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂10%、黒色シルト15%、 粘性あり、締りあり
P2214	3	10YR2/1 黒色	砂質シルト	黒褐色粘砂20%、粘性やや強い、 締りあり
P2215	1	10YR2/3 暗褐色	砂	黒褐色砂質シルト40%、粘性なし、 締りあり
P2215	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	黒褐色粘砂30%、 粘性あり、締りあり
P2216	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂	にぶい-黄褐色砂質シルト10%、 粘性あり、締りあり
P2216	2	10YR2/1 黒色	シルト	黒褐色粘砂10%、灰白色粘粘砂量、 粘性あり、締りあり
P2217	1	10YR2/3 暗褐色	砂	黒色シルト2%、粘性あり、締りあり
P2217	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
P2218	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	直径30mm程度の礫あり、にぶい-黄褐色 粘粘砂5%、灰白色小礫少量、粘性 やや強い、締りあり
P2218	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
SK3001	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	にぶい-黄褐色砂質シルト10%、 暗褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
SK3002	1	10YR2/1 黒色	シルト	黒褐色粘砂10%、粘性あり、締りあり
SK3009	1	10YR2/3 暗褐色	砂	赤土層片あり、小礫あり、黒褐色砂質 シルト10%、粘性なし、締りやや硬質
SK3009	2	10YR2/3 暗褐色	砂	赤土層片あり、小礫あり、黒褐色砂質 シルト50%、粘性あり、締りやや硬質

図65-2 SI3010遺構図

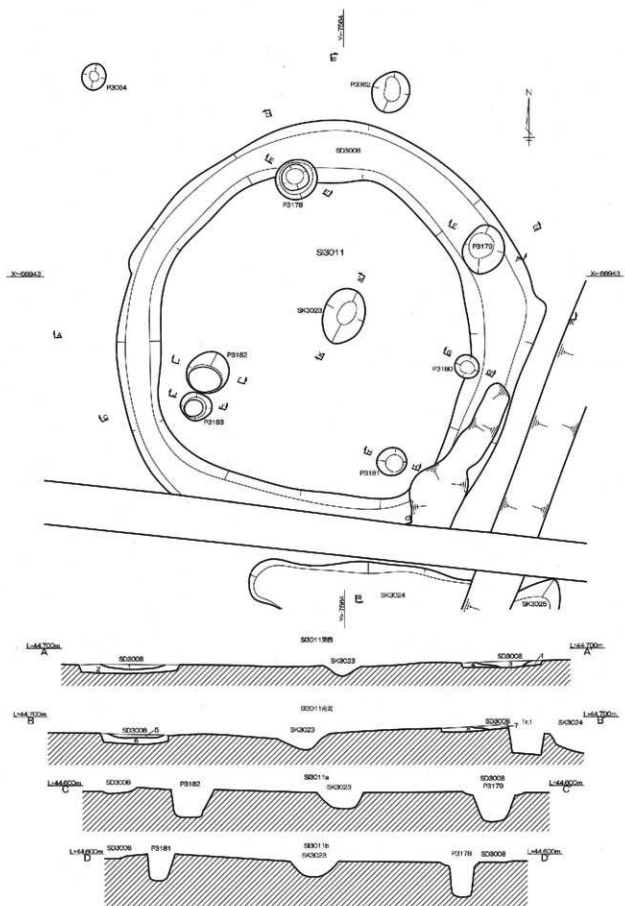
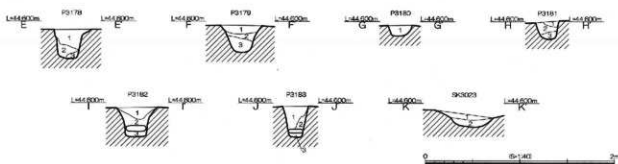


图66-1 SI3011遺構図





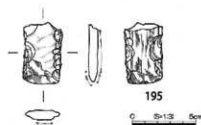
SI3011 東西・南北セクション土層観察表

遺構番号	層番号	JIS notation 土名	土性	記入内容
SK3008	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂質シルト50%。粘性なし。礫あり
	2	10YR2/1 黒色	シルト	黒色土層。粘性あり。礫やや硬質
SK3009	3	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂質シルト50%。粘性なし。礫あり
	4	10YR2/1 黒色	シルト	黒色土層。粘性あり。礫やや硬質
SK3008	5	10YR3/1 黒褐色	シルト	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂50%。粘性なし。礫や硬質
	6	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	黒色土層。粘性あり。礫やや硬質
SK3008	7	7.5YR3/1 黒褐色	砂	磁化濃沈着。磁鉄粉・中粒砂混在。 粘性なし。礫あり
SK3008	8	7.5YR2/1 黒色	シルト	黒色土層。磁化濃沈着。 粘性あり。礫あり

SI3011内ピット土層観察表

遺構番号	層番号	JIS notation 土名	土性	記入内容
SK3023	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂10%。粘性なし。礫あり
	2	10YR2/1 黒色	砂質シルト	黒褐色シルト10%。粘性あり
P3178	1	7.5YR3/2 黒褐色	砂	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂10%。粘性なし。礫あり
P3178	2	7.5YR3/1 黒褐色	砂質シルト	粘性あり。礫やや硬質
P3178	3	10YR2/1 黒褐色	シルト	粘性あり。礫やや硬質
P3178	1	7.5YR3/2 黒褐色	砂	磁鉄粉・中粒砂混在。 粘性なし。礫あり
	2	7.5YR3/1 黒褐色	砂	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂10%。粘性なし。礫あり
P3181	1	7.5YR3/2 黒褐色	砂	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂10%。粘性なし。礫あり
	2	7.5YR3/1 黒褐色	砂質シルト	粘性あり。礫やや硬質
P3181	3	10YR2/1 黒褐色	シルト	粘性あり。礫やや硬質
P3182	1	7.5YR3/2 黒褐色	砂	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂50%。粘性なし。礫あり
	2	7.5YR3/1 黒褐色	砂質シルト	中粒砂50%。粘性あり。 礫やや硬質
P3182	3	10YR2/1 黒褐色	シルト	粘性あり。礫やや硬質
	4	7.5YR3/2 黒褐色	砂	磁鉄粉・中粒砂混在。に深い黄褐色 砂10%。粘性なし。礫あり
P3183	1	7.5YR3/1 黒褐色	砂質シルト	粘性あり。礫やや硬質
	2	10YR2/1 黒褐色	シルト	粘性あり。礫やや硬質

図66-2 SI3011遺構図



遺物図26 SI3011出土遺物

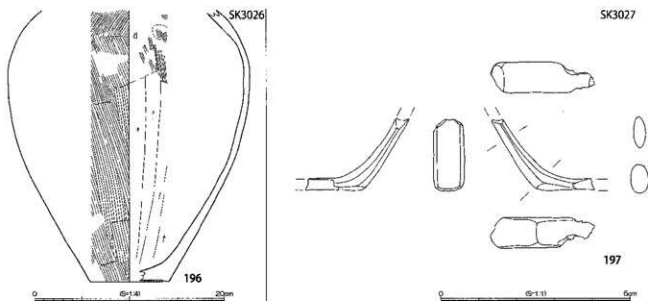
遺物観察表 26

遺物 番号	調査区 区	遺構番号 (調査番号)	遺物 番号	図版 番号	種別 器種	質量(g)	特徴	粘土/材質	焼成 温度	備考
195	3	SI3011 (3090)	20	68	石 器 石 片	長さ:4.85~ 幅:3.0 厚さ:0.7 重さ:18.0	角形。刃部・断面に破損あり 両側面に細かい割線あり 表面に自然面残る 厚み	頁岩	灰	

■ S13012(図 67-1・67-2、遺物図 27、遺物観察表 27、巻頭図版 6、写真図版 35・68)

位置 第 2 而 P6 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.547m である。

検出状況 圃場整備の整地層を除去した段階で暗褐色砂質シルト層が検出され、これを人力掘削で除去して黒褐色シルト層を検出した。この検出段階で、銅銅片(197)が出土した。出土地点は、P2 グリッド下の SK3027 内である。洪水性堆積層と推定した暗褐色砂層(〜にぶい黄褐色砂質シルト層)を人力掘削して、SK3027 の範囲をしぼりこみ、黒色シルト層上面で遺構検出をおこなった段階で見つかった。SK3027 のすぐ西側に SK3027 に切られる SK3026 があり、この遺構に弥生時代中期の裏片がつか



遺物図27 S13012内SK3026-SK3027出土遺物

遺物観察表 27

遺物番号	調査区	遺構番号(掘削番号)	遺物ID番号	採取ID番号	層別器種	法量 (cm/g)	特徴	出土/材質	染色/表面	備考
196	3	S13012内SK3026(3065)	27	68	弥生土器 甕	器高 25.7 一 最大径 (2.54) 器厚 0.53	外底: 底部ハケ、底部ナデ 内底: 底部ハケ、底部ナデ、器底ナデ	口道 → 0.5mmの突起 再隆	口道 外周: 輪 内周: 輪	片断保存者
197	3	S13012内SK3027(3064)	27	68	青銅製 有脚銅鏡	高さ 27.0 幅 0.8 厚さ 0.55 重さ 5.3	空出し成型 表面ミガキ		外周: オリーブ黒 内周: オリーブ黒 断面: 灰	

S13012 ヒットト坑 土層観察表

調査番号	掘削区	層別器種	土色	遺人物種
P3193	1	7.5YR4/3 褐色 シルト	砂質 シルト	柱状、褐色砂中にぶい暗褐色砂少量、粘性あり、締りあり
P3193	2	10YR3/3 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状、褐色砂中にぶい暗褐色砂少量、粘性あり、締りあり
P3193	3	10YR2/1 黒色 シルト	粘土質 シルト	柱状あり、締りあり
P3193	4	10YR2/1 黒色 シルト	粘土質 シルト	柱状あり、締りあり
P3194	1	7.5YR4/3 褐色 シルト	砂質 シルト	柱状、褐色砂中にぶい暗褐色砂少量、粘性あり、締りあり
P3194	2	10YR3/3 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
P3194	3	10YR2/1 黒色 シルト	粘土質 シルト	柱状あり、締りあり
P3194	4	10YR3/2 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
P3194	5	10YR2/1 黒褐色 シルト	粘土質 シルト	柱状あり、締りあり
P3195	1	7.5YR4/2 褐色 シルト	砂質 シルト	柱状、褐色砂中にぶい暗褐色砂少量、粘性あり、締りあり
P3195	2	7.5YR3/3 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
P3195	3	7.5YR2/1 黒褐色 シルト	粘土質 シルト	柱状あり、締りあり

調査番号	掘削区	層別器種	土色	遺人物種
P3196	1	2.5Y4/1 黄褐色 シルト	砂質 シルト	柱状、褐色砂中にぶい暗褐色砂少量、粘性あり、締りあり
P3196	2	10YR1/1 黒色 シルト	粘土質 シルト	柱状あり、締りあり
P3197	1	10YR5/3 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
P3197	2	10YR4/2 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
P3197	3	10YR3/1 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
P3198	1	10YR3/3 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
SK3026	1	10YR4/2 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
SK3027	1	10YR2/2 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
SK3028	1	10YR3/3 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
SK3029	1	10YR4/2 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり
SK3029	2	10YR3/2 暗褐色 シルト	砂質 シルト	柱状あり、締りあり

図67-1 S13012遺構図

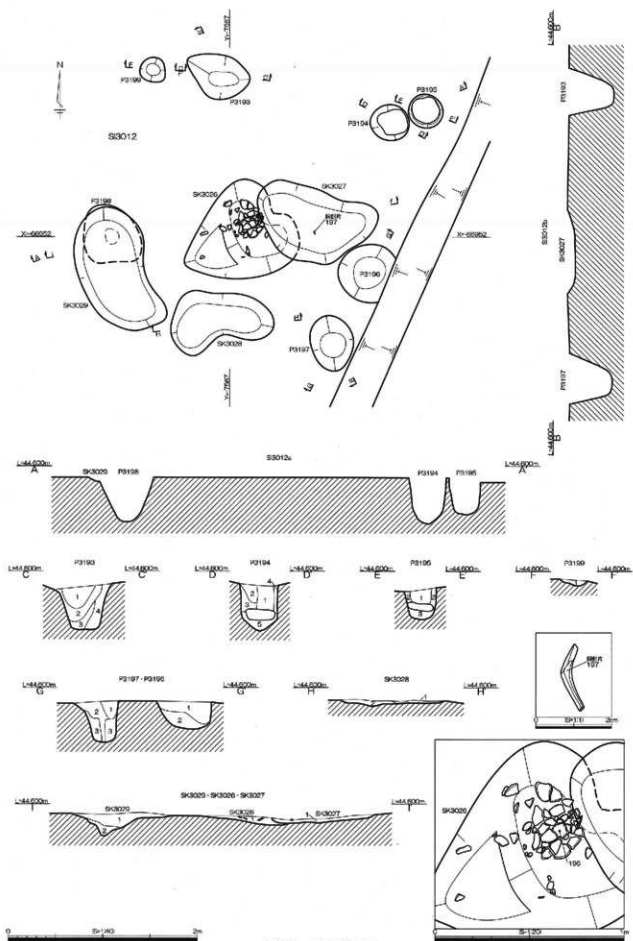


図67-2 SI3012遺構図

ぶれながらも残っていた。SK3026 内には焼成粘土粒と炭化物粒が少量検出され、竪穴住居跡の中央土坑の可能性が想定されたため、周辺の再精査をおこなった。その結果、SK3026 を中心に 4 基の柱穴と他に 2 基の柱穴が見つかり、竪穴住居跡の残骸であると確認された。ただし、竪穴住居の掘方・壁溝・貼床は見つからなかった。直上の暗褐色砂層が幅 15m 程度で流路状に堆積していたため、大雨・洪水等による自然流路の埋没土とみられ、SI3012 の床面は流失したものと思われる。

**平面形状・規模・付帯施設** 竪穴住居跡の平面形は円形であったと推定される。残存長軸は柱穴の上端部の距離で測って、長軸 4.260m、短軸 3.850m を測る。掘方及び床面・壁溝は残っていない。

SK3026 は中央土坑と推定できる。規模は (1.222m × 1.035m-0.139m) で、焼土粒と炭化物と共に、弥生時代中期中葉の裏片が出土している。SK3026 の東側に SK3027 がある。SK3027 は SK3026 を切り、直上を攪乱に切られる。SK3027 の規模は (1.350m × 0.755m-0.073m) である。主柱穴は 4 基が菱形に並んでいる。各ピットの規模 (長軸 × 短軸・床面からの深さ) は P3193 が (0.689m × 0.477m-0.569m)、P3197 が (0.588m × 0.456m-0.448m)、P3194 が (0.407m × 0.382m-0.464m)、P3198 が (残存長軸 0.644m × 残存短軸 0.590m-0.470m) である。形状は、4 基とも平面形は円形で、断面形は U 字形もしくは円筒形を示す。P3194 は礎石を有する。P3194 の北側には P3195 があり、規模は (0.362m × 0.358m-0.444m) と P3194 に比べてやや小型で、やはり礎石を有する。礎石を有する柱が補助柱穴をもつパターンは、SI3011 でもみられる。

**柱穴埋土・土坑埋土** 遺構内埋土は暗褐色砂質シルト層もしくは暗褐色砂である。中央土坑付近はにぶい黄褐色砂を多く含む。

**遺物出土状況** 住居範囲内から 48 点の上器片と 1 点の青銅製品が出土した。SK3026 からは、196 として掲載した弥生時代中期の裏体部～底部のほか、16 点の弥生土器片が出土した。うち 1 点は高坏の口縁部破片である。SK3027 からは弥生土器片 8 点の他、青銅製の銅剣 197 が出土した。屈曲部の形状と平坦面の作り方から有鉤銅剣の破片と思われる。有鉤銅剣の出土例は非常に少なく、鳥取・島根で過去に報告例はなく、全国的にみても 30 遺跡、80 点目となる貴重な資料である。有鉤銅剣はゴホウラガイの貝輪に起源をもつ腕輪であり、弥生時代中期から古墳時代にかけて作られたもので、集落内において特別な地位の者が所有していたとされる。

**遺構の性格と所属時期** 竪穴住居跡である。中央土坑出土の上器等から、弥生時代中期後葉と推定される。

### ■ 3 区第 2 面 木棺墓 SX3001 ～ SX3004 (巻頭図版 4、写真図版 37・38)

3 区中央北寄りの N10・11、O10・11 グリッドに 4 基の木棺墓 SX3001 ～ SX3004 が検出された。上面がほとんど削平されており、深さ 10 ～ 15cm 程度が残される。

石棺材等は全く残っておらず、非常に細長い棺のプランであったため、木棺墓と推測した。埋土の状況のみを限り、棺部の際がまっすぐに切り立つものは少なく、掘方部分に板材等を組み込んだ痕跡もなく、逆に丸い立ち上がりが目につく。このため組み合わせ式木棺や箱式木棺ではなく、舟形木棺の可能性を考慮した。木棺本体が残っていないため、確定的とはいえないが、可能性の一つとして指摘しておく。

時代は弥生時代後期以降と指摘できる。SX3003 から水晶製小玉が出土したのが唯一の副葬品であり、他は表土中からの混入と思われる弥生土器片である。水晶製小玉はそのほとんどが小型の算盤玉

形である。弥生時代後期以降の可能性がある。

■ SX3001(図 68、写真図版 37・38)

位置 第2面中央北側のN10グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.802mである。現在は削られて残っていないが、もとの地表面は1m近く高かったものと思われる。

検出状況 圃場整備の際の整地層を除去した段階で黒色土層(3-8層)を検出した。この面でプラン精査をおこなったところ、隅丸長方形の掘方と、その中に短冊形の木棺跡を検出された。同様のプランが周辺で3基みづかり(SX3004は後にトレンチ調査で確認)、墓坑としてSXの記号を付した。

平面形状・軸方向・規模 掘方の平面形は隅丸長方形で、長軸1.866m・短軸0.928m、確認面からの深さ0.101mである。断面形は盤形を呈する。軸方向は、E-36°Sをふる。

埋土 埋土は5層に区分した。1・2層が木棺部の埋土、3～5層が掘方の埋土である。1・2層は黒褐色シルト主体で、暗褐色砂質シルトを含み、やや粘性が強い。3・4・5層は暗褐色砂質シルトを主体とし、5層には砂粒を多く含む。

遺物出土状況 土器細片を微量含む。遺構内から副葬品等は確認できず、木棺部内埋土をすべて採取し水洗して微細遺物を探したが、遺物は検出されなかった。

遺構の性格と帰属時期 木棺墓である。舟形木棺墓の可能性があり、時期はSX3003と同じ弥生時代後期以降と推測される。

■ SX3002(図 68、写真図版 37・38)

位置 第2面中央北側のN11グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.760mである。

検出状況 SX3001と同様、黒色土層(3-8層)の面で、隅丸長方形の掘方と、その中の短冊形の木棺跡を検出した。

平面形状・軸方向・規模 掘方の平面形は隅丸長方形で、長軸2.287m・短軸1.085m、確認面からの深さ0.125mである。断面形は盤形を呈する。軸方向は、E-2°Nをふる。

埋土 埋土は5層に区分した。1～3層が木棺部の埋土、4～6層が掘方の埋土である。1・2層は黒褐色砂質シルト主体、3層は黒色シルト主体である。やや暗褐色系の色調の砂質シルトが混在する。4～6層は黒褐色砂質シルトを主体とする。いずれも暗褐色砂を少量含む。暗褐色砂は黒色土直下の漸移層由来の土である。

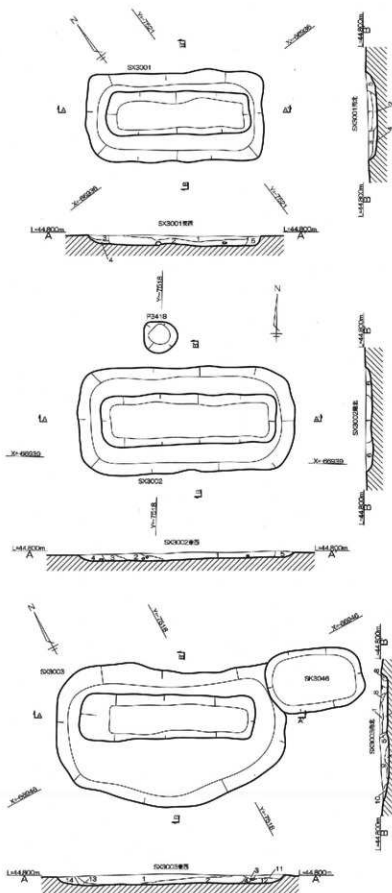
遺物出土状況 土器細片を微量含む。遺構内から副葬品等は確認できず、木棺部内埋土をすべて採取し水洗して微細遺物を探したが、遺物は検出されなかった。

遺構の性格と帰属時期 木棺墓である。舟形木棺墓の可能性があり、時期はSX3003と同じ弥生時代後期以降と推測される。

■ SX3003(図 68、遺物図 28、遺物観察表 28、巻頭図版 6、写真図版 37・38・69)

位置 第2面中央北側のO11グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.798mである。東端部をSK3046に切られる。

検出状況 SX3001と同様、黒色土層(3-8層)の面で、隅丸長方形の掘方と、その中の短冊形の木棺跡を検出した。



SX3001 土層断面表

層番号	Stratation 土色名	土性	混入物等
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	木屑混、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 15%、粘土やや強い、腐りあり
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	木屑混、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 5%、小礫少量、粘性あり、腐りあり
3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層方、7.5YR4/6(黄褐色)砂質シルト 10%、粘性あり、腐りあり
4	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層方、7.5YR4/6(黄褐色)砂質シルト 10%、粘性あり、腐りあり
5	10YR3/3 暗褐色	砂・砂質 シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)シルト30%、 粘性あり、腐りあり

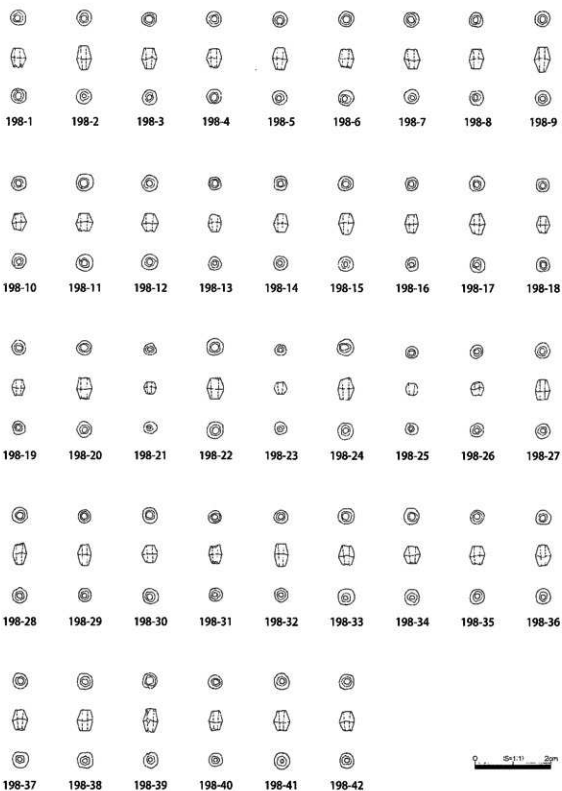
SX3002 土層断面表

層番号	Stratation 土色名	土性	混入物等
1	10YR2/1 黒褐色	シルト	木屑混、10YR2/2(黒褐色)砂質シルト 20%、小礫少量、粘性あり、腐りあり
2	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	木屑混、10YR3/2(黒褐色)砂質シルト 5%、小礫少量、粘性あり、腐りあり
3	10YR2/1 黒褐色	シルト	木屑混、10YR2/3(暗褐色)砂質シルト 5%、小礫少量、粘性あり、腐りあり
4	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性やや強い、腐りあり
5	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂11%、 粘性やや強い、腐りあり
6	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂11%、 粘性やや強い、腐りあり

SX3003 土層断面表

層番号	Stratation 土色名	土性	混入物等
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	木屑混、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性やや強い、腐りあり
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	木屑混、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性やや強い、腐りあり、層土の 木屑混等が水基を主とし、粘結
3	10YR3/1 黒褐色	シルト	木屑混、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性やや強い、腐りあり
4	10YR3/1 黒褐色	シルト	木屑混、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性やや強い、腐りあり
5	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	木屑混、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性やや強い、腐りあり
6	10YR4/1 褐色	砂質シルト	木屑混、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 10%、粘性やや強い、腐りあり
7	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層方、10YR3/1(黒褐色)シルト30%、 粘性あり、腐りあり
8	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 10%、粘性やや強い、腐りあり
9	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 10%、粘性やや強い、腐りあり
10	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層方、10YR3/6(黄褐色)砂15%、 粘性あり、腐りあり
11	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性やや強い、腐りあり
12	10YR2/1 黒褐色	シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト4%、 粘性やや強い、腐りあり
13	10YR2/1 黒褐色	シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト4%、 粘性やや強い、腐りあり
14	10YR4/1 褐色	シルト	層方、10YR3/3(暗褐色)砂質シルト4 15%、粘性やや強い、腐りあり

図68 SX3001・SX3002・SX3003遺構図



遺物図28 SX3003出土遺物

遺物観察表 28(SX3003 出土水晶製小玉法量一覽表)

遺物 No.	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	遺物 No.	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	遺物 No.	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)
198-1	算盤玉形	0.49	0.40	0.1	198-15	算盤玉形	0.55	0.41	0.1	198-29	算盤玉形	0.57	0.35	0.1
198-2	算盤玉形	0.64	0.40	0.1	198-16	算盤玉形	0.48	0.35	0.1	198-30	算盤玉形	0.47	0.41	0.1
198-3	算盤玉形	0.57	0.40	0.1	198-17	算盤玉形	0.53	0.42	0.1	198-31	算盤玉形	0.49	0.35	0.1
198-4	算盤玉形	0.50	0.40	0.1	198-18	算盤玉形	0.47	0.38	0.1	198-32	算盤玉形	0.59	0.36	0.1
198-5	算盤玉形	0.56	0.39	0.1	198-19	算盤玉形	0.42	0.34	0.1	198-33	算盤玉形	0.52	0.42	0.1
198-6	算盤玉形	0.49	0.40	0.1	198-20	算盤玉形	0.57	0.41	0.1	198-34	算盤玉形	0.49	0.42	0.1
198-7	算盤玉形	0.54	0.40	0.1	198-21	算盤玉形	0.51	0.35	0.1	198-35	算盤玉形	0.50	0.40	0.1
198-8	算盤玉形	0.50	0.39	0.1	198-22	算盤玉形	0.56	0.46	0.15	198-36	算盤玉形	0.56	0.40	0.1
198-9	算盤玉形	0.62	0.40	0.1	198-23	丸形	0.21	0.23	0.1	198-37	算盤玉形	0.54	0.43	0.1
198-10	算盤玉形	0.46	0.39	0.1	198-24	算盤玉形	0.58	0.42	0.1	198-38	算盤玉形	0.53	0.42	0.1
198-11	算盤玉形	0.47	0.46	0.1	198-25	丸形	0.34	0.35	0.1	198-39	算盤玉形	0.60	0.40	0.2
198-12	算盤玉形	0.43	0.42	0.1	198-26	算盤玉形	0.39	0.38	0.1	198-40	算盤玉形	0.52	0.35	0.1
198-13	算盤玉形	0.48	0.34	0.1	198-27	算盤玉形	0.55	0.40	0.1	198-41	算盤玉形	0.54	0.42	0.1
198-14	算盤玉形	0.48	0.30	0.1	198-28	算盤玉形	0.55	0.40	0.1	198-42	算盤玉形	0.52	0.37	0.1

平面形状・軸方向・規模 掘方の平面形は隅丸長方形で、長軸 2.415m・短軸 1.410m、確認面からの深さ 0.139m である。断面形は盤形を呈する。南側の掘方が広がりがみになる。軸方向は、E-29°-S をふる。

埋土 埋土は 14 層に区分した。埋土は 1～6 層が木棺部の埋土、7～14 層が掘方の埋土である。1～4 層は黒褐色シルトを主体とし、5 層は黒褐色砂質シルト、6 層は褐灰色砂質シルトを主体とする。7～11 層は暗褐色砂質シルト主体であり、砂の含有がやや多い。12・13 層が黒色シルト主体、14 層が褐灰色シルト主体である。

遺物出土状況 遺構内から副葬品等は確認できず、木棺部内埋土をすべて採取し水洗選別して微細遺物を探した。その結果、水晶製小玉 42 点 (198-1～198-42) を検出した。水洗用の埋土採取は木棺部内を 4 分割し、北東・南東・南西・北西に分けておこなった。水晶製小玉が出上したのはこのうち北東・南東の 2 箇所であり、西側半分からは出上らなかった。この水晶製小玉が首飾りであったとするなら、被葬者は東に頭を向けて葬られたことになる。水晶製小玉はいずれも小型で 40 点は胴部がやや張り出した稜線を有するいわゆる算盤玉形である。

遺構の性格と所属時期 木棺墓である。舟形木棺墓の可能性もある。時期は弥生時代後期以降と推測する。

#### ■ SX3004 (図 69、写真図版 38)

位置 第 2 面中央北側の N10・O10 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.702m である。

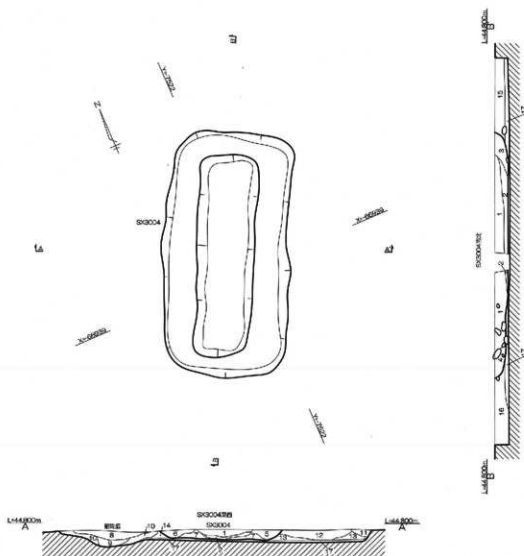
検出状況 SX3001 と同様、黒色土層 (3-8 層) の面で精査したが、後世の植物根の影響により、墓の掘方範囲が不明であった。このため、細長い十字トレンチを掘削して、断面を観察し、遺構範囲を絞り込んだ。

平面形状・規模・軸方向 掘方の平面形は隅丸長方形で、長軸 2.605m・短軸 1.326m、確認面からの深さ 0.074m である。断面形は盤形を呈する。軸方向は、E-63°-N をふる。

埋土 埋土は 7 層に区分した。埋土は 1・2 層が木棺部の埋土、3～7 層が掘方の埋土である。1・2 層は黒褐色シルトを主体とし、暗褐色砂質シルトを少量含む。3・4 層は黒褐色シルト主体、5～7 層は黒褐色砂質シルト主体である。

遺物出土状況 弥生土器片を少量含む。遺構内から副葬品等は確認できず、木棺部内埋土をすべて採取し水洗して微細遺物を探したが、遺物は検出されなかった。





SX3004 土層観察表

観測号	土層番号	土質	層人物考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	本層部、10YR2/2(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性中~強い、締りあり
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	本層部、10YR2/2(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性中~強い、締りあり
3	10YR3/1 黒褐色	シルト	緩方、10YR2/2(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性中~強い、締りあり
4	10YR3/1 黒褐色	シルト	緩方、10YR2/2(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性中~強い、締りあり
5	10YR4/1 灰褐色	砂質シルト	緩方、10YR3/2(暗褐色)砂質シルト 20%、灰色軟弱土、粘性あり、締りあり
6	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	緩方、10YR3/2(暗褐色)砂質シルト 15%、粘性中~強い、締りあり
7	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	緩方、7.5YR4/2(暗褐色)砂質シルト 30%、粘性あり、締りあり
8	10YR2/1 黒色	シルト	緩物土、10YR2/1(暗褐色)砂質シルト 19%、粘性中~強い、締りあり
9	10YR3/1 黒褐色	シルト	緩物土、小礫少量、黒褐色中~粘律- 粘粒砂30%、粘性中~強い、締りあり

観測号	土層番号	土質	層人物考
10	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	緩物土、10YR4/2(灰黄褐色)砂質シルト 10%、粘性中~強い、締りあり
11	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	黒色土~薄砂層、10YR2/2(暗褐色)砂 質シルト4~15%、粘性中~強い、締りあり
12	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	黒色土~薄砂層、10YR2/2(暗褐色)砂 質シルト4~15%、粘性中~強い、締りあり
13	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	黒色土~薄砂層、10YR2/2(暗褐色)砂 質シルト4~15%、粘性中~強い、締りあり
14	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	黒色土~薄砂層、10YR2/2(暗褐色)砂 質シルト4~15%、粘性中~強い、締りあり
15	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	黒色土~薄砂層、小礫少量、10YR4/4 (褐色)粘り強、粘性中~強い、締りあり
16	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	黒色土~薄砂層、小礫少量、15層より 締り強い、粘性あり、締りあり
17	7.5YR4/4 褐色	砂-粘	黒色粘り層、正厚2~15cm程度の 少量、粘性弱、締り緩弱

図69 SX3004遺構図



遺構の性格と帰属時期 木棺墓である。舟形木棺墓の可能性ある。時期はSX3003と同じ弥生時代後期以降と推測される。

### ■ 3区第2面土坑 SK3003～SK3056

3区第2面から、43基の土坑が検出された。このうち、SK3003・SK3007・SK3008・SK3009・SK3010・SK3013・SK3020・SK3039・SK3042・SK3043・SK3044・SK3045・SK3046・SK3047・SK3048・SK3049・SK3055・SK3056の18基の遺構についてここで述べる。

#### ■ SK3003(図70、遺物図29、遺物観察表29、写真図版39・69)

位置 第2面南西側のO2グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.211mである。SI3009竪穴住居跡の南側に検出された。

検出状況 圃場整備の際の整地層を除去したところで、色調の明るいぶい黄褐色砂層を検出された。このぶい黄褐色砂層を切る遺構として暗褐色砂質シルトのプランが検出され、表面に弥生土器片が検出された。

平面形状・規模 平面形は楕円形で、長軸0.751m・短軸0.665mを測る。断面形はU字形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.091mである。

埋土 埋土は暗褐色砂である。黄灰色砂粒を微量含む。

遺物出土状況 弥生土器の裏はぼ1個体全体の破片と、それと別個体の弥生土器裏の部分片1点が破砕された状態で検出された。弥生土器の裏が原型をとどめた状態で検出されたため、土器棺墓の可能性が指摘できる。

遺構の性格と帰属時期 規模はやや小型であるが出土遺物を考慮して土坑とする。土器棺墓、もしくは廃棄土坑が想定できる。

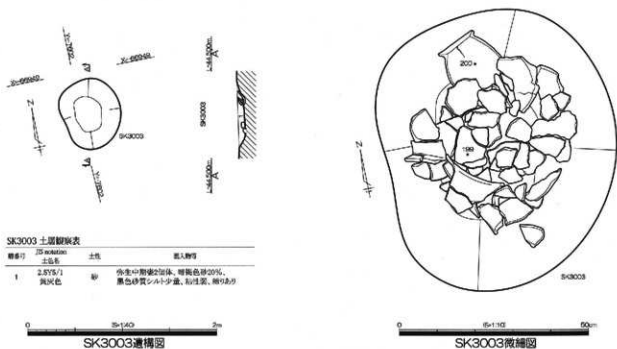
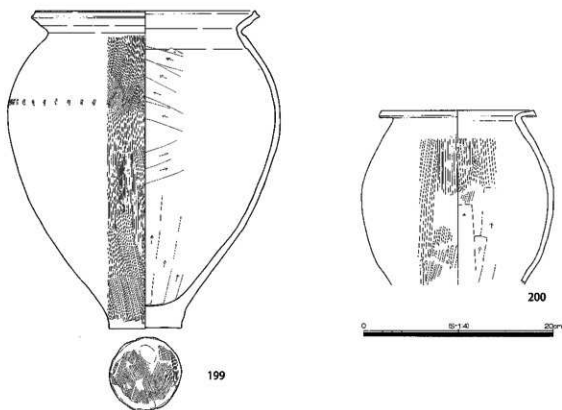


図70 SK3003遺構図・微縮図



遺物図29 SK3003出土遺物

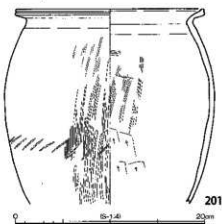
遺物観察表 29

遺物番号	調査区	遺物番号 (調査区)	遺物深さ (cm)	層別 番号	層別 名称	法量 (cm/g)	特徴	胎土/材質	焼成 色	備考
199	3	SK3003 (3004)	20	09	赤土層 壁	1口徑:23.0 胴高:33.5 最大径:28.0 底径:16.0	外周:1口縁部~胴部ナデ、体部ハケ微顆粒陶文、 底面ハケ 内面:口縁部~胴部ナデ、体部ナデ、表面ナデ	雑造 ~3mmの砂粒、 多い	やや灰掛 外周:灰掛 内面:洗灰造	
200	3	SK3003 (3004)	29	09	赤土層 底	1口徑:18.0 胴高:18.4 最大径:20.2	外周:口縁部~胴部ナデ、体部上平ハケ、 内面:1口縁部~胴部ナデ、体部上平ハケ、体部下 ナデナリ	雑造 ~3mmの砂粒、 少量	汚濁 外周:に濃い黄 内面:に濃い黄	

■ SK3007 (図 71、遺物図 30、遺物観察表 30、写真図版 39・69)

位置 第2面西側のN3・O3グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.361mである。SI3003 竪穴住居跡を切る。SI3004 竪穴住居跡の南西側にあるSK3008を切る。P3271・P3272・P3273に切られる。暗渠排水に切られる。

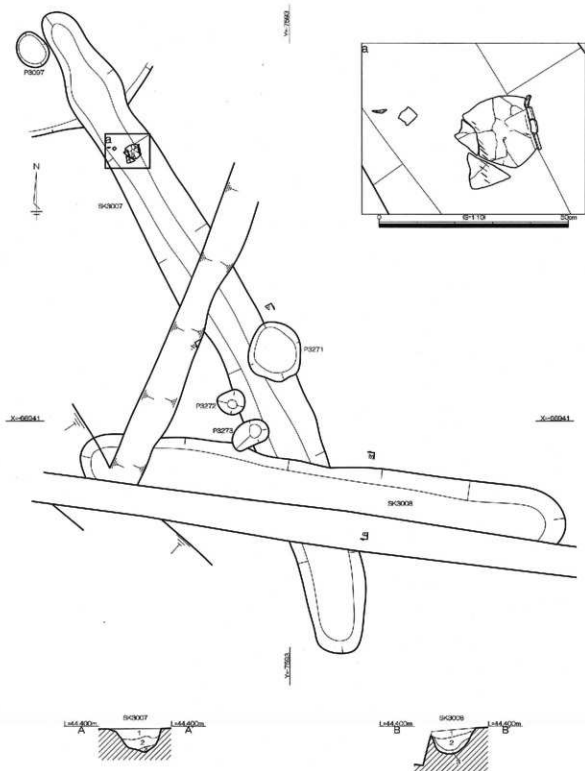
検出状況 洪水砂の堆積層とみられる暗褐色砂層を人力掘削で除去し、黒褐色砂質シルト層上を精査した際に検出された。南側をSK3008に切られる。



遺物図30 SK3007出土遺物

遺物観察表 30

遺物番号	調査区	遺物番号 (調査区)	遺物深さ (cm)	層別 番号	層別 名称	法量 (cm/g)	特徴	胎土/材質	焼成 色	備考
201	3	SK3007 (3004)	30	09	赤土層 底	1口徑:19.4 胴高:20.6	外周:口縁周部凹線文1本、1口縁部~胴部ナデ、 体部ハケ、体部のハケは下部で押付きに より刻文文様 内面:1口縁部~胴部ナデ、体部上平ハケ、体部下 平ナデナリ	雑造 ~2mmの砂粒、 少量	汚濁 外周:に濃い黄 内面:に濃い黄	



SK3007 土層観察表

観察号	剖面 土層名	土性	採入物等
1	10V14/1 黒褐色	砂質シルト	弥生中期の土器あり、暗褐色砂少量、 炭化木炭末、動物骨、網り破片
2	10V18/1 にじみ黄褐色	砂質シルト	弥生土器片微量、暗褐色砂少量、 炭化木炭末、動物骨、網りやや破片
3	10V12/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂微量、褐色砂微量、 動物骨、網りやや破片

SK3008 土層観察表

観察号	剖面 土層名	土性	採入物等
1	10V15/2 灰黄褐色	砂質シルト	弥生中期の土器微量、暗褐色砂少量、 炭化木炭末、動物骨、網り破片
2	10V15/1 黒灰色	砂質シルト	弥生土器片微量、暗褐色砂少量、 炭化木炭末、動物骨、網りやや破片
3	10V12/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂微量、褐色砂微量、 動物骨、網りやや破片

図71 SK3007・SK3008微細図

0 5-100 20

**平面形状・規模** 平面形は溝状で、北西から南東へ細長く直線的に延びる。長軸 9.318m・短軸 0.873mを測る。断面形は逆台形で、確認面から底面までの深さは 0.281mである。壁面調整痕は確認できない。

**埋土** 埋土は3層に区分される。1層は黒褐色砂質シルト主体で、暗褐色砂を少量含む。弥生土器片は1層からの出上が多い。2層はにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする。弥生土器片は微量である。3層は黒褐色砂質シルトを主体とする。

**遺物出土状況** 弥生土器片 65点が出上した。ほとんどは甕体部の破片で、1点のみ壺の口縁部がある。遺物図 30 の 201 は弥生時代中期後葉の甕で、口縁端部に凹線文 1条をめぐらす。201 の体部外面下半部には、右上がりの刺突文が施される。この刺突文は一見、貝殻腹縁による横方向の連続刺突文のように見えるが、縦方向のハケ調整の際に、ハケ先を体部に押しつけることにより、施したものと考えられる。

**遺構の性格と帰属時期** 溝状の土坑である。出土遺物から弥生時代中期後葉と推測する。

#### ■ SK3008(図 71、写真図版 39)

**位置** 第2面南西側の O3・O4 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.377m である。西側を掘込に切られる。南側を Tr.1 に切られる。

**検出状況** 洪水砂の堆積層とみられる暗褐色砂層を人力削削で除去し、黒褐色砂質シルト層上を精査した際に検出された。南北に延びる SK3007 を切る。

**平面形状・規模** 平面形は東西に細長い溝状で、長軸 6.475m・幅 0.689m を測る。断面形はほぼ逆台形で、確認面からの遺構底面までの深さは 0.322m である。

**埋土** 埋土は3層に区分される。1層は灰黄褐色砂質シルトを主体とし、砂粒がやや多く、弥生土器片を微量と炭化物を微量含む。2層は褐灰色砂質シルトを主体とし、炭化物を微量含む。3層は黒褐色砂質シルトを主体とする。

**遺物出土状況** 弥生土器片 56点が出上した。ほとんどが甕の細片で、2点が壺の口縁部破片である。うち1点の口縁端部に擬凹線文が施される。

**遺構の性格と帰属時期** 溝状の土坑である。土器片から弥生時代中期以降と推測される。

#### ■ SK3009(図 72)

**位置** 第2面南西側の P2・P3 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.314m である。

**検出状況** 竪穴住居跡 SI3001 の検出面である黄褐色砂層面の精査中に確認された。SI3001 との同時期のものかは判断できない。

**平面形状・規模** 平面形は細長い溝状で、長軸 5.681m・短軸 0.674m を測る。断面形は浅い U 字形で、確認面からの遺構底面までの深さは 0.101m である。

**埋土** 埋土は褐色砂を主体とし、にぶい黄褐色砂、褐灰色砂質シルトを含む。

**遺物出土状況** 弥生土器片 6点が出上した。いずれも細片でまとまりがない。

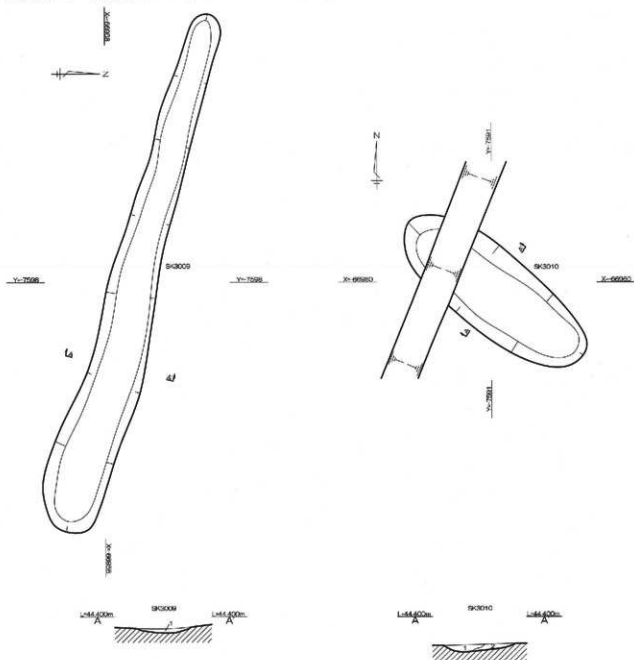
**遺構の性格と帰属時期** 溝状の土坑である。土器片から弥生時代中期頃と推測される。

■ SK3010( 図 73、写真図版 39)

位置 第2面南西側のP2・Q3グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.343mである。暗渠排水に切られる。SB3007と比較的近い位置にある。

検出状況 竪穴住居跡SI3001の検出面である灰黄色砂層面の精査中に確認された。

平面形状・規模 平面形は細長い溝状で、長軸2.316m・短軸0.841mを測る。断面形は浅いU字形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.304mである。



SK3009 土層観察表

層番号	照応層 土色名	土性	層内物質
1	10YR1/4 褐色	砂	にぶい黄褐色砂20%、塊状色砂質シルト 少量、酸化鉄微量、石灰質、埴りあり

SK3010 土層観察表

層番号	照応層 土色名	土性	層内物質
1	10YR1/4 褐色	砂	土層片少量、にぶい黄褐色砂20%、 褐色砂質シルト少量、埴りあり、埴りあり
2	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂20%、塊状色砂質シルト 少量、埴りあり、埴りあり

0 0.140 0.280

図72 SK3009・SK3010遺構図

埋土 埋土は1層に区分され、1層が褐色砂主体で、2層が黒褐色粘土質シルト主体である。

遺物出土状況 土器片72点が出土した。細片が多い中、弥生土器の甕体部のやや大型の破片が含まれる。

遺構の性格と帰属時期 溝状の土坑である。土器片から弥生時代中期頃と推測される。

### ■ SK3013(図73・74、遺物図31、遺物観察表31、写真図版39・70)

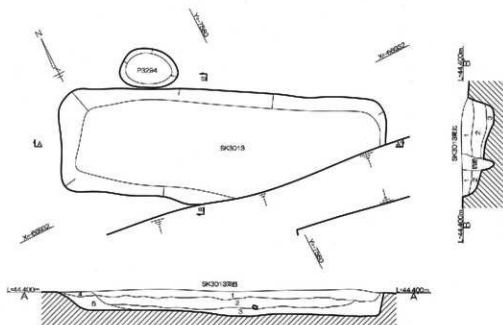
位置 第2面南西側のN4・N5グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.417mである。SI3015を切る。

検出状況 第1面上で検出された硬質な暗褐色砂層を除去し、黒褐色砂質シルト層の上面に下げたところでプランを確認した。確認面上に弥生土器片が露出しており、南東側の暗渠排水の掘方に切られ、その壁面で深さが確認できた。

平面形状・規模 平面形は長方形で、長軸3.461m・短軸1.214mを測る。断面形は逆台形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.304mある。壁面の立ち上がりはかなり急である。

埋土 埋土は5層に区分される。1層は灰黄色砂質シルト、2・3・4層は黒褐色砂質シルト、5層はやや橙色味を帯びた黒褐色砂質シルトである。1・2層には炭化木片が含まれ、にぶい黄褐色砂である。遺物は1層に集中する。

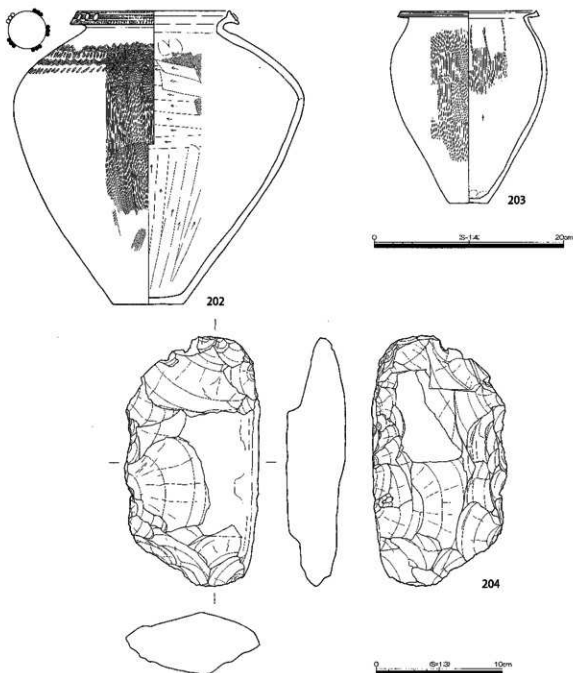
遺物出土状況 弥生土器片93点と石器1点が出土した。ほとんどが甕の細片であるが、2個体の土器がほぼ全体を留めた形で出土した。実測図は3点を掲載する。202は弥生時代中期後葉の甕で、ほぼ1個体が埋土上層につぶれた状態で検出された。口縁に擬門線文と縦方向のギザミを施し、円



SK3013 土層観察表

層番号	JIS notation 土名	遺物	記入内容	層番号	JIS notation 土名	遺物	記入内容
1	10Y3/4/2 灰黄色	砂質シルト	弥生中期遺土。暗褐色砂少量、炭化木片、粘土質、細砂質	4	10Y3/1/1 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、灰黄色砂少量、炭化木、細砂や中硬質
2	10Y3/2/2 黒褐色	砂質シルト	弥生土器片散在。暗褐色砂少量、炭化木片、粘土質、細砂や中硬質	5	7.5Y3/1/1 黒褐色	砂質シルト	黄褐色砂少量、炭化木、細砂や中硬質
3	10Y3/2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、炭化木片、粘土質、細砂や中硬質				

図73 SK3013遺構図



遺物図31 SK3013出土遺物

遺物観察表 31

遺物 番号	奥山地区	遺物番号 (奥山番号)	遺物区 番号	採取 番号	種別 器種	法量 (cm/g)	特徴	胎土 / 材質	焼成 色調	備考
202	3	SK3013 (3136)	31	70	赤土系 甕	口徑:16.0 底径:31.0 最大径:30.3 底径:7.4	外面:口縁部のみ・縦線文3条・円形押文 3個・縦を5道(4縦横)、裏面は縦文2条 ・具取留跡による彫刻的痕文2列、体部ハ ケ。底面ナシ 内面:口縁部～肩部上半ナシ、体部ナシ後部部 ハケ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 砂質	中～良好 外面:赤褐色 内面:黄褐色	
203	3	SK3013 (3136)	31	70	赤土系 甕	口徑:(14.2) 底径:20.3 最大径:(16.3) 底径:4.0	外面:口縁部包線文2条、口縁部ナシ、 体部ハケ。底面ナシ 内面:口縁部～肩部ナシ、体部上半ハケ、体部下 半ナシ後ナシ、底面指オサエ	黄褐色 ～1mmの砂粒、 砂質	黄褐色 外面:黄褐色 内面:黄褐色	外面部付着 内面黄褐色付着
204	3	SK3013 (3136)	31	70	石器 不明 赤土系	長さ:19.7 幅:10.7 厚さ:4.7 重量:1.18g	扁平の赤土系素材とする 両面に凹凸の模様あり 表面に自然産物	黄褐色	灰・黄褐色	石片か



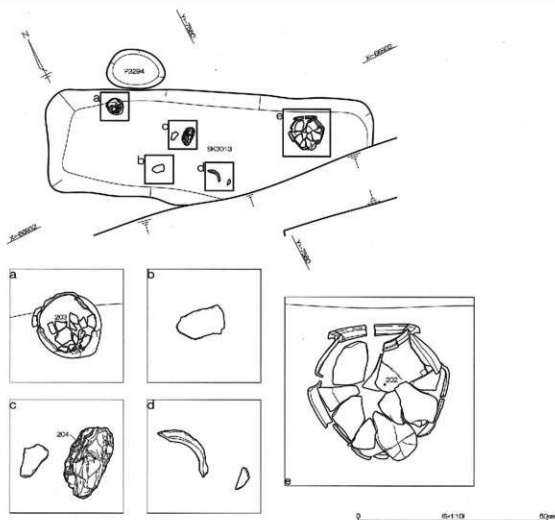


図74 SK3013詳細図

形浮文を貼り付けている。203 は中期の窠で、折り返した口縁の端部を内傾した帯状に作り、凹線文をめぐらしている。胴部外面のナデはいずれも縦方向である。204 は打製石斧の未成品と推測する。頁岩を加工したもので、同一石材から作ったと推察される石器が SI3006 から出土している。

**遺構の性格と帰属時期** 長方形土坑である。出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。竪穴住居跡 SI3006 に伴うものか。

■ SK3020( 図 75・76、遺物図 32、遺物観察表 32、写真図版 39・70・71 )

**位置** 第 2 面 O5・P5 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.546m である。

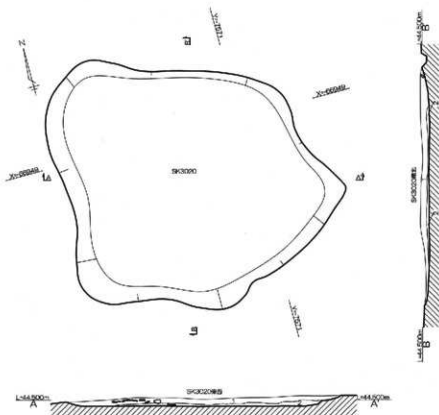
**検出状況** 第 1 面の暗褐色砂層を人力掘削で除去した際、弥生土器片が集中する箇所が見つかった。遺物検出面上面で止めて再精査をしつつ、褐色砂質シルト層の上面を検出し、その面に揃えてプラン検出をおこなった。

**平面形状・規模** 平面形は不整形で、長軸 2.965m・短軸 2.903m を測る。断面形は盤形で、確認面からの最深部までの深さは 0.201m ある。底面にはわずかに起伏があるがほぼ平坦である。底面に、ピット・小溝・土坑等の付帯施設は全くなく、竪穴住居跡ではない。当初、平面形が不整形なのは、上面からの重機等による攪乱の影響かと考えたが、遺構内の出土土器が大きく動いていないことがわかった。遺構形状はもともとこの形だったようである。

埋土 埋土は2層に区分される。1層は灰黄色砂質シルト、2層は黒褐色砂質シルトを主体とする。1層には弥生土器片多数と炭化物を含む。全体に砂粒を多く含む。

遺物出土状況 弥生土器片304点と礫数点が出土した。圃場整備時に上面を重機が走った影響で土器片は細かく砕けているものが多い。現場の出土状況のみ限り、完存個体の4分の1ないし5分の1程度のやや大型の破片にまとまる傾向がある。土器の接合作業に入って以後も、完全に近い形に復元できるものは少ない。出土状況は、遺構の西側半分に集中する傾向がある。これは、遺構の西側方向から土器が廃棄された可能性を示唆している。実測図5点を掲載した。205は弥生時代中期後葉の壺で頸部にハケ調整を施した後、擬凹線文をめぐらせている。206～209は弥生時代中期後葉の甕で、口縁端部に凹線文または擬凹線文を施し、体部内面に縦方向のハケ調整を施したタイプのものである。206は口縁端部に擬凹線文3条をめぐらせた後キザミを入れる。207は口縁端部に凹線文1条をめぐらし、体部の張り出した箇所には貝殻腹縁による連続刺突文が上下2段に施される。208は口縁端部に凹線文1条をめぐらせたものである。209は口縁端部に擬凹線文2条をめぐらせた後、貝殻腹縁による連続刺突文を刻み、さらに胴部にも貝殻腹縁による連続刺突文が施される。

遺構の性格と所属時期 用途不明の土坑である。不整形の平面形状からは倒木痕か洪水時の水溜り跡のような印象を受ける。最終的には廃棄土坑として使われたと思われる。遺構埋没年代は、出土遺物から弥生時代中期後葉である。

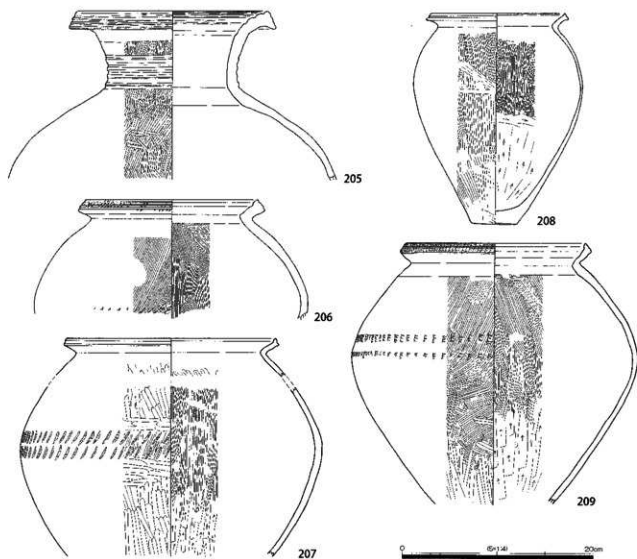


SK3020 土層観察表

層番号	層厚 m	土色	土質	埋入物
1	1378/2	灰黄色	砂質シルト	弥生土器多数、炭化物微量、砂粒多量、 緑褐色砂少量、短棒状、網りや中硬質
2	1070/2	黒褐色	砂質シルト	弥生土器片少量、黒色シルト20%、 細粒状、網りや中硬質

図75 SK3020遺構図

0 5-140 2m



遺物図32 SK3020出土遺物

遺物観察表 32

遺物 番号	層位区	遺物番号 (JIS番号)	器物図 番号	図面 番号	新 旧 器 種	流量 (cm/g)	特 徴	胎土 / 材質	焼成 色 調	備 考
205	3	SK3020 (3061)	32	70	弥生上層 土	口径: 19.6 器高: 17.7	外面: 口縁部・口縁部内縁文3条、口縁部ハケ後ナデ、 口縁部ハケ後内縁文5条、体部上半ハケ後 一帯ミダキ 内面: 口縁部内縁文3条、口縁部一帯上半ナデ	骨土 ～1mmの砂粒、 骨土	骨土 外面: 灰青 内面: 橙	
206	3	SK3020 (3061)	32	70	弥生上層 土	口径: 18.0 器高: 12.5 最大径: 28.6	外面: 口縁部内縁文3条、口縁部一帯ナデ、 口縁部ナデ、体部下半ミダキ、口縁部一帯 内面: 口縁部一帯ナデ、体部下半ミダキ、体部下 部ナデ	骨土 ～4mmの砂粒、 骨土	骨土 外面: 橙 内面: 橙	
207	3	SK3020 (3061)	32	70	弥生上層 土	口径: 21.0 器高: 23.0 最大径: 31.6	外面: 口縁部内縁文1条、口縁部一帯ナデ、 口縁部ナデ、体部中位ハケ後貝殻殻層による 点状刺突文2列、体部下半ミダキ 内面: 口縁部一帯ナデ、体部下半ミダキ、体部下 部ナデ	骨土 ～1mmの砂粒、 骨土	骨土 外面: 灰青 内面: 灰黄橙	
208	3	SK3020 (3061)	32	70	弥生上層 土	口径: 13.8 器高: 22.4 最大径: 17.6 底径: 4.3	外面: 口縁部内縁文1条、口縁部ナデ、体部ハ ケ後一帯ミダキ 内面: 口縁部一帯ハケ後ナデ、体部ケズリ後上 部ハケ、口縁部ナデナデ	骨土 ～1mmの砂粒、 骨土	骨土 外面: 灰青 内面: 灰黄橙	外面備付等 底面はヤマトレンズ 状の平底
209	3	SK3020 (3061)	32	71	弥生上層 土	口径: 18.8 器高: 27.5 最大径: 30.0	外面: 口縁部内縁文2条、口縁部一帯ナデ、 口縁部ナデ、口縁部ナデ、口縁部ナデによる 点状刺突文2列、体部ハケ後下半ミダキ 内面: 口縁部一帯上層ナデ、体部ケズリ後上半 ナデ	骨土 ～1mmの砂粒、 骨土	骨土 外面: 橙 内面: 灰黄橙	

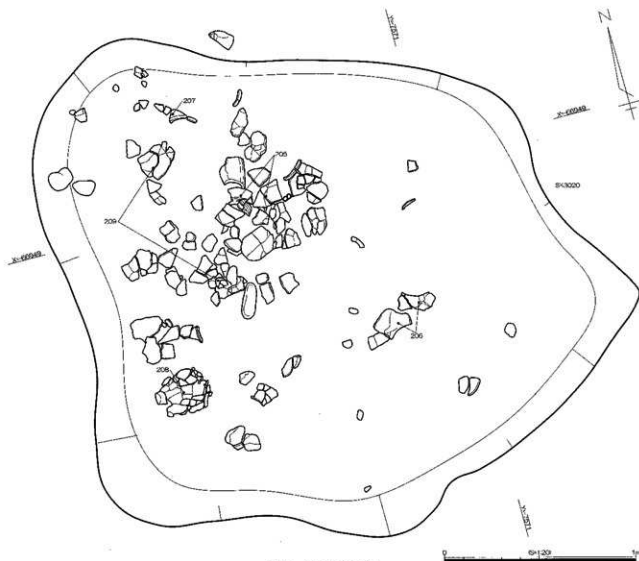


図76 SK3020微細図

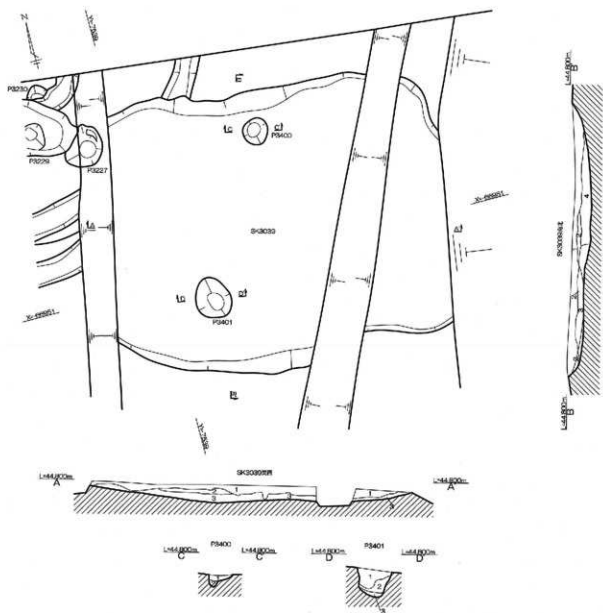
■ SK3039(図 77、写真図版 40)

**位置** 第2面O9・P9グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.807mである。竪穴住居跡SI3007を切る。

**検出状況** 耕3001を除去した段階で確認された。確認面は黒褐色砂質シルト層面である。埋上の砂質シルト中に炭化物が微量に散在している。竪穴住居跡の可能性を考えたが、平面形が不整、柱穴・壁溝等がなく、上坑として調査した。切り合いからSI3007より後のものである。

**平面形状・規模** 平面形は不整長方形で、長軸3.452m・短軸3.001mを測る。断面形は皿形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.290mある。壁面及び底面の調整は粗雑である。底面にP3400とP3401が検出された。P3400は平面形円形で、断面形有段U字形、規模は(0.284m×0.267m-0.432m)である。P3401は平面形円形で、断面形不整U字形、規模は(0.444m×0.369m-0.498m)である。

**埋土** 埋土は4層に区分される。上層の1層は暗灰黄色砂質シルトである。2層は黒褐色シルト主体で炭化物を多量含む。3層・4層は黒褐色砂質シルト主体で、黒色シルトと明黄褐色砂を斑土状に含む。3層・4層は人為的に埋めた土であり、上面がほぼ水平で貼床面的に広がる。その直上の2層には炭化物は散在している。1層は洪水の作用を受けた自然堆積の埋没土である。



SK3039 土層観察表

層番号	SS notation 土色名	土性	遺人物資
1	2.5Y1/2 暗灰黄色	砂質シルト	弥生土器片断、炭化物微量、 オリーブ褐色砂少量、動物あり、縞りあり
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭化物多量、黒褐色砂5%、 粘粒あり、縞りやや散在
3	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト20%、黄褐色砂10%、 粘性やや強い、縞りあり
4	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト20%と黄褐色砂10%が粘土 状に混入、粘性やや強い、縞りあり

SK3039内P3400 土層観察表

層番号	SS notation 土色名	土性	遺人物資
1	10YR6/1 黄灰色	砂質シルト	黒褐色シルト少量、褐色砂少量、 炭化物微量、明りあり、縞り散在
2	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	黒褐色の上質シルト30%、 粘粒やや強い、縞り散在

SK3039内P3401 土層観察表

層番号	SS notation 土色名	土性	遺人物資
1	10YR1/1 黒灰色	砂質シルト	粘粒やや多い、黒褐色砂少量、 小礫少量、粘粒あり、縞りあり
2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	黒色シルト10%、褐色砂少量、 粘粒あり、縞りやや散在
3	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	粘土質シルト20% 粘粒やや強い、縞りあり

図77 SK3039遺構図

遺物出土状況 弥生土器片 118 点が出土した。他は細片である。内面にハケナデ調整を残す高坏の坏部破片が出土している。

遺構の性格と所属時期 性格不明の土坑である。竪穴住居跡に準ずる何らかの施設であろうか。埋没時期は、弥生時代中期以降である。

■ SK3042( 図 78)

位置 第2面 O10・11、P10・11 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.831m である。遺構の中央を Tr.1 に切られる。

検出状況 耕 3002 を除去した段階で確認された。SK3047・SK3048 と北端 SB3004 の範囲内にあり、何らかの付帯施設の可能性も否定はできない。

平面形状・規模 平面形は隅丸長方形で、長軸 2.465m・短軸 1.555m を測る。断面形は浅い皿形で、確認面からの遺構底面までの深さは 0.181m ある。壁面及び底面の調整は粗雑である。

埋土 埋土は 3 層に区分される。1 層はにぶい黄褐色砂質シルト、2 層は暗褐色砂質シルト、3 層は黒褐色シルトを主体とする。1 層・2 層には砂粒を多く含む。

遺物出土状況 弥生土器細片が 6 点出土している。

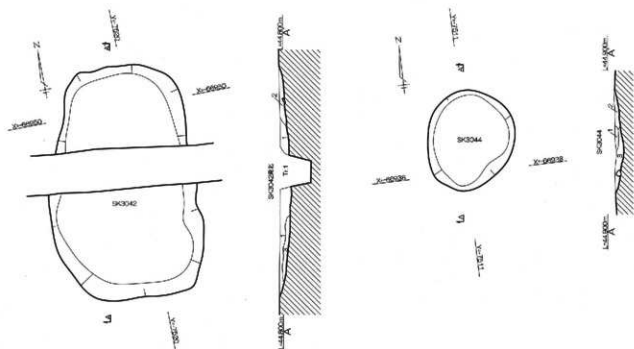
遺構の性格と帰属時期 性格不明の土坑である。出土遺物から弥生時代中期以降と推測する。

■ SK3044( 図 78)

位置 第2面 N11 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.812m である。

検出状況 圃場整備の整地層を除去した段階で確認された。確認面は黒色砂質シルト層上面である。第2面 SX3001～SX3003 が近くにあり、当初は規模からみて土坑墓の可能性を考えたが、結果として判断できなかった。

平面形状・規模 平面形は隅丸長方形で、長軸 1.040m・短軸 0.912m を測る。断面形は浅い皿形で、



SK3042 土層観察表

層番号	IS notation 土色名	土性	記入物等
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	砂粒やや多い、黒褐色シルト少量、 小礫散在、粘性あり、隙りあり
2	10YR3/3 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色の砂質シルト、 粘性弱、隙りやや硬質
3	10YR3/1 黒褐色	シルト	小礫少量、にぶい黄褐色砂10%、 粘性あり、隙りあり

SK3044 土層観察表

層番号	IS notation 土色名	土性	記入物等
1	10YR3/3 暗褐色	砂	黒褐色砂質シルト10%、 粘性あり、隙りあり
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色砂10%、 粘性やや強い、隙りやや硬質
3	10YR3/1 黒褐色	シルト	小礫少量、灰褐色砂質シルト少量、 粘性やや強い、隙りあり

0 1m 2m

SK3042遺構図

0 1m 2m

SK3044遺構図

図78 SK3042・SK3044遺構図

確認面からの遺構底面までの深さは0.094mである。底面の調整はやや粗い。

埋土 埋土は3層に区分される。1層は暗褐色砂主体、2層は黒褐色シルト主体、3層は黒褐色シルト主体である。

遺物出土状況 遺物は未検出である。

遺構の性格と所属時期 性格不明の土坑である。土坑墓の可能性もあるが、用途・年代とも不明である。

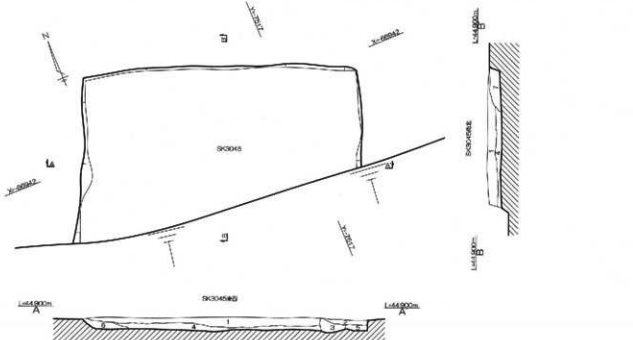
### ■ SK3045(図79)

位置 区第2面のO11グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.807mである。南側を近代以降の暗渠排水に切られる。

検出状況 圃場整備の整地層を除去した段階で確認された。確認面は黒色砂質シルト層上面である。第2面SX3001～SX3003が周囲にあるが、それらの埋土と比較して黄色砂粒・灰黄色砂粒が多く、時期は異なるものと推測される。

平面形状・規模 平面形は本来長方形であったと思われる、長軸2.954m・残存短軸1.687mを測る。断面形は盤形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.168mある。底面がほぼ平坦で壁面の立ち上がりが垂直に近い。

埋土 埋土は7層に区分される。埋積経過が確認でき、遺構壁際の5層・6層・7層が先に埋積し、下層の4層が埋積後、上層の1層が埋積する。2・3層は埋積後の掘り返しのようなものである。6層は暗



SK3045 土層断面表

層番号	深さ(m)	土質	記入内容
1	10YR1/1 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂20%、粘りあり、硬りあり
2	10YR3/1 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂20%、粘りあり、硬りあり
3	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径5mm大の礫あり、にぶい黄褐色砂20%、粘りあり、硬りあり
4	10YR/2 灰黄色	粘土質シルト	径5mm大の礫あり、黄褐色砂30%、粘りや中強い、硬りあり

層番号	深さ(m)	土質	記入内容
5	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	径5mm大の礫あり、黄褐色砂30%、粘りや中強い、硬りあり
6	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	粘りや中強い、硬りあり
7	7.5YR4/1 黄褐色	粘土質シルト	粘りや中強い、硬りあり

図79 SK3045遺構図

褐色粘土質シルト、7層は褐灰色粘土質シルトで、粘性のやや強い土である。底面直上の4層は灰黄褐色粘土質シルトで、上層の1層はにぶい黄褐色砂を多く含む褐灰色砂質シルトである。

遺物出土状況 遺物は未検出である。

遺構の性格と帰属時期 性格不明の土坑である。にぶい黄褐色砂を多く含む遺構は耕3002に多くみられることから、時期的にはこの遺構も耕3002以降と推測され、古代以降とする。

■ SK3046(図80、写真図版40)

位置 第2面O11グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.769mである。SX3003を切る。

検出状況 圃場整備の整地層を除去した段階で確認された。確認面は黒色砂質シルト層上面である。SX3003の埋土に比較して灰黄色砂がわずかに多く、切り合いからみても時期は新しい。ただし、軸方向がSX3003とほぼ揃っており、形態が小型の土坑墓に近い。

平面形状・規模 平面形は隅丸長方形もしくは小判形に近く、長軸1.015m・短軸0.664mを測る。断面形は浅い皿形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.030mである。

埋土 埋土は単層で、褐灰色砂質シルトを主体とする。

遺物出土状況 弥生土器細片1点が出土している。年代は不明である。

遺構の性格と帰属時期 性格不明の土坑である。SX3003より新しく、弥生時代後期以降である。土坑墓の可能性もある。

■ SK3047(図81、遺物図33、遺物観察表83、写真図版40・71)

位置 第2面のP11グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.830mである。耕3002に切られる。Tr.1に切られる。

検出状況 Tr.1掘削時にトレンチ内から弥生時代の高坏が出土し、遺構内埋土であることが確認された。その後、上面の耕3002を除去し、黒褐色砂質シルト層面で範囲を確認した。耕作溝群の埋土との土質の差異は明瞭ではなく、土器の検出された面でプラン精査をおこない範囲を確認した。

平面形状・規模 平面形は不整三角形の浅い掘り込みである。長軸3.743m・短軸2.671mを測る。

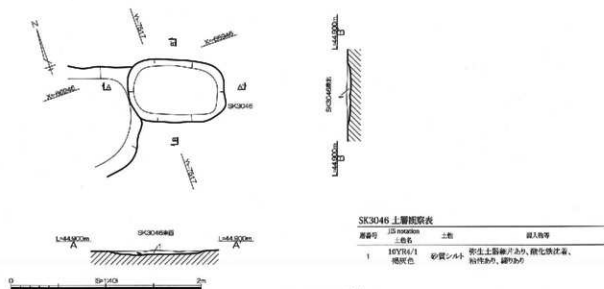
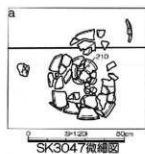
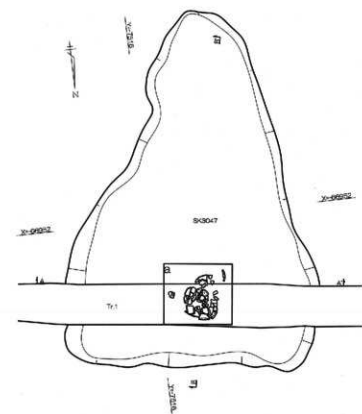


図80 SK3046遺構図





SK3047縮小図

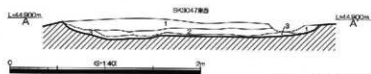
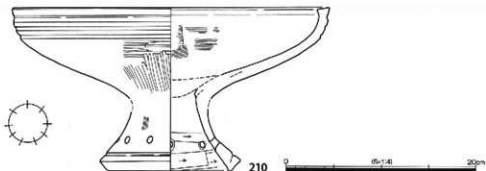


図81 SK3047遺構図

3F SK3047 土層観察表

層番号	層厚(m)	土色名	土性	取込品物
1	2.0V4/2	暗灰褐色	砂質シルト 砂粒多い、粘性强、縞りややぶ質	赤土土層高坪出土、炭化米穀類、 砂粒多い、粘性强、縞りややぶ質
2	2.0V4/2	暗灰褐色	砂質シルト 砂粒多い、赤褐色シルトブロック少量、 粘性强、縞りあり	
3	1.0V3/1	黒褐色	砂質シルト 粘性强、縞りややぶ質	



遺物図33 SK3047出土遺物

遺物観察表 33

遺物番号	調査区	遺構番号 (調査番号)	遺物区 番号	採取 層位	種別 分類	体積 (cm <sup>3</sup> )	特徴	胎土/材質	焼成 温度	備考
210	3	SK3047 (301区)	33	71	赤土土層 高坪	口径: 43.0 器高: 117.2 器径: 12.9	外面: 口縁部内縁文 3 条、杯底部ミガキ、胴部少 字、脚部部内縁文 1 条 内面: 口縁部ミガキ、杯底部ミガキ、胴部ケ ズリ 特記: 11 箇所かじり方向	普通 ～1mm の砂粒、 普通	普通 900; 紅土系 内面: 粉	

断面形は不整な盤形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.140mある。壁面調整の状態は確認できない。

**埋土** 埋土は3層に区分される。1層は暗灰黄色砂質シルト主体で、弥生土器の高環を含み、炭化物を微量含む。2層は暗灰黄色砂質シルト主体で黒褐色シルトブロックを少量含む、3層は黒褐色砂質シルト主体である。

**遺物出土状況** 実測図を1点掲載する。210は弥生土器の高環で坏部の口縁外面に3条の凹線文が施される。脚部には、円形の透かしが9箇所に入られている。弥生時代中期後葉に比定できる。

**遺構の性格と帰属時期** 性格不明の土坑である。高環を供献土器と考えると墓坑の可能性もある。

## ■ SK3048(図82)

**位置** 第2面のP11グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.830mである。耕3002に切られる。暗渠排水に切られ、Tr.1に切られる。

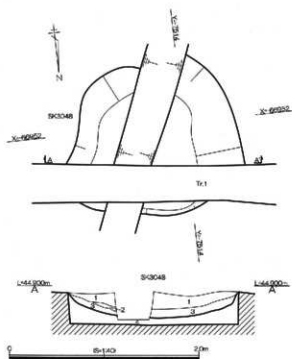
**検出状況** Tr.1掘削時に、周辺層より炭化物と焼土が多く集中する箇所があり、遺構埋土であることが確認された。上面の耕3002を除去し、黒褐色砂質シルト層面で範囲を確認した。

**平面形状・規模** 平面形は不整形で、長軸1.830m・短軸1.708mを測る。断面形は浅いU字形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.319mある。壁面調整の状態は確認できない。

**埋土** 埋土は3層に区分される。1層は暗灰黄色砂質シルトで焼土と炭化物を微量含む。2層は暗灰黄色砂質シルト主体で、黒褐色シルトブロックを少量含む。3層は黒褐色砂質シルト主体で暗灰黄色砂ブロックを含む。セクション図の4層は基盤層の黒色土層である。

**遺物出土状況** 炭化物・焼土粒はあるが、遺物は出土していない。

**遺構の性格と帰属時期** 用途不明の土坑である。西側に並ぶSK3047の高環が弥生時代中期であり、これと並存することから同時期の可能性があるとみている。



SK3048 土層構成表

層番号	層別 (stratum)	土色	土性	遺入物等
1	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	焼土塊・炭化物微量、砂粒多い、 小礫散在、砂粒源、網りや中礫質	
2	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	砂粒多い、黒褐色シルトブロック少量、 粘土質、網りあり	
3	10Y7.5/1 黒褐色	砂質シルト	暗灰黄色粘土ブロック30%、 粘性あり、網りあり	
4	2.5Y2/2 黒褐色	砂質シルト	基盤層の黒色土層、 粘性やや強い、網りやや粘質	

図82 SK3048遺構図

■ SK3049(図 83、写真図版 40)

位置 第2面のP11グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.824mである。耕3002に切られる。

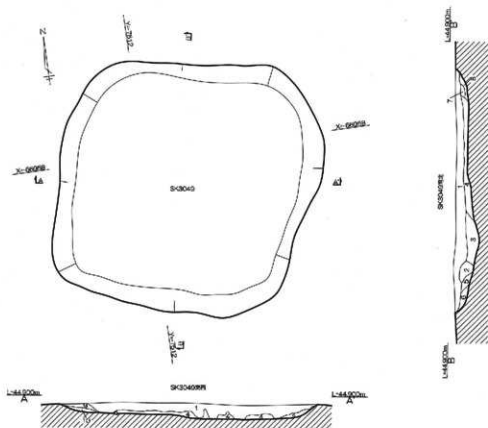
検出状況 上面の耕3002を除去し、黒褐色砂質シルト層面で範囲を確認した。

平面形状・規模 平面形は隅丸長方形で、長軸2.729m・短軸2.632mを測る。断面形は浅く不整なU字形で、確認面からの遺構最深部までの深さは0.273mある。壁面調整痕は確認できない。

埋土 埋土は8層に区分される。いずれも黒褐色砂質シルトを主体とし、黄色味の強い層と黒褐色味が強い層とがある。1層と4層の境界に細かい起伏があり、2層・3層部分で若干の落ち込みがある。

遺物出土状況 弥生土器片49点が出土した。いずれも細片で統一性がない。

遺構の性格と所属時期 用途不明の土坑である。年代は弥生時代以降のものである。



SK3049 土層観察表

層番号	土層 土色	土性	出土物等
1	2.SY2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、粘性あり、緑やや黄質
2	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、粘性弱、緑やや黄質
3	2.SY2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、粘性弱、緑やや黄質
4	2.SY2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、粘性弱、緑やや黄質

層番号	土層 土色	土性	出土物等
5	10Y3/1 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、粘性弱、緑やや黄質
6	2.SY2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、粘性弱、緑やや黄質
7	2.SY2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、粘性弱、緑やや黄質
8	2.SY2/2 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂少量、粘性弱、緑やや黄質

図83 SK3049遺構図

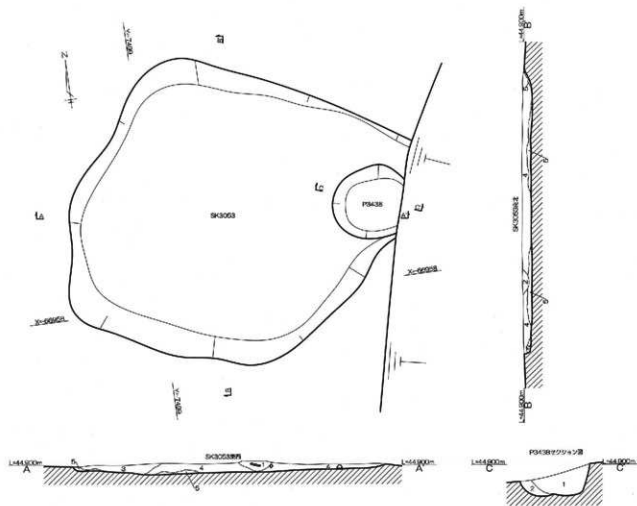
■ SK3053( 図 84、写真図版 40)

位置 第 2 面の P12・P13 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.881m である。東側を攪乱に切られる。南側の SI3008 と接する。

検出状況 黒褐色砂質シルト層上面で範囲を確認した。

平面形状・規模 平面形は不整な隅丸長方形で、長軸 3.182m・短軸 3.106m を測る。断面形は浅く不整な U 字形で、確認面からの遺構底面までの深さは 0.182m ある。

埋土 埋土は 5 層に区分される。1 層は上面からの耕作攪乱で、にぶい黄褐色粘土質シルト主体である。2 層は褐灰色砂質シルト主体である。3 層は暗褐色砂質シルト主体である。4 層は灰黄褐色砂質シルト主体である。5 層は黒褐色砂質シルト主体である。SK3055 は 2 層に区分され、1 層・2 層とも黒褐色粘土質シルトを主体とし、粘性がやや強い。1 層と 4 層の境が凹凸が激しく、植物痕の



SK3053 土層観察表

層番号	JIS notation 土色名	土性	混入物等
1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	表土・上部片礫土、暗褐色砂少量、 粘土や中強い、縞りあり
2	10YR5/1 褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルト少量、 粘性あり、縞りやや軟質
3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルト少量、 粘性あり、縞りやや軟質
4	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	暗褐色の塊あり、強石灰混入、 粘性あり、縞りやや軟質
5	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	暗褐色砂質シルト少量、 粘性あり、縞りやや軟質

SK3053内P438 土層観察表

層番号	JIS notation 土色名	土性	混入物等
1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	暗褐色砂少量、 粘性やや中強い、縞りあり
2	2.5Y2/2 黒褐色	粘土質シルト	暗褐色砂質シルト微量、 粘性やや中強い、縞りあり

図84 SK3053遺構図

可能性がある。

遺物出土状況 弥生土器片 49 点が出土した。いずれも細片でまとまりがなく、表土からの流れ込みと思われる。

遺構の性格と帰属時期 用途不明の土坑である。年代は弥生時代以降である。

■ SK3055(図 85、遺物図 34、遺物観察表 34、巻頭図版 5、写真図版 40・71)

位置 第 2 面 Q13 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.911m である。

検出状況 圃場整備の際の重機攪乱を除去し、近代以降の耕作土と弥生時代遺物包含層を混合した層が検出されたため、遺物を採取しつつ面を掘り下げ、黒褐色砂質シルト面を検出した。その際、多数の土器片が集中する箇所が見つかったため、周辺を精査して土器集中範囲を確認し、土坑として調査することにした。

平面形状・規模 平面形は縦に細長い瓢箪形で、長軸 2.874m・短軸 1.390m を測る。断面形は不整な U 字形で、確認面からの遺構底面までの深さは 0.165m である。

埋土 埋土は 3 層に区分され、3 層とも黒褐色砂質シルトを主体とする。1 層が弥生土器片を多数含み、2 層が弥生土器片を少数含み、3 層が土器片を微量含む。1 層と 3 層が若干黄灰色を帯びる。

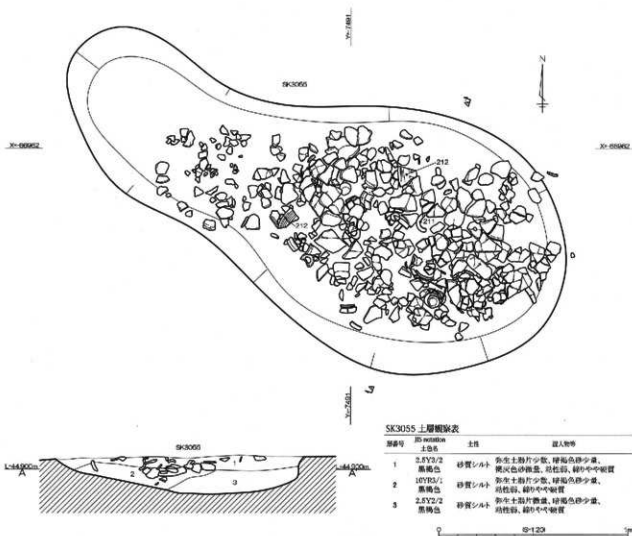
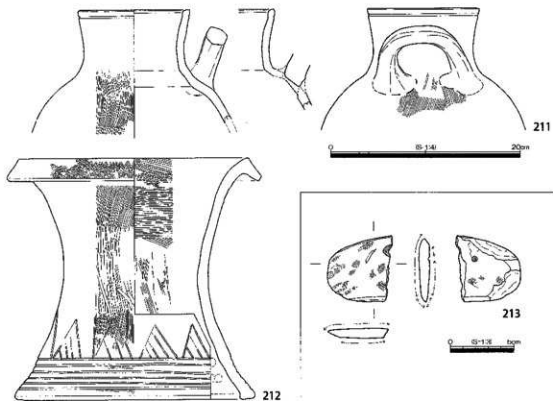


図85 SK3055遺構図

遺物出土状況 弥生土器片 2062 点と石器 1 点、礎数点が出土した。弥生時代中期後葉の土器片を中心に甕の体部片が多数を占め、高坏脚部・帯口縁部等、甕以外の器種も含まれる。出土状況でみる限り人為的に砕かれて埋められたものであろう。接合はほぼ不可能な状態であったが、211 と 212 のみ特殊な形状であったため復元できた。211 は水差形土器であり、把手と口縁部付近が確認された。212 は弥生土器の器台で、全体を立鼓形につくり、口縁外帯部に波状文を施し、裾部に凹線文 6 条をめぐらすものである。凹線文の直上に鋸歯文を大きくしたような三角文が 4 つ並んで陰刻されているのが特徴的で、三角文の中の斜線数に違いがあり、一番左と左から三番目が二本線、左から二番目と右端が二本線である。また、三角文の左側二つには柱を立てたような縦線が刻まれ、線刻画のようにも見える。213 は泥質粘板岩製の石包丁である。

遺構の性格と帰属時期 土坑である。出土した土器片は弥生時代中期を主体とするが、直上まで近代以降の耕作地を開墾した際の土器捨て場の可能性もある。



遺物図34 SK3055出土遺物

遺物観察表 34

遺物番号	調査区	遺物番号 (調査番号)	遺物図番号	図別番号	材質	法量 (cm/g)	特徴	胎土/材質	加工 色調	備考
211	3	SK3055 (3051)	34	71	弥生土器 甕 (水差形土器)	口径 11.4 胴高 12.9	外面: 口縁部ナデ・凹線文 1 条、肩部ハケ、把手ナデ 内面: 口縁部~胴部ナデ 特記: 口縁部把手	白磁 ~2mm の砂粒 骨殖	中~良好 内面: 紅土・黄褐色 内面: 灰褐色	
212	3	SK3055 (3051)	34	71	弥生土器 器台	口径 23.8 器高 25.5 胴径 23.4	外面: 口縁部波状文、体部ハケ幅中位に 1 列、方、器底凹線文 6 条 内面: ハケ・ナデ 特記: 外側器台部に縦列による線刻文 4 個	白磁 ~3mm の砂粒 骨殖	白磁 内面: 紅土・黄褐色 内面: 灰褐色	
213	3	SK3055 (3051)	34	71	石器 石包丁	長さ 5.1 幅 2.5 厚さ 0.85 重さ 28.1	衝刺、研削痕あり 柄部穿孔 1 箇所径 4mm 以上、未貫通穿孔 1 箇所径 3.5mm あり	灰質粘板岩	灰	1/2 以上欠損

■ SK3056(図 86、遺物図 35、遺物観察表 35、写真図版 40・72)

位置 第2面Q18グリッドに位置する。遺構確認面の標高は45.353mである。

検出状況 近代の耕作土を除去したところで、色調の明るいぶい黄褐色砂層を検出した。このぶい黄褐色砂層を切る遺構として暗褐色砂質シルトのプランが検出され、表面に弥生土器片が検出された。

平面形状・規模 平面形は不整楕円形で、長軸3.067m・短軸1.426mを測る。断面形はU字形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.141mである。壁面調整の状態は確認できない。

埋土 埋土は単層である。黒褐色砂質シルトを主体とし、黒褐色砂・黒色砂質シルト等を含む。弥

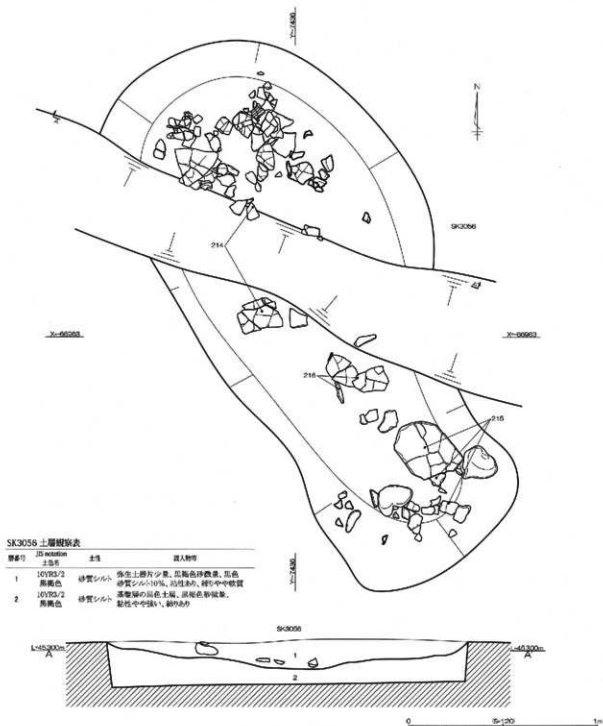
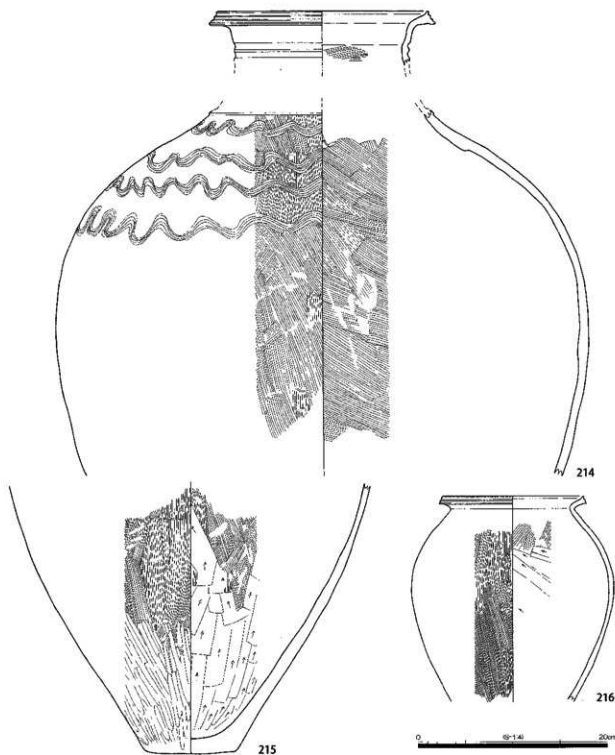


図86 SK3056遺構図



遺物図35 SK3056出土遺物

遺物観察表 35

遺物番号	調査区	遺構番号 (調査番号)	遺物部 番号	所在 層付	種別 器名	重量 (cm/g)	特徴	胎土/材質	焼成 色澤	備考
214	3	SK3056 (3052)	35	72	角付十輪 罎	口径: 22.4 最大径: 19.6	外周: 口縁部から縦文3条、口縁部~胴部ナツ、 胴部内縦文2条、体部ハケ後列部縦文 内周: 口縁部ナツ、胴部ハケ、後部ケズリ後ナツ ・ハケ、体部ハケ	黄褐色 ~ 1mmの砂粒、 白濁	黄褐色 外周: 濃い青 内周: 緑	
215	3	SK3056 (3052)	35	72	角生上蓋 罎	口径: 28.4 最大径: 28.0 底径: 9.5	外周: 体部ハケ後下半直方平、此部ナツ 内周: 体部ケズリ後上ヤハケ 特記: 底部は凸レンズ状	黄褐色 ~ 1mmの砂粒、 白濁	白濁 外周: 濃い黄褐色 内周: 浅黄	
216	3	SK3056 (3052)	35	72	角付十輪 罎	口径: 14.8 最大径: 21.7 最大径: 21.4	外周: 口縁部から縦文2条、口縁部~胴部上ナツ 子、体部ハケ 内周: 口縁部ナツ、胴部ハケ、後部ケズリ	黄褐色 ~ 3mmの砂粒、 白濁	黄褐色 外周: 緑 内周: 濃い黄褐色	外周後部下半直方罎



生土器片、特に大型の壺片を多く含む。

**遺物出土状況** 弥生土器片 255 点が出土した。弥生時代中期後葉の土器片を中心に多数出土した。214 は大型の壺で、口縁端部に腰凹線文 3 条を施し、体部外面は縦方向のハケ調整ののち肩部に 4 本の波状文を施す。215 は、大型の甕の底部である。216 は甕で、口縁端部に凹線文 2 条が施される。いずれも弥生時代中期後葉に比定される。

**遺構の性格と帰属時期** 土坑である。おそらく廃棄土坑である。出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。3 区の東側にはこの土器と関連のありそうな竪穴住居跡は確認されなかったが、隣接する調査区外に集落が続くことを予想させる出土状況である。

### 第 5 項 3 区第 3 面 遺構と遺物 (巻頭図版 4、写真図版 41)

洪水砂層である暗褐色砂層を除去して第 1 面を検出し、耕作溝群を調査した後、第 2 面を調査し、さらに黒褐色砂質シルトが混在する層を除去して、黒色土層上面まで掘り下げた。この黒色土層上面が第 3 面の遺構確認面である。黒褐色砂質シルト層は、暗褐色砂層の下で流水作用等による攪乱を受けていたと思われ、砂・シルト・粘土質シルトが混在した硬質な層で、この層を除去しないとプランを検出できない遺構が多数あることがわかった。

調査の結果、第 3 面では、掘立柱建物跡 1 棟・竪穴住居跡 3 棟・土坑 31 基・ピット 349 基が検出された。このうち、掘立柱建物跡と竪穴住居跡と、P3662 について詳細を述べ、他の遺構は 3 区遺構一覧表 (表 10 ~ 22) で概要を記す。

#### ■ SB3008 (図 87、写真図版 42)

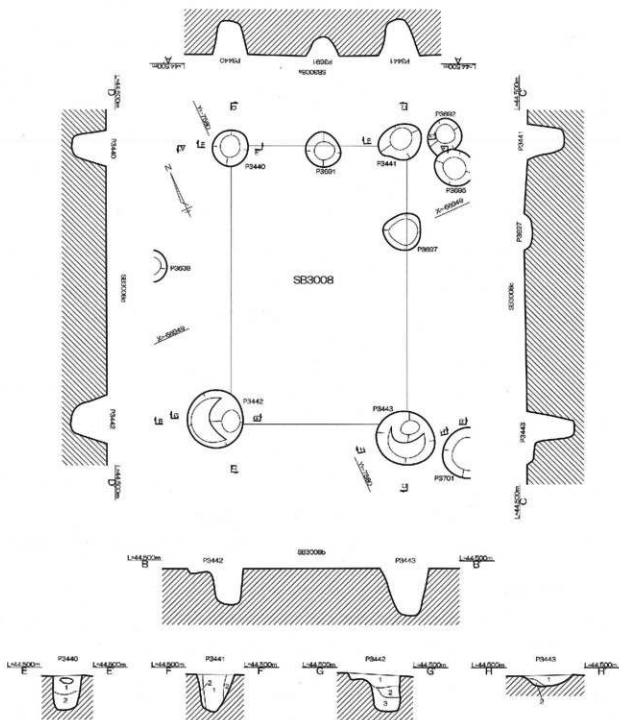
**位置** 第 3 面南西部の O4・5、P4・5 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.048m を測る。  
**検出状況** 黒褐色砂質シルト層を除去し、第 3 面確認面の黒色シルト層上面で検出した。周辺にピット群が多くあり、柱穴の対応関係が判別しにくい。柱穴と想定したもの以外にも深いピットがある。SI3013 の東側に隣接しており、竪穴住居跡の周堤幅を想定すると、SI3013 との並存は考えにくい。  
**軸方向・平面形状・規模** 桁行 1 間・梁間 1 間の掘立柱建物跡である。主軸は N-25°・E をふる。建物の平面形は長方形である。桁行長 2.940m・梁間長 1.860m を測る。

SB3008 は P3440-P3441-P3442-P3443 の 4 基の柱穴で構成される。各柱穴の規模 (長軸×短軸・確認面からの深さ) は、P3440 は (0.389m × 0.377m-0.393m)、P3441 は (0.470m × 0.383m-0.372m)、P3442 は (0.611m × 0.603m-0.424m)、P3443 は (0.629m × 0.560m-0.541m) である。形状は、平面形は 4 基とも円形。断面形は P3440・P3441 は U 字形。P3442 は有段 U 字形。P3443 は浅い U 字形を示す。底面の調整痕は残っていない。

**柱穴埋土・礎石の有無** P3441 は柱痕が確認され、P3441 の柱痕埋土にはぶい黄褐色砂質シルトを主体とし、掘方の埋土は黒色シルトを主体とする。礎石はない。

**遺物出土状況** P3441 から土器片 2 点、P3442 から土器片 3 点、P3443 から土器片 7 点が出土している。

**遺構の性格と帰属時期** 掘立柱建物跡である。出土遺物と埋土と軸方向から、弥生時代中期に所属すると推測される。



SB3008 土層観察表

調査番号	層番号	土名	土性	記入内容
P3440	1	黒褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト20%、粘性やや多い、締りあり
P3440	2	10YR2/1 灰色	シルト	礫石(直径20cm)あり、黒色シルト少量、にぶい黄褐色砂質、粘性あり、締りあり
P3441	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト20%、粘性やや多い、締りあり
P3441	2	10YR2/1 灰色	シルト	にぶい黄褐色砂質シルト20%、粘性やや多い、締りあり
P3441	3	10YR3/1 黒褐色	シルト	黒色シルト少量、にぶい黄褐色砂質、粘性あり、締りあり

調査番号	層番号	土名	土性	記入内容
P3442	1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	粘性やや多い、粘性やや多い、締りあり
P3442	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	粘性やや多い、粘性やや多い、締りあり
P3442	3	10YR3/1 黒褐色	シルト	黒色シルト少量、にぶい黄褐色砂質、粘性あり、締りあり
P3443	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト20%、粘性やや多い、締りあり
P3443	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	黒色シルト少量、にぶい黄褐色砂質、粘性あり、締りあり

図87 SB3008遺構図

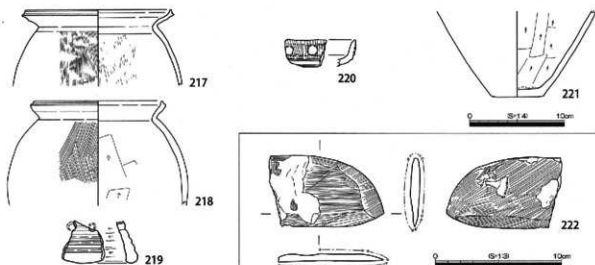
■ SI3013(図 88 ~ 90、遺物図 36、遺物観察表 36、写真図版 42・43・72)

位置 3区第3面南西 O4・P4 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 44.464m である。北端を SI3005 に切られる。暗渠排水と Tr.1 に切られる。

検出状況 黒褐色砂質シルト層上面で、この付近のみ、焼土粒・炭化粒・微量の土器片を検出した。竪穴住居跡の可能性を考えたが、当箇所には酸化鉄・酸化マンガンが多量に沈着して硬質化しており、プラン面からはまったく遺構の範囲等は見えなかった。このため、暗渠排水の掘方と Tr.1 の壁面を再精査し、竪穴住居跡の壁溝の掘方と柱穴の存在を確認した。ベルトを設定して住居として調査することになった範囲内に多数の柱穴があることがわかり、竪穴住居跡の可能性は高まった。

軸方向・平面形状・規模 平面形は円形に近く、長軸 8.419m・短軸 8.283m を測る。床面は暗褐色砂層によって削られ消失している。断面形は浅い盤形で、0.166m の深さを確認した。壁溝が部分的に残っている。溝は最も外側の SD3021 以外に、SD3022 ~ SD3025 まであり、二重になっているのではなく、溝状に拡大しているかのようにみえる。

住居内ピットは 36 基、中央土坑は 2 基検出された。ピット・土坑の規模は遺構一覧表を参照のこと。中央土坑は SK3068 と SK3069 が切り合った状態で検出され、SK3068 が SK3069 を切る。拡張もしくは建て直しがおこなわれているとみられ、調査時の所見では中央土坑の数の 2 回とされる。古い時



遺物図36 SI3013出土遺物

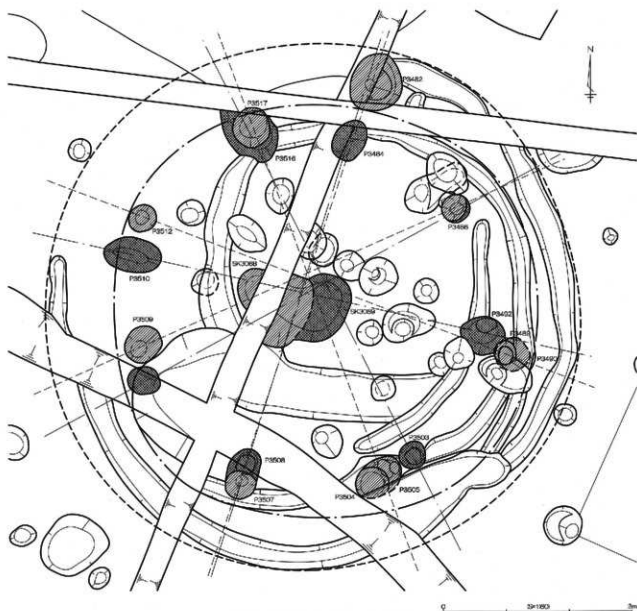
遺物観察表 36

遺物番号	調査区	遺構番号 (調査番号)	遺構形状	断面 形状	種類 別	法量 kg/g	特徴	土質/材質	焼成 色調	備考
217	3	SI3013 (3638)	36	72	弥生土器 甕	口径 115.0 高さ 59.0 ~ 最大径 117.8	外面: 口縁部彫文 1 条、口縁部-腹部ナデ、 肩部ハケナデ 内面: 口縁部-腹部ナデ、腹部ハケナデナ 口縁部ナデ、腹部ハ ケ	普通 ~ 1mm の砂粒。 普通	普通 内面: 灰黄 内面: 灰黄	
218	3	SI3013/SK3071 (3641)	36	72	弥生土器 甕	口径 113.2 高さ 111.0 ~ 最大径 118.9	外面: 口縁部-腹部ナデ、腹部ナデ 内面: 口縁部彫文 2 条後半まで内面彫文、肩 部上端彫文 2 条 内面: 口縁部ナデ	普通 ~ 4mm の砂粒。 普通	普通 外側: 灰黄 内側: 灰黄	
219	3	SI3013/P3513 (3646)	36	72	弥生土器 高杯	高さ 4.5 ~	外面: ナデ、口縁文 4 条以上 内面: ナデ、口縁部ナデ 特記: 内面通し 2 方向以上	普通 ~ 1mm の砂粒。 普通	普通 外側: 暗赤褐 内側: 暗赤褐	
220	3	SI3013内 SK3068-3069 (3965)	36	72	弥生土器 甕	高さ 3.0 ~	外面: 口縁部彫文 2 条後半まで内面彫文、肩 部上端彫文 2 条 内面: 口縁部ナデ	普通 ~ 0.5mm の砂粒。 普通	普通 内面: 灰黄 内面: 明灰黄	
221	3	SI3013内 SK3068-3069 (3965)	36	72	弥生土器 甕	高さ 3.1 ~ 口径 5.6	外面: 腹部下-底部(ミガキ) 内面: 腹部下-底部ナデ	普通 ~ 3mm の砂粒。 普通	普通 外側: 灰黄 内側: 灰黄	
222	3	SI3013/P3492 (3645)	36	72	石器 石筴丁 未製品	長さ 3.1 ~ 幅 5.65 厚さ 0.75 重さ 32.3	直線刃平刃 磨製、研製あり 底部彫文残存せず	粘板竹	灰	

期のSI3013をSI3013a、新しい時期のSI3013をSI3013bとすると、SI3013aは、図88の一点鎖線で示した小さい方の円と思われる、中央土坑SK3069を中心に柱穴はP3516-P3503、P3484-P3508、P3486(SK3070で消滅)、P3492-P3510が対応していたと推測する。SI3013bは、図88の破線で示した大きい方の円と思われる、中央土坑SK3018を中心に、柱穴はP3482-P3507、P3486-P3509、P3490-P3512、P3504・P3506-P3517が対応していたと推測する。いずれも8本柱である。

**埋土・礎石の有無** 貼床面は残っていない。遺構埋土と考えられた黒褐色砂質シルト主体の炭化物と焼土粒を含む層(セクション図J-J'層)は、洪水性堆積層の一部をなしている。この層は、竪穴住居跡の掘方と貼床面のほぼすべてを押し流し堆積した層である。壁溝・小溝・柱穴・土坑の下部のみが残される。遺構内埋土は黒褐色砂質シルト主体で、黒褐色砂を含むものが多い。P3508・P3505・P3489には礎石がある。P3492は埋土の上層に礎石状に石が置かれている。

**遺物出土状況** 住居内範囲の埋土中・ピット内・壁溝内・小溝内・土坑内から土器片225点が出土した。この中で弥生土器の甕口縁部片18点・同甕底部片5点・同高坏片1点が出土した。実測個







体6点を掲載する。217と218は弥生土器の甕の上半部で、いずれも口縁端部に凹線文1条を施す。219はP3513からの出土で、高坏の脚部破片であり、凹線文を4条以上をめぐらせた後、円形の透かし穴が穿たれる。220と221は中央土坑SK3068・SK3069からの出土である。220は甕の口縁部破片で、凹線文2条を施した後縦方向にキザミを多数いれ、円形浮文を貼り付けたものである。221は弥生土器の甕の底部付近であり、内面のケズリが上向きに入れられている。

**遺構の性格と帰属時期** 竪穴住居跡である。出土遺物から弥生時代中期後葉に比定できる。第3面所属であるため、第2面竪穴住居址SI3001～SI3012より古いと考えたが、出土遺物の年代に際立った差はみられなかった。

#### ■ SI3014(図91、遺物図37、遺物観察表37、写真図版43・73)

**位置** 3区第2面北西側N2・N3グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.279mである。SI3002・SI3003に切られる。

**検出状況** 第2面の竪穴住居跡SI3003を完掘し、黒褐色砂質シルト層を掘り下げ、黒色シルト層(3-8層)上面で検出した。遺構埋土等は残っておらず、壁溝・中央土坑・ピットのみを検出である。  
**平面形状・規模・礎石の有無** 平面形は円形で、やや隅丸方形さみになる。残存長軸5.259m・短軸4.880mを測る。断面形は浅い盤形で床面までの深さは0.072mだけ残る。貼床は検出できない。

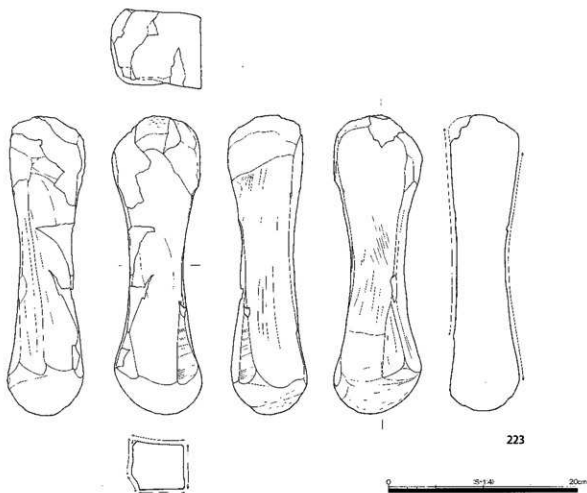
SK3060とSK3061は中央土坑と思われる。SK3060がSK3061を切り、規模はSK3060が(0.795m×0.680m-0.108m)、SK3061が(残存0.705m×0.683m-0.114m)である。

柱穴は6基が確認できる。P3444-P3448、P3446-P3450、P3447-P3452がそれぞれ対になる。規模はP3444は(0.501m×0.487m-0.531m)、P3448は(0.655m×0.510m-0.409m)、P3446は(0.729m×0.486m-0.191m)、P3450は(0.475m×0.439m-0.378m)である。P3447は(0.487m×0.443m-0.625m)、P3452は(0.546m×残存0.419m-0.569m)である。形状は、ほとんどが平面形が円形で、断面形はU字形もしくは円筒形を示す。P3446のみが平面形が楕円形で断面形が有段U字形を示す。P3444・P3448・P3447・P3452の4基が深さ40～60cm前後で深く掘り込まれ、P3446・P3450がやや浅い。後者2基が補助柱穴的な役割を果たしていたのではないかと考えられる。P3444とP3448のみ、礎石がある。

**柱穴埋土** 遺構内埋土は黒褐色砂質シルトを主体とする。暗褐色砂を少量含み、炭化物を微量含む。柱穴埋土は、非常に深く掘り込まれている関係で、基盤層由来の黄褐色砂ブロック、暗褐色砂質シルトを含むものが多い。

**遺物出土状況** 埋土中・ピット内・壁溝内から土器片12点・石器1点、他に被熱により割れた磁器が数点出土した。土器片のうち2点が弥生土器の甕の口縁部である。石器1点を掲載する。223は床面直上からの出土であり、被熱により7点以上の破片に割れて埋没していた。砂岩製の砥石で、直方体の側面4面すべてが著しく磨耗している。部分的に筋状の擦痕が見られる。刃こぼれ調整痕か。

**遺構の性格と帰属時期** 竪穴住居跡である。埋土に炭化物を含むことや砥石の出土状況から、焼失住居であった可能性がある。遺物が少なく細かい年代はわからないが、弥生時代中期中葉にさかのぼる資料はなく、SI3003同様中期後葉と思われる。



223

遺物図37 SI3014出土遺物

遺物観察表 37

遺物 番号	調査区	発掘層号 (掘内番号)	遺物図 番号	図面 番号	種別 器種	法量 (cm)	特徴	粘土/材質	焼成 状況	備考
223	3	SI3014 (3868)	37	73	土器 磁石	長さ:31.7 幅:3.35 厚さ:0.5 重さ:270g	円柱形、断面は方形 胴高4層・脚高4層 1箇所・角2方向に筋方向の彫りかぼたの痕ざら あり	砂質(赤紫)	灰黄褐色・にぶい 灰斑	

## ■ SI3015(図 92-1・92-2、遺物図 38、遺物観察表 38、写真図版 44・73)

位置 3区第3面北西N4・N5グリッドに位置する。遺構確認面の標高は44.444mである。第2面SI3006の北側に位置し、SI3006がSI3015の南側端部を切る。暗渠排水に切られる。

検出状況 第2面遺構検出面上には厚さ1～5cmの黒褐色砂質シルト層が広がっている。この層が弥生時代後期以降の洪水性の堆積層の一つと思われ、この層で覆われているため住居プランが検出できないでいた。基本層序3-7層の黒色シルト層面を検出し、慎重に精査して、ようやく竪穴住居跡の壁溝が浅く環状にめぐることを確認した。

平面形状・規模 平面形は円形である。長軸7.073m・短軸6.917mを測る。貼床面及び床面は黒褐色砂質シルト層によって削られ消失している。断面形は浅い盤形で、深さは0.054mが残る。噴溝は5cm程度遺存する。

中央土坑1基・土坑2基・ピット25基が検出された。ピットのうち柱痕状の痕跡を有するものは14基を数える。各ピットの規模は3区遺構一覧表の表10～20で示す。このうち、6基が主柱穴と思われる。エレベーション図A-A'で示したP3478とP3464、B-B'のP3457とP3466、C-C'のP3459とP3476が、SI3015の主柱穴であろう。





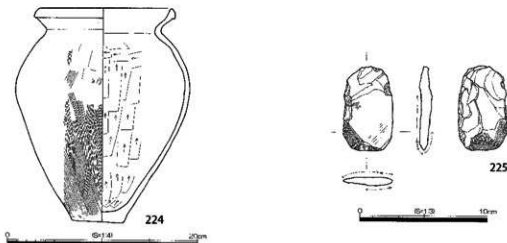
SI3015は、完掘状態で見る限り、円形住居で壁溝が1条めぐり、6基の主柱穴を有し、住居のほぼ中心に中央土坑を備え、中央土坑の両脇に小ピットを備えるという、いわゆる「松菊里型竪穴住居」の様相を呈する。「松菊里型竪穴住居」は、韓国忠清南道の松菊里遺跡の竪穴住居跡を指標とするもので、日本では弥生時代中期前葉頃の北部九州を中心に日本列島各地に広がりを持ち、円形住居の祖形の一つとされる。3区の集落の存続時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉を中心としており、「松菊里型竪穴住居」が構築されるには時代が下りすぎる感がある。ただし、これまでの出土事例で見る限り、この住居の未掘については、「中国地方、近畿地方では弥生時代終末期（一部の地域では古墳時代前期）まで根強く営まれ<sup>222</sup>」るとされ、時期的・地域的に矛盾するわけではない。当該地ではこの住居跡以外に中央土坑両脇に小ピットを備えるタイプのものは確認できず、これ1棟のみである。ここでは「松菊里型竪穴住居」の可能性を指摘するととどめておく。中央土坑脇のピットについてはP3481とP3469以外にもP3481とP3468・P3469の組み合わせも考えられる。

**柱穴埋土・礎石の有無** 各柱穴埋土は、直上に堆積していた黒褐色砂質シルト層とその上層にあった暗褐色砂層とが混合した状態のものが多い。礎石の確認できるものはない。

**遺物出土状況** SI3015住居範囲内の埋土中・壁溝内・ピット内から土器片63点が出土した。このうち4点が弥生土器の甕の口縁部破片である。P3465出土の小型の甕(224)が唯一の個体別資料であり、時代は弥生時代中期であろう。また、壁溝SD3020を切るSK3077から1点有孔土製円盤が出土している。実測図は2点掲載する。224は弥生土器の小型の甕である。P3465内に天地逆で埋没していた。口縁端部は玉縁状で凹線はない。225は粘板岩製の石斧である。

**遺構の性格と帰属時期** 竪穴住居跡である。第3面所属であり、第2面所属の住居跡にくらべて古いと思われるが、出土遺物からは弥生時代中期中葉にまでさかのぼる資料はなく、弥生時代中期後葉に帰属すると思われる。

註2 藤山誠一 1997「松菊里型(系)竪穴住居」『埋蔵文化財愛知 no.55』財団法人愛知県埋蔵文化財センター



遺物図38 SI3015出土遺物

遺物観察表 38

遺物番号	所在区	遺構番号 (調査番号)	遺物所属 層位	遺物 名称	重量 (g)	特徴	出土/材質	発色 状態	備考
224	3	P3465 (1023)	3B	弥生土器 甕	口径 13.8 胴高 22.7 最大径 1R.2 底径 5.4	外面: 口縁部一部割ナデ、体部トキズリ痕ナデ。 体部トキズリハナテ、底割ナデ。 内面: 口縁部ナデ、体部一部割ナデ。	口縁部 約0.5mmの砂粒。 少ない。	やや良好 外面: 磨 内面: 磨	外面割付面
225	3	P3467 (4002)	3B	石斧 石斧	長さ 5.7 幅 3.5 厚さ 0.9 重さ 27.4	磨製。刃部を中心に研削痕あり 両側縁に細かい割痕あり 磨刃	粘板岩	灰	



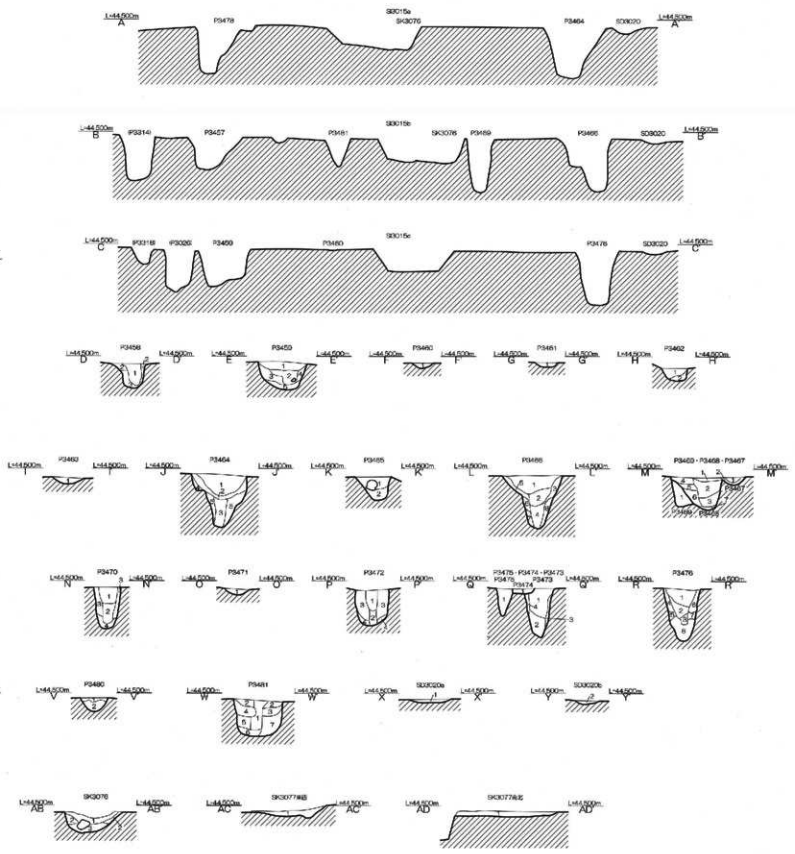
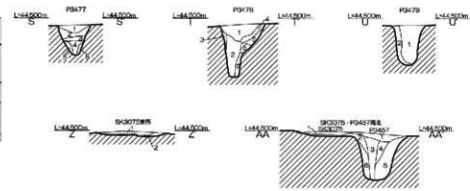
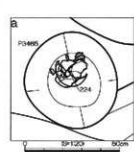
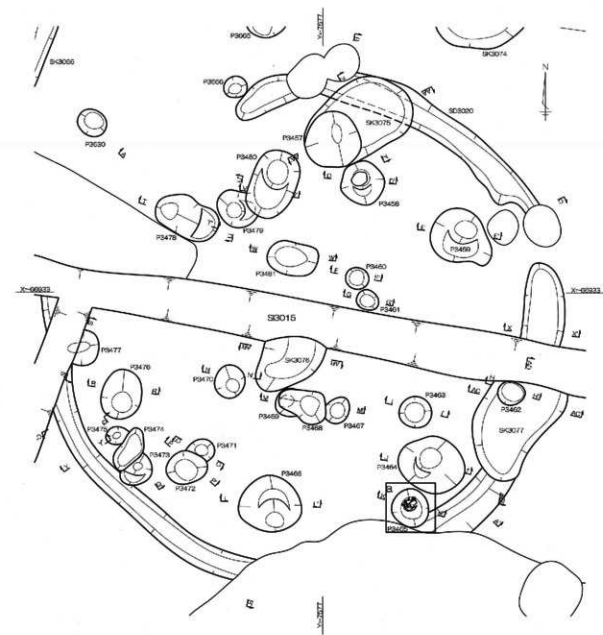
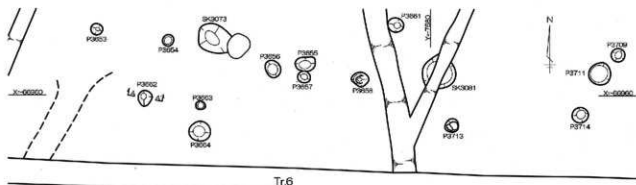


図92-2 S13015遺構図





■ P3662( 図 93、写真図版 40)

位置 第3面南西側のP4・Q4グリッドに位置する。

遺構確認面の標高は44.170mである。

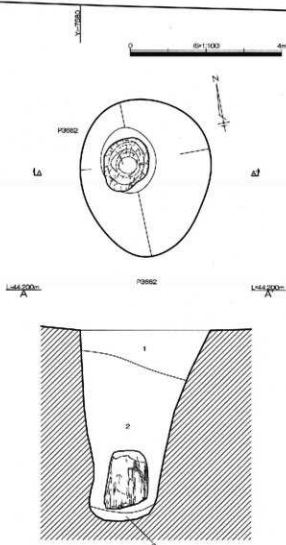
検出状況 にぶい黄褐色砂層と黒褐色砂質シルト層を除去し、黒色土層(3-8層)上面で検出された。底面直上には柱根が残っており、樹種同定の結果クリであることがわかった。年代は放射性炭素年代測定によって、現代から2100年前頃の弥生中期とわかった。周辺区域を5m×6mの規模で面下げて関連ピットがないか確認作業をおこなったが、この柱とセット関係になる遺構は見つけられなかった。酸化鉄集中が畦畔状に残される地点があり、耕作地の隅に立てられていた可能性はあるが、確定的とはいえない。

平面形状・規模 平面形は楕円形で、長軸0.416m・短軸0.369mを測る。断面形は深いU字形で、確認面からの遺構底面までの深さは0.498mである。壁面調整の状態は確認できない。柱根の残存規模は、残存高15.5cm・残存最大径14.9cmを測る。

埋土 柱根の上層は灰黄褐色砂質シルト主体で砂粒を多く含む。柱根の下層は黒褐色粘土質シルト主体層で粘性が強い。

遺物出土状況 柱根以外に遺物は出土していない。

遺構の性格と所属時期 クリ材を用いた柱穴である。年代は、出土した柱根の放射性炭素年代測定と暦年較正の結果、B.C.110年±30年の年代が示された。この時期は弥生時代土器編年でみれば、畿内IV期・吉備III期の平行期と考えられる。当該地の弥生中期後葉の土器群の年代と矛盾せず、同時期のものと思われる。(第2章第1節参照)



P3662土層調査表

層番号	形 name 土名	土質	遺人物
1	10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルト	褐色砂少量、酸化鉄沈着、 砂粒多い、粘土質、締りあり	
2	10YR5/2 黒褐色 シルト	柱根残存、灰黄褐色砂20%、 粘性中程度、締りあり	
3	10YR3/2 黒褐色 シルト	灰褐色粘土質シルト10%、 粘性中程度、締りあり	

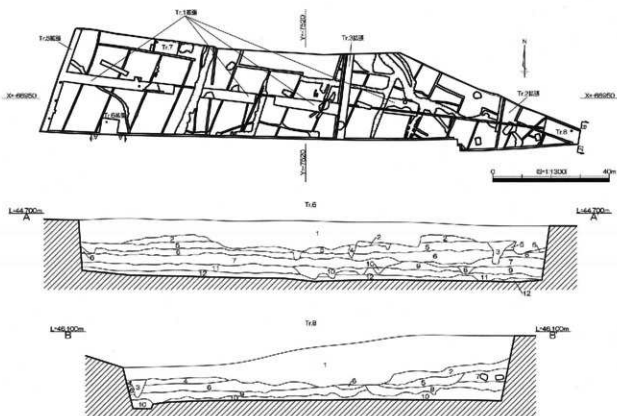
図93 P3662遺構図

第6項 3区 第4面 遺構と遺物 (図94、写真図版45)

黒色土層(3-8層)の残っている箇所、何らかの遺構が残っている可能性が比較的高い箇所について、トレンチを設定して面下げをおこない、見落としの遺構がないかどうか確認した。

Tr.1 拡張を3箇所でおこない、Tr.2 拡張・Tr.3 拡張・Tr.5 拡張・Tr.6 拡張と、新たに Tr.7・Tr.8 を掘削して、遺構確認と調査をおこなった。

調査の結果、ピット 11 基・土坑 1 基・落ち込み 3 箇所・倒木痕 3 箇所が確認された。土坑 1 基は礫の集中する落ち込みで、ピットのほとんどは根跡と 3 面から掘りぬいたピットの最深部の残りである。



3区 Tr.6南端 土層観察表

層番号	JIS notation 土色	土質	人物名	主な 遺物
1	10YR4/1 黒灰色	砂質シルト	埋土土及び埋埋遺物の腐土・池底層、 径10cm以下の円形多角、 土柱あり、網りや中硬質	3-1層
2	10YR5/1 黒灰色	砂質シルト	埋埋遺物20cm以上の腐土、 土柱あり、網りや中硬質	3-2層
3	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	埋埋遺物20cm以上の腐土、 土柱あり、網りや中硬質	3-3層
4	10YR3/2灰黄褐色	砂質シルト	柱状埋土、土柱あり、網りや中硬質	3-4層
5	10YR5/3 に灰・黄褐色	砂	黒灰色砂質シルト30%、 網りや中硬い、網りや中硬質	3-4層
6	10YR5/1 黒灰色	シルト	に灰・黄褐色約30%、粘性や中硬い、 網りや中硬質	3-4層
7	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黒色土層、黒灰色砂質シルト20%、 土柱あり、網りや中硬質	3-8層
8	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	落ち込み、黒褐色砂質シルト20%、 土柱あり、網りあり	3-8層
9	10YR3/3 暗褐色	シルト	一部埋埋物、に灰・黄褐色約30%、 酸化生成物、土柱あり、網りあり	3-8層
10	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	埋埋、黒褐色砂質シルト40%、 粘性あり、網りあり	3-9層
11	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	埋埋、粘性強い、網りあり	3-9層
12	10YR4/3 に灰・黄褐色	粘土	黒褐色、粘性強い、網りあり	3-10層

3区 Tr.8東端 土層観察表

層番号	JIS notation 土色	土質	人物名	主な 遺物
1	10YR5/3 に灰・黄褐色	砂質シルト	埋土土及び埋埋遺物の腐土・池底層、 径10cm以下の円形多角、 土柱あり、網りや中硬質	3-1層
2	10YR3/1 黒色	シルト	暗褐色砂質シルト20%、 粘性あり、網りあり	3-8層 埋木
3	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	埋埋遺物、黒褐色砂質シルト30%、 粘性あり、網りあり	3-8層
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	埋埋遺物、黒褐色砂質シルト20%、 粘性あり、網りや中硬質	3-8層
5	10YR3/2 黒褐色	シルト	埋埋遺物、黒褐色砂質シルト20%、 粘性あり、網りあり	3-8層
6	10YR3/2 黒褐色	シルト	埋埋遺物、黒褐色砂質シルト20%、 粘性あり、網りあり	3-8層
7	10YR3/3 暗褐色	シルト	直径12cm大の礫あり、黒褐色シルト 少量、粘性や中硬い、網りや中硬質	3-9層
8	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	に灰・黄褐色約30%、 粘性あり、網りあり	3-9層
9	10YR6/3 に灰・黄褐色	シルト	埋埋物、灰黄褐色約40%、 粘性あり、網りや中硬質	3-9層
10	10YR7/3 シルト	シルト	埋埋物、に灰・黄褐色砂質シルト10%、 粘性あり、網りあり	3-10層

図94 3区 Tr.6・Tr.8セクション図

第7項 3区 遺構外出土石器(図95・96、遺物図39～41、遺物観察表39～41-2、巻頭図版6・7、写真図版27・73～76)

3区では耕作土及び遺物包含層中から多数の石器類が出土した。石包丁・石鎌・石槍等が多く、多くが弥生時代のものと思われる。出土地点は、遺構外の暗褐色砂層内・黄灰色砂層・攪乱・耕作土中である。基本層序に対応させると、攪乱:3-1層、耕作土:3-1層・3-2層、暗褐色砂層:3-3層、黄灰色砂層:3-4層となる。石器についての概要は、遺物観察表39～41-2及び「第3章 総括」の「第3節 奈免羅・西の前遺跡出土石器の様相」を参照。

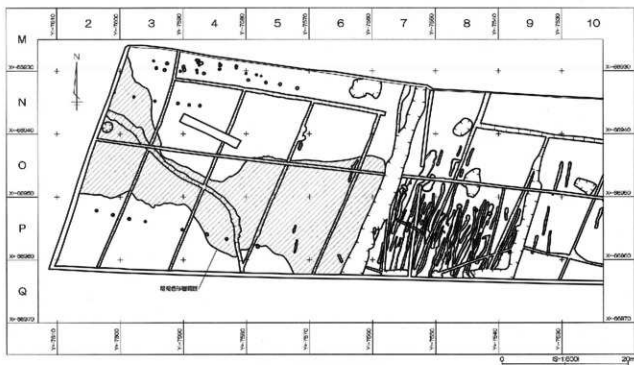


図95 3区暗褐色砂層範囲

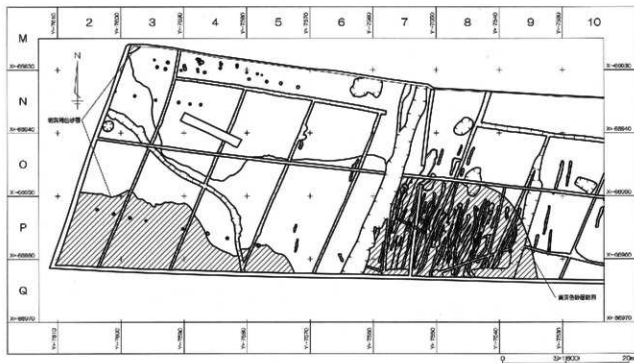
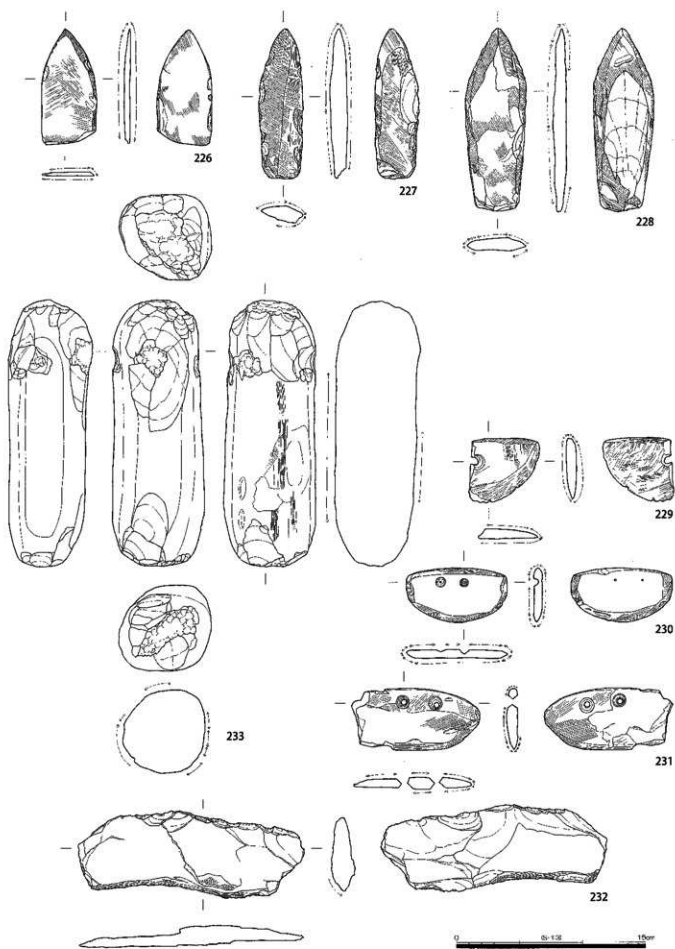


図96 3区明黄褐色砂層・黄灰色砂層範囲



遺物図39 暗褐色砂層出土遺物

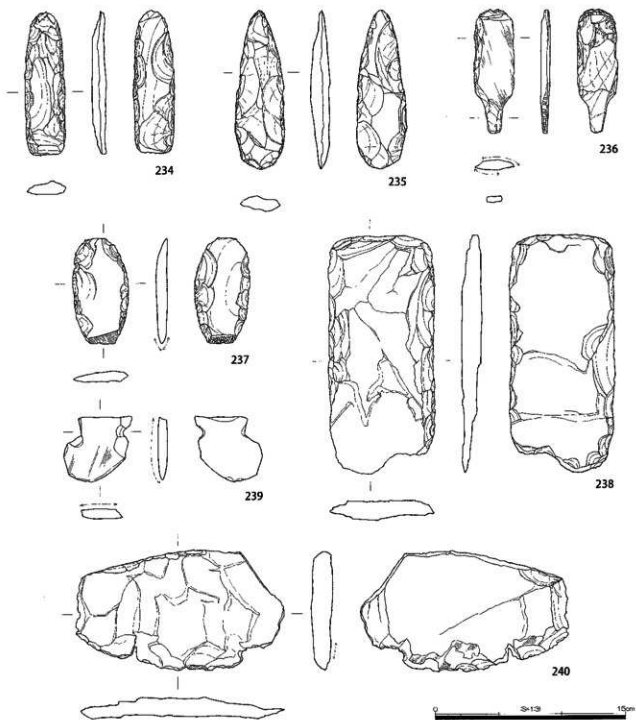


遺物観察表 39

遺物番号	調査区	出土地点	遺物番号	図版番号	種類	材質	重量 (cm/g)	特徴	出土/材質	焼成色調	備考
226	3	Q8 暗褐色砂層	39	73	石製 石製	石製	長さ 9.25 ~ 幅 4.35 厚さ 0.5 重さ 29.3	扁型 先端部に明確により刃を作る	緑色千枚岩	オリブ灰	短欠損 決断片の再加工品か
227	3	N5 暗褐色砂層	39	73	石製 石製	石製	長さ 11.9 幅 3.5 厚さ 1.35 重さ 81.3	磨製 打打により成形後全体的に研磨 削い・研削痕あり	緑色岩	オリブ灰	
228	3	P6 暗褐色砂層	39	74	石製 (石製)	石製	長さ 14.45 幅 4.08 厚さ 1.8 重さ 107.0	磨製、表面・刃部に強い研削痕等 先端から離人指部分まで対する	白閃石(新第三紀)	灰	未製品か
229	3	N4 暗褐色砂層	39	71	石製 石製	石製	長さ 5.8 ~ 幅 5.1 ~ 厚さ 0.8 重さ 30.6	外周刃半円形 磨製、研削痕あり 制断線孔 1箇所(保存径 5.5mm)	黒色岩	灰	
230	3	N5 暗褐色砂層	39	74	石製 石製	石製	長さ 4.3 幅 4.3 厚さ 0.7 重さ 42.9	外周刃半円形 磨製、研削痕あり 両面に末葉部の制断線孔 2箇所あり	緑色岩(ドレフイ)	灰	
231	3	暗褐色砂層 T1.3 ~ T1.4 間	39	74	石製 石製	石製	長さ 10.2 ~ 幅 4.85 厚さ 0.9 重さ 72.0	割片形 磨製、研削痕あり 制断線孔 2箇所(径 4.5mm・径 4mm)	緑色千枚岩	灰・オリブ灰	
232	3	Q8 暗褐色砂層	39	74	石製 石製	石製	長さ 17.85 幅 6.6 厚さ 1.85 重さ 205.0	磨打により成形後、刃部を研磨 研削痕なし	緑色千枚岩	灰	
233	3	O8 暗褐色砂層	39	74	石製 石製	石製	長さ 21.1 幅 7.3 厚さ 7.4 重さ 167.7	狭入り 磨り後両端を磨打 両面 4箇所あり	黒片石(ホルン フェルス(新第三 紀))	灰	灰に灰燼

遺物観察表 40

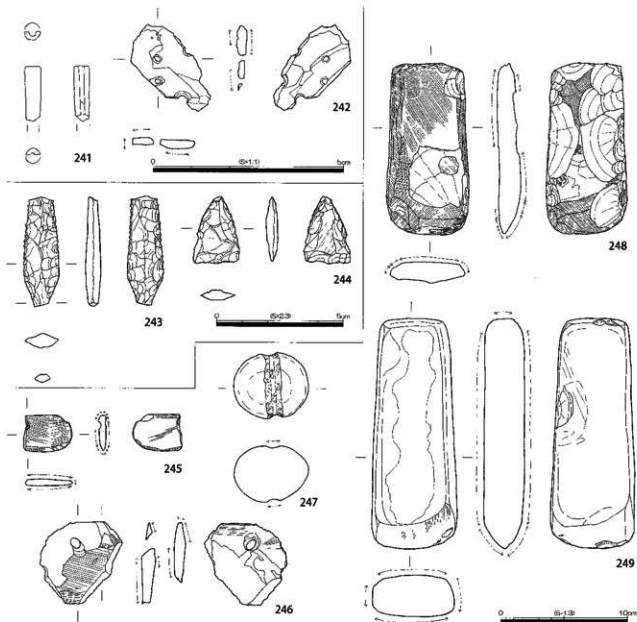
遺物番号	調査区	出土地点	遺物番号	図版番号	種類	材質	重量 (cm/g)	特徴	出土/材質	焼成色調	備考
234	3	P3 黄褐色砂層	40	74	石製 石製	石製	長さ 11.4 幅 3.15 厚さ 1.1 重さ 50.2	打製 割片を素材とし、磨打により成形 刃部に細かい研削痕あり	白閃石(新第三紀)	灰	
235	3	P1 黄褐色砂層 (第1面上)	40	75	石製 石製	石製	長さ 12.6 幅 3.9 厚さ 1.5 重さ 89.1	打製 黄銅の一部分に自然面残る 平面・断面は木目形	白閃石(新第三紀)	灰	
236	3	P2 黄褐色砂層 (第1面上)	40	75	石製 不明	石製	長さ 9.85 幅 3.15 厚さ 0.75 重さ 28.7	磨製、割片を素材とし、一端を磨打により成形 断面の両端は磨り出して作る、両端の両面に強い 研削痕等あり	黒色岩	オリブ灰・灰	未製品の可能性あり
237	3	P9 黄褐色砂層 (第1面上)	40	75	石製 石製	石製	長さ 8.35 幅 4.4 厚さ 0.9 重さ 38.6	磨製 割片を素材とし、両端を磨打後、両面ににより刃 部を作る	白閃石(新第三紀)	オリブ灰	
238	3	P3 黄褐色砂層 (第1面上)	40	75	石製 石製	石製	長さ 18.95 幅 6.4 厚さ 1.65 重さ 399.0	打製 両側面に細かい割断痕	緑色片岩	オリブ灰	先端一部欠損
239	3	Q2 黄褐色砂層 (第1面上)	40	75	石製 石製	石製	長さ 5.4 ~ 幅 5.15 ~ 厚さ 0.7 重さ 28.4	磨製、研削痕あり 制断線孔 1箇所(保存径 4.5mm)	緑色岩	オリブ灰	
240	3	P1 黄褐色砂層 (第1面上)	40	75	石製 (石製)	石製	長さ 16.4 幅 9.55 厚さ 1.7 重さ 362.0	磨打により成形後研磨 両面刃部に研削痕わずかにあり	緑色千枚岩	オリブ灰	



遺物図40 黄灰色砂層出土遺物

遺物觀察表 41-1

遺物番号	調査区	出土地点	遺物図番号	図版番号	類別	法量 (cm/g)	特徴	胎土/材質	烧色/肌	備考
241	3	P12 甕瓦	41	75	石製6面瓦	長さ 1.45 ~ 幅 0.4 厚さ 0.2 ~ 重さ 0.1	円筒形 字孔高は鉄針小、孔内表面は平削、孔の形はほぼ四方形、両側穿孔、孔距 1.5mm	黄土(黄質安山岩)	焼締	尚須江c類 一端欠損
242	3	P9 甕瓦	41	75	石製6面瓦	長さ 3.9 ~ 幅 2.0 ~ 厚さ 0.45 重さ 3.9	穿孔5箇両径 3 ~ 2mm、末葉透穿孔4箇あり	黄土	灰	縁辺一部残存
243	3	O4 破品	41	76	石製石蓋	長さ 4.35 ~ 幅 1.4 厚さ 0.6 重さ 3.7	打製 凸縁有牙縁	黄土(新緑二紀)	黄灰	



遺物図41 3-1層・3-2層出土遺物

遺物観察表 41-2

遺物番号	調査区	出土層位	遺物同番号	調査層位	種別 器種	材質 (cm/g)	特徴	土質 / 材質	焼成 色・跡	備考
244	3	P6 横丸	41	76	石器 石器	長さ 2.65 幅 1.85 厚さ 0.45 重さ 2.1	打製 平縁短平錐	灰土 (新第三紀)	灰	
245	3	K4 横丸	41	76	石器 石器	長さ 3.85 ~ 幅 2.95 厚さ 0.6 重さ 11.8	磨製、研磨痕あり 前後縁丸 1箇所往 2mm 以上残存	緑色土	灰	1/2以上欠損
246	3	O13 横丸	41	76	石器 石器	長さ 6.5 ~ 幅 3.5 ~ 厚さ 1.1 重さ 41.1	磨製、研磨痕あり 前後縁丸 1箇所残存 5mm	灰褐色	焼灰	
247	3	P8 円形片十	41	76	石器 石器	長さ 4.0 幅 5.2 厚さ 4.3 重さ 170.5	打製利用。有溝石器 縁打により前後縁の間に施溝	緑色土山層	灰白	
248	3	P6 横丸	41	76	石器 石器	長さ 13.60 幅 6.35 厚さ 1.85 重さ 264.0	磨製、研磨痕あり 両側縁・底部に研磨痕の痕がみ・2箇所欠あり 両刃	灰土 (新第三紀)	灰	
249	3	F13 山形片上	41	76	石器 石器	長さ 18.3 幅 6.60 厚さ 3.2 重さ 739.0	磨製、後面に研磨痕の痕あり 刃部は両刃で長尺	灰土 (新第三紀)	灰白	刃部部分に欠損 使用時の欠損か

表 10 3 区 道構一覧表 1

路線番号	区間	道種	種別	幅員	形式	Grd	幅員(m)	側溝(m)	横断高の 差(m)	平面形	断面形	現上(土条件)	備考
P3001	3350	ビッド	1	M3	0.267	0.239	0.044	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3001-P3002-P3003-P3004
P3002	3358	ビッド	1	M3-N3	0.453	0.429	0.517	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3001-P3002-P3003-P3004
P3003	4045	ビッド	1	M3-4	0.075	0.464	0.398	扇形	不整形	直形	直形	直形	杭州 P3001-P3002-P3003-P3004
P3004	3409	ビッド	1	M4-5	0.118	0.296	0.336	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3001-P3002-P3003-P3004
P3005	3296	ビッド	1	M3	0.410	0.356	0.292	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3006-P3007-P3008-P3009
P3006	3297	ビッド	1	M3	0.427	0.359	0.177	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3006-P3007-P3008-P3009
P3007	3236	ビッド	1	M3-S3	0.311	0.294	0.193	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3005-P3006-P3007-P3008-P3009
P3008	3153	ビッド	1	M4	0.238	0.234	0.113	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3005-P3006-P3007-P3008-P3009
P3009	4032	ビッド	1	M4	-0.117	0.384	0.181	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3005-P3006-P3007-P3008-P3009
P3010	3071	ビッド	1	M4	0.510	0.355	0.137	扇形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3010-P3010-P3012-P3013
P3011	3072	ビッド	1	M4	0.416	0.304	0.463	扇形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3010-P3010-P3012-P3013
P3012	3073	ビッド	1	M4	0.248	0.230	0.107	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3010-P3010-P3012-P3013
P3013	3074	ビッド	1	M4	0.415	0.303	0.188	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3010-P3010-P3012-P3013
P3014	3410	ビッド	1	M4	0.205	0.182	0.049	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3014-P3015-P3016-P3017
P3015	3144	ビッド	1	M4	0.085	0.320	0.506	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3014-P3015-P3016-P3017
P3016	3077	ビッド	1	M4	0.469	0.338	0.425	扇形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3014-P3015-P3016-P3017
P3017	3178	ビッド	1	M4	0.331	0.306	0.156	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3014-P3015-P3016-P3017
P3018	3145	ビッド	1	M4	0.275	0.260	0.124	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3014-P3016-P3018-P3020-P3021-P3022
P3019	3131	ビッド	1	M4	0.373	0.303	0.215	扇形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3014-P3016-P3018-P3020-P3021-P3022
P3020	4012	ビッド	1	N4-5	0.594	0.230	0.190	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3018-P3018-P3020-P3021-P3022
P3021	4008	ビッド	1	M3	0.033	0.293	0.160	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3018-P3018-P3020-P3021-P3022
P3022	3183	ビッド	1	N5	0.196	0.182	0.271	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3023-P3024-P3025-P3026
P3023	3079	ビッド	1	N5	0.373	0.305	0.173	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3023-P3024-P3025-P3026
P3024	3081	ビッド	1	N5	0.189	0.164	0.200	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3023-P3024-P3025-P3026
P3025	3197	ビッド	1	N5	0.349	0.281	0.496	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3023-P3024-P3025-P3026
P3026	3142	ビッド	1	N5	0.458	0.432	0.380	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3023-P3024-P3025-P3026
P3027	3059	ビッド	1	N3	0.416	0.171	0.468	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3027-P3028-P3029
P3028	3459	ビッド	1	N3	0.356	0.312	0.153	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3027-P3028-P3029
P3029	3307	ビッド	1	N3	0.335	0.326	0.430	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3027-P3028-P3029
P3030	3165	ビッド	1	N3	0.409	0.395	0.169	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3030-P3031-P3032
P3031	3189	ビッド	1	N4	0.372	0.357	0.291	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3030-P3031-P3032
P3032	3168	ビッド	1	N4	0.379	0.370	0.367	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3030-P3031-P3032
P3033	3083	ビッド	1	P2	0.378	0.364	0.161	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3033-P3034-P3035-P3036
P3034	3084	ビッド	1	P2	0.418	0.413	0.485	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3033-P3034-P3035-P3036
P3035	3055	ビッド	1	P3	0.462	0.394	0.395	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3033-P3034-P3035-P3036
P3036	3485	ビッド	1	M3	0.318	0.301	0.243	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3033-P3034-P3035-P3036
P3037	3088	ビッド	1	P3	0.368	0.348	0.373	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3037-P3038-P3039-P3040
P3038	3096	ビッド	1	P4	0.536	0.476	0.280	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3037-P3038-P3039-P3040
P3039	3412	ビッド	1	P5	0.409	0.402	0.179	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3037-P3038-P3039-P3040
P3040	3324	ビッド	1	PS	0.478	0.453	0.166	円形	直形	直形	直形	直形	SK3021 含む
P3041	3034	ビッド	1	07	0.327	0.298	0.131	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3037-P3038-P3039-P3040
P3042	3935	ビッド	1	07	1.160	0.890	0.240	不整形	不整形	直形	直形	直形	杭州 P3043-P3044-P3045
P3043	3244	ビッド	1	08	0.785	0.760	0.423	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3043-P3044-P3045
P3044	3248	ビッド	1	08	0.949	0.493	0.333	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3043-P3044-P3045
P3045	3258	ビッド	1	09	0.662	0.592	0.363	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3043-P3044-P3045
P3046	4069	ビッド	1	P15	0.694	0.679	0.347	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3046-P3049-P3050-P3051
P3047	4074	ビッド	1	P15	0.924	0.588	0.233	不整形	不整形	直形	直形	直形	杭州 P3046-P3049-P3050-P3051
P3048	4078	ビッド	1	Q14-15	0.759	0.488	0.328	扇形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3049	4070	ビッド	1	Q15	1.102	1.102	0.370	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3050	4077	ビッド	1	Q15	0.519	0.485	0.407	円形	V字	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3051	4071	ビッド	1	Q15	0.874	0.760	0.286	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3052	4072	ビッド	1	Q15	0.845	0.771	0.293	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3053	3048	ビッド	1	Q16	1.100	0.725	0.312	円形	直形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3054	第3003	ビッド	1	Q16	0.311	0.619	0.094	扇形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3055	3048	ビッド	1	Q16	0.743	0.631	0.385	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3056	3050	ビッド	1	Q17	0.355	0.319	0.164	円形	円形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3057	3145	直立柱建物物状	2	SR3001	M4	0.903	0.507	0.207	扇形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3058	3147	直立柱建物物状	2	SR3001	M4-N4	0.011	0.629	0.236	扇形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3059	3148	直立柱建物物状	2	SR3001	M4	0.763	0.537	0.113	扇形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3060	3149	直立柱建物物状	2	SR3001	N4	0.571	0.478	0.154	扇形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051
P3061	3110	直立柱建物物状	2	SR3002	N6	0.521	0.454	0.143	円形	直形	直形	直形	杭州 P3048-P3049-P3050-P3051

表11 3区 遺構一覧表2

遺構番号	遺構名	遺構形状	面	面積(m <sup>2</sup> )	Grid	距離(m)	距離(m)	距離(m)	平面形	断面形	構造上(土質上)	備考
P3062	3114	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83002	N6	0.461	0.408	0.104	円形	浅い円形	付着：淡黄色土層上 土層上：黒褐色シルト	
P3063	3113	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83002	N6	0.491	0.075	0.075	円形	浅い円形	付着：オレンジ色砂質シルト 土層上：黒褐色シルト	
P3064	3115	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83002	O6	0.285	0.252	0.076	円形	浅い円形	付着：淡黄色土層上 土層上：黒褐色シルト	
P3065	3496	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83006	O9	0.282	0.261	0.029	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	礎石あり
P3066	3497	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83006	O9	0.366	0.328	0.348	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3067	3501	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83006	O9	0.445	0.322	0.571	円形	U字形	土層上：淡黄色砂質シルト	
P3068	3498	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83006	O9	0.237	0.305	0.464	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3069	3547	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O10	0.478	0.427	0.268	円形	有段円形	淡黄色砂質シルト	
P3070	3475	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O10	0.407	0.187	0.283	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	土層を掘削に引られる
P3071	3548	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	P9	0.404	0.488	0.257	円形	U字形	淡黄色シルト	
P3072	3474	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	P10	0.628	0.430	0.280	不規則円形	W字形	土層上：黒褐色シルト	
P3073	3538	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	O10	0.488	0.478	0.413	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3074	3538	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	O10	0.489	0.374	0.258	円形	V字形	土層上：オレンジ色砂質シルト	
P3075	3527	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	O11-P11	0.427	0.414	0.389	円形	V字形	淡黄色砂質シルト	
P3076	3531	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	P10	0.507	0.296	0.375	楕円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3077	3535	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	P10	0.533	0.361	0.209	楕円形	W字形	淡黄色砂質シルト	
P3078	3534	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	P11	0.408	0.388	0.259	円形	U字形	土層上：淡黄色砂質シルト	
P3079	3501	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	O13	0.618	0.391	0.156	円形	楕円形	淡黄色シルト	
P3080	3532	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	O13	0.590	0.536	0.156	楕円形	楕円形	淡黄色シルト	
P3081	3533	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	O13	0.508	0.685	0.233	楕円形	楕円形	淡黄色シルト	
P3082	3534	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	O13	0.575	0.548	0.221	円形	楕円形	淡黄色シルト	
P3083	3535	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	O13	0.394	0.349	0.200	円形	楕円形	淡黄色シルト	
P3084	3536	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	O12	0.403	0.361	0.246	円形	楕円形	淡黄色土層上シルト	
P3085	3537	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	O13-P13	0.719	0.598	0.312	楕円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3086	3541	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	P13	0.384	0.342	0.113	円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3087	3538	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	P13	0.558	0.534	0.099	円形	楕円形	淡黄色シルト	
P3088	3539	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	P13	0.480	0.532	0.056	楕円形	楕円形	淡黄色シルト	
P3089	3540	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83002	N6	0.622	0.594	0.836	円形	有段円形	淡黄色砂質シルト	
P3090	4034	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83002	N3	0.370	0.191	0.508	円形	楕円形	淡黄色シルト	下5基層で検出。第2層S83002のピット、P3089に引られる
P3091	4032	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83002	MG-3	0.351	0.345	0.837	円形	有段円形	淡黄色砂質シルト	T65 掘削で検出。第2層S83002のピット、P3089に引られる
P3092	3448	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.561	0.543	0.484	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3093	3449	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.380	0.374	0.452	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3094	3450	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.465	0.418	0.185	円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	S83006に引られる
P3095	3460	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.382	0.363	0.227	円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3096	3508	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.457	0.412	0.541	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	礎石あり
P3097	3451	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.690	0.394	0.179	円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3098	3510	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.416	0.405	0.527	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	礎石あり
P3099	3493	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.438	0.365	0.588	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	礎石あり
P3100	3511	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.528	0.295	0.291	楕円形	楕円形	土層上：淡黄色砂質シルト	
P3101	3513	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83003	N3	0.464	0.434	0.507	円形	楕円形	淡黄色シルト	
P3102	3431	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N3	0.655	0.448	0.817	円形	U字形	土層上：淡黄色砂質シルト	礎石あり
P3103	3738	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N4	0.377	0.376	0.411	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3104	3430	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N4	0.443	0.351	0.811	円形	小形U字形	淡黄色砂質シルト	
P3105	3737	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N4	0.490	0.434	0.418	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3106	3435	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N3-N4	0.434	0.203	0.427	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3107	3529	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N4	0.470	0.305	0.630	楕円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3108	3436	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N3	0.493	0.466	0.761	円形	U字形	淡黄色土層上シルト	
P3109	3434	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N3	0.579	0.554	0.399	円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3110	3433	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N3	0.504	0.478	0.452	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3111	3735	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N3	0.504	0.387	0.205	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	P3110に引られる
P3112	3432	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83004	N3	0.621	0.424	0.286	楕円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3113	3536	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.507	0.480	0.484	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3114	3537	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.887	0.728	0.720	楕円形	有段U字形	淡黄色砂質シルト	
P3115	3434	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.428	0.426	0.640	円形	U字形	淡黄色土層上シルト	
P3116	3534	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.712	0.465	0.868	不整形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3117	3456	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.508	0.421	0.821	不整形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3118	3423	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.466	0.388	0.509	不整形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3119	3539	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.454	0.433	0.724	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3120	3458	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.488	0.412	0.497	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3121	3562	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.862	0.679	0.780	不整形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3122	3457	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.655	0.618	0.801	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3123	3560	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.693	0.623	0.832	楕円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3124	3591	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.744	0.520	0.731	不整形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3125	3563	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.603	0.177	0.100	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3126	3568	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.523	0.211	0.638	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3127	3568	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.571	0.536	0.702	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3128	3567	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.636	0.509	0.792	不規則円形	不整形	淡黄色砂質シルト	礎石あり
P3129	3565	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O4	0.500	0.249	0.451	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3130	3427	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O4	0.386	0.282	0.412	楕円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3131	3426	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O4	0.430	0.365	0.553	楕円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3132	3428	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O4	0.287	0.282	0.473	楕円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3133	3421	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O4	0.548	0.524	0.420	不規則円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3134	3429	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O4	0.543	0.505	0.619	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3135	3374	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O4	0.473	0.423	0.291	円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3136	3375	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.504	0.447	0.689	円形	U字形	淡黄色砂質シルト	
P3137	3572	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	MG-O4	0.782	0.495	0.425	円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3138	3572	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	K4-O4	0.782	0.495	0.556	楕円形	U字形	淡黄色砂質シルト	礎石あり、P3137とP3138に区分
P3139	3571	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.552	0.505	0.783	不整形	U字形	淡黄色砂質シルト	礎石あり、P3137とP3138に区分
P3140	3373	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	O4	0.345	0.337	0.385	楕円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	
P3141	3539	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.736	0.405	0.541	楕円形	有段U字形	淡黄色砂質シルト	
P3142	3520	竪穴柱礎跡柱穴	2	S83005	N4	0.470	0.386	0.390	円形	楕円形	淡黄色砂質シルト	

表 12 3 区 遺構一覧表 3

遺構番号	名称	遺構形状	山	面高	Gen	遺構(0)	埋積(0)	電線からの深さ(0)	平面形	断面形	遺土(土体土)	備考
P3143	3531	竪穴住居跡	2	S3005	N4	0.288	0.219	0.623	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3144	3355	竪穴住居跡	2	S3005	N4	0.419	0.250	0.488	円形	円形	黒褐色砂質シルト	住居内溝から成立
P3145	3553	竪穴住居跡	2	S3005	N4	0.437	0.337	0.521	不整形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3146	3738	竪穴住居跡	2	S3005	N4	0.348	0.316	0.383	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3147	3741	竪穴住居跡	2	S3005	N4	0.470	0.408	0.456	不整形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3148	3739	竪穴住居跡	2	S3005	N4	0.362	0.315	0.318	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3149	3740	竪穴住居跡	2	S3005	N4	0.348	0.337	0.456	円形	円形	灰褐色砂質シルト	
P3150	3094	竪穴住居跡	2	S3006	N5	1.164	0.711	0.275	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3151	3514	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.613	0.408	0.686	円形	円形	黒褐色砂質シルト	埋石あり
P3152	3505	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.768	0.573	0.567	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	埋石あり
P3153	3516	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.783	0.591	0.125	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3154	3515	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.369	0.333	0.135	円形	円形	黒褐色砂質シルト	埋石あり
P3155	3506	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.437	0.367	0.280	円形	円形	黒褐色砂質シルト	埋石あり
P3156	3513	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.407	0.388	0.310	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3157	3116	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.853	0.765	0.664	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3158	3081	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.876	0.809	0.741	円形	円形	黒褐色砂質シルト	埋石あり
P3159	3095	竪穴住居跡	2	S3006	N5	1.074	0.550	0.787	不整形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3160	3202	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.593	0.287	0.139	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3161	3519	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.490	0.326	0.187	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3162	3518	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.377	0.323	0.522	円形	円形	黒褐色砂質シルト	埋石あり
P3163	3517	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.317	0.249	0.303	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3164	3096	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.384	0.333	0.805	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3165	3008	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.368	0.359	0.237	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3166	3007	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.304	0.280	0.154	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3167	3092	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.731	0.600	0.692	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3168	3100	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.360	0.350	0.195	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3169	3104	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.670	0.571	0.696	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3170	3521	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.432	0.395	0.375	円形	円形	灰褐色砂質シルト	
P3171	3105	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.345	0.333	0.115	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3172	3083	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.144	0.776	0.733	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3173	3528	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.409	0.357	0.184	円形	直形	灰褐色砂質シルト	
P3174	3107	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.690	0.594	0.575	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3175	3108	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.453	0.315	0.234	円形	直形	灰褐色砂質シルト	
P3176	3109	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.428	0.391	0.152	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3177	3106	竪穴住居跡	2	S3006	N5	0.388	0.300	0.061	円形	直形	灰褐色砂質シルト	
P3178	3438	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.438	0.422	0.370	円形	円形	埋石あり	
P3179	3239	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.520	0.430	0.380	楕円形	円形	埋石あり	
P3180	3383	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.283	0.243	0.693	円形	直形	埋石あり	
P3181	3382	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.316	0.206	0.260	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3182	3420	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.463	0.434	0.308	円形	円形	黒褐色砂質シルト	埋石あり
P3183	3384	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.334	0.291	0.313	円形	円形	埋石あり	埋石あり
P3184	3959	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.495	0.418	0.097	円形	直形	黒褐色砂質シルト	P3185を参照
P3185	3958	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.372	0.361	0.237	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3186	3956	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.651	0.328	0.274	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3187	3957	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.260	0.220	0.278	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3188	3955	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.296	0.293	0.330	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3189	3292	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.284	0.249	0.104	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3190	3288	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.371	0.327	0.387	円形	円形	灰褐色砂質シルト	
P3191	3289	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.393	0.367	0.092	円形	円形	灰褐色砂質シルト	
P3192	3407	竪穴住居跡	2	S3011	06	0.528	0.470	0.279	円形	直形	黒褐色砂質シルト	S3005を参照
P3193	3063	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.689	0.477	0.569	不整形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3194	4080	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.407	0.382	0.484	円形	円形	埋石あり	埋石あり
P3195	3461	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.362	0.358	0.444	円形	円形	埋石あり	埋石あり
P3196	3067	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.642	0.440	0.385	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3197	3068	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.588	0.546	0.448	楕円形	円形	灰褐色砂質シルト	
P3198	3006	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.614	0.590	0.470	不整形	円形	埋石あり	S3005とP3198を参照
P3199	3295	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.282	0.264	0.097	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3200	3299	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.662	0.599	0.387	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3201	3299	竪穴住居跡	2	S3012	06	0.484	0.458	0.069	円形	直形	埋石あり	埋石あり
P3202	3468	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.777	0.659	0.813	円形	円形	灰褐色砂質シルト	
P3203	3116	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.537	0.490	0.054	円形	直形	埋石あり	埋石あり
P3204	3282	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.296	0.271	0.490	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3205	3264	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.588	0.548	0.435	不整形	楕円形	灰褐色砂質シルト	
P3206	3915	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.392	0.367	0.132	楕円形	直形	埋石あり	埋石あり
P3207	3944	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.392	0.367	0.307	不整形	円形	灰褐色砂質シルト	
P3208	3943	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.397	0.367	0.181	不整形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3209	3415	竪穴住居跡	2	S3010	08	1.010	0.417	0.165	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3210	3731	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.124	0.040	0.293	楕円形	円形	埋石あり	埋石あり
P3211	3732	竪穴住居跡	2	S3010	08	0.581	0.474	0.279	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3212	3936	竪穴住居跡	2	S3010	07	0.437	0.427	0.171	円形	円形	埋石あり	埋石あり
P3213	3641	竪穴住居跡	2	S3010	07	0.423	0.292	0.630	楕円形	円形	埋石あり	埋石あり
P3214	3642	竪穴住居跡	2	S3010	07	0.384	0.328	0.239	不整形	円形	埋石あり	埋石あり
P3215	3940	竪穴住居跡	2	S3010	07	0.377	0.340	0.140	不整形	直形	埋石あり	埋石あり
P3216	3271	竪穴住居跡	2	S3010	07	0.385	0.313	0.173	楕円形	円形	埋石あり	埋石あり
P3217	3469	竪穴住居跡	2	S3010	07	0.549	0.509	0.172	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3218	3480	竪穴住居跡	2	S3010	07	0.326	0.294	0.157	円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3219	3170	竪穴住居跡	2	S3007	08-9	0.579	0.445	0.339	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3220	3541	竪穴住居跡	2	S3007	08	0.354	0.296	0.455	円形	円形	黒褐色砂質シルト	
P3221	3396	竪穴住居跡	2	S3007	08	0.310	0.368	0.136	楕円形	直形	埋石あり	埋石あり
P3222	3387	竪穴住居跡	2	S3007	08	0.534	0.428	0.167	楕円形	直形	黒褐色砂質シルト	
P3223	3231	竪穴住居跡	2	S3007	08	0.569	0.404	0.497	楕円形	円形	灰褐色砂質シルト	
P3224	3413	竪穴住居跡	2	S3007	09	0.555	0.480	0.542	円形	円形	黒褐色砂質シルト	P3224とP3225区区分
P3225	3413	竪穴住居跡	2	S3007	09	0.553	0.440	0.542	円形	円形	黒褐色砂質シルト	P3224とP3225区区分
P3226	3714	竪穴住居跡	2	S3007	09	0.482	0.278	0.273	円形	直形	灰褐色砂質シルト	

表 13 3区 遺構一覧表 4

遺構番号	遺構種類	遺構名称	所在	面積 (㎡)	幅 (m)	延長 (m)	高さ (m)	平面形	断面形	層位 (土層上)	備考	
P3227	3417	堀穴住居跡	2	S3007	Gd	0.443	0.248	0.558	円形	U字形	灰黄色砂質シルト	
P3228	3306	堀穴住居跡	2	S3007	08-9	1.006	0.613	0.396	円形	U字形	灰黄色砂質シルト	P3228 と P3229 に区分
P3229	3306	堀穴住居跡	2	S3007	08-9	0.286	0.297	0.368	円形	U字形	灰黄色砂質シルト	P3228 と P3229 に区分
P3230	3453	堀穴住居跡	2	S3007	09	0.230	0.141	0.176	円形	U字形	灰黄色砂質シルト	
P3231	3453	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.580	0.185	0.345	円形	U字形	灰黄色砂質シルト	
P3232	3414	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.362	0.346	0.421	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	I1 に切り入れ、P3233 を切る
P3233	3230	堀穴住居跡	2	S3007	08-9	0.309	0.214	0.135	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3234	3305	堀穴住居跡	2	S3007	08-9	0.517	0.428	0.189	不整形円形	圆形	黒褐色砂質シルト	
P3235	3394	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.683	0.268	0.352	円形	U字形	灰黄色砂質シルト	P3235 と P3236 に区分
P3236	3394	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.683	0.268	0.229	円形	U字形	灰黄色砂質シルト	P3235 と P3236 に区分
P3237	3303	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.456	0.335	0.457	楕円形	L字形	黒褐色砂質シルト	
P3238	3175	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.505	0.376	0.453	不整形円形	楕円形	灰褐色砂質シルト	
P3239	3302	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.333	0.293	0.094	円形	新設L字形	灰褐色砂質シルト	
P3240	3381	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.640	0.470	0.457	楕円形	台型L字形	灰褐色砂質シルト	
P3241	3173	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.355	0.342	0.059	不整形円形	圆形	灰褐色砂質シルト	
P3242	3651	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.463	0.394	0.455	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3243	3172	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.524	0.464	0.352	不整形円形	U字形	灰褐色砂質シルト	
P3244	3388	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.432	0.403	0.438	不整形円形	U字形	灰褐色砂質シルト	
P3245	3389	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.368	0.322	0.125	円形	圆形	灰褐色砂質シルト	
P3246	3508	堀穴住居跡	2	S3007	05	0.280	0.225	0.182	楕円形	圆形	灰褐色砂質シルト	
P3247	3174	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.289	0.252	0.147	円形	U字形	灰褐色砂質シルト	
P3248	3508	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.281	0.268	0.150	円形	圆形	灰褐色砂質シルト	
P3249	3510	堀穴住居跡	2	S3007	08-9	0.217	0.190	0.107	円形	圆形	灰褐色砂質シルト	
P3250	3525	堀穴住居跡	2	S3007	08-9	0.339	0.336	0.218	円形	U字形	灰褐色砂質シルト	
P3251	3528	堀穴住居跡	2	S3007	08-9	0.162	0.305	0.161	楕円形	U字形	灰褐色砂質シルト	
P3252	3397	堀穴住居跡	2	S3007	08	0.562	0.346	0.564	不整形円形	U字形	灰褐色砂質シルト	
P3253	3478	堀穴住居跡	2	S3008	P12	0.615	0.605	0.272	円形	圆形	黒色砂質シルト	
P3254	3479	堀穴住居跡	2	S3008	P12	0.578	0.504	0.181	不整形円形	圆形	灰色砂質シルト	
P3255	3481	堀穴住居跡	2	S3008	P12	0.491	0.428	0.448	不整形円形	圆形	黒褐色砂質シルト	
P3256	3480	堀穴住居跡	2	S3008	P12	0.485	0.473	0.205	円形	圆形	灰色砂質シルト	
P3257	3534	堀穴住居跡	2	S3008	P12	0.326	0.294	0.205	円形	圆形	黒褐色砂質シルト	
P3258	3482	堀穴住居跡	2	S3008	P13	0.408	0.406	0.415	円形	圆形	黒褐色砂質シルト	
P3259	3483	堀穴住居跡	2	S3008	P13	0.375	0.318	0.425	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3260	3491	堀穴住居跡(礎上遺)	2	S3008	P12-13 Q12-13	0.509	0.504	0.261	円形	圆形	黒褐色砂質シルト	
P3261	3484	堀穴住居跡	2	S3008	Q13	0.383	0.369	0.396	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3262	3485	堀穴住居跡	2	S3008	Q12	0.769	0.550	0.354	楕円形	U字形	黒褐色砂質シルト	S3034 に切り入れ
P3263	3486	堀穴住居跡	2	S3008	Q12	0.437	0.428	0.278	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3264	3487	堀穴住居跡	2	S3008	Q12	0.513	0.407	0.219	不整形円形	圆形	黒褐色砂質シルト	
P3265	3485	ビット	2	M3	0.378	0.263	0.603	円形	U字形	新設に、灰色砂質シルト層が、黒褐色砂質シルト	西側をT55に切り入れ	
P3266	3358	ビット	2	N3	0.426	0.382	0.230	円形	圆形	灰黄色砂質シルト		
P3267	3411	ビット	2	N3	0.366	0.351	0.194	円形	不整形円形	灰褐色砂質シルト		
P3268	3237	ビット	2	N3	0.354	0.311	0.246	円形	L字形	灰黄色砂質シルト		
P3269	3150	ビット	2	N4	0.778	0.714	0.157	不整形円形	圆形	灰黄色砂質シルト		
P3270	3151	ビット	2	N4	0.679	0.347	0.135	楕円形	圆形	黒褐色砂質シルト		
P3271	3297	ビット	2	N3-03	0.979	0.733	0.224	円形	U字形	灰褐色砂質シルト	S3007 を切る	
P3272	3523	ビット	2	03	0.357	0.320	0.265	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	S3007 を切る	
P3273	3522	ビット	2	03	0.513	0.325	0.458	楕円形	不整形円形	黒褐色砂質シルト	S3007 を切る	
P3274	3290	ビット	2	P2	0.859	0.774	0.254	円形	圆形	灰褐色砂質シルト		
P3275	3287	ビット	2	P3	0.553	0.442	0.075	円形	不整形円形	灰褐色砂質シルト		
P3276	3285	ビット	2	P3	0.316	0.273	0.163	円形	圆形	黒褐色砂質シルト		
P3277	3282	ビット	2	P3	0.561	0.498	0.091	円形	圆形	灰黄色砂質シルト		
P3278	3419	ビット	2	P3	0.541	0.312	0.027	楕円形	圆形	灰褐色砂質シルト		
P3279	3420	ビット	2	P3	0.389	0.297	0.076	楕円形	圆形	黒褐色砂質シルト		
P3280	3196	ビット	2	M4	0.830	0.532	0.283	楕円形	新設L字形	上層に、灰色砂質シルト層が、黒褐色砂質シルト		
P3281	3143	ビット	2	M4	0.623	0.576	0.101	楕円形	楕円形	黒褐色砂質シルト		
P3282	3132	ビット	2	M4	0.483	0.425	0.369	円形	U字形	新設に、灰色砂質シルト層が、黒褐色砂質シルト		
P3283	3156	ビット	2	N4	0.580	0.480	0.228	楕円形	U字形	上層に、灰黄色砂質シルト層が、黒褐色砂質シルト		
P3284	3155	ビット	2	N4	0.764	0.539	0.772	楕円形	U字形	上層に、黒褐色砂質シルト層が、黒褐色砂質シルト		
P3285	3157	ビット	2	N4	0.236	0.250	0.110	円形	U字形	黒褐色砂質シルト		
P3286	3158	ビット	2	N4	0.445	0.320	0.233	楕円形	U字形	黒褐色砂質シルト		
P3287	3159	ビット	2	N4	0.509	0.256	0.092	円形	圆形	黒褐色砂質シルト		
P3288	3160	ビット	2	N4	0.444	0.395	0.236	円形	U字形	黒褐色砂質シルト		
P3289	3163	ビット	2	N4	0.408	0.364	0.372	円形	U字形	灰黄色砂質シルト		
P3290	3166	ビット	2	N4	0.444	0.426	0.734	円形	U字形	黒褐色砂質シルト		
P3291	3167	ビット	2	N4	0.625	0.460	0.179	不整形円形	圆形	灰黄色砂質シルト		
P3292	3352	ビット	2	N4	0.309	0.268	0.113	不整形円形	圆形	黒褐色砂質シルト		
P3293	3403	ビット	2	N4	0.351	0.350	0.615	円形	U字形	灰褐色砂質シルト		
P3294	3137	ビット	2	N4	0.597	0.132	0.111	楕円形	圆形	灰黄色砂質シルト		
P3295	3140	ビット	2	N4	0.737	0.718	0.713	円形	U字形	黒褐色砂質シルト		
P3296	3177	ビット	2	N4	0.484	0.412	0.249	円形	U字形	黒褐色砂質シルト		
P3297	3240	ビット	2	N4	0.357	0.316	0.659	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	P3297 を切る	
P3298	3185	ビット	2	N4	0.758	0.512	0.576	楕円形	不整形円形	黒褐色砂質シルト	P3297 に切り入れ	
P3299	3464	ビット	2	N4	0.607	0.423	0.371	楕円形	U字形	黒褐色砂質シルト		
P3300	3200	ビット	2	04-5	0.779	0.660	0.179	楕円形	圆形	黒褐色砂質シルト		
P3301	3087	竪立柱礎物跡(六)	2	S3007	P4	0.858	0.691	0.319	不整形円形	新設L字形	黒褐色シルト	I1 3627 を参照
P3301-6c	3627	竪立柱礎物跡(六)	2	S3007	P4				円形	新設U字形	黒褐色シルト	P3301(I1 3087) に吸収
P3302	3008	竪立柱礎物跡(六)	2	S3007	P4	0.958	0.494	0.350	楕円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3303	3351	竪立柱礎物跡(六)	2	S3007	P4	0.618	0.404	0.253	楕円形	新設L字形	灰黄色砂質シルト	
P3304	3279	竪立柱礎物跡(六)	2	S3007	P4	0.463	0.426	0.253	円形	U字形	灰黄色砂質シルト	P3310 に切り入れ
P3305	3283	ビット	2	P3	0.528	0.603	0.209	円形	楕円形	黒褐色砂質シルト		

表 14 3 区 遺構一覧表 5

遺構番号	周知番号	遺構名称	期	所属	形状	面積 (㎡)	掘削深 (m)	掘削幅 (m)	平面形状	断面形状	出土 (主体土)	備考
P3306	3274	ビット	2	F4	0.403	0.252	0.060	円形	直形	溝状砂質シルト		
P3307	3275	ビット	2	F4	0.311	0.266	0.116	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3308	3276	ビット	2	F4	0.380	0.548	0.140	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3309	3278	ビット	2	F4	0.333	0.307	0.096	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3310	3280	ビット	2	F4	0.658	0.565	0.297	楕円形	有段U字形	褐色砂質シルト		P3304を切る
P3311	3009	ビット	2	F5	0.391	0.362	0.097	円形	直形	灰褐色砂質シルト		
P3312	3233	ビット	2	N5	0.519	0.453	0.496	楕円形	有段U字形	褐色砂質シルト		
P3313	3182	ビット	2	M5-N5	0.627	0.527	0.184	楕円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3314	3191	ビット	2	M5-N5	0.532	0.460	0.163	円形	U字形	褐色砂質シルト		横を巻く(縦ではない)
P3315	3131	ビット	2	M5-N5	0.623	0.551	0.374	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3316	3130	ビット	2	N5	約530	0.364	0.203	楕円形	U字形	褐色砂質シルト		P3317に切られる
P3317	3129	ビット	2	N5	0.536	0.483	0.403	円形	U字形	褐色砂質シルト		P3316を切る、SK3010を切る
P3318	3082	ビット	2	N5	0.573	0.472	0.411	楕円形	不整形U字形	褐色砂質シルト		
P3319	3188	ビット	2	N5	0.475	0.454	0.437	円形	U字形	灰褐色砂質シルト		
P3320	3190	ビット	2	N5	0.629	0.607	0.603	円形	有段U字形	褐色砂質シルト		
P3321	3549	ビット	2	N5	0.477	0.349	0.342	楕円形	U字形	褐色砂質シルト		遺物を噴霧剤水に切られる
P3322	3545	ビット	2	N5	0.463	0.453	0.458	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3323	3548	ビット	2	N5	0.593	0.509	0.219	円形	直形	褐色砂質シルト		P3324を切る
P3324	3547	ビット	2	N5	0.552	0.503	0.640	円形	直形	褐色砂質シルト		P3323に切られる
P3325	3544	ビット	2	N5	0.415	0.409	0.270	円形	U字形	褐色砂質シルト		P3326を切る
P3326	3196	ビット	?	N5	0.401	0.328	0.153	円形	直形	褐色砂質シルト		P3325に切られる
P3327	3590	ビット	2	N5	0.519	0.503	0.279	円形	U字形	灰褐色砂質シルト		
P3328	3232	ビット	2	(G5-F5)	0.532	0.461	0.384	円形	有段U字形	褐色砂質シルト		横溝に切られる
P3329	3227	ビット	?	G5	0.263	0.191	0.105	円形	不整形U字形	褐色砂質シルト		横溝に切られる
P3330	3224	ビット	2	O5	0.413	0.391	0.297	円形	直形	にない、褐色砂質シルト		
P3331	3405	ビット	2	O5	0.555	0.484	0.330	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3332	3325	ビット	2	F4-N5	0.591	0.581	0.106	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3333	3526	ビット	2	F5	0.347	0.525	0.197	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3334	3315	ビット	2	F5	0.327	0.298	0.158	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3335	3316	ビット	2	F5	0.452	0.348	0.410	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3336	3317	ビット	2	F5	0.340	0.303	0.211	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3337	3319	ビット	2	F5	0.310	0.297	0.268	円形	U字形	土層：褐色砂質シルト		
P3338	3320	ビット	2	F5	0.368	0.351	0.455	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3339	3321	ビット	2	F5	0.263	0.239	0.149	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3340	3322	ビット	2	F5	0.351	0.338	0.309	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3341	3202	ビット	2	N6	0.533	0.435	0.600	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3342	3203	ビット	2	N6	0.434	0.388	0.145	円形	直形	にない、褐色砂質シルト		
P3343	3204	ビット	2	N6	0.271	0.230	0.102	楕円形	直形	褐色砂質シルト		
P3344	3294	ビット	2	N6	0.547	0.259	0.122	円形	直形	褐色砂質シルト		P3345を切る
P3345	3205	ビット	2	N6	0.415	0.303	0.330	円形	直形	褐色砂質シルト		P3344に切られる
P3346	3206	ビット	2	N6	0.868	0.477	0.218	楕円形	有段U字形	にない、褐色砂質シルト		
P3347	3210	ビット	2	N6	0.457	0.452	0.279	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3348	3212	ビット	2	N6	0.339	0.245	0.125	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3349	3233	ビット	2	N6	0.330	0.324	0.380	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3350	3208	ビット	2	N6	0.301	0.381	0.034	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3351	3209	ビット	2	N6	0.308	0.295	0.157	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3352	3214	ビット	2	N6	0.540	0.311	0.370	不整形U字形	U字形	褐色砂質シルト		
P3353	3111	ビット	2	N6	0.385	0.377	0.348	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3354	3112	ビット	2	N6	0.697	0.518	0.581	楕円形	有段U字形	褐色砂質シルト		
P3355	3217	ビット	2	M6-G6	0.558	0.519	0.578	円形	U字形	灰褐色砂質シルト		
P3356	3234	ビット	2	N6	0.383	0.262	0.067	円形	直形	灰褐色砂質シルト		
P3357	3218	ビット	2	O6	0.424	0.403	0.343	円形	U字形	灰褐色砂質シルト		
P3358	3219	ビット	2	O6	0.330	0.320	0.370	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3359	3220	ビット	2	O6	0.431	0.427	0.101	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3360	3222	ビット	2	O6	0.437	0.285	0.072	楕円形	直形	にない、褐色砂質シルト		
P3361	3225	ビット	2	O6	0.512	0.419	0.042	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3362	3221	ビット	2	O6	0.441	0.380	0.110	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3363	3241	ビット	2	O6	0.551	0.467	0.304	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3364	3466	ビット	2	N7	0.301	0.382	0.129	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3369	3447	ビット	2	O7	0.410	0.373	0.103	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3366	3875	ビット	2	O7-F8	0.558	0.465	0.062	楕円形	直形	褐色砂質シルト		
P3367	3076	ビット	2	O7-F8	0.382	0.318	0.381	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3368	3270	ビット	2	O7-F8	0.376	0.337	0.231	円形	U字形	褐色砂質シルト		SK3009を切る
P3369	3673	ビット	2	O7	0.455	0.444	0.217	円形	直形	灰褐色砂質シルト		
P3370	3260	ビット	2	O7	0.325	0.298	0.387	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3371	3281	ビット	2	O7	0.691	0.671	0.653	円形	直形	灰褐色砂質シルト		
P3372	3048	ビット	2	O8	0.814	0.676	0.150	円形	直形	灰褐色砂質シルト		
P3373	3487	ビット	2	O8	0.374	0.344	0.290	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3374	3640	ビット	2	O8	0.648	0.514	0.404	円形	不整形U字形	褐色砂質シルト		P3375に切られる
P3375	3208	ビット	2	O8	0.498	0.432	0.304	円形	直形	褐色砂質シルト		P3374を切る
P3376	3349	ビット	2	O8	0.635	0.531	0.658	不整形U字形	有段U字形	褐色砂質シルト		
P3377	3990	ビット	2	O8	0.722	0.657	0.351	不整形U字形	有段U字形	褐色砂質シルト		
P3378	3257	ビット	2	O8	0.419	0.379	0.387	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3379	3460	ビット	2	O8	0.464	0.452	0.098	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3380	3250	ビット	2	F8	0.794	0.758	0.084	不整形U字形	直形	褐色砂質シルト		
P3381	4252	ビット	2	F8	0.523	0.519	0.313	円形	U字形	灰褐色砂質シルト		
P3382	3254	ビット	2	F8	0.677	0.641	0.078	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3383	3707	ビット	2	F8	0.385	0.374	0.184	円形	直形	にない、褐色砂質シルト		
P3384	3709	ビット	2	F8	0.378	0.361	0.182	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3385	3884	ビット	2	F8	0.274	0.271	0.512	円形	U字形	褐色砂質シルト		
P3386	3437	ビット	2	F8	0.365	0.333	0.090	楕円形	直形	褐色砂質シルト		
P3387	3250	ビット	2	F8	0.253	0.259	0.074	円形	直形	褐色砂質シルト		
P3388	3236	ビット	2	F8	0.430	0.374	0.172	円形	直形	褐色砂質シルト		



表 15 3 区 道構一覧表 6

路線番号	区間番号	道路種別	車線数	車線幅員	Grd	幅員(m)	延長(m)	積込高さ(m)	宇部別	新設種	備考(主線上)	備考
P3388	3253	ビッド	2	P8	0.447	0.399	0.103	円形	既設	既設	既設	
P3390	3253	ビッド	2	P8	0.637	0.581	0.233	円形	既設	既設	既設	
P3391	3254	ビッド	2	P8	0.654	0.594	0.127	円形	既設	既設	既設	
P3392	3247	ビッド	2	P8	0.370	0.348	0.175	円形	既設	既設	既設	
P3393	3243	ビッド	2	P8	0.406	0.328	0.142	円形	既設	既設	既設	
P3394	3242	ビッド	2	Q8	0.787	0.518	0.164	楕円形	既設	既設	既設	
P3395	3249	ビッド	2	Q8	0.412	0.260	0.764	楕円形	既設	既設	既設	
P3396	3127	ビッド	2	N9	0.517	0.454	0.204	円形	既設	既設	既設	
P3397	3126	ビッド	2	N9	0.405	0.357	0.179	円形	既設	既設	既設	
P3398	3124	ビッド	2	N9	0.528	0.297	0.149	円形	既設	既設	既設	
P3399	3470	ビッド	2	O9	0.504	0.431	0.485	円形	既設	既設	既設	
P3400	3412	ビッド	2	SK3000片	O9	0.284	0.297	0.432	円形	既設	既設	通行あり
P3401	3440	ビッド	2	SK3000片	P9	0.444	0.360	0.498	円形	既設	既設	
P3402	3422	ビッド	2	P9	0.943	0.595	0.048	楕円形	既設	既設	既設	
P3403	3200	ビッド	2	O9	0.496	0.283	0.058	円形	既設	既設	既設	Tp1に切られる
P3404	3391	ビッド	2	O9-10	0.553	0.177	0.339	円形	既設	既設	既設	Tp1に切られる。P3405を切る
P3405	3446	ビッド	2	O10	0.291	0.109	0.325	円形	既設	既設	既設	Tp1に切られる。P3404に切られる
P3406	3348	ビッド	2	O10	0.450	0.455	0.063	円形	既設	既設	既設	
P3407	3476	ビッド	2	O10	0.491	0.480	0.401	円形	既設	既設	既設	
P3408	3477	ビッド	2	O10	0.375	0.312	0.254	円形	既設	既設	既設	
P3409	3337	ビッド	2	O10-P10	0.715	0.324	0.005	楕円形	既設	既設	既設	
P3410	3473	ビッド	2	P9-10	0.400	0.331	0.250	円形	既設	既設	既設	
P3411	3472	ビッド	2	P10	0.697	0.097	0.468	円形	既設	既設	既設	P3412-P3413を切る
P3412	3504	ビッド	2	P10	0.511	0.429	0.353	円形	既設	既設	既設	
P3413	3502	ビッド	2	P10	0.400	0.171	0.257	円形	既設	既設	既設	P3411に切られる
P3414	3540	ビッド	2	P10	0.273	0.252	0.218	円形	既設	既設	既設	P3411に切られる
P3415	3499	ビッド	2	P10	0.339	0.304	0.426	円形	既設	既設	既設	
P3416	3241	ビッド	2	P10	0.387	0.361	0.125	円形	既設	既設	既設	
P3417	3339	ビッド	2	P10	0.384	0.389	0.254	円形	既設	既設	既設	
P3418	3120	ビッド	2	N11	0.354	0.320	0.097	円形	既設	既設	既設	
P3419	3118	ビッド	2	N11	0.681	0.302	0.159	不整形円形	既設	既設	既設	
P3420	3119	ビッド	2	N11+O11	0.735	0.263	0.111	不整形円形	既設	既設	既設	
P3421	3238	ビッド	2	O11	0.484	0.437	0.165	不整形円形	既設	既設	既設	
P3422	3330	ビッド	2	O11	0.772	0.310	0.078	不整形円形	既設	既設	既設	
P3423	3328	ビッド	2	O11	0.574	0.402	0.054	不整形円形	既設	既設	既設	新作業に切られる
P3424	3329	ビッド	2	O11	0.669	0.481	0.077	不整形円形	既設	既設	既設	新作業に切られる
P3425	4061	ビッド	2	O11+12	0.563	0.449	0.223	不整形円形	既設	既設	既設	
P3426	3333	ビッド	2	P11	0.448	0.405	0.118	円形	既設	既設	既設	
P3427	3286	ビッド	2	P11	0.559	0.538	0.275	円形	既設	既設	既設	橋脚内に切られる
P3428	3293	ビッド	2	P11	0.295	0.203	0.122	円形	既設	既設	既設	
P3429	3281	ビッド	2	P11	0.482	0.441	0.099	円形	既設	既設	既設	セクション区、変直なし
P3430	3418	ビッド	2	O11	0.685	0.502	0.378	円形	既設	既設	既設	
P3431	3006	ビッド	2	Q11	0.429	0.373	0.141	円形	既設	既設	既設	
P3432	3007	ビッド	2	P12	0.447	0.354	0.145	不整形円形	既設	既設	既設	
P3433	3040	ビッド	2	O13	0.208	0.203	0.128	円形	既設	既設	既設	
P3434	3492	ビッド	2	P13	0.671	0.629	0.093	不整形円形	既設	既設	既設	
P3435	3042	ビッド	2	P13	0.464	0.414	0.150	不整形円形	既設	既設	既設	
P3436	3043	ビッド	2	P13	0.373	0.352	0.132	円形	既設	既設	既設	
P3437	3045	ビッド	2	P13	0.225	0.304	0.208	円形	既設	既設	既設	
P3438	3000	ビッド	2	SK3053	P13	0.832	0.796	0.132	円形	既設	既設	
P3439	3044	ビッド	2	P15	0.509	0.482	0.223	円形	既設	既設	既設	
P3440	3056	既設仕留橋脚付	2	SK3008	04-5	0.389	0.377	0.393	円形	既設	既設	
P3441	3058	既設仕留橋脚付	2	SK3008	05	0.470	0.383	0.372	不整形円形	既設	既設	
P3442	3810	既設仕留橋脚付	2	SK3008	04-P4	0.611	0.603	0.424	円形	既設	既設	
P3443	3818	既設仕留橋脚付	2	SK3008	P5	0.629	0.560	0.541	円形	既設	既設	
P3444	3981	既設仕留橋脚付	2	SK3014	IN	0.501	0.487	0.531	円形	既設	既設	
P3445	4033	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.442	0.290	0.081	円形	既設	既設	
P3446	3872	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.739	0.486	0.191	楕円形	既設	既設	
P3447	3452	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.467	0.443	0.625	円形	既設	既設	
P3448	3983	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.855	0.510	0.409	楕円形	既設	既設	
P3449	3937	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.556	0.461	0.066	楕円形	既設	既設	
P3450	3886	既設仕留橋脚付	2	SK3013	NS	0.475	0.439	0.378	円形	既設	既設	
P3451	3865	既設仕留橋脚付	2	SK3014	IN	0.548	0.510	0.102	円形	既設	既設	
P3452	3864	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.546	0.419	0.959	楕円形	既設	既設	
P3453	4038	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.442	0.290	0.081	円形	既設	既設	
P3454	3862	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.471	0.362	0.103	円形	既設	既設	
P3455	3862	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.481	0.458	0.047	円形	既設	既設	
P3456	3861	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.467	0.452	0.808	円形	既設	既設	
P3456	3867	既設仕留橋脚付	2	SK3014	NS	0.989	0.553	0.420	楕円形	既設	既設	
P3457	2462	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.748	0.738	0.386	円形	既設	既設	
P3458	4005	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.585	0.579	0.483	円形	既設	既設	
P3459	3195	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.883	0.716	0.903	不整形円形	既設	既設	
P3460	4021	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.358	0.286	0.066	円形	既設	既設	
P3461	4024	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.282	0.269	0.056	円形	既設	既設	
P3462	4020	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.354	0.315	0.226	円形	既設	既設	
P3463	4003	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.433	0.414	0.099	円形	既設	既設	
P3464	3187	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.890	0.738	0.654	楕円形	既設	既設	
P3465	4023	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.509	0.488	0.087	円形	既設	既設	
P3466	3186	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.836	0.744	0.701	楕円形	既設	既設	
P3467	4002	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.382	0.307	0.101	円形	既設	既設	
P3468	4016	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.684	0.443	0.071	円形	既設	既設	
P3469	4019	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.375	0.297	0.127	円形	既設	既設	
P3470	3180	既設仕留橋脚付	2	SK3015	NS	0.442	0.493	0.617	円形	既設	既設	

表 16 3 区 遺構一覧表 7

遺構番号	母体遺構 と重複	遺構の種類	期	所在地	Grid	幅間 (m)	埋積 (m)	深さ (m)	面積 (㎡)	平面図	断面図	備考 (主体十)	備考
P2471	3445	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.381	0.340	0.221	0.084	円形	円形	灰褐色砂質シルト	P3472 を切る
P4472	3184	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.548	0.448	0.555	0.246	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト	P3471 に切られる
P4473	3183	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.463	0.518	0.583	0.267	楕円形	有段円形	灰褐色砂質シルト	P3474 に切られる
P3474	3182	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.608	0.307	0.056	0.020	不規則四角	直線	褐色砂質シルト	P3473・P3475 を切る
P4475	3181	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.315	0.241	0.380	0.098	円形	U 字形	褐色砂質シルト	P3474 に切られる
P4476	3179	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.859	0.532	0.695	0.576	楕円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	
P3477	3178	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N4	0.475	0.409	0.657	0.270	円形	U 字形	無層砂質シルト	埋積層下に切られる
P4478	3138	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.951	0.512	0.536	0.493	楕円形	有段円形	褐色砂質シルト	
P4479	3107	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.560	0.482	0.663	0.307	楕円形	有段円形	褐色砂質シルト	P3480 に切られる
P4480	3080	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.922	0.604	0.572	0.607	楕円形	有段円形	灰褐色砂質シルト	P3479 を切る
P4481	4004	竪穴住居跡ビッド	3	S0015	N5	0.061	0.440	0.532	0.200	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト	
P4482	3463	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.589	0.544	0.472	0.310	円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	埋積層下に切られる
P3483	3717	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.290	0.238	0.168	0.097	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト	Tr1 に切られる
P4484	3822	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.358	0.209	0.246	0.100	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト	埋積層下に切られる。真鍮 SD9022 を切る
P4485	3824	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.773	0.568	0.428	0.361	楕円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	SD3022 を切る。P3488 を切る
P4486	4014	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.443	0.441	0.572	0.200	円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	地上層を掘り下げた跡で出土。P3485
P4487	4007	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.300	0.243	0.574	0.100	円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	地上層を掘り下げた跡で出土
P4488	4066	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	1.099	0.549	0.727	0.617	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト	地上層を掘り下げた跡で出土。P3485・P3486・P3487 に切られる
P4489	3833	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.379	0.342	0.513	0.139	円形	U 字形	褐色砂質シルト	埋積層より。P3490 の砂質土層。P3429・P3491 を切る。P3488 は本址のビッドと重複する
P3490	3833	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.544	0.532	-	-	円形	U 字形	褐色砂質シルト	P3489 の南方にあり。SD3022 に切られる。P3491 に切られる
P3491	3843	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.887	0.561	0.457	0.400	高円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	SD3022 を切る。P3490 を切る。
P3492	3645	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.664	0.616	0.510	0.340	楕円形	U 字形	無層砂質シルト	埋積層下に切られる。真鍮 SD9022 を切る
P3493	3646	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.476	0.475	0.548	0.200	円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	埋積層下に切られる。真鍮 SD9022 を切る
P3494	3832	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.398	0.289	0.182	0.100	円形	U 字形	褐色砂質シルト	P3489・SD3025 に切られる。SD3027 を切る
P3495	3831	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.396	0.395	0.268	0.139	円形	U 字形	無層砂質シルト	
P3496	3729	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.835	0.600	0.635	0.500	不規則四角	有段円形	灰褐色砂質シルト	
P4497	3825	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.805	0.400	0.440	0.300	円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	
P3498	3830	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.413	0.607	0.513	0.267	楕円形	有段円形	褐色砂質シルト	P3489 を切る
P3499	4043	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.502	0.474	0.394	0.200	不規則四角	U 字形	褐色砂質シルト	
P5000	3829	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.556	0.284	0.120	0.100	円形	U 字形	褐色砂質シルト	
P5001	4012	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.556	0.528	0.228	0.200	楕円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	P3500 に切られる。P3495 と重複する
P5002	4039	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.392	0.377	0.381	0.139	円形	U 字形	褐色砂質シルト	地上層を掘り下げた跡で出土
P5003	3642	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.431	0.410	0.596	0.267	円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	埋積層下に切られる
P5004	3845	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.532	0.507	0.435	0.300	円形	U 字形	褐色砂質シルト	P3505 を切る
P5005	3845	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.578	0.515	0.470	0.300	円形	U 字形	褐色砂質シルト	
P5006	3640	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.541	0.473	0.519	0.267	円形	U 字形	褐色砂質シルト	埋積層より。P3504 に切られる
P5007	3639	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.474	0.439	0.563	0.200	円形	U 字形	褐色砂質シルト	
P5008	3639	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.532	0.491	0.490	0.300	円形	U 字形	褐色砂質シルト	
P5009	3915	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.910	0.923	0.610	0.600	円形	U 字形	褐色砂質シルト	P308 を切る
P5010	3715	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.888	0.449	0.485	0.367	楕円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	
P5011	4010	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.437	0.420	0.568	0.200	円形	U 字形	褐色砂質シルト	埋積層マンガン・酸化鉄沈着層を掘り下げた跡。SD3023 に切られる
P5012	3716	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.433	0.426	0.405	0.200	円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	
P5013	4016	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.444	0.408	0.489	0.200	円形	U 字形	褐色砂質シルト	埋積層マンガン・酸化鉄沈着層を掘り下げた跡。SD3025 を切る
P5014	3835	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.738	0.480	0.286	0.200	円形	U 字形	灰褐色砂質シルト	埋積層マンガン・酸化鉄沈着層を掘り下げた跡
P5015	4011	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.555	0.446	0.361	0.200	円形	U 字形	褐色砂質シルト	
P5016	3662	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	1.083	0.748	0.218	0.600	円形	U 字形	褐色砂質シルト	
P5017	3919	竪穴住居跡ビッド	3	S0013	O4	0.605	0.603	0.434	0.400	円形	U 字形	無層砂質シルト	P3516 の跡地に出土
P5018	3888	ビッド	3	O4	0.575	0.422	0.160	0.100	楕円形	直線	上層：灰褐色砂質シルト 下層：褐色砂質シルト		
P5019	3900	ビッド	3	O4	0.469	0.345	0.139	0.100	楕円形	直線	灰褐色砂質シルト		
P5020	3873	ビッド	3	O4	0.658	0.629	0.025	0.100	楕円形	直線	褐色砂質シルト		
P5021	3871	ビッド	3	N3	0.517	0.505	0.381	0.200	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト		
P5022	4049	ビッド	3	N3	0.191	0.248	0.168	0.100	楕円形	直線	褐色砂質シルト	埋積層下に切られる	
P5023	3870	ビッド	3	N3	0.401	0.335	0.448	0.200	円形	U 字形	上層：灰褐色砂質シルト 下層：褐色砂質シルト		
P5024	3914	ビッド	3	N3	0.668	0.451	0.332	0.200	円形	直線	褐色砂質シルト		
P5025	3869	ビッド	3	N3	0.337	0.303	0.217	0.100	円形	U 字形	褐色砂質シルト		
P5026	3991	ビッド	3	N2	0.427	0.387	0.449	0.200	円形	U 字形	上層：褐色砂質シルト 下層：褐色砂質シルト		
P5027	3990	ビッド	3	N2	0.523	0.415	0.367	0.200	楕円形	有段円形	上層：褐色砂質シルト 下層：褐色砂質シルト		
P5028	3913	ビッド	3	N2-2	0.440	0.285	0.051	0.100	楕円形	V 字形	上層：褐色砂質シルト 下層：褐色砂質シルト		
P5029	3912	ビッド	3	N2-3	0.472	0.328	0.482	0.200	楕円形	U 字形	上層：灰褐色砂質シルト 下層：褐色砂質シルト		
P5030	3909	ビッド	3	N2	0.504	0.443	0.588	0.200	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト		
P5031	3904	ビッド	3	N2-3	0.428	0.390	0.291	0.100	楕円形	U 字形	上層：灰褐色砂質シルト 下層：褐色砂質シルト		
P5032	3903	ビッド	3	N2-3	0.423	0.314	0.021	0.100	楕円形	不規則四角	褐色砂質シルト		
P5033	3903	ビッド	3	O3	0.439	0.129	0.238	0.100	楕円形	有段円形	埋積層下にない。褐色砂質シルト		
P5034	3904	ビッド	3	O3	0.329	0.312	0.432	0.200	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト		
P5035	3995	ビッド	3	O3	0.346	0.228	0.065	0.100	楕円形	直線	褐色砂質シルト		
P5036	3748	ビッド	3	O3	0.416	0.391	0.499	0.200	円形	U 字形	上層：灰褐色砂質シルト 下層：灰褐色砂質シルト		
P5037	3988	ビッド	3	O2	0.432	0.339	0.345	0.200	楕円形	U 字形	褐色砂質シルト	Tr1 に切られる	

表 17 3区 選構一覧表 8

選構番号	甲種選 区番号	選構名称	面	面積(m <sup>2</sup> )	Grid	長軸(m)	短軸(m)	傾斜(%)	形状	形状	用途	備考
P3538	3835	ビッド	3	02		0.597	0.197	0.450	楕円形	選石	上層: 灰青色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3539	3841	ビッド	3	02		0.674	0.596	0.140	円形	選石	黒褐色砂質シルト	
P3540	3918	ビッド	3	02		0.534	0.466	0.206	円形	選石	灰青色砂質シルト	
P3541	3919	ビッド	3	03		0.583	0.473	0.214	円形	不整形	灰褐色砂質シルト	
P3542	3942	ビッド	3	02+P2		0.744	0.650	0.195	円形	選石	赤土・黄褐色砂質シルト	
P3543	3743	ビッド	3	P2		0.377	0.293	0.394	楕円形	U字形	灰青色砂質シルト	
P3544	3955	ビッド	3	P2		0.924	0.412	0.218	楕円形	選石	赤土・黄褐色砂質シルト	
P3545	3742	ビッド	3	P2		0.482	0.324	0.548	楕円形	U字形	赤土・黄褐色砂質シルト	併用 P3545-P3546-P3547-P3548
P3546	3839	ビッド	3	P2		0.418	0.224	0.289	楕円形	女型U字形	灰青色砂質シルト	併用 P3545-P3546-P3547-P3548
P3547	3840	ビッド	3	P2		0.389	0.325	0.309	円形	不整形	灰褐色砂質シルト	併用 P3545-P3546-P3547-P3548
P3548	3744	ビッド	3	P2		0.296	0.268	0.306	円形	U字形	灰褐色砂質シルト	併用 P3545-P3546-P3547-P3548
P3549	3594	ビッド	3	02		0.730	0.672	0.112	円形	選石	灰青色砂質シルト	
P3550	3593	ビッド	3	02		0.331	0.326	0.187	円形	V字形	灰褐色砂質シルト	併用 P3550-P3551-P3552
P3551	3595	ビッド	3	02		0.384	0.263	0.069	円形	選石	灰褐色砂質シルト	併用 P3550-P3551-P3552
P3552	3844	ビッド	3	02		0.309	0.291	0.392	円形	不整形	灰青色砂質シルト	併用 P3550-P3551-P3552
P3553	3987	ビッド	3	N2-03		0.463	0.428	0.429	円形	U字形	上層: 灰青色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3554	3911	ビッド	3	03		0.393	0.305	0.140	楕円形	V字形	赤土・黄褐色砂質シルト	P3555を切る
P3555	3910	ビッド	3	03		0.305	0.296	0.178	円形	選石	上層: 赤土・黄褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	P3554を切る
P3556	3908	ビッド	3	P2		0.396	0.317	0.291	円形	V字形	赤土・黄褐色砂質シルト	
P3557	3906	ビッド	3	03		0.345	0.312	0.179	円形	選石	灰青色砂質シルト	P3558を切る
P3558	3907	ビッド	3	03		0.396	0.371	0.550	円形	選石	灰褐色砂質シルト	P3557を切る
P3559	3905	ビッド	3	P2		0.392	0.350	0.271	円形	U字形	上層: 赤土・黄褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	併用 P3556-P3557-P3558-P3559
P3560	3857	ビッド	3	P2		0.679	0.438	0.200	楕円形	並形	上層: 灰青色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3561	3722	ビッド	3	03		0.468	0.462	0.417	円形	選石	上層: 灰青色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3562	3723	ビッド	3	03		0.363	0.322	0.221	円形	不整形	赤土・黄褐色砂質シルト	縦石あり
P3563	3856	ビッド	3	03		0.714	0.354	0.087	楕円形	選石	灰青色砂質シルト	
P3564	3724	ビッド	3	03		0.529	0.478	0.394	円形	女型U字形	上層: 灰青色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3565	3555	ビッド	3	02		0.453	0.410	0.240	円形	選石	上層: 赤土・黄褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3566	3836	ビッド	3	03		0.329	0.325	0.327	円形	U字形	上層: 赤土・黄褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3567	3837	ビッド	3	03		0.377	0.234	0.162	円形	U字形	赤土・黄褐色砂質シルト	
P3568	3863	ビッド	3	03		0.508	0.473	0.379	円形	U字形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3569	3962	ビッド	3	03		0.515	0.513	0.462	円形	L字形	上層: 灰青色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3570	3964	ビッド	3	P2		0.588	0.527	0.549	円形	L字形	黒褐色砂質シルト	
P3571	3747	ビッド	3	03		0.342	0.292	0.121	円形	L字形	灰青色砂質シルト	
P3572	3566	ビッド	3	03		0.282	0.255	0.053	円形	選石	黒褐色砂質シルト	
P3573	3567	ビッド	3	03		0.339	0.356	0.264	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3574	3568	ビッド	3	03		0.726	0.626	0.111	楕円形	選石	灰青色砂質シルト	P3576を切る
P3575	3569	ビッド	3	03		0.424	0.335	0.456	楕円形	U字形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	P3576を切る
P3576	3570	ビッド	3	03		0.407	0.362	0.281	円形	V字形	灰褐色砂質シルト	P3574-P3575に切られる
P3577	3858	ビッド	3	03		0.242	0.287	0.355	円形	V字形	灰褐色砂質シルト	SK3065を切る
P3578	3977	ビッド	3	02+3		0.440	0.410	0.498	円形	円形	上層: 赤土・黄褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3579	3554	ビッド	3	03		0.860	0.695	0.351	不整形	不整形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 灰黄色砂質シルト	併用 P3578-P3579-P3580-P3581-P3582-P3583-P3584-P3585
P3580	3536	ビッド	3	03		0.448	0.434	0.282	円形	U字形	赤土・黄褐色砂質シルト	併用 P3578-P3579-P3580-P3581-P3582-P3583-P3584-P3585
P3581	3573	ビッド	3	03		0.374	0.382	0.320	円形	選石	黒褐色砂質シルト	併用 P3578-P3579-P3580-P3581-P3582-P3583-P3584-P3585
P3582	3577	ビッド	3	03		0.388	0.381	0.426	円形	L字形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	併用 P3578-P3579-P3580-P3581-P3582-P3583-P3584-P3585
P3583	3581	ビッド	3	03		0.555	0.437	0.331	楕円形	L字形	黒褐色砂質シルト	併用 P3578-P3579-P3580-P3581-P3582-P3583-P3584-P3585
P3584	3583	ビッド	3	03		0.583	0.437	0.118	楕円形	選石	灰青色砂質シルト	併用 P3578-P3579-P3580-P3581-P3582-P3583-P3584-P3585
P3585	3749	ビッド	3	03		0.509	0.403	0.264	楕円形	選石	黒褐色砂質シルト	
P3586	3748	ビッド	3	03+4		0.638	0.488	0.243	楕円形	選石	上層: 赤土・黄褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	P3585に切られる
P3587	3557	ビッド	3	03		0.573	0.416	0.270	楕円形	U字形	灰褐色砂質シルト	P3588を切る
P3588	3556	ビッド	3	03		0.542	0.471	0.308	円形	U字形	灰褐色砂質シルト	P3587に切られる
P3589	3961	ビッド	3	03		0.377	0.368	0.381	円形	U字形	上層: 赤土・黄褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	縦石あり
P3590	3960	ビッド	3	03		0.496	0.476	0.348	円形	U字形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3591	3726	ビッド	3	02		0.545	0.387	0.369	楕円形	U字形	灰褐色砂質シルト	P3592に切られる
P3592	3572	ビッド	3	03		0.515	0.471	0.561	円形	L字形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	P3591を切る
P3593	3574	ビッド	3	03		0.517	0.471	0.384	円形	L字形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3594	3576	ビッド	3	03		0.741	0.557	0.492	楕円形	U字形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3595	3575	ビッド	3	03		0.524	0.471	0.363	円形	U字形	上層: 灰褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	
P3596	3580	ビッド	3	03		0.434	0.413	0.529	円形	U字形	灰褐色砂質シルト	
P3597	3587	ビッド	3	03		0.318	0.311	0.179	円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3598	3745	ビッド	3	03		0.440	0.323	0.196	楕円形	U字形	黒褐色砂質シルト	
P3599	3584	ビッド	3	03		0.614	0.574	0.452	円形	U字形	上層: 赤土・黄褐色砂質シルト 下層: 黒褐色砂質シルト	P3600に切られる
P3600	3585	ビッド	3	03		0.583	0.486	0.059	楕円形	選石	灰青色砂質シルト	P3599を切る、P3601に切られる

表 18 3 区 遺構一覧表 9

遺構番号	図号	図名	面	西向き	Grid	長(m)	幅(m)	電通帯からの 深さ(m)	平面形	所産形	層十(十体十)	備考
P3601	3586	ビッド	3	03	0.527	0.509	0.108	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト	P3600 全付	
P3602	3750	ビッド	3	03-P3	0.296	0.255	0.037	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3603	3842	ビッド	3	P3	0.518	0.404	0.188	円形	有段円形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3604	3634	ビッド	3	P3-4	0.842	0.568	0.124	円形	不整楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3605	3589	ビッド	3	P3	0.442	0.397	0.168	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3606	3590	ビッド	3	P3	0.534	0.482	0.080	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3607	3728	ビッド	3	P3	0.377	0.248	0.141	楕円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3608	3971	ビッド	3	P3	0.274	0.239	0.131	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3609	3610	ビッド	3	P3	0.441	0.284	0.177	楕円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3610	3600	ビッド	3	P3	0.464	0.387	0.181	楕円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3611	3608	ビッド	3	P3	0.467	0.337	0.143	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3612	3591	ビッド	3	P3	0.377	0.325	0.136	円形	V字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3613	3597	ビッド	3	P3	0.389	0.336	0.322	楕円形	V字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3614	3598	ビッド	3	P3	0.343	0.328	0.037	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3615	3599	ビッド	3	P3	0.302	0.292	0.043	円形	正形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3616	3600	ビッド	3	P3	0.287	0.253	0.288	円形	V字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3617	3601	ビッド	3	P3	0.241	0.234	0.273	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3618	3603	ビッド	3	P3	0.281	0.230	0.337	円形	逆楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3619	3592	ビッド	3	P3	0.216	0.190	0.090	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3620	3596	ビッド	3	P3	0.058	0.058	0.058	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3621	3602	ビッド	3	P3	0.247	0.230	0.264	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3622	3604	ビッド	3	P3	0.377	0.306	0.535	楕円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3623	3605	ビッド	3	P3	0.190	0.190	0.031	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3624	4090	ビッド	3	M1	0.363	0.348	0.273	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3625	4048	ビッド	3	M1	0.417	0.345	0.112	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3626	4029	ビッド	3	M1	0.302	0.466	0.485	円形	有段U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3627	4031	ビッド	3	N1	0.374	0.306	0.371	不整円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3628	4036	ビッド	3	N1	0.303	0.505	0.455	楕円形	不整楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		P3628(4037) 全破
P3629	4037	ビッド	3	M1				楕円形	不整楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		P3629(4036) 全破
P3629	4052	ビッド	3	N4	0.660	0.546	0.686	楕円形	W字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3630	4011	ビッド	3	N4-5	0.397	0.346	0.551	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3631	4017	ビッド	3	M1	0.430	0.199	0.092	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		南側に埋戻土に包まれる
P3632	4017	ビッド	3	N1	0.568	0.555	0.303	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3633	3929	ビッド	3	N1	0.459	0.365	0.190	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3634	4015	ビッド	3	N1	0.713	0.569	0.163	楕円形	W字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3635	4014	ビッド	3	M1-5	0.478	0.402	0.570	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3636	3718	ビッド	3	04	0.358	0.353	0.376	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3637	3953	ビッド	3	04	0.291	0.230	0.075	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3638	3651	ビッド	3	04	0.355	0.337	0.158	円形	不整楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3639	3751	ビッド	3	04-P4	0.423	0.311	0.136	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3640	3752	ビッド	3	04	0.373	0.300	0.126	楕円形	逆形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3641	3806	ビッド	3	P1	0.496	0.470	0.182	円形	不整形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3642	3754	ビッド	3	P1	0.433	0.304	0.165	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3643	3755	ビッド	3	P1	0.835	0.409	0.138	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3644	3628	ビッド	3	P1	0.407	0.354	0.257	不整楕円	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3645	3625	ビッド	3	P1	0.745	0.461	0.199	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3646	3611	ビッド	3	P3	0.312	0.312	0.180	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		横列P3616-P3617-P3618-P3619-P3650
P3647	3629	ビッド	3	P1	0.296	0.281	0.217	円形	V字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		横列P3616-P3617-P3618-P3619-P3650
P3648	3626	ビッド	3	P1	0.299	0.279	0.294	円形	V字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		横列P3646-P3647-P3648-P3649-P3650
P3649	3846	ビッド	3	P1	0.427	0.374	0.479	楕円形	有段U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		横列P3646-P3647-P3648-P3649-P3650
P3650	3624	ビッド	3	P1	0.361	0.351	0.200	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		横列P3616-P3617-P3648-P3649-P3650
P3651	3617	ビッド	3	P1	0.438	0.371	0.541	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3652	3621	ビッド	3	P1	0.620	0.500	0.083	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3653	3753	ビッド	3	P1	0.312	0.307	0.246	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3654	3620	ビッド	3	P1	0.503	0.292	0.076	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3655	3630	ビッド	3	P1	0.528	0.373	0.180	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3656	3757	ビッド	3	P1	0.471	0.388	0.086	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3657	3631	ビッド	3	P1	0.346	0.317	0.146	円形	有段U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3658	3760	ビッド	3	P1	0.462	0.366	0.223	楕円形	有段U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3659	3820	ビッド	3	P1	0.537	0.418	0.104	楕円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3660	3632	ビッド	3	P1	0.493	0.304	0.245	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		南側に埋戻土に包まれる
P3661	3633	ビッド	3	J1	0.428	0.390	0.410	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		南側に埋戻土に包まれる
P3662	3616	ビッド	3	P1-P1	0.410	0.369	0.498	円形	U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		横列P3616-P3617-P3618-P3619-P3650
P3663	3629	ビッド	3	04	0.284	0.225	0.057	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3664	3617	ビッド	3	04	0.571	0.628	0.158	円形	楕円	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
P3665	3999	ビッド	3	M5	0.546	0.444	0.592	円形	有段U字形	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		

表 19 3区 道構一覽表 10

路線番号	標準横断 線番号	道路種別	車 道	路面構造	Gnd	員輪(m)	幅員(m)	員輪から の距離(m)	平面形	断面形	工事(主橋本)	備考	
P3666	4009	ビッド	3	PS	0.313	0.283	0.116		円形	橋形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3667	4025	ビッド	3	PS	0.477	0.473	0.354		楕円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3668	3543	ビッド	3	PS	0.689	0.433	0.339		楕円形	楕形	既設内装砂質シルト	P3668(3570)を吸収	
P3669	3370	ビッド	3	PS			0.000		楕円形	橋門形	既設内装砂質シルト	P3668,3543に吸収	
P3669	3876	ビッド	3	PS	0.522	0.488	0.121		楕円形	橋形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3670	3879	ビッド	3	PS	0.441	0.435	0.306		円形	楕形	既設内装砂質シルト		
P3671	3875	ビッド	3	PS	0.920	0.565	0.380		円形	右折U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	高断面 T1に切り替える	
P3672	3877	ビッド	3	PS	0.555	0.482	0.305		円形	不整形U字形	既設内装砂質シルト	SK3006を消滅に切られる	
P3673	3878	ビッド	3	PS	0.283	0.259	0.098		円形	橋形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	SK3006を消滅に切られる	
P3674	3828	ビッド	3	PS	0.530	0.513	0.048		円形	橋形	既設内装砂質シルト		
P3675	3811	ビッド	3	PS	0.499	0.401	0.190		楕円形	楕形	V字形	既設内装砂質シルト	
P3676	3807	ビッド	3	PS	0.450	0.440	0.495		円形	U字形	既設内装砂質シルト	高断面を標準断面水切りにする	
P3677	3851	ビッド	3	PS	0.661	0.342	0.107		楕円形	不整形楕形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3678	3852	ビッド	3	PS	0.618	0.502	0.405		円形	右折U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3679	3812	ビッド	3	PS	0.346	0.334	0.095		円形	不整形楕形	既設内装砂質シルト		
P3680	3713	ビッド	3	PS	0.517	0.488	0.364		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3681	3813	ビッド	3	PS	0.549	0.547	0.589		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	T1 橋本 1で保正を確認、旧 4081を吸収	
P3681	4001	ビッド	3	PS			0.000		円形	不整形楕形	既設内装砂質シルト	P3681(旧 3813)に吸収	
P3682	3853	ビッド	3	PS	0.489	0.487	0.427		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3683	3838	ビッド	3	PS	0.417	0.315	0.090		楕円形	橋形	既設内装砂質シルト		
P3684	3806	ビッド	3	PS	0.448	0.436	0.174		円形	V字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3685	3805	ビッド	3	PS	0.558	0.552	0.503		円形	U字形	既設内装砂質シルト	高断面 24cm 大の大型橋を意図	
P3686	3809	ビッド	3	PS+6	0.681	0.647	0.378		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3687	3808	ビッド	3	PS	0.558	0.471	0.370		楕円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3688	3720	ビッド	3	PS+6	0.534	0.456	0.265		楕円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3689	3804	ビッド	3	PS+6	0.470	0.428	0.137		円形	楕形	既設内装砂質シルト		
P3690	3853	ビッド	3	PS	0.493	0.478	0.213		円形	楕形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3691	3857	ビッド	3	PS	0.376	0.352	0.215		円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3692	3815	ビッド	3	PS	0.299	0.342	0.107		円形	U字形	既設内装砂質シルト	P3695に切り替える	
P3693	3814	ビッド	3	PS	0.422	0.338	0.189		楕円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3694	3803	ビッド	3	PS	0.464	0.406	0.212		円形	楕形	既設内装砂質シルト		
P3695	3659	ビッド	3	PS	0.401	0.309	0.141		円形	楕形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	P3692を切る	
P3696	3860	ビッド	3	PS	0.374	0.351	0.206		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3697	3816	ビッド	3	PS	0.407	0.378	0.097		円形	楕形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3698	3801	ビッド	3	PS	0.479	0.377	0.410		楕円形	楕形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	高断面を標準断面水切りにする	
P3699	3802	ビッド	3	PS	0.585	0.582	0.129		円形	楕形	既設内装砂質シルト		
P3700	3800	ビッド	3	PS+PS	0.559	0.496	0.123		楕円形	楕形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	SK3079に切り替える	
P3701	3817	ビッド	3	PS+6	0.540	0.492	0.682		円形	不整形楕形	既設内装砂質シルト		
P3702	3794	ビッド	3	PS	0.488	0.415	0.449		楕円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	高断面を標準断面水切りにする	
P3703	3787	ビッド	3	PS+5	0.437	0.202	0.047		楕円形	不整形楕形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	高断面を標準断面水切りにする	
P3704	3765	ビッド	3	PS	0.647	0.405	0.052		楕円形	楕形	既設内装砂質シルト	高断面を標準断面水切りにする。P3705に切り替える	
P3705	3786	ビッド	3	PS	0.503	0.448	0.220		楕円形	不整形楕形	既設内装砂質シルト	P3704を切る	
P3706	3787	ビッド	3	PS	0.538	0.531	0.377		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3707	3780	ビッド	3	PS	0.345	0.280	0.220		楕円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3708	3780	ビッド	3	PS	0.784	0.675	0.268		楕円形	右折U字形	既設内装砂質シルト		
P3709	3769	ビッド	3	PS	0.382	0.356	0.267		円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3710	3777	ビッド	3	PS	0.307	0.255	0.152		円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3711	3770	ビッド	3	PS	0.585	0.582	0.077		円形	不整形楕形	既設内装砂質シルト		
P3712	3778	ビッド	3	PS	0.387	0.363	0.220		円形	U字形	既設内装砂質シルト	橋脚幅を切る	
P3713	3854	ビッド	3	PS	0.388	0.350	0.415		円形	右折U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	橋石あり	
P3714	3771	ビッド	3	PS	0.432	0.401	0.271		円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3715	3685	ビッド	3	PS	0.365	0.272	0.102		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	P3716と併する	
P3716	3686	ビッド	3	PS	0.302	0.284	0.309		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	P3715と併する	
P3717	3773	ビッド	3	PS	0.351	0.304	0.220		円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3718	3776	ビッド	3	PS	0.559	0.455	0.058		円形	楕形	既設内装砂質シルト		
P3719	3774	ビッド	3	PS	0.372	0.196	0.233		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト	高断面 T16に切り替える	
P3720	4064	ビッド	3	PS	0.527	0.444	0.450		円形	右折U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3721	4065	ビッド	3	PS	0.420	0.375	0.233		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3722	3810	ビッド	3	PS	0.386	0.305	0.222		円形	V字形	既設内装砂質シルト		
P3723	3786	ビッド	3	PS	0.616	0.616	0.594		円形	U字形	既設内装砂質シルト		
P3724	3663	ビッド	3	PS	0.581	0.826	0.077		円形	不整形楕形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3725	3785	ビッド	3	PS	0.610	0.573	0.301		円形	U字形	上層: 既設内装砂質シルト 下層: 既設内装砂質シルト		
P3726	3784	ビッド	3	PS	0.693	0.616	0.123		円形	楕形	既設内装砂質シルト		
P3727	3783	ビッド	3	PS	0.325	0.331	0.176		円形	右折U字形	既設内装砂質シルト	P3728を切る	
P3728	3782	ビッド	3	PS	0.648	0.579	0.120		楕円形	不整形楕形	既設内装砂質シルト	P3727に切り替える	

表20 3区 遺構一覧表11

遺構番号	埋蔵品 と年代	遺構の種類	市	所収遺構	Grid	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	断面形	出土(土体中)	備考	
F3729	3942	ピット	3	P6	0.414	0.277	0.212	円形	底部	なし	灰褐色砂質シルト	有能を伴出層木に引られる	
F3730	3648	ピット	3	P6	0.795	0.775	0.407	不規則円形	U字形	なし	黒褐色粘土質シルト	有能を伴出層木に引られる	
F3731	3849	ピット	3	P6	0.332	0.288	0.116	円形	U字形	なし	灰褐色砂質シルト	砂粒を伴出層木に引られる	
F3732	3852	ピット	3	P6	0.250	0.210	0.259	円形	V字形	なし	灰褐色砂質シルト		
F3733	3850	ピット	3	P6	0.754	0.599	0.190	楕円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3734	3654	ピット	3	P6	0.406	0.363	0.273	円形	U字形	なし	上部：黒褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
F3735	3706	ピット	3	07-#7	0.692	0.380	0.184	楕円形	U字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3736	3669	ピット	3	P6	0.443	0.425	0.128	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3737	3670	ピット	3	P6	0.482	0.452	0.195	円形	底部	なし	灰褐色砂質シルト		
F3738	3704	ピット	3	07-#7	0.537	0.514	0.311	円形	L字形	なし	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
F3739	3923	ピット	3	P7	0.270	0.267	0.118	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3740	3071	ピット	3	P7	0.363	0.362	0.082	円形	U字形	なし	上部：灰褐色粘土質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
F3741	3701	ピット	3	P7	0.804	0.584	0.558	円形	有段L字形	なし	黒褐色粘土質シルト		
F3742	3859	ピット	3	P7-8	0.386	0.371	0.166	円形	U字形	なし	上部：灰褐色砂質シルト 下部：灰褐色砂質シルト		
F3743	3028	ピット	3	P7	0.338	0.314	0.161	円形	U字形	なし	黒褐色粘土質シルト		
F3744	3700	ピット	3	P7	0.550	0.412	0.070	楕円形	底部	なし	灰褐色粘土質シルト		
F3745	3917	ピット	3	P7	0.251	0.250	0.100	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3746	3666	ピット	3	P7	0.470	0.441	0.241	円形	V字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3747	3880	ピット	3	P7	0.299	0.298	0.200	円形	L字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3748	3881	ピット	3	P7	0.298	0.296	0.203	円形	L字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3749	3694	ピット	3	07	0.474	0.385	0.443	円形	U字形	なし	黒褐色砂質シルト	礎石あり	
F3750	3863	ピット	3	07	0.460	0.333	0.149	円形	底部	なし	灰褐色砂質シルト		
F3751	3690	ピット	3	07	0.451	0.391	0.254	円形	底部	なし	黒褐色粘土質シルト		
F3752	3708	ピット	3	P8	0.378	0.364	0.278	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3753	3705	ピット	3	P8	0.610	0.452	0.056	楕円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3754	3885	ピット	3	P8	0.488	0.427	0.110	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3755	3703	ピット	3	P8	0.189	0.482	0.298	円形	U字形	なし	上部：灰褐色砂質シルト 下部：黒褐色粘土質シルト		
F3756	3887	ピット	3	P8	0.401	0.384	0.069	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3757	3886	ピット	3	P8	0.706	0.242	0.041	楕円形	底部	なし	灰褐色砂質シルト		
F3758	3542	ピット	3	P8	0.386	0.337	0.072	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3759	3925	ピット	3	P8	0.445	0.412	0.229	円形	U字形	なし	灰褐色砂質シルト		
F3760	3889	ピット	3	P8	0.281	0.281	0.171	円形	U字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3761	3891	ピット	3	P8	0.315	0.306	0.086	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3762	3892	ピット	3	P8	0.715	0.450	0.045	楕円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3763	3711	ピット	3	P8	0.698	0.482	0.116	楕円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3764	3883	ピット	3	P8	0.614	0.272	0.094	不規則円形	不規則円形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3765	3733	ピット	3	P8	0.738	0.672	0.069	不規則円形	不規則円形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3766	3895	ピット	3	P8	0.678	0.550	0.073	不規則円形	不規則円形	なし	灰褐色砂質シルト		
F3767	3874	ピット	3	P8	0.630	0.565	0.094	楕円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3768	3691	ピット	3	P8	0.533	0.390	0.068	楕円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3769	3695	ピット	3	P8	0.765	0.567	0.083	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3770	3690	ピット	3	P8	0.454	0.380	0.070	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3771	3692	ピット	3	P8	0.374	0.347	0.041	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3772	3688	ピット	3	P8	0.599	0.495	0.127	円形	U字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3773	3687	ピット	3	P8-08	0.454	0.449	0.105	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3774	3688	ピット	3	P8-08	0.654	0.418	0.262	不規則円形	U字形	なし	灰褐色砂質シルト		
F3775	3685	ピット	3	P8	0.571	0.545	0.423	円形	有段U字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3776	3638	ピット	3	08	0.444	0.358	0.061	楕円形	U字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3777	3884	ピット	3	08	0.311	0.293	0.200	円形	U字形	なし	灰褐色砂質シルト		
F3778	3683	ピット	3	08	0.300	0.277	0.272	円形	L字形	なし	黒褐色粘土質シルト		
F3779	3682	ピット	3	08	0.266	0.246	0.115	円形	U字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3780	3681	ピット	3	P8	0.339	0.258	0.295	楕円形	有段U字形	なし	黒褐色砂質シルト		
F3781	3896	ピット	3	P8-9	0.445	0.313	0.259	楕円形	U字形	なし	灰褐色砂質シルト		
F3782	3712	ピット	3	P8-9	0.679	0.635	0.046	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3783	3734	ピット	3	08	0.397	0.394	0.329	円形	有段U字形	なし	上部：黒褐色粘土質シルト 下部：黒褐色砂質シルト		
F3784	4054	ピット	4	D2	0.783	0.412	0.107	楕円形	浅いU字形	なし	黒褐色粘土質シルト	T6 橋本で検出	
F3785	4055	ピット	4	P2	0.551	0.450	0.217	円形	浅いU字形	なし	黒褐色粘土質シルト	T5 橋本で検出	
F3786	4056	ピット	4	P2	0.314	0.393	0.138	円形	浅いU字形	なし	黒褐色粘土質シルト	T5 橋本で検出	
F3787	4058	ピット	4	P2	0.370	0.337	0.128	円形	浅いU字形	なし	黒褐色粘土質シルト	T4 橋本-1で検出。第3面からの取り込み、視穴あり	
F3788	4059	ピット	4	05	0.384	0.368	0.337	楕円形	V字形	なし	黒褐色砂質シルト	T4 橋本-1で検出	
F3789	4060	ピット	4	05	0.418	0.399	0.096	円形	浅いU字形	なし	灰褐色砂質シルト	T4 橋本-1で検出	
F3790	4028	ピット	4	P11	0.720	0.268	0.033	楕円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3791	4027	ピット	4	P11	0.330	0.321	0.143	円形	底部	なし	黒褐色砂質シルト		
F3792	4053	ピット	4	M5	0.850	0.420	0.293	楕円形	浅いU字形	なし	黒褐色粘土質シルト	T7で検出	
F3793	4058	ピット	3	P4	0.252	0.248	0.093	円形	底部	なし	黒褐色粘土質シルト	T6 橋本	
F3794	4052	ピット	4	Q20	0.453	0.453	0.053	円形	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	T6で検出	
S30001	3305	壁穴付基礎残構	2	S3002	M3 N2-3	4.812	0.485	0.103	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	
S30002	3540	壁穴付基礎小溝	2	S3002	M3-N3	2.830	0.561	0.092	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	
S30003	3084	壁穴付基礎小溝	2	S3002	M3-N3	2.105	0.552	0.085	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	
S30004	3524	壁穴付基礎残構	2	S3009	02-3	3.321	0.763	0.126	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	S3000(田3524)より北東
S30005	3408	壁穴付基礎残構	2	S3001	P3	3.442	0.335	0.105	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	
S30006	3355	壁穴付基礎残構	2	S3005	N4-04	5.944	0.460	0.150	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	
S30007	3377	壁穴付基礎残構	2	S3006	N5 D4-5	7.902	0.380	0.061	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	
S30008	3097	壁穴付基礎残構	2	S3011	O6	7.491	0.870	0.072	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	
S30009	3939	壁穴付基礎残構	2	S3010	O7-8	5.130	0.591	0.085	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	
S30010	3102	壁穴付基礎残構	2	S3007	O8-9	7.280	0.405	0.070	溝状	浅いU字形	なし	黒褐色砂質シルト	



表 22 3 区 遺構一覧表 13

遺構番号	形跡 番号	遺構名称	由	所属遺構	Grd	長(m)	短(m)	面積(m <sup>2</sup> )	築造時期 (推定)	平面形	断面形	層上(土体土)	備考	
SK3014	3117	土坑	2	S11	1.040	0.012	0.0094	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3045	3047	土坑	2	O11	2.024	1.087	0.168	六角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	埋土層中に切られる	
SK3046	3070	土坑	2	O11	1.015	0.664	0.030	四角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3003に切られる。土坑層の可能性あり	
SK3047	3016	土坑	2	P11	3.745	2.071	0.140	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	赤土層中間品出土	
SK3048	3535	土坑	2	P11	1.830	1.708	0.319	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3049	3019	土坑	2	P11	2.729	2.832	0.273	四角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3030	3015	土坑	2	P12	1.061	0.050	0.005	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	土層間中、T1に北半分を切られる	
SK3051	3488	竪穴(竪穴中央土坑)	2	SK3008	Q12	1.400	0.891	0.308	円形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	
SK3052	3538	竪穴(竪穴中央土坑)	2	SK3008	Q12-P13	1.098	0.825	0.208	円形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	
SK3053	3020	土坑	2	P12-P13	3.182	3.106	0.182	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3008に接する	
SK3054	3503	土坑	2	Q13	0.949	0.139	0.121	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3008を穿る	
SK3055	3051	土坑	2	Q13	2.874	1.390	0.165	四角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	土層間中、中段以降が土層間中	
SK3056	3052	土坑	2	O16	3.067	1.426	0.141	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	土層間中	
SK3057	3563	土坑	3	P2	1.111	0.735	0.181	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	植物層の可能性	
SK3058	3809	土坑	3	M3	1.155	0.744	0.165	四角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3059	3901	土坑	3	M3	1.735	0.228	0.029	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3060	3312	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3014	N3	0.795	0.680	0.129	円形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3061を穿る
SK3061	3082	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3014	N3	0.704	0.683	0.114	円形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3060に切られる
SK3062	3902	土坑	3	N3	1.388	0.809	0.088	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3056に切られる	
SK3063	3868	土坑	3	N3	1.335	0.838	0.083	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3062に接する	
SK3064	3725	土坑	3	O3	0.885	0.837	0.100	四角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	P3564に切られる	
SK3065	3576	土坑	3	O3	1.473	0.963	0.181	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3066	4010	土坑	3	M4-N4	0.830	0.281	0.032	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3067	3821	土坑	3	O4	1.069	0.340	0.126	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	北側にT1に切られる	
SK3068	3834	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3013	O5	(1.244)	1.205	0.123	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	旧SK34が旧SK65の一部を覆い、SK3068となす。SK3068がSK3069を穿る
SK3068	3905	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3013	O4			0.000	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3068とSK3069の間に分断。SK3069はSK3068に切られる
SK3069	3905	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3013	O3	1.229	(0.891)	0.376	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3068とSK3069の間に分断。SK3069はSK3068に切られる
SK3070	3897	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3013	O4	2.195	(1.210)	0.371	円形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	埋土層中に切られる
SK3071	3641	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3013	O4-P4	(2.287)	1.041	0.954	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	P3504-P3505を穿る。埋土層間中、T1に切られる
SK3072	3035	土坑	3	O1-P4	1.040	0.884	0.125	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3073	3018	土坑	3	P4	(0.873)	0.750	0.286	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	下層にT1に埋土層を穿る	
SK3074	4013	土坑	3	M5	(1.302)	0.447	0.087	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	北側に埋土層外に接する	
SK3075	3139	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3015	N5	1.410	0.980	0.106	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	P3457に切られる。SK3027を穿る
SK3076	3089	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3015	N5	(0.788)	0.762	0.232	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	北側に埋土層外に切られる
SK3077	3188	竪穴(竪穴中央土坑)	3	SK3015	N5	(1.561)	0.988	0.119	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3027を穿る
SK3078	3719	土坑	3	O5	1.108	0.845	0.263	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3079	3661	土坑	3	O5-P5	2.217	0.712	0.161	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3080	3972	土坑	3	P4-5	0.982	0.900	0.299	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	植物層の可能性	
SK3081	3761	土坑	3	P4-5	0.963	0.885	0.238	四角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	埋土層中に切られる	
SK3082	3699	土坑	3	P7	(0.892)	0.718	0.123	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	植物層の可能性	
SK3083	3698	土坑	3	P8	0.911	0.754	0.445	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	植物層の可能性	
SK3084	3696	土坑	3	P8	0.881	0.835	0.487	四角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	植物層の可能性	
SK3085	4053	土坑	3	O10-11	0.871	0.555	0.245	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3086	3998	土坑	3	P12	(1.645)	0.698	0.350	扇状	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	T15に切られる。褐色土層を穿り下層に接し、土層間中	
SK3087	4078	土坑	4	P14	1.180	1.143	0.100	四角形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	T1-1とT15-4で横断。埋土層間中、時代不明。真土層間中の埋土層間中	
SK3001	3021	木簡墓	2	S10	1.866	0.928	0.181	扇状	不整形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3002	3022	木簡墓	2	N11	2.287	1.085	0.125	扇状	不整形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
SK3003	3023	木簡墓	2	O11	2.415	1.410	0.129	扇状	不整形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	SK3040に切られる。水浸品出土	
SK3004	3512	木簡墓	2	N10-O10	2.605	1.326	0.074	扇状	不整形	壁状	褐色土	埋土(土体土)		
遺跡番号 3001	遺跡番号 3001	自然地形の 遺跡番号	4	O5	(5.217)	(2.621)		不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	T11とT15-4で横断。遺跡とT15を比較的多く含む。埋土層間中、赤土層間中、時代不明。真土層間中の埋土層間中	
遺跡番号 3002	遺跡番号 3002	自然地形の 遺跡番号	4	P11	4.338	2.248		不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	T11とT15-4で横断。遺跡とT15を比較的多く含む。埋土層間中、赤土層間中、時代不明。真土層間中の埋土層間中	
遺跡番号 3003	遺跡番号 3003	自然地形の 遺跡番号	4	P13-14	(0.909)	(1.398)	0.130	不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	T11とT15-4で横断。遺跡とT15を比較的多く含む。埋土層間中、赤土層間中、時代不明。真土層間中の埋土層間中	
遺跡番号 3004	遺跡番号 3004	自然地形の 遺跡番号	4	O7-P7	3.745	2.130		不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	T11とT15-4で横断	
遺跡番号 3005	遺跡番号 3005	自然地形の 遺跡番号	4	P12-Q12	2.901	2.820		不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	T11とT15-4で横断	
遺跡番号 3006	遺跡番号 3006	自然地形の 遺跡番号	4	P17-18 Q17-18	4.690	1.961		不整形	浅いU字形	壁状	褐色土	埋土(土体土)	T1-2とT15-4で横断	



## 第2章 奈免羅・西の前遺跡出土遺物の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の分析調査では、奈免羅・西の前遺跡Ⅱ-3区で検出された構築時期不明のP 3662 柱根の樹種同定および年代測定を実施した。また、同じく3区 SI3012 内 SK3027 から出土した銅鋼について蛍光X線分析を実施した。

### 第1節 P3662 柱根の年代と樹種

#### 第1項 調査目的

3区で検出されたP3662 柱根は、層的には弥生時代中期の遺構横断面に相当するが、供出する遺物がなく、年代等を特定することができなかった。そこで、柱根について放射性炭素年代測定を実施し年代に関する情報を得ることとした。また、樹種同定をおこない、当該期の木材利用に関する情報を得ることも合わせて実施した。

#### 第2項 試料と方法

調査対象である柱根は、芯持丸木の木取りで、試料は柱根上部の残存する外側の年輪部分より採取した。

##### 1. 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶性成分の除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶性成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶性成分の除去をおこなう(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(Ⅱ)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定もおこなう。また、測定と同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定もおこなうため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ

Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。試料が木材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差  $\sigma$ 、 $2\sigma$  双方の値を計算する。 $\sigma$  は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

## 2. 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柱目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール (飽水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液) で封入し、プレパレートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にする。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表 23 に示す。P3662 柱根の補正年代は、2,060  $\pm$  30BP を示す。また、測定誤差を  $\sigma$  として計算させた暦年較正結果は、calBC2,204-2,040 の範囲を示す。

表 23 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

地区	遺物名 樹種	測定年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)								Code No.			
					測定				cal BC/AD					相対比		
3区	3616 柱根 タリ	2,040 $\pm$ 30	-23.26 $\pm$ 0.55	2060 $\pm$ 30 (2,064 $\pm$ 29)	$\sigma$	cal	BC	154	cal	BC	137	cal	BP	2,103	2,080	0.143
						cal	BC	113	cal	BC	42	cal	BP	2,062	1,991	0.857
					$2\sigma$	cal	BC	169	cal	BC	17	cal	BP	2,118	1,968	0.952
						cal	BC	15	cal	AD	0	cal	BP	1,964	1,950	0.048

1) 測定年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) 補正年代値は、1950 年を基準として暦年前であることを示す。

3) BP 年代に付いた数字は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) 暦年較正計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1996-2005 M Stuiver and P Reimer) を使用している。

5) 暦年較正計算に補正年代の範囲内の丸める前の値を使用している。

6) 暦年較正結果は 1 桁位を丸めるのが標準だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように 1 桁位を丸めている。

7) 暦年較正の測定  $\sigma$  は、測定値と真の値が入る確率 68%、 $2\sigma$  が 95% である。

8) 暦年較正相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$  のそれぞれを 1 とした場合、真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

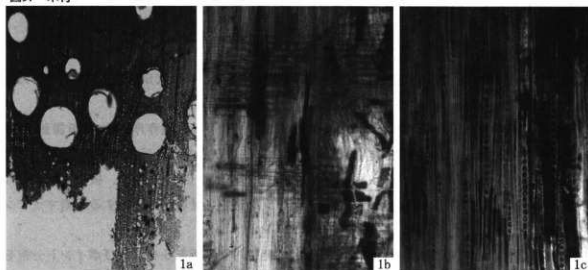
## (2) 樹種同定結果

柱根の樹種は、落葉広葉樹のクリに同定された。以下に解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

図97 木材



1. クリ(3区 P3662柱根)

a: 木口, b: 柀目, c: 板目

300  $\mu\text{m}$ :a

200  $\mu\text{m}$ :b, c

## 4. 考察

3区より出土したP3662柱根の樹種は落葉広葉樹のクリであった。また、年代値は、補正年代値で $2060 \pm 30\text{BP}$ 、暦年較正結果では2σで最も相対比が高い値でcal BC 169-17を示した。

今回の年代値は、春成・今村編(2004)・西本編(2006・2007)の暦年較正結果と考古学編年との対応を参照すると、弥生時代中期～後期前半の時期に相当することが推定される。調査区内で検出されている竪穴住居跡が弥生時代中期後葉に相当することとも同調的な結果といえる。また、県内では、日本海沿岸部の沖積地に位置する青谷上寺地遺跡において、弥生時代中期から古墳時代にかけての年代測定結果が多数蓄積されてきている(鳥取県埋蔵文化財センター, 2009)。これらの年代値には、今回の年代値と類似する値が確認されることから、今後、考古編年に基づく地域間での比較検討が課題である。

一方、柱根の樹種であるクリは、二次林などに普通に見られる落葉高木であり、木材は重硬で強度・耐朽性が高い材質を有する。したがって、柱材としては適材といえる。本地域では、建築材の樹種同定結果が少ないものの、日本海沿岸部では、秋里遺跡(鳥取市)の弥生時代後期～古墳時代初頭の柱材にスギを主体としてヒノキが混じる組成が確認されている(財団法人鳥取県教育文化財団, 1990)。また、先述の青谷上寺地遺跡では弥生時代中期～古墳時代初頭にかけての建築部材にスギが多用されていることが確認されている。このように沿岸部に位置する遺跡では針葉樹材が多用されている傾向があり、今回の結果とは異なる。地域間での木材利用のあり方の違いについては、今後、さらに情報の蓄積が必要である。

## 第2節 銅銅の蛍光X線分析

### 第1項 調査目的

今回分析対象とする銅銅は、弥生時代中期後葉に比定される竪穴住居跡内の土坑から出土しており、北部九州など当時の先進地域と何らかの関連を考えられる勢力が因幡南東部に存在し、この地が交易の拠点となっていた可能性を示唆する遺物である。そこで、今回は非破壊で蛍光X線分析をおこない、その材質に関する情報を得ることとする。

### 第2項 試料と方法

分析対象資料は、奈良羅・西の前遺跡Ⅱ-3区竪穴住居跡SI3012内の土坑SK3027より出土した銅銅で、供出した弥生土器から弥生時代中期後葉のものと考えられている。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、X線ビーム径が100 $\mu$ mまたは10 $\mu$ m、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)で、検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)である。また、試料ステージを走査させながら測定する元素マッピング分析も可能である。

分析に先立って予め元素マッピング分析をおこない、特徴的な箇所を5ヶ所選りポイント分析をおこなった。測定条件は、50kV、0.10～0.20mA(自動設定)、ビーム径100 $\mu$ m、測定時間3000sに設定し、非破壊でおこなった。定量分析は、MBH Analytical社の32X LB14(batch A)を用いて補正したファンダメンタル・パラメーター法(以下FP法)による半定量分析を装置付属ソフトでおこなった。定量値の解釈については大まかな参考値程度にとどめておくべきである。

### 第3項 結果および考察

図98に5ヶ所(a～e)の分析ポイントを示した元素マッピング図、図99にポイント分析のスペクトル図、表24にポイント分析により得られたFP法による半定量分析結果を示す。ケイ素、鉄等土砂に多く含まれる元素を除くと、銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)が主に検出され、他にニッケル(Ni)、ヒ素(As)、銀(Ag)、アンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)が検出された。

分析の結果、銅、スズ、鉛を中心とした組成であることが判明した。また、ニッケル、ヒ素、銀、アンチモン、ビスマスといった元素については、微量であることから鉱石から分離しきれなかった不純物と考えられる。半定量分析であること、かつ非破壊分析で鏝の上からの測定であることから、分析結果より厳密な組成比については検討すべきではないが、全体的にスズの割合が高い傾向が見られた。これは古代青銅器の非破壊での蛍光X線分析では見られる傾向であり、埋藏環境中に銅が溶け出す脱銅化現象によるものであることが村上ら(2003)によって指摘されている。以上より、定性的にはCu-Sn-Pbの銅合金、すなわち青銅の一種に分類するのが妥当と考えられる。

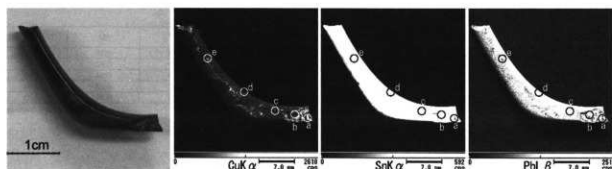


図98 有鉛鉛錫の元素マッピング図

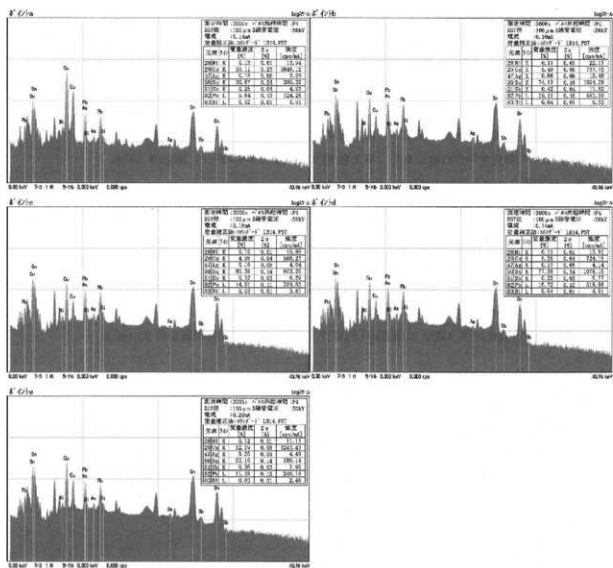


図99 ポイント分析スペクトル図

表 24 半定量分析結果 (mass%)

分析ポイント	Cu	Sn	Pb	Ni	As	Ag	Sb	Ba
a	59.11	30.67	0.64	0.13	*	0.18	0.25	0.02
b	5.49	74.17	19.11	0.17	*	0.60	0.42	0.04
c	4.95	80.39	14.01	0.10	*	0.19	0.32	0.03
d	5.35	77.38	16.72	0.11	*	0.17	0.23	0.04
e	12.79	75.10	11.35	0.12	*	0.25	0.36	0.03

\*: 定量できず (ピークのみ検出)

## &lt;引用文献&gt;

春成秀爾・今村峯雄編 2004 弥生時代の新年代, 学生社, 253p.

林 昭三 1991 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料 31 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫 1996 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料 32 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東隆夫 1997 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料 33 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫 1998 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料 34 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫 1999 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料 35 京都大学木質科学研究所, 47-216.

村上隆・山崎一雄 2003 楡井大塚山古墳出土三角縁神獣鏡の金属学的キャラクターゼーション, 文化財保存修復学会第 25 回大会発表要旨集, 22-23.

西本豊弘編 2006 新弥生時代のはじまり 第 1 巻 弥生時代の新年代, 雄山閣, 143p.

西本豊弘編 2007 新弥生時代のはじまり 第 2 巻 縄文時代から弥生時代へ, 雄山閣, 185p.

島地 謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織, 地球社, 176p.

鳥取県埋蔵文化財センター 2009 青谷上寺地遺跡 10 第 9 次発掘調査報告書, 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 27.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

財団法人鳥取県教育文化財団 1990 秋里遺跡 (西持竹), 鳥取県教育文化財団報告書 25, 189p.

## 第3章 総括

### 第1節 2区大溝について

島田裕弘

2区で検出されたSD2012・SD2013・SD2014の3条の大溝はその規模と遺物量から、2区の調査を象徴する遺構であるといえる。1986年に実施された奈良・西の前遺跡第1次調査では同時期とみられる溝状遺構が検出されており、これとの関連性が高いと考える。本節では、当調査における調査所見を再整理し、第1次調査との比較を主とした若干の考察をおこなう。

#### 1. 大溝調査概要

**遺構の検出と帰属** 第2面調査において、調査区東部で検出された3本の大溝は、検出基盤層に酷似する埋土のために検出が困難と判断し、2-7層(北部では2-8層)除去後の第2面遺構として調査を実施した。しかし、断面観察から層位上の帰属はその他の第2面遺構と同じ2-6層除去面となることが確認された。2-7層は調査区南部に向かって厚く堆積しており、それに伴い検出面は南に下がることになるが、プランが確認できない以上は面を下げざるを得なかった。最も低い南端部では溝上層部を40%ほど削った段階でようやく検出するに至った。

**新旧関係と時期** 切り合い関係と出土遺物の時期観から推定される大溝の機能時期は以下の通りである。

SD2012: 弥生時代後期中葉以前?～弥生時代後期後葉(弥生時代終末期前半)

SD2014: 弥生時代後期後葉～弥生時代終末期後半(古墳時代前期前葉)

SD2013: 弥生時代終末期後半～古墳時代前期前葉(古墳時代前期中葉)

遺物時期からはSD2012とSD2014が併存しても問題なさそうだが、遺物は時期幅を持つため確定的ではない。同じ大溝同士であるSD2013とSD2014が切り合い関係を持つことから、各溝は微妙に時期を違えて一本ずつ存在していたと考えたい。ただし、同位置・同方向にわざわざ新しい溝を掘り直す目的は不明である。

**溝の機能** 大溝の掘削には大変な労力が必要である。固く締った砂礫層・湧水のある粘上層等の土質に関わらず深く掘り込む目的は溝底面の平坦化にあるといえ、その目的は水を流すために他ならないと考える。これはSD2014に機能層が確認されたことで実証された。計測値からは北東方向へ下がる傾斜が想定され、流れの先約100mには八東川がある。当時の八東川本流が現在の位置と大きく変わらないと仮定するなら、大溝は八東川に接続する排水路としての機能を持っていたと推定される。SD2013・SD2014では明確な機能層は確認できなかったが、大溝の類似性を考えると同じく水路としての機能を持っていた可能性が高いと考える。加えて、SD2014では流れを維持・管理していた可能性が示されている。単に排水目的だけの溝なら常時水流があるとは考えにくい。全貌が明らかでない以上憶測でしかないが、常時流れがあったとなるとこれら的大溝は水源と八東川とを接続する長大な水路となる可能性があるのではないだろうか。

**溝の廃絶について** 大溝は全て人為的な埋め立てによって廃絶する。礫質が強い埋め立て土はその位置の基盤層(2-7層・2-8層)と類似することから、供給源はすぐ近くと考えられる。溝開削時の掘削土を利用して溝に沿って築かれていたであろう堤か、あるいは次の溝の掘削土をそのまま埋め立て





に使用したのかもしれない。溝埋め立て時の特徴として多量の土器が埋め(捨て)られることが挙げられる。残存率の高い土器が集中して出土する状況からは、土器をまとめて廃棄する状況が窺える。器種比率は張が高く、煤が付着する個体もみられる。そのような生活用品にまじって、SD2014では祭祀用の器とされる羽状文小壺が割れながらも完形に近い状態で複数個体出土している点が注目される。溝廃絶時の埋め立てに伴って、不用品の廃棄行為だけでなく溝に対する祭祀行為がおこなわれたことを示唆するものである。

## 2. 第1次調査検出の溝状遺構との関連性について

**概要** 2区の北東約50mの地点で1986年に実施された奈免羅・西の前遺跡の第1次調査(以下奈免羅Ⅰ)において、南西から北東方向に走る5条の溝が検出されている。このうち第1号溝状遺構(以下1号溝)と第4号溝状遺構(以下4号溝)は北東側、八東川方向への流れを持つ溝とされ、「弥生時代後期後半～古墳時代初頭」の土器が大量に出土している。ともに、「弥生時代後期後半の開削で弥生時代末期乃至古墳時代初頭に廃絶するとされており、今回の調査(以下奈免羅Ⅱ)で検出された3条の大溝との共通点が非常に多い。この溝状遺構と大溝の関連性を検討したい。奈免羅Ⅰ報告によると、第2号・第5号溝状遺構も同時期の溝とされているが、2号溝は小規模であること、5号溝は延長が不明なことから比較できないと判断し、ここでは取り扱わないこととする。

a. 遺構法量と位置の比較 図100は奈免羅Ⅱの調査区設定図に遺構図を合成したものである。奈免羅Ⅰの報告書掲載図には座標情報が記載されていないため、当時の工事図面に記載された水路と方位を手がかりに位置合わせをおこなった。主軸方向について、1号溝とSD2013・SD2012がN-35°Eに近い値を示している。ただし、1号溝が直線的に伸びるとするなら、その延長位置は奈免羅Ⅱの2区の東側になることになり、どの溝にも対応しえない。4号溝は主軸がその他の溝と大きく異なる。直線状に伸びてしまうと、2区の西側に外れてしまう。これに対して奈免羅Ⅱの大溝3本はそのまま北東方向に伸びるとなると、奈免羅Ⅰ調査区内に入ってくるであろう。法量値はあくまで検出面基準の数値なので参考程度であるが、溝幅に関しては4号溝とSD2013が約2mと最も近い数値を示す。

b. 埋土と遺物出土状況の比較 溝埋土と土器出土状況に関して比較する。奈免羅Ⅱでは埋土観察と遺物の残存状況から、溝の廃絶はヒトによる埋め立てと結論付けられた。一方、奈免羅Ⅰ掲載図からは、溝底には砂質土ベルトが挟まる黒色土が30cm程度堆積し、そこから遺物が出土しないこと、土器類が大量に含まれるその上位層は巨礫が含まれていることが読み取れ、さらに上位層については「短期間に堆積したものと考えられる」とされている。以上の状況は、下層部は遺物の含まれない機能層、上層部は廃絶に際して埋め立て行為による人為層と読み替えることができる。したがって、奈免羅Ⅰと奈免羅Ⅱの溝の埋没過程は同じである可能性が高い。

c. 出土遺物の比較 出土土器についての時期比較をおこなう。掲載遺物を概観したところ、1号溝・4号溝ともに弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の土器が出土している。壺の口縁形態から判断して、4号溝の方がやや新しい様相といえる。外来系土器に関しては、両遺構とも北近畿系高環とみられる椀形の環部(Po125・126・167)がある。加えて、1号溝出土の器台(Po154)も北近畿系と思われる。遺物の時期幅と北近畿系土器が共出している点は本調査の大溝と全く同じといえる。奈免羅Ⅱでは最も新しいSD2013の廃絶が古墳時代前期前葉から中葉とされており、4号溝と近い時期を示す溝といえる。

d. 溝底の比較 調査所見に基づき、全ての溝が八東川に向かって流れているとの前提のもと、溝底の標高値から連続性の検討をおこなう。奈免羅Ⅰでは標高の定義が記載されていないが、T.P. 値と仮定して検討を進める。1号溝の底面標高値は45.180mとなっており、既に奈免羅Ⅱのどの溝よりも高い。よって接続することはありえない。4号溝では44.860mである。SD2012・SD2013の2本に接続の可能性がある。

### 3. 結論-まとめにかえて-

奈免羅Ⅰ・奈免羅Ⅱの溝データを比較検討した結果、以下の事象が判明した。

a. 溝の主軸方向からは接続の可能性が見出せない。繋がるはずはどこかで曲がる必要がある。例えばSD2012・SD2014は東側に緩やかに湾曲しており、溝は必ずしも直線に延びるとは限らないことを示す。そして、もう一つ注目される点は、主軸値がN-35°E辺りに集中している点である。溝の終端部は確認されていないため推測に過ぎないが、検出状況のまま北東方向に直線的に延びるとすれば、八東川の流れに逆らって鋭角に接続することになる。通常であれば想定が難しい状況であるが、溝底の標高値は全て北東、すなわち八東川に向かって下がる傾斜を示している点から、流向は間違いないものと考えられる。

b. 全ての溝は埋め立てられて廃絶する。埋め立て土には大量の礫と共に残存率の高い土器が含まれる。SD2014と1号溝では下層に遺物を含まない機能層が確認される。溝機能時には、少なくとも捨て場としての機能は想定できない。

c. 出土遺物時期の検討では、1号溝とSD2014が弥生時代終末期を中心とする要素が強く、4号溝とSD2013が共に古墳時代前期前葉の要素が強い。

d. 溝の連続性を検討する上で、川への排水を想定する以上、溝底の標高値の比較が最重要点である。接続する可能性があるのは4号溝とSD2012もしくはSD2013である。

以上のことから総合的に判断すると、繋がる可能性のある溝は、奈免羅Ⅰの4号溝と奈免羅ⅡのSD2013となる。ただし、この場合はどこかの時点でSD2013が東へ曲がる必要がある。溝の機能に関しては、その勾配が示すように八東川に接続する水路の可能性が高いだろう。機能層から遺物が出土しない点はやはり溝の運用管理に関わるものと考えられる。

この検討を通して、もう一つ重要なことがみえてくる。それは標高値が大きく異なる1号溝の存在である。積み上げたデータが確かなら、奈免羅Ⅱの大溝とは遺物の時期と主軸値を同じくしながら繋がらなないと結論付けられる。これの意味するところは、大規模な溝が一定間隔を空けて複数条並走している可能性である。このような溝を新たに掘り直しながらも継続的に維持する意義については、農業における灌漑目的、あるいは防衛の意味役割を担う環濠など、いくつかの可能性を挙げることができる。しかし、現段階では当該期の集落・生産域のいずれも発見されていないため、これ以上の具体的な根拠を伴った検討は不可能である。しかし、途方もない労力を費やして掘削される大溝が、この地の集団にとって重要な意味を持っていたことは間違いないところである。弥生時代後期中葉から古墳時代前期中葉にかけて、そのような大規模工事を実行できる集団が確かにこの地に根付いていたことを示せたのは大きな成果といえよう。

註1 山柳雅美 1986『奈免羅・西の前遺跡』船岡町教育委員会

## 第2節 奈免羅・西の前遺跡出土弥生土器群の様相

島田裕弘

### 1. 抽出遺物からみた遺跡概要

本調査において整理用コンテナ 148 箱分の遺物が出土した。整理後の遺物量内訳は、抽出遺物 57 箱（土器 54 箱・石器 2 箱・その他 1 箱）・未抽出 101 箱（土器 89 箱・石器類 10 箱・その他 2 箱）である。本書掲載の抽出遺物 249 点のうち、土器は 190 点である。本節では土器を中心にその時代観と傾向を概観する。

遺物数からみた調査概要は以下ようになる。

1区 掲載遺物は 5 点。種別内訳は土器 1 点、石器 4 点である。時期がわかる遺物は古墳時代前期と推定される土器 1 点のみである。1 区では出土遺物自体が極めて少なく掲載遺物を除き図化可能な個体が皆無で、抽出遺物の少なさはこれに比例している。

2区 掲載遺物は 163 点。種別内訳は土器 152 点・土製品 2 点・石器 5 点・石製品 4 点である。時期は弥生時代後期前葉から古墳時代終末期までの幅がみられ、中でも弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉に中心がある。2 区では土器類の多さが特筆され、その要因は大量の土器が出土した 3 条の大溝によるところが大きい。大溝遺物は残存率の高い個体が多く、本調査を代表する資料群となっている。その他の遺構では溝と同時期とされる建物が 2 棟検出されたが、周辺のピット類の分布は限定的である。調査所見からは調査区北東側に遺構が広がる可能性が指摘されており、近隣に集落が展開する可能性が示されている。遺物量の多さから考えてもその可能性は十分にあるといえる。

3区 掲載遺物は 81 点。種別内訳は土器 37 点・石器 39 点・石製品 4 点・青銅器 1 点である。時期は弥生時代中期中葉から後葉にかけてである。3 区では 15 棟もの竪穴住居跡が検出され、当該期の集落が広範囲に展開していることが確認された。後世の擾乱により遺構面の残りが悪かったため、遺跡規模に反して遺物量は少ない。また、住居の密集度や拡張のための建替えなどの遺構所見に反し、土器から想定される集落の存続期間はかなり限定的である。遺物の傾向として、土器類と共に石器類の多さが特筆される。詳細については次節にて解説するが、石斧・叩石・台石・石包丁・砥石等、生活に密着した石器類が多数確認されている。

### 2. 抽出遺物概要

土器の時期は調査区によって明確に分かれる。このため、3 区出土の一群（弥生時代中期中葉～後葉）と 2 区出土の一群（弥生時代後期～古墳時代前期）に分けて概観する。1 区については時期的に 2 区と重複するため割愛する。

(1) 3 区の弥生土器群 器種内訳は壺 13 点・甕 19 点・器台 1 点・高坏 4 点である。時期は弥生時代中期中葉から後葉にかけてである。時期幅が限定的なため顕著な器形変化はみられない。遺物時期の判定は、主に口縁端部の断面形、「垂下傾向から T 字形への変化」に注目しておこない、補足的要素として内面ケズリの違つる高さ、装飾の多寡等も参考にした。

表 25 掲載遺物内訳

遺物種別内訳	1区	2区	3区	計
土器	1	152	37	190
土製品		2		2
石器	4	5	30	48
石製品		4	4	8
青銅器			1	1
計	5	163	81	249

※水産部所蔵品 42 箱 (198.1 ~ 42.12.1 点数)

土器器種内訳

	1区	2区	3区	計
壺		32	13	45
甕	1	53	19	73
器台		22	1	23
高坏		22	4	26
甕		10		10
洗滌杯		2		2
鉢		3		3
彫形土器		2		2
コップ形土器		1		1
その他		5		5
計	1	152	37	190

a. 器面調整と装飾 壺・甕では主な調整は、外面はハケ調整もしくはミガキ、内面はケズリ及びハケ調整である。装飾は、弥生時代中期の大きな特徴である凹線文・擬凹線文を基本としている。これに加えて、縦方向のキザミや、各種浮文を貼り付ける個体がある。甕では頸のくびれ部に指頭正痕が明瞭な貼付突帯をめぐらせる個体がある。このほかに、特徴的な装飾として、貝殻腹縁を使用した文様がある。サルボウ貝などの貝殻の放射肋を利用し、器壁に対して斜めに当てて押し引くことにより幅の広い櫛描き状の文様を陰刻する。文様は原体の当て方と押し引きの度合いによって変化する。押し付けただけの刺突文から波状文を思わせるうねりを持たせるものまで様々なパターンがみられる。これらの文様は、主に肩部～体部上半に帯状に配される。これに関連する特殊な例として、甕(201)にみられる、器面調整と刺突施文を同時におこなう手法がある。体部外面には縦方向のハケ調整(原体は貝殻腹縁の可能性もあるが判別不能)と体部最大径よりやや下に右上がりの刺突文が施される。この刺突文とハケの単位は対応しており、ハケ1単位の開始時あるいは終了時に原体を強く押し付けることによって貝殻腹縁による刺突文風の文様が陰刻される。文様とハケメの接続方向から、一連の調整であることは明らかで、縦方向の調整に伴う施文であることがわかる。通常の貝殻腹縁による押し引き文は器に対して外周をめぐらせるように配するため、器面調整とは次の工程で別原体により横方向に押し引かれる。本例とは作業工程的に大きく異なる。この調整時施文法が確認できたのはこの1例のみのため評価はできないが、完成形態が同じであっても調整・施文の過程が大きく異なる場合があることが判明した。

b. 特記遺物 3区における特徴的な遺物として次のものが挙げられる。複数数の突帯や棒状浮文を組み合わせた過剰な装飾が施される無頸壺(179)、脚台に配された線刻絵画とも銅鍮文ともつかない三角文様が特徴的な器台(212)、共に弥生時代中期中葉の要素の強い個体である。水差形土器(211)や、肩部に波状文と貝殻腹縁による刺突文を組み合わせた文様を2段にわたってめぐらせる壺(202)などはやや新しい様相を示すが、それでも弥生時代中期後半段階に収まる。

(2) 2区の土器群 器種内訳は壺32点・甕53点・器台22点・高坏2点。蓋10点・低脚坏2点・鉢3点・甔形土器2点・コップ形土器1点である。時期は弥生時代後期前半から古墳時代前期中葉にかけてである。このほかに新しい土器では須恵器(古墳時代後期～終末期)が5点あるが、大きく時期がずれるため、本節では取り扱わない。弥生時代から古墳時代にかけての大きな変化に合わせるかのように土器形態に変化が現れる。また、外来系土器が複数確認される点が特筆される。帰属時期の判定は、主に甕と器台の形態の変遷に注目しておこなった。3区出土の弥生時代中期の土器と比べると、明らかな小型化が認められる。

#### a. 器種別概要

壺 バリエーションが多く、形態について連続的な変遷をみることができない。古い一群では甕と壺の判別が困難な個体も多い。また他器種にみられない要素として、口縁部ないし肩部への限定的な施文がある。竹管文3個(113)・貝殻腹縁による羽状文1単位(117・120)などがそれにあたり、正面一方向からしか見えないように施文されるのが特徴で、117のように口縁内面・外面に施文される場合でもこの法則は当てはまる。これらは全て大溝(SD2014)からの出土個体である。文様というよりは何か記号的な意味があるのかもしれない。貝殻原体の文様については3区と同様、肩部への施文例が多い。大きく上下に振れながら帯状に連続する文様が多く、波状志向が強いように思われる。そのほかでは121・122・123のような、過剰な装飾が施される小壺類が特徴的である。

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての新しい要素を示す個体として、直口壺や肩部に突帯を持つ壺がある。その中でも口縁端部に外傾する平坦面を明瞭に持つ95はさらに新しい様相を示すとみられ、時期は古墳時代前期中葉まで下る可能性がある。

**甕** 最も個体数の多い器種である。時期による形態変化は次の点に現れる。口縁部では屈曲部から端部にかけての立ち上がりの発達・角度変化・施文の消長・下端部の張り出しの発達・口縁部平坦面の出現など。体部以下では球胴化・底部の退化(尖底～丸底化)。その他では器壁の薄手化、胎土の精良化など。これらの要素から推定される甕の時期幅は弥生時代後期前半から古墳時代前期前葉までで、数量比からは弥生時代後期後半から終末期前半が中心となることがわかる。少数ながら、壺同様に貝殻原体による押し引き文が施文される個体がある。

**器台** 確認された器台は全て鼓形器台である。時期が下るにつれ、筒部が短く、口縁・脚台端部は拡張・発達し、径が大きくなる。平行線文やスタンプ文で装飾される個体もみられる。時期幅は弥生時代後期後葉から終末期後半までである。42・158にみられる筒部の詰まり具合と端部の開きなどはかなり新しい要素といえる。古墳時代前期前葉まで下るかもしれない。

**高坏** 掲載個体数は器台と同数あるが、一定の傾向を捉えるのは難しく、時期は判定しにくい。坏部の形態は、屈曲部に稜を持つものと椀形のものに大別される。北近畿系・吉備系とみられる外来系土器があるのが大きな特徴である。時期は弥生時代後期中葉から終末期までと推測される。

**蓋** 口径は10cm内外、天井部につまみを備え、基本的に内外面ともミガキを施す丁寧な作りである。蓋単体での時期決定は困難である。

**その他** 当該期のその他の器種としては低脚坏・鉢・甕形土器・コップ形土器がある。鉢(162)は形状・製作技法共に他個体との共通性がなく特異な個体である。半球状の椀形の体部はこの個体の他に見当たらない、台部の作りもまた特徴的である。小さな底部の周縁に高台状に粘土紐を貼り足して台部を作る。裏側からには貼り付け痕が明瞭に残る。台は脚状ではなく平底を維持しており、低脚坏のような坏系統とは明らかに違う系譜のように思われる。内外面にミガキを施すことから、仕上げを意識しているものと思われるが、ややいびつな器形や口縁端部のまとめかたなどからは、全体的な作りは粗雑な感じを受ける。

b. 特記遺物 2区の特記遺物として羽状文小壺とスタンプ文土器・外来系土器が挙げられる。

**羽状文小壺** SD2014から出土した121・122・123がそれにあたる。精緻な作りの小壺をベースとして、口縁部には平行沈線文を、体部には貝殻腹縁刺突による羽状文を複数段めぐらせる。外面全面に装飾が及ぶ特異な外観を持つ。この小壺は『青谷上寺地遺跡3』では「加飾された小型の土器」として紹介されており、直接の系譜で結ぶのは難しいとしながらも、施文や法量などの共通性から機能面において台付装飾壺との関連性が指摘されている。時期は台付装飾壺より後出、「松井編年Ⅷ・Ⅹ期～古墳時代前期」とされる。

**スタンプ文土器** 掲載遺物では器台(45・46・152)、壺(123)、高坏(15)の5個体にスタンプ文が確認できる。文様詳細は、45・46・152が同心円文系(45・152:二重圏同心円文、46・152:三重圏同心円文)、123が半截竹管文である。15に見られるスタンプ文は非常に特殊である。高坏口縁部に上下2段に種類の違うスタンプ文をめぐらせる。上段は左右非対称のS字状文。下段は一見鋸歯文のように見えるが、実に手の込んだ文様である。三角形の枠の中に正方形の列点を山形に配し、その内側に2重の三角を配する。この三角文は類例がなく、奈免羅・西の前遺跡のオリジナルスタンプ文

である。このような複雑な文様をスタンプで表現するのは簡単ではないはずである。果たしてどのような意味が込められているのであろうか。

外来系土器 北近畿系と吉備系に大別される。

北近畿系 高坏 (82・108・148) に北近畿系の様相がみられる。浅い椀形の坏部が特徴で、口縁付近は緩く屈曲し有段口縁状となる。82は胎土観察からオリジナルに忠実に再現された模倣品の可能性が示されている。一方、SD2014から出土した148はほぼ完形に復元された。胎土が特徴的な個体で、在地系土器の褐色系胎土とは異なり、乳白色の胎土を持つ。器形とあわせて考えると、丹後からの搬入品である可能性が高い。このほかに、北近畿・北陸からの搬入品の可能性のあるものとして、壺 (93・96)、コップ型土器 (160) が挙げられる。93・96はその特徴から台付装飾壺から派生した壺と考えられる。台付装飾壺は山陰での出土例が多い器種で、当遺跡の近隣では青谷上寺地遺跡で多数出土している。それらを当遺跡出土品と比較すると、プローションまたは過剰な施文などに共通性がみられるが、施文詳細や突帯形態など台付装飾壺を決定づける部分には差異がみられ、直接的な関連を見出すのは難しい。台付装飾壺は地方への伝播の過程で各要素が大きく変化するとされており、当遺跡出土品はむしろ地方の模倣品に近いといえる。したがって、地方での変容品が逆にこちらに持ち込まれた可能性が挙げられる。

吉備系 高坏 (53・141・142・143) に吉備系の様相がみられる。坏部の屈曲部のシャープな稜から外反しつつ立ち上がる口縁と、口縁外面に施文されるへら描き斜格子文とを特徴とする。弥生時代後期中葉から後葉に属する遺物と考えられる。搬入品かどうかの判断はできない。

3. まとめ 本書掲載土器を再度整理することで、今回出土した2区と3区の土器群はそれぞれに重要な意味を持つ資料群であることがわかった。

3区では、個体数は少ないものの集落(住居)に伴った土器であるという点が重要である。その時期が弥生時代中期中葉から後葉にかけての短期間に限定されること、他の混入品がほとんどみられないことから、集落に対する一括性が強い資料群といえる。

2区では大溝から出土した大量の土器がやはり鍵である。その中心は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉、弥生時代から古墳時代への過渡期の土器群である。溝からの出土である以上、ある程度の時期幅を想定しなければならないが、同様の溝が3条存在し、遺物から時期差を判定することができた点が重要といえる。

奈免羅・西の前遺跡の土器は山陰の土器の典型的な部分を持ちつつも北近畿系・吉備系などの外来系土器の共伴が目立つ。北近畿・吉備とも地理的には隣接しているが、丹後からの搬入品となるとやや距離が遠い。そのような遠方との交流を持っていたことを示すことができたのは大きな成果である。そして、北近畿との関わりについては、搬入品だけでなくオリジナルに忠実な模倣品と思しき個体が確認されたことにより、工人を含めた人の移動を視野に入れて考える必要があるようである。

調査地周辺の同時期の集落遺跡では、丸山遺跡・万代寺遺跡がある。共に弥生時代中期から古墳時代前期の土器が多数出土している。奈免羅・西の前遺跡の南西約1kmに位置する丸山遺跡出土土器とは、肩部への貝殻腹縁を利用した施文やスタンプ文土器のほか、吉備系高坏と思しき個体の出土など、共通点の多さが注目される。さらに、高坏に注目するなら、丸山遺跡の出土個体数は非常に多いように思える。一方、奈免羅・西の前遺跡の2区において、高坏は器台と同数の22個体抽出されて



おり、こちらもまた器種構成の主たる一角を占めている。元来、山陰は高坏の比率が低い地域とされているが、この数量を考えた場合決して少ないとはいえないだろう。外来系土器における高坏の比率が高いことも考えると、その理由は不明ながらも、高坏がこの周辺を特徴づける一つの要素となりそうである。地理的に考えてもやはり古備の影響を外すことはできないだろう。

2区・3区の土器観察を通して、弥生時代中期段階にはみられなかった北近畿・吉備系の土器が、弥生時代後期から古墳時代前期には頻出するようになることがわかった。精度の高い模倣品の存在は、これが単なる交易の結果としてだけでなく、この時期に人の移動が活発化したことを物語っている。交易の活発化にせよ、人の移動の活発化にせよ、このような活動の背景には、国境付近の集落、クニの存在感の高まり、発言力の高まりを想定できるのではないだろうか。

本節は2010年2月10日におこなわれた奈免羅・西の前遺跡遺物検討会の内容に基づき、補足データを加えて取りまとめたものである。土器の所見については財団法人鳥取県教育文化財団 松井潔氏の教示によるところが特に大きく、山陰系土器のほか、外来系土器や台付装飾甕についても丁寧に解説していただいた。記して感謝いたします。

註1 河合章行他2009「第5章 総括 第1節 弥生時代後期～古墳時代前期初頭の墓について」『青谷上寺地遺跡10・第9次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告27 鳥取県埋蔵文化財センター

#### 参考文献

- 松下利秀 1981『丸山遺跡発掘調査報告書』船岡町教育委員会  
山形頭應 1983『万代寺遺跡発掘調査報告書』郡家町教育委員会  
山根雅美 1986『奈免羅・西の前遺跡』船岡町教育委員会  
谷口恭子・前田均 1991『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市文化財報告書30 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団  
清水真一 1992『因幡・伯耆』『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編1 木耳社  
松本哲也 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県教育委員会  
湯村功 2001「第4章 出土遺物 第1節 土器」『青谷上寺地遺跡3. 鳥取県教育文化財団調査報告書72』(財)鳥取県教育文化財団  
松井潔 2008『「台付装飾甕」が語る弥生時代の日本海沿岸地域の交流』むきばんだ新涼考古学講座1 資料



### 第3節 奈免羅・西の前遺跡出土石器の様相

結城 香

#### 1. 出土石器の概要

本調査においては人為的な加工痕を有する 279 点の石器・石製品が出土した。調査区毎にみると 1 区 13 点、2 区 20 点、3 区 246 点で、このうち実測図を掲載したものは 56 個体 97 点である。主要な石器類については肉眼による石材鑑定を行った。鑑定結果については出土石器一覧表に示す。(表 26・27・28)

本節では石材と石器の関係について検討を行う。主対象は出土数の多い 3 区出土の石器・石製品である。3 区では弥生時代中期後葉の集落を確認しており、石器類は概ね集落と同時期に属するとみられる。また、特殊な石器類では、黒曜石剥片、水晶製小玉、碧玉製管玉がある。これらについては後述する。

#### 2. 石材について

出土石器一覧表に示した石材(岩石)は多種で、石器も多彩である。石材と石器の関係を示すため、最初に主要な岩石の形成過程と特徴を簡単に整理しておく。

##### 各岩石(石材)の特徴

a. 火成岩 マグマが冷え固まった岩石である。冷え固まる速度と構成鉱物により分類される。地表面で急速に冷やされた火山岩と地中深くでゆっくり冷やされた深成岩に分けられる。

・安山岩 地表に出たマグマが急速に冷やされてきた火山岩である。含まれる鉱物により更に細分される。

b. 堆積岩 堆積岩の多くは流水によって運ばれてきた<sup>さいごつぶつ</sup>碎屑物(風化や浸食により細かくされた岩石の粒子)が堆積し固結した岩石である。堆積物や成因によって生物岩や蒸発岩等に細分される。

・泥岩(新第三紀) 粒径 1/256mm 以下の泥(粘土)碎屑物が固結した岩石である。硬質であるが脆く、割れ面は薄く貝殻ようになる。石器に使用した場合、打撃加工によって鋭い刃部を製作することに適している。

頁岩とは泥石より剥離性が高く、堆積時の葉理が剥離面となるものを指す。地質上、頁岩は泥岩の一つとすることができるので、出土石類一覧表(表 26～28)では、泥岩に対応する石材として、頁岩という表記を使用している。

(新第三紀は地質時代区分である。概ね 2400 万年前から 170 万年前。)

・泥岩(古紀) 上記と同様であるが形成時期が異なる。新第三紀より前。

・砂岩(新第三紀) 砂(粒径 2～1/16mm の碎屑物)が固結した岩石。泥岩よりも目が粗く軟らかい。

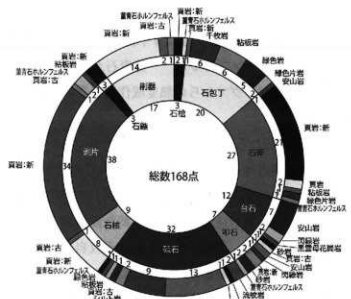
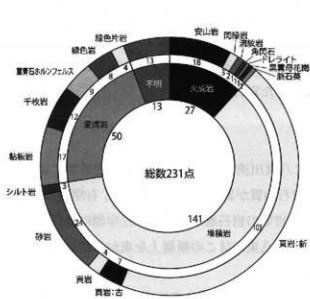
・砂岩(古紀) 上記と同様であるが岩石が形成された時期が異なる。新第三紀より前。

c. 変成岩 岩石が高い温度や圧力による変成作用を受け、鉱物成分や鉱物構造が変化して別の岩石となったもの。

・粘板岩 泥岩が弱い変成を受けたもの。再結晶作用のため、薄板状に剥離しやすい特性を持つ。

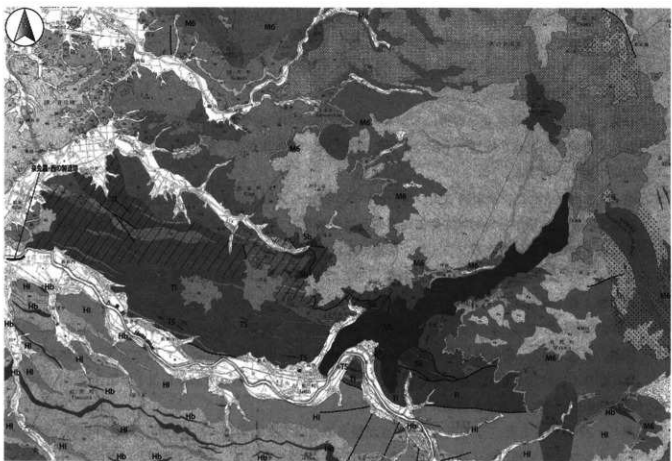
・緑色岩 火山岩が弱い変成を受けた岩石である。片理ははっきりしない。

・千枚岩 粘板岩より変成の進んでいる岩石である。薄く葉片状に剥がれやすい特性をもつ。



岩石内訳表

石器内訳表



地質調査所発行 1:50000地質図 若板 12-22 を部分抜粋・追記

記号	地質名	石材鑑定名	記号	地質名	石材鑑定名	記号	地質名	石材鑑定名
■-M6	黒色泥岩	頁岩(新第三紀)	■-Hb	緑色千枚岩(三)	緑色千枚岩	■-Vh	輝石角閃石安山岩	輝石角閃石安山岩
■-T1	割断泥質岩	頁岩(古)	■-H1	泥質千枚岩(三)	泥質千枚岩	///	ホルンフェルス	墨青石ホルンフェルス
■-TS	砂岩	砂岩	■-Sb	緑色片岩(三)	緑色片岩	□		強粘土帯
						.....		新層

図10 岩石・石器内訳表及び調査地周辺地質図

※(三)：三郎堂成岩

平行な配列を持つ岩石片理の発達によりベラベラと剥がれるので板状に加工しやすい。

- ・緑色片岩 緑色で平行に薄く剥がれやすい岩石である。千枚岩より変成が進んでいる。
- ・ホーンフェルス 葉青石ホルンフェルス 葉青石が含まれるホルンフェルスである。ホルンフェルスとは砂岩や泥岩などがマグマからの熱変成作用を受け、硬く緻密になった岩石である。

### 3. 地質図からみた石材分布

次に調査地周辺の石材分布について考える。図 102 に八東川流域の地質図を示す。地質図によると八東川の左岸(南側)と右岸(北側)では断層を挟んで岩石の質が異なることがわかる。右岸側には、黒色泥岩・輝石角閃石安山岩・剪断泥質岩・砂岩・緑色片岩等の岩石層が広がる。左岸側には三郡変成岩に属する、泥質千枚岩・緑色千枚岩の岩石層が広がる。八東川はこの断層上を東から西にかけて流れている川である。

八東川の右岸、調査地付近には剪断泥質岩・緑色片岩の一部が変成作用を受けたホルンフェルス層、同じく調査地東側の若桜町付近には黒色泥岩の強粘土化を示す一帯があり、良質な石材が採取できる環境にある。

石器の材料となる岩石は八東川流域に存在しており、これらの石材が調査地付近で比較的容易に入手できる環境であったことがわかる。

### 4. 石器と石材の関係について

石器、石製品のうち主要な器種について、石材と器種の間を右器内訳表に示した(図 102)。各石器は使用痕・加工痕を観察し下記のように区分した。個体数が多いものや、石材との関係が示せる石器について整理する。

石槍 3点出土した。頁岩製2点、葉青石ホルンフェルス製1点である。敲打により成形され刃部をなす石器。先端が三角形に尖る両刃の石器を本調査では石槍とした。刃部を製作するのに適した頁岩と硬質な葉青石ホルンフェルスを用いられている。

石包丁 20点出土した。千枚岩・粘板岩製が6点で最多で、以下緑色片岩製5点、緑色片岩製2点、頁岩製1点である。

薄い板状に加工した石材を、半月形や長方形に成形し、長軸方向の一侧縁に研磨によって刃部を作る。穿孔があり、紐を通して使用されていたとされる。出土品は5cmから最大で17cmをはかる。穿孔がなく、作りも粗い状態の未製品も出土している。板状の石器である石包丁の製作には、千枚岩、粘板岩の薄く剥離する特徴が活かされている。

石斧 27点出土した。うち頁岩製23点が最多で、以下安山岩製・粘板岩製・緑色片岩製・葉青石ホルンフェルス製が各1点である。打撃・研磨により成形する。刃部は片刃と両刃がある。木製の柄を付けて用いたとされ、土の掘削や樹木の伐採等に使用された。

当遺跡出土例では、ほぼ長方形に整形した個体が多いのが特徴である。長軸方向の側面には、直線を意識したと思われる丁寧な調整を施す例もある。短軸方向の側面には、敲打・研磨による刃部を作る。刃部を製作するのに適した頁岩製が多数を占める。

台石 12点出土した。うち安山岩製7点が最多で、以下閃緑岩製2点、黒雲母花崗岩製・砂岩製・



表 27 出土石器類一覧表 2

種別	産出地名 (都道府県・市町村)	行方 (m)	縦径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	調査先	出土層位 グレイド/層位/遺構	取上 番号	遺物 番号	グレイド層位 (都道府県・市町村)
砥石	少子	埋蔵品	13.63	7.21	5.78	218	3区	7 / S2S14	3186	少子町
砥石	七上	埋蔵品	7.1	4.44	0.65	5	2区	7 / S2S03	3188	少子町
砥石	林崎	埋蔵品	6.86	3.24	0.68	1.0	2区	M55 / S2S012	0793	萩原町
砥石	鹿野石カルシウムスラース：新	埋蔵品	7.07	5.66	3.76	3.8	3区	7 / S2S04	2167	萩原町
砥石	鹿野石	埋蔵品	12.28	5.28	1.93	2.9	3区	7 / S2S00 - S2S004	3009	萩原町
砥石	林崎	埋蔵品	9.76	3.72	2.66	1.37	2区	M57 / 遺構	0270	萩原町
石核	目黒：新	埋蔵品	6.38	4.6	10.7	37.4	3区	O5 / 埋蔵品層	0833	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	6.9	6.09	1.99	0.1	3区	O8 / 埋蔵品層	0855	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	5.82	3.63	0.93	21.8	3区	N4 / S2S006	0970	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	11.07	7.23	2.86	2.71	3区	N5 / S2S006	1288	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	11.13	8.56	3.65	2.87	3区	7 / S2S006	2123	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	7.69	4.01	1.82	0.61	3区	O6 / 遺構 3001	2129	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	6.9	5.51	0.64	2.8	3区	7 / S2S008	2328	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	3.81	3.1	0.77	8.6	3区	O3 / 埋蔵品層	0852	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	2.91	2.44	0.46	3.3	3区	7 / S2S006	0901	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	8.42	7.04	1.74	104.2	3区	7 / 遺構	0327	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	5.34	3.49	0.72	13.9	3区	7 / 遺構	0450	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	6.85	4.63	0.72	21.7	3区	N5 / 埋蔵品層	0533	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	12.69	6.89	1.82	119	3区	7 / S2S008	0774	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.46	3.8	0.47	6.9	3区	O11 / 埋蔵品層	0747	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	7.46	5.07	1.34	60.9	3区	N5 / 埋蔵品層	0771	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	10.1	5.12	1.17	55.7	3区	O8 / 埋蔵品層	0774	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	8.37	5.73	0.65	24.2	3区	7 / S2S008	0776	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	6.54	5.5	0.57	17.4	3区	P9 / 埋蔵品層	0828	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	6.3	4.46	0.98	26.1	3区	N5 / S2S006	1019	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	5.07	4.49	0.7	19.8	3区	N5 / 埋蔵品層(上列上)	1038	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.25	3.23	0.55	4.7	3区	7 / S2S008	1072	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	7.62	3.38	0.95	32.6	3区	O12 / 埋蔵品層	1144	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	5.59	3.09	0.82	20.3	3区	N5 / S2S006	1265	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	7.14	1.93	0.69	20.3	3区	N5 / S2S006	1267	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	3.18	2.77	0.38	3.9	3区	P17 / S2S020	1910	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	2.94	2.28	0.49	6.1	3区	7 / S2S019	2035	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	7.22	3.1	1.12	25.8	3区	7 / S2S011	2073	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	5.97	3.06	0.57	1.8	3区	7 / 遺構	2123	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	6.57	5.95	0.54	2.9	3区	7 / S2S008	2324	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.66	3.23	0.29	3.8	3区	7 / S2S008	2324	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.06	2.86	3	3	3区	7 / S2S008	2324	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	2.46	2.22	0.14	0.7	3区	7 / S2S008	2324	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.11	2.34	0.66	5.1	3区	7 / S2S008	2324	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	5.4	1.11	0.57	26.5	3区	7 / S2S004	2401	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	2.75	1.76	0.34	1.6	3区	7 / S2S005	2445	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	7.25	7.18	0.76	52	3区	7 / S2S007	2681	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	5.21	3.1	0.38	9.5	3区	7 / 遺構	2684	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.62	3.96	0.47	6.7	3区	7 / S2S47	2892	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.31	3.29	0.4	2.6	3区	7 / S2S03	2781	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	6.85	5.83	1.34	5.4	3区	7 / P1315	2544	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.42	3.89	0.66	12	3区	7 / S2S018	3387	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	2.77	2.21	0.5	1.9	3区	7 / P1303	3432	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	4.25	3.53	0.59	9.9	3区	7 / P1311上	4683	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	28.7	21.8	4.4	70.1	3区	N3 / 埋蔵品層	1414	目黒：新
石核	目黒：新	埋蔵品	2.82	1.5	0.34	1.8	3区	O11 / S2S039	2179	埋蔵品
石核	野田石カルシウムスラース：新	埋蔵品	1.79	3.81	0.52	11	3区	7 / S2S006	2289	野田石カルシウムスラース
石核	野田石カルシウムスラース：新	埋蔵品	7.74	4.13	0.79	24.6	3区	7 / 埋蔵品層	3535	野田石カルシウムスラース
石核	目黒	埋蔵品	4.35	4	0.4	0.8	3区	O4 / 埋蔵品	3535	343
石核	目黒	埋蔵品	2.85	1.85	0.45	2.1	3区	P6 / 埋蔵品	0656	344
石核	目黒	埋蔵品	2.35	1.05	0.33	0.8	3区	7 / S2S018	3538	381
石核	目黒	埋蔵品	6.17	4.4	1.03	35.9	2区	N3 / 埋蔵品層	0274	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	5.22	4.48	0.67	17	2区	B52 / 遺構(埋蔵品層上)	0288	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	4.99	3.87	0.62	13.8	3区	P9 / 埋蔵品	0777	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	4.23	2.44	0.51	7.5	3区	7 / S2S006	1240	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	5.3	3.86	0.88	15.6	3区	P16 / 埋蔵品	1667	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	10.74	4.83	0.62	38.1	3区	7 / S2S02	3269	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	10.16	5.68	1.25	101.6	3区	P12 / 埋蔵品層	2340	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	6.76	4.69	1.09	37.8	3区	P13 / 埋蔵品層	2344	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	5.32	3.88	1	22	3区	7 / P1304	2640	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	14.32	8.33	1.62	283	3区	7 / S2S011	2690	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	6.96	5.35	1.81	71.6	3区	7 / P1347	3384	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	6.85	5.63	1.34	33.9	3区	7 / 遺構	3444	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	6.3	4.38	1.09	39.3	3区	7 / 遺構上	3539	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	5.1	4.99	0.99	28.4	3区	7 / S2S016	2095	目黒：新
石核	目黒	埋蔵品	6.76	4.74	0.69	49	3区	N5 / 埋蔵品層(上列上)	12534	目黒：新
石核	野田石カルシウムスラース：新	埋蔵品	7.18	4.77	1.05	35.1	3区	7 / 遺構上	0678	野田石カルシウムスラース
石核	野田石	埋蔵品	4.31	2.38	0.59	5.9	3区	N5 / 埋蔵品層	0771	野田石
石核	野田石	埋蔵品	14.45	4.68	1	107	3区	7 / 埋蔵品	0969	238
石核	野田石	埋蔵品	5.25	4.36	0.36	23	3区	O8 / 埋蔵品層	2171	238
石核	野田石	埋蔵品	18.99	8.4	1.65	399.9	3区	P3 / 遺構上	0675	238
石核	野田石	埋蔵品	6	5.2	4.3	170.5	3区	P8 / 埋蔵品層	1088	241
石核	野田石	埋蔵品	6.9	2.9	2.5	45.5	3区	7 / S2S003	2065	171
石核	野田石	埋蔵品	5.6	4.6	1.25	28	1区	CS1 / 遺構	1025	2
石核	野田石	埋蔵品	11.2	9.5	2.5	347	3区	N5 / S2S006	1026	182
石核	野田石	埋蔵品	19.7	10.7	4.7	1184	3区	7 / S2S015	2790	204
石核	野田石	埋蔵品	5.4	2.15	0.4	7.7	2区	M55 / 遺構	5926	17
石核	野田石	埋蔵品	2.4	3.3	0.4	1.1	1区	B31 / 遺構層	0235	2
石核	野田石	埋蔵品	1.1	0.8	0.4	0.2	1区	CS1 / 遺構上	3537	3
石核	野田石	埋蔵品	2.95	1.1	1.1	8.6	2区	M51 / 遺構層	0179	21
石核	野田石	埋蔵品	2.45	0.85	0.8	2.6	2区	L34 / 遺構層	0297	22
石核	野田石	埋蔵品	0.9	0.45	0.4	0.2	1区	N31 / 遺構	0649	7
石核	野田石	埋蔵品	1.45	0.4	0.4	0.2	1区	P12 / 遺構	1027	4
石核	野田石	埋蔵品	2.3	0.35	0.35	0.2	3区	O4 / S2S005	1927	176
石核	野田石	埋蔵品	0.49	0.4	0.1	3区	7 / S2S003	3540	196-1	
石核	野田石	埋蔵品	0.84	0.4	0.1	3区	7 / S2S003	3540	196-2	
石核	野田石	埋蔵品	0.57	0.4	0.1	3区	7 / S2S003	3540	196-3	
石核	野田石	埋蔵品	1.8	0.4	0.1	3区	7 / S2S003	3540	196-4	
石核	野田石	埋蔵品	0.56	0.39	0.1	3区	7 / S2S003	3540	196-5	
石核	野田石	埋蔵品	0.49	0.4	0.1	3区	7 / S2S003	3540	196-6	
石核	野田石	埋蔵品	0.34	0.4	0.1	3区	7 / S2S003	3540	196-7	
石核	野田石	埋蔵品	0.5	0.36	0.1	3区	7 / S2S003	3540	196-8	

表 28 出土石器類一覽表 3

種別	産地	鑑定者石名	石種	長さ	幅	厚さ	重量	備考	山名		遺跡	出土層	遺物	グラフ分期層石名
									ダリツ	山名				
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.62	0.4	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-7			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.46	0.39	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-10			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.47	0.46	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-11			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.43	0.42	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-12			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.48	0.34	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-13			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.48	0.39	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-14			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.52	0.41	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-15			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.48	0.35	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-16			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.53	0.42	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-17			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.47	0.38	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-18			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.42	0.34	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-19			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.57	0.41	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-20			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.31	0.32	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-21			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.56	0.46	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-22			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.31	0.33	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-23			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.58	0.47	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-24			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.34	0.35	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-25			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.39	0.38	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-26			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.55	0.4	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-27			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.55	0.4	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-28			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.37	0.35	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-29			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.47	0.41	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-30			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.49	0.35	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-31			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.59	0.36	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-32			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.52	0.42	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-33			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.49	0.42	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-34			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.5	0.4	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-35			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.56	0.4	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-36			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.51	0.43	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-37			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.58	0.42	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-38			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.6	0.4	0.2	0.2	3.0		// SX3003	3540	198-39			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.52	0.35	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-40			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.54	0.49	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-41			
野郎土	石名(水島)	火成岩	0.52	0.37	0.1	0.1	3.0		// SX3003	3540	198-42			
不明	不明	不明	53	12.5	8.89	3200	3.0		// S19008	2989		山名		
不明	不明	不明	17	7.48	4.79	320	3.0		// S19008	2989		山名		
不明	不明	不明	8.98	6.94	1.85	230	3.0		// S19008	2989		山名		
不明	不明	不明	25	10.2	7.38	1.6	3.0		// S19014	3192		山名		
不明	不明	不明	7.48	7.08	5.63	4.3	3.0		// S19014	3192		山名		
不明	不明	不明	12.16	8.99	2.5	419	3.0		// S19008	2989		山名		
不明	不明	不明	8.68	4.03	0.68	26.8	3.0		// S19007	2262		山名		
不明	不明	不明	6.25	5.73	3.77	190.3	3.0		// P19219	2493		山名		
不明	不明	不明	4.9	5.42	0.52	0.1	3.0		// S19014	2491		山名		
不明	不明	不明	15.5	6.7	4	478	2.0			330 / 藤子塚	0280	19	山名	
不明	不明	不明	6.9	6.22	1.87	113.5	3.0			O3 / 藤子塚	0281	19	山名	
不明	不明	不明	10.1	5.12	1.17	55.7	3.0			O9 / 藤子塚	0275	19	山名	
不明	不明	不明	2.18	5.26	1.69	29	3.0			// S19007	2550		山名	
不明	不明	不明	6.25	3.69	1.82	122.3	3.0			O4 / 藤子塚	0276	19	山名	
不明	不明	不明	22.3	17.1	2.92	130.2	1.0			J5 / 藤子塚	0250	19	山名	
不明	不明	不明	3.9	2.0	0.45	3.9	3.0			P6 / 藤子塚	0665	242	山名	
不明	不明	不明	17.5	9.44	0.5	1413	3.0			// S19004	2168		山名	
不明	不明	不明	12.38	6.34	5.04	440	3.0			P9 / 藤子塚	2532		山名	
不明	不明	不明	8.32	1.9	1.64	47.7	3.0			// S19018	2512		山名	
不明	不明	不明	10.23	4.03	0.72	33.8	3.0			P8 / P3100	2629		山名	
不明	不明	不明	4.29	3.08	0.72	31.06	3.0			// S19020	2789		山名	
不明	不明	不明	13.7	8.66	5.01	600.5	3.0			// P2742	3200		山名	
不明	不明	不明	10.03	7.1	2.37	190.2	3.0			// S19014	3197		山名	
不明	不明	不明	9.83	13.15	0.75	28.7	3.0			P2 / 藤子塚	0672	236	山名	
不明	不明	不明	3.99	2.82	0.57	6	3.0			O16 / 藤子塚	0720		山名	
不明	不明	不明	7.8	3.78	0.83	94.4	3.0			P1 / 藤子塚	0763		山名	
不明	不明	不明	6	5.01	1.15	43.1	3.0			P8 / 藤子塚	0843		山名	
不明	不明	不明	6.49	3.2	0.63	18.7	3.0			O14 / 藤子塚	1082		山名	
不明	不明	不明	7.01	3.52	1.13	35.9	3.0			O14 / 藤子塚	1134		山名	
不明	不明	不明	9.01	2.86	1.18	42.8	3.0			N5 / S19006	1923		山名	
不明	不明	不明	5.23	4.42	0.61	21.0	3.0			O9 / 藤子塚	2090		山名	
不明	不明	不明	6.23	3.64	0.61	22.7	3.0			P2 / 藤子塚	0671		山名	
不明	不明	不明	9.23	4.1	2.12	153.7	3.0			N5 / S19006	1027		山名	
不明	不明	不明	6.44	3.77	0.52	18.7	3.0			O14 / 藤子塚	1082		山名	
不明	不明	不明	5.34	2.69	0.66	3.6	3.0			// S19005	2166		山名	
不明	不明	不明	14.41	8.18	2.9	460	3.0			// S19007	2262		山名	
不明	不明	不明	7.96	4.93	0.77	28.5	2.0			N32 / 藤子塚	0028		山名	
不明	不明	不明	24.8	15.1	5.55	331	3.0			// S19004	2162		山名	
不明	不明	不明	4.7	1.3	0.67	3.6	3.0			// S19006	2083		山名	
不明	不明	不明	2.5	2.4	1.9	6	1.0			B53 / S19001	0315		山名	
不明	不明	不明	3.25	2.53	0.4	5	1.0			B53 / S19001	0315		山名	
不明	不明	不明	5.85	1.41	49	1.0	1.0			B51 / 藤子塚	0184		山名	
不明	不明	不明	7.56	6.61	2.59	99	3.0			B51 / 藤子塚	0184		山名	
不明	不明	不明	3.68	1.94	1.05	1.0	1.0			B53 / S19001	0234		山名	
不明	不明	不明	4.79	4.57	0.77	18	2.0			N5 / 藤子塚	0380		山名	
不明	不明	不明	6.68	5.24	0.96	35	3.0			P16 / 藤子塚	1178		山名	
不明	不明	不明	7.47	1.2	1.39	3.0	3.0			// P19211	2003		山名	
不明	不明	不明	7.28	4.67	5.94	121	3.0			// S19002	2083		山名	
不明	不明	不明	5.38	4.09	7.4	25	3.0			// S19002	2158		山名	
不明	不明	不明	3.63	1.86	0.2	2	3.0			// P1310	2308		山名	
不明	不明	不明	4.61	3.42	1.31	19	3.0			// P19204	2599		山名	
不明	不明	不明	4.53	2.68	0.42	15	3.0			// P19419	3317		山名	

頁岩製各1点である。

上面に平坦面を有する直径20cm以上のやや大型の石器。平坦面に凹みを有するものもある。本調査では竅穴住居跡の床面で出土したものを台石とした。

叩石 7点出土した。頁岩製・砂岩製が各2点、以下安山岩製・閃緑岩製・葦青石ホルンフェルス製が各1点である。

手に握って使用し、物を潰したり叩いたりする道具。衝撃を受ける部分には打痕が残されている事が多い。

砥石 32点出土した。うち砂岩製13点が最多で、以下頁岩製が10点、流紋岩製・シルト岩製が各2点、安山岩製・角閃石製・粘板岩製・緑色岩製・葦青石ホルンフェルス製が各1点である。研磨に使用された石器。大型の砥石の研面は凹んだ平坦面となる。

3区SI3014から4面の砥面を持つ砂岩製の大型砥石(223)が出土している。主要な砥面に挟まれた平面部には、部分的に筋状の研痕が認められる。刃部調整痕と思われる。

石核 9点出土した。全て頁岩製である。

剥片を剥がし取った後に残った原材。

剥片 38点出土した。頁岩製35点が最多で、葦青石ホルンフェルス製が2点、粘板岩製1点である。

主に打製石器の製作過程で生じる小片を指す。当遺跡出土の剥片は0.9～104gまでと大きさに幅がみられる。大きな剥片は石器の素材となるもの。小さな剥片は刃部への調整剥離で生じたものと考えられる。

石鏃 3点出土した。全て頁岩製である。

石製の鏃(やじり)。狩猟用の小型石器。石材を長方形もしくは柳葉形に成形し、微細な調整剥離によって縁部に刃部を作る。

削器 17点出土した。頁岩製16点、葦青石ホルンフェルス製が1点である。

調整剥離によって縁辺の一部に刃部を成形する。石斧や石鏃のように明確な分類はできないが、刃部の調整が認められる石器を本調査では削器とした。

第102図に示した岩石内訳表グラフからは、調査地周辺地質図と対応する石材を使用して多様な石器が製作されていること、石材は特殊なもの(碧玉、黒曜石)を除いてはすべて当該地付近で入手できることがわかる。石材として使用される石種は堆積岩である泥岩(頁岩)と砂岩が多く、火成岩である安山岩、変成岩である粘板岩も多い。厳密に石材が石種と対応するわけではないが、石器の器種毎にほぼ決まった石材が選ばれている。石鏃・石斧・叩石・削器等の硬度が必要な石器については泥岩(頁岩)が用いられ、石包丁のような薄い板状の形状を特徴とする石器については緑色千枚岩、緑色岩が用いられる傾向が認められる。

3区竅穴式住居跡(SI3006)の中央土坑(SK3018)から出土した石鏃(181)は、同遺構埋土を水洗いして得られた頁岩製剥片と接合でき、住居内で石器の加工を行っていたことが確認された。調査では、このほかに石包丁・石斧の未製品が多数出土している。石包丁の未製品の抽出遺物は3点ある。敲打痕・研磨痕はみられるものの調整が粗く、円孔は未穿孔もしくは穿孔途中である。この未製品や加工のばらつきが多さも集落内での日常的な加工を裏付けているのではないか。

掲載された地質図に示されていない石材を使用した石器・石製品は以下のものがある。

**黒曜石製剥片** ほとんど鉱物を含まないガラス質の火成岩。割ると非常に鋭い貝殻状の剥離面を示す。肉眼鑑定では産地は特定できない。調査地の近辺では島根県の隠岐島で黒曜石を産出する。1区の中世以降耕作土からの出土のため、帰属時期は不明である。剥片は2点、1.1gと0.2gの微細破片である。

**碧玉製管玉** 4点出土した。碧玉は微細な石英の結晶が集合した鉱物で、不純物である酸化・水酸化鉄等を含むことによって不透明となり色調が変わる。肉眼鑑定では碧玉の産地は特定できない。調査地の近辺では島根県の出雲花仙山で碧玉を産出する。管玉の穿孔方法が鉄針による個体もあることから古墳時代以降のものである可能性が高い。碧玉製の管玉は長さ0.9から2.95cm。孔径は0.1から0.3cmまでを測る。

**緑色凝灰岩製管玉** 1点出土した。竪穴式住居跡(SI3005)からの出土である。緑色凝灰岩は火山灰が地上や水中に堆積し、固結した岩石で、石材としては比較的柔らかく加工しやすい。穿孔具は石針で、両面穿孔と推測される。長さ2.3cm、径0.35cm、孔径は2mmである。

**水晶製小玉** 水晶とは鉱物である石英の中で特に無色透明のものを指す。3区木棺墓(SX3003)主体部埋土の水洗によって、水晶製小玉が42点検出された。形状は2種に分類できる。胴部の張り出した稜線のある算盤玉形が40点と稜線のない丸型が2点である。共伴する土器がないことから遺構時期は不明であるが小玉の穿孔具が鉄針とみられることから弥生時代後期以降の可能性が高い。したがって集落出土の石器類とは異なる時期と考えられる。算盤玉形は長さ0.31から0.6cm、幅0.33から0.46cmをはかる。丸型の水晶は長さ0.31と0.34cm、幅は0.33と0.35cmをはかる。いずれも小型である。

## 5. まとめ

奈免羅・西の前遺跡は、八東川流域に分布する多様な石材を人手でできる環境にあることがわかった。石材と石器の関係の検討を通じて、弥生時代中期後葉の頃には、目的・用途に応じた石材を選択して、集落内で石器の製作を行っていたことが判明した。八頭町のこれまでの発掘調査において、弥生時代の集落とその出土石器の関係が、石材の産地と石器の加工地を含めて、このような形で示された例は初めてではないだろうか。粗雑な概観をまとめたただけのものではあるが、今後、他遺跡の出土例と比較しつつ本稿の所見の妥当性を検証していきたい。

## 参考文献

- 田中英司 2004 『石器実測法情報を書く技術』 雄山閣  
岡俊彦 2002 『ポケット版 学研の図鑑⑥ 鉱物・岩石』 学習研究社  
益宮壽之助 1955 『原色岩石図版』 保育社



## 第4節 奈免羅・西の前遺跡出土の銅鋼

井汲 隆夫

### 1. SI3012内SK3027の銅鋼片の出土状況

奈免羅・西の前遺跡Ⅱ-3区第2面SI3012内から青銅製の銅鋼片が出土した。この資料は材質と形状から有鉤銅鋼の可能性が高いとわかり、山陰地方（鳥取・島根両県）では初の出土、全国的にみても30遺跡目、80例目となる貴重な発見となった。

出土地点は、3区第2面P2グリッドの竪穴住居跡SI3012内のSK3027である。SK3027は、平面形は不整四角形の浅い土坑で、規模は、長軸125.0cm、短軸75.5cm、遺構確認面からの深さは7.3cmである。SK3027から口縁端部に凹線文を有する甕の口縁部片が出土しており、弥生時代中期後葉とみてよい。SK3027に切られるSK2026がこのSI3012の中央土坑に相当し、遺構内には弥生土器の甕片がつぶれた状態で遺存していた。この甕片は内面にハケ調整痕があり、体部の形状からも弥生時代中期後葉頃の特徴を具えていた。

SI3012竪穴住居跡は、竪穴の掘方も壁溝も残されていない状態であるが、周囲の弥生時代の竪穴住居跡例をみれば、平面形は円形と思われる。北側に位置するSI3011が、柱穴4基、中央土坑1基の組み合わせで円形を呈しており、規模的にもSI3012に近い。SI3011とSI3012は4基の柱穴と1基の中央土坑を有する点で共通性がある。また、この4基の柱穴のうち1基に礎石を備えていること、しかも、その礎石を有する柱穴の脇にもう一つ礎石を備えたピットを有する、という特徴を共有する。SI3011は南西側の柱穴の南、SI3012は北東側の柱穴の北に、それぞれピットをもつ。この特徴はSI3003の南側柱穴でも類似のパターンが見られるため、当該集落の竪穴住居にしばしば作られる共通の構造物の跡であろう。この“礎石柱穴の脇に礎石ピットを有する竪穴住居跡”が、この集落の特性を明らかにする糸口になればと期待するが、今のところ有意な解釈には至っていない。

出土した銅鋼片は、遺存状態1割未満の細片であり、残存長2.75cm、幅0.80cm、厚さ0.55cm、重量5.3gである。有鉤銅鋼に4箇所ある屈曲部分のうち1箇所とみられる。環部下面（上面の可能性もある）には平坦面が作られ、有鉤銅鋼が上下2箇所平坦面を加工するものが多いという特徴に合致する。

### 2. 奈免羅・西の前遺跡出土銅鋼の特徴

表29に、これまで報告された30遺跡の有鉤銅鋼の出土例を記し（このうち10の田能遺跡出土例は有鉤ではない）、図103にその位置を示す。

過去の例を見る限り、有鉤銅鋼は竪穴住居跡や墳丘墓、古墳からの山上が多い。出土遺跡の時期は、弥生時代中期以降古墳時代後期までの期間に及ぶ。当遺跡山上の銅鋼が鳥取県内では初の山上であることは先に述べたが、木製品等の膨大な遺物の出土量で注目される鳥取県東部の青谷上寺地遺跡では有鉤銅鋼は出土していない。青谷上寺地遺跡には、竪穴住居跡や墳墓の遺構がなく、個人の着用品と思われる有鉤銅鋼が出土しにくい条件であったことが影響しているとも思えるが、千代川水系の他の集落跡でもこれまで出土しておらず、多数の竪穴住居跡や四隅突出型墳丘墓が検出された県西部の妻木晩田遺跡等でも、やはり有鉤銅鋼の報告例はない。ならば、奈免羅・西の前遺跡Ⅱの居住者ははたして何者であったか、という疑問が生じる。

この疑問を少しでも解明するため、今回出土した銅鋼について、熊本大学文学部教授の木下尚子教

授に実現していただき、貴重な所見をいただいた。

木下教授からは、「銅質はよく、全面的めらかで、使い込まれた状況を残す」という指摘のほか、形状的にも有鉤銅劍の特徴を貝えており、兵庫県尼崎市の田能遺跡出土例（表 29No.10）、佐賀県桜馬場山十例（表 29No.4）の B 群との類似がみられることが示された。また、本遺跡と同様に竪穴住居跡から出土した当該地と最も近い出土地点である岡山県津山市荒神谷遺跡出土例（表 29No.7）と比較し、形状が異なることを指摘されている。

総括的には、

- ① 貝輪を模倣したものであることは明らかである。有鉤銅劍である可能性は高いが、田能例のような（鉤を有さない銅劍…筆者追記）形状であった可能性もある。
- ② 西日本の初期の有鉤銅劍に共通した特徴をもつ。
- ③ こうした初期の貝輪系銅劍が鳥取県の内陸部で発見されたことは、この地が九州や瀬戸内側と何らかの関係をもっていたことを示唆する。」

という所見を得た。

確かに、青銅の質も良く、蛍光 X 線分析（本報告書第 2 章）の成果にあるように、含有物中にわずかに銀を含み、古墳時代以前の古い時代のもものとみて間違いはない。

木下教授は、有鉤銅劍の変遷について、『南島貝文化の研究 貝の道の考古学』（木下 1996）で総括し、形状・材質等の特徴から、以下の I～V までの 5 段階に区分できることを指摘した。

- I 鉤概念出現以前：南海産貝輪に鉤概念の影響が及ぶ前の段階。貝輪模造銅劍が作られる。銅質は非常に良い。
- II 有鉤銅劍の誕生：南海産貝輪に鉤デザインがはいる、立岩型貝輪を下敷きにした有鉤銅劍が誕生する。銅劍は立岩型貝輪の特徴をとらえ、これにもとづいた形状の鉤をもつ。銅質は一般に良い。
- III 変容 1：銅劍は立岩型貝輪の形状からはなれ、貝輪にはみられない形状をとったり、一部を極端に強調したりする。いっぽう II 段階の銅劍の退化したのもも登場する。銅質の低下がみられる。
- IV 変容 2：銅劍は貝輪の形状から完全に離れる。環部のデフォルメや鉤の扁平化が進む。
- V 変容 3：鉤が銅劍から独立し、極端に強調される。」（木下 1996）から抜粋

有鉤銅劍の誕生と変容の流れを、（木下 1996）から一部改変して、図 104 の「貝輪系銅劍の変容」に示す。この段階区分に当遺跡出土例をあてはめるのは、肝心の鉤の部分がなため困難であるが、少なくとも銅質と作りでみる限り、II 段階かそれ以前の段階に収まる可能性が高く、時期的にみても、弥生時代中期後葉とする上器の年代と矛盾しない。

### 3. 有鉤銅劍の出現と消滅

有鉤銅劍は出土例が非常に少ないため、その意義を見出す作業は難航していたが、木下教授は前掲書において、この有鉤銅劍を、貝輪・銅劍・石鏢を含む弥生時代から古墳時代まで継続する貝輪系銅（腕輪・腕飾）総体の中に置くことで、「鉤の呪力」への崇敬があったことを指摘するに至った。以下では、教授の論考中から有鉤銅劍に関連する貝輪系銅の系譜の概要を述べる。

表 29 全国出土有鈎銅劍一覽表

No.	所在地	遺物名	遺跡種別	個数	状態	特徴	未分類	共存遺物等の年代	文
1	長崎県 対馬市	佐瀬古墳	横石墓(石棺)	2	完存		Ⅱ	弥生後期前半	水野清一・嶋山康・岡崎政 1933『対馬 北海における船角、対馬の考古学的調査』東方考古学専攻乙種第6期 東海考古学会
2-1	長崎県 壱岐市	原の辻(大川地区)	遺跡?	3	破片		Ⅱ	弥生中期中頃～後期前半	安塚隆・藤田和郎 1978『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第37集 長崎県教育委員会
2-2	長崎県 壱岐市	原の辻(原地区)		1	銅片		Ⅱ		福田一志・中尾謙志 2005『原の辻遺跡 遺跡調査』原の辻遺跡調査報告書調査報告書第30集 長崎県教育委員会
3	佐賀県 志摩市	佐野遺跡	横溝	26	完存		Ⅲ	弥生後期前半	杉野正介・原口正一 1961『佐賀県馬場遺跡』『日本遺跡文化の生成』東京堂。佐野正司遺跡調査委員会 1982『馬場遺跡』佐賀県志摩市・馬場遺跡の考古学的調査報告書。六福社
4	佐賀県 武雄市	茂手	横立柱状土葬	1	完存	上下に平銅面	Ⅲ	弥生後期後半	八尾誠也 1986『茂手遺跡』八尾川内川交差点工事に伴う埋蔵文化財発見調査報告書(下巻) 武雄市文化財調査報告書第15集 武雄市教育委員会
5	長崎県 八戸町	倉先遺跡・西の岡遺跡	第六住居跡	1	破片	平銅面あり	Ⅱ?	弥生中前期後半	本野
6	広島県 東広島市	浄福寺2号	第六住居跡	1	8割残存	板状變形	Ⅱ	弥生前期	山田繁樹 1993『東広島ニューケウン遺跡群』広島県歴史文化財調査報告書第97集 財団法人広島県歴史文化財調査センター
7	岡山県 岡山市	兵衛野	第六住居跡	1	破片		Ⅱ	弥生前期	小嶋利幸・白崎 1999『兵衛野遺跡』岡山市歴史文化財調査報告書第54集 岡山市教育委員会
8	岡山県 岡山市	加茂野	土壌	1	銅片	電鍍五角形	Ⅲ	弥生後期後半	松本智博 1999『加茂野遺跡』高松考古学調査・2田遺跡 岡山県埋蔵文化財調査報告書第138集 岡山県教育委員会
9	高知県 高知市	田村遺跡群 B区	第六住居跡	1	銅片				前田典雄 2004『田村遺跡群 B区』高知県埋蔵文化財センター。高知県埋蔵文化財センター 2005『田村遺跡群 B区』高知県埋蔵文化財センター
10	兵庫県 姫路市	田原	木版墓	1	完存		Ⅰ (典古)	弥生中期末～後期後半	田原遺跡発掘調査委員会 1986『田原遺跡報告書』
11	大阪府 大東市	長原(NGC-6次)	第六住居跡	1	銅片		Ⅲ		大東市教育 2005『大東市平野町長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』財団法人大阪文化財協会
12	大阪府 東大阪市	巨摩野寺	古墳遺構	1	破片		Ⅲ	弥生中期末～後期後半	玉井尚徳 1981『巨摩野・広生堂』大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター
13	大阪府 東大阪市	新法	溝	1	ほぼ完全	扇形三角	Ⅲ	弥生～古墳	財団法人大阪府文化財センター 1981『考古学 河内平野を語る』
14	奈良県 奈良市	富屋丸山古墳	内溝(粘土管)	1	完存	扇形変形	V 銅?	古墳時代	八賀吉 1982『富屋丸山古墳』西宮市古墳出土遺物調査報告書第6集 西宮市教育委員会
15	京都府 大宮町	大宮南(木柵直葬)	付状態(木柵直葬)	13					白飯吉典 2000『大宮南直葬遺跡』西宮市文化財調査報告書第15集 西宮市教育委員会
16	福井県 鯖江市	西山公園	埋葬施設?	9	完存		Ⅲ	不明	藤原健 1966『西山公園出土の銅剣』福井県国史市史・長良山古墳遺跡発掘調査報告書
17	石川県 金沢市	南保野 C	方塚遺構	1	破片				伊藤孝文 2002『金沢市南保野 C 遺跡』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
18	愛知県 名古屋市長	三土山	遺跡	2	異形	重耳形	弥生後期		水野清之 1999『埋蔵文化財調査報告書 30 三土山遺跡(第1～5次)』名古屋市文化財調査報告 40
19	静岡県 静岡市	小見	古倉庫	1	銅片	扇形破片	IV	弥生前末～古墳前期	木宮寛 2002『静岡市平出小見の銅剣・鉄鏃・鉄環』『ふちのふる』No.10平成12年度静岡市文化財年報 静岡市教育委員会
20	静岡県 静岡市	藤原城内	第六住居跡	1	破片		Ⅱ	弥生中期末後半	岡村洋 2002『藤原城跡発掘調査報告書(新要報告書第5集)』静岡市埋蔵文化財調査報告書 60 静岡市教育委員会
21	静岡県 静岡市	南金北第6次	水田(排水溝内)	1	銅片		IV		鈴木保之 2000『南金北遺跡』『ふちのふる』No.8平成10年度静岡市文化財年報 静岡市教育委員会
22	静岡県 静岡市	豊島第21次	古倉庫	1	破片	扇形破片	IV		岡村洋 2002『南金北遺跡発掘調査報告書(新要報告書第5集)』静岡市埋蔵文化財調査報告書 60 静岡市教育委員会
23	静岡県 沼津市	御幸第2次	第六住居跡	1	銅片		IV	弥生後期後半	藤川市史部 1980『御幸町遺跡第2次調査報告書』沼津市文化財調査報告書第21集 沼津市教育委員会
24	静岡県 清水市	光崎	古倉庫・第六住居跡	1	扇形破片		IV	弥生中～後半	江藤千鶴 1937『駿河光崎の弥生式土器遺跡調査報告書一其の日本弥生式文化の発祥に与る重要な遺物一』考古学 第8巻第6号 東京考古学会
25	静岡県 下田市	了仙寺遺跡	穴	1	銅片	扇形破片	V 小Ⅱ	古墳時代後期	宮本達 1984『伊豆半島南端に於ける穴遺跡と古銅』『静岡県考古学研究』10 静岡県考古学会
26	神奈川県 鎌倉市	洗子 No.1A 地点	方形溝遺構?	1	銅片		IV	古墳時代前期	山本寿久・谷口 1999『洗子遺跡 No.1A 地点』かながわ考古学財団調査報告書 46 財団法人かながわ考古学財団
27	神奈川県 鎌倉市	待田 U 区	第六住居跡	1	破片		IV		赤坂忠孝 1975『待田遺跡発掘調査報告(本文編)』鎌倉市文化財調査報告書第5集 鎌倉市教育委員会
28	神奈川県 鎌倉市	板丸遺	第六住居跡	1	銅片	扇形破片	IV	弥生中期末～後半	伊藤尚吉 1976『板丸遺跡第一期・第二期発掘調査報告』板丸遺跡調査報告書
29	神奈川県 鎌倉市	手仏八反目	第六住居跡	1	銅片		IV	弥生後期前半	永井正徳 1984『手仏八反目遺跡発掘調査報告書』手仏遺跡発掘調査報告書
30	千葉県 市原市	北越台	第六住居跡	1	完存	扇形丸み、上下に平銅面	IV	古墳時代前期	本野和紀 1990『市原市北越台遺跡』財団法人千葉県文化財センター調査報告書第39集 財団法人千葉県文化財センター
31	埼玉県 朝霞市	宮台・宮原第7地点	土壌	1	破片		IV		藤原芳之 2006『有鈎銅剣について』『新野市 宮台・宮原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第318集 埼玉県埋蔵文化財調査委員会

## 脚注

A	福岡県 福城市	青輪古墳		1	ほぼ完全		IV	奈良末～1963『福岡県青輪古墳の銅鏡遺物と銅鏡の系譜』『考古学集刊』
B	福岡県 古賀市	高山 B 地点	第六住居跡	1	破片		IV	弥生中期中頃～後半 福岡県教育委員会 1982『高山遺跡 B 地点』
C	福岡県 朝霞市	宮ノ上	第六住居跡	1				弥生時代後期 谷口 1980『福岡県宮ノ上遺跡』『日本考古学協会年報 40 1987 年度』

※埼玉県・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業部、2006、『宮台・宮原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第318集(元)に本下両子、1996、『新野市文化の調査・具の考古学』等を参考に作成



図103 有鉤銅釧出土位置図

有鉤銅釧の起源が西南諸島近海で産するゴホウラ製の貝輪にあることは、静岡県矢崎遺跡出土の有鉤銅釧に対して、小林行雄(1995『日本考古学概説』東京創元社)・江藤千萬樹(1973「駿河矢崎の弥生式遺跡調査略報」『考古学』)が指摘したことで周知化された。縄文時代から弥生時代にかけて貝輪は日本全国で出土するが、ゴホウラガイ製の貝輪は加工が精密で、貝輪の中で最も仕上げが美しいことで定評があり、特定の身分・地位等にあった者のみが着装したと推測されている。

ゴホウラガイは、奄美諸島、沖縄諸島から熱帯太平洋に分布する巻貝の一種である。学名は *Tricornis latissimus*, Linnaeus といい、腹足綱前鰐亜種中腹足目ソデボラ科(ソデガイ科、スイショウガイ科とも)に分類される。サンゴ礁海底の砂地のうち比較的外洋に近い水深10m程度の海底で生息し、殻高18cm前後にまで育つ。縄文・弥生時代を通じて食用とされるが、弥生時代では貝殻を砂浜に埋めてしばらく放置し、その後掘り出されて南九州へ運ばれたと考えられている。南九州ではゴホウラガイ等の南島産の貝類の粗加工がおこなわれ、その後、各地に運ばれたとみられる。

北部九州の貝輪はこれまでの遺跡出土例から以下のように「Ⅰ類 円環状貝輪」と「Ⅱ類 非円環状貝輪」の2類に分け、さらに貝の種別で細分化されている。

ゴホウラ貝輪は、表30の、大友型(佐賀県東松浦郡呼子町 大友遺跡)、諸岡型(福岡県福岡市博多区 諸岡遺跡)、立岩型(福岡県飯塚市立岩 立岩城田遺跡)、土井ヶ浜型(山口県豊浦郡豊浦町 土井ヶ浜遺跡)、金隈型(福岡県福岡市博多区 金隈遺跡)の5型式が代表的である<()内は指標遺跡>。

このうち、立岩型のゴホウラ貝輪が青銅器に「材質転換」したものが有鉤銅釧である。青銅製に転換し定着したのは、ゴホウラ貝輪のうちでは立岩型のみである。青銅製の有鉤銅釧の鑄型が出土したのは福岡県内の3箇所であり、弥生時代中期～後期段階での有鉤銅釧の製作地は北部九州の福岡産であった可能性が高い。ただし、弥生時代終末期から古墳時代以降に中部・東海地方に多い帯状の有鉤銅釧は別系統であり、製作地も中部・東海地方にあったとみられる。

立岩型から派生したものの一つである竹並型は、青銅製ではなく碧玉製（もしくは緑色凝灰岩製）に転換され「鐵形石」となり、これは古墳時代前期に近畿を中心に出現し古墳時代終了と同時に消滅する。諸四型は、巻貝を輪切りにした面に見られるうずまきの形状を維持したまま弥生時代を通して着装品として残る。古墳時代前期の頃に、貝から玉に「材質転換」するのはゴホウラ貝輪だけでなく、オオツタノハガイ製の貝輪、カサガイ製の貝輪、イモガイ製の貝輪で同時期に起きる。オオツタノハガイ、カサガイ製のものが車輪石に、イモガイ製のものが石鏝に「材質転換」し、いずれも碧玉製あるいは緑色凝灰岩製となる。この系譜を表31に示す。






















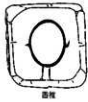







ゴホウラ貝輪は、もともと貝輪であった頃から他の貝種に比べて非常に作りが丁寧で、その神聖性がうかがえるものであった。事実、佐賀県唐津市鞍馬場遺跡（表29No.5）のように、首長級の墳墓の成人男子の右腕に多数はめられたよう状態で見つかった例がある。ゴホウラ貝輪が「材質転換」した先が弥生・古墳時代では特別神聖視されていた青銅と碧玉であるという点は象徴的といえる。

単に材質が変わっただけではなく、その後の有鉤銅鏝は特異な変貌を遂げる。立岩型ゴホウラ貝輪には本来突起があるのみで鉤状の曲がりはなかったが、「材質転換」とともに突起が肥大化し鉤が生じ、その鉤が強調されてくる。木下教授は、これを有鉤銅鏝の「変容」と呼び、「鉤の呪力をもつ貝輪」ゆえに生じる現象であると解釈する。例えば、弥生土器や須恵器等ならば時代とともに装飾の変化・退化は生じるものであるが、有鉤銅鏝については鉤部分のみが強調され大きくなる。有鉤銅鏝Ⅴ段階に比定される奈良県奈良市富雄丸山古墳出土の有鉤銅鏝（表29No.14）は、S字形鉤状突起を2個有するタイプで、現在までこの1点しか存在しないが、「鉤の呪力」を象徴的に示す最終形態といえる。貝輪着装習俗自体は、北部九州を中心として広く分布していたといえるが、有鉤銅鏝となると決して一般的とはいえない。有鉤銅鏝自体が、貝輪の中で特殊なゴホウラ貝輪の立岩型から「材質転換」したものであり、さらに鉤の「変容」をもたらす呪術的性格を帯びていたということになると、本道事例の着装者は、やはり「特殊な地位の者」を想定せざるをえない。また、有鉤銅鏝の出土例が当該地付近にないという事実が、さらにこの特殊性を際立たせている。

ただし、奈良・西の前遺跡の有鉤銅鏝は破片の状態でも出土したものである。墳墓等にみられる「破片鏝」とは異なるであろうが、意図的に破壊した可能性も考えられる。もしそうなら、この銅鏝片は本来有鉤銅鏝を着装していた「特殊な地位の者」自身ではなく、その人物の関係者がその「呪力」の

表30 九州弥生文化の貝輪分類

形態分類	貝輪の種類 (型式名)	使用する貝(科名)	貝の生息地	
Ⅰ類 円環状貝輪	二枚貝貝輪	フネガイ、サルボウなど〔フネガイ科〕	九州	
	笠貝貝輪	タマキガイ、ベンケイガイなど〔タマキガイ科〕	九州	
		マツバガイ〔ツタノハガイ科〕	九州	
		オオツタノハ〔ツタノハガイ科〕	南島	
		イモガイ貝輪 (タテ型)	アンボンクロザメなど〔イモガイ科〕	南島
Ⅱ類 非円環状貝輪	ゴホウラ貝輪 (大友型)	ゴホウラ〔ソデガイ科〕	南島	
	イモガイ貝輪 (タテ型)	アンボンクロザメなど〔イモガイ科〕	南島	
	ゴホウラ貝輪 (土井ヶ浜型)	同上	同上	南島
		(金隅型)	同上	南島
		(諸岡型)	同上	南島
		(立岩型)	同上	南島
		(その他の形状)	同上	南島

段階	九州	山陰	瀬戸内	北陸	近畿	中部・東海・南関東
I 鈎鍔全出現以前	 古野ヶ堂SJO100K  洞・西小田13加点K-23  忍奥山K48防輪  千代丸防輪				 山鹿  伊野防輪	
II 有鈎鍔型の誕生	 上り立石巻石巻  成字  白巻  白巻  巻ノ辻	 栗沢巻・西の前II			 位津岡寺	 藤内以乃
III 変容1	 松尾巻石巻  松尾巻石巻  巻ノ上		 加茂取所	 西山山籠	 栗加	 三玉山
IV 変容2	 巻籠		 津島寺之巻			 北船竹  船子  矢野  小巻
V 変容3	(白又半圓は貝輪、黒又りは銅鍔)				 藤原丸山	 了仙寺巻(

出典：(木下尚子,1996) から抜粋、一部改変

図104 貝輪系銅鍔の変容

一端を受け継いで保持していたとみることもできる。

有鈎銅鍔のIV段階の「変容2」では、環部が2mm程度の扁平な帯状に加工された「帯状有鈎銅鍔」が登場する。この環部が帯状となる銅鍔は中部・東海地方に偏る傾向があり、系統的には北部九州のものとは異なる。おそらく有鈎銅鍔から派生して中部・東海地域で独自に作られ始めたものであろう。その「帯状有鈎銅鍔」を除くならば、他の有鈎銅鍔の分布は、本遺跡出土例を合わせてみれば北部九州・山陰・北陸という日本海沿岸と、吉備・播磨・近畿という瀬戸内沿岸の分布を中心としており、「海

上の道」の形がおぼろげながらみえてくる。

奈良・西の前遺跡出土の有鉤銅劍は、これらの貝輪の系譜の中では比較的早く、段階的にはⅡ段階かその前後の銅劍誕生前後の頃とみられる。また、形状と材質から、北部九州あるいは近畿、瀬戸内側との関連性が深いという。

弥生時代中期の奈良・西の前遺跡の集落が、周防、長門、出雲、伯耆の諸国を飛び越えて北部九州と結ばれているというのは意表をつかれる感があるが、弥生時代中期の段階では北部九州と因幡の千代川河口の港湾都市をつなぐ「海上の道」があったことは青谷上寺地遺跡の山土遺物をみても間違いないところである。その道が千代川をさかのぼって八東川まで通じていたとするなら、この八東川と千代川の合流点に近い当該地には、重要な交易の拠点があってもおかしくはない。「船岡」という町名は江戸時代の船着場があったところについた名であり、この地名は道路網の整備されていない弥生時代を考える際には軽視できない重要性を持つ。北部九州と因幡を結ぶ「海上の道」と、瀬戸内・近畿方向を結ぶ「陸上の道」が、八頭町で「交差」していたのであろうか。

#### 4. 多様な文化の「交差点」としての奈良・西の前遺跡の弥生集落

奈良・西の前遺跡Ⅱ-3区の集落跡と同時期の遺跡として、周辺に丸山遺跡と万代寺遺跡がある。丸山遺跡では弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡が2棟検出された。上層は古墳時代以降の破壊によって失われ、床面と柱穴の一部のみが残っている。住居外からの出土遺物には土器のほか、石斧、石包丁、分銅形土製品等がみつまっている。この丸山遺跡と奈良・西の前遺跡とは、距離的に2km強の位置にあり、八東川南岸に広がるひとつながりの集落となる可能性がある。

日本全国での分銅形土製品の出土例は2009年までの報告例で900点以上ある。その半数近くを岡山県が占め、鳥取県と愛媛県がそれに次ぐ。時期的には弥生時代中期後葉から後期前葉の土器と共存することが多い。鳥取県内からは約130点が出土し、このうち青谷上寺地遺跡からは56点が出土している。この分銅形土製品は祭祀具の一種といわれるが用途等は不明である。少なくとも弥生時代の吉備を中心に分布することは確実で、吉備と交流の深かった地で山上することが多い。丸山遺跡出土の分銅形土製品が吉備方面から直接もたらされたか青谷上寺地遺跡由来のものかは不明だが、位置的にも両地域を含む分銅形土製品の分布圏にあることは間違いない。また、岡山県加茂郡所遺跡では同じ弥生時代中期の集落跡から分銅形土製品と有鉤銅劍の両方が出土しており、有鉤銅劍Ⅱ段階

表31 「材質転換」する貝輪の系譜

弥生時代前期	弥生時代中期	弥生時代後期	古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期
ゴホウラ貝輪:土井ヶ浜型	.....	(貝輪のまま)	.....	「うずまきの呪力」	
ゴホウラ貝輪:金隈型	.....	(貝輪のまま)	.....	「うずまきの呪力」	
ゴホウラ貝輪:諸同型	.....	(貝輪のまま)	.....	「うずまきの呪力」	
	ゴホウラ貝輪:立岩型	I	→ II 有鉤銅劍	..... III	IV..... V..... 「鉤の呪力」
				「材質転換」	→ 中部・東海
					IV 「帯状有鉤銅劍」..... 「鉤の呪力」
		└─ 竹並型	..... 「材質転換」	→ 鎌形石(碧玉製)	.....
オオツタノハイイ製の貝輪	..... 「材質転換」	→ 車輪石(碧玉製)	.....		
		└─ 「材質転換」	→ 一部、銅製銅に		
カサガイ製の貝輪	..... 「材質転換」	→ 車輪石(碧玉製)	.....		
イモガイ製の貝輪	..... 「材質転換」	→ 石鏡(碧玉製)	.....		

と分銅形土製品とは時代的に同時とみることができる。

一方、八東川を隔てて対岸の丘陵地に広がる万代寺遺跡では、直径約12mの大型の竪穴住居跡と直径2m前後の竪穴住居跡の2棟が検出された。大型の竪穴住居跡は全体の約4割が調査され、幅約30cmの壁溝を持ち、その溝に沿いながら柱穴が1m間隔で環状に並ぶ。一周すれば柱穴は全部で16基程度が並ぶことになる。また、その内側にもう1回り柱穴が配され、これも1m間隔で推定10基程度が円形に並ぶ。出土した弥生土器の甕・甗・高環等は中期から後期のものと思われる、時代的には近いが、奈免羅・西の前遺跡で検出された竪穴住居跡には類似するものがない。奈免羅・西の前遺跡の弥生中期集落と万代寺遺跡の弥生中期集落とは同じ千代川水系でも「異なる集団」に属するのではないかと思われる。

また、丸山遺跡と1kmと離れていない破岩集落には、「破岩銅鐸」の記録がある。これは、鳥取県で最古の、銅鐸についての文献記録とされ、鳥取県立博物館所蔵の『因幡志』に絵入りで記されており、「八頭郡破岩村ノ山中ヨリ掘出シタル銅器」、「惣高二尺三寸許」の大きさど、胴部を6つの区画に分けた袈裟禪文から、突線紐式袈裟禪文銅鐸の可能性がある。これは、時代的には弥生時代後期頃に比定されるタイプであり、今回調査された奈免羅・西の前遺跡Ⅱ-3区の弥生中期後葉の集落とは若干時期差があるかもしれない。

青谷上寺地遺跡と同じく千代川水系の弥生時代中期土器群の出土、北部九州と瀬戸内とのつながりを思わせる銅剣、山陰地方の中でも際立つ「特殊な地位の者」、銅剣出土の住居跡にみられる「礎石柱穴の脇に礎石ピットを有する竪穴住居跡」、丸山遺跡から出土した分銅形土製品、「破岩銅鐸」の記録、同時期に近い距離にありながら住居形態に相違のある「異なる集団」万代寺遺跡等…。これらの資料から想定できるのは、「海上の道」と「陸上の道」を結ぶ「交差点」にあって、文化的多様性を内包したまま発展をとげる川のほとりの「クニ」の姿である。大きな「クニ」同士が関わりあう時、交流の場になるにせよ争い合う場になるにせよ、その当事者は国境に近い小さな「クニ」自身である。激動の時代にあっては「辺境」こそが「最前線」であり、ある意味「中心」であったとみるべきかもしれない。当時八東川南岸に広がっていた「クニ」の名は残っていないが、因幡・伯耆を含めた周辺地域の中で大きな存在感を示していたと思われる。

最後に、度重なる八東川の氾濫と洪水に遭いながら何度も開墾され直した耕作土の底でそれでも通ってくれた小さな銅鋼片に対し、調査スタッフを代表して感謝と敬意を示したい。

#### 参考文献

- 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究 貝の道の考古学』 法政大学出版局
- 埼玉県・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006 『宮台・宮原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第318集
- 角南聡一郎 1993 「祭祀土製品小考 - 亀井遺跡出土の分銅形土製品・新例 -」 『大阪文化財研究』 第5号 財団法人大阪文化財センター
- 船岡町教育委員会 1981 『丸山遺跡発掘調査報告書』
- 那家町教育委員会 1983 『万代寺遺跡発掘調査報告書』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2009 『青谷上寺地遺跡Ⅱ第9次発掘調査報告書』 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告27





第1面全景・道路状遺構(北から)



Tr.1 南壁セクション(北から)



第2面 石垣・耕作土(北西から)



第3面完掘全景(西から)



第3面完掘全景(南から)



SD1001完掘(西から)



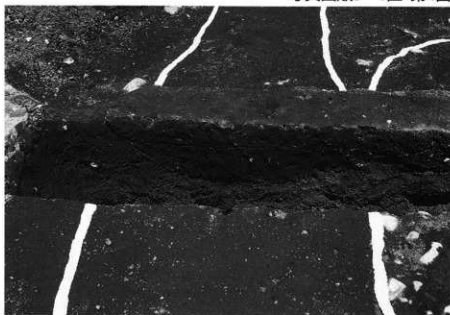
SD1002完掘(北東から)



SD1001セクション(西から)



SD1002・P1001・P1002セクション(北から)



SD1005セクション(南西から)

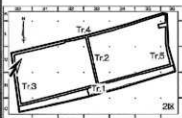


SD1005発掘(西から)

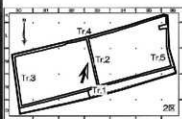


第4面 土坑群発掘(南西から)

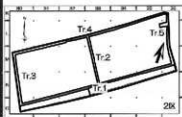
写真図版4 2区 基本層序



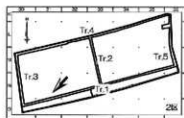
Tr.4(西半部)セクション  
(南西から)



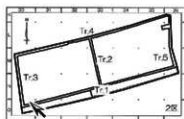
Tr.2(南半部)セクション  
(南東から)



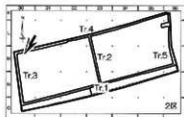
Tr.5(南半部)セクション  
(南西から)



Tr.1(西半部)セクション  
(北東から)



Tr.3(南半部)セクション  
(南東から)



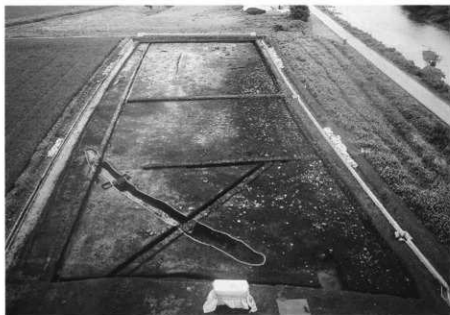
Tr.3(北半部)セクション  
(北東から)



写真図版6 2区 第1面



第1面プラン検出  
(東から)



第1面完掘全景  
(東から)



第1面 耕作溝群完掘  
(南東から)



SK2027遺構・遺物検出状況  
(北東から)



SK2024遺構・遺物検出状況  
(西から)



SK2005遺物検出状況  
(北から)



SK2008・SK2009・SK2010プラン検出(北西から)



SK2010遺物検出状況2回目(南東から)



SK2010遺物検出状況3回目(北西から)



SK2010遺物検出状況2回目(南から)



SK2010遺物検出状況4回目(北西から)





第2面プラン検出全景(東から)



第2面完掘全景(東から)

写真図版10 2区 第2面



SD2015プラン検出  
(西から)



SD2015完掘  
(西から)



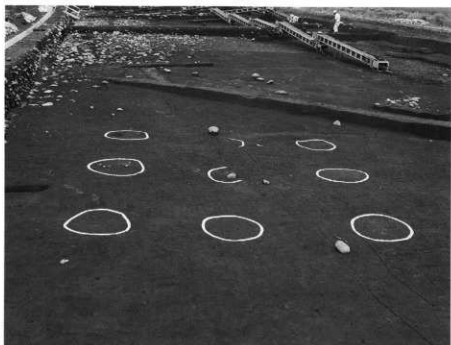
SD2015完掘  
(東から)



SD2015セクションh(西から)



SD2015セクションc(西から)



SB2001プラン検出  
(西から)



SB2001完掘  
(西から)

写真図版12 2区 第2面



SI2001・土器だまり2003  
プラン検出  
(東から)



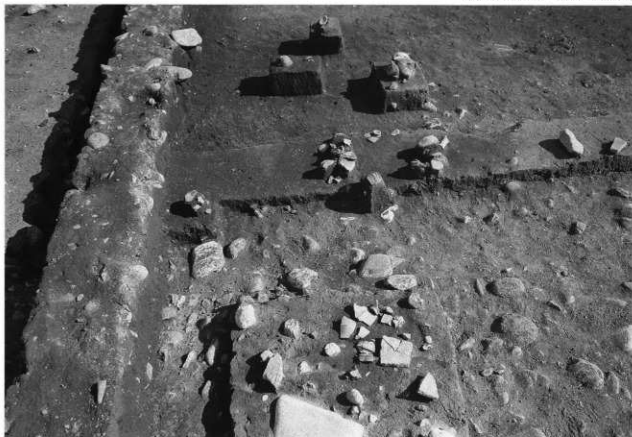
SI2001発掘  
(南から)



P2052セクション(南から)



P2054セクション(西から)



土器だまり2003(SI2001)遺物検出状況(北から)



土器だまり2003(SI2001)遺物検出状況(44)(北西から)



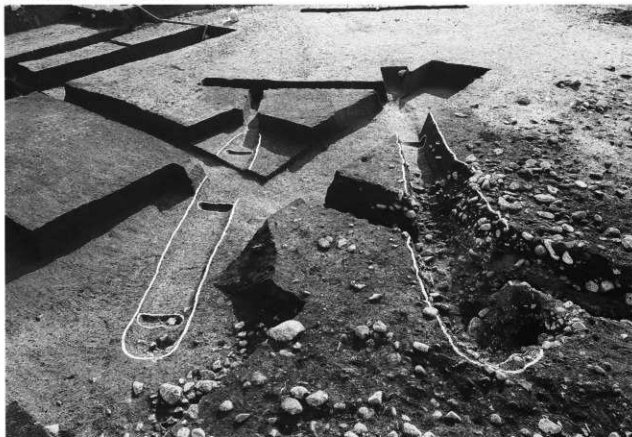
土器だまり2003(SI2001)遺物検出状況(43)(東から)



土器だまり2003(SI2001)遺物検出状況(45・48)(東から)



土器だまり2003(SI2001)遺物検出状況(46・47)(東から)



SK2031・SK2041完掘(北東から)



SK2041プラン検出(南西から)



SK2031セクションb(西から)



SK2041セクションc及び底面プラン検出(南西から)



SK2041セクションb(西から)



土器だまり2001遺物検出状況  
(東から)



土器だまり2002遺物検出状況  
(北東から)

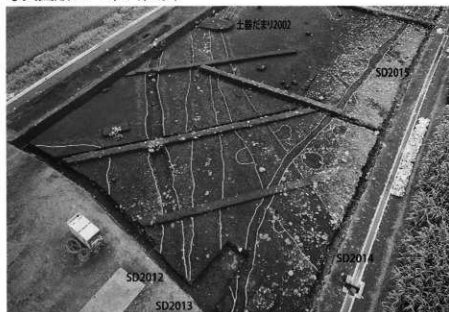


SK2040セクションb(南西から)



SK2040遺物検出状況(54)(南から)

写真図版16 2区 第2面



SD2012・SD2013・SD2014  
プラン検出  
(北東から)



SD2012・SD2013完掘  
(SD2014は掘削途中)  
(北東から)



SD2012・SD2013完掘  
(SD2014は掘削途中)  
(南西から)





SD2012壁面と基盤層  
(北東から)



SD2012(右)・SD2013(左)  
セクションa(Tr.5上)  
(南西から)



SD2012セクションc  
(南西から)



SD2012遺物検出状況  
(73・74・75・83・84・85・86・90・91)  
(南西から)



SD2012遺物検出状況  
(73・74・75・83・84・85・86・90・91)  
(西から)



SD2012遺物検出状況(87)  
(南から)



SD2013壁面と基盤層  
(北東から)



SD2013セクションc  
(南西から)



SD2013遺物検出状況(97)(南から)



SD2013遺物検出状況(102)(南から)



SD2014完掘  
(北東から)



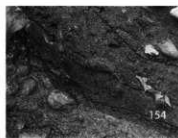
SD2014壁面と基盤層  
(北東から)



SD2014完掘  
(南西から)



SD2014セクションa  
(南から)



遺物検出状況(154)(南から)



SD2014セクションb  
(南西から)



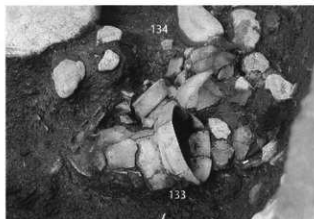
SD2012(左)・SD2013・SD2014(右)  
セクションd  
(北東から)



SD2014遺物検出状況  
(南西から)



SD2014遺物検出状況  
(115・127・138)  
(北から)



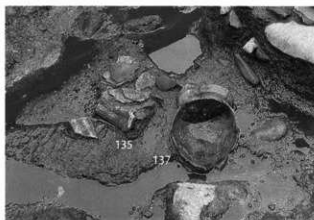
SD2014遺物検出状況(133・134)(南から)



SD2014遺物検出状況(127)(北から)



SD2014遺物検出状況(南から)



SD2014遺物検出状況(135・137)(南西から)



SD2014遺物検出状況(141)(西から)



SD2014遺物検出状況(117・147・153・160)(南から)



SD2014遺物検出状況(144・158)(北から)



SD2014遺物検出状況(121・122)(西から)



SD2014遺物検出状況(157)(南西から)



SD2014遺物検出状況(148)(北から)



SD2014遺物検出状況(128・136・164)(南西から)



SD2014遺物検出状況(150)(西から)



SD2014遺物検出状況(167)(北東から)



SD2014遺物検出状況(139・155)(北西から)



SD2014遺物検出状況(116)(東から)

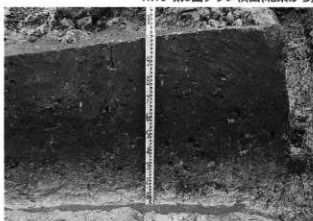




Tr.10 第3面プラン検出(北東から)



Tr.13・Tr.14 第3面プラン検出(北から)



Tr.10 南壁断面(北から)



Tr.14 東壁断面(北から)

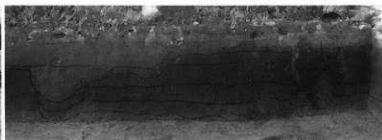


Tr.15 第3面発掘(南東から)

写真図版26 3区 基本層序・第1面



Tr.1セクション(北東から)



Tr.5セクション北端部詳細(東から)

Tr.5セクション(北東から)



第1面 暗褐色砂層プラン検出  
(西から)



P8グリッド 耕作土(暗褐色砂) 遺物検出状況(247)(西から)



N5グリッド 暗褐色砂層 遺物検出状況(230)(西から)



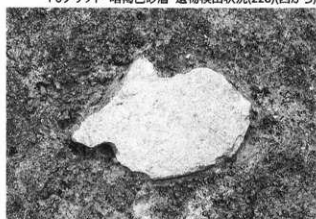
P3グリッド 暗褐色砂層 遺物検出状況(227)(南から)



P6グリッド 暗褐色砂層 遺物検出状況(228)(西から)



P2グリッド 黄灰色砂層 遺物検出状況(236)(南から)



Q2グリッド 黄灰色砂層 遺物検出状況(239)(南から)



P3グリッド 黄灰色砂層 遺物検出状況(238)(南から)



P3グリッド 黄灰色砂層 遺物検出状況(235)(北から)



第1面 耕3001完掘(北から)



第1面 耕3002完掘(北西から)



第1面 耕3003完掘(北西から)



第2面 北西部(SI3006周辺)プラン検出(北から)



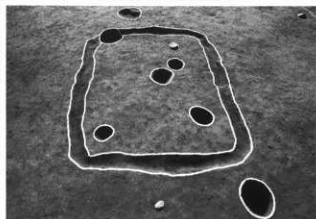
第2面東側完掘(東から)



第2面西側完掘(北東から)



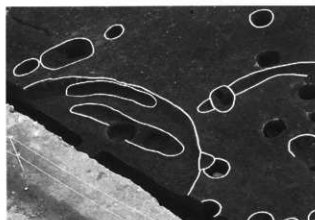
SI3001セクション(南東から)



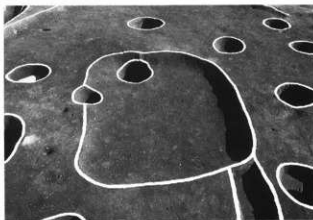
SI3001完掘(西から)



SI3003完掘・SI3002貼床面検出(北東から)



SI3002完掘(南西から)



SI3003内SK3005完掘(南から)



P3098・P3099上段礎石検出状況(西から)



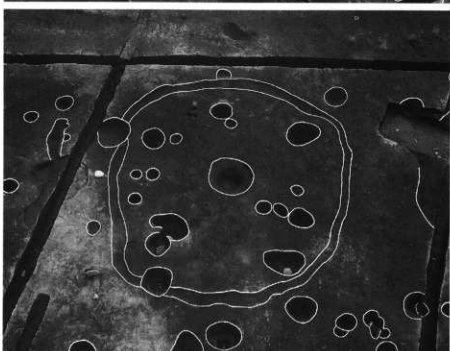
P3098・P3099下段礎石検出状況(西から)



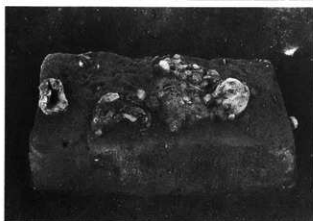
SI3005内SD3006遺物検出状況  
(東から)



SI3004(右)・SI3005(左)完掘  
(北から)



SI3006完掘(北から)



SI3004焼成粘土塊検出状況(南から)



SI3006遺物検出状況(南から)



SI3007貼床面完掘(北西から)

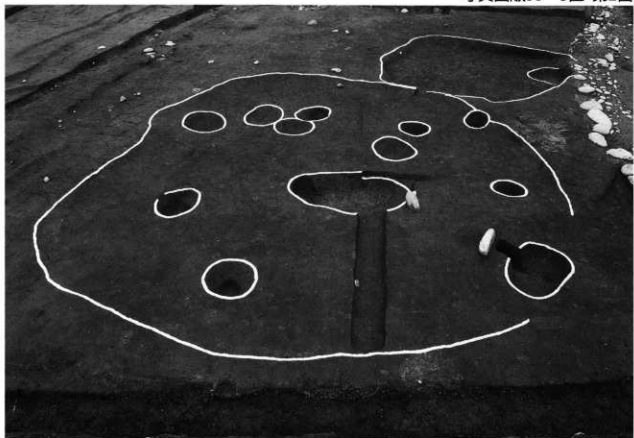


SI3007内SK3035遺物検出状況(190)  
(北東から)



SI3007下面完掘(南から)

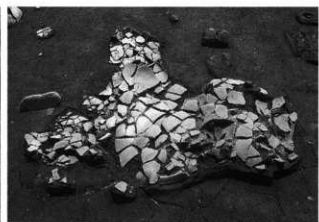




SI3008完掘(南から)



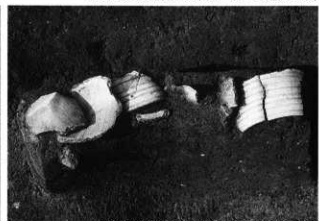
SI3008遺物検出状況(189)(南西から)



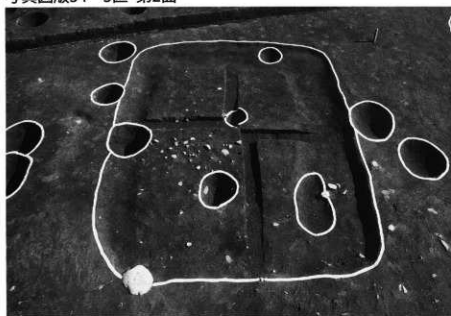
SI3008遺物検出状況(186・187・188)(北から)



SI3008遺物検出状況(185)(北から)



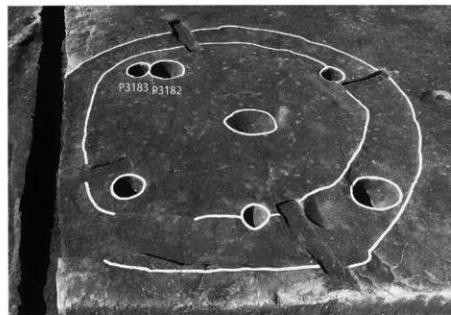
SI3008内SK3051遺物検出状況(183)(南から)



S13009完掘(北西から)



S13010完掘(南から)



S13011内  
P3182・P3183セクション(南から)



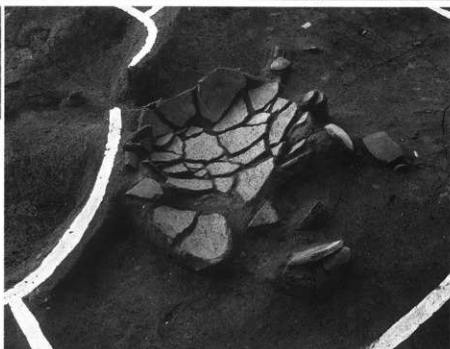
S13011完掘(東から)



SI3012遺物検出状況  
(北から)



SI3012内SK3027  
銅鏃検出状況(197)  
(東から)



SI3012内  
SK3026遺物検出状況(196)  
(北から)



SI3012内P3195セクション及び礎石検出状況(南から)

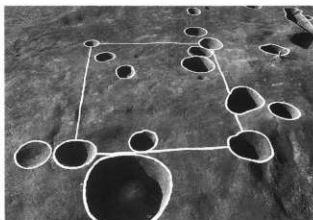


SI3012壳罫(西から)

写真図版36 3区 第2面・第3面



SB3001完掘(北から)



SB3002完掘(北から)



SB3003完掘(東から)



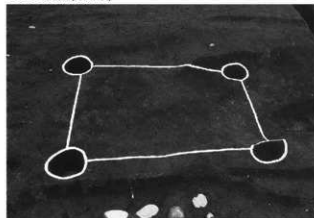
SB3003内P3079遺物検出状況(169)(東から)



SB3004完掘(東から)



SB3005完掘(西から)



SB3006完掘(西から)



第3面南西側SB3007付近完掘(北西から)



SX3001~SX3003木棺墓群(北東から)



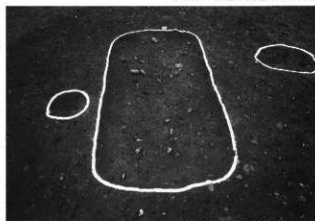
SX3001木棺部完掘(北西から)



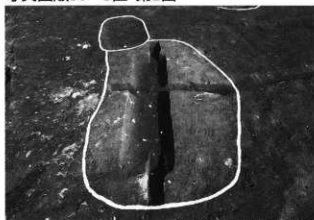
SX3001掘方完掘(南東から)



SX3002木棺部完掘(東から)



SX3002掘方完掘(西から)



SX3003木棺部完掘(西から)



SX3003掘方完掘(西から)



SX3004木棺部完掘況(南西から)



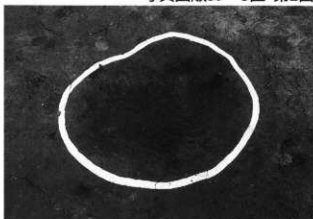
SX3004掘方完掘(南西から)



SX3001~SX3004木棺墓群完掘(北西から)



SK3003遺物検出状況(199・200)(東から)



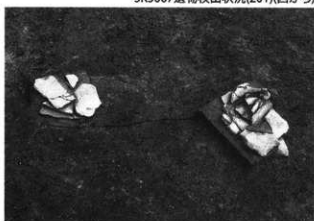
SK3003完掘(東から)



SK3007遺物検出状況(201)(西から)



SK3008完掘(西から)



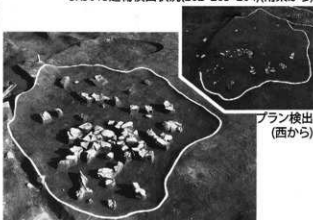
SK3010遺物検出状況(南から)



SK3013遺物検出状況(202・203・204)(南東から)



SK3013遺物検出状況(202)(南西から)

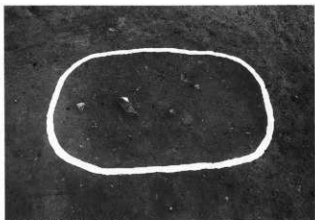


プラン検出  
(西から)

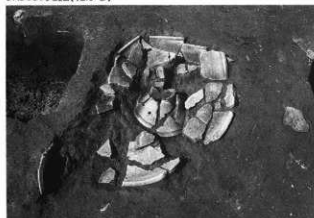
SK3020遺物検出状況(205~209)(北西から)



SK3039完掘(北から)



SK3046完掘(南西から)



SK3047遺物検出状況(210)(南から)



SK3049完掘(西から)



SK3053セクション(北西から)



SK3055遺物検出状況(211・212)(南から)



SK3056遺物検出状況(214・215・216)(北東から)



第3面 P3662柱根検出状況(南から)





第3面南西側完掘(西から)



第3面西側完掘(北東から)



SI3013・SB3008完掘(西から)



SI3013完掘(南から)



SI3013プラン検出(南東から)



SI3013壁溝・小溝セクション(南から)



SI3013・SI3014・  
(SI3002・SI3009:第2面)完掘  
(南西から)



SI3014完掘  
(南から)



SI3014粘床面遺物検出状況(東から)



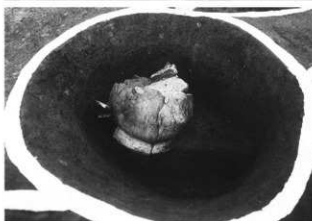
SI3014内P3444セクション及びび礎石検出状況(南から)



SI3015完掘(南から)



SI3015完掘(西から)



SI3015内P3465遺物検出状況(224)(南から)



SI3015内P3481(中央土坑脇ピット)セクション(南から)



Tr.1拡張 第4面完掘(西から)



Tr.3拡張 第4面完掘(南から)



Tr.6拡張 第4面完掘(北から)

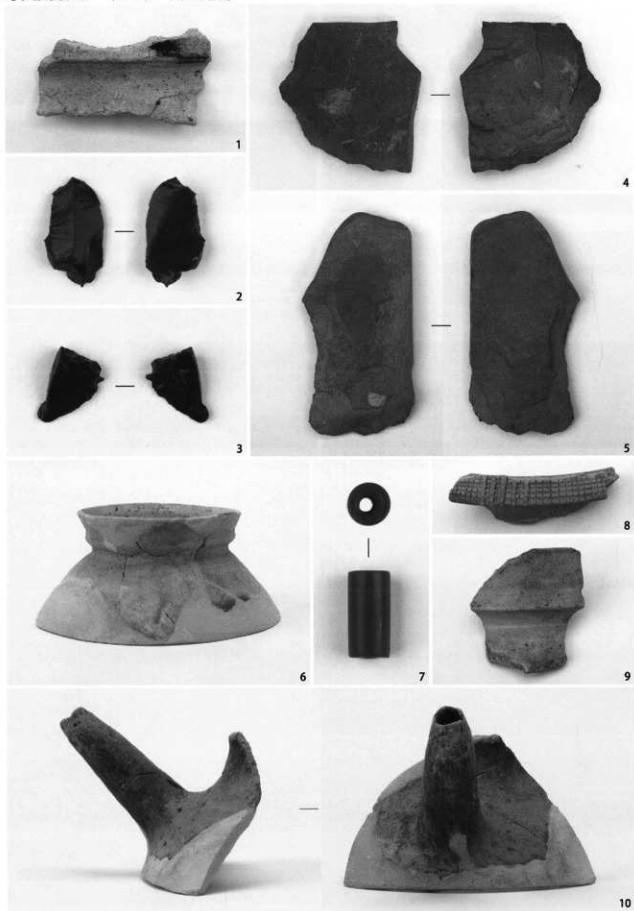


Tr.8 第4面完掘(西から)

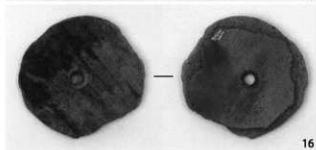


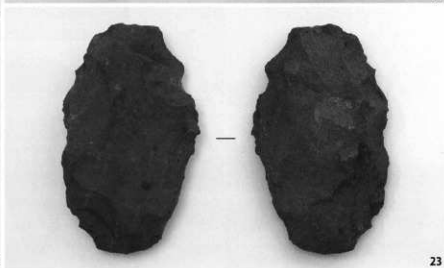
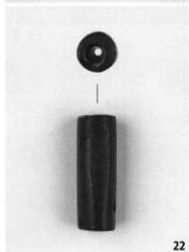
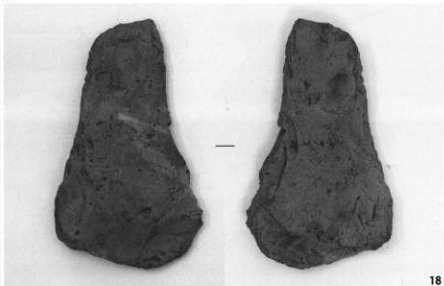
第4面トレンチ調査終了及び第2・3面遺構全景(西から)

写真图版46 1区·2区 出土遗物

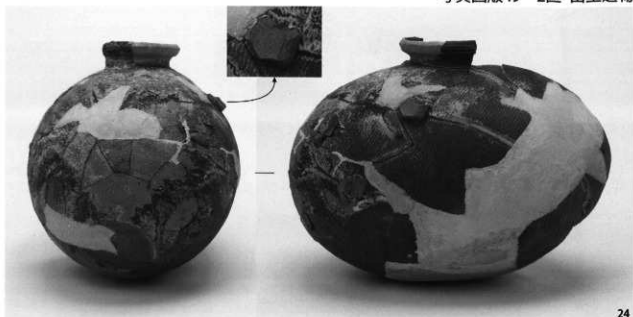


1:1区 SD1001, 2~5:1区 抽出遺構外  
6~7:2区 第6層, 8~10:2区 第7層









24



25



27



26



28



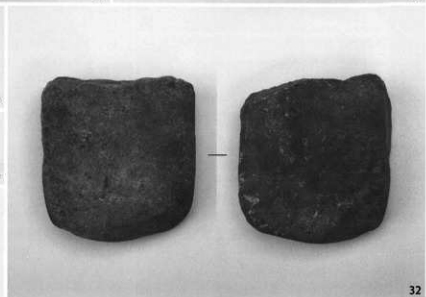
29



30



31



32

写真図版50 2区 出土遺物



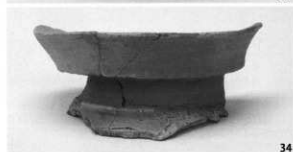
33



37



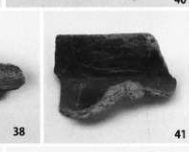
40



34



38



41



35



39



42



36



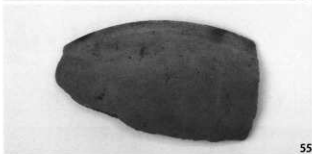
43

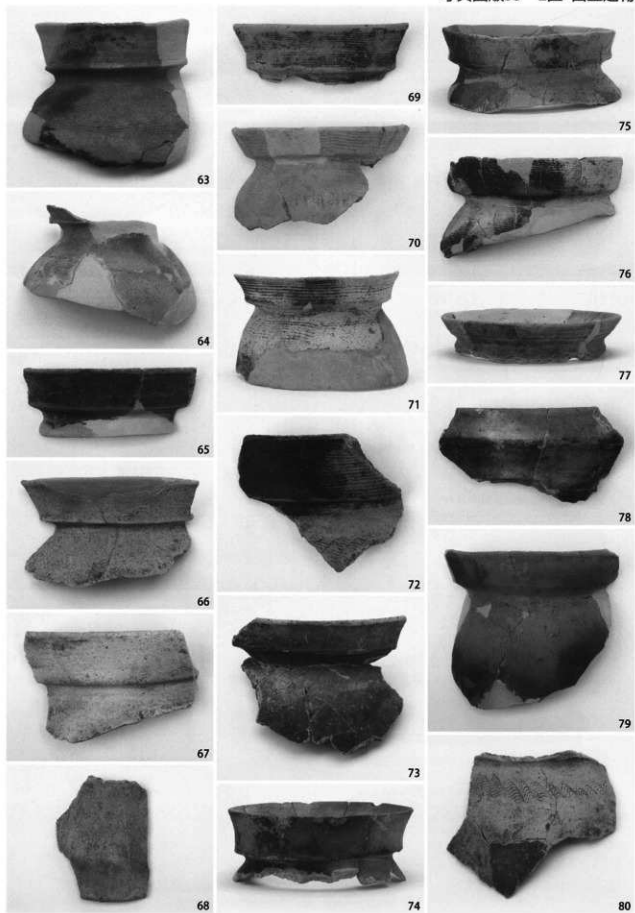


44

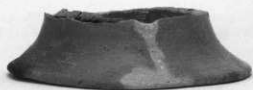


写真図版52 2区 出土遺物









90



95



91



96



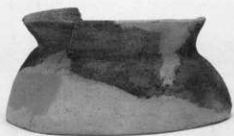
92



97



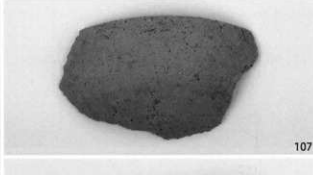
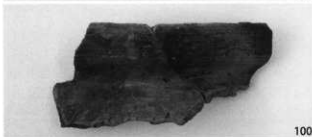
93



94



98







109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



120



119



121



122



123



127



124



128



125



129



126



130







148



149



153



150



154





156



160



157



158



161



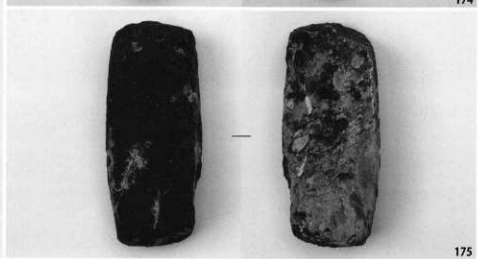
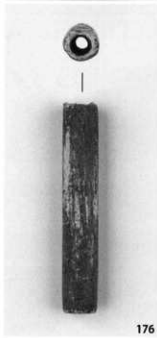
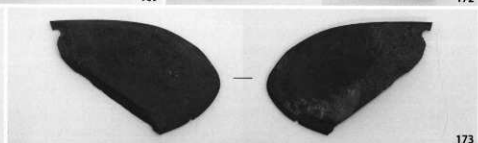
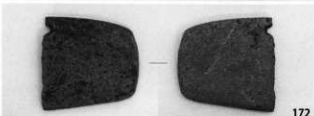
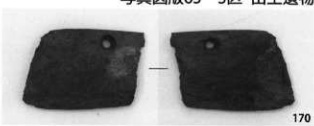
159



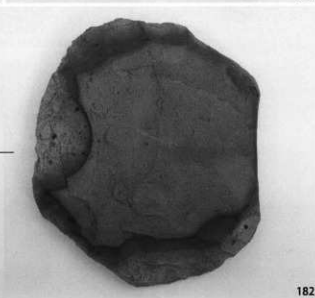
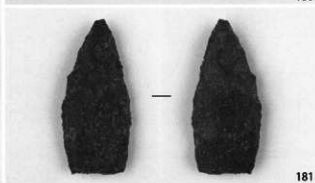
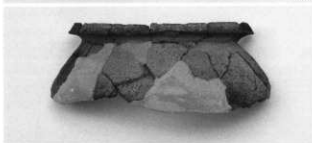
162



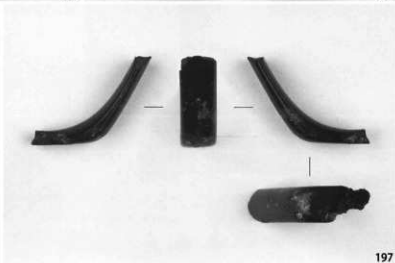
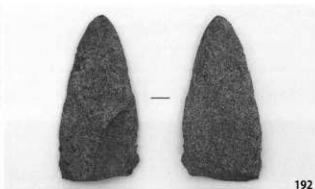




169:3区 S83003内P3079、170:3区 S13001  
171:3区 S83003、172~176:3区 S13005

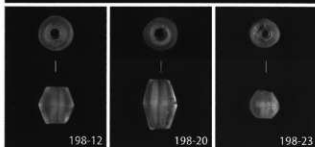








198



199

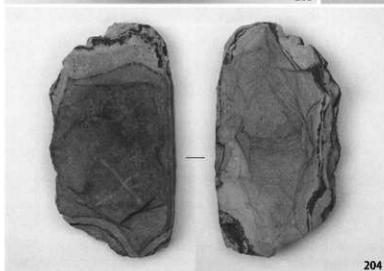


200



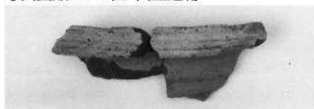
201

写真図版70 3区 出土遺物





212文様展開図



214



216



217



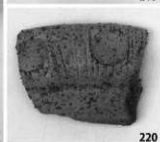
215



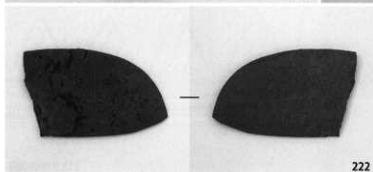
218



219



220

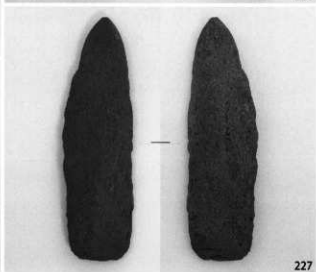
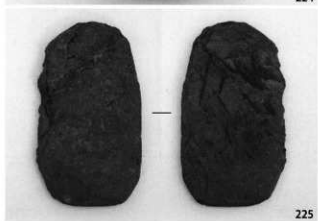
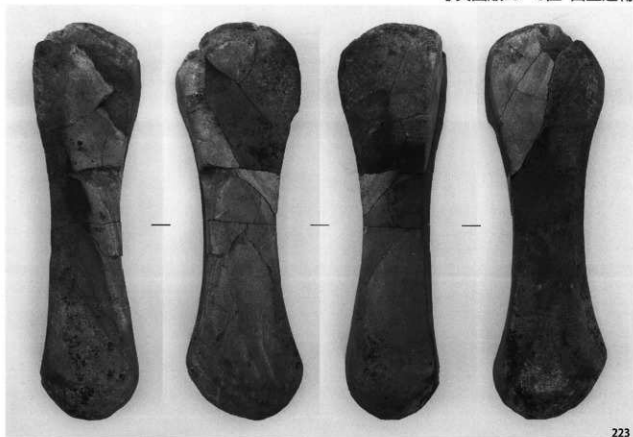


222

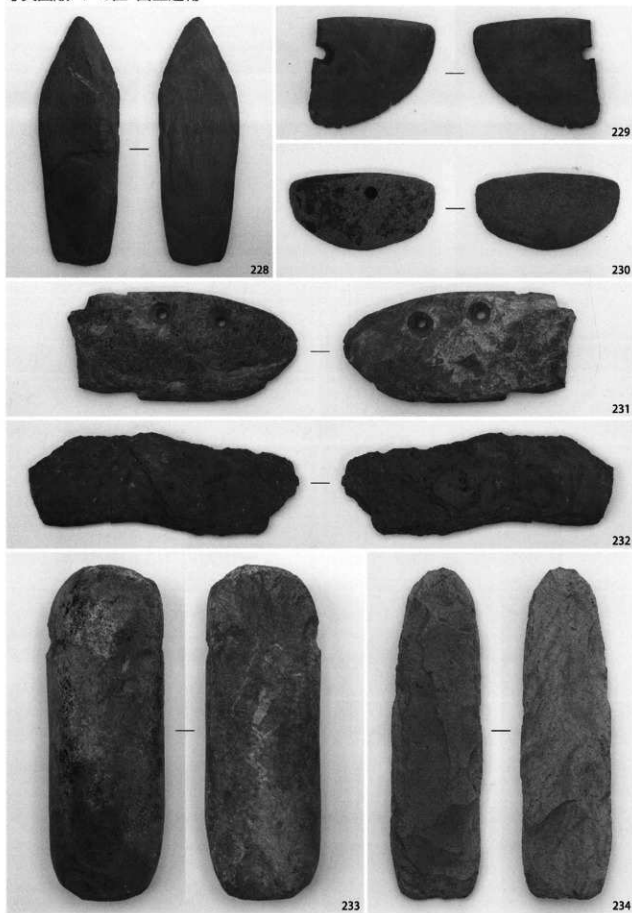


221

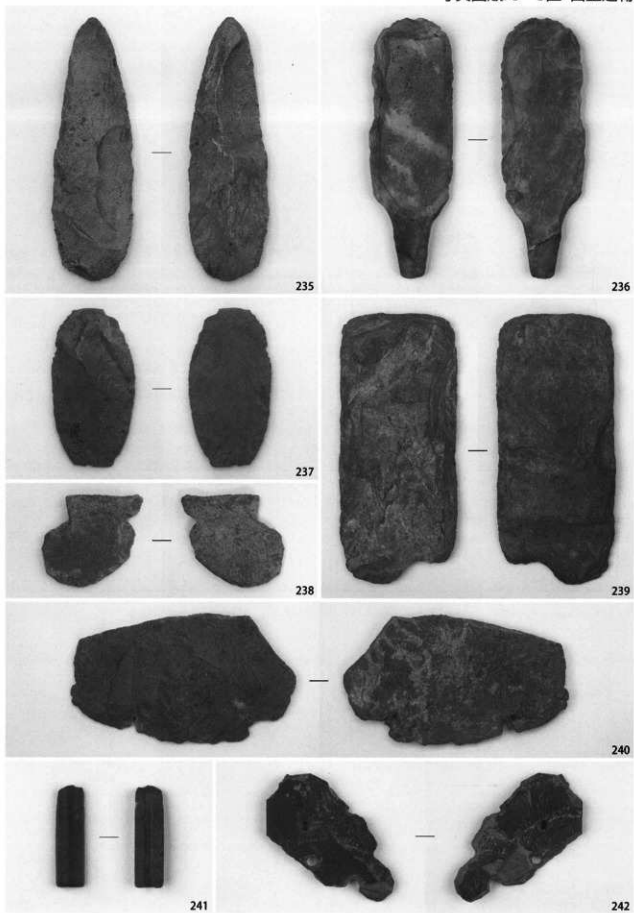




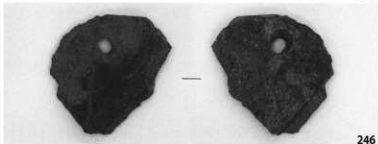
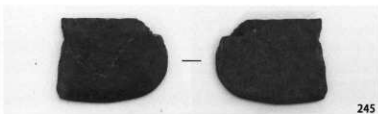
写真图版74 3区 出土遗物



228~232:3区 暗褐色砂層、234:3区 黄灰色砂層



写真图版76 3区 出土遺物



# 報告書抄録

ふりがな とっとりけんやずぐんやずちよう なめら・にしのまえいせき に									
書 名 鳥取県八頭郡八頭町 奈免羅・西の前遺跡 II									
副 書 名 県道河原インター線道路改良工事に伴う発掘調査報告書									
巻 次									
シリーズ名 八頭町文化財調査報告書									
シリーズ番号 5									
編 著 者 名 野田人和 井汲隆夫 島田裕弘 荒川和哉 浅井達也 結城香 平井利尚 パリオ・サーヴェイ株式会社									
編 集 機 関 株式会社 島田組 鳥取営業所									
所 在 地 〒 680-0421 鳥取県八頭郡八頭町下門尾 195-1-C101 TEL(0858)72-6131									
発行年月日 西暦 2010年(平成 22年)3月 31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡 番号						
なめら・にしのまえ 奈免羅・西の前 遺跡 II いせきに	とっとりけん 鳥取県 やずぐん 八頭郡 やずちよう 八頭町 しもの 下遺・ ふなおか 船岡 ちない 地内	31329		1区	1区	平成 21 年 (2009年)5月 25日～同年 10 月 30日	1区	県道河原イ ンター線道 路改良工事 に伴う発掘 調査報告書	
				35° 23' 52"	134° 15' 18"		2区		1445.381㎡
				2区	2区		3区		4861.375㎡
				35° 23' 48"	134° 15' 11"		3区		6731.918㎡
35° 23' 47"	134° 15' 02"			合計					
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
奈免羅・西の前 遺跡 II									
1区	耕作地	弥生・古墳 ～中世	溝・土坑・ビット 耕作土・石垣	黒曜石剥片 弥生時代中期 壺・甕・高環・ 器台・水指し・甕 弥生時代石器 石鏃・石槍・石 包丁・石鎌・石斧・石鏝・砥石・ 石皿・叩き石		・八頭町最大の弥生時代 中期の集落跡 ・全国 30 例目の銅劍 (有鉤銅劍) 出土 ・木棺墓から 42 点の水 晶製小玉出土			
2区	耕作地 集落跡 大溝群	弥生時代後 期～古墳時 代後期	大溝3基・溝1基 竪穴住居跡1棟 掘立柱建物跡1棟 ・布掘建物跡?1棟・ 上坑・ビット・耕作 跡	弥生時代中期後葉 銅劍 弥生時代後期～古墳時代前期 壺・甕・高環・器台・蓋・低脚環・ 橢形土器・スタンプ文土器 古墳時代後期 須恵器蓋環・ 横版		・弥生時代終末期の大型 溝群とそれに伴う多数 の土器群の出土 ・八東川付近産出の石材 で多彩な石器を製作し たことを確認。			
3区	耕作地 集落跡 墓域	弥生時代中 期中葉～後 葉・平安	掘立柱建物跡8棟 竪穴住居跡15棟 (松筒型住居1棟) 木棺墓4基・土坑・ ビット・耕作溝群						

---

八頭町文化財調査報告書 5  
鳥取県八頭郡八頭町

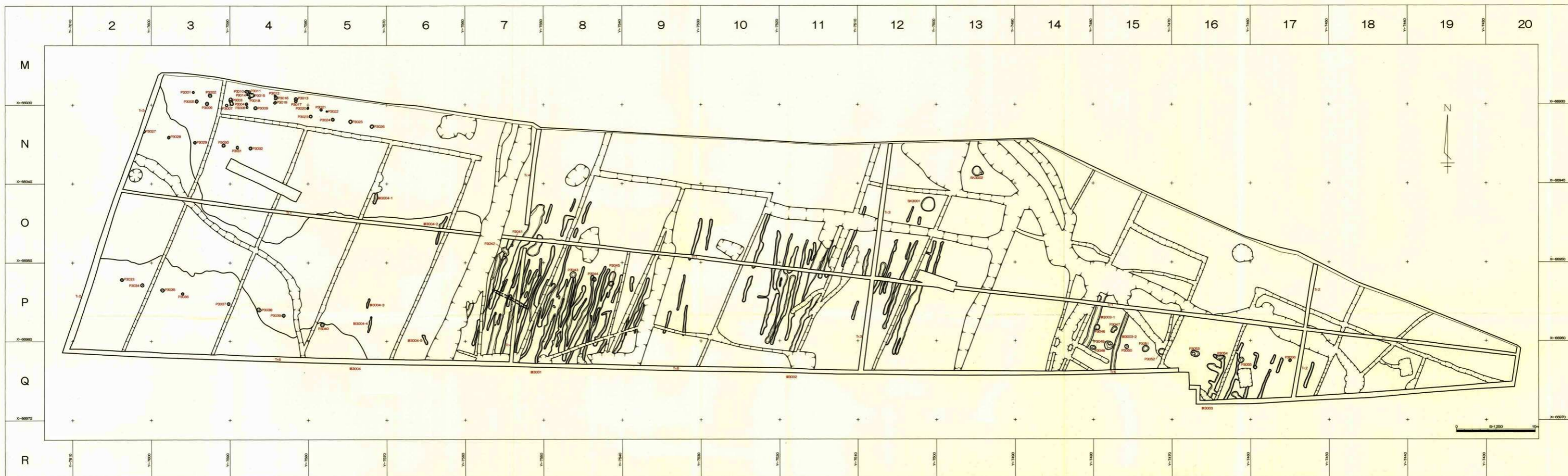
**奈免羅・西の前遺跡Ⅱ**

— 県道河原インター線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

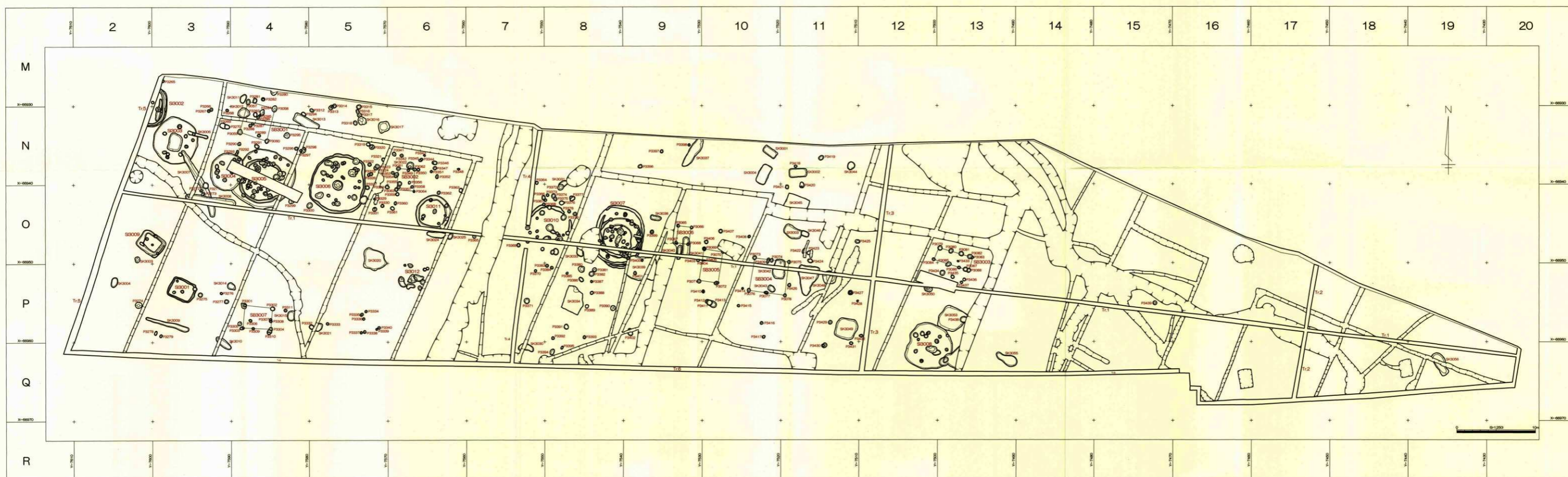
平成 22 年 3 月 印刷・発行

発行 八頭町教育委員会  
株式会社島田組  
印刷 勝美印刷株式会社

---

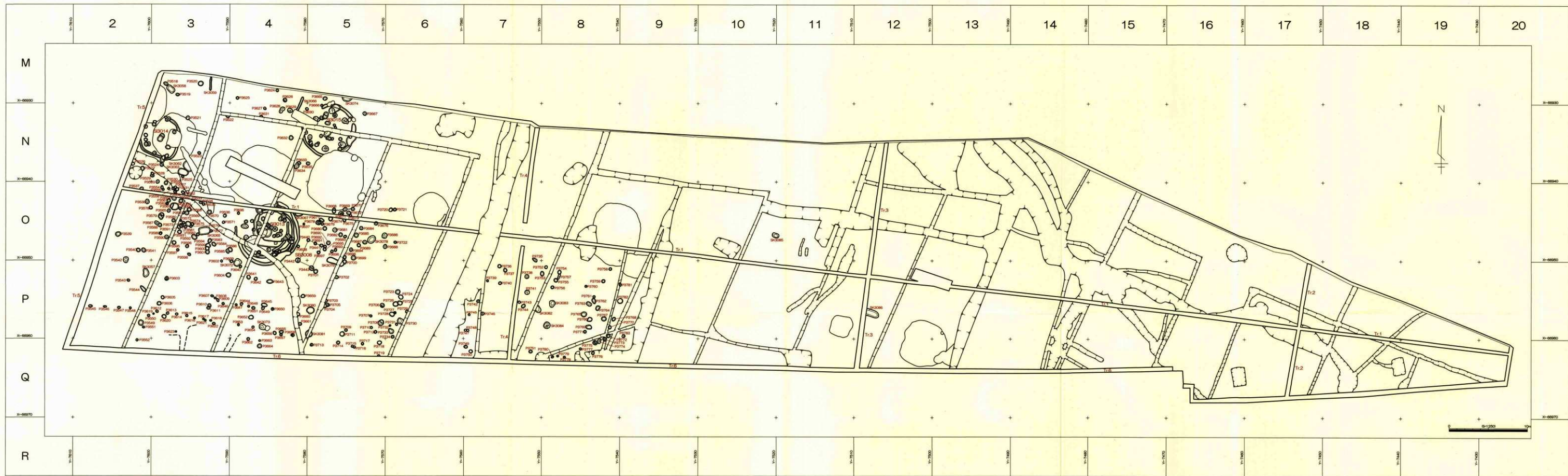


3区第1面

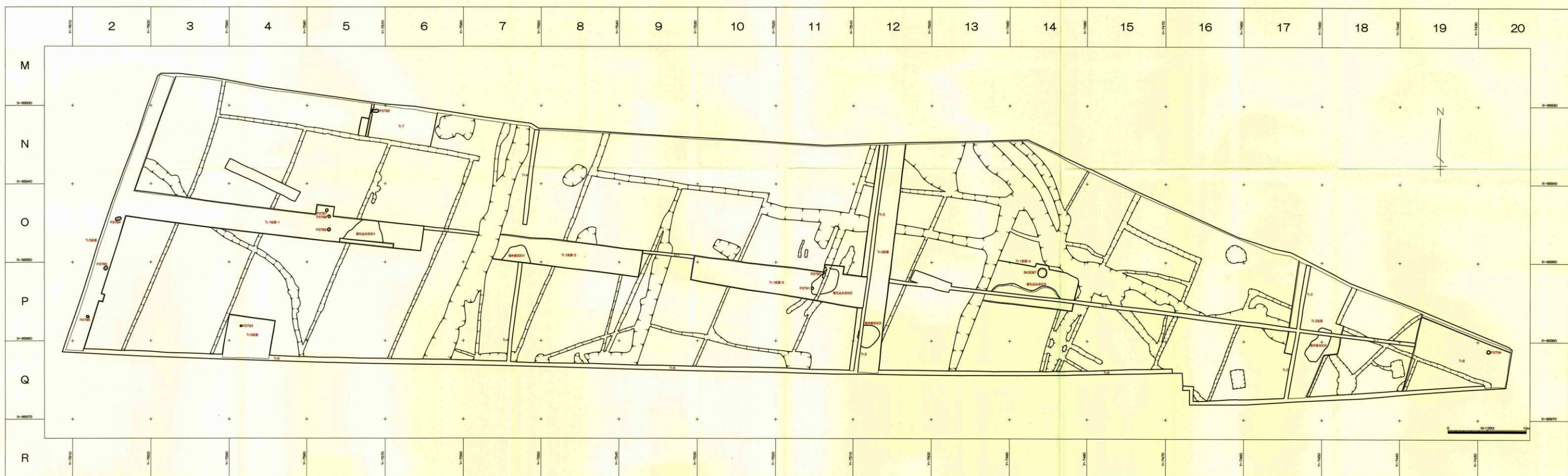


3区第2面

付図1 奈免羅・西の前遺跡II 3区第1面・第2面遺構配置図



3区 第3面



3区 第4面

付図2 奈面羅・西の前遺跡II 3区 第3面・第4面遺構配置図